

四戸の古墳群

四戸の古墳群

上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



二〇二〇

2020

群馬県上信自動車道建設事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

群馬県上信自動車道建設事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

四戸の古墳群

上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う
埋藏文化財発掘調査報告書

2020

群馬県上信自動車道建設事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



調査区と北にそびえる岩櫃山 南上方より



17号墳出土弥生土器

口絵 2



1号墳完掘状況 南東より



1号墳形象埴輪集合写真

序

上信自動車道は、渋川市の関越自動車道渋川伊香保インターチェンジ付近から、吾妻地域を経て長野県東御市の上信越自動車道東部湯の丸インターインターチェンジ付近につながる高規格道路です。この道路建設に伴う発掘調査が群馬県東吾妻町の四戸の古墳群において、平成30年度に行われました。本書はその調査報告となります。

発掘調査では、弥生時代や古墳時代の竪穴建物が16棟と、古墳3基が調査されました。古墳が構築された時期とほぼ同時期の建物もあり、住まいと墓が近接した位置にあったことを示す貴重な例となりました。また、西側の四戸遺跡から多くの建物が発見されており、四戸の古墳群の遺構と併せると、数多くの建物や古墳が造られたことが分かります。その背景には、四戸の地が高崎や渋川から長野や新潟に至る交通の拠点であったことが想定されます。

今回の報告書刊行に至るまでには、群馬県上信自動車道建設事務所、群馬県中之条土木事務所、群馬県教育委員会、群馬県地域創生部、東吾妻町教育委員会の皆さんに多大なご尽力を賜りました。感謝を申し上げます。

今回の報告書の活用を願うとともに、現地に残る四戸の古墳群の保護・活用を願い序といたします。

令和2年10月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 向 田 忠 正

例　　言

1. 本書は、平成30年度の四戸の古墳群の発掘調査の成果を報告する。
2. 遺跡の所在地は、群馬県吾妻郡東吾妻町大字三島字四戸A98-4,B-94-4,B-94-2,E98-1,B93-1,92,B91,B108,B111-1,B111-3,B112-1,B112-2,B112-3,B114である。
3. 事業主体は、群馬県上信自動車道建設事務所である。
4. 調査主体は、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。
5. 調査期間及び調査体制は以下の通りである。

平成30年度発掘調査

履行期間 平成30年4月1日～平成30年12月31日　　調査期間 平成30年4月1日～平成30年9月30日

調査担当 黒田 晃(主任調査研究員) 麻生敏隆(専門調査役)

遺跡掘削請負工事 飯塚・高澤・宮下・吾妻地区埋蔵文化財遺跡掘削工事経常共同企業体

委託 遺構測量・デジタル編集業務 株式会社 澄研

空中写真撮影 技研コンサル株式会社

6. 整理事業の期間及び体制は以下のとおりである。

平成31年度

履行期間 平成31年4月1日～令和2年3月31日 整理期間 平成31年4月1日～令和2年3月31日

整理担当者 杉山秀宏(上席調査研究員(資料統括))

令和2年度

履行期間 令和2年4月1日～令和3年3月31日 整理期間 令和2年4月1日～令和2年5月31日

整理担当者 杉山秀宏

編集・遺物写真撮影：杉山秀宏 関口博幸(主任調査研究員) 大木紳一郎(専門調査役) 津島秀章(資料2課長(総括)) デジタル編集：齊田智彦(主任調査研究員・資料統括)

遺物実測・観察表 繩文土器：関口博幸 弥生土器：大木紳一郎 土師器・須恵器・土製品：神谷佳明(専門調査役)
石器・石製品：津島秀章 陶磁器：矢口裕之(資料1課長(総括)) 金属製品：杉山秀宏
保存処理：板垣泰之(専門員) 関邦一(専門調査役)

執筆 第7章第1節 大木紳一郎、第7章第4節 右島和夫 以外杉山秀宏

7. 石材同定は飯島静男氏(群馬地質研究会)に依頼した。

8. 記録資料及び出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

9. 発掘調査及び整理事業・本報告書の作成には下記の機関によりご指導・ご教示をいただいた。

群馬県地域創生部文化財保護課、群馬大学教育学部、東吾妻町教育委員会、大賀克彦、田村朋美、徳江秀夫、南雲芳昭、西山克己、林史夫、深澤敦仁、藤森健太郎、三浦茂三郎、右島和夫

10. 専門的な自然科学分析や考察については、専門機関・研究者に依頼・委託した。

圧痕同定分析 株式会社パレオ・ラボ ガラス玉の蛍光X線分析 群馬大学機器分析センター

灰像分析 株式会社古環境研究所 人骨の人類学的研究 奈良貴史(新潟医療福祉大学)

赤色顔料分析 志賀智史(九州国立博物館) 四戸の古墳群の成立背景 右島和夫(群馬県立歴史博物館)

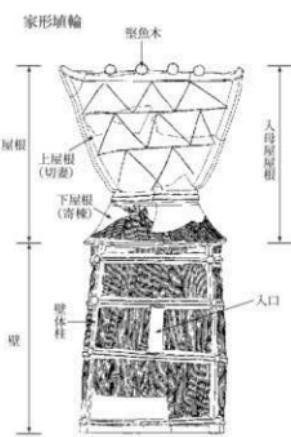
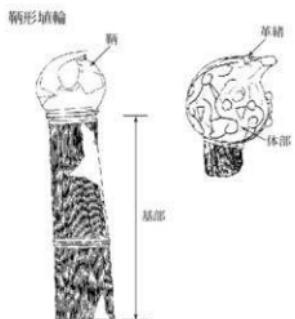
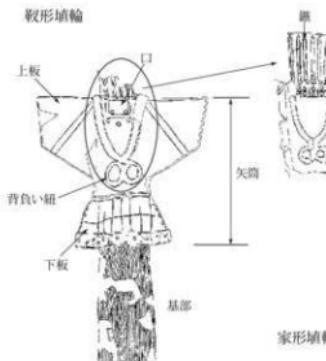
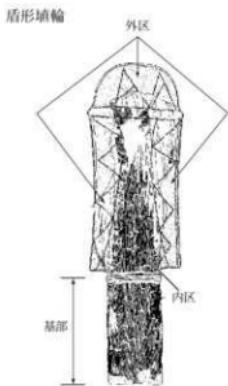
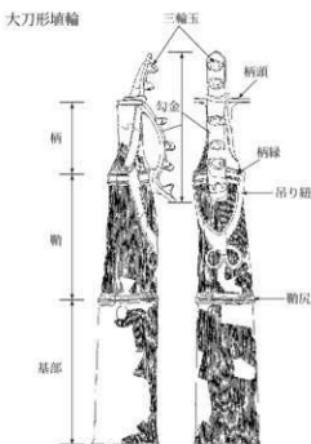
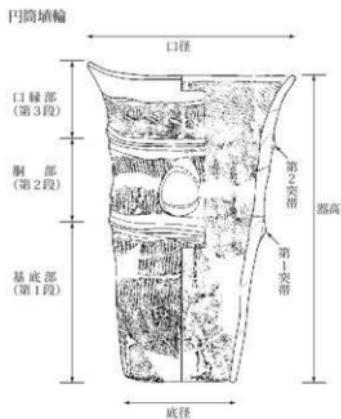
埴輪の顔料分析 株式会社パレオ・ラボ

土師器・埴輪の薄片作製胎土分析 パリノサーヴェイ株式会社

須恵器・埴輪产地分析 三辻利一(奈良教育大学名誉教授)・犬木努(大阪大谷大学)

凡　例

1. 本書で使用した座標値は、国家座標(世界測地系2000平面直角座標IX系)を用いた。遺構図中に記した座標値については、国家座標軸X・Y値の下3桁のみを用いて表記した。
2. 遺構図の中で使用した北方位はすべて座標北であり、真北方向は、+ 0° 37'、12.12" (東偏)である。
3. 遺構平面図、遺物実測図の縮尺は各図にそれぞれ示し、遺物実測図と遺物写真は原則として同縮率とした。
4. 遺構平面図や遺構断面図に表示した数値は標高であり、単位はメートルである。
5. 本書で使用したスクリーントーン及びマークは以下のとおりである。
遺構図：焼土 摂乱 炭化物 灰 粘土 砂
遺物図：黒色 スス 漆 赤色塗彩 黒 磨き ↪ 削り
6. 遺構平面図中の遺物は次のことを示す。
土器：● 石器：▲ 鉄器：■ 炭化物：×
7. 弥生土器胎土 S → standard 長石・石英・輝石・黒色岩片・白色岩片・赤色粒を混在する。本遺跡で最も多い胎土。
8. 遺構の主軸方向・走行は、長軸方向で北から90°以内を主軸とした。表記は北を基準とし、東に傾いた場合は、N -○°-Eとした。竪穴建物の主軸方向については、南を意識した入口が多いので、基本的に南側を下にして配置した。遺構の面積は上端を計測し、計測はプラニメーターで3回を行い、その平均値を採用した。遺構の計測値は、縮尺1/20の図面を用いて計測し、m単位で表した。
9. 挖立柱建物の柱間寸法は、柱筋に沿った柱穴心々間をメートル法計測した。
10. 遺構土層注記及び土器・陶磁器類の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』に準拠している
11. 本書で使用した地図は以下のものを使用した。
第1・8図 東吾妻町都市計画図 2千五百分の1 (1978年)を元に編集
第3・10～12図 国土地理院 5万分の1地形図 中之条を元に編集
第4・9図 国土地理院 色別標高図 を元に編集
第5図 群馬県 土地分類基本調査 中之条 5万分の1地形分類図を元に編集
第6図 吾妻郡域の段丘面区分図 (山口一俊作製『四戸遺跡』2020)を元に編集
第7図 群馬県地質図作成委員会 群馬県10万分の1地質図を元に編集



埴輪部位名称図

目 次

口絵	
序	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
表目次	
写真目次	
第1章 調査の経過と方法	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査区とグリッド設定	1
第3節 調査の方法	1
第4節 調査の経過	3
第2章 地形的環境と地質	4
第1節 地形的環境	4
第2節 遺跡付近の地質について	4
第3章 歴史的環境	10
第1節 はじめ	10
第2節 吾妻地域と古墳時代の道	10
第3節 歴史的環境の概要	11
第4章 基本土層と地形確認トレンチ	20
第1節 基本土層	20
第2節 地形確認トレンチと6区の様相	20
第5章 発見された遺構と遺物	23
第1節 旧石器	23
第2節 縄文時代	24
第3節 弥生時代	34
第4節 古墳時代	75
第5節 古代	170
第6節 中世以降	179
第7節 時代不明遺構外遺物について	187
第6章 自然科学分析	188
第1節 分析の目的と成果	188
第2節 圧痕同定分析	191
第3節 灰像分析	196
第4節 赤色顔料分析	199
第5節 墳輪の顔料分析	201
第6節 土師器・埴輪の薄片作製胎土分析	206
第7節 瓢箪器・埴輪の産地分析	217
第8節 ガラス玉の蛍光X線分析	222
第9節 人骨の人類学的研究	224
第7章 考察	227
第1節 四戸の古墳群遺跡出土の弥生土器について	217
第2節 四戸の古墳群と四戸遺跡の集落と墓域の併行関係から見た動向	231
第3節 四戸の古墳群を中心とした副葬品からみた吾妻地域の古墳と集落の変遷について	238
第4節 四戸の古墳群の成立背景	252
第5節 調査成果と課題	259
遺構一覧	262
遺物観察表	266
写真版	

挿図目次

第1図 四戸の古墳群・四戸遺跡調査区設定図	2
第2図 四戸の古墳群グリッド配置図	2
第3図 四戸の古墳群周辺地形図	5
第4図 四戸の古墳群周辺色別標高図	5
第5図 四戸の古墳群周辺地形分類図	6
第6図 四戸の古墳群周辺河段丘画区分図	6
第7図 吾妻中流域地質分類図	7
第8図 四戸の古墳群調査区及び周辺地形図	9
第9図 吾妻地域色別標高図及び古墳群位置設定図	10
第10図 四戸の古墳群周辺弥生時代遺跡分布図	15
第11図 四戸の古墳群周辺古墳時代遺跡分布図	16
第12図 四戸の古墳群周辺古代遺跡分布図	17
第13図 基本上層図・基本下層設定図	21
地形確認シート設定図・上層断面図	22
第15図 古石器時代構・遺物確認点・レンチ設定図・上層断面図	23
第16図 四戸の古墳群調査区全体図・縦文時代前期出土上層度数分布図	24
第17図 縦文時代中期出土上層度数分布図	25
第18図 縦文時代後期出土上層度数分布図	25
第19図 縦文時代後期出土上層度数分布図	25
第20図 縦文土器時期組成(点数別・重量別)棒グラフ	27
第21図 縦文土器時期組成(点数別・重量別)棒グラフ	27
第22図 縦文時代遺跡出土遺物図(1)	28
第23図 縦文時代遺跡出土遺物図(2)	29
第24図 縦文時代遺跡出土遺物図(3)	30
第25図 縦文時代遺跡出土遺物図(4)	31
第26図 縦文時代遺跡出土遺物図(5)	32
第27図 縦文時代遺跡出土遺物図(6)	33
第28図 弥生時代面全体図	34
第29図 1号堅穴建物平面図・床下図・遺物出土状況図・上層断面図・出土遺物図	35
第30図 4号堅穴建物平面図・遺物出土状況図・上層断面図・出土遺物図	36
第31図 5号堅穴建物平面図・遺物出土状況図・上層断面図・出土遺物図	38
第32図 7号堅穴建物平面図・遺物出土状況図・上層断面図・断面図	39
第33図 7号堅穴建物出土遺物図	40
第34図 10号堅穴建物平面図・遺物出土状況図・上層断面図	41
第35図 10号堅穴建物床下図・上層断面図・断面図	42
第36図 10号堅穴建物出土遺物図	43
第37図 11号堅穴建物平面図・上層断面図	44
第38図 11号堅穴建物出土遺物図	45
第39図 11号堅穴建物・断面図	46
第40図 11号堅穴建物床下図・上層断面図	47
第41図 11号堅穴建物出土遺物図(1)	48
第42図 11号堅穴建物出土遺物図(2)	49
第43図 12号堅穴建物平面図・遺物出土状況図・上層断面図・出土遺物図	50
第44図 13号堅穴建物平面図・遺物出土状況図・上層断面図	52
第45図 13号堅穴建物床下図・上層断面図・断面図・出土遺物図	53
第46図 16号堅穴建物平面図・遺物出土状況図・上層断面図	54
第47図 16号堅穴建物床下図・断面図・出土遺物図	55
第48図 16号堅穴建物出土遺物図	56
第49図 17号堅穴建物平面図・上層断面図	57
第50図 17号堅穴建物出土遺物図	58
第51図 17号堅穴建物上層断面図・断面図	59
第52図 17号堅穴建物出土遺物図(1)	60
第53図 17号堅穴建物出土遺物図(2)	61
第54図 17号堅穴建物出土遺物図(3)	62
第55図 17号堅穴建物出土遺物図(4)	63
第56図 17号堅穴建物出土遺物図(5)	64
第57図 17号堅穴建物出土遺物図(6)	65
第58図 19号堅穴建物平面図・上層断面図・断面図・出土遺物図	66
第59図 20号堅穴建物平面図・上層断面図・断面図	66
第60図 21号堅穴建物平面図・遺物出土状況図・上層断面図	67
第61図 21号堅穴建物床下図・出土遺物図	68
第62図 11・17～19号土坑平面図・上層断面図・断面図・出土遺物図	70
第63図 20～23号土坑平面図・上層断面図・断面図・出土遺物図	71
第64図 弥生土器 分布図	72
第65図 弥生土器 道構外出土遺物図(1)	73
第66図 弥生土器 道構外出土遺物図(2)	74
第67図 古墳年代面全体図	75
第68図 3号堅穴建物平面図・道構出土状況図	76
第69図 3号堅穴建物上層断面図・断面図	77
第70図 3号堅穴建物カマド図・上層断面図・堅穴建物床下図・断面図	78
第71図 3号堅穴建物出土遺物図	79
第72図 6号堅穴建物平面図・遺物出土状況図・上層断面図	80
第73図 6号堅穴建物カマド図・上層断面図・出土遺物図(1)	81
第74図 6号堅穴建物出土遺物図(2)	82
第75図 8号堅穴建物平面図・遺物出土状況図・上層断面図	83
第76図 8号堅穴建物断面図・カマド図・上層断面図	84
第77図 8号堅穴建物床下図	85
第78図 8号堅穴建物出土遺物図	86
第79図 15号堅穴建物平面図・遺物出土状況図・上層断面図	87
第80図 15号堅穴建物床下図・出土遺物図(1)	88
第81図 15号堅穴建物出土遺物図(2)	89
第82図 1号堅穴状構造平面図・上層断面図	90
第83図 1号堅穴状構造床下図・上層断面図・出土遺物図	91
第84図 2号堅穴状構造平面図・遺物出土状況図・上層断面図・床下図・出土遺物図(1)	92
第85図 2号堅穴状構造出土遺物図(2)	93
第86図 3号堅穴状構造平面図・上層断面図	94
第87図 1～3号擬立柱建物平面図・上層断面図	95
第88図 1～3号埴全体図	96
第89図 1号埴全体図	98
第90図 1号埴土丘上層断面図(1)	99
第91図 1号埴土丘上層断面図(2)	100
第92図 1号埴土・埴輪出土状況図	103
第93図 1号埴土器・埴輪出土上重分布図(1)	104
第94図 1号埴土器・埴輪土器出土重直分布図(2)	105
第95図 1号埴土器・埴輪土器出土重直分布図(3)	106
第96図 1号埴石室扉開口	107
第97図 1号埴土平面図・上層断面図	109
第98図 1号埴石室上層断面図	110
第99図 1号埴構造過程図①・②	111
第100図 1号埴構造過程図③・④	112
第101図 1号埴閉室平面図・上層断面図・断面図	114
第102図 1号埴出土上部器物	115
第103図 1号埴出土上部器物(1)	116
第104図 1号埴出土上部器物(2)	117
第105図 1号埴出土上部器物(3)	118
第106図 1号埴出土円筒埴輪図(1)完形	120
第107図 1号埴出土円筒埴輪図(2)A類(18～14本)	121
第108図 1号埴出土円筒埴輪図(3)B類(12～10本)	122
第109図 1号埴出土円筒埴輪図(4)B類(9～8本)	123
第110図 1号埴出土円筒埴輪図(5)C類(7～6本)	124
第111図 1号埴出土円筒埴輪図(6)C類(6本)	125
第112図 1号埴出土朝彌形埴輪	126
第113図 1号埴出土教形埴輪図(1)	128
第114図 1号埴出土教形埴輪図(2)	129
第115図 1号埴出土教形埴輪図(3)	130
第116図 1号埴出土鞍形埴輪図(4)上板	131
第117図 1号埴出土鞍形埴輪図(5)上板・戴	133
第118図 1号埴出土鞍形埴輪図(6)矢筒部	134
第119図 1号埴出土盾形埴輪図(1)	136
第120図 1号埴出土盾形埴輪図(2)軸・盾	137

第121図	1号墳出土大刀形埴輪鏡(1).....	138
第122図	1号墳出土大刀形埴輪鏡(2).....	139
第123図	1号墳出土大刀形埴輪鏡(3).....	141
第124図	1号墳出土大刀形埴輪鏡(4).....	142
第125図	1号墳出土馬形埴輪鏡.....	143
第126図	1号墳出土家形埴輪鏡(1).....	144
第127図	1号墳出土家形埴輪鏡(2).....	145
第128図	1号墳出土人物・不規形埴輪.....	147
第129図	1号墳出土不明・形態埴輪基台鏡.....	148
第130図	2号墳平面図・上層断面図.....	149
第131図	2号墳石室展開図.....	150
第132図	2号墳石室平面図・上層断面図.....	151
第133図	2号墳構造過程図①・②.....	152
第134図	2号墳構造過程図③・④.....	153
第135図	2号墳頂部平面図・断面図.....	154
第136図	2号墳出土副葬品目・土器図.....	155
第137図	3号墳平面図.....	156
第138図	3号墳石室展開図・上層断面図.....	157
第139図	3号墳構造過程図.....	159
第140図	3号墳石室副葬品出土状況図.....	160
第141図	3号墳出土副葬品目(1).....	161
第142図	3号墳出土副葬品目(2).....	162
第143図	3号墳出土副葬品目(3).....	163
第144図	3号墳出土副葬品目(4).....	164
第145図	5区ピット平面図・上層断面図.....	166
第146図	10・12・13号上坑平面図・上層断面図・断面図.....	167
第147図	14・15・16・24号上坑平面図・上層断面図・断面図.....	168
第148図	古墳時代・遺構外出土遺物図.....	169
第149図	古代面全体図.....	170
第150図	1・2・3・5号集石平面図・断面図・出土遺物図.....	171
第151図	4号集石平面図・断面図・出土遺物図.....	173
第152図	6・7・9号集石平面図・上層断面図・出土遺物図.....	174
第153図	1号土器集中平面図・出土遺物図.....	176
第154図	5～9号上坑平面図・上層断面図.....	177
第155図	古代面・遺構外出土遺物図.....	178
第156図	中世以降全図.....	179
第157図	1・2号土坑墓平面図・上層断面図・断面図・出土遺物図.....	180
第158図	1・4号上坑平面図・上層断面図・断面図.....	181
第159図	1・2号島平面図・上層断面図.....	182
第160図	3・4号島平面図・上層断面図.....	183
第161図	3号島出土遺物図.....	184
第162図	中世以降構造外出土遺物図(1).....	185
第163図	中世以降構造外出土遺物図(2).....	186
第164図	時代不明出土遺物図.....	187
資料5(表)	ツバガラ.....	200
第165図	黒光X線スペクトル図.....	200
第167図	X線回折図.....	200
第168図	黒光X線分析結果(a)とX線回折分析結果(b).....	203
第169図	各粒度階における鉱物・岩石出現頻度および碎屑物の粒径組成(1).....	211
第170図	各粒度階における鉱物・岩石出現頻度および碎屑物の粒径組成(2).....	212
第171図	各粒度階における鉱物・岩石出現頻度および碎屑物の粒径組成(3).....	213
第172図	碎屑物・基質・孔隙の割合.....	213
第173図	土師器・埴輪地帯回定分析資料図(番号は第13表の番号に対応).....	216
第174図	四戸1号墳出土須恵器の両分布図.....	219
第175図	四戸1号墳出土須恵器の両相関図.....	219
第176図	四戸1号墳出土須恵器のFeとNaの1次元分布図.....	220
第177図	四戸1号墳出土埴輪の両分布図.....	220
第178図	四戸1号墳出土埴輪の両相関図.....	220
第179図	須恵器・埴輪の船上分析資料図(番号は第14表の番号に対応).....	221
第180図	壺・甕の容量分布図.....	228
第181図	2区17号空穴建物甕容量グラフ.....	230
第182図	四戸の古墳群・四戸遺跡編年.....	233・234
第183図	四戸・生原古墳群分布図.....	236
第184図	吾妻川中流域古墳の主体部・副葬品(1).....	239
第185図	吾妻川中流域古墳の主体部・副葬品(2).....	241
第186図	吾妻川中流域古墳の主体部・副葬品(3).....	243
第187図	吾妻川流域の古墳と集落・散布地分布図.....	246
第188図	群馬県内初期横穴式石室図.....	257

図版目次

図版1	四戸古墳群出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真(1).....	195
図版2	四戸古墳群出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真(2).....	196
図版3	四戸の古墳群の植物珪藻体.....	198
図版4	分析No.1、2の素地マッピング図(a)と実体顕微鏡写真(b).....	204

表 目 次

第1表	吾妻川流域の地質一覧.....	8
第2表	周辺道路一覧表.....	18・19
第3表	幾文字土器時期別組成表.....	27
第4表	幾文字土器式別組成表.....	27
第5表	四戸の古墳群出土土器の任務の一観定結果.....	192
第6表	四戸の古墳群出土土器の任務一覧(1).....	193
第7表	四戸の古墳群出土土器の任務(2).....	194
第8表	四戸の古墳群の灰像分析試料一覧表.....	196
第9表	四戸の古墳群の灰像(植物及び酸化物)分析結果.....	196
第10表	四戸の古墳群出土の赤色顔料分析結果一覧.....	200
第11表	埴輪の顔料分析対象一覧.....	203
第12表	薄片作製胎土分析試料一覧.....	208
第13表	薄片作製胎土分析試料観察結果.....	208～210
第14表	四戸1号墳出土須恵器・埴輪の黒光X線分析値.....	220
第15表	ガラス玉4個のXRF分析結果(元素).....	223
第16表	ガラス玉4個のXRF分析結果(無機物).....	223
第17表	2区17号空穴建物跡出土土器主要器種のデータ.....	230
第18表	四戸・生原古墳群一覧表.....	237
第19表	吾妻川流域古墳一覧表.....	247～250
第20表	吾妻川流域古墳時代遺跡一覧表.....	251
第21表	上毛野地域の初現期主要横穴式石室.....	256

写真目次

PL. 1	1 5区調査状況 東より 2 5区調査状況 空撮(手前南)	4 11号豊穴建物床下土坑 1全景 東より 5 11号豊穴建物床下土坑 2全景 東より
PL. 2	1 5区調査状況 西上方より 2 6区調査状況 空撮(手前南)	1 12号豊穴建物全景 北より 2 12号豊穴建物炉全景 北より
PL. 3	1 5区豊石器2D-44Gr 全景 西より 2 5区豊石器2D-44Gr 東壁 西より 3 5区豊石器21-41Gr 全景 西より 4 5区豊石器21-41Gr 東壁 西より 5 6区豊石器2E-31Gr 全景 南東より 6 6区豊石器2E-31Gr 西壁 東より 7 6区豊石器2E-32Gr 全景 南東より 8 6区豊石器2E-32Gr 西壁 東より	3 12号豊穴建物遺物(1)出土状況 南より 4 12号豊穴建物遺物(4)出土状況 南より 5 12号豊穴建物床下全景 西より
PL. 4	1 1号豊穴建物全景 東より 2 1号豊穴建物Aセクション 東より 3 1号豊穴建物Bセクション 南より 4 1号豊穴建物ビット1セクション 南より 5 1号豊穴建物ビット3セクション 東より	1 13号豊穴建物全景 東より 2 13号豊穴建物Aセクション 北側 西より 3 13号豊穴建物Aセクション南側 西より 4 13号豊穴建物炉セクション 東より 5 13号豊穴建物遺物(10)出土状況 西より
PL. 5	1 1号豊穴建物遺物出土状況 東より 2 1号豊穴建物焼土出土状況 西より 3 1号豊穴建物遺物出土状況 南より 4 1号豊穴建物床下全景 東より 5 1号豊穴建物床下土坑 1全景 南より	1 13号豊穴建物遺物(3～5)出土状況 西より 2 13号豊穴建物遺物出土状況 西より 3 13号豊穴建物左から 4・5・3出土状況 西より 4 13号豊穴建物遺物出土状況 南より 5 13号豊穴建物床下全景 東より
PL. 6	1 4号豊穴建物全景 北より 2 4号豊穴建物Aセクション 北より 3 4号豊穴建物遺物出土状況 北より 4 4号豊穴建物床下全景 西より 5 4号豊穴建物床下全景 北より	1 16号豊穴建物全景 南より 2 16号豊穴建物セクション 南西より 3 16号豊穴建物ビット6・7全景 南より 4 16号豊穴建物ビット8全景 南より 5 16号豊穴建物遺物出土状況 東より
PL. 7	1 5号豊穴建物全景 西より 2 5号豊穴建物Aセクション 西より 3 5号豊穴建物Bセクション 南より 4 5号豊穴建物ビット1全景 西より 5 5号豊穴建物ビット2全景 西より	1 16号豊穴建物床下全景 東より 2 16号豊穴建物遺物出土状況 北より 3 16号豊穴建物遺物(11)出土状況 南より 4 16号豊穴建物遺物出土状況 南より 5 16号豊穴建物床下
PL. 8	1 7号豊穴建物全景 東より 2 7号豊穴建物炉とビット 南より 3 7号豊穴建物Aセクション 東より 4 7号豊穴建物ビット1全景 東より 5 7号豊穴建物ビット2全景 東より	1 17号豊穴建物全景 北より 2 17号豊穴建物セクション 西より 3 17号豊穴建物Aセクション 南より 4 17号豊穴建物Bセクション 西より 5 17号豊穴建物ビット2全景 南より
PL. 9	1 7号豊穴建物ビット3全景 東より 2 7号豊穴建物ビット4全景 東より 3 7号豊穴建物ビット5全景 東より 4 7号豊穴建物炉全景 東より 5 7号豊穴建物遺物出土状況 南より	1 17号豊穴建物ビット3全景 南より 2 17号豊穴建物ビット4全景 南より 3 17号豊穴建物ビット18全景 北より 4 17号豊穴建物ビット8全景 南より 5 17号豊穴建物ビット13全景 南より
PL. 10	1 10号豊穴建物全景 西より 2 10号豊穴建物Aセクション北側 西より 3 10号豊穴建物Aセクション南側 西より 4 10号豊穴建物炉セクション 西より 5 10号豊穴建物炉全景 西より	1 17号豊穴建物ビット14全景 南より 2 17号豊穴建物ビット16全景 南より 3 17号豊穴建物炉セクション 南より 4 17号豊穴建物遺物出土状況 北より 5 17号豊穴建物遺物出土状況 南西より
PL. 11	1 10号豊穴建物床下全景 西より 2 10号豊穴建物遺物出土状況 南より 3 10号豊穴建物遺物出土状況 西より 4 10号豊穴建物遺物出土状況 東より 5 10号豊穴建物遺物出土状況	1 17号豊穴建物遺物出土状況 北より 2 17号豊穴建物炉全景 西より 3 17号豊穴建物遺物出土状況 南より 4 17号豊穴建物遺物出土状況 南より 5 17号豊穴建物遺物出土状況 南西より
PL. 12	1 11号豊穴建物全景 西より 2 11号豊穴建物Bセクション 南より 3 11号豊穴建物ビット4セクション 西より 4 11号豊穴建物ビット5全景 北より 5 11号豊穴建物ビット8全景 北より	1 17号豊穴建物床下全景 北より 2 17号豊穴建物調査風景 西より 3 17号豊穴建物調査風景 西より
PL. 13	1 11号豊穴建物遺物出土状況 西より 2 11号豊穴建物炉セクション 西より 3 11号豊穴建物遺物出土状況 西より	1 19号豊穴建物全景 南より 2 19号豊穴建物セクション 南より 3 19号豊穴建物ビット1全景 南より 4 19号豊穴建物ビット2全景 南より 5 19号豊穴建物ビット3全景 南より
		1 20号豊穴建物全景 南より 2 20号豊穴建物全景 西より 3 20号豊穴建物Aセクション 南より 4 20号豊穴建物全景 北より 5 20号豊穴建物ビット1全景 南より

PL. 25	1 21号竪穴建物全景 西より 2 21号竪穴建物全景 南より 3 21号竪穴建物Bセクション 南西より 4 21号竪穴建物ピット1セクション 南より 5 21号竪穴建物ピット2セクション 南より	PL. 37	1 2号竪穴状遺構全景 南東より 2 2号竪穴状遺構Aセクション 東より 3 2号竪穴状遺構Aセクション 東より 4 2号竪穴状遺構遺物出土状況 東より 5 2号竪穴状遺構遺物出土状況 東より
PL. 26	1 21号竪穴建物遺物出土状況 西より 2 21号竪穴建物ピット4全景 北より 3 21号竪穴建物遺物出土状況 南より 4 21号竪穴建物遺物出土状況 北より 5 21号竪穴建物遺物出土状況 南より	PL. 38	1 3号竪穴状遺構全景 西より 2 3号竪穴状遺構セクション 南より 3 3号竪穴状遺構全景 南西より 4 3号竪穴状遺構全景 西より 5 3号竪穴状遺構全景 南西より
PL. 27	1 5区1号土坑全景 南より 2 5区1号土坑セクション 東より 3 5区1号土坑全景 西より 4 5区18号土坑全景 南東より 5 5区19号土坑全景 南より 6 5区20号土坑セクション 南より 7 5区22号土坑全景 南より 8 5区23号土坑全景 南より	PL. 39	1 1号掘立柱建物全景 北より 2 2号掘立柱建物全景 南より
PL. 28	1 3号竪穴建物全景 西より 2 3号竪穴建物Bセクション 南より 3 3号竪穴建物遺物出土状況 南西より 4 3号竪穴建物カマドLセクション 南より 5 3号竪穴建物貯蔵穴全景 西より	PL. 40	1 古墳群調査状況 東より 2 古墳群調査状況 空撮
PL. 29	1 3号竪穴建物床下全景 北より 2 3号竪穴建物ピット3全景 西より 3 3号竪穴建物遺物出土状況 南より 4 3号竪穴建物遺物出土状況 南より 5 3号竪穴建物床下全景 北より	PL. 41	1 1号埴輪状況 空撮 2 1号埴輪査定前風景 東より 3 1号埴輪査定風景 東より 4 1号埴輪査定現状 南より 5 1号埴輪査定風景 北より
PL. 30	1 6号竪穴建物全景 西より 2 6号竪穴建物セクション 西より 3 6号竪穴建物カマドFセクション 南より 4 6号竪穴建物カマド全景 西より 5 6号竪穴建物カマド離穴全景 西より	PL. 42	1 1号埴輪査定風景 西より 2 1号埴Bトレンチ掘削状況 南東より 3 1号埴Cトレンチ掘削状況 南より 4 1号埴Bトレンチ裏込めセクション 西より 5 1号埴丘西側状況 北西より
PL. 31	1 6号竪穴建物遺物出土状況 西より 2 6号竪穴建物ピット1全景 西より 3 6号竪穴建物ピット2全景 西より 4 6号竪穴建物遺物出土状況 南寄り 5 6号竪穴建物遺物出土状況 南東より	PL. 43	1 1号埴道閉塞、墓道完掘 南東より 2 1号埴道閉塞、墓道完掘 南東より 3 1号埴道閉塞状況、墓道 南西より 4 1号埴墓道Eセクション 南より
PL. 32	1 8号竪穴建物床下全景 西より 2 8号竪穴建物Aセクション 南より 3 8号竪穴建物Bセクション 西より 4 8号竪穴建物カマド全景 西より 5 8号竪穴建物カマドIセクション 南より	PL. 44	1 1号埴周囲 南北より 2 1号埴Eトレンチセクション 南より 3 1号埴周囲Fセクション 南西より 4 1号埴北側周囲 北より 5 1号埴周囲西側完掘 南西より
PL. 33	1 8号竪穴建物貯蔵穴セクション 西より 2 8号竪穴建物床下全景 西より 3 8号竪穴建物ピット1全景 西より 4 8号竪穴建物ピット2全景 西より 5 8号竪穴建物ピット3全景 西より 6 8号竪穴建物ピット4全景 西より 7 8号竪穴建物カマド付近遺物出土状況 西より 8 8号竪穴建物カマド付近遺物出土状況 西より	PL. 45	1 1号埴石室奥門前天井石崩落状況 南東より 2 1号埴奥門部調査状況 南より 3 1号埴奥門東壁輸出上状況 南より 4 1号埴石室天井石崩落状況 南東より 5 1号埴奥門前遺物出土状況 南より 6 1号埴石室奥門付近遺物出土状況 南より 7 1号埴石室奥門付近遺物出土状況 東より 8 1号埴奥門西側(186・238・93・87出土状況 東より
PL. 34	1 15号竪穴建物全景 南東より 2 15号竪穴建物Aセクション 南東より 3 15号竪穴建物床面粘土出土状況 南より 4 15号竪穴建物遺物出土状況 南東より 5 15号竪穴建物遺物出土状況 南より	PL. 46	1 2号埴道閉塞状況、墓道遺物出土状況 南東より 2 1号埴道遺物出土状況 南より 3 1号埴西側壁輸出上状況 東より 4 1号埴道遺物出土状況 南より 5 1号埴西側(48)出土状況 東より
PL. 35	1 15号竪穴建物遺物出土状況 東より 2 15号竪穴建物遺物出土状況 北東より 3 15号竪穴建物遺物出土状況 南より 4 15号竪穴建物床下全景 南東より 5 15号竪穴建物床下全景 北東より	PL. 47	1 1号埴西側遺物(190・186)出土状況 南より 2 1号埴西側(47)出土状況 南より 3 1号埴西側壁輸出上状況 東より 4 1号埴西側(107)出土状況 北より 5 1号埴西側(51・107)出土状況 東より
PL. 36	1 1号竪穴状遺構全景 北より 2 1号竪穴状遺構ピット1全景 南より 3 1号竪穴状遺構ピット2全景 南より 4 1号竪穴状遺構Aセクション 南西より 5 1号竪穴状遺構床下全景 西より	PL. 48	1 1号埴南西側遺物出土状況 南より 2 1号埴西側遺物出土状況 南東より 3 1号埴円筒埴輪(55)出土状況 東より 4 1号埴円筒埴輪(50)出土状況 東より 5 1号埴輪(233)出土状況 東より 6 1号埴周囲上層埴輪出土状況 南西より 7 1号埴周囲南西部上層西側出土状況 西より 8 1号埴南西部埴輪出土状況 南より
		PL. 49	1 1号埴周囲西側上層遺物出土状況 北より 2 1号埴周囲北側上層埴輪(175・154・224)出土状況 北より 3 1号埴周囲北側上層埴輪出土状況 北東より 4 1号埴周囲北側上層埴輪(66・65・154・113)出土状況 北より

PL. 50	5	1号埴床底北東側上層埴輪(111・191・180)出土状況 北より	3	1号埴石室、廻道閉塞、玄室床面 南東より
	1	1号埴床底北側上層埴輪(56・65・154・113)出土状況 西より	4	1号埴石室廻道閉塞、玄室床面状況 南東より
	2	1号埴床底北東側上層埴輪(111・191・180)出土状況 西より	5	1号埴石室部、閉塞状況断面 南西より
	3	1号埴床底西側埴輪出土状況 北西より	6	1号埴石室底断面、玄室床面 南東より
	4	1号埴床底(110・62・176・160)出土状況 北西より	7	1号埴玄室に理上層断面写真 南西より
	5	1号埴床底埴輪(50)出土状況 西より	8	1号埴完掘状況 空欄
	6	1号埴床底部埴輪出土状況 西より	2	2号埴調查前状況 北より
	7	1号埴底象埴輪(114)出土状況 北より	3	2号埴貯査前状況 西より
	8	1号埴底象埴輪(114)出土状況 北より	4	2号埴壁石取り外し状況 西より
	PL. 51	1号埴方完掘状況 南より	5	2号埴施ち割りEセクション 南西より
PL. 52	1	1号埴方と背景の岩盤山 西より	1	2号埴石室施ち割り状況 南より
	2	1号埴方と背景の岩盤山 西より	2	2号埴底断ち割り 南東より
	3	1号埴石室掘方全景 南より	3	2号埴底断ち割り Eセクション 南東より
	4	1号埴石室掘方全景 東より	4	2号埴底断ち割り D・A・Eセクション 南西より
	5	1号埴石室掘方全景 南より	5	2号埴底断ち割り 南東より
	1	1号埴石室掘方調査状況 東より	PL. 65	1号埴敷石除去後掘方状況 南東より
	2	1号埴方調査状況 北東より	2	2号埴敷石除去後掘方状況 南東より
	3	1号埴石室掘方調査状況 北より	3	2号埴方全景 北西より
PL. 53	4	1号埴石室掘方全景 西より	4	2号埴敷石除去後掘方状況 南東より
	5	1号埴調査風景	PL. 66	1号埴壁石除去後敷石敷設状況 南東より
	6	1号埴調査風景	2	2号埴壁石除去後敷石敷設状況 南東より
	7	1号埴石外し作業風景 西より	3	2号埴壁石除去後敷石敷設状況 南西より
	8	1号埴調査風景	4	2号埴玄室敷石敷設状況 北西より
	PL. 54	1号埴底床面下部調査状況 北より	PL. 67	1号埴底床石外し、玄室床面状況 南東より
	2	1号埴底床面下部調査状況 南東より	2	2号埴石室全景(埴丘周りの石取出) 北より
	3	1号埴門床面下状況 南東より	3	2号埴全景 北西より
	4	1号埴底床面下敷石面(舗石) 南東より	4	2号埴石室底石外し、玄室床面状況 北西より
PL. 55	1	1号埴底床面下状況 北西より	5	2号埴玄室敷石底石外し 南西より
	2	1号埴底床面下状況 南西より	PL. 68	1号埴底床石外し、玄室石下面 南東より
	3	1号埴底床面下削 南西より	2	2号埴完掘状況 南東より
	4	1号埴底床面下削 北西より	3	2号埴底床面状況 北西より
	5	1号埴底床面下削 南西より	4	2号埴全景 北西より
	1	1号埴玄室床面 北西より	5	2号埴玄室床面 北西より
	2	1号埴玄室床面状況 北西より	PL. 69	1号埴全景 北東より
	3	1号埴底閉塞、玄室床面検出状況 南東より	2	2号埴底床面状況 北西より
PL. 56	4	1号埴トレンチ完掘状況 南西より	3	2号埴石室完掘状況 南西より
	1	1号埴石室全景 北西より	4	2号埴石室完掘状況 北東より
	2	1号埴玄室床面 美道閉塞状況 北西より	5	2号埴玄室、墓道床面状況 南東より
	PL. 57	1号埴玄室全景 南より	PL. 70	1号埴底床面状況 南東より
	2	1号埴全景 北より	2	2号埴底床面状況 南東より
	3	1号埴全景 南東より	3	2号埴底裏裏アレンチ削剂状況 北西より
	4	1号埴石景 北より	4	2号埴玄室、美道床面状況 南東より
PL. 58	5	1号埴トレンチ完掘状況 南西より	5	2号埴玄室、墓道床面状況 南東より
	1	1号埴石室状況 北東より	PL. 71	1号埴玄室床面、美道閉塞状況 北西より
	2	1号埴裏裏込め状況 西より	2	2号埴底閉塞状況 南より
	3	1号埴奥壁周辺込め状況 北西より	3	2号埴玄室床面、美道閉塞状況 南東より
	4	1号埴裏裏込め状況 北西より	4	2号埴底閉塞状況 东より
	5	1号埴込込め下段 北より	5	2号埴底閉塞状況 南東より
	1	1号埴トレンチ完掘状況 北より	6	2号埴玄室床面状況 北西より
	2	1号埴込込め 西より	7	2号埴玄室床面状況 南東より
PL. 59	3	1号埴奥壁裏込め 西より	PL. 72	1号埴石室完掘 北西より
	4	1号埴石室完掘状況 南東より	2	2号埴底玄室内崩落土石堆積状況 南東より
	5	1号埴込込め西側 西より	3	2号埴底玄室内崩落土石堆積状況 南東より
	1	1号埴込込め下段 北より	4	2号埴玄室崩落石堆積状況 南東より
	2	1号埴裏込込め下段 北より	5	2号埴玄室崩落石堆積状況 北東より
	3	1号埴石込込め下段 東より	PL. 73	1号埴完掘全景 空欄
	4	1号埴石込込め石 南より	2	3号埴方完掘 南東より
	5	1号埴込込め 西より	PL. 74	1号埴奥壁裏側Dセクション 西より
PL. 60	6	1号埴裏込込め 西より	2	3号埴方調査状況 南より
	7	1号埴込込め 西より	3	3号埴方調査状況 北東より
	8	1号埴トレンチ完掘状況 北より	4	3号埴方調査状況 北東より
	1	1号埴底閉塞完掘状況 南東より	5	3号埴方調査状況 南東より
	2	1号埴底閉塞状況 南より	PL. 75	1号埴方調査状況 北東より
	3	1号埴底閉塞下面 西より	2	3号埴方調査状況 南東より
	4	1号埴底 崩落状況 南東より	3	3号埴方調査状況 北西より
	PL. 61	1号埴石室内調査開始状態 北西より	4	3号埴方調査状況 北西より
PL. 62	1	1号埴玄室に理上層断面写真 南西より	5	3号埴玄室敷石下調査状況 北西より
	2	1号埴玄室に理上層断面写真 南西より	6	3号埴玄室敷石除去状況 南西より

PL. 76	7 3号埴石除去後 南東より 8 3号埴石(舗石)面状況 北より 1 3号埴玄室敷石(舗石)面状況 西北より 2 3号埴室床面状況 北東より	5 6区3号烟近景 南東より 6 6区3号烟Aセクション 南西より 7 6区3号烟Bセクション 北東より 8 6区3号烟Cセクション 南西より
PL. 77	1 3号埴室床内直刀・薙他出土状況 東より 2 3号埴室床面状況 北東より 3 3号埴調査風景 東より 4 3号埴室内Dセクション 南東より 5 3号埴調査風景 南より	PL. 86 埴文上器出土遺物(1) PL. 87 埴文上器出土遺物(2) PL. 88 埴文上器出土遺物(3) PL. 89 埴文上器出土遺物(4), 弥生時代1・4・5・7号竖穴建物出土遺物
PL. 78	1 5区10号土坑セクション 南西より 2 5区10号土坑全景 北より 3 5区12号土坑全貌 南より 4 5区13号土坑全貌 南より 5 5区14・24号土坑全貌 東より 6 5区14号土坑全貌 西より 7 5区15号土坑セクション 南西より 8 5区15号土坑全貌 南より	PL. 90 弥生時代10・11号竖穴建物出土遺物 PL. 91 弥生時代12・13・16号竖穴建物出土遺物 PL. 92 弥生時代17号竖穴建物出土遺物(1) PL. 93 弥生時代17号竖穴建物出土遺物(2) PL. 94 弥生時代17号竖穴建物出土遺物(3) PL. 95 弥生時代17号竖穴建物出土遺物(4) PL. 96 弥生時代21号竖穴建物, 22号土坑、道構外、古墳時代3号(1)竖穴建物出土遺物
PL. 79	1 6区1号集石全貌 西より 2 6区1号集石遺物出土状況 西より 3 6区2号集石全貌 南東より 4 6区2・5号集石全貌 南より 5 6区3号集石全貌 東より 6 6区3号集石遺物出土状況 南東より 7 6区4号集石全貌 北より 8 6区4号集石全貌 西より	PL. 97 古墳時代3号(2)・6号竖穴建物出土遺物 PL. 98 古墳時代8号・15号(1)竖穴建物出土遺物 PL. 99 古墳時代15号(2)竖穴建物出土遺物 PL. 100 古墳時代15号(3)竖穴建物, 1・2号(1)竖穴状道構出土遺物 PL. 101 古墳時代2号(2)竖穴状道構、1号埴出土遺物(1) PL. 102 1号埴出土遺物(2) PL. 103 1号埴出土遺物(3) PL. 104 1号埴出土遺物(4) PL. 105 1号埴出土遺物(5) PL. 106 1号埴出土遺物(6) PL. 107 1号埴出土遺物(7) PL. 108 1号埴出土遺物(8) PL. 109 1号埴出土遺物(9) PL. 110 1号埴出土遺物(10) PL. 111 1号埴出土遺物(11) PL. 112 1号埴出土遺物(12) PL. 113 1号埴出土遺物(13) PL. 114 1号埴出土遺物(14) PL. 115 1号埴出土遺物(15) PL. 116 1号埴出土遺物(16)、2号埴出土遺物、3号埴出土遺物(1) PL. 117 3号埴出土遺物(2) PL. 118 3号埴出土遺物(3)、1号集石出土遺物 PL. 119 4号集石・1号土器集中出土遺物 PL. 120 古代道構外出土遺物、3号烟、中世以降道構外出土遺物(1) PL. 121 中世以降道構外出土遺物(2)、時代不明道構外出土遺物
PL. 80	1 6区5号集石全貌 東より 2 6区5・7号集石全貌 東より 3 6区6号集石全貌 東より 4 6区6号集石全貌 南より 5 6区7号集石遺物出土状況 東より 6 6区7号集石Bセクション 東より 7 6区7号集石振り込み 東より 8 6区7号集石全貌 南より	
PL. 81	1 6区7号集石振り込み全貌 西より 2 5区9号集石確認状況 南より 3 5区9号集石全貌 南より 4 5区1号土器集中全貌 北より 5 5区1号土器集中遺物出土状況 南より 6 6区5号土坑セクション 南より 7 6区5号土坑全貌 南より 8 6区5号土坑セクション 南より	
PL. 82	1 6区6号土坑全貌 南より 2 6区7号土坑セクション 南より 3 6区7号土坑全貌 南より 4 6区8号土坑セクション 西より 5 6区8号土坑全貌 西より 6 6区9号土坑セクション 南より 7 6区9号土坑全貌 北より 8 6区9号土坑全貌 東より	
PL. 83	1 6区1号土坑墓全貌 東より 2 6区1号土坑墓人骨出土状況 南西より 3 6区1号土坑墓人骨出土状況 南より 4 6区1号土坑墓完掘 南より 5 6区2号土坑墓人骨出土状況 北東より	
PL. 84	1 6区2号土坑墓人骨出土状況 南西より 2 6区2号土坑墓人骨出土状況 南西より 3 6区1号土坑全貌 東より 4 6区4号土坑全貌 南西より 5 6区3号烟全貌 南東より 6 6区3号烟Aセクション 南より 7 6区1号烟全貌 南より 8 6区1号烟全貌 南東より	
PL. 85	1 6区2号烟遠景 北より 2 6区2号烟全貌 北より 3 6区3号烟遠景 南東より 4 6区3号烟中景 南東より	

第1章 調査の経過と方法

第1節 調査に至る経過

上信自動車道(国道145・353号バイパス)は、群馬県渋川市の関越自動車道渋川伊香保インターチェンジを起点に長野県東御市の上信越自動車道東部湯の丸インターチェンジへと至る総延長約80kmを有する地域高規格道路である。上信自動車道は、起点から長野県境までを8つの整備区間に分けており、四戸の古墳群が入る整備区間は、吾妻西バイパスである。

吾妻西バイパスは、国道145号バイパスの一部となる整備区間の一つで、東吾妻町大字厚田から東吾妻町大字松谷までの区間である。この整備区間は、東吾妻町大字厚田、三島、岩下、松谷に所在する。

吾妻西バイパスは、平成21年3月31日に整備区間の指定を受け、平成23年5月13日付けで、中之条土木事務所から、当該区間ににおける埋蔵文化財の有無を取り扱いについて、群馬県教育委員会と協議が行われた。平成25年11月11日付けで中之条土木事務所長より、試掘・確認調査の依頼(四戸の古墳群・唐堀遺跡)がなされた。また、平成26年1月7日、5月23日、10月16日付け、平成28年12月7日付けで同じく中之条土木事務所から試掘・確認調査の依頼(四戸遺跡・四戸の古墳群)がなされ、これを受けて、群馬県教育委員会文化財保護課は、平成25年12月17日～19日、平成26年1月28～30日、6月11日、11月5～7日、平成28年12月15日に試掘・確認調査を実施した。調査結果により群馬県教育委員会文化財保護課は、発掘調査が必要であることを中之条土木事務所に回答し、記録保存措置が取られることになった。

四戸の古墳群は、四戸遺跡の東端にあたり、古墳群が形成されたことから、四戸の古墳群と遺跡名が付されている。四戸遺跡と一連の遺跡と推定されるが、四戸遺跡と分離し、四戸の古墳群として単独で調査が行われた。

第2節 調査区とグリッド設定

調査は、当初単独での調査として、東側河岸段丘下面の1区と道を挟んだ西側の段丘上面の2区とした。しかし、西側に展開する四戸遺跡では、西から1～4区と呼

称してきたので、当遺跡の西側2区を5区に、東側1区を6区として、四戸遺跡との関連性を考慮した調査区分とすることにして、調査区名を整理時に変更した(第1図)。四戸の古墳群5・6区は、世界測地系(日本測地系2000平面直角座標系第IX系)のX=61093～61170、Y=-93078～-93166の範囲に収まる。調査面積は、5,731m²である。

グリッドの設定(第2図)は、四戸の古墳群と四戸遺跡の全体を含めるために、東の温川西岸から、西の万木沢東岸までの間を対象とした、世界測地系のX=61000、Y=-93000を基点として、1区画5m四方のグリッドを設定した。基点のX軸から南から北へ、A～Z、2A～2Z、Y軸は東から西へ1～180を付した。うち、四戸の古墳群では南北方向のX軸で、U～Y、2A～2Kが相当し、東西方向のY軸は、15～47が該当するグリッド下域となる。南東の隅のX軸の記号・数字記号とY軸の数字の組み合わせにより、北西側にあるグリッドを代表する。

第3節 調査の方法

調査は、表土掘削はバックフォーで行い、浅間-柏川テフラ(As-Kk)あるいはその混土層下面か、浅間B輕石(As-B)の下面を上部の遺構の確認面とする。その層位でジョレンを用いて遺構を面的に把握することに努めた。遺構は、畠が4枚、及び土坑墓が2基確認された。いずれも中世と想定される。遺構の調査は、移植ごと竹べらと手ボウキを使い丁寧に検出した。

次に古代及び古墳・弥生時代の遺構の確認を行うが、基本土層の6層から遺構の形成がなされている。上から下げていくと、時代に関係なく地山面を掘り込む形で遺構面を確認することができた。地山は、基本土層7層及び8層の灰黄褐色から黄褐色土であり、この層を掘り込む形で遺構は検出される。古墳については、1・2号墳は石室の破壊により石材が散乱していることから調査以前から分かったものであるが、3号墳は調査が進むにつれ古墳の存在が明らかになったものである。竪穴建物は、平面を確認した段階で、土層確認のベルトを十字に設定

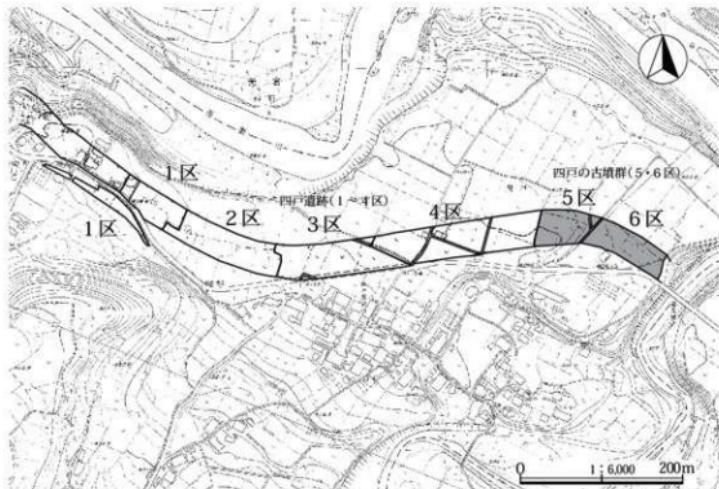
第1章 調査の経過と方法

して、土層の堆積状況を確認しながら調査を行った。ピットや土坑では、半截して土層断面を確認しながら遺構と認定できるか判断しながら調査を行った。

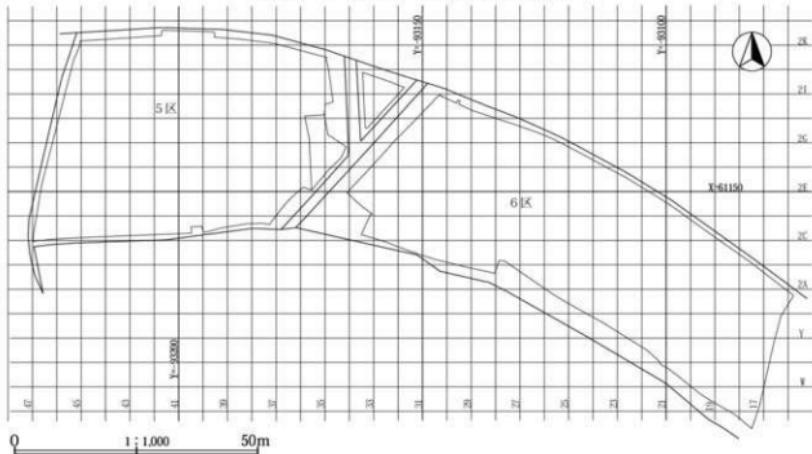
遺構名は、5区が河岸段丘面上位で、6区が河岸段丘下面下位となり比高も5mもあるが、遺構No.は同一遺跡ということから連番とした。

遺構の測量は、測量会社に平面図とともに委託して行った。竪穴建物・古墳・ピット・土坑などは1/20で、作製した。畠、全体図は1/100で作製した。

写真撮影は、デジタルでの撮影を行い、重要度のある遺構については、中判カメラでのモノクロフィルムでの撮影を行った。航空写真は、調査後半、古墳などの遺構



第1図 四戸の古墳群・四戸遺跡調査区設定図



第2図 四戸の古墳群グリッド配置図

が良く残っている状況でラジコンヘリによりデジタル写真での撮影を行った。撮影後のデジタルデータは、HDやDVD-ROMに保存した。

第4節 調査の経過

第1項 発掘調査の経過

発掘調査は、平成30年4月1日～9月30日まで行われた。6ヶ月間に亘る調査である。

4月1日 調査に向けた準備を開始。

4月10日 調査区東端6区より表土矧ぎ開始。表土下20cmで浅間・柏川テフラを検出し、広がり追う。

4月11日 5区1号墳現況測量開始。

4月12日 6区集石遺構確認。1号富検出。

4月17日 1～5号集石の周りから土器出土。

4月26日 6区集石調査終了。2面調査開始。

5月8日 6区2面縄文土器集中出土部調査。

5月14日 6区2面4～6トレンチ掘削。

5月15日 5区1号墳トレンチ調査開始。

5月31日 6区1・2号土坑墓より人骨出土。

6月6日 6区全景写真撮影。

6月21日 6区1号竪穴建物調査終了。

6月22日 6区7号集石調査終了。

6月25日 6区2面全景写真撮影。

6月26日 5区1号古墳周囲セクション測量。

6月27日 6区基本土層トレンチ10号北壁トレ調査。

7月2日 ラジコンヘリによる古墳中心とした空撮。

7月7日 5区1号墳石室現状写真撮影。

7月9日 5区1号土器集中調査、遺物出土状況写真撮影。

7月11日 6区調査終了埋め戻し。

7月13日 5区1号墳石室周辺遺物調査。

7月19日 5区1号墳石室前石列調査開始。

7月20日 5区1号竪穴遺構調査終了。

7月23日 5区1号墳石室廻り調査。

7月24日 5区1号墳周囲埴輪出土状況。

7月25日 5区2・3号墳調査継続。

7月26日 5区4号竪穴建物調査終了。

7月27日 5区1号墳周囲埴輪出土状況調査、写真撮影。

3号竪穴建物調査終了。

7月30日 5区1号墳填丘出土埴輪調査、写真撮影。

5号竪穴建物調査終了。

7月31日 5区1・3号墳石室内埋没土除去。

8月2日 5区1号墳周囲完掘写真撮影。3号墳石床面状況写真撮影。

8月3日 5区1号墳石室検出状況写真撮影。

8月6日 5区2号墳石室完掘状況写真撮影。

8月17日 5区6・7・8号竪穴建物調査終了。

8月20日 5区12・13号竪穴建物調査終了。

8月21日 5区11号竪穴建物調査終了。

8月23日 5区1号掘立柱、10号竪穴建物調査終了。

8月27日 5区2号竪穴遺構調査終了。

8月28日 ラジコンヘリによる航空写真古墳撮影。

8月29日 5区2・3号掘立柱建物調査終了。

8月30日 地元向け現地説明会開催。

8月31日 5区15号竪穴建物調査終了。

9月6日 5区16号竪穴建物調査終了。

9月7日 5区2号墳石室全景写真撮影。17号竪穴建物、3号竪穴遺構調査終了。

9月10日 5区旧石器トレンチ2D44G掘削。

9月12日 5区旧石器トレンチ2141G掘削。

9月14日 5区1号墳石室最終調査。19号竪穴建物調査終了。

9月18日 5区2・3号墳石室解体作業。

9月19日 5区2・3号墳掘方調査終了。

9月26日 5区1号墳石室解体作業。

9月27日 5区1号墳床面下調査。

9月28日 5区1号墳調査終了。調査終了。

調査終了後、10月1日付で、埋蔵物発見届を吾妻警察署へ、埋蔵物保管証を吾妻警察署長を経由して群馬県教育委員会教育長へ提出。

第2項 整理の経過

整理は、平成31年4月1日より、令和2年5月31日まで行った。調査図面の確認、編集作業、出土遺物の接合、復原作業、復元した土器などの遺物の写真撮影、出土遺物の実測図作製、編集した遺構図や遺物図のデジタル編集を行った。また、遺跡の性格を明らかにするための自然科学分析を行った。圧痕同定分析など8分析である。分析の成果を併せて、令和2年10月に調査報告書を刊行した。

第2章 地形的環境と地質

第1節 地形的環境(第3～9図)

四戸の古墳群の位置する吾妻地域は、群馬県の北西部にある(第9図)。火山群が四周を囲み、中に二高地・三盆地・五渓谷を形成するものである。中央部に南北から小河川が流れ込む吾妻川が西から東に流れ渋川市で利根川に合流する。

四戸の古墳群の北側には吾妻川が西から東に流れている。また、温川がすぐ東を南から北へ流れている。遺跡の東南方には、温川を挟んで、標高1,449mの榛名山が聳えている。北側には、薬師岳(975m)が、西側には東吾妻と西吾妻を分ける高間山(1,341m)、菅峰(1,473m)、浅間隱山(1,756m)などの山々がある。さらに南には笛崎山(1,402m)から延びる尾根が東に下り、南を画している(第9図)。

温川は、南部から北上して郷原で吾妻川に合流する。吾妻川・温川ともに河岸段丘を形成している。現在の人々の生活は、吾妻川の河岸段丘・榛名山麓・温川沿いの低地で主に営まれている。特に段丘面では人々が生活する居住域や田畠などの生産域が展開している(第5図)。以下、地形について詳しく述べる。

四戸の古墳群は群馬県東吾妻町三島にある(第3～5図)。吾妻地域では東部にあたり、利根・吾妻川の合流地点より吾妻川の川沿いに榛名山北麓に沿って約25kmに亘った所の吾妻川の右岸(南岸)に位置している。四戸の古墳群を南から臨むと、古墳群の背景に吾妻川の左岸(北岸)に位置する標高803mの岩櫃山の威容が望める。古墳群は蛇行する吾妻川を西・北側に臨み、さらに温川を東に臨む位置で、吾妻川と温川に挟まるようあり、両河川の合流地点を望む位置にある(第8図)。

吾妻川は、鳥居峠を基点に東流する河川で、上流部は、白根火山や浅間火山に挟まれ、北東流から南西流に大きく流れの方向を変える。狭い吾妻渓谷の谷部を抜けると、直線状に流れようになり、河岸段丘が形成されるようになる。

河岸段丘(山口(2020)による)は5つの面に区分される(第6図)。中位段丘面である成田原面、下位段丘面であ

る中之条面、最下位段丘面群の伊勢町面群である。四戸遺跡・四戸の古墳群が位置する段丘面は、伊勢町I面が中心であり、この面に四戸の古墳群の北側中心部は立地している。また、古墳群の南の一部には、伊勢町II面に載る三島村27・28・29・30・31号墳がある。さらに南に離れた三島村34・35号墳が上の段丘面の中之条面に載る。

四戸古墳群の南に位置する生原古墳群も、伊勢町I面を中心にして、伊勢町II面にも古墳は立地している。

以上、四戸の古墳群は、吾妻川及び温川の河岸段丘の伊勢町I面を中心にして、一部が下位段丘の中之条面、最下位段丘の伊勢町II面の上に立地することになる。

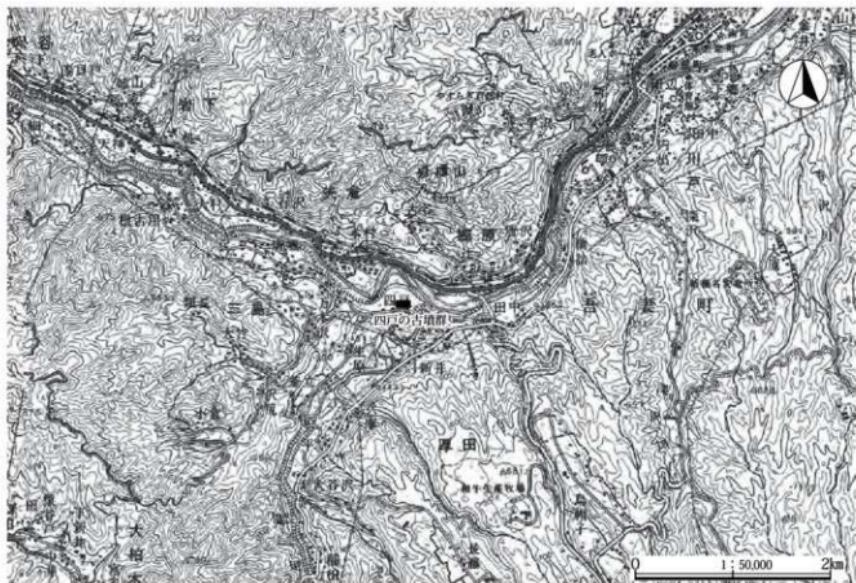
四戸の古墳群の西に位置する四戸遺跡や唐堀遺跡などは、いずれも四戸の古墳群と同じ、伊勢町I面上にあり、同じ段丘面に吾妻川右岸(南岸)の一連の遺跡群は立地していることが分かる。ただし、四戸の古墳群の東にある温川の右岸(東岸)に位置する新井遺跡は、一段上の下位段丘である中之条面に立地している。

四戸の古墳群は、居住域である四戸遺跡が古墳群の西側にあり、やや高度が下がる東側に古墳群が集中しており、居住や耕作に適さない場所に古墳が構築された可能性がある。また、南の標高の低い温川方面から古墳を見ると、下から見上げるように横穴式石室の開口部が望め、古墳の見かけ上の大きさが実際よりも強調されることになる。このような視覚効果を意識しての古墳群の選地であったことが想定される。

第2節 遺跡付近の地質について

(第7図)

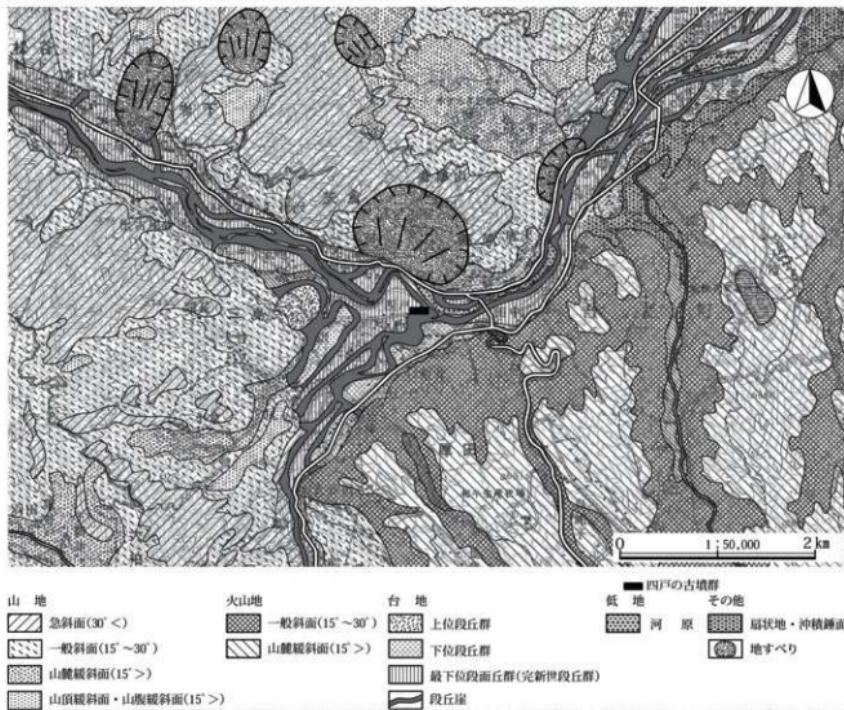
遺跡地のすぐ東を南から北へ吾妻川に合流する温川に接して榛名山西麓が達している。西麓から北麓全体に、第1期の榛名火山噴出物である紫蘇輝石普通輝石安山岩及び火碎物により厚く覆われている。遺跡地の南側に広がる尾根部には、新第三紀鮮新世の小倉層が分布し、紫蘇輝石普通輝石安山岩・凝灰岩角礫互層となる。この尾根の北、遺跡地の西には、新第三紀後期中新世の吾妻層が分布し、紫蘇輝石普通輝石安山岩・凝灰角礫岩及び凝灰岩で構成されている。この地層は、吾妻川を挟んだ対



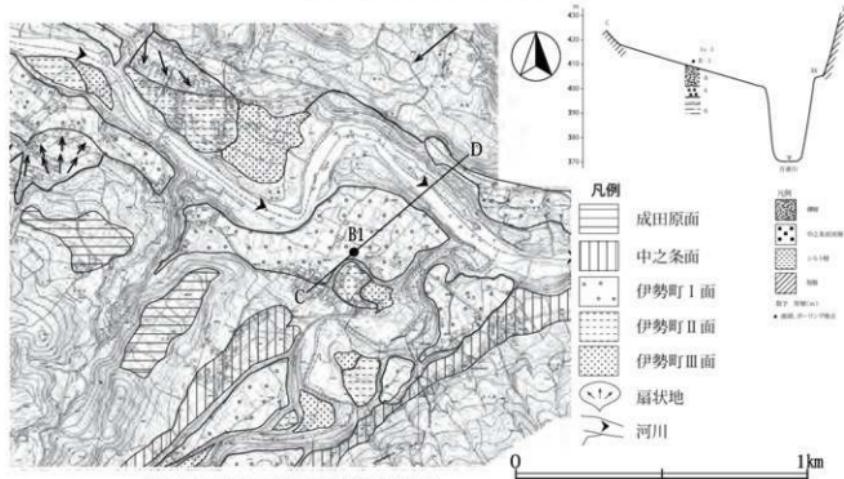
第3図 四戸の古墳群周辺地形図



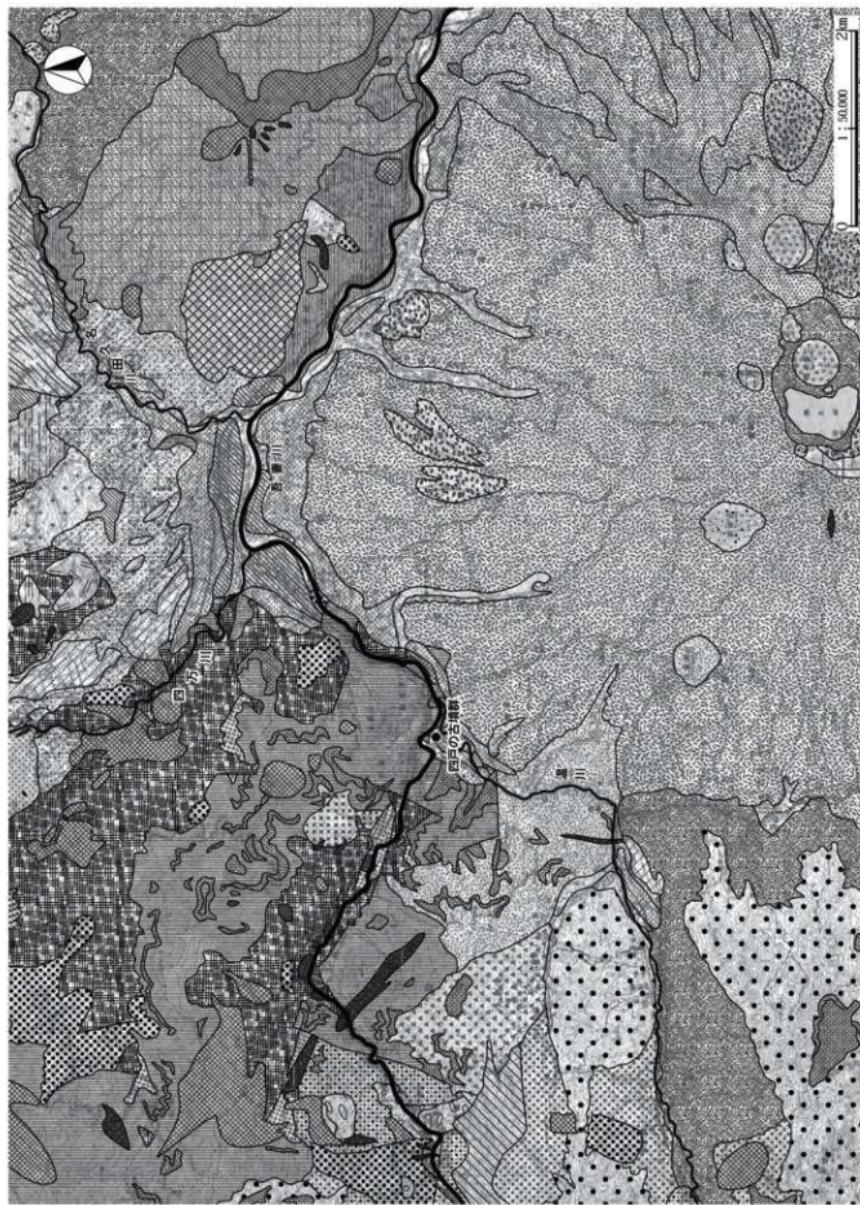
第4図 四戸の古墳群周辺色別標高図



第5図 四戸の古墳群周辺地形分類図



第6図 四戸の古墳群周辺河岸段丘面区分図



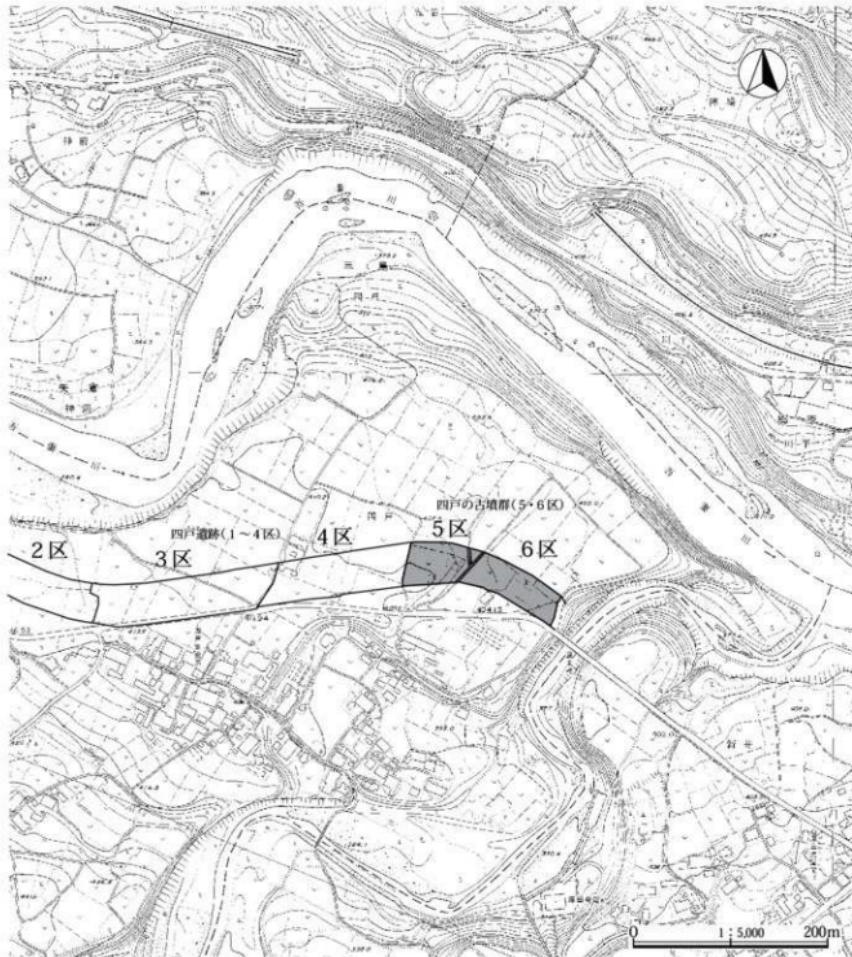
第7図 百舌中流域地質分類図

第1表 吾妻川中流域の地質一覧

	記号	地質時代(紀)	地質時代(世)	火山噴出物名	噴出時期	地形、層名	岩質
	S5	第四紀	完新世		段丘面、伊勢町面	裸、砂及びコトコト	
SH	礫	第四紀	中期・後期更新世		段丘面、虎田原面	裸、砂及びコトコト	
A	砾	第四紀	後期更新世～完新世		冲積		
Fo	砾	第四紀	後期更新世～完新世		山麓堆積物	裸、砂及びコトコト	
Kk	砾	第四紀	中期更新世		中之条湖成層	裸、砂及び粘土	
On	砾	第四紀	前中期更新世		浅灰角砾岩、砂岩及び粘土		
Ky	砾	第四紀	鮮新世		紫蘇輝石普通安山岩溶岩、基底角砾岩互層		
Kk	砾	第四紀	鮮新世		軽石凝灰岩、灰岩及びテイサウナ富岩		
Kg	砾	第四紀	鮮新世		紫蘇輝石普通安山岩溶岩、基底角砾岩互層		
H	砾	第四紀	後中期更新世		紫蘇輝石普通安山岩溶岩からなる		
Iw	砾	第四紀	後中期更新世		房岩、西峰山及び南嶺角砾岩		
In	砾	第四紀	後中期更新世		紫蘇輝石普通安山岩溶岩、基底角砾岩及び強風化岩		
Kg	砾	第四紀	後中期更新世		軽石凝灰岩、灰岩及びテイサウナ富岩		
Kg	砾	第四紀	後中期更新世		紫蘇輝石普通安山岩溶岩、基底角砾岩互層		
Kf	砾	第四紀	後中期更新世		デイサウナ富岩角砾岩		
B1	砾	第四紀	後中期更新世		軽石角砾岩		
Sw	砾	第四紀	中期更新世		紫蘇輝石普通安山岩溶岩及多孔質風化岩		
Aa	砾	第四紀	中期更新世		軽石凝灰岩、灰岩及び漂砾風化岩		
Vc	砾	第四紀	中期更新世		紫蘇輝石普通安山岩溶岩、安山岩風化灰角砾岩及び漂砾風化岩		
○○	砾	第四紀	中期更新世		紫蘇輝石普通安山岩溶岩、安山岩風化灰角砾岩及び漂砾風化岩		
Al	砾	第四紀	中期更新世		軽石凝灰岩、灰岩及び漂砾風化岩		
Ad	砾	第四紀	中期更新世		紫蘇輝石普通安山岩溶岩		
An	砾	第四紀	中期更新世		紫蘇輝石普通安山岩溶岩		
Og	砾	第四紀	中期更新世		紫蘇輝石普通安山岩溶岩		
Hf	砾	第四紀	元新世		紫蘇輝石普通安山岩溶岩		
Hf	砾	第四紀	完新世		二ツ岳・棒名富士帶岩溶岩		
Hm	砾	第四紀	完新世		二ツ岳火成岩		
H4	砾	第四紀	中期更新世		棒名火成岩		
H3	砾	第四紀	中期更新世		棒名火成岩		
.....	砾	第四紀	中期更新世		棒名火成岩		
H2	砾	第四紀	中期更新世		棒名火成岩		
002	砾	第四紀	中期更新世		棒名火成岩		
001	砾	第四紀	中期更新世		小野・火成岩		
Ko2	砾	第四紀	中期更新世		子持火成岩		
Kop + o	砾	第四紀	前中期更新世		管峰・王城火成岩		
Efs	砾	第四紀	前中期更新世		不動山岩体		

岸にも展開する。さらに、この地層には、安山岩の岩脈が入る。また、吾妻川に沿って西側には両岸に新第三紀中期中新世の沢渡層が認められ、軽石凝灰岩・凝灰岩互層、凝灰質泥岩及び凝灰角礫岩で構成されている。また、吾妻川の両岸では、先述したように河岸段丘が形成されており、その詳細については前節で述べている。以上、遺跡地の周り中に火山があり、その噴出物により火成岩

由來の地質が中心となることが分かる。古墳の石室の巨石もすべて粗粒輝石安山岩であり、付近の火山群が形成された火成岩を利用している。



第8図 四戸の古墳群調査区及び周辺地形図

第3章 歴史的環境

第1節 はじめに

四戸の古墳群跡の周辺の歴史的環境について、主に東吾妻町内での遺跡の様相について記す。吾妻地域は道が重要な要素となるので、信濃や越後との交流の基点となる道について概要を記す。次に、旧石器時代～近世までの簡単な流れを記す。その中で、本遺跡で多くの遺構が検出された弥生時代後期から古代の遺跡・遺構については、東吾妻町全域から見て検討し、特に四戸の古墳群近辺の遺構については、詳細に紹介する。

第2節 吾妻地域と古墳時代の道

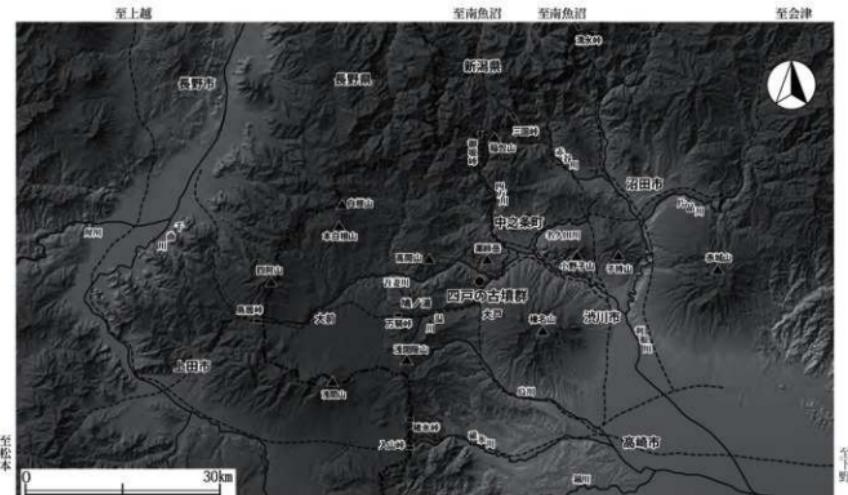
(第9図)

信濃との道 律令期には、信濃と上野との道は東山道が最も有名だが、吾妻川沿いを通るもう一つの道があつた可能性が高い。これは、江戸時代に信州街道と呼ばれた道である。現在の須坂や上田から、烏居峠を越えて吾妻川沿いに東へ向かい、吾妻川が北東方向へ流れを変えた大津あるいは大前付近で、吾妻川を離れ少し南側に向

かった後、東に直進する。万騎峠を越えて鳩ノ湯で温川にぶつかり、温川沿いに東進し大戸に至る。ここから南北に分かれて、信州街道のルートは南下して、上ノ久保で烏川と合流し、烏川沿いに榛名山西南麓を下り高崎に至るものである。

もう一つのルートは、温川沿いに北上し、四戸遺跡・四戸の古墳群に向かうルートである。また、吾妻川の渴水期であれば、深い渓谷が続く吾妻渓谷沿いを通る、真田道とほぼ同じルートでの信濃との往来もあったと思われるが、道の険しさを考慮すれば、主要な道は信州街道であったと考える。四戸遺跡・四戸の古墳群では多くの堅穴建物があり、拠点集落と考えられる。交通の拠点となった可能性が高い。四戸遺跡・四戸の古墳群からさらに東の温川を渡って吾妻川の右岸(南岸)と左岸(北岸)の両方の道を通った可能性が高い。特に左岸の中之条盆地では、段丘面が広く伊勢町遺跡群に認められるような大規模な拠点集落がある。ここから吾妻川沿いに東流し、利根川の合流地点に至り関東平野に出る。

越後との道 越との道は三国峠越えが有名であるが、



第9図 吾妻地域色別標高図及び古墳時代想定道図

古墳時代には、その他に2つの道があった可能性が高い。中之条町を通る四万御坂(稲包御坂・木根宿)峠越えと、みなかみ町を通る清水峠越えである。清水峠越えは上野・越後両方ともに難所であり、最短距離で通れるところから、普段は使用せず危急の場合に使用した道と考えられる。四万御坂峠越えは、中之条盆地から四万川沿いに北上し、稲包山の西側を通って越後に入るルートである。上野側が難所になるが、三国峠にあった三国御坂神社は、四万御坂神社から遷座したとの記録がある。大和王権にとって軍事的・政治的に重要な国境は御坂と呼ばれていたので、御坂は四万御坂峠であった可能性が高い。つまり、古墳時代から古代においては、四万御坂峠越えが主流で、三国御坂峠越えは第二の道であったと考えることもできる。この越後に通じる四万御坂峠越えに至るのに、高崎や信濃から四戸に至り、そこから吾妻川を越えて四万川から四万御坂峠を越えて越後に向かうルートがあった可能性がある。

第3節 歴史的環境の概要(第10～12図)

旧石器時代 本遺跡では、この時期の遺構遺物は確認できなかった。吾妻郡内でも、旧石器時代の調査が高山村所在の新田西沢遺跡があるのみである。

縄文時代 当遺跡では遺構は確認できず、前期前葉から晩期後葉までの土器片が少量ながら出土している。

近年の上信自動車道路建設に伴う調査で多くの縄文時代の遺跡が調査され、今まであまり明らかではなかった縄文時代の様相が分かってきている。

前期の遺跡では、四戸遺跡・新井遺跡・唐堀C遺跡がある。中期の遺跡では郷原遺跡がある。後期の遺跡では郷原遺跡・新井遺跡・上郷岡原遺跡がある。晩期の遺構としては、唐堀遺跡や万木沢B遺跡がある。両遺跡ともに晩期の遺物が大量に出土している注目すべき遺跡である。

弥生時代(第10図) 本遺跡では、弥生時代の竪穴建物が15棟検出された。いずれも弥生時代後期の竪穴建物である。

東吾妻町内では、中期の遺跡の代表的な「岩櫃山式土器」の標式遺跡であり、岩櫃山の高度のある岩陰から再葬墓が発見された岩櫃山鷹の巣遺跡(10)や、同じく再葬墓が最下位部段丘面から検出された前畠遺跡(6)があ

る。他に四戸遺跡(2)では竪穴建物2棟、新井遺跡(10)では土坑が調査されている。後期では、四戸遺跡(2)で17棟の建物が検出され、他に新井遺跡(10)、唐堀B遺跡(7)からも竪穴建物が検出されている。新井遺跡では円形周溝墓が調査された。

四戸の古墳群(1)からの15棟の竪穴建物と、西に隣接する四戸遺跡(2)の17棟の竪穴建物を合せると32棟となり、弥生時代後期の吾妻川中流域では、中之条町の川端・天神遺跡に次ぐ規模の集落である。

古墳時代(第11図) 本遺跡では、古墳時代の5世紀中頃から6世紀後半の竪穴建物が7棟、6世紀後半～7世紀中頃の古墳が3基調査された。居住域と墓域が近接している遺跡である。東吾妻町内を見ると、四戸遺跡(2)から前期から後期にかけての92棟に及ぶ竪穴建物が検出された。4世紀には4棟、5世紀前半に4棟、5世紀後半には13棟と竪穴建物が急増する。6世紀前半にはさらに急増して28棟となり、この時期に四戸の古墳群(1)に古墳が造営されたことと関係がある。6世紀後半には、22棟の竪穴建物があり、前代に引き続いて多数の建物が構築されている。7世紀に入ると7世紀前半は12棟、7世紀後半は10棟がありやや減少傾向にある。この地域でも群を抜く古墳時代の建物数であり、拠点集落である。他にも建物が調査された遺跡はいくつかある。当遺跡の西側吾妻川右岸の唐堀C遺跡(89)、万木沢B遺跡(23)では後期の集落が、当遺跡と温川の対岸にある新井遺跡(11)では、中期～後期の集落が形成されている。ただし、四戸遺跡～四戸の古墳群にかけての前期からの集落、特に後期(6世紀)から終末期(7世紀)にかけての大集落とは歴然とした差がある。この集落に匹敵するのは、中之条町にある、弥生時代から継続している川端・天神遺跡であるが、未報告のため内容があまり明らかではない。吾妻川中流域の河岸段丘において、西の四戸遺跡～四戸の古墳群と、東の伊勢町遺跡群がそれぞれの地域での拠点集落となる。また、調査は行われていないが、後述する原町の古墳数の多さをみると、古墳数に相当する大規模な集落が原町地区にあった可能性を考えている。それぞれの地区は、渋川や沼田から中之条を通り越後に抜ける四万御坂峠に向かう、あるいは、吾妻川から一旦四戸で南下して、大戸から須賀尾経由で、鳥居峠から信濃へ抜ける道の中継地となる箇所にある。

吾妻川左岸の拠点が川端・天神遺跡で、渋川方面から中之条、中之条から吾妻川沿いに四戸まで来て南下して大戸・須賀尾経由で信濃に向かうか、中之条から四万経由で四万御坂峠を越えて越後に入るか、中之条から沼田に抜けて、三国越でやはり越後を目指す際に経由地となるものである。もちろん道なので往來があり、逆方向からの流れもある。

吾妻川右岸の拠点が四戸遺跡・四戸の古墳群で、高崎・安中から榛名山山西麓を抜けて吾妻川に至る地点で、さらに北上して四万御坂峠越に行くルート上有る。他に吾妻川沿いに東から西に、西から東に往来する人々が、吾妻渓谷を避けて南下して、大戸から東西行するルートをとる際に必ず立ち寄る地点である。このように河岸段丘による集落・耕地・古墳の設置・構築に適した場所で、当時の交通の中継地となる場所が拠点集落となったものと推定する。

次に古墳について見てみる。古墳は、東吾妻町全体で204基数えられている(群馬県2017)。遺跡分布図(第10図)で示した範囲を超えるが、東吾妻町の古墳分布の様相を見てみる。西から見ていくが、まず、西北部にある吾妻川両岸を含み温川まで至り、四戸の古墳群(1・49・53～55)が含まれる旧岩島村の古墳(1・8・17・33～55)を見てみる。51基を数え、四戸の古墳群がある三島が38基と圧倒的に多い。三島には四戸の古墳群と生原古墳群(39～41・47・48・50～52)の2つの古墳群がある。さらに、吾妻川を西に廻った唐堀遺跡(8)からは、7世紀前半の横穴式石室の古墳が調査された。調査古墳としては、吾妻川右岸地域では最西端にあたる古墳である。さらに、東の温川を挟んだ対岸の厚田にある新井遺跡(11)では、中期から後期の集落、方形周溝墓4基、古墳3基が調査されている。一辺約27mの方墳は、県内を見てもあまり類例の無い方形墳であり、その位置づけが重要となる。

次に多いのが、吾妻川対岸にある矢倉の7基(36・37・44～46)である。岩島村からは重要な古墳が調査されている。机古墳(34)で、竪穴系石槨を主体部とするもので、このような石槨を持つ古墳としては県内では最北西端に位置する。5世紀後半に比定され、四戸の古墳群IV号墳の無袖横穴式石室導入前の墓制である。中之条町の吾妻川左岸にある、石ノ塔古墳と同じ竪穴系石槨の

主体部を持ち、大刀・鹿角装刀子・斧などを副葬した有力層の5世紀後半の古墳であるが、机古墳には副葬品は全くなく、陪葬的には石ノ塔古墳より下位に位置づけられるものである。しかし、5世紀後半の時期に、吾妻川中流域の西側の左岸でこの時期の古墳を構築したことが吾妻川流域への進出を示す証拠である。さらに脚塚古墳(36)が重要で、四戸の古墳群群大IV・I号墳と同時期と推定される無袖横穴式石室で、5世紀後半の机古墳の竪穴系石槨から無袖横穴式石室の移行が吾妻川左岸で認められた。

旧岩島村の南、榛名山山西麓から吾妻に至る道が通っている村が旧坂上村である。山間部にしては、古墳数が計17基の古墳(25・26)と多く、交通路上にあるからと推定できる。

旧原町は、旧岩島村の東、吾妻川両岸を含み、四万川との合流地点までの範囲である。81基を有する東吾妻町では最多の古墳数を有する。旧原町内で特に多い地区は、吾妻川右岸の川戸で41基(56～71)の古墳を有する。特に下郷71号墳(71)は、無袖横穴式石室で、素環頭大刀、X字形轡など豊富な副葬品を有する古墳で、時期は6世紀前半である。四戸の古墳群群大IV・I号同様、横穴式石室の吾妻地域での初現を示すものとして重要である。対岸の左岸の原町にも36基の多数の古墳(16・78～82)がある。

旧太田村は、分布図(第10図)からは外れるが、原町の東に接する吾妻川右岸の村で37基ある。その最も西側にある岩井で、21基と半分以上を占めている。

旧東村は、旧太田村の東に接する吾妻川右岸の村で、東吾妻町と統合する前は、吾妻郡東村であった。17基と少なく、最も西に位置する新巻に6基ある。

四戸の古墳群(1・49・53～55)では、6世紀前半から古墳が造営され、6世紀後半から継続して7世紀にも古墳が構築されるが、建物の構築数は古墳が出現する6世紀前半に一番多く、古墳構築が継続される、6世紀後半から7世紀にかけてやや減少するも一定程度の棟数を維持している。古墳構築の背景となる集落として位置付けられるものであることを示している。古墳群は、吾妻川、温川の河岸段丘上に23基の古墳を数えている。さらに南側の温川の河岸段丘上には生原古墳群が11基あり、総数34基が構築されている。吾妻地区では最大級の群集

墳である。古墳の内容を見ると、すべて横穴式石室の可能性が高く、群馬大学が調査した群大IV・1号墳は6世紀前半に比定されており(杉山2020)、初現期の横穴式石室である。埴輪を有する事業団調査の1号墳が6世紀後半、埴輪を持たず、棺釘が出土した7世紀前半～中頃の2・3号墳を合せて考えると、6世紀前半～7世紀中頃にかけての、後期群集墳であることは間違いないだろう。そのことは、岩島村誌などからうかがえる四戸・生原古墳群の古墳に対する詳細な地元の農家他からの聞き取りで、埴輪・金環・勾玉・ガラス玉・直刀・馬具などが出土したことから想定される年代観と整合する。生原古墳群も今までに得ている情報からすれば四戸の古墳群と同様の古墳群で、基本的に6～7世紀の横穴式石室を持つ古墳であることは間違いない。

以上述べてきた、旧5町村からなる、東吾妻町全体の古墳の様相を再度まとめてみる。西から見していくと、四戸古墳群を含む旧岩島村では51基、南の旧坂上村で17基、温川を境に旧岩島村と東に接する旧原町で81基、さらに東の旧太田村で37基、東の旧東村で17基である。最も古墳数が多いのが旧原町で、吾妻川の左岸(北岸)の原町で36基、右岸(南岸)の川戸で41基と、吾妻川の両岸で東吾妻町最多の古墳群集である。それに続くのが、四戸の古墳群23基と生原古墳群11基の計34基である。以上の状況を全体的に見てみると、東吾妻町の西側の地区の古墳数が多く、東側の榛名山北麓に位置する旧太田村・旧東村へと向かうにつれて減少するのが分る。特に旧東村に数が17基と少ないことは、Hr-FA・FPに伴う火碎流・軽石降下によりこの地域がかなりの打撃を受けていたことを示している。古墳数の多い、旧原町、旧岩島村は、吾妻川、四万川、温川の河岸段丘面が形成されていることで、集落及び耕地の立地として利用可能で、その結果が古墳の構築に結びつくものである。

また、今まで確認できなかった生産遺構が、初めて検出された。温川を挟んで東岸の約1km先に位置する厚田中村遺跡である。榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)が6世紀初頭に降下した火山灰に覆われた極小区域水田が検出された。弥生時代後期の压痕同定から、稻作が中心に行われていたことは明らかだが、水田耕作が遺構から証明ができる貴重な資料である。

古代(奈良・平安時代)(第12図)律令制下、群馬県(上)

野国)には14の郡が置かれていた。四戸の古墳群は吾妻郡の中に入る。吾妻郡はさらに長田、伊夢、太田の3郷があつたと推定されている。

本遺跡では、集石遺構が8基検出された。うち4号集石遺構よりは、人骨細片が出土しており、墓であった可能性がある。すぐ西にある四戸遺跡からは、7世紀後半から10世紀前半まで多数の竪穴建物と掘立柱建物が調査された。四戸遺跡の状況を見ると、8世紀前半には15棟検出され、7世紀後半の10棟と比べると増加している。8世紀後半には9棟、9世紀前半には1棟、9世紀後半には14棟あり、稀少な奈良三彩を出土した51号竪穴建物もこの時期に入る。10世紀には5棟のみとなり、建物の構築は途絶える。4世紀から途切れることなく集落が形成され、古代に入ると、8世紀前半と、9世紀後半に建物が急増するという変遷をたどる。古墳時代から引き続いてこの地域での拠点集落であることが分かる。万木沢川を挟んで西側の万木沢B遺跡、唐堀C遺跡(89)、根小屋遺跡(88)からも平安時代の集落が検出されている。また、当遺跡より東側、温川を挟んだ東岸の新井遺跡(11)では平安時代の竪穴建物が検出された。さらに東側の約5km離れた地点にある金井廃寺(92)は、群馬県内で4ヶ寺しかない白鳳期の寺院である。他の3ヶ寺は、前橋市の山王廃寺、伊勢崎市の上植木廃寺、太田市の寺井廃寺である。このような稀少な白鳳期寺院が金井にあることは、初期寺院の建立可能が可能な豪族・集團がこの地にいたことを示している。

古墳時代から古代への移行期である7世紀後半に吾妻地域では大きな動きがある。先述した金井廃寺が建立されたことが一番大きな動きであるが、さらに7世紀後半から掘立柱建物群が吾妻川両岸に構築されている。

まず吾妻川右岸であるが、金井廃寺から1.2km南西の下郷古墳群(71)で、7世紀後半から8世紀初頭を中心とした複数の掘立柱建物と壇・門が発見された。また、中之条盆地の東南部、金井廃寺から3～4km東にある同じく吾妻川右岸の小泉宮戸遺跡・小泉天神遺跡でも7世紀後半から8世紀の掘立柱建物が複数発見されている。特に、下郷古墳群の地は厚田にある太田神社などから、大田郷に想定されている地でもあり、金井廃寺の存在と併せて郡家や大田郷の施設である可能性がある。

対岸の吾妻川左岸には、中之条駅南の川端・天神遺跡

がある。川端遺跡では、古墳時代～古代にかけて、方形区画の石垣遺構が調査され、天神遺跡では複数の掘立柱建物とともに奈良三彩や銅印も出土している。豪族居館あるいは官衙関連遺構と推定される。両遺跡は、伊豫郷と推定される地域にあり、「上野国交替実録帳」に記載されている郡家の外に設置された伊豫郷関連の施設である伊院院の可能性がある。このように、郡家あるいは郷に関わる施設の可能性がある遺構が中之条盆地の両岸にある。古墳の分布は、吾妻川の両岸にまたがる、旧原町に最も多く81基あり、吾妻川右岸の川戸に41基、左岸の原町に36基の古墳がある。川戸には先述したように下郷古墳群から掘立柱建物群が発見されており、金井廃寺を対岸に臨む吾妻川左岸、四万川右岸台地上にある原町には大宮巖鼓社(93)がある。祓手刀を伝製品として保管しており、郡家に比定されたこともあった。ただし、遺構としては、該当するものは神社付近ではほとんど発見されていないので検討が必要であろう。6～7世紀の古墳が、川戸と原町に濃密に分布するところから、その後の7世紀後半の展開が想定され、郡家があった地点の候補の一つとなろう。また、川端・天神遺跡周辺は市街地ゆえに開発が進み古墳数は少ないが、掘立柱建物群や方形の石垣遺構の発見や地名から先述したように伊院院と想定されている。以上、中之条盆地周辺地域は7世紀後半以後の金井廃寺と掘立柱建物群が集中する場所であり、郷や郡家に関連する施設が発見されている重要な地域である。

生産遺構は、畠・水田が調査されている。四戸遺跡でも、As-Bがブロック状に多量に混在して畝間を埋めている状況で畠が出土した。また火山灰下から小規模水田を検出している。西側の万木沢川の対岸に位置する万木沢B遺跡では、天仁元年(1108年)に降下した浅間B軽石(As-B)の直上に畠、元治三年(1128年)に降下した浅間-柏川テフラ(As-kk)の直上と直下に畠を検出している。さらに西側の唐堀C遺跡(89)では、As-Bで埋没した畠が検出されている。遺跡の東を流れる温川の対岸にある厚田中村遺跡では、As-Bにより埋没した水田が調査されている。以上述べた水田・畠は、平安時代の集落が廢棄された後に、生産域に替えたことが分かっている。

馬の生産地としての牧が、「延喜式」記載の市代牧が、JR市城駅付近で比定されていて牧の可能性は高い。

鉄生産関連の遺構は、吾妻川左岸の諏訪前遺跡(17)で平安時代前期の鍛冶炉が発見された。地図から外れるが、吾妻川右岸の中之条盆地東南部の小泉宮戸遺跡でも平安期の製鉄遺跡が発見されており、鉄生産が平安時代に行われたことを示している。畠・田でのイネ他の農作物生産以外に鉄・馬の生産を行っていたことが分かる。

中近世 本遺跡では、中近世の遺構は数少なく、当遺跡でも大治3(1128年)に降下した浅間-柏川テフラ(As-kk)が鋤き込まれた中世の畠が4面検出されている。また、中世の六文銭が副葬された土坑墓が2基確認されているのみである。

12世紀末頃に秀郷流藤原氏である吾妻氏(前吾妻氏)が勢力を延ばす。承久3(1221年)に起こった承久の乱において吾妻助光が戦死して前吾妻氏は滅亡する。嘉禎年間(1235～38年)に秀郷流藤原氏を称する吾妻(下河辺)行家が鎌倉幕府より吾妻郡を賜り、後吾妻氏と称される。貞和5(1349年)吾妻行家が里見義侯との争いで死亡し、後吾妻氏が滅亡したとの伝承がある。

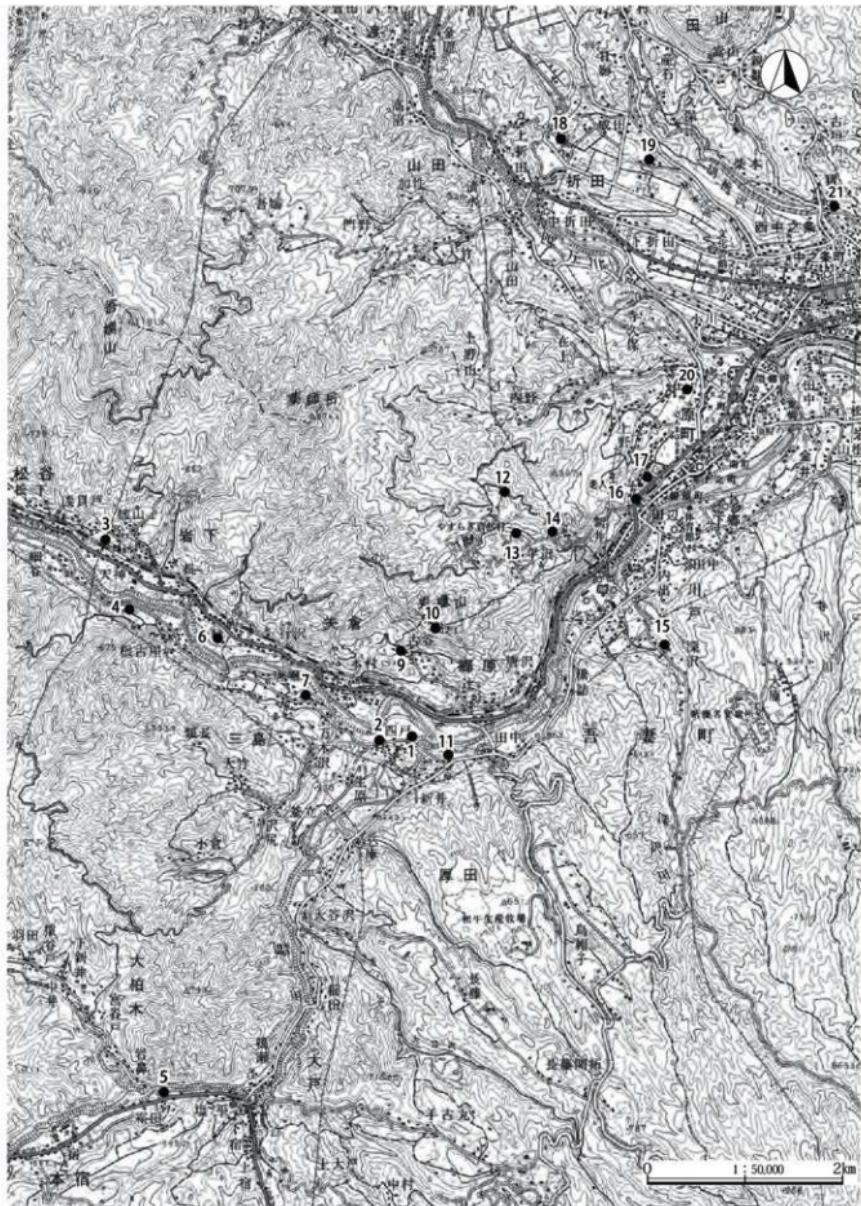
14世紀末、秀郷流藤原氏の齊藤氏が台頭してくる。16世紀前半には温川上流の手子丸城(大手城)に拠った大戸氏が台頭し、西3kmに位置する根小屋城に入る。発掘調査で、竪穴状遺構、土坑などが検出された。

永禄6(1563年)に、武田信玄の上野国西部への侵攻で、大戸氏は武田氏に従属し、武田氏武将の真田幸隆により岩下城が落城して、岩櫃城が武田氏の居城となり、吾妻郡城は武田氏の支配下となる。岩櫃城は、天正10(1582)年の武田氏滅亡後に独立し真田氏の支配下となる。

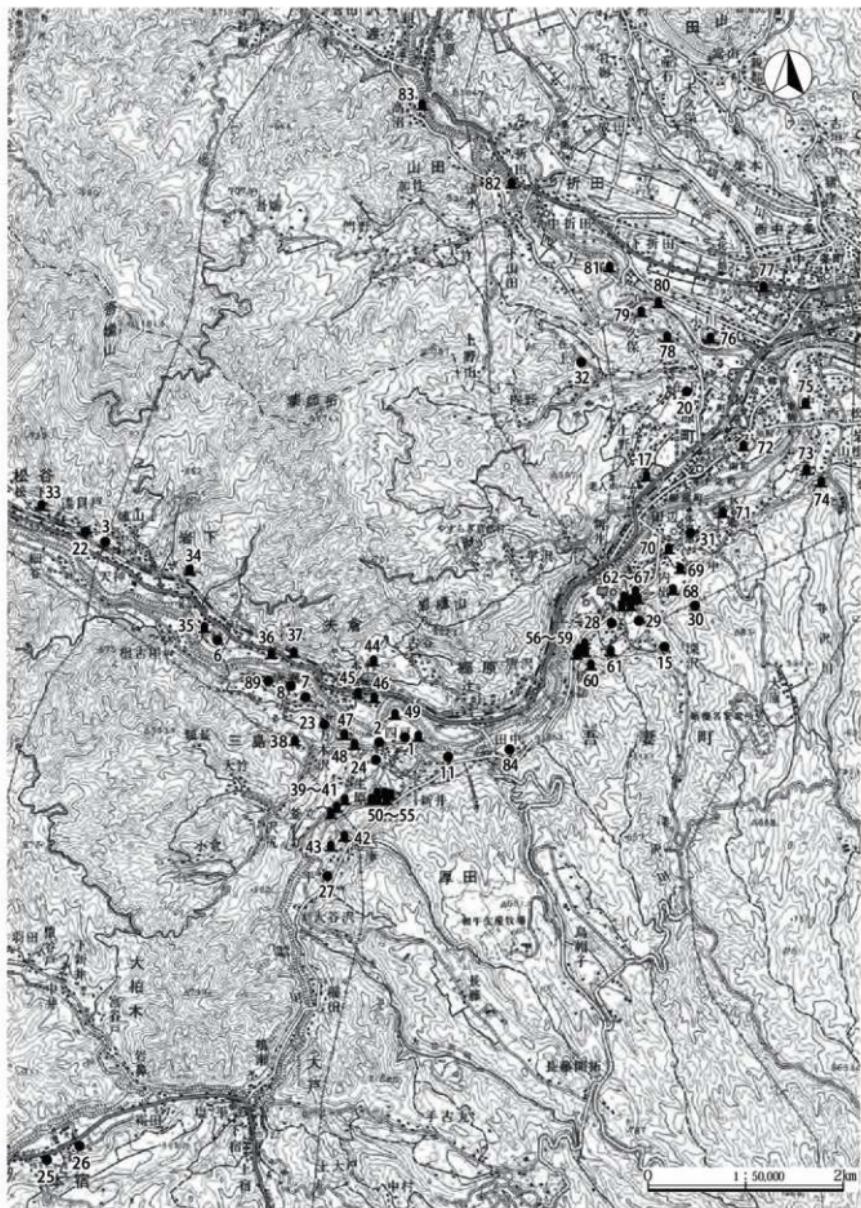
江戸時代になっても、本遺跡のある三島村は引き続き真田氏の支配下にあった。元和元(1615年)に一国一城令が江戸幕府より発せられて岩櫃城は破却された。

天和2(1682年)に天領となり、文政7(1824年)には御三卿清水徳川家の支配下となった。天明3(1783年)に浅間山の大噴火が起り、浅間A軽石(As-A)が降下し、噴火に伴い発生した大泥流により長野原町を中心に1,500人前後が亡くなり、流出家屋は1,000戸を優に超えている。安政2(1855年)には再度天領となって、まもなく明治維新に至るのである。

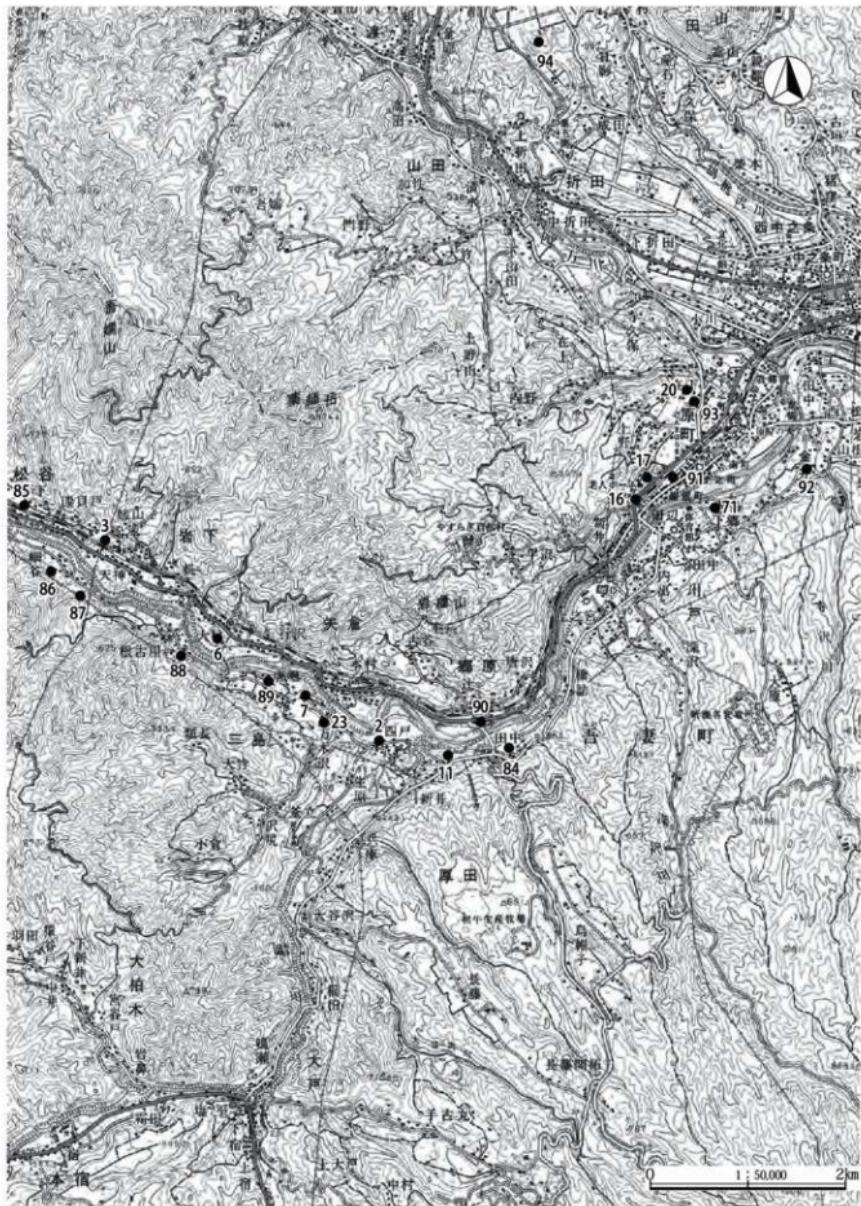
中・近世の遺構を検出した遺跡は、西から細谷E遺跡、根小屋城跡、根小屋B遺跡、根小屋遺跡、唐堀C遺跡、唐堀遺跡、唐堀B遺跡があり、万木沢川を西に渡ると、



第10図 四戸の古墳群周辺弥生時代遺跡分布図



第11図 四戸の古墳群周辺古墳時代遺跡分布図



第12図 四戸の古墳群周辺古代道路分布図

第3章 歴史的環境

第2表 周辺遺跡一覧表

遺跡名	所在地	弥生	古墳	古代	種別	古墳状況	調査歴・備考
1 四戸の古墳群	東吾妻町三島77他	○	○		集落・古墳	○×	本遺跡
2 四戸遺跡	東吾妻町三島	○	○	○	集落		平成25~28・30年調査(理文事業団)
3 天神遺跡	東吾妻町岩下天神873他	○	○	○	散布地		
4 畦谷E遺跡	東吾妻町三島畠谷	○			散布地		平成28年調査(理文事業団)
5 下田遺跡	東吾妻町大字150-1	○			散布地		平成14~17年試掘(吾妻町教育委員会)
6 前畑遺跡	東吾妻町岩下7	○	○	○	散布地、集落、他		昭和62年調査(吾妻町教育委員会)
7 唐坂B遺跡	東吾妻町三島唐坂	○	○		集落		平成26~27年調査(理文事業団)
8 唐坂遺跡	東吾妻町三島唐坂	○					平成27~30年調査(理文事業団)
9 古谷遺跡	東吾妻町郷原古谷	○			散布地		
10 岩棚山廃の里	東吾妻町原町岩棚山	○			墓、その他		弥生時代の墓址(明治大学)
11 新井遺跡	東吾妻町原町新井646他	○	○	○	集落		平成26~28・30年調査(理文事業団)
12 船穴六遺跡	東吾妻町原町船廻山	○			墓、その他		
13 念佐塚遺跡	東吾妻町原町念佐塚1768	○			集落		平成3・4年調査(吾妻町教育委員会)
14 道心穴遺跡	東吾妻町原町1459	○			散布地		
15 玉科遺跡	東吾妻町川戸1602-1	○	○		散布地、古墳	△×	古墳疑観 原町42~51
16 善道寺前遺跡	東吾妻町原町1091-1	○	○		散布地、墓、他		平成7年調査(吾妻町教育委員会)
17 調防前遺跡	東吾妻町原町1018-1	○	○	○	集落、古墳、竪穴、他		平成6・7年調査(吾妻町教育委員会)
18 成田遺跡	中之条町折田成田原2344	○			集落		遺跡台帳3062
19 成田原千貫遺跡	中之条町折田千貫2859	○			散布地		遺跡台帳3066
20 東上野遺跡	東吾妻町原町上野2661-1他	○	○	○	散布地、集落		
21 法満寺遺跡	中之条町中之条法満寺2368	○			散布地		遺跡台帳3076
22 渋貝戸遺跡	東吾妻町岩下渋貝戸1172他	○			散布地		
23 万木沢B遺跡	東吾妻町三島3324	○	○		散布地		万木沢B遺跡平成29年調査(理文事業団)
24 畦遺跡	東吾妻町三島947/388	○			散布地		
25 宿遺跡	東吾妻町本宿宿524他	○			集落		平成3年試掘(吾妻町教育委員会)
26 下宿遺跡	東吾妻町本宿364-1	○			散布地		
27 平道跡	東吾妻町大字1361-1	○			散布地		
28 上ノ宮遺跡	東吾妻町川戸上ノ宮	○			散布地		
29 深沢遺跡	東吾妻町川戸深沢	○			集落		
30 水上遺跡	東吾妻町川戸水上	○			集落		
31 下郷A遺跡	東吾妻町川戸下郷284	○			散布地		
32 上須郷遺跡	東吾妻町原町上須郷3295-1	○			集落		平成2年(吾妻町教育委員会)
33 富士塚古墳	東吾妻町岩下松原谷1171	○			古墳	△	岩島村8
34 机古墳	東吾妻町岩下机1675-1	○			古墳	×	豊穴系(石櫛)
35 脚塚古墳	東吾妻町岩下脚塚	○			古墳	△	岩島村7
36 脚塚古墳	東吾妻町矢倉谷46	○			古墳	△	岩島村6袖無型横穴式石室
37 無名古墳	東吾妻町矢倉中矢倉甲413	○			古墳	×	岩島村5横穴式石室
38 牛塚古墳	東吾妻町三島船古墳436	○			古墳	△	岩島村11
39 生原遺跡	東吾妻町三島生原620	○			古墳		
40 石村下古墳	東吾妻町三島生原620	○			古墳		
41 上古墳	東吾妻町三島生原580-1	○			古墳	-	古墳疑観 岩島村43
42 無名古墳	東吾妻町厚田兵庫11	○			古墳	-	岩島村45
43 無名古墳	東吾妻町厚田兵庫甲121-4	○			古墳	-	岩島村44袖無型横穴式石室
44 のお塚古墳	東吾妻町矢倉舟ノ脇	○			古墳	△	岩島村7
45 岩島4号墳	東吾妻町矢倉舟本村	○			古墳	△	円墳径17m横穴式石室
46 ボタン古墳	東吾妻町矢倉舟ノ前	○			古墳	△	岩島村3
47 無名古墳	東吾妻町三島生原805	○			古墳	△	岩島村32円墳横穴式石室
48 無名古墳	東吾妻町三島生原805	○			古墳	△	岩島村33円墳横穴式石室
49 ジュウコ塚古墳	東吾妻町三島四丁141	○			古墳	△	岩島村25円墳
50 無名古墳	東吾妻町三島生原435	○			古墳	×	岩島村36
51 無名古墳	東吾妻町三島生原485	○			古墳	△	岩島村37横穴式石室
52 無名古墳	東吾妻町三島生原488-2	○			古墳	△	岩島村38円墳
53 無名古墳	東吾妻町三島四丁511	○			古墳	△	岩島村39円墳
54 無名古墳	東吾妻町三島四丁510	○			古墳	△	岩島村40
55 無名古墳	東吾妻町三島生原509	○			古墳	△	岩島村41
56 緑塚:原町32号墳	(吾妻郡原町大字川戸字椿原1342)	○			古墳	△	円墳径14.4m
57 緑塚:原町33号墳	(吾妻郡原町大字川戸字椿原1341)	○			古墳	△	円墳径18m
58 緑塚:原町34号墳	(吾妻郡原町大字川戸字椿原1339ノ1)	○			古墳	-	円墳径12m

No.	遺跡名	所在地	弥生	古墳	古代	種別	古墳状況	調査歴・備考
59	鶴覧：原町35号墳	(呉妻郡原町大字川戸字椿原1339ノ1)	○	古墳		—	円墳径12.6m	
60	鶴覧：原町77号墳	(呉妻郡原町大字原町字新井1355)	○	古墳		—	円墳	
61	鶴覧：原町41号墳	(呉妻郡原町大字川戸字園邊1631)	○	古墳		△		
62	鶴覧：原町29号墳	(呉妻郡原町大字川戸)	○	古墳		△	円墳径18m	
63	鶴覧：原町30号墳	(呉妻郡原町大字川戸字宮前1462)	○	古墳		△	円墳径11.1m	
64	鶴覧：原町40号墳	(呉妻郡原町大字川戸字園邊1616)	○	古墳		△	円墳径16.2m	
65	鶴覧：原町52号墳	(呉妻郡原町大字川戸字蟹川51甲ノ2)	○	古墳		×	円墳	
66	鶴覧：原町53号墳	(呉妻郡原町大字川戸字上ノ谷)1526)	○	古墳		○	円墳径10.8m	
67	鶴覧：原町58号墳	(呉妻郡原町大字川戸字宮原1048ノ2)	○	古墳		△×	円墳径9.9m	
68	鶴覧：原町59号墳	(呉妻郡原町大字川戸字南谷上800乙)	○	古墳		×	円墳	
69	鶴覧：原町60号墳	(呉妻郡原町大字川戸字田中521)	○	古墳		△	円墳	
70	鶴覧：原町61号墳	(呉妻郡原町大字川戸字田中441)	○	古墳		△	円墳	
71	下郷古墳群	東吾妻町川戸甲271	○	○	古墳、掘立柱建物、他	○△-	古墳範囲 原町62～69 平成24・25調査(理文事業団)	
72	原町下ノ町古墳群	東吾妻町原町460	○	古墳		△-×	古墳範囲 原町1～16	
73	金井古墳群原町75号墳	東吾妻町金井市敷481	○	古墳		△	原町75横穴式石室	
74	岩井寺沢古墳	東吾妻町岩井寺沢庚1693	○	古墳		△	古墳範囲 太田村17丁目(こく塚古墳)	
75	岩井西古墳	東吾妻町岩井西135	○	古墳		△	古墳範囲 太田村1～14	
76	小川古墳	中之条町小川362	○	古墳		×-	古墳範囲 中之条町25～28・31～34町指定史跡(昭和63年3月26日指定)	
77	永田原遺跡	中之条町西中之条永田原119	○	古墳		—	遺跡台帳3078 古墳範囲 中之条町38号墳径12.9m	
78	鶴覧：原町24号墳	(呉妻郡原町大字原町字八幡原2931)	○	古墳		△	円墳	
79	鶴覧：原町25号墳	(呉妻郡原町大字原町字寺久保3046)	○	古墳		△	円墳径10.8m	
80	鶴覧：原町26号墳	(呉妻郡原町大字原町字樺下3031ノ乙)	○	古墳		△	円墳	
81	山田勝負瀬古墳群	中之条町山田19-3	○	古墳		○△×	古墳範囲 澄田村1～4 町指定史跡(苗吹塚昭和63年3月26日指定)	
82	鶴覧：澄田村6号墳	(呉妻郡澄田村大字山田字清水2290ノ1)	○	古墳		×		
83	鶴覧：澄田村7号墳	(呉妻郡澄田村大字山田字高沼甲226)	○	古墳		×		
84	厚田中村遺跡	東吾妻町厚田中村	○	水田、畠			平成25・26・28年調査(理文事業団)	
85	松谷松下遺跡	東吾妻町松谷109他	○	集落			令和元年調査(理文事業団)	
86	細谷B遺跡	東吾妻町三島細谷5542	○	散布地				
87	細谷C遺跡	東吾妻町三島細谷5092他	○	散布地				
88	根古屋遺跡	東吾妻町三島根古屋	○	その他、不明			根古屋遺跡・根古屋B遺跡 平成28年調査(理文事業団)	
89	唐堀C遺跡	東吾妻町三島唐堀	○	○	集落、その他		平成28・30年調査(理文事業団)	
90	郷原遺跡	東吾妻町郷原592-1	○	散布地、他			昭和59年・平成6年調査(吾妻町教育委員会)	
91	原町駅遺跡	東吾妻町原町上之町	○	散布地				
92	金井庵寺跡	東吾妻町金井472-1	○	社寺			町指定史跡(昭和47年3月1日指定)	
93	大宮巣鼓神社	東吾妻町原町811	○				昭和53年調査(吾妻町教育委員会)	
94	震原遺跡	中之条町五反田4373-1	○	散布地、他			平成17年立会調査(中之条町教育委員会)	

さらに四戸遺跡、四戸の古墳群がある。さらに温川を渡ると、新井遺跡、厚田中村遺跡がある。これらの遺跡のうち、温川より西の遺跡は河岸段丘の最下位段丘の伊勢町1面に載り、温川を渡った遺跡は、すぐ上の面の中之条面に載っていると推定されている。

天明泥流により埋没した生産遺跡である畑や田畠が検出された遺跡は、西から唐堀遺跡、新井遺跡、厚田中村遺跡がある。

第4章 基本土層と地形確認トレンチ

第1節 基本土層(5区・6区) (第13図)

基本土層は、西側の5区と東側の6区では、河岸段丘の高さが異なり、5区に比べ、6区は約5mの比高差で低くなる。いずれの地区でも、大治3(1128)年に降下した浅間一粕川テフラ(As-Kk)が確認でき、一部では天仁元(1108)年に降下した浅間B軽石(As-B)が確認できた。

土層は、1層が表土層で、2層は黒く汚れたAs-Kkを多量に含んだ地層である。3層は黒褐色土で、畑の歴として造成されている。4層はAs-Kkである。5層の黒褐色土は、古代の遺物包含層である。5層の下6層中から、弥生時代の遺構と古墳時代の遺構が検出されている。それぞれの時代の遺構は、7～9層のローム土に礫を多く含む層を掘り抜いて構築されている。そのため、竪穴建物の床面は、特に9層土の礫が多量に混じる明黄褐色土を床面とするものが多いので凹凸が激しく、それを解消するために土を入れて平坦化しているものが多い。

1層 暗褐色土(10YR3/4) 現在の耕作土、表土である

2層 黒褐色土(2.5Y3/2) 黒く汚れたAs-Kkを多量に含む。橙色土粒少量含む。小礫少量含む。As-Kkが耕作により攪拌されたものと推定する。近世の遺構が検出される面である。

3層 黒褐色土(2.5Y3/1) 古代から中世にかけての包含層と考えられる。

4層 As-Kk 軽石が上部に、火山灰が下部に検出される場合が多い堆積している。

5層 黒褐色土(2.5Y3/2) 古代の遺物包含層。畠の歴が構築される。

6層 黒褐色土(2.5Y3/2) 繩文時代～古墳時代の包含層。この地層から掘り込まれている。

7層 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム粒含む。礫少量含む。弥生～古墳時代の遺構により掘りこまれる。

8層 黄褐色ローム土(2.5Y5/4) 矸少量含む。弥生～古墳時代の遺構により掘り込まれる。

9層 明黄褐色砂質ローム土(2.5Y7/6) 矸多く含む。弥生～古墳時代の遺構により掘り込まれる。

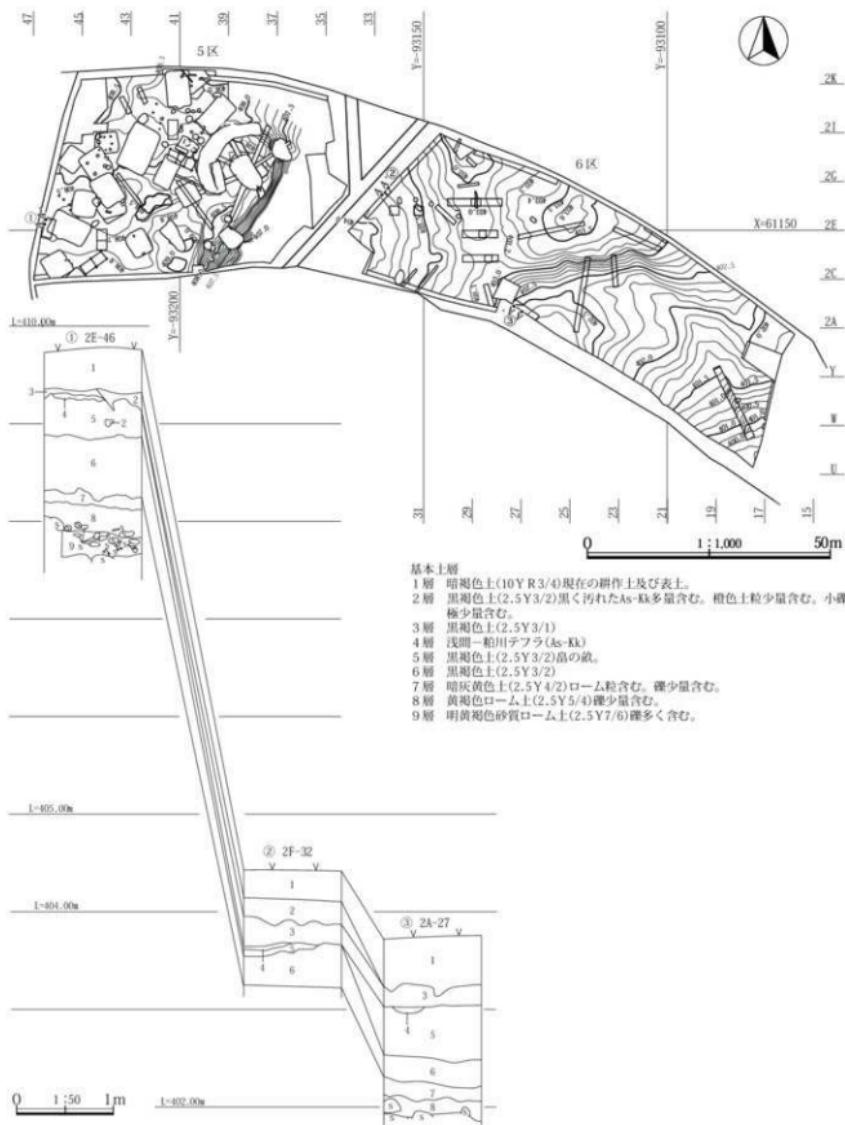
第2節 地形確認トレンチと6区の

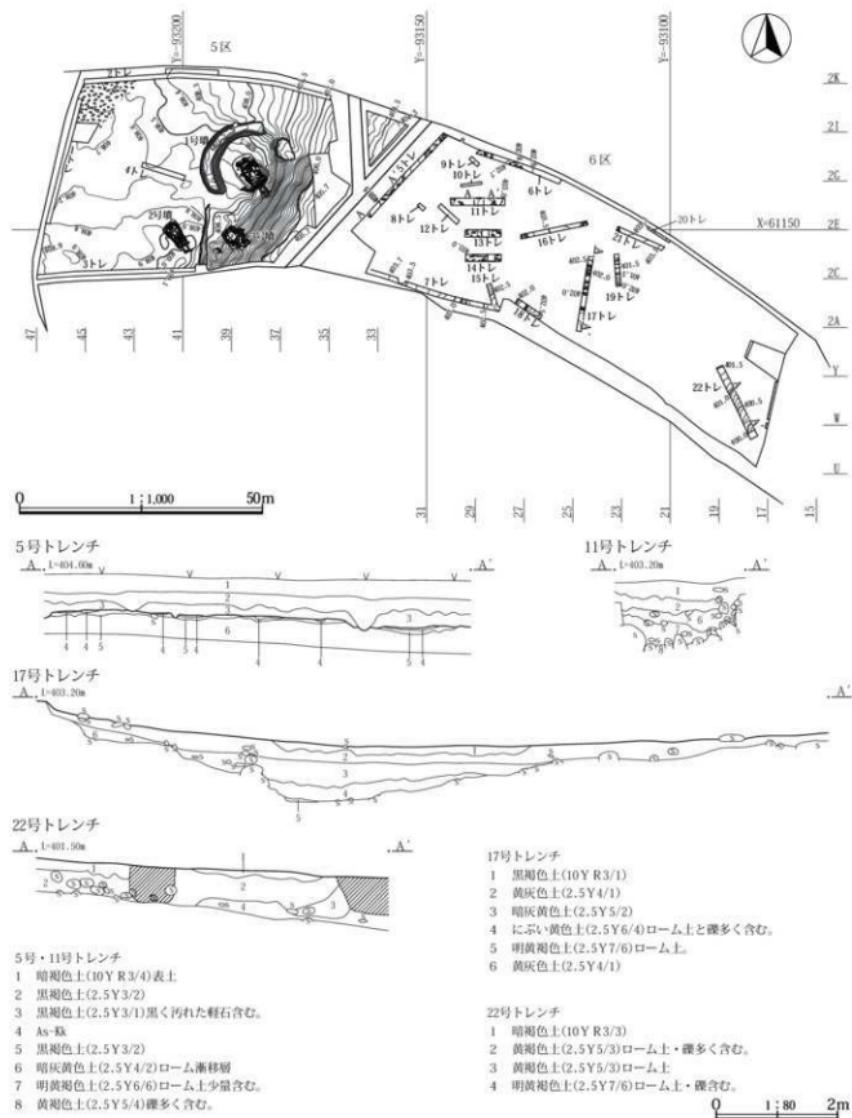
様相(第14図)

主に6区において、地形の確認をするためのトレンチを複数本設定した。代表的な5・11・17・22トレンチについて見てみる。

5トレンチは、6区最西端部に南北方向に設定したトレンチで、As-Kkが明瞭に確認できた。やや東に位置する東西方向に設定した11トレンチを見ると、As-Kkの層は確認できないが、ローム漸移帯から礫層に至るのが分かる。6区中央部に南北方向に設定された17トレンチから、東西方向に窪地があったことが分かる。さらに6区最東端の22号トレンチからは、ローム漸移帯とその下の礫層が確認できている。6区では、ローム漸移及び礫層がかなり上位から出てきており、生活面として地形的には良いところでは無い。そのことは、6区での最西端の弥生時代後期の1号竪穴建物以外は、建物の確認がされていないことが示している。

上層から遺構を見ていくと、中世には、土壙墓が2基確認されていること、さらにAs-Kkに関係する畠が4面検出されており、時期の比定は難しいが、中世の段階と推定する時期にこの6区が畠に利用されていたことなどから、中近世にいくらかの土地利用があったことは言える。さらに、古代には、土器を伴う墓かと想定される集石が数基確認されるのみである。以上の様相を見ると、基本的に、この6区は人が住むのに適地では無かったことが言える。





第14図 地形確認トレンチ設定図・土層断面図

第5章 発見された遺構と遺物

第1節 旧石器時代

5・6区の両方で各2ヶ所の計4ヶ所で調査区を設定し遺構・遺物確認調査を行った。(第15図)



第15図 旧石器時代遺構・遺物確認調査トレンチ設定図・土層断面図

第2節 繩文時代

はじめに

縄文時代の遺構は確認されなかったが、縄文時代の遺物(土器・石器)が包含層から出土している。それらの遺物、特に土器について各時期の土器型式ごとに出土数と重量を統計処理した結果に基づいた、縄文時代の動向について概要を記すことにする。初めに、時期ごとの土器の出土度数分布図から見た時期ごとの出土分布状況概要を述べた後に、土器型式ごとの点数・重量から見た様相を述べる。

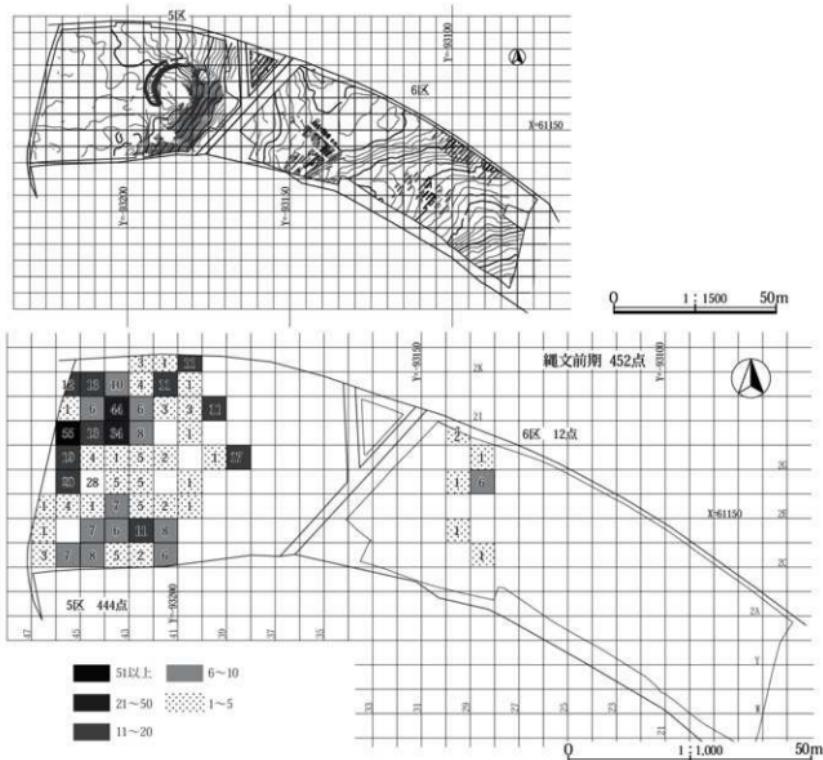
各時期の状況(第3表、第16～21図 PL.86～89)

5・6区ともに縄文土器が出土しているが、前期には5区に土器集中(第16図)があり、晚期には6区に土器集

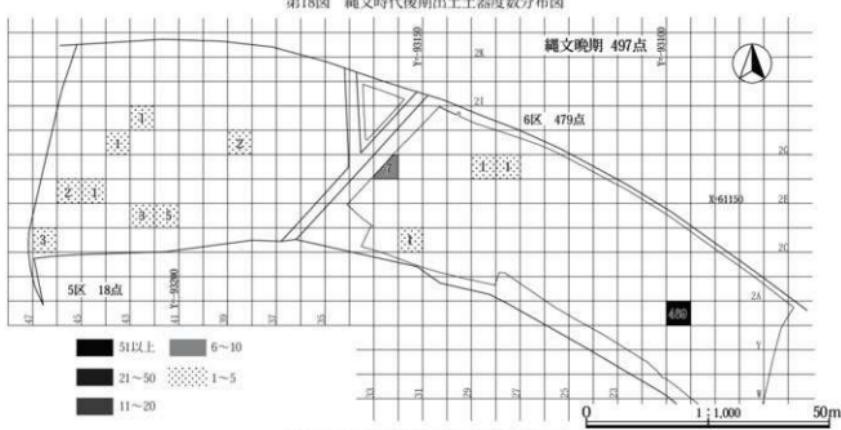
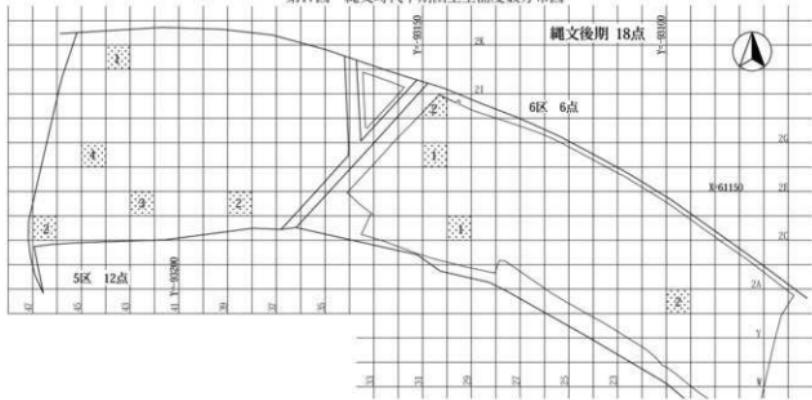
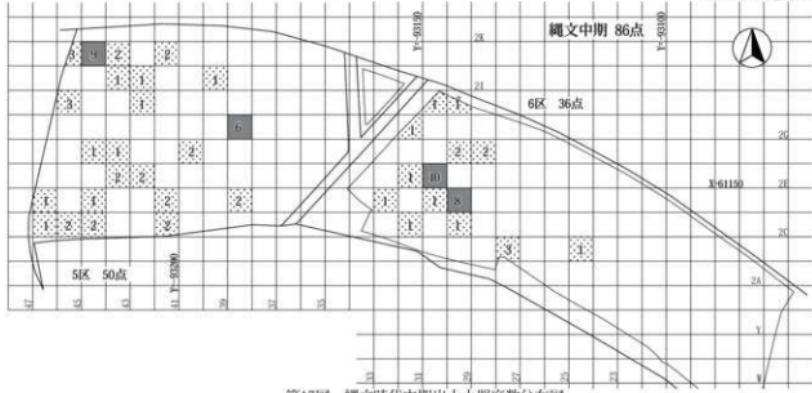
中がある(第19図)ことで、縄文時代全体でみるとそれぞれの地区的出土総点数は5区が524点、6区が533点とほぼ同じである。次に、グリッド単位での土器の出土点数の度数分布図を第16～18図に示す。以下、この時期ごとの度数分布図について解説する。

前期(第16図)は、全体で452点の土器があり、5・6区ともに分布するが、5区の444点に対し、6区は12点と極端に少ない。5区では、特に西北部の2H45Gで55点と最多の出土を見る。このグリッドを中心にして5区西北部全体に土器が集中して出土する。6区では西側に土器が出土する。

中期(第17図)は、全体で86点の出土で前期に比べると5分の1になる。5区50点、6区は36点と5・6区ともにほぼ同じ出土量である。5区では西側の段丘上の全体



第16図 四戸の古墳群調査区全体図・縄文時代前期出土土器度数分布図



第5章 発見された遺構と遺物

出土し、6区では西部を中心に出土している。

後期(第18図)は、全体で18点の出土しかなく、5区で12点、6区で6点の出土である。いずれの地区からも少ない。

晩期(第19図)は、全体で497点の出土があり、特に6区のZ20Gから469点の出土を見ているのが特徴である。遺物集中がこの地点にあったことを示している。他は、5区の西南部を中心に18点、6区の西側に8点ほど出土したのみで、先ほどの450点以上の土器が出土した地点が突出している。

以上、縄文時代は、前期に盛期を迎えると、中期から後期にかけて衰退し、晩期に盛り返すという大まかな動きがある。

以上の結果を、遺跡地全体で出土土器の点数及び重量を時期別で比較したものが第3表と第20図である。前期は出土土器点数で見ると36.2%で、晩期は37.0%で、ほぼ同じ3割6分強の比率を示している。それに対して、中期は7.6%、後期は1.5%と極めて低い数値で特に後期は1%台である。出土土器の重量の比較でも、前期が44.9%に対して、晩期は21.7%と低いが、土器の厚みからすると前期の土器は晩期の土器に対して約2倍の重みがあり、ほぼ同じ比率と考えて良い。中期と後期はそれぞれ、18.8%と3.7%と共に低く、特に後期が極めて低いのが分る。このように時期別に見た場合、前期と晩期に盛行し、中期と特に後期に衰退することがデータから分る。

土器型式ごとの状況(第3・4表、第20～27図)

次に土器型式ごとに点数と重量から見た変化を示す。時期的に古い土器型式から記述する。前期の初頭にあたる時期の土器型式である花積下層式(第22図-1～7)が10点(269g)ある。数は少ないながらこの地に生活を始めた痕跡と言えよう。後続の関山式の初現型式ともされる、二ツ木式(第22図-8～18)が、やや点数を増やして33点(318g)ある。次の前期前半の関山I式(第22図-19～28、第23図-29～34)は、20点であるが、重量が多く795gもあり、この時期に土器がやや多くなることを示している。次の関山II式、有尾式(第23図-35～41)は点数・重量ともにあまり多くない。その後の黒浜式(第23図-42～59)の点数が277点、重量が3,949gと非常に多く、前期での盛期である。諸磯式(第24図-60～69)に入ると、a b c式のうち、a・c式が点数・重量ともに非常に少

ないのに比べ、b式の点数が73点と多く、重量も987gある。前期末葉の一組(第24図-70～78)は48点、730gとまた数量・重量ともに多くなる。前期は全体の中での比率を見ると、点数では晩期に次いで36.2%、重量での比率は、時期別トップの44.9%を呈する(第3表・第20図)。前期に晩期とともにこの遺跡地の人々が生活していた比率が高いと想定する。

中期に入ると、初頭の五領ヶ台2式(第24図-79～87)と次の勝坂I・2式(第25図-88～93)は、それぞれ24点550g、12点349gと多めである。阿玉台I式が極端に減少し、阿玉台II式(第25図-94～97)が重量で790gと増加している。加曾利式(第25図-98・99)は、E2、E3、E4ともに点数、重量ともに少なく、形式不明の中期中葉から後半(第25図-100)の土器の点数、重量をみても前期よりは全体的に少なく、全体の中で点数で7.6%、重量で18.3%である(第3表・第20図)。前期・晩期に次いでの比率である。

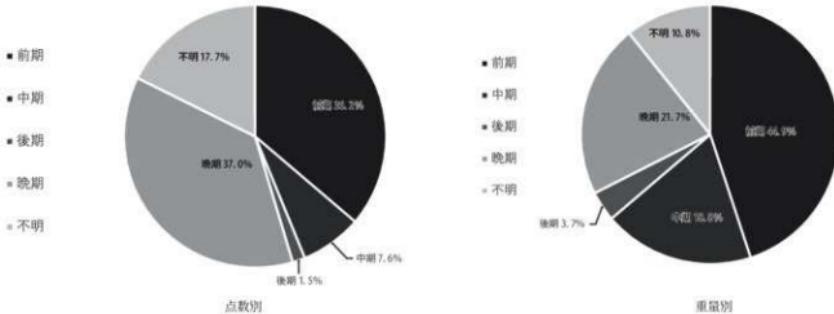
後期に入ると、堀之内I式(第25図-101・102)、堀之内2式(第25図-103・104)ともに点数、重量ともに少なく、形式不明の後期土器もあり多くない。全体での比率を見ると、点数で1.5%、重量で3.7%(第3表・第20図)と時期別に見た中では、一番比率が低く、後期の段階でこの遺跡地には人があまり生活していなかったことが想定される。

晩期に入ると、形式不明の晩期後半の時期の土器(第26図-105～132、第27図-133～140)が点数で502点、重量が3,611gと非常に多くの土器が出土している。前期の土器と比較すると、土器点数では、37.0%と前期の土器の36.2%を少し上回り、重量では、21.7%と44.9%の前期に比べ低い(第3表・第20図)が、重量での比較は、晩期の土器が薄く軽量であることを考慮する必要がある。晩期は、前期に次いで、この遺跡地で多くの人々が生活していた可能性が高い。

以上をまとめると、前期の特に黒浜式期の時に最盛期を迎える。中期になり、やや低調となり、後期には非常に土器数も少なく、衰退する。それが特に晩期後半となると盛り返して、前期に迫る勢いで盛行する。ただし、弥生時代に入ると中期までほとんど土器が出土せず、後期の段階になって再度人々がこの地で生活する。

第3表 繩文土器時期別組成表(点数・重量)

	点 数	%	重 量	%
前期	492	36.2%	7,468	44.9%
中期	103	7.6%	3,131	18.8%
後期	21	1.5%	621	3.7%
晚期	502	37.0%	3,611	21.7%
不明	240	17.7%	1,787	10.8%
合 計	1,358	100%	16,618	100%

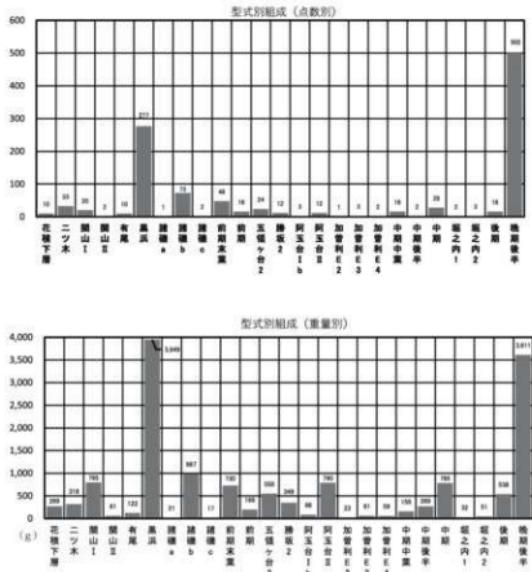


第20図 繩文土器時期別組成(点数別・重量別)円グラフ

第4表 繩文土器型式別組成表(点数・重量)

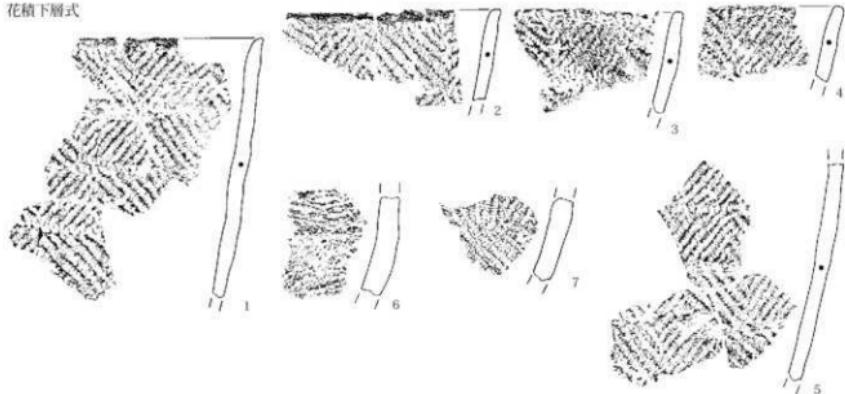
型式及び時期	点 数	重 量(g)
花轍下唇	10	269
二ツ木	33	318
關山I	20	795
關山II	2	61
有尾	10	122
黒浜	277	3,949
諸磯a	1	21
諸磯b	73	987
諸磯c	2	17
前期末葉	48	730
前期	16	199
五頭ヶ台2	24	550
勝坂2	12	349
阿玉台1b	3	86
阿玉台2	12	790
加曾利2	1	23
加曾利3	3	61
加曾利4	2	59
中期中葉	16	159
中期後半	2	269
中期	28	785
堀之内1	2	32
堀之内2	3	51
後期	16	538
晚期後半	502	3,611
不明	240	1,787
合 計	1,358	16,618

(時期名のみは、型式まで判別できないもの。不明は、小型破片で判別できないもの)

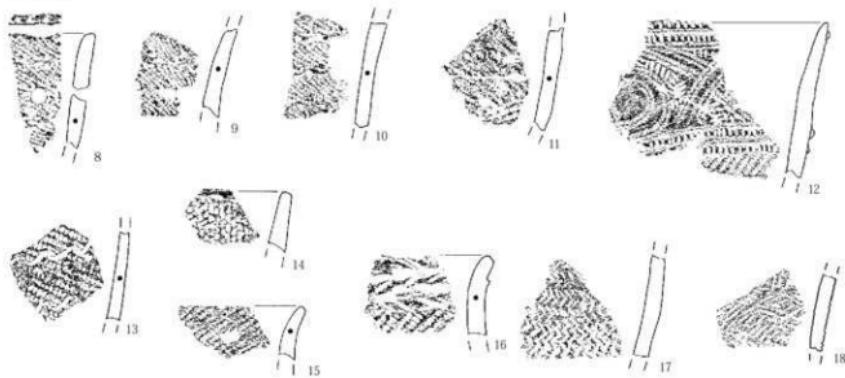


第21図 繩文土器時期別組成(点数別・重量別)棒グラフ

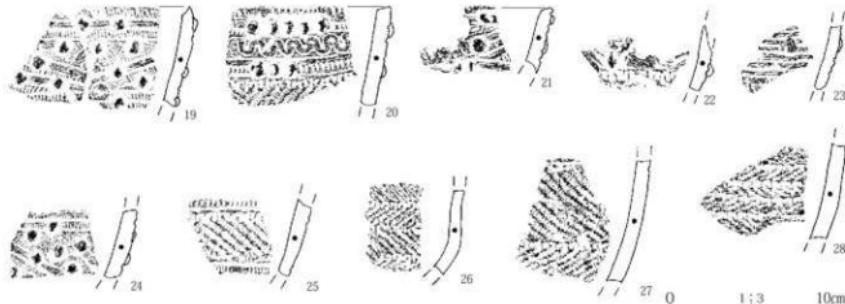
花積下層式



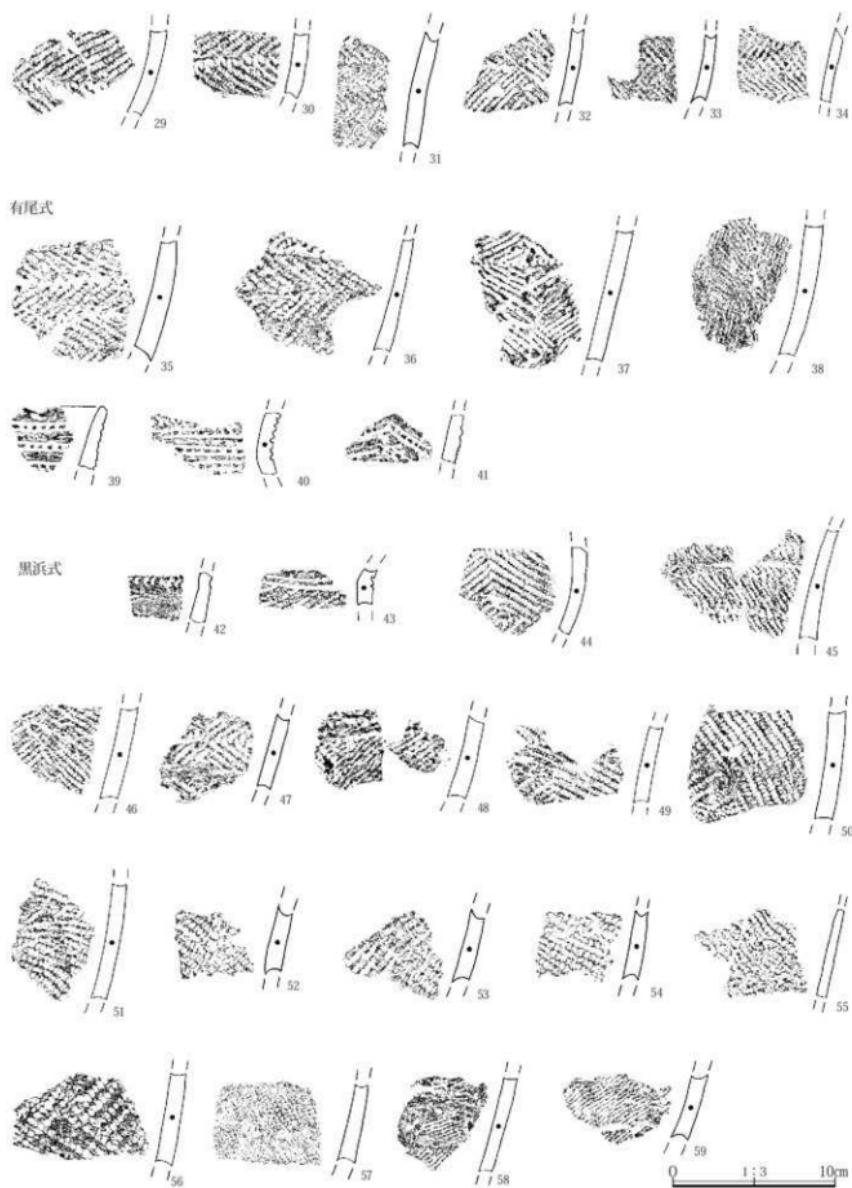
二ツ木式



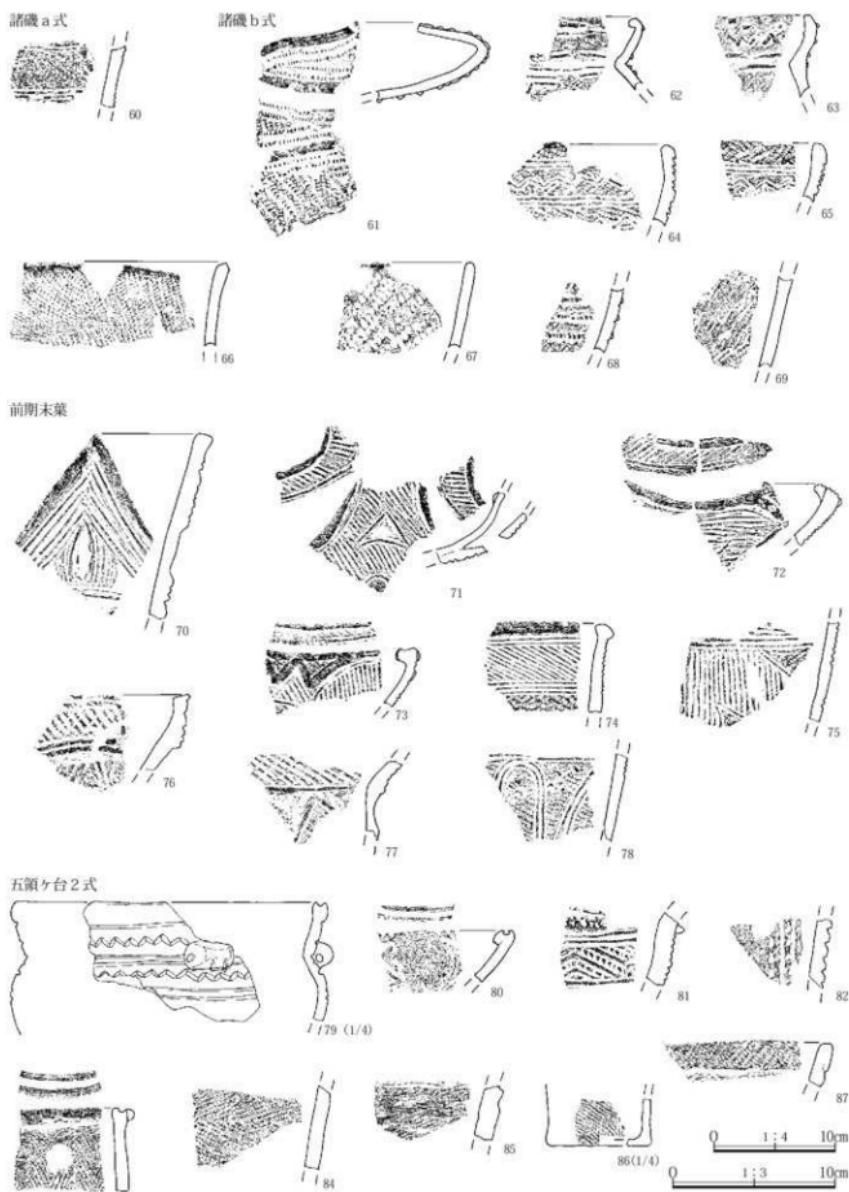
関山1式



第22図 縄文時代遺構外出土遺物図(1)



第23圖 繩文時代遺構外出土遺物図(2)

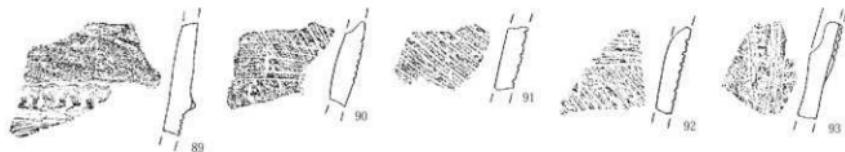


第24図 縄文時代遺構外出土遺物図(3)

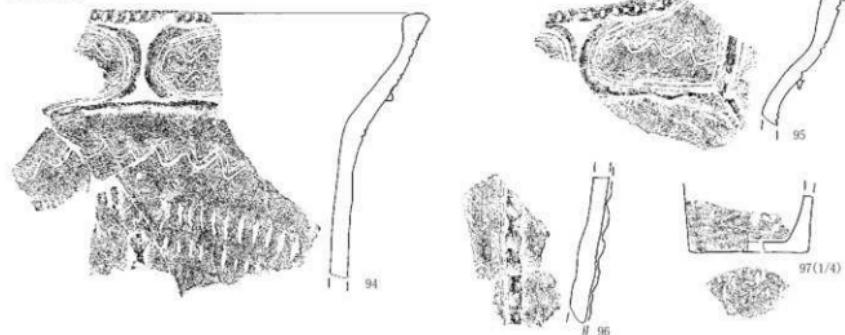
勝坂1式



勝坂2式



阿玉台Ⅱ式



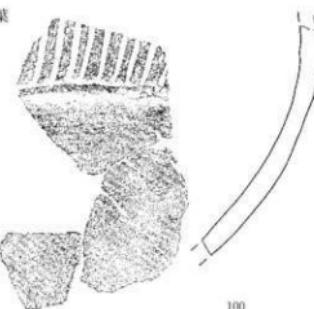
加曾利E 2式



加曾利E 4式



中期中葉



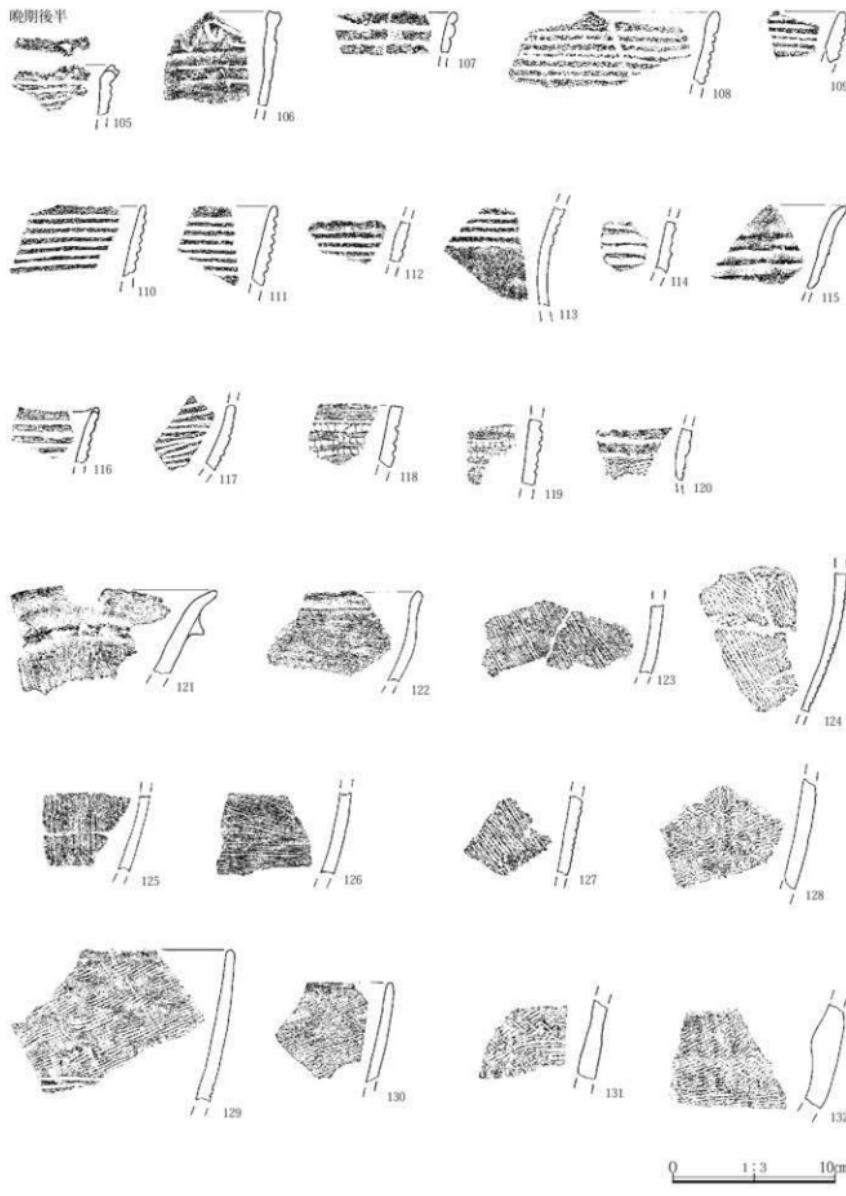
堀之内1式



堀之内2式



第25図 縄文時代遺構外出土遺物図(4)

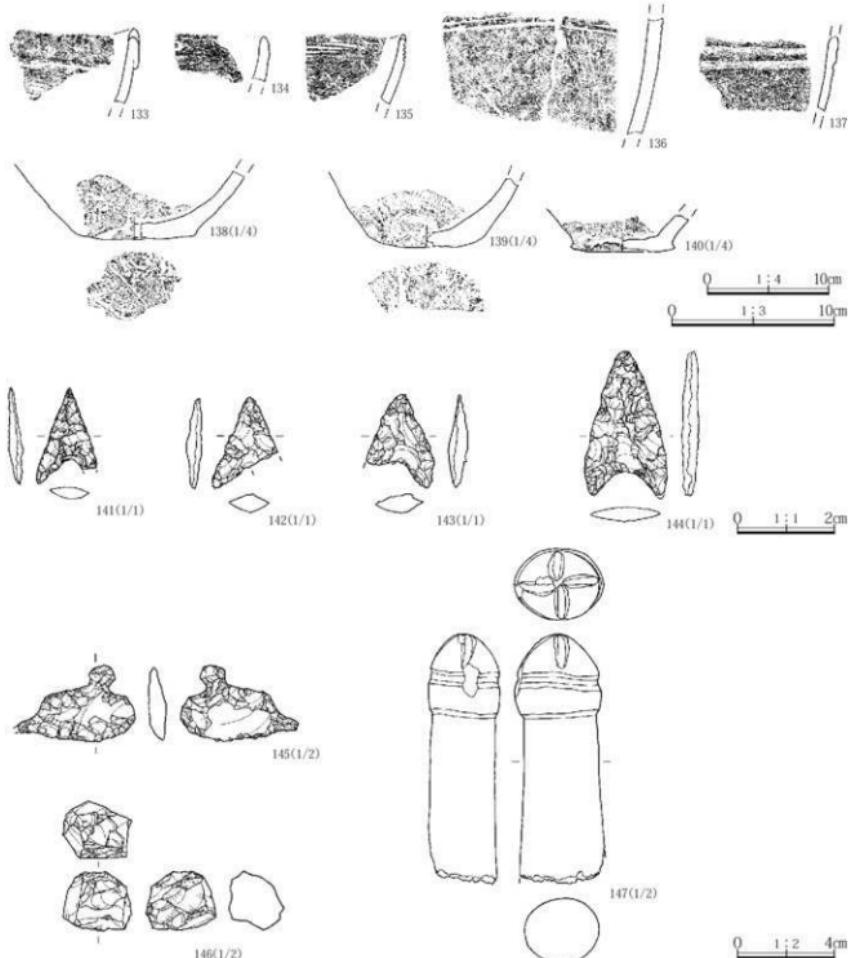


第26図 縄文時代遺構外出土遺物図(5)

石器の様相

石器は代表的なもの6点を図示した。時期の異なる遺構の覆土から出土したものがほとんどである、石鏃はいずれも凹基無茎鏃で4点(第27図-141~144)、石匙(第27図-145)が1点、石棒(第27図-147)が1点(第27図-142)である。表裏全体に面的な二次加工が認められる。

石匙(第27図-145)は、チャート製で、左端部に尖塔部が作出されていて、ドリル機能を併せ持つ複合石器の可能性が想定されている。石棒(第27図-147)は、緑色片岩製で、丁寧に研磨整形されており、先端部には十字に溝が4条巡り、その下部に横方向に溝が巡る。



第27図 縄文時代遺構外出土遺物図(6)

第3節 弥生時代

全体状況(第28図)

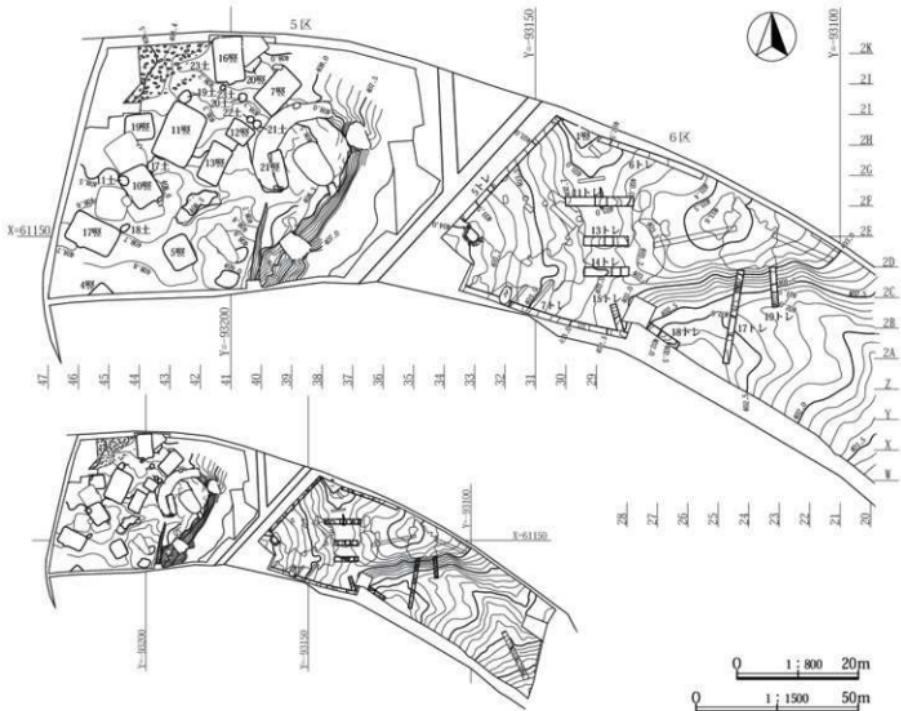
弥生時代の遺構は、13棟の竪穴建物、8基の土坑が確認された。竪穴建物が集中するのは、5m程の比高を有した高い段丘面上の西側5区である(第28図)。東側の6区には、1棟の竪穴建物があるのみである。基本的に居住域として6区はあまり使われていなかったものと思われる。竪穴建物は、主軸が北西方向に向くものと、北東方向に向くものの大きく2つに分類される。時期的に区分されるものと推定される。土坑も5区に集中して検出されている。なお、建物の時期は土器の編年による。編年の基準は大木2020による。

6区に唯一構築された1号竪穴建物から見ていく。

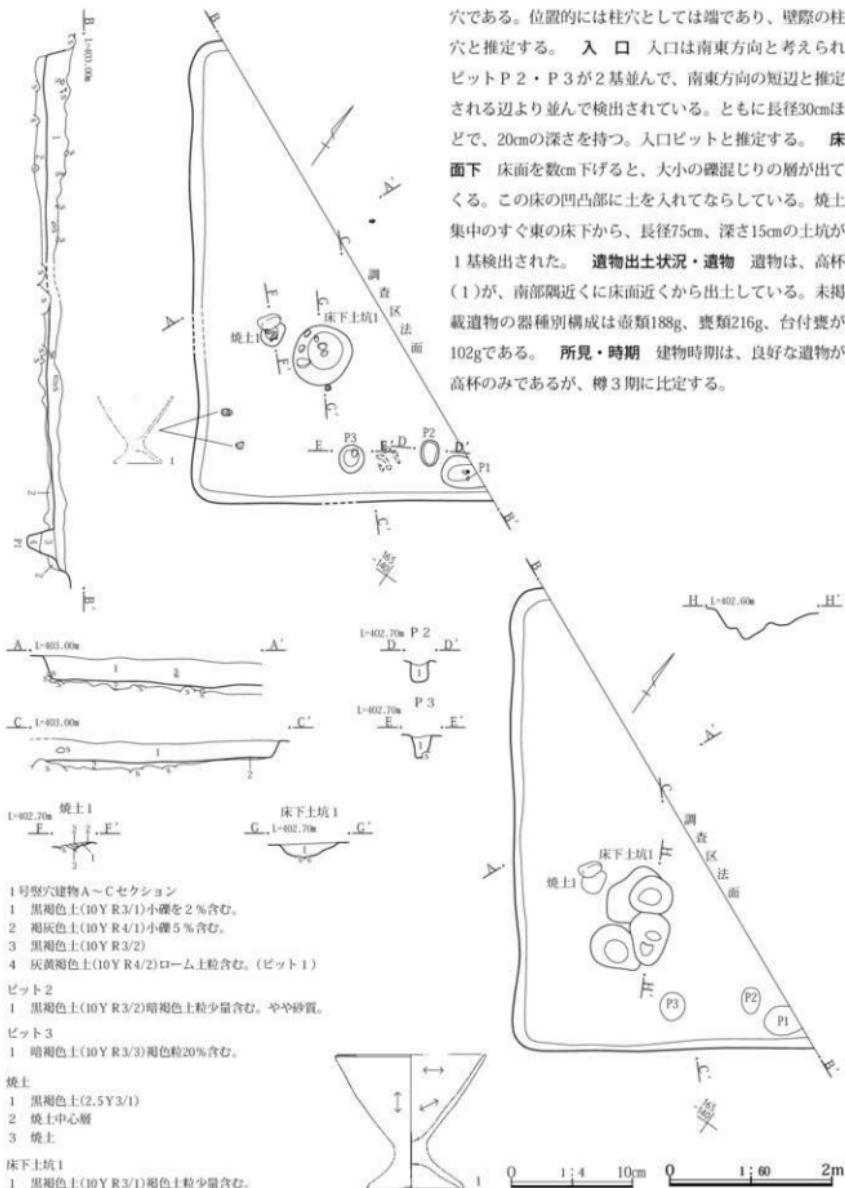
竪穴建物

1号竪穴建物 (第29図 PL. 4・5・89)

位 置 6区西北端部にある。 グリッド 26・2H-28～30 座標値 X=61164～61169, Y=-93139～-93145
遺存状況・重複 北東方向が斜めに調査区外となり約半分が調査対象。遺存している箇所では重複は無い。
埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土により埋没する。
形 状 長方形の可能性あり。 **規 模** 東西3.70+m 南北5.68m **長軸方向** N-35°-W **床面積** 10.437+ m² **床面・壁** 床面は、整土により下層の礫を隠すように土でならす。壁の高さは16～38cmで遺存度が低い。
炉 炉の可能性ある焼土が集中して出土している箇所がある。石が脇にあり、その南側に焼土が集中する。
柱穴 南東部端に1基ある。長径15cm以上、深さが35cmの



第28図 弥生時代面全体図



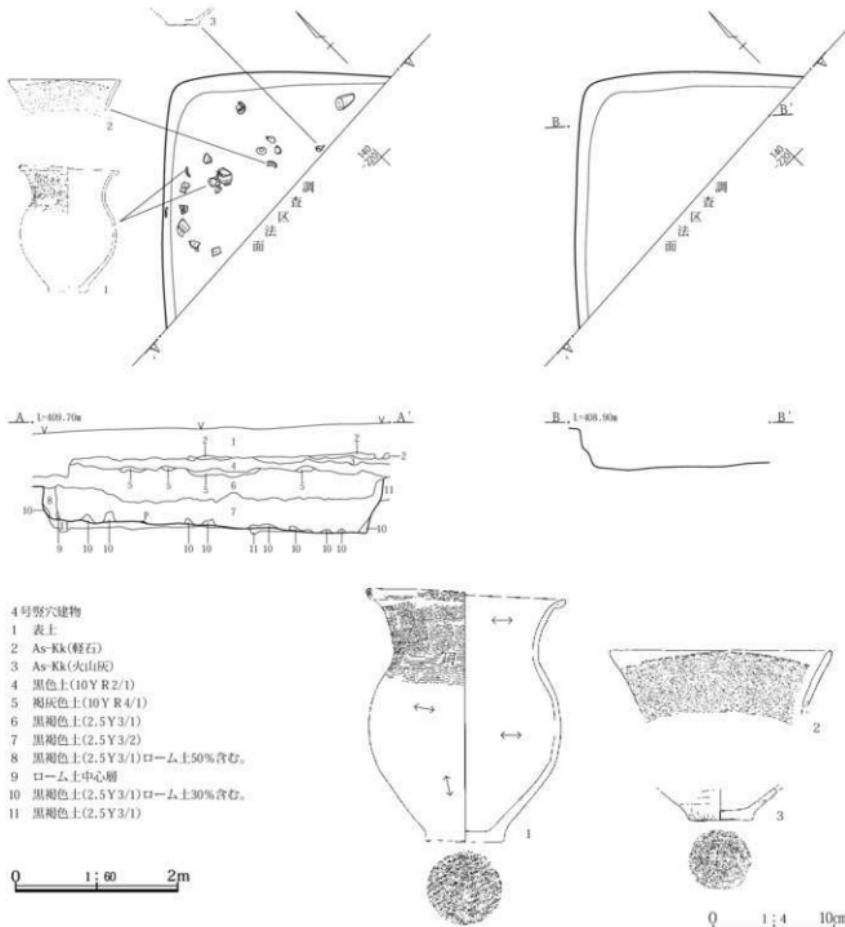
第29図 1号竪穴建物平面図・床下図・遺物出土状況図・土層断面図・出土遺物図

次に、西側の比高で5mある段丘上面の5区から検出された竪穴建物群について記す。この建物群はさらに西側の四戸遺跡の集落とつながるもので、ムラとしては四戸遺跡と一体のものと考えて良い。

4号竪穴建物(第30図 PL. 6・89)

位 置 5区南西端部にある。 グリッド 20-44・45
座標値 X=61140 ~ 61142, Y=-93219 ~ -93233 遺存

状況・重複 南方向が調査区外となり約半分が調査対象。遺存している箇所では重複はない。
埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土により埋没する。形 状 長方形の可能性あり。
規 模 東西2.95+m 南北2.74+m
長軸方向 N-45°-E
床面積 3.552+㎡
床面・壁 床面は、基本土層の8層の黄褐色ローム土層を一部掘り込んで、四部に上層の黒褐色・灰黃褐色土を埋めて整えている。壁の高さは40~60cmである程度遺存している。



第30図 4号竪穴建物平面図・遺物出土状況図・土層断面図・出土遺物図

炉 炉は確認できなかった。 **柱穴** 柱穴も確認できなかった。 **入口** 入口は南方向と考えられ、調査区外にあったものと推定する。 **床面下** 床面は、先述したように基本土層8層の黄褐色ローム土層を活かしながら一部掘り込んでいる。 **遺物出土状況・遺物** 遺物は、建物の北西壁近くから壺のほぼ完形品(1)が1点、中央部から壺口辺部片(2)が1点、南東の壁付近から底部片(3)が1点床面近くから出土している。未掲載遺物の器種別構成は、壺類112g、甕類293g、高杯・鉢が25gである。壺類が多く出土している。 **所見・時期** 建物時期は、遺物の壺の様相から、樽3期に比定する。

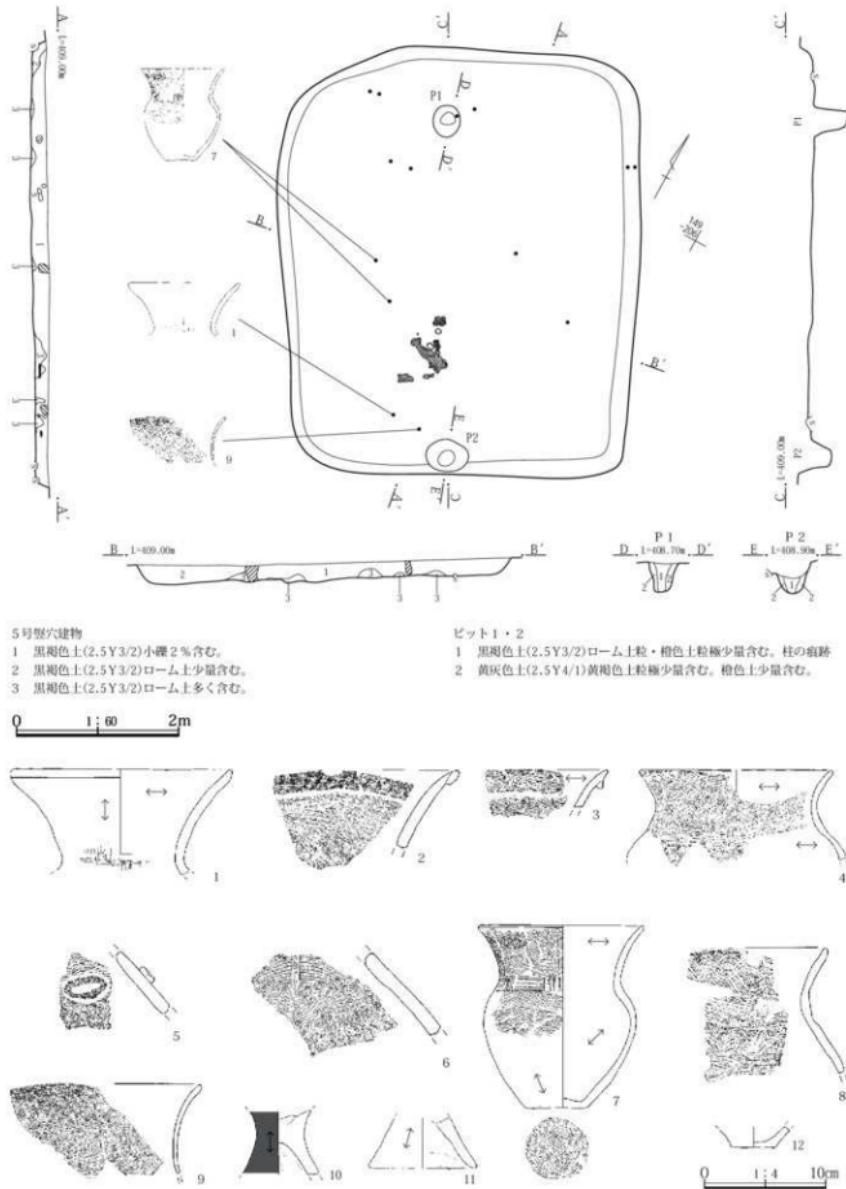
5号竪穴建物(第31図 PL. 7・89)

位置 5区中央南部にある。 **グリッド** 2C～2E-42・43 **座標値** X=61144～61150、Y=-93205～-93211 **遺存状況・重複** 建物全体が遺存している。重複は認めない。 **埋土状況** 基本土層6層土の黒褐色土により埋没する。 **形状** 長方形 **規模** 東西4.6m 南北5.24m **長軸方向** N-29°-W **床面積** 18.928m² **床面・壁** 床面は、基本土層の9層の灰黄褐色ローム土層を一部掘り込んでいる。壁の高さは15～25cmと遺存は少ない。 **炉** 炉は確認できなかった。 **柱穴** 柱穴は建物長軸中央ラインの両端部で2本確認された。北端のP1は、長径35cm、深さ45cmの深い柱穴である。対応する南端にあるP2は、長径54cm、深さ40cmある。 **入口** 入口は南方向と推定されるが、柱穴が南端中央にあるので入口の比定は難しい。 **床面下** 床面は、基本土層7層の小礫混じりの灰黄褐色ローム土層を活かしながら一部掘り込んでいる。 **遺物出土状況・遺物** 遺物は、建物の南西部を中心に出土しており、壺(7)、壺口辺部片(1・9)などが床面近くから出土している。未掲載遺物の器種別構成は、壺類2676g、甕類2950g、高杯・鉢が367g、台付壺が334g出土し、全体の出土量が多く、特に壺・甕の破片量が多い。 **所見・時期** 時期は、遺物の壺の様相から、樽3期に比定する。

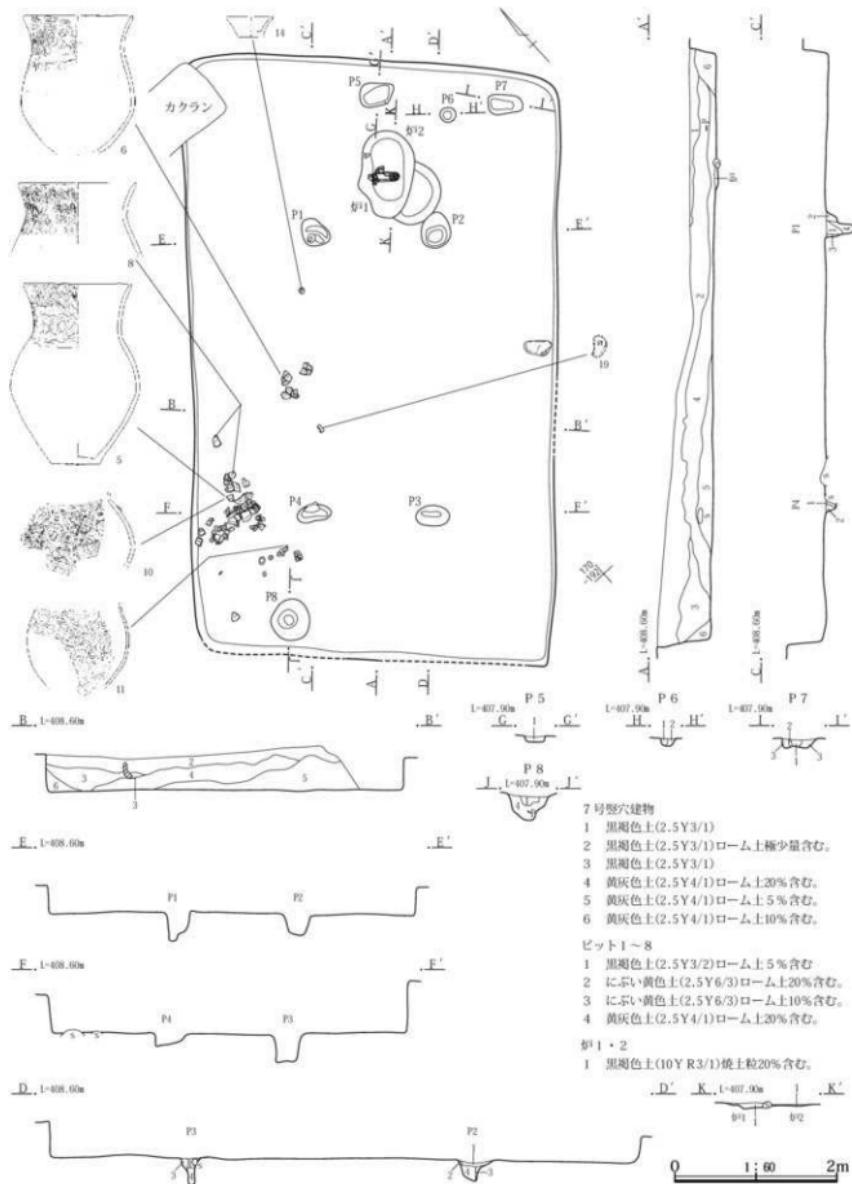
7号竪穴建物(第32・33図 PL. 8・9・89)

位置 5区中央北部にある。 **グリッド** 2H～2J-38～40 **座標値** X=61169～61178、Y=-93188～-93196 **遺存状況・重複** 建物全体がほぼ遺存している。北西端

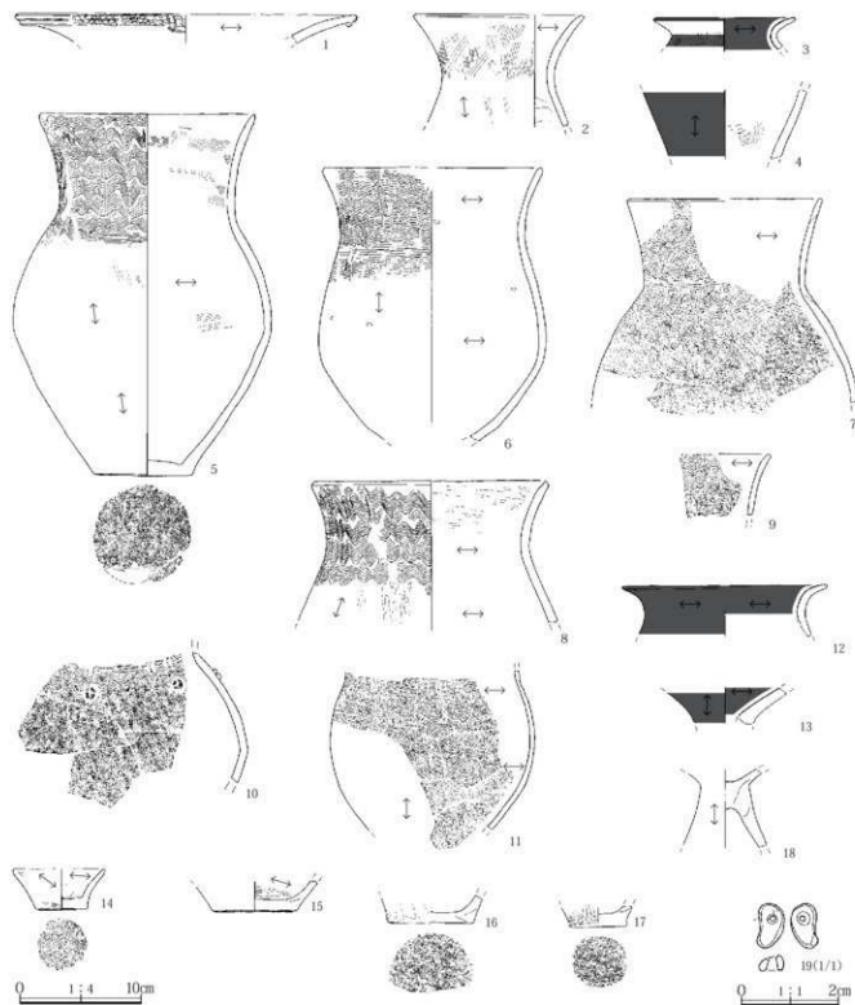
部の角の一部にカクランが入る。重複は認めない。 **埋土状況** 基本土層6層土の黒褐色土及び黄灰色土により埋没する。 **形状** 長方形 **規模** 東西4.64m 南北7.26m **長軸方向** N-44°-E **床面積** 31.429+m² **床面・壁** 床面は、基本土層の8層の黄褐色ローム土層を一部掘り込んで床面としている。壁の高さは30～70cmで残りが良い。 **炉** 炉は2つある。長径75cmの浅い古い炉と思われる炉2の廃棄後、長径98cm、深さ4cmの炉1が構築された。炉の中央には棒状の石が置かれていて、焼土粒が20%ほど含まれている。 **柱穴** 主柱穴は4本確認した。建物長軸に沿って、北部の炉のそばに2本(P1・P2)、南部の入口方向に2本(P3・P4)である。それぞれの長軸の柱間は、3.4mで、短軸の柱間は1.5mである。北西部の炉近くに位置する柱穴(P1・P2)は、楕円形状を呈し、長径39～43cmで深さ23～33cmである。入口に近い柱穴(P3・P4)は、長方形形状の柱穴で、柱穴の形態から、板状の柱が立てられていた可能性がある。長径41～42cm、深さ15～35cmである。入口と推定される壁際より約150cmの所に柱はある。炉のさらに北東側の短壁沿いにP5～7の3基のピットがある。P5・P7は長径40cmほどで、P6は、径18cmで、3基ともに深さ5～7cmほどと極めて浅い。入口から入って左側の壁際に、長径48cm、深さ29cmのP8がある。 **入口** 入口は南西方向と推定するが、入口ピットなどは認められない。先述したP8があるいは、入口に関係するピットの可能性はある。 **床面下** 床面は、基本土層8層の小礫混じりの黄褐色土層まで掘り込んで床面としている。掘方は認められない。 **遺物出土状況・遺物** 遺物は、建物の南西部を中心に出土している。壺(5・6・8・10・11)を中心に、床面近くから出土している。小型鉢(14)が中央部やや西から床面近くで1点出土している。特筆すべきは、ひすい製の長0.9cmの小型勾玉(19)が床面より出土したことである。未掲載遺物の器種別構成は、壺類1076g、甕類1177g、高杯・鉢97g、台付壺223g、蓋13gである。壺・甕の比率が高いが、高杯や台付壺などの器種もある程度土器組成の中に入っていることが分かっている。壺(6)には、圧痕同定により、イネの稻、稻殼の圧痕が脛部に確認された。 **所見・時期** 時期は、遺物の壺の様相から、樽3期に比定する。



第31図 5号竪穴建物平面図・遺物出土状況図・土層断面図・出土遺物図



第32図 7号竖穴建物平面図・遺物出土状況図・土層断面図



第33図 7号竪穴建物出土遺物図

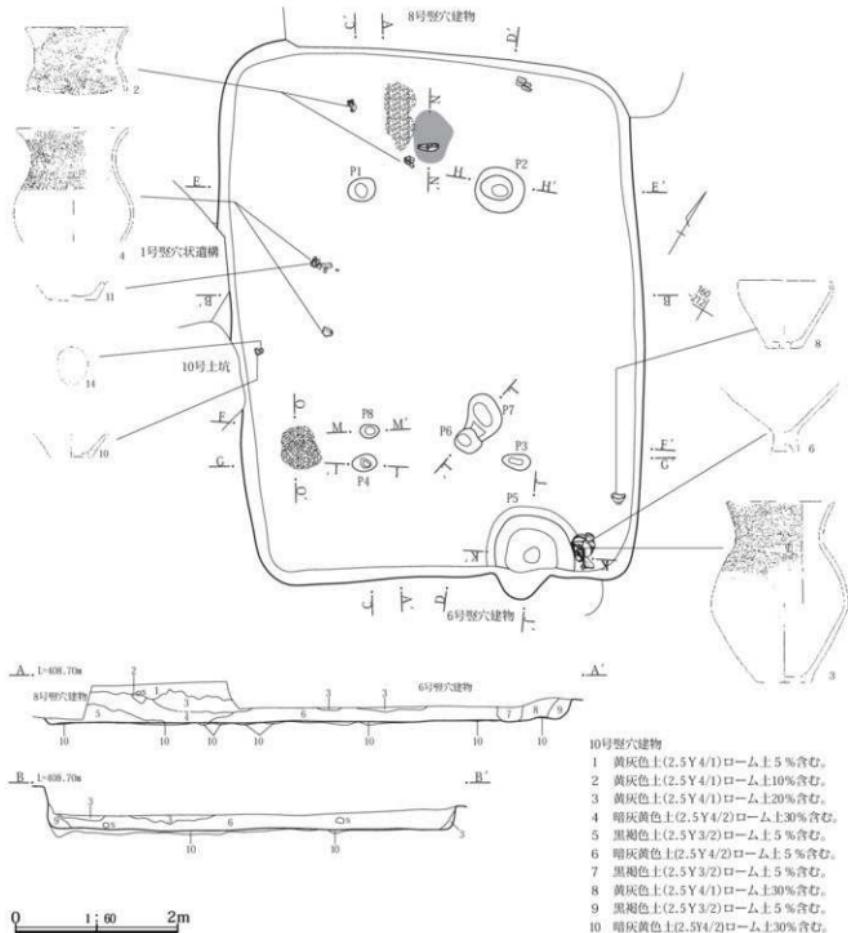
10号竪穴建物(第34～36図 PL.10・11・90)

位 置 5区中央北部にある。 グリッド 2E～2G-43・44 座標値 X=61154～61161, Y=-93211～-93218
遺存状況・重複 建物全体がほぼ遺存している。北側に8号竪穴建物、南側に6号竪穴建物、西側に1号竪穴状

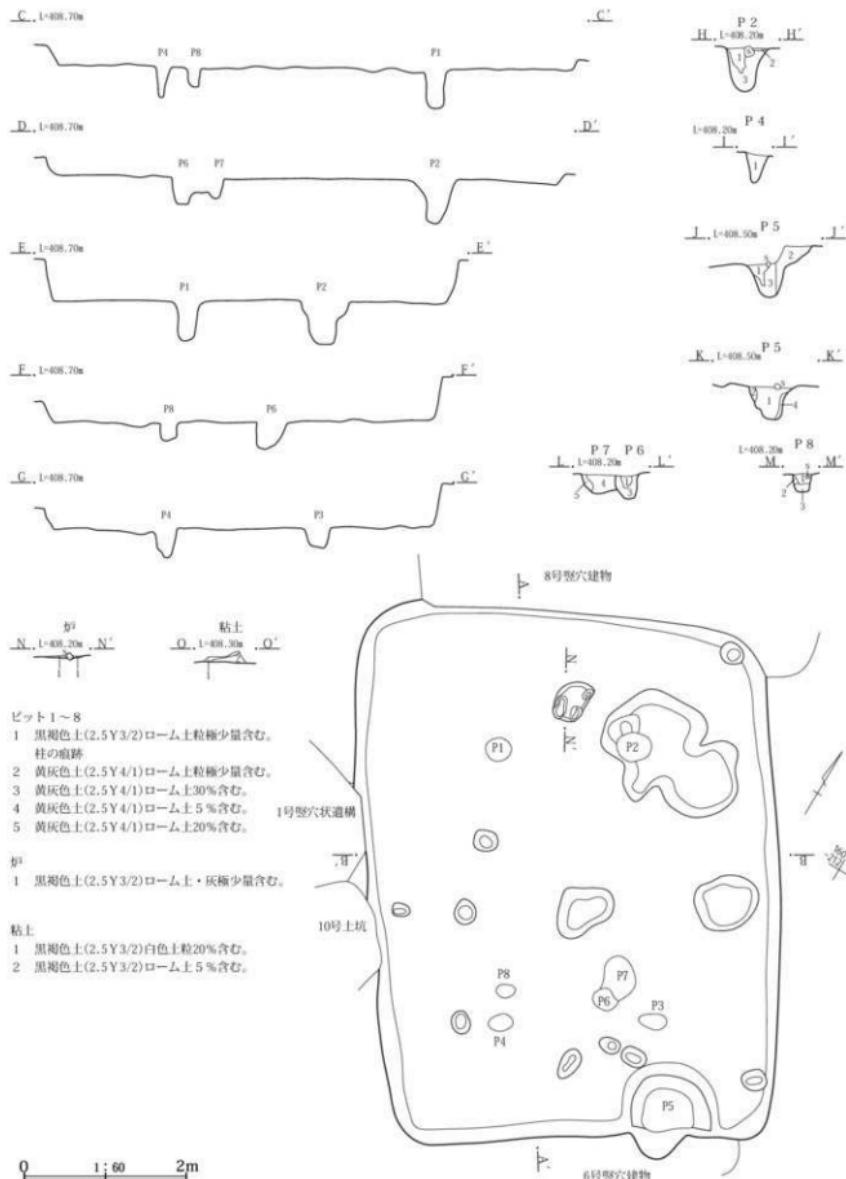
遺構と10号土坑がある。いずれも古墳時代の遺構で、10号竪穴建物の上部を壊している。 埋土状況 基本土層7層土の灰黄褐色土と黒褐色土の混土層により埋没している。 形 状 長方形 規 模 東西4.94m 南北6.7m 長軸方向 N-35°-W 床面積 29.157m² 床

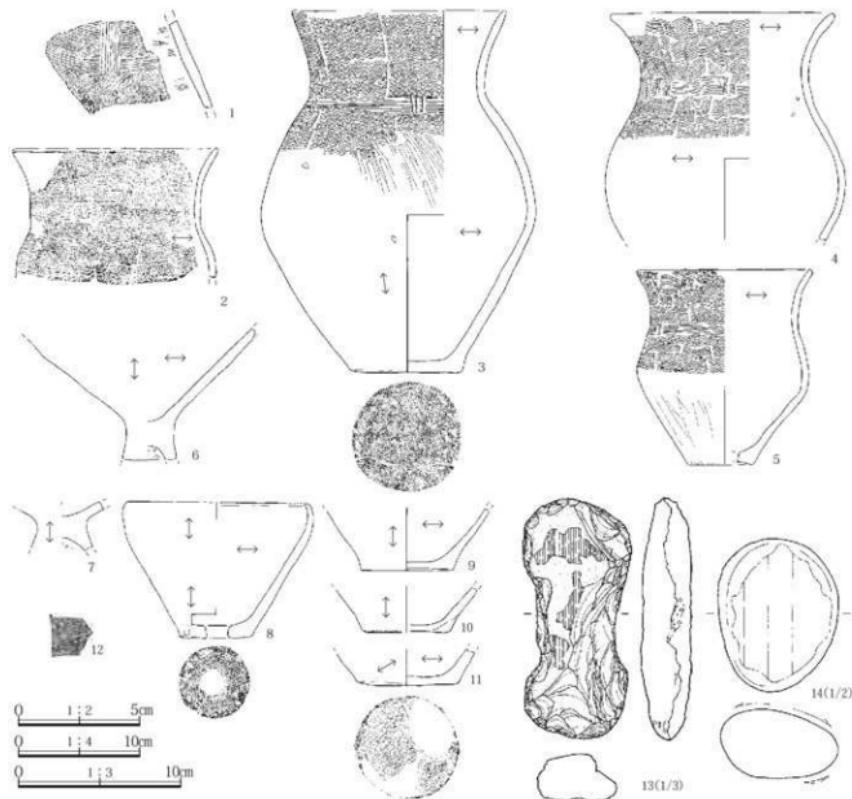
面・壁 基本土層の8層の黄褐色ローム土層を一部掘り込んで床面としている。壁の高さは49～54cmである程度遺存している。**炉** 炉は北側に1つある。長径53cm、短径39cm、深さ4cmで、長25cm、厚さ10cmの棒状の石が炉の主軸に直交するように南側に寄せて置いてある。焼土の混じりは少ないが、炉床面に焼土化した箇所がある。炉の西側に灰が弔がっている範囲がある。**柱穴** 主柱穴の可能性のある柱穴は北側に2本はっきりと

確認できるが、南側のビットは5本、近い範囲にある。軸線の状況からみて、南側の2本のP3・P4が最終段階の柱穴と推定する。その前の段階の柱穴がP6～8であろう。長軸の柱間は、3.35mで、短軸の柱間は1.75～1.85mである。柱穴は、P1・3・4は、長径31～35cmで、深さは22～46cmで、P1に深さがある。P2は、長径62cmで、深さ55cmと大きく深い。**貯蔵穴** この建物には貯蔵穴(P5)が附設している。入口に入って



第34図 10号竪穴建物平面図・遺物出土状況図・土層断面図





第36図 10号貯穴建物出土遺物図

すぐ右に位置している。長径54cm、深さ40cmで、周りに幅25~30cmほどの隆起帯が穴の縁を巡っている。 **粘土塊** 南西部に粘土がまとまって置かれている場所がある。黒褐色土に混じり白色の粘土がブロック状に入るものである。 **入口** 入口は南方向と推定するが、先述の貯蔵穴がすぐ横にある以外入口に関わる施設はない。 **床面下** 床面下の掘方は一部掘削した痕跡があるが、基本的には凹部に暗灰黄色土を入れて整土しているのみである。 **遺物出土状況・遺物** 遺物は、炉の西側に甕(2)が1点、中央やや西よりに甕(4)及び底部(10・11)や磨石(14)が出土している。貯蔵穴のすぐ東の隆起部にも甕(3)が置かれており、やや北側壁寄りに台付甕片(6)と

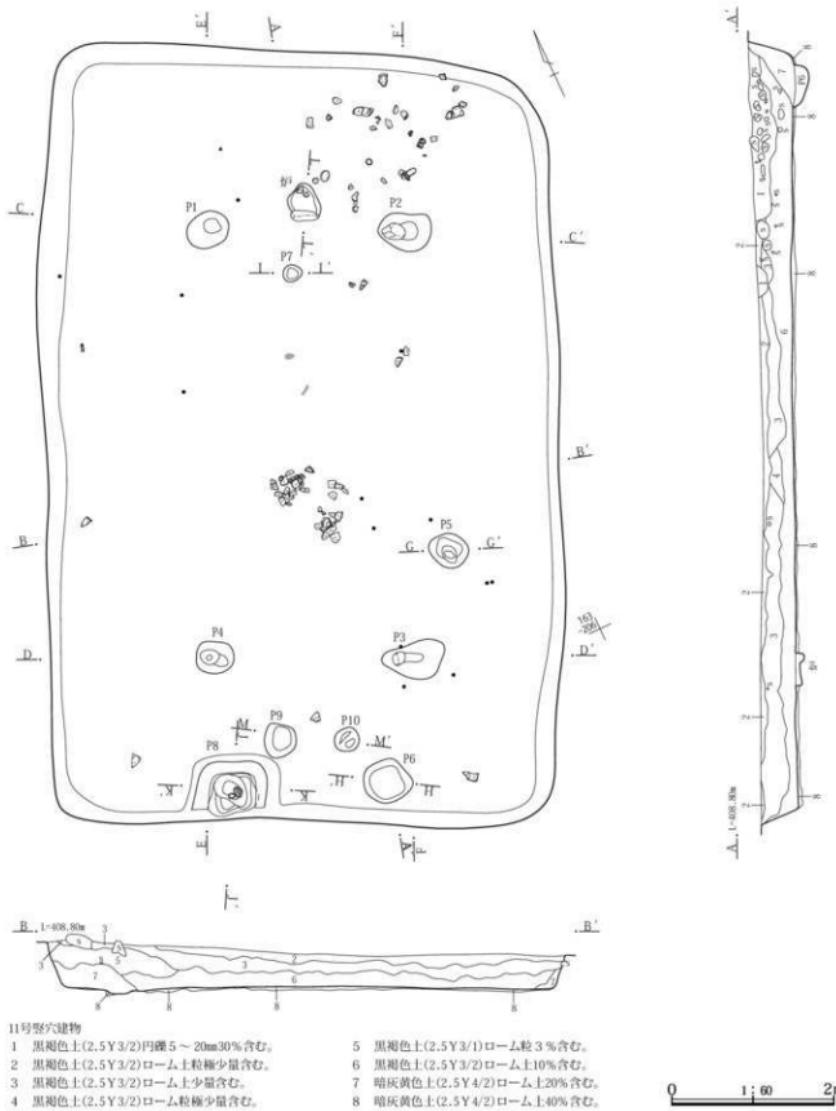
小型有孔鉢(8)が出土している。甕(3)には、イネが8個の穀と1個の種子(穎果)、甕(4)には、イネが4個の穀と11個の種子(穎果)、甕(12)には、1個のイネの種子(穎果)がそれぞれ圧痕の同定から確認された。甕(3・4)からは多くのイネ圧痕が確認された、未掲載遺物の器種別構成は、壺類1206g、甕類1209g、高杯・鉢166g、台付甕342gである。壺・甕の比率が高いが、台付甕もある程度土器組成の中に入っていることが分かっている。 **所見・時期** 時期は、遺物の甕の様相から、櫛3期に比定する。

11号竪穴建物(第37～40図 PL.12・13・90)

位 置 5区中央部にある。 グリッド 2G～2I-41

～43 座標値 X=61161～61172、Y=-93204～-93212

遺存状況・重複 建物全体が遺存している。重複は認

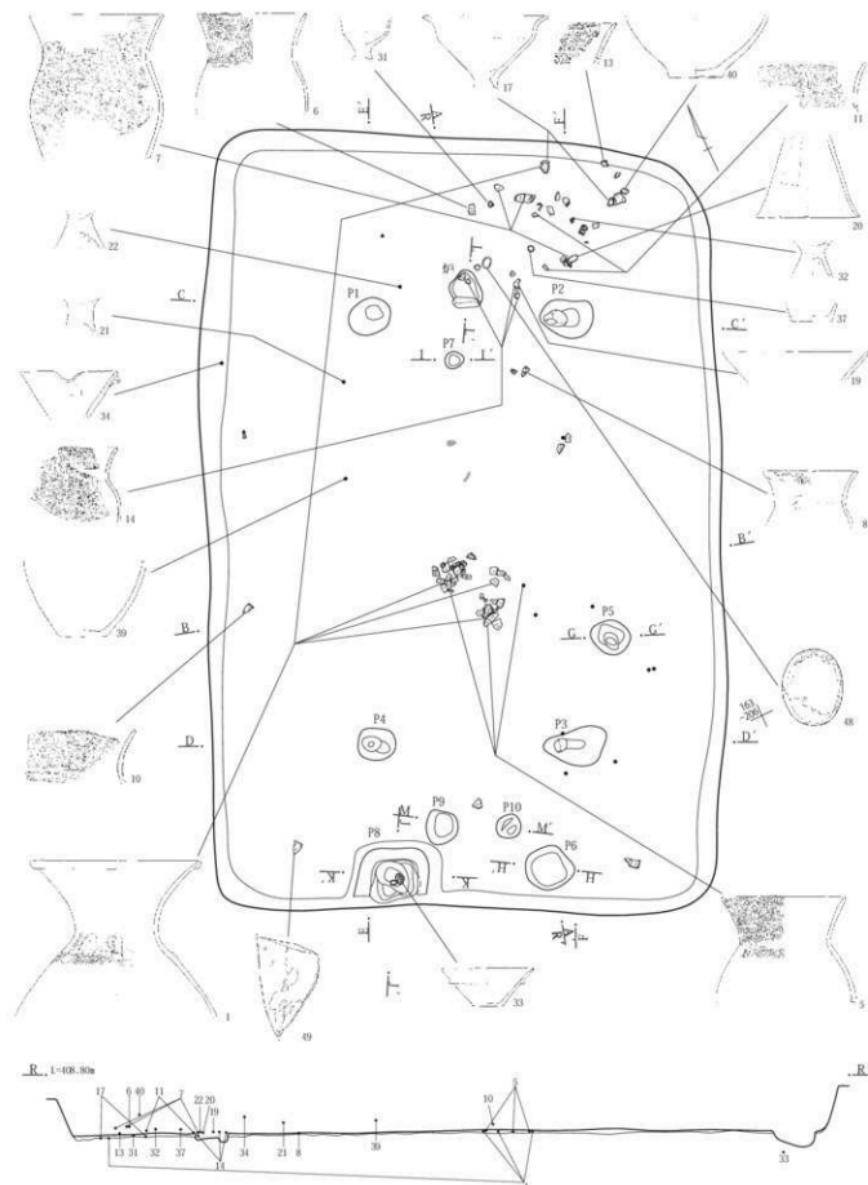


11号竪穴建物

- 1 黒褐色土(2.5Y3/2)内砾5～20mm30%含む。
- 2 黒褐色土(2.5Y3/2)ローム上粒極少量含む。
- 3 黒褐色土(2.5Y3/2)ローム上少量含む。
- 4 黑褐色土(2.5Y3/2)ローム粒極少量含む。

- 5 黑褐色土(2.5Y3/1)ローム3%含む。
- 6 黑褐色土(2.5Y3/2)ローム上10%含む。
- 7 暗灰黄色土(2.5Y4/2)ローム上20%含む。
- 8 暗灰黄色土(2.5Y4/2)ローム上40%含む。

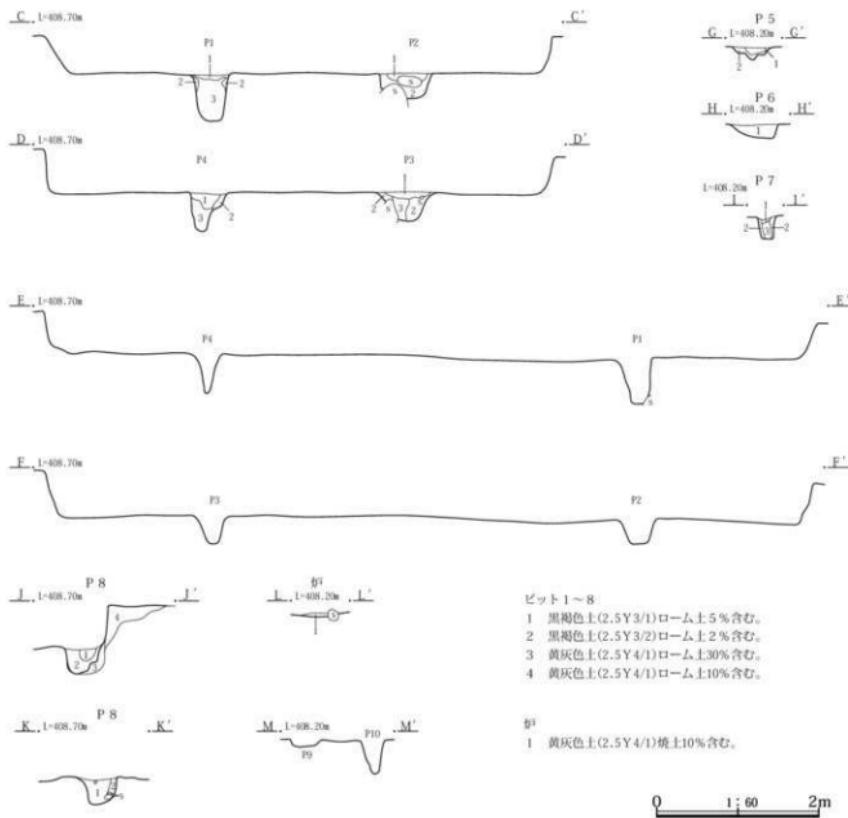
第37図 11号竪穴建物平面図・土層断面図



第38図 11号竪穴建物遺物出土状況図

埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土により埋没する。**形 状** 長方形 規 模 東西6.4m 南北9.64m 長軸方向 N-26° - E 床面積 53.28m² **床面・壁** 床面は、基本土層の8層の黄褐色ローム土層を一部掘り込んでいる。壁の高さは42～58cmある程度遺存している。**炉** 炉は長径45cm、短径39cm、深さ6cmで、炉の南側端に長軸に直行して長さ33cm、厚さ12cmの棒状の炉石を置いてある。炉床は、焼土面が認められ、覆土には10%ほど焼土が含まれている。**柱穴** 柱穴は4本認められ、西側のP1・4は、長径46～54cm、深さ48～54cmで、東側のP2・5は66～78cm、深さ30

～36cmである。西側の柱穴は深く、東側の柱穴はやや大きめであるが掘り込みが浅い。長軸の柱間は、5.28m、短軸の柱間は2.4mである。**入 口** 入口は南にある。入口ピットP9・10が並列している。P9は深さ8cmと浅い。**貯蔵穴他** 貯蔵穴(P8)は入口すぐ西側に壁に接してある。48cm四方、深さ36cmの貯蔵部と三方を幅24cmの隆堤が巡る。貯蔵穴の対面には、長径60cm、深さ18cm P6が検出された。**床面下** 基本土層8層の小礫混じりの黄褐色土層まで掘り込んで床面としている。床下土坑状の掘り込みが北側に2ヶ所ある。**遺物出土状況・遺物** 遺物は、建物の炉跡周辺と北側と中央や南側か

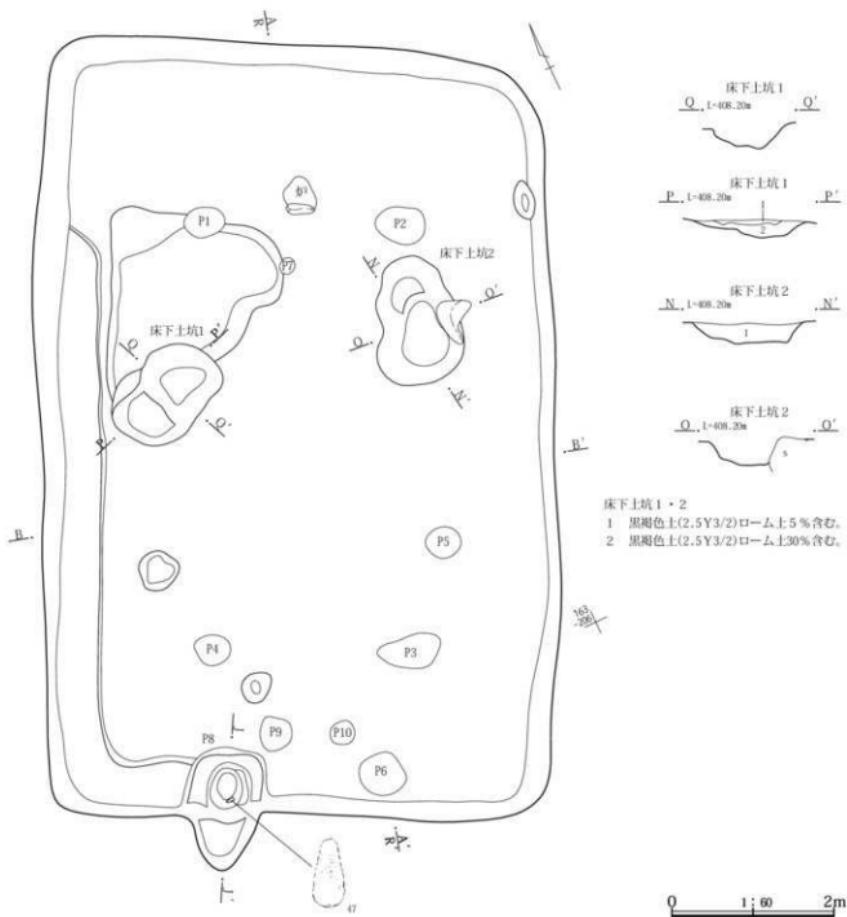


第39図 11号竪穴建物土層断面図・断面図

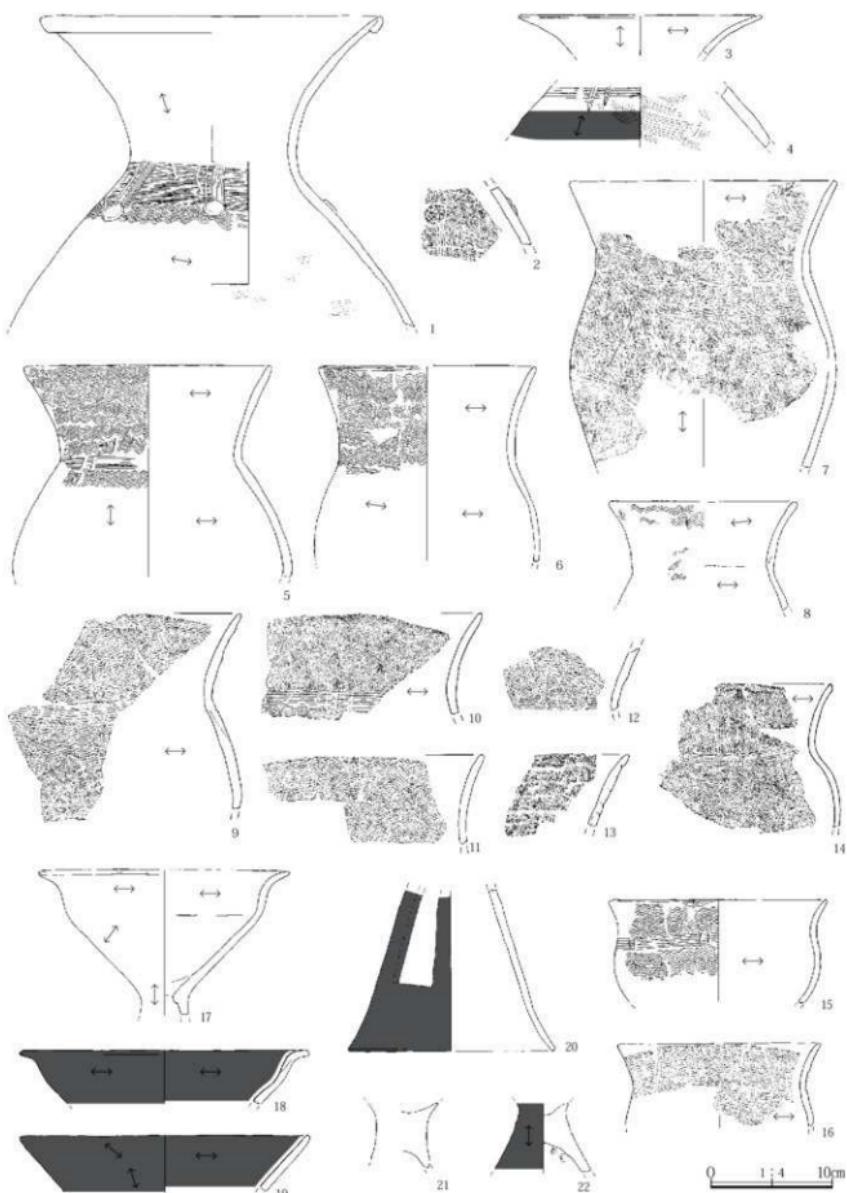
ら多く出土している。壺(1)と甕(5)が中央やや南の床面近くから出土している。高杯(17・19・20)が多く出土し、甕(6・7・11・13・14・39)、磨石(46)も出土している。片口鉢(34)が西側壁埋土中より、石皿片(47)が南西部床面より出土している。貯蔵穴より鉢(33)が出土した。貯蔵穴掘り方から磨製石斧(45)が出土している。出土箇所不明であるが、土製勾玉(40)が出土している。壺

(41)、台付甕(43)より、イネ穂が、甕(42)よりイネ種子(穎果)が、高杯(44)よりイネ種子(穎果)が2つ、圧痕同定により検出された。出土箇所不明未掲載遺物の器種別構成は、壺類6248g、甕類10453g、高杯・鉢類841g、台付甕が680g出土し、全体の出土量が多く、特に甕・壺の破片量が多い。

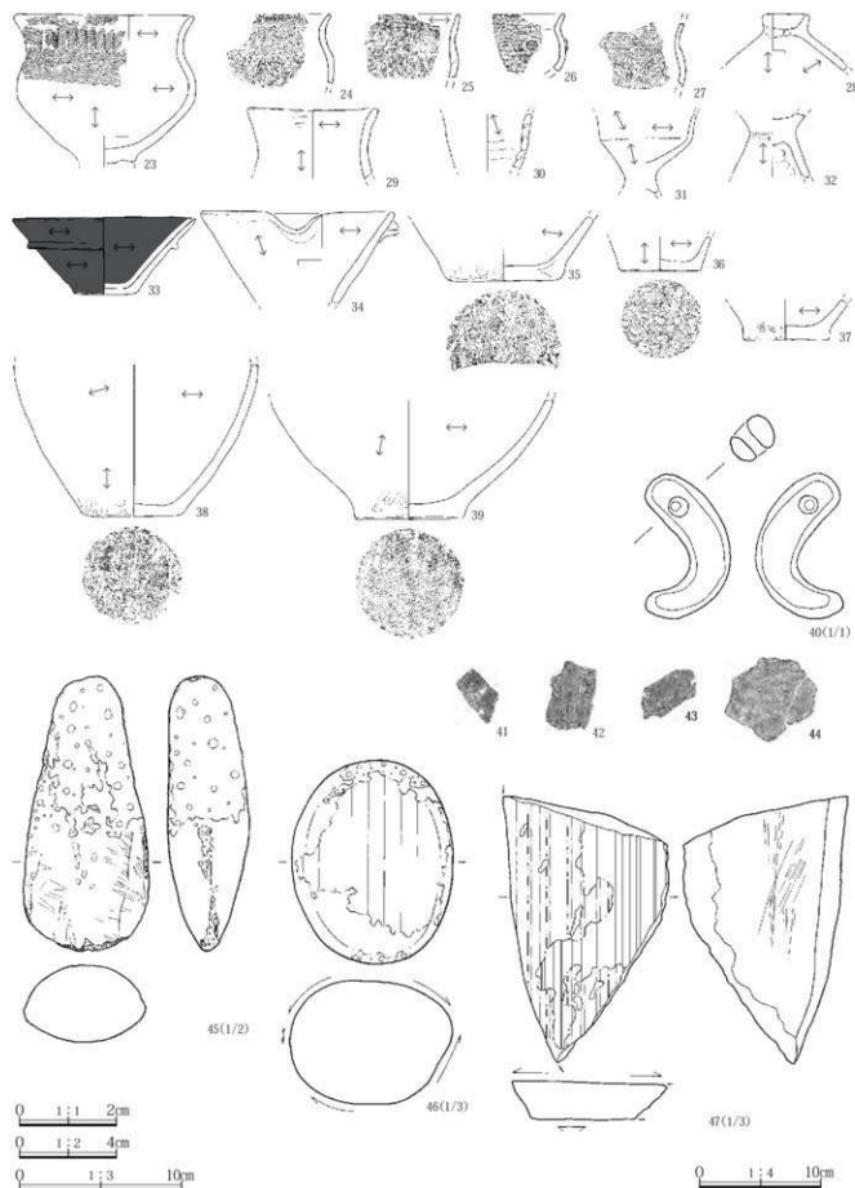
所見・時期 時期は、遺物の甕の様相から、樽3期に比定する。



第40図 11号竪穴建物床下・土層断面図



第41図 11号堅穴建物出土遺物図(1)

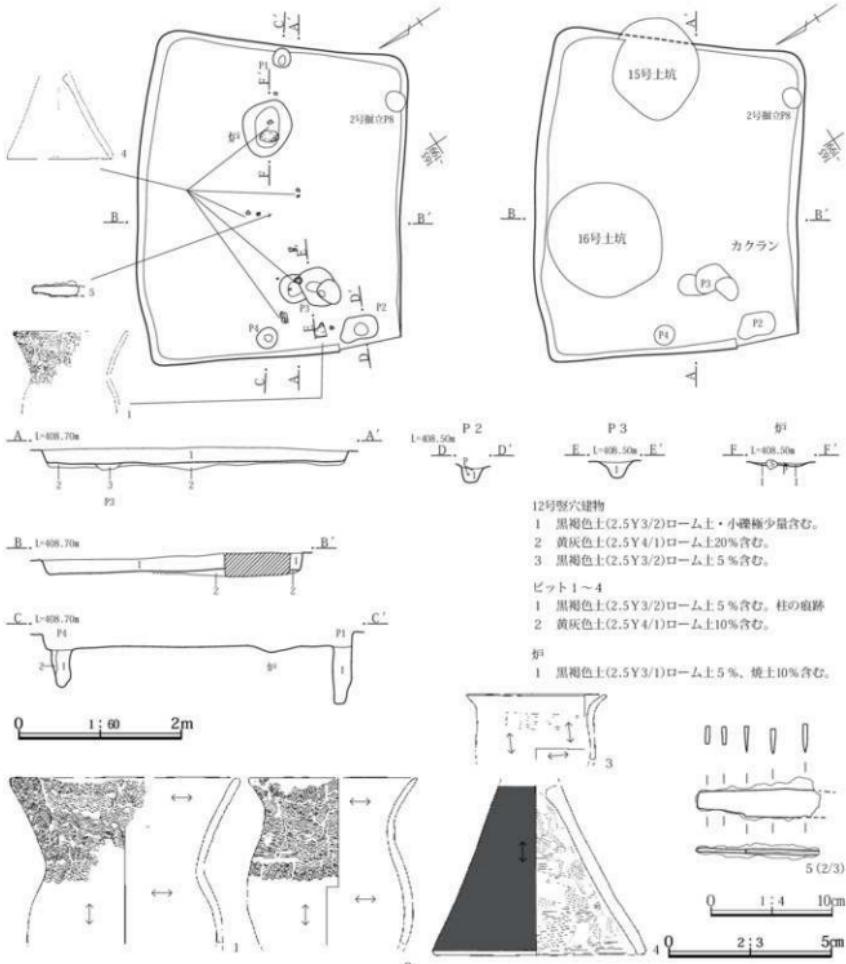


第42図 11号竪穴建物出土遺物図(2)

12号竪穴建物(第43図 PL.14・91)

位 置 5区中央部やや北にある。南に13号、北に7号竪穴建物がある。グリッド 20・2H-40・41 座標値 X=61164 ~ 61169、Y=-93196 ~ -93200 遺存状況・重複建物全体が遺存している。2号掘立柱建物と、15・16号土坑により切られている。 埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土により埋没する。 形 状 長方形 規 模

東西3.27m 南北4.08m 長軸方向 N-53° -W 床面積 11.112m² 床面・壁 床面は、基本土層の9層の灰黄褐色ローム土層を一部掘り込んでいる。壁の高さは7 ~ 22cmと遺存は少ない。 炉 東辺寄りに、長径70cm、短径60cm、深さ8cmの法量で、長さ24cm、厚さ14cmの棒状礫が長軸に直行してやや西寄りに出土した。炉面は一部焼土化している。 柱 穴 柱穴は2本、建物長軸中



第43図 12号竪穴建物平面図・遺物出土状況図・土層断面図・出土遺物図

央ラインの両端部で2基確認された。東端のP1は、長径23cm、深さ70cmの深い柱穴である。対応する西端にあるP4は、長径26cm、深さ48cmある。長軸の柱間3.45mある。

入口 入口は西方向と推定される。入口ピットの可能性のあるP3は長径50cm、深さ20cmある。

貯蔵穴他 貯蔵穴(P2)は入口すぐ南側に壁に接してある。長径42cm、深さ22cmある。

床面下 床面は、基本土層8層の黄褐色ローム土層を活かしながら一部掘り込んでいる。

遺物出土状況・遺物 遺物は、高杯の脚部(4)がやや浮いた状況で、炉と建物の西部から分散して出土している。甕口辺部(1)が床面にて西端部の貯蔵穴と柱穴との間から出土している。鉄製刀子(5)が建物中央部床面や上から出土している。小型甕(3)からイネ種子(穀果)の圧痕が検出された。未掲載遺物の器種別構成は、壺類355g、甕類307g、台付甕が30g出土している。甕・甕の破片量が多い。

所見・時期 時期は、遺物の甕の様相から、樽3期に比定する。

13号竪穴建物(第44～45図 PL.15・16・91)

位置 5区中央部、11号竪穴建物の東、12号竪穴建物の南にある。

グリッド 2F～2H-40～42

座標値 X=61158～61165、Y=-93199～-93205

遺存状況・重複 建物全体が遺存している。2号掘立柱建物により壊されている。

埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土により埋設する。

形状 長方形

規模 東西3.75m 南北6.56m

長軸方向 N-28°-E

床面積 22.056m²

床面・壁 床面は、基本土層の8層の黄褐色ローム土層を一部掘り込んでいる。壁の高さは15～26cmと遺存は少ない。

炉 炉は北側寄りに、長径77cm、幅短径73cm、深さ11cmで、炉の南側端に長軸に直行して長36cm、厚さ18cmのが石を置いてある。炉床は、広い範囲で焼土面が認められ、覆土には10%ほど焼土が含まれている。

柱穴 柱穴は4本認められ、北側及び南西のP1・2・4は、長径36～44cm、深さ40～60cmで、南東側のP3は長径54cm、深さ52cmである。4本ともに深さがある。長軸は2.94～3.12m、短軸は1.20mである。

入口 入口は南にある。入口ピットP5・6が並列している。共に長径40cmで、深さは24～40cmと深さは異なる。

貯蔵穴他 貯蔵穴(P8)は入口すぐ右(東)側に壁に接し長径44cm、深さ14cmである。

床面下 基本土層8層の小

礫混じりの黄褐色土層まで掘り込んで床面をしている。床下土坑状の掘り込みが南側入口ピット近くに1ヶ所ある。

遺物出土状況・遺物 遺物は建物の東南部、入口からすぐ右側長辺壁際から3個の甕(3～5)が並列して出土した。特に両端の2個(3・4)は直立した状況で出土した。3は炉跡周辺底部を欠いた状況で、4は完形である。間から出土した5は口辺部中心に横倒して出土している。意識的に3個の甕をこの場所に置いていたと推定している。炉の北側すぐ近くに有孔鉢(10)が、ほぼ完形で床面から出土している。甕(11)から、イネ種子(穀果)の圧痕が検出された。出土箇所不明未掲載遺物の器種別構成は、壺類743g、甕類646g、高杯・鉢が73g、台付甕が94g出土し、全体の出土量が多く、特に甕・壺の破片量が多い。

所見・時期 時期は、遺物の甕の様相から、樽3期に比定する。

16号竪穴建物(第46～48図 PL.17・18・91)

位置 5区中央北部、11号竪穴建物の北東、7号竪穴建物の斜め北西にある。

グリッド 2J・2K-40・41

座標値 X=61174～61182、Y=-93197～-93202

遺存状況 建物全体が遺存している。

重複 15・20号竪穴建物と重複関係にある。20号竪穴建物より新しく、15号竪穴建物より古い。

埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土により埋没する。

形状 長方形

規模 東西4.82m 南北7.92m

長軸方向 N-3°-W

床面積 32.725m²

床面・壁 床面は、基本土層の8層の黄褐色ローム土層を一部掘り込んでいる。北側半分は、礫層が露出しており、礫の上に黒褐色土をかぶせて床面を形成している。壁の高さは34～47cmある。

炉 炉(P5)は北側寄りに、長径60cm、幅50cm、深さ38cmと深さがあり、炉の中央に長軸に並行して長22cmのが石を置いてある。

柱穴 柱穴は4本認められ、P1・3は長径50cm、深さは50・60cmと深い。P2・4は、長径96・76cmで深さは52・34cmとやや浅めである。P1・2の埋土には小礫がいくつか入っている。長軸は2.64～2.80m、短軸は1.70～1.80mである。

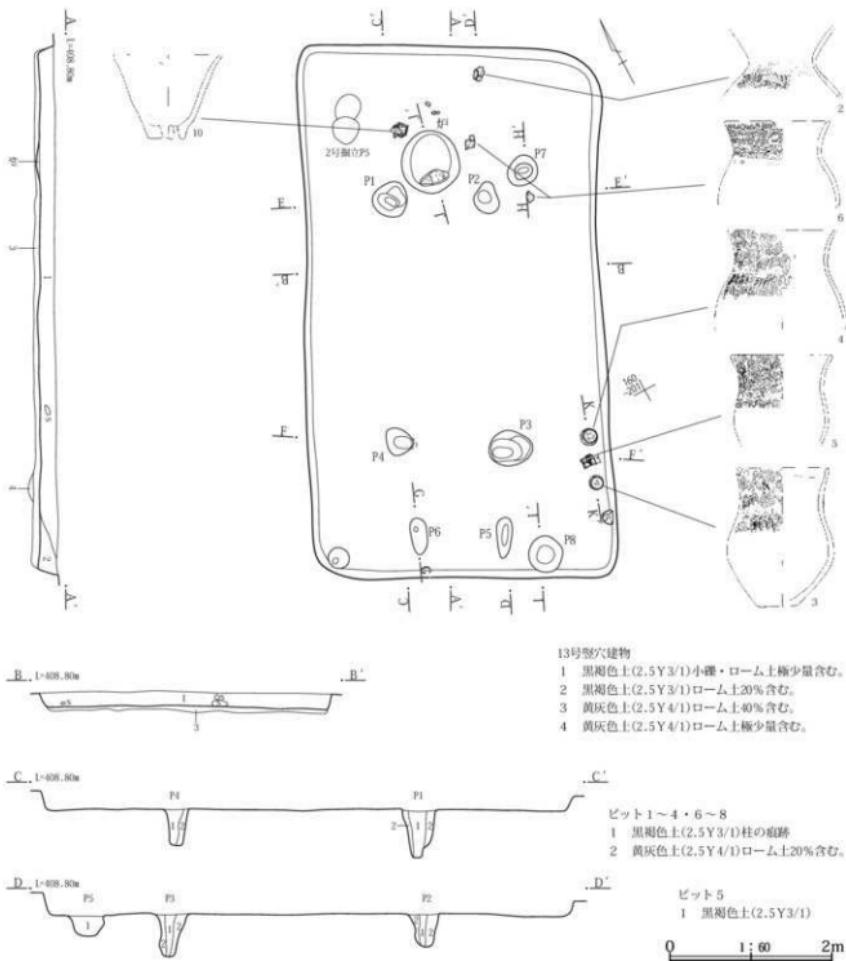
入口 入口は南にある。入口ピットP6・7が並列している。長径72・80cmで、深さは26・30cmである。

貯蔵穴他 貯蔵穴(P8)は入口すぐ右(東)側に壁に接し長径58cm、深さ34cmである。

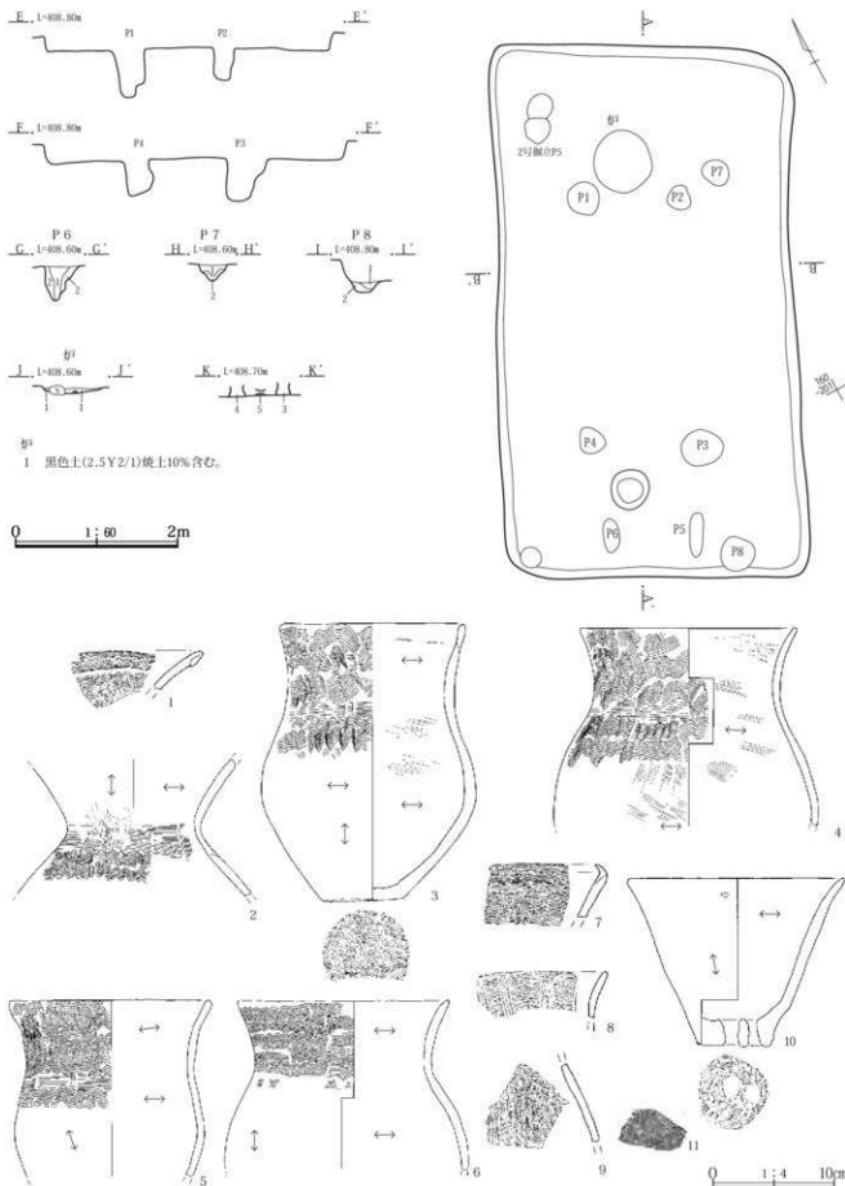
床面下 北側半分は、礫層が露出しており、礫層を少し

掘り下げて、礫を外して床面を形成している。 遺物出土状況・遺物 遺物は建物の東南部を中心にして壺(1)、甕(10)、台付甕(5)が出土している。入口ピット付近に壺(2)甕(12)、貯蔵穴(P 8)内下部に、小型甕(11)、大型甕(3)が出土している。壺(17)より、イネの粉の圧痕が検出された。出土箇所不明未掲載遺物の器種別構成は、

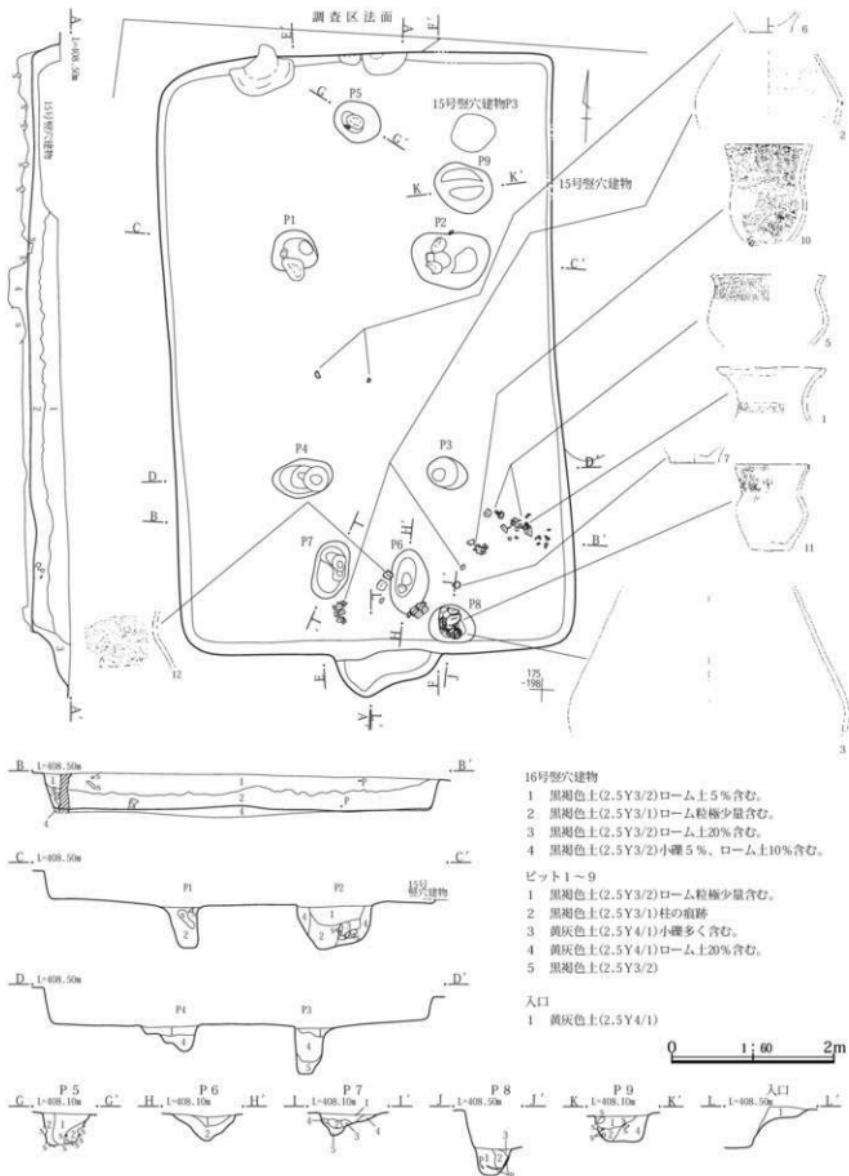
壺類1568g、甕類1209g、高杯・鉢が296g、台付甕が31g
出土し、全体の出土量が多く、特に甕・壺の破片量が多い。
所見・時期 時期は、遺物の甕の様相から、樽3期に比定する。



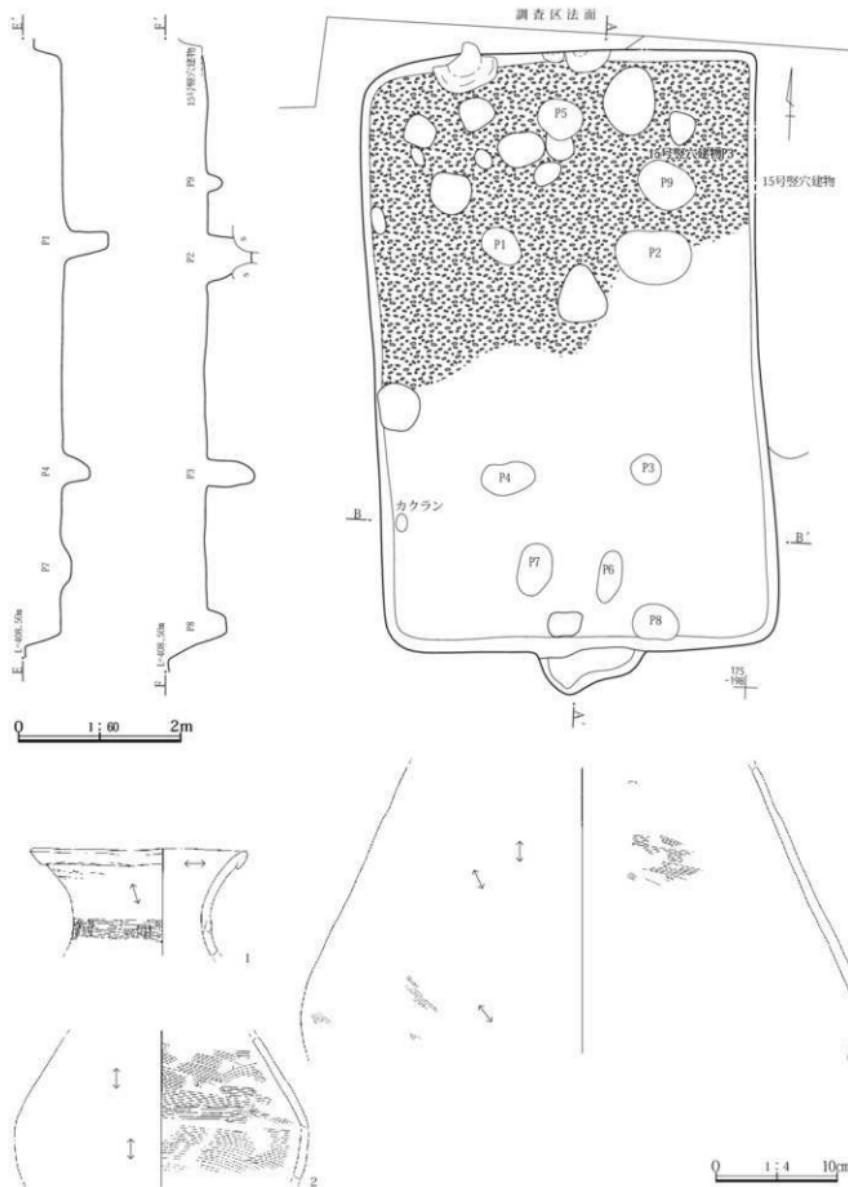
第44図 13号竪穴建物平面図・遺物出土状況図・土層断面図



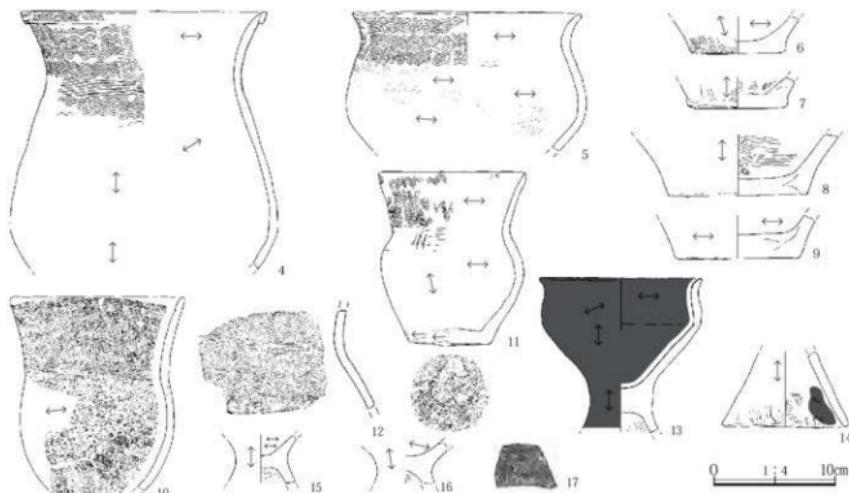
第45図 13号竪穴建物床下図・土層断面図・断面図・出土遺物図



第46図 16号壁穴建物平面図・遺物出土状況図・土層断面図



第47図 16号竪穴建物床下図・断面図・出土遺物図

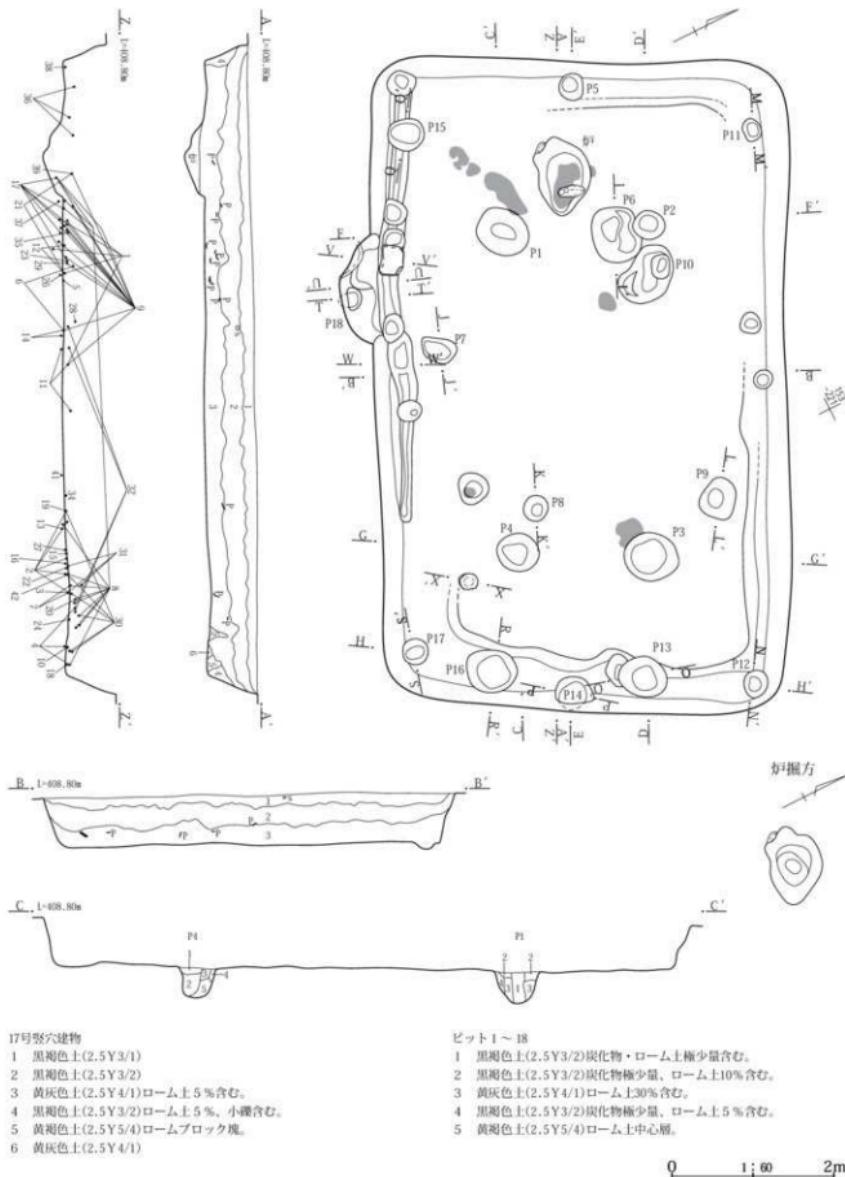


第48図 16号竪穴建物出土遺物図

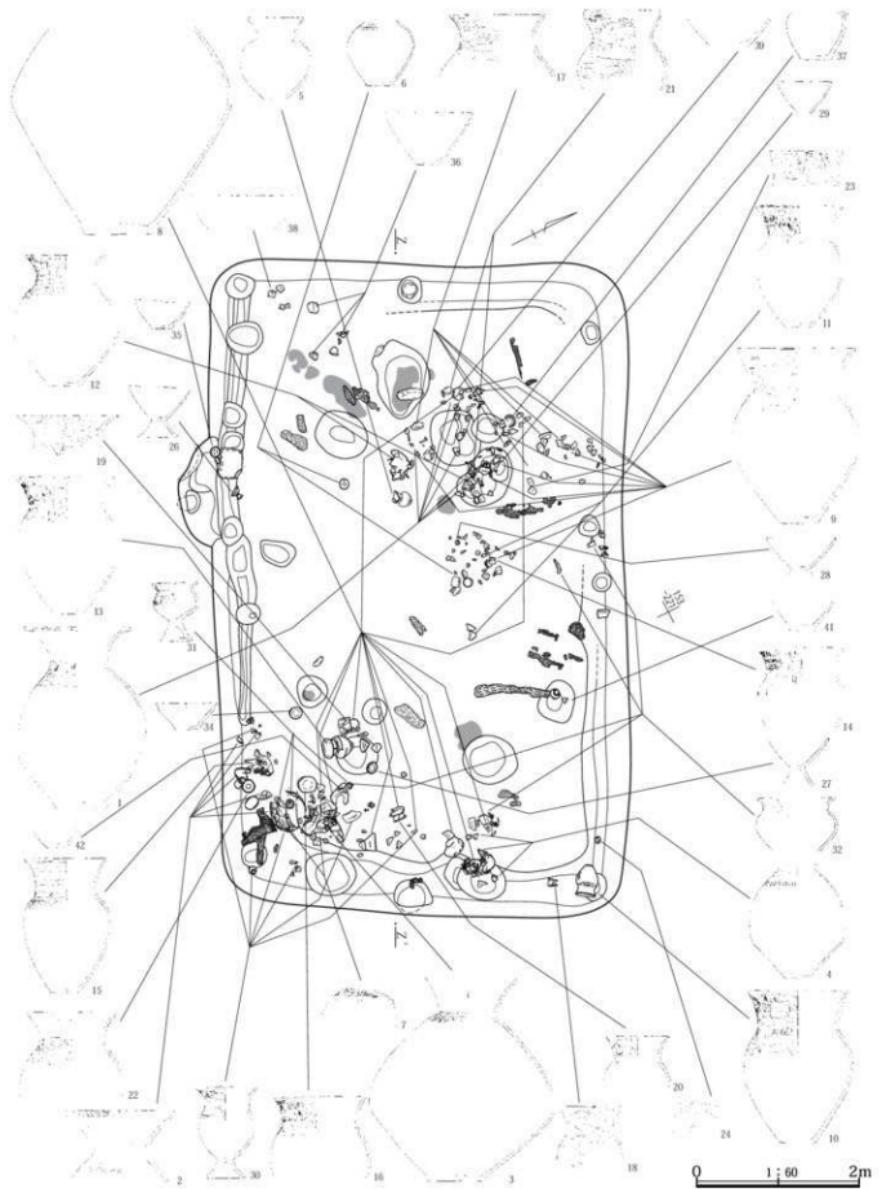
17号竪穴建物(第49～57図 PL.19～22・92～95)

位 置 5区南西部、10号竪穴建物の南西、4号竪穴建物の北にある。 グリッド 2D・2E-44～46 座標値 X=61147～61154、Y=-93218～-93227 遺存状況・重複 建物全体が遺存している。重複は認められ無い。
埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土により埋没する。
形 状 規 模 東西5.23m 南北3.98m 長軸方向 N-63°-W 床面積 27.008m² 床面・壁 床面は、基本土層の8層の黄褐色ローム土層を一部掘り込んでいる。壁の高さは46～62cmある。炉以外にも焼土が数箇所に散布しているが、床面より少し上から検出されている。また、床面には、いくつか炭化材が認められた。材質の確認は遺存度が悪くできなかったが、この建物が焼失建物の可能性があることを示している。 炉 炉は北西寄りに、長径95cm、短径70cm、深さ11cmと大形の炉である。東側に寄って長34cm、厚さ14cmの棒状炉石がある。炉床面には焼上面が彫がっている。炉覆土にも焼土粒が多く含まれる。 柱 穴 柱穴は4本(P1～P4)が認められる。北のP2付近にはP6とP10、南のP4付近にはP8がありいずれも古い段階の柱穴の可能性がある。建物の東側に60cmほど内側に古い周溝の痕跡があることなども根拠の一つである。P1・3・4は、長径

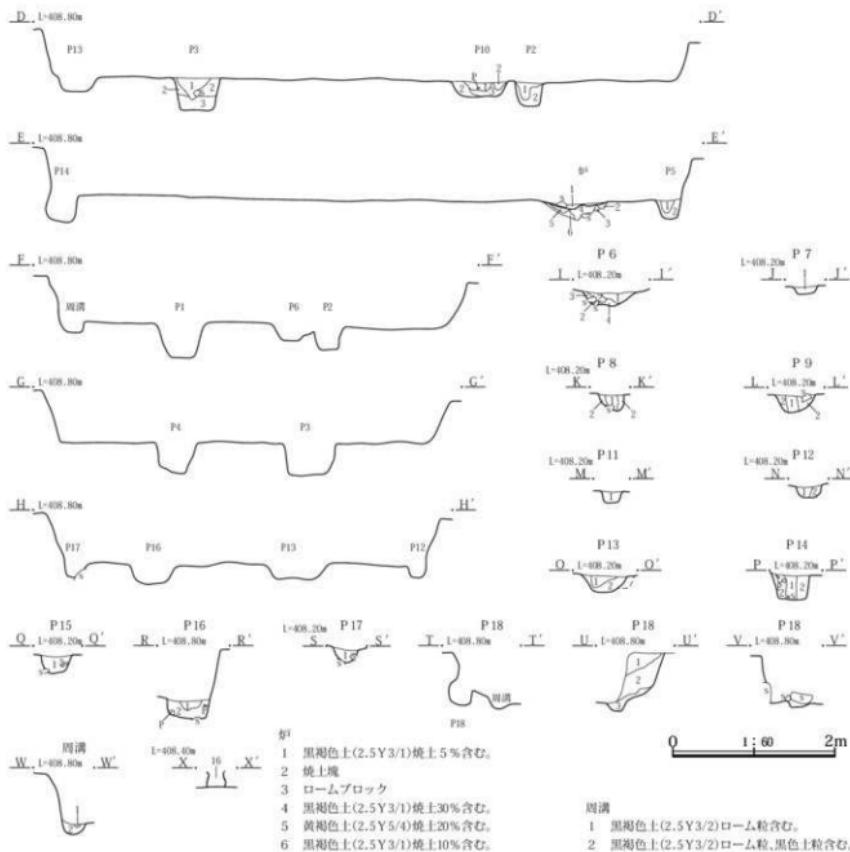
53～68cm、深さ37～39cmで形態が近似する。P2は、長径40cm、深さ30cmと他の柱穴に比べ小ぶりである。柱間の長軸は3.97～4.10m、短軸は1.65～1.80mである。壁周溝・壁柱穴他 壁周溝が、建物の南西、北西、北東の一部と東辺に認められた。幅は、20～60cm、深さ7～12cmと多様で、一部の周溝は古い時期の溝の可能性がある。壁際穴は径26～45cm、深さ14～18cmの小穴が建物の周りを周溝に沿って立ち並ぶものである。全周はしていないが、南辺に6、西辺に1、北辺に3、東辺に2本の計12本が確認されている。南辺のやや西側よりに壁から少し外側に張り出すようにして円弧状に削られた穴の中に建物方向にやや斜め方向に傾いて掘られた小穴P18がある。径27cm、深さ24cmである。この小穴と円弧状の掘り込みの性格は不明である。 入 口 入口は南東にある。入口ピットP14が径42cm、深さ32cmで、壁にやや食い込むような形で掘られている。 貯藏穴他 貯藏穴と想定される穴は、2ヶ所ある。入口の東西に壁に接してあるP13とP16である。共に長径60cmで、深さ20cmである。 床面下 基本土層8層の小礫混じりの黄褐色土層まで掘り込んで床面としている。一部礫が顔を出す箇所があり、黒褐色土で覆っている。 遺物出土状況・遺物 遺物は大きく3つの集中出土箇所がある。炉



第49図 17号竪穴建物平面図・土層断面図

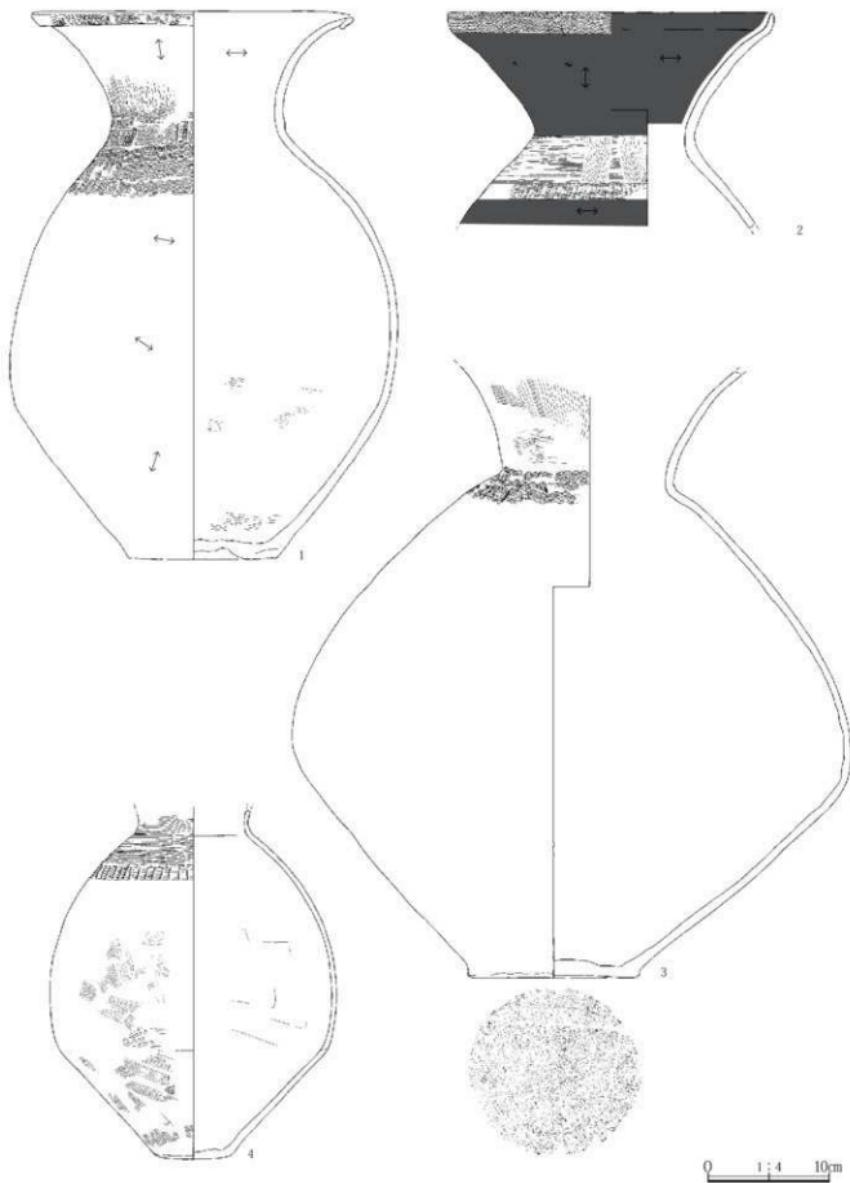


第50図 17号竪穴建物遺物出土状況図



跡付近の特にP 2・6・10近辺とその南側と、入口付近及び入口入って左側、炉の南側南辺の西側沿いの3つである。まず、炉付近であるが、大型壺(9)、壺(11・12・17・21・23)が破片で出土している。高杯(28・29)、中型壺(1)も破片で、片口鉢(37)はほぼ完形で出土している。入口付近入って右側東辺の北東コーナーには、完形のままで出土している壺(10)があり、特大型壺(8)の大きな破片が入口入ってすぐ右側を中心にしてまとめて出土した。大形壺(3)も近くから出土している。南辺南東端部のコーナー近くには壺(15)とともに、壺(8)、台付

壺(30・31)、小型鉢(34)がまとめて出土している。炉の南側には、有孔鉢(36)と鉢(38)があり、さらに南辺西部の壁周溝には、小型鉢(35)、小型高杯(26)がある。いずれも、床直よりやや上からの出土のものがほとんどである。これだけの完形品も含めた多量の土器が出土する例は珍しい。炭化材が多く出ていることから焼失にともなう土器の廃棄があった可能性がある。出土場所は不明であるが、打製石鍬(44)、磨製石斧(45)、砥石(46)などの石器も出土している。壺(2)からは、イネ穂3、イネ種子(穎果)3、壺(4)からは、イネ種子(穎果)とアサ(核)



第52図 17号堅穴建物出土遺物図(1)

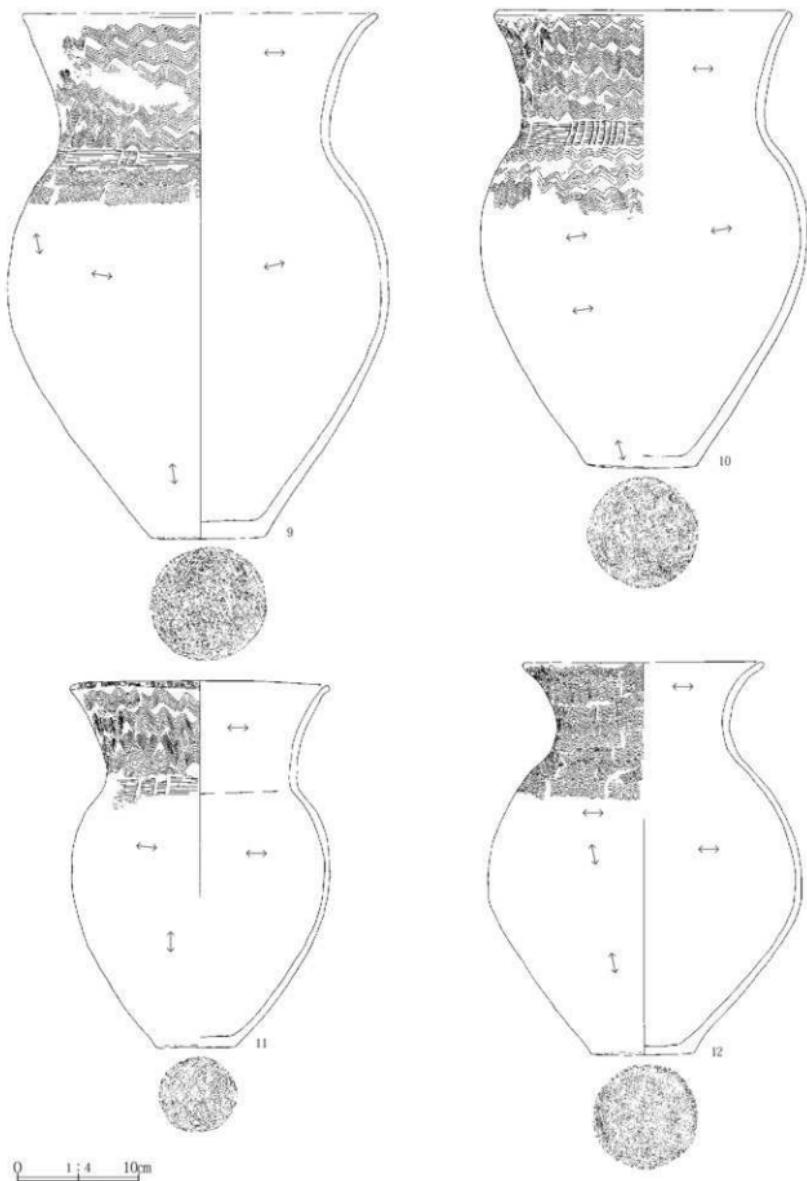


第53図 17号竪穴建物出土遺物図(2)

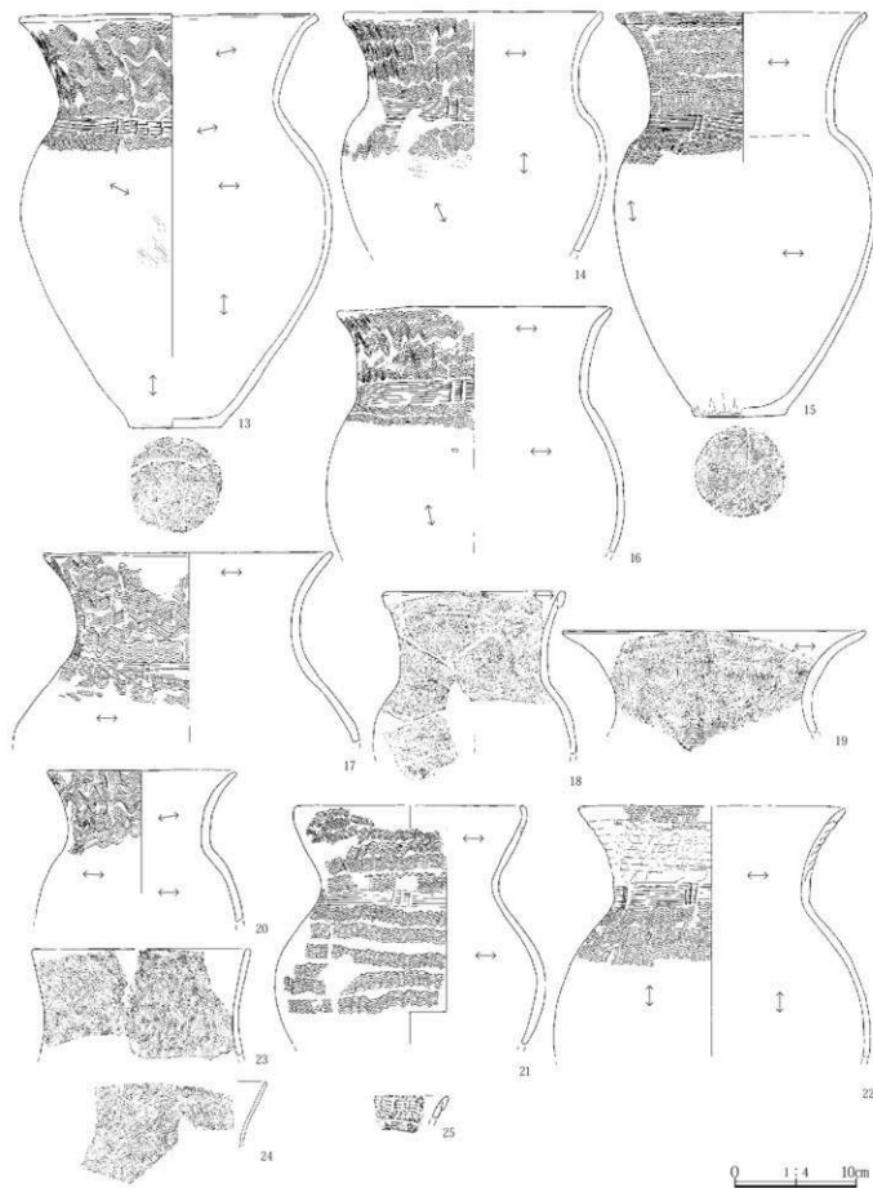
2、甕(16)、(20)、台付甕(31)からはイネ稈、台付甕(30)からは、イネ稈といね種子(穎果)が圧痕で検出された。多くのイネ圧痕とともに、アサの圧痕が注目される。出土箇所不明未掲載遺物の器種別構成は、壺類3709g、甕類7727g、高杯・鉢が449g、台付甕が374g出土し、全体の出土量が非常に多く、特に壺の破片量が多い。**所見・時期** 時期は、遺物の甕の様相から、樽3期に比定する。

19号竪穴建物(第58図 PL.23)

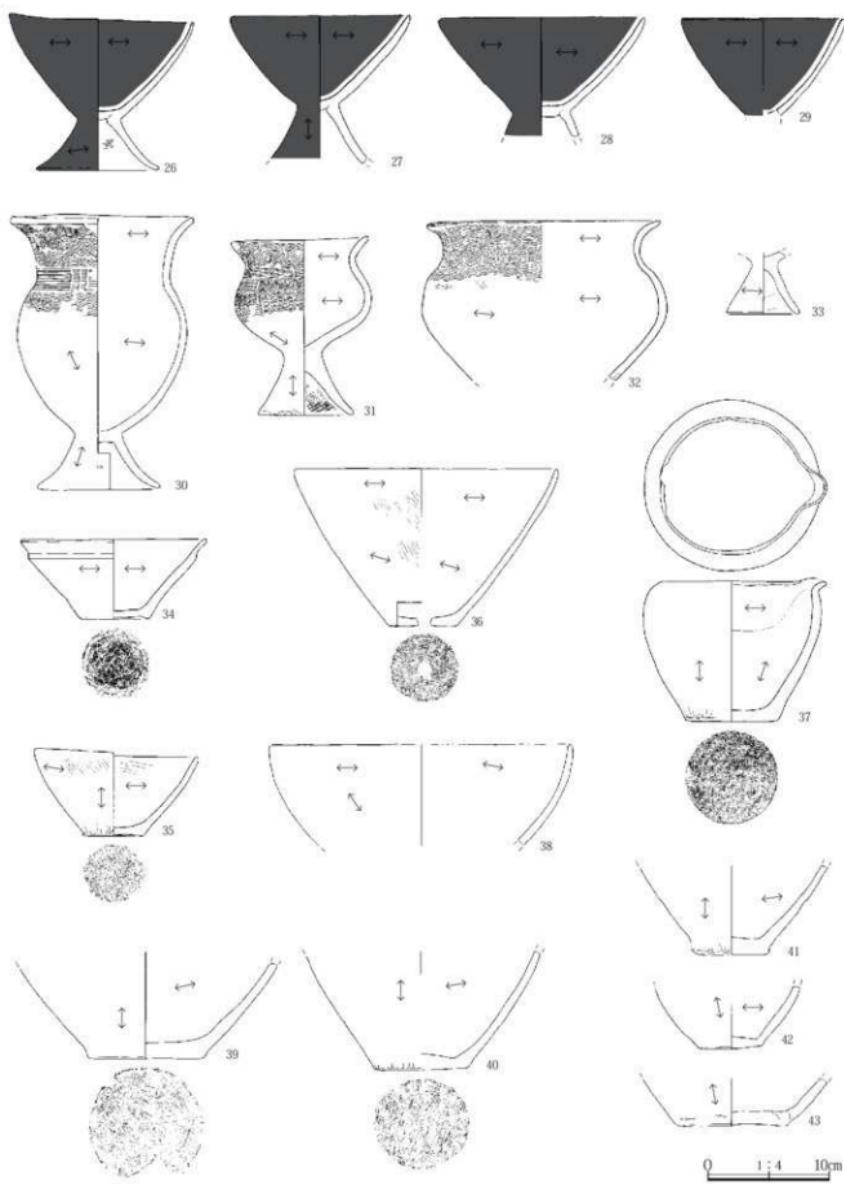
位 置 5区中央西端部にある。 グリッド 2h・2i-43・44 座標値 X=61165～61170, Y=-93212～-93217
遺存状況・重複 建物の北西部隅が掘削されてしまい、また南西部隅は古墳時代の8号竪穴建物により壊されている。また3号掘立柱建物の柱穴により一部壊されている。**埋土状況** 基本土層6層土の黒褐色土により埋



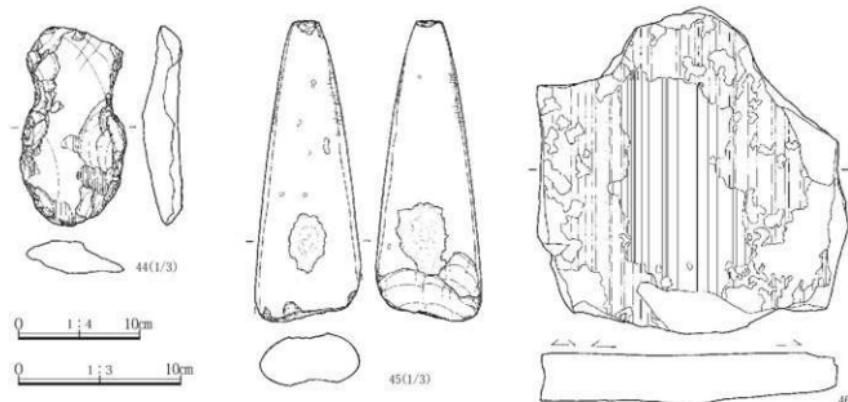
第54図 17号堅穴建物出土遺物図(3)



第55図 17号窯穴建物出土遺物図(4)



第56図 17号堅穴建物出土遺物図(5)



第57図 17号竖穴建物出土遺物図(6)

没する。形 状 長方形 規 模 東西4.82m 南北4.24m 長軸方向 N-0° 床面積 14.965+m² 床面・壁 床面は基本土層の8層の黄褐色ローム土層を一部掘り込んで床面としている。壁の高さは16~26cmで遺存少ない。炉 炉は確認できなかった。柱穴 主柱穴は4本確認した。古墳時代の8号竖穴建物により壊されて柱穴も上部がなくなっているP4を別にすると、長径37~45cm、深さ12~15cmと浅い。柱間は長軸で、2.05~2.25m、短軸で、2.52~2.65mと建物の軸と柱間の軸の方向が異なる。入 口 入口は東方向と推定するが、入口に伴う遺構等は確認できない。床面下 床面は、基本土層8層の小礫混じりの黄褐色土層まで掘り込んで、南東部には小礫が見えている。遺物出土状況・遺物 遺物は、極少量しか出土せず、図示できたのは甕の破片(1)が出土しているのみである。未掲載遺物の器種別構成は、甕類31gのみである。所見・時期 時期は、遺物の甕の様相から、櫛3期に比定する。

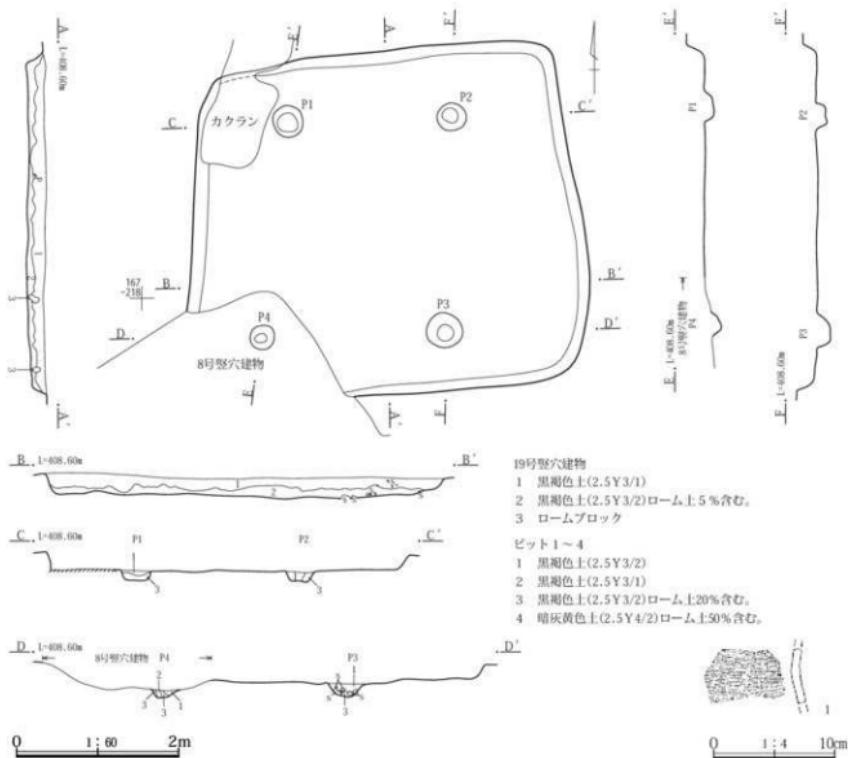
20号竖穴建物(第59図 PL.24)

位 置 6区北端部中央にある。 グリッド 2J-40
座標値 X=61176 ~ 61179 Y=-93195 ~ -93197 遺存状況・重複 西側が古墳時代の15号竖穴建物により壊され、弥生時代の16号竖穴建物にも西南部を壊されている。残りは1/4以下と推定する。埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土により埋没する。形 状 長方形の可能

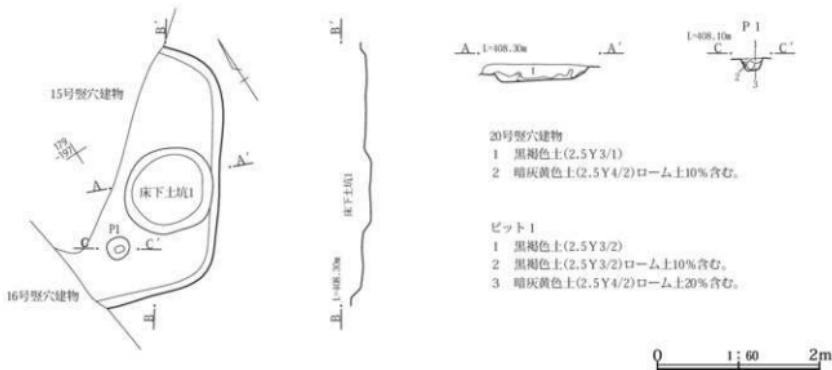
性あり。規 模 東西1.98+m 南北3.06m 長軸方 向 — 床面積 3.248+m² 床面・壁 床面は、整土により下層の礫を隠すように土でならす。壁の高さは5~15cmで遺存度が低い。炉 検出できなかった 柱穴 南東部端で小穴(P1)長径24cm、深さ18cmを確認したが、柱穴であるか確認できない。入 口 入口は南東方向と考えられるが、入口に関係する遺構は認められなかった。床面下 南東部の床下から、長径110cm、深さ18cmの土坑が1基検出された。遺物出土状況・遺物 遺物は、図示できるほどのものはなかった。所見・時期 建物時期は、遺物の出土が無いので、明らかにできない。ただし、古墳時代及び弥生時代の竖穴建物に壊されていることや、縄文時代の遺構が確認できていないことなどから、弥生時代の遺構とし、しかも、弥生時代16号竖穴建物より古い時期とするのが妥当であろう。

21号竖穴建物(第60・61図 PL.25・26・96)

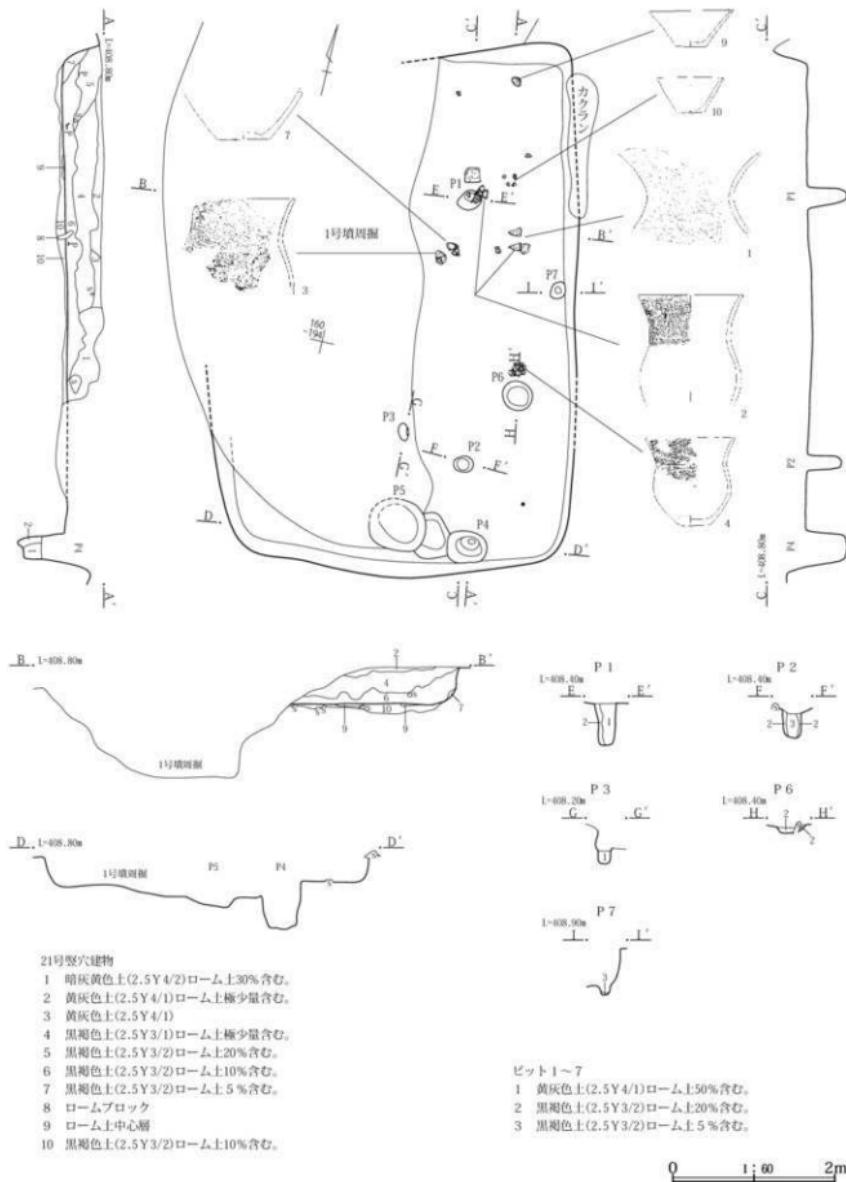
位 置 5区中央やや東より、1号墳の周囲の脇にある。 グリッド 2F・2G-39・40 座標値 X=61157 ~ 61164, Y=-93190 ~ -93195 遺存状況・重複 建物の東半分が遺存している。西半分は1号墳の周囲により壊されている。埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土により埋没する。形 状 長方形 規 模 東西4.45m 南北6.38m 長軸方向 N-12°-W 床面積 11.536+m² 床面・壁 床面は、基本土層の8層の黄褐色ローム土層



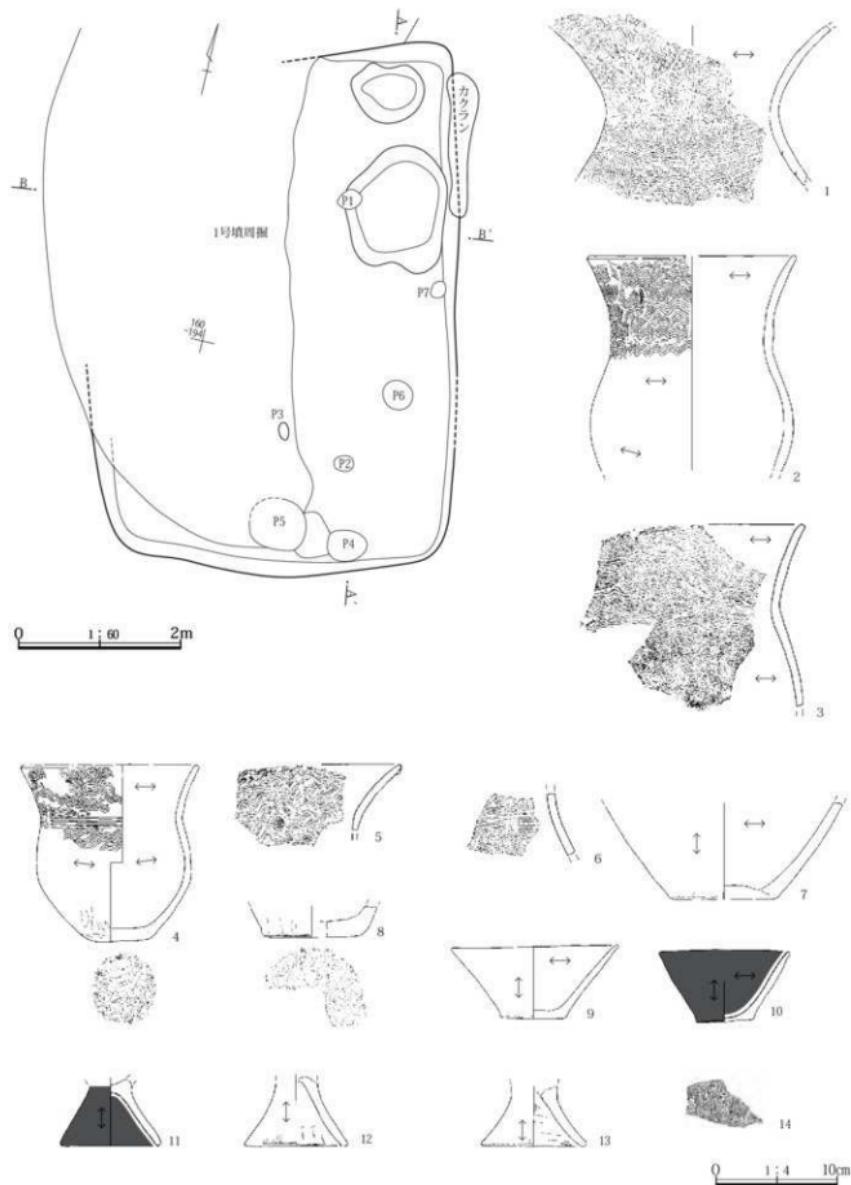
第58図 19号竪穴建物平面図・土層断面図・断面図・出土物図



第59図 20号竪穴建物平面図・土層断面図・断面図



第60図 21号竪穴建物平面図・遺物出土状況図・土層断面図



第61図 21号竖穴建物床下図・出土遺物図

を一部掘り込んでいる。壁の高さは17～47cmある。炉は古墳により破壊され確認できなかった。柱穴柱穴は西側の古墳により破壊された2本を除き東側長軸列の残り2本(P1・2)が確認できた。径31・24cmで、深さは47・42cmであり、径は小さいが深い。北側中央壁際には、壁際柱のP7(径22、深さ13cm)がある。入口 入口は南にある。入口ピットとして想定されるものはP5であるが、径70cm、深さ12cmと深さが少ないのが検討事項である。貯蔵穴 貯蔵穴(P4)は入口すぐ右(東)側に壁に接し長径49cm、深さ47cmである。床面下西側半分は、礫層が一部露出している箇所がある。遺物出土状況・遺物 建物の東部を中心にして北側に小型鉢(9・10)、P1周辺に甕(1)、甕(2・3)がある。甕(8)からイネ?種子(穀果)の圧痕が確認された。出土箇所不明未掲載遺物の器種別構成は、壺類326g、甕類1021g、高杯・鉢が44g、台付甕が87g出土し、全体の出土量は少なめで、特に甕・壺の破片量が多い。所見・時期 時期は、遺物の甕の様相から、樽3期に比定する。

土坑

11号土坑(第62図 PL.27-1・2)

位 置 5区中央部西側10号竪穴建物の中 グリッド2F-44 座標値 X=61154・61155、Y=-93216～-93218
遺存状況・重複 全形遺存、10号竪穴建物により上部が壊されている可能性あり。埋土状況 基本土層6層土(黒褐色土)と7層土(灰黃褐色土)の混じり層 形 状
楕円形 規 模 長径1.76m、短径1.44m、深さ51cm
長軸方向 N-52°-W 遺物出土状況・遺物 遺物は少ないが、底面より3cm上で土器底部が出土している。出土箇所不明未掲載遺物の器種別構成は、壺類37g、甕類21g、高杯・鉢が11g出土している。ただし、上部から出土しているものは、10号竪穴建物の遺物が混入している可能性がある。全体の出土量は少なめである。所見・時期 土器からすると後期に比定される。

17号土坑(第62図 PL.27-3)

位 置 5区中央部西側10号竪穴建物北側 グリッド2F・2G-43 座標値 X=61159・61160、Y=-93212～-93213 遺存状況・重複 北一部遺存、10号竪穴建物により南部分が壊されている。埋土状況 不明 形 状

円弧状 規 模 長径1.00m、短径0.30m、深さ37+cm
長軸方向 不明 遺物出土状況・遺物 なし。所見・時期 弥生時代の10号竪穴建物により壊されているので、10号竪穴建物より前の遺構で、縄文時代の遺構がこの地区で見つかっていないことからとすると、弥生時代の遺構である可能性が高い。

18号土坑(第62図 PL.27-4)

位 置 5区西側南部、17号竪穴建物北東側 グリッド2E-44 座標値 X=61150～61152、Y=-93216～-93218
遺存状況 完存 埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土により埋没する。形 状 楕円形 規 模 長径1.70m、短径1.00m、深さ25cm
長軸方向 N-53°-E 遺物出土状況・遺物 なし。所見・時期 時期の判定は出土遺物が無いため、困難であるが、建物との位置関係などから弥生時代と推定した。

19号土坑(第62図 PL.27-5)

位 置 5区西側北部、11号竪穴建物北側 グリッド2I-42 座標値 X=61171～61173、Y=-93206～-93208
遺存状況 完存 埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土により埋没する。形 状 不整楕円形 規 模 長径2.21m、短径1.74m、深さ25cm
長軸方向 N-47°-W 遺物出土状況・遺物 なし。所見・時期 時期の判定は出土遺物が無いため、困難であるが、遺構確認面などから弥生時代と推定した。

20号土坑(第63図 PL.27-6)

位 置 5区中央北部、16号竪穴建物南側、7号竪穴建物西側にある。グリッド 2I-40 座標値 X=61172・61173、Y=-93196～-93198 遺存状況 完存 埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土により埋没する。形 状 不整楕円形 規 模 長径1.42m、短径1.32m、深さ33cm
遺物出土状況・遺物 なし。所見・時期 時期の判定は出土遺物が無いため、困難であるが、遺構確認面などから弥生時代と推定した。

21号土坑(第63図)

位 置 5区中央北部、12号竪穴建物北東側にある。グリッド 2H-40 座標値 X=61167～61169、Y=-93195

～-93196 遺存状況 完存 埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土により埋没する。 形状 円形 規模 径1.42m、深さ77cm 遺物出土状況・遺物 なし。 所見・時期 深さが他の土坑と比べてある。時期の判定は出土遺物が無いため、困難であるが、遺構確認面などから弥生時代と推定した。

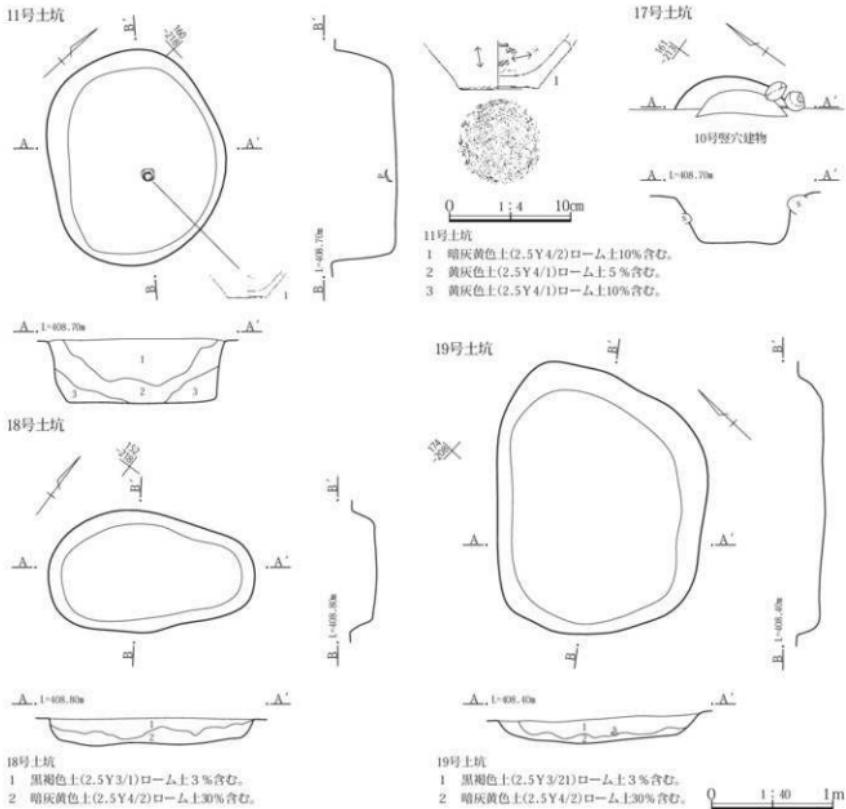
22号土坑(第63図 PL.27-7)

位 置 5区中央部北側、12号竪穴建物北側、21号土坑すぐ西にある。 グリッド 2H-40 座標値 X=61168・61169、Y=-93196～-93167 遺存状況 完存 埋土状況

基本土層6層土の黒褐色土により埋没する。 形状 圓丸長方形 規模 長径1.14m、短径1.01m、深さ14cm 長軸方向 N-90°-E 遺物出土状況・遺物 磨石が出土している 所見・時期 時期の判定は出土遺物が磨石のみのため、困難であるが、遺構確認面などから弥生時代と推定した。

23号土坑(第63図 PL.27-8)

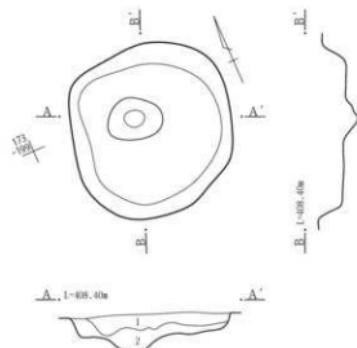
位 置 5区中央部北側、16号竪穴建物南側にある。 グリッド 21-41 座標値 X=61173・61174、Y=-93200～-93201 遺存状況 完存 埋土状況 基本土層6層



第62図 11・17～19号土坑平面図・土層断面図・断面図・出土遺物図

土の黒褐色土により埋没する。形 壓 不整形 規模 長径1.32m、短径1.02m、深さ29cm 長軸方向 N-12°-W 遺物出土状況・遺物 なし。所見・時期

20号土坑



20号土坑

- 1 黒褐色土(2.5Y3/1)ローム上5%含む。
- 2 暗灰黄色土(2.5Y4/2)ローム上30%含む。

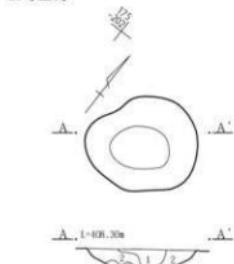
21号土坑

- 1 黒褐色土(2.5Y3/1)
- 2 暗灰黄色土(2.5Y4/2)ローム上含む。
- 3 黒褐色土(2.5Y3/1)
- 4 黒褐色土(2.5Y3/2)ローム上含む。

22号土坑

- 1 黒褐色土(2.5Y3/1)ローム上5%含む。
- 2 ロームブロック
- 3 暗灰黄色土(2.5Y4/2)

23号土坑



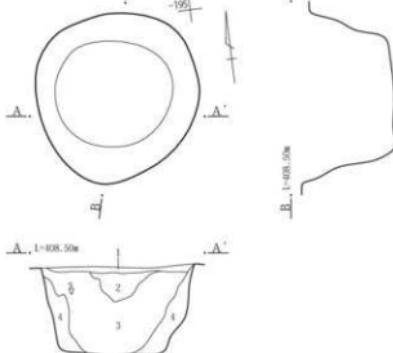
23号土坑

- 1 黒褐色土(2.5Y3/1)
- 2 暗灰黄色土(2.5Y4/2)
- 3 暗灰黄色土(2.5Y4/2)ローム上含む。

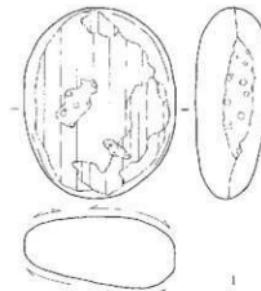
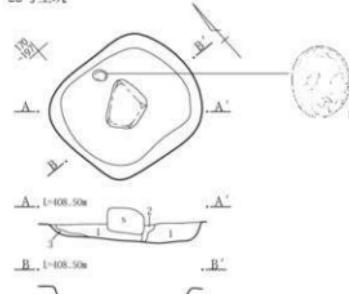
0 1:40 1m

時期の判定は出土遺物が無いため、困難であるが、遺構確認面などから弥生時代と推定した。

21号土坑



22号土坑



0 1:3 10cm

第63図 20～23号土坑平面図・土層断面図・断面図・出土遺物図

遺構外遺物(第64～66図 PL.96)

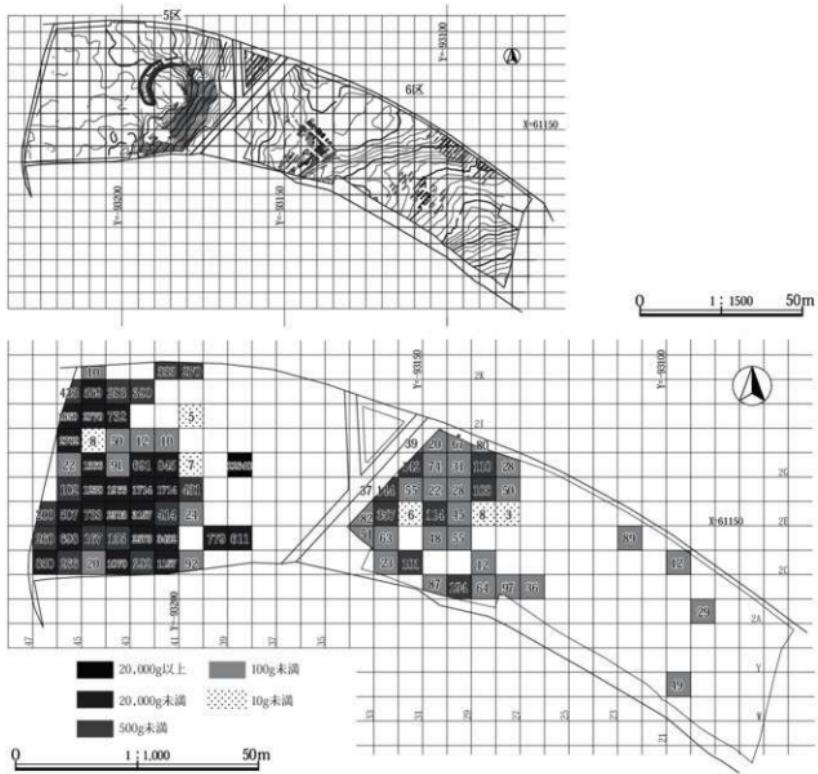
弥生時代の遺構外遺物はかなり多くの遺物が出土している。グリッドごとの重量の度数分布図で示した(第64図)。5区からは特に多いが、弥生時代の遺構が検出されなかった6区でも弥生時代の遺物が出土している。

5区では、1号埴付近に22,000g以上の土器が出土しており、これは1号埴により上部及び西側1/3が壊されている21号竪穴建物の遺物が多く入っていることからする集中度と思われる。500g以上～20,000g未満の土器は、5区の中央部を中心に分布しており、弥生時代の竪穴建物の分布とある程度一致するものである。100g以上～500g未満の土器は、南部と北部に主に分布している。

10g以上100g未満、10g未満は、やはり、北と南の一部に分布する。

6区は、土器の分布は西側に偏っている。しかし、全体として5区に比べて圧倒的に少ない。多くても一部に100g以上500g未満で分布するのみで、10g以上100g未満が多く、西側を中心に多くがこの分布である。10g未満も3ヶ所ほどある。気を付けたいのは、東側からも4ヶ所で、10g以上100g未満の土器が分布していることで、弥生時代を含めて遺構が極めて少ない地点でも弥生土器がある程度分布することから、この地点でも生活空間としての利用があった可能性がある。

遺構外遺物の中で、いくつか図化した(第65・66図)。土器と圧痕同定を行った土器である。弥生時代以外の遺



第64図 弥生土器 分布図

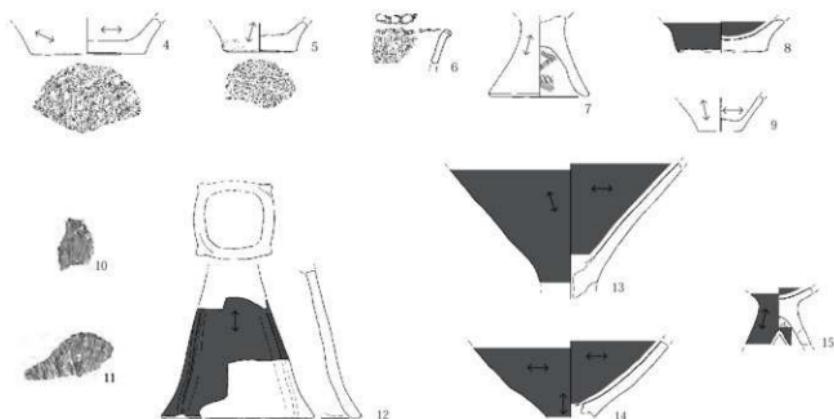
構中より出土、グリッドから出土、各区から出土したもののは順にあげた。甕(4・5・10・38・40・46・47)、壺(45)からは、イネの穂が1つずつ、台面甕(22)にはイネ

の穂が4個、甕(39)にはイネの種子(穎果)があることが、圧痕の同定により明らかになった。先述したように、弥生時代の遺構の無い6区からも遺物が出土していることが分かる。

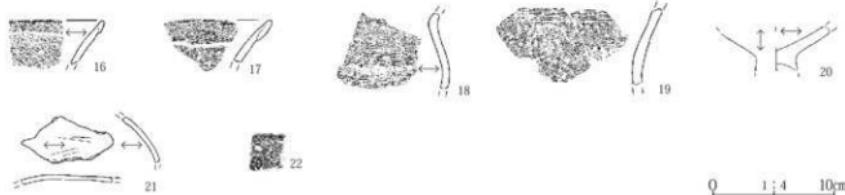
6号堅穴建物



1号墳

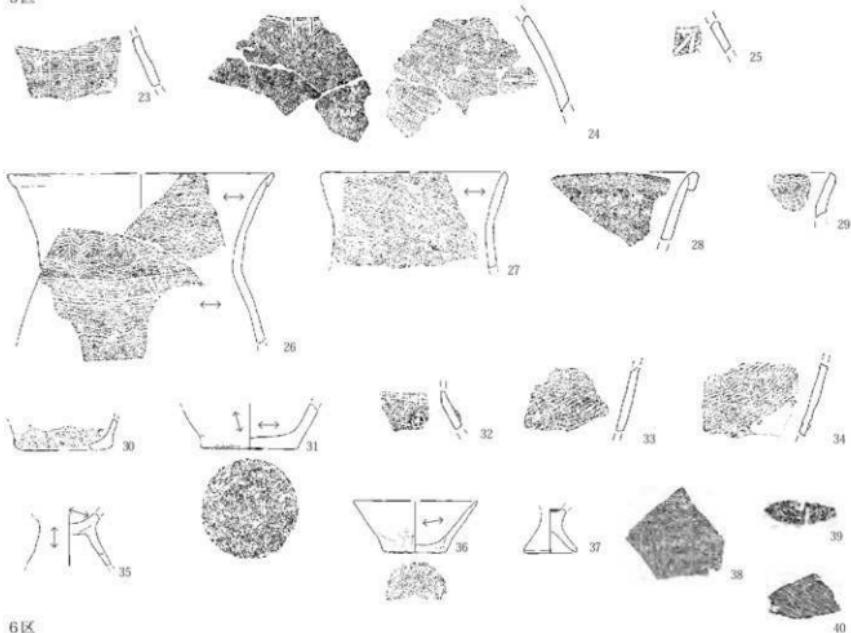


2号墳

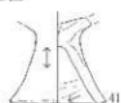


第65図 弥生土器 遺構外出土遺物図(1)

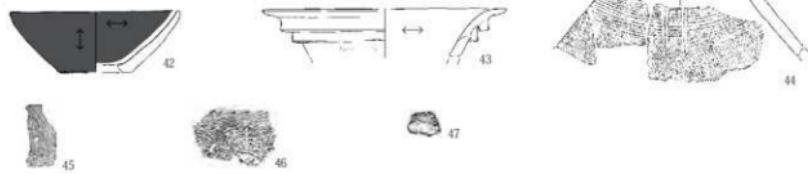
グリッド
5区



6区



一括
5区



6区



0 1:4 10cm

第66図 弥生土器 遺構出土遺物図(2)

第4節 古墳時代

全体状況(第67図)

古墳時代の遺構は、竪穴建物3棟、竪穴状遺構3棟、掘立柱建物3棟、古墳3基、土坑7基などが調査された。第67図にあるように、遺構が集中するのは、東の6区から5m程の比高を有した高い面の5区にある。基本的に居住域及び墓域として5区は利用されていたと思われる。反対に6区は、土坑が少し認められるのみで、弥生時代同様あまり利用されていなかった地区と思われる。古墳が6世紀後半から7世紀後半まで、段丘崖際に、南北東方向に石室を開口して並列して構築されている。竪穴建物は、6世紀代を中心構築されているので、5区においては、古墳と居住域が共存する期間がある。竪穴建物や掘立柱建物の方向は、主軸が北西方向に向くものが

ほとんどで、その方向が少し西に傾くものもある。古墳の主軸方向と竪穴建物などの方向がほぼ同じで、全体に統一的である。

5・6区をまとめて説明する。竪穴建物、竪穴状遺構、掘立柱建物、古墳、ピット、土坑の順で説明する。

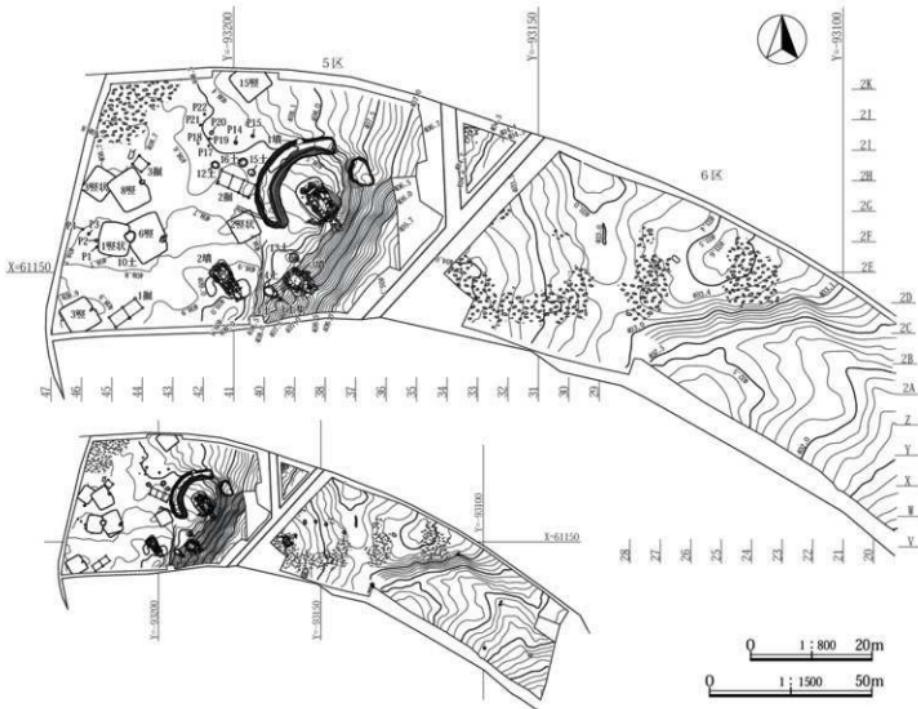
竪穴建物

3号竪穴建物(第68~71図 PL.28・29・96・97)

位 置 5区南西端部にある。グリッド 2C・2

D-45・46 座標値 X=61140 ~ 61146, Y=-93221 ~ -93228 遺存状況 南西部隅が調査区外で調査できず。

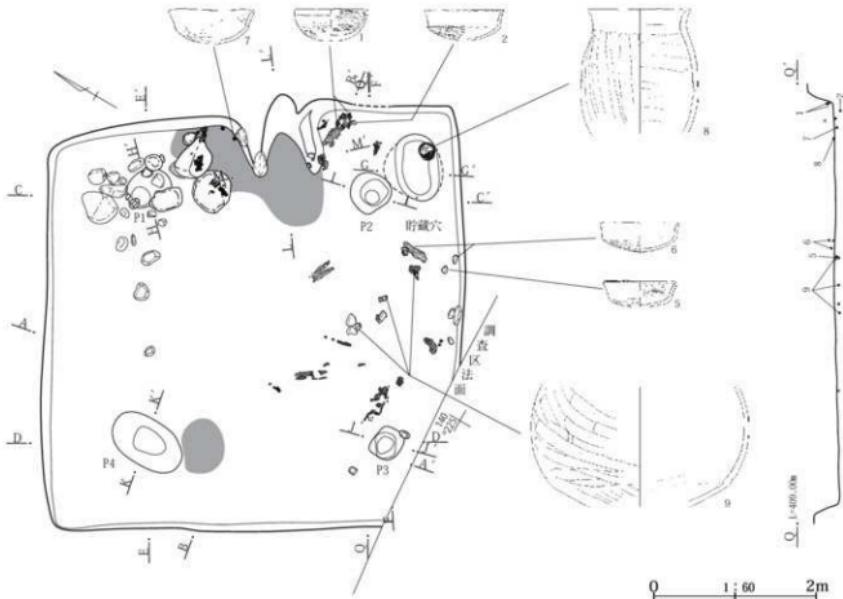
重複 無し。埋土状況 基本土層6層上の黒褐色土により埋没する。形 状 方形 規 模 東西5.5m 南北5.56m 方 向 N-59°-E 床面積 23.136m² 床面・壁 床面は、基本土層の8層の黄褐色ローム土層



第67図 古墳時代面全体図

を一部掘り込んで、凹部に上層の黒褐色・灰黄褐色土を埋めて整えている。壁の高さは22～45cmで、ある程度遺存している。カマド カマドは北東方向に向いている。カマド袖は、向かって左側の袖は棒状の石を内部に入れており、向かって右側の袖は主に土により袖を構築している。カマドの破壊がかなり進んでおり、本来の形状は復元できない。煙道も短く、壁より20cmほど外側に斜めに立ち上がる。燃焼部を中心に焼土面が掘がっている。柱穴 柱穴は4本確認できた。P1～P3は、深さ60cmを有するもので、長径は40～55cmである。P4は、長径95cmで深さ40cmである。柱間は2.95～3.10mである。入口 入口は南西辺にあると推定する。床面下 床面は、先述したように基本土層8層の黄褐色ローム土層を活かしながら柱穴の周囲を幅1.0～1.1m、深さ20～30cmほど掘り込むようにして、掘方を形成している。四周の掘方には、基本土層8層の黄褐色ローム土を入れて、低くなった部分を床面と同じレベルまで高めている。遺物出土状況・遺物 遺物は、カマド周辺から須恵器模倣杯が2点(2・7)、内湾口縁杯(1)1点の

計3点、建物の東壁近くから須恵器模倣杯2点(5・6)、甕(9)、貯蔵穴の上部から甕(8)が出土している。また、炭化材が、カマド左右、東壁付近から出土している。さらに、8～48cmの大小の礫がカマド左袖から、北西壁に沿って床面やや上から出土している。おそらく、建物廃絶後、カマドに使用した石を含めたものを廃棄したものと考える。杯は、須恵器模倣杯が中心(2～7)で、一部内湾口縁杯の系統の杯(1)がある。やや長胴化が見え始めた甕(8)や大型の甕(9)も出土している。未掲載遺物の器種別構成は、壺・甕類1660g、杯・椀類99g、高杯他類132gである。壺甕類が多く出土している。また、重要な遺物として、穂摘具(11)の存在がある。金井東裏遺跡の3号祭祀では多数の穂摘具が出土したが、極めて小型のものが多く、祭貝の可能性を考えていた。ここで小型の穂摘具が建物から出たことで、実用具の可能性も考える必要が出てきた。炭化材が主に東壁付近とカマド周辺を中心に出土しており、この建物が焼失した建物である可能性を示している。所見・時期 四周を掘る掘方は竪穴建物でいくつかの類例がある。それに対して、渋



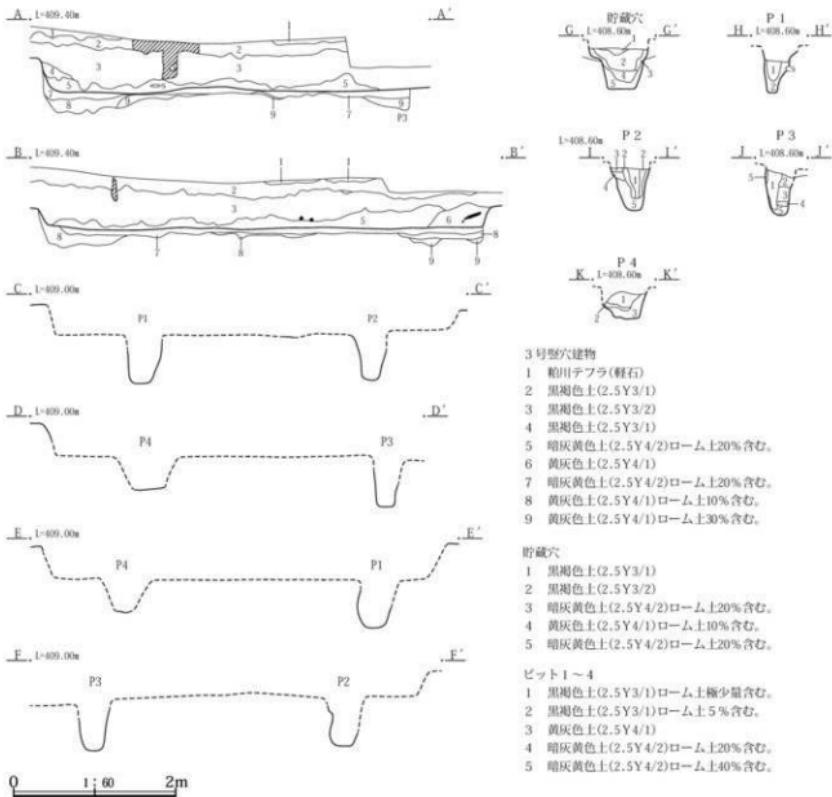
第68図 3号竪穴建物平面図・遺物出土状況図

川市金井東裏遺跡では、四周を掘削して、柱穴を掘った後に床面である中央部を平坦化せずにさらに、四周の溝状構造を平坦にした後、全体を埋めている。金井東裏遺跡例を、建物建造を途中で止めたと解釈せず、建物の儀礼行為の表現としたことについて継続的な検討が必要である。時期は、須恵器模倣杯(2~7)が中心の構成と、杯の口辺が外反する特徴などから6世紀第1四半世紀とする。

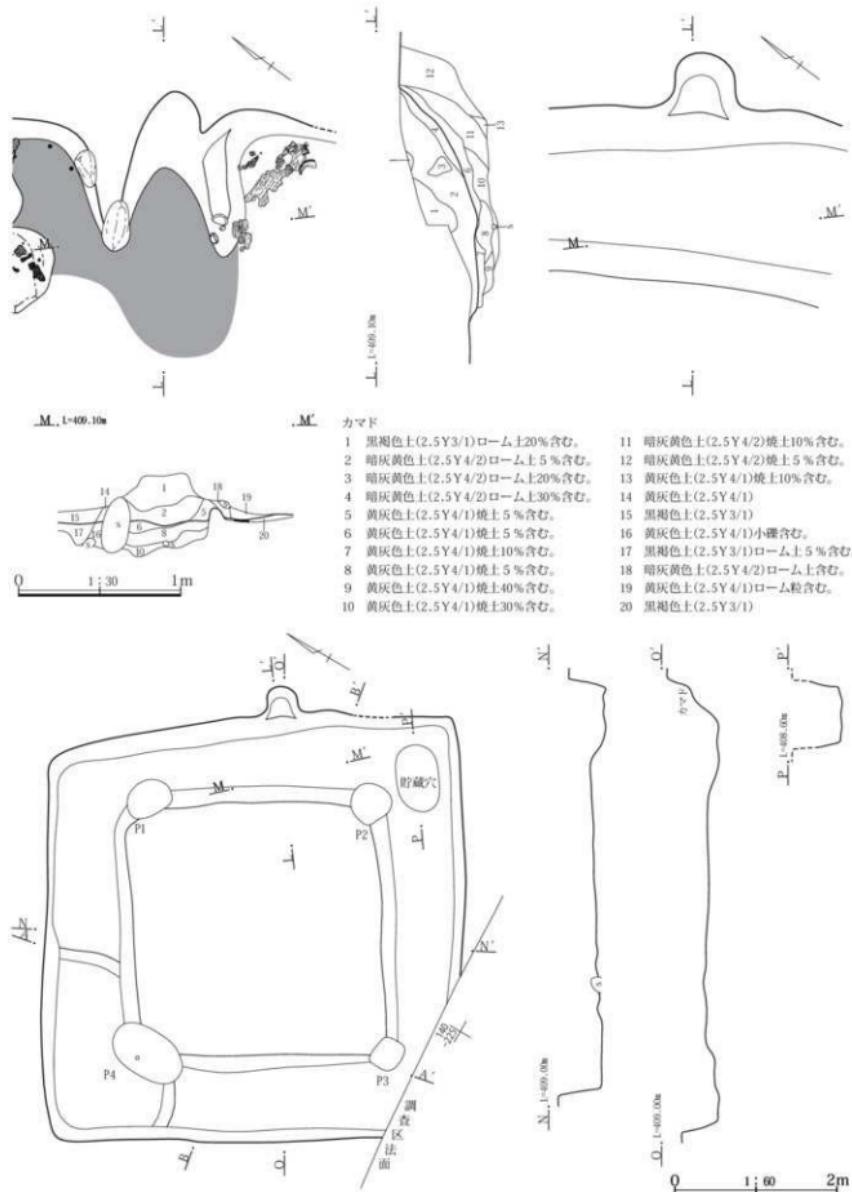
6号竪穴建物(第72~74図 PL.31・32・97)

位 置 5区南西部 1号竪穴状遺構東にある。 グリッ

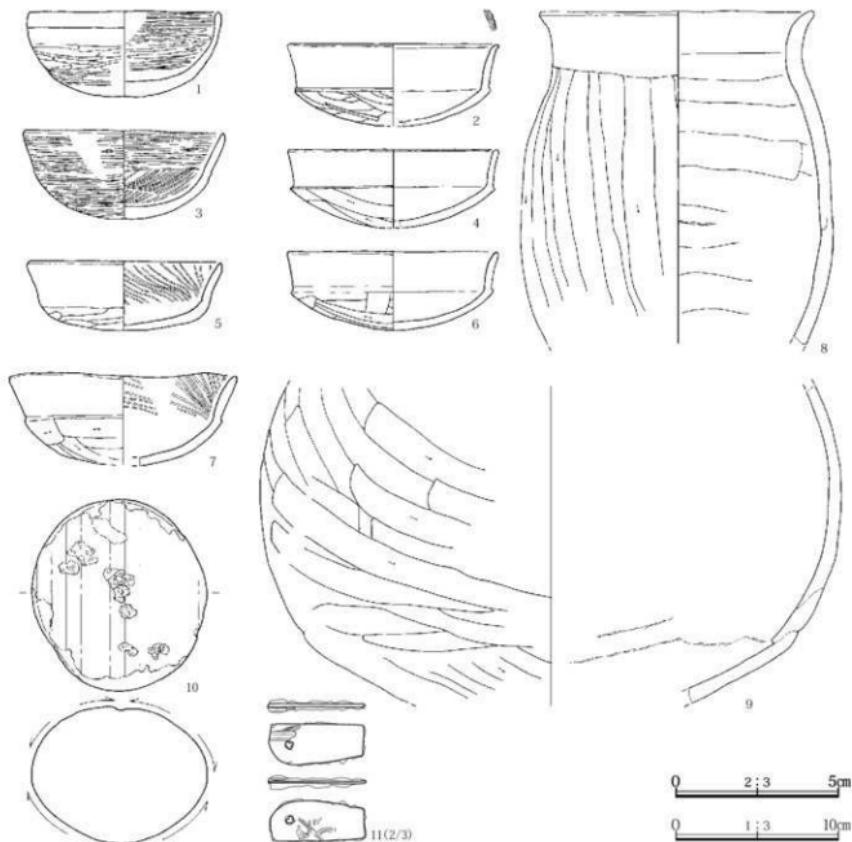
F 2E・2F-43・44 座標 値 X=61152 ~ 61159, Y=-93210 ~ -93217 遺存状況・重複 西側に1号竪穴状遺構と10号土坑により壊されている。古い順に6号竪建→1号竪状→10号土坑という順番になる。 埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土により埋没する。 形 状 不整長方形 規 模 東西6.12m南北7.10m 長軸方向 N-65°-E 床面積 37.061+㎡ 床面・壁 床面は、基本土層の8層の黄褐色ローム土層を一部掘り込み、四部に上層の黒褐色・灰黄褐色土を埋めて整えている。壁の高さは23~38cmで、ある程度遺存している。 カマド カマドは北東方向に向いている。カマド袖は、両袖ともに棒状の石を内部に入れて構築している。特に袖先



第69図 3号竪穴建物土層断面図・断面図



第70図 3号堅穴建物力マド図・土層断面図・堅穴建物床下図・断面図



第71図 3号竪穴建物出土遺物図

端近くの石は縦置きにして、袖の形状の基礎を形作っている。煙道も短く、壁より8cmほど外側に斜めに立ち上がる。燃焼部を中心で焼上面が拡がっている。柱穴
明瞭な柱穴は確認できていない。P2は、東辺北寄りに、径47cm、深さ15cmと深さが無い。西辺中央近くにP1があり、径53cm、深さ55cmで深さがある。南部中央で長径24～38cm、深さ14～20cmのP3～5の小穴を検出した。これらのうちの一部が柱穴となる可能性がある。

入口 入口は南西辺にあると推定する。床面下 床面は、先述したように基本土層8層の黄褐色土層を活かして形成しており、床下の特別な掘方は認められ無い。

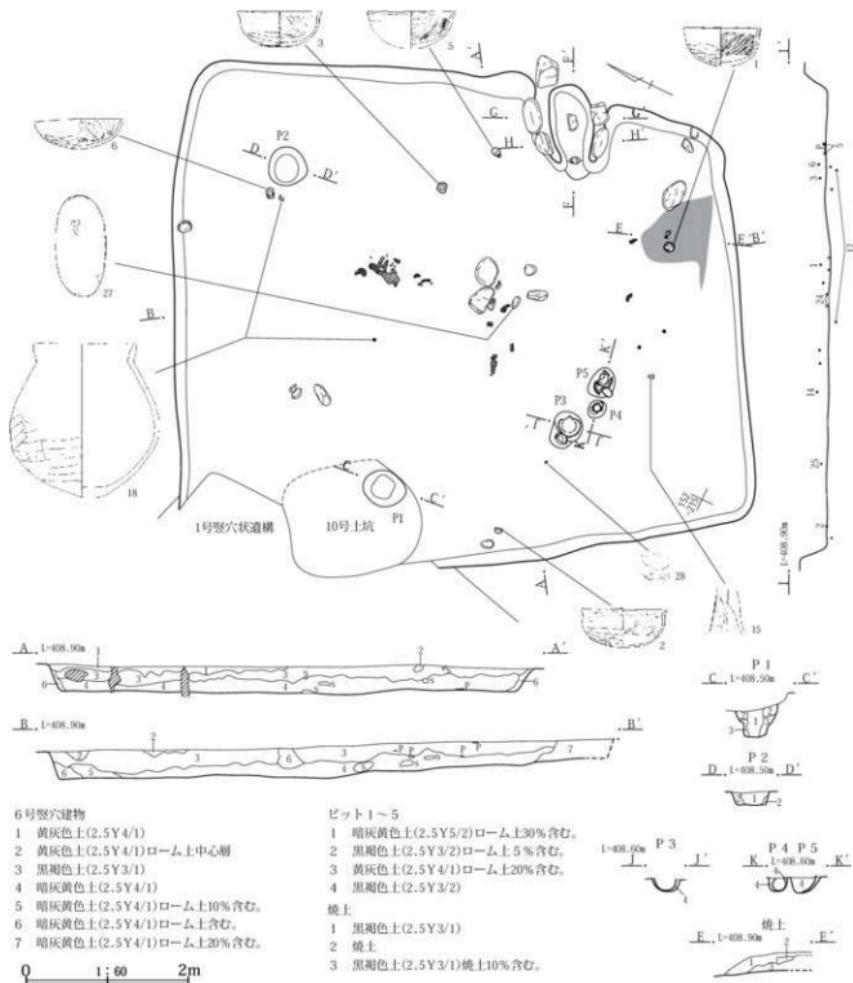
遺物

出土状況・遺物 遺物は、カマド周辺から内斜口縁杯が3点(1・3・5)、建物の南壁近くから高杯脚部(15)、北壁近くから内湾口縁杯(6)、南壁付近から内斜口縁杯(2)と紡輪(28)、中央部から壺(18)が出土している。いずれも床面よりやや上からの出土である。出土位置不明の掲載遺物を含めて土器の様相を見ると、内斜口縁杯で、口唇部が上に屈曲して立ち上がるものが主で、それに対し内湾口縁杯が組み合わさるもので、須恵器模倣杯はない。高杯は、長脚のものと短脚のものが混じり、甕は長胴化以前のものである。未掲載遺物の器種別構成は、壺・甕類4862g、杯・椀類835g、高杯他類133gである。他に、

磨石(27)、紡輪破片(28)が出土している。特に紡輪の出土は注意しておく必要がある。 所見・時期 カマドの袖内に棒状の石を組み入れている。建物時期は、土師器杯を見ると先述したように、内斜口縁杯の古いタイプがほとんどで、高杯脚部の長脚の存在や長胴化以前の甕などを見るに、時期は5世紀第3四半期と想定される。

8号竪穴建物(第75～78図 PL.32・33・98)

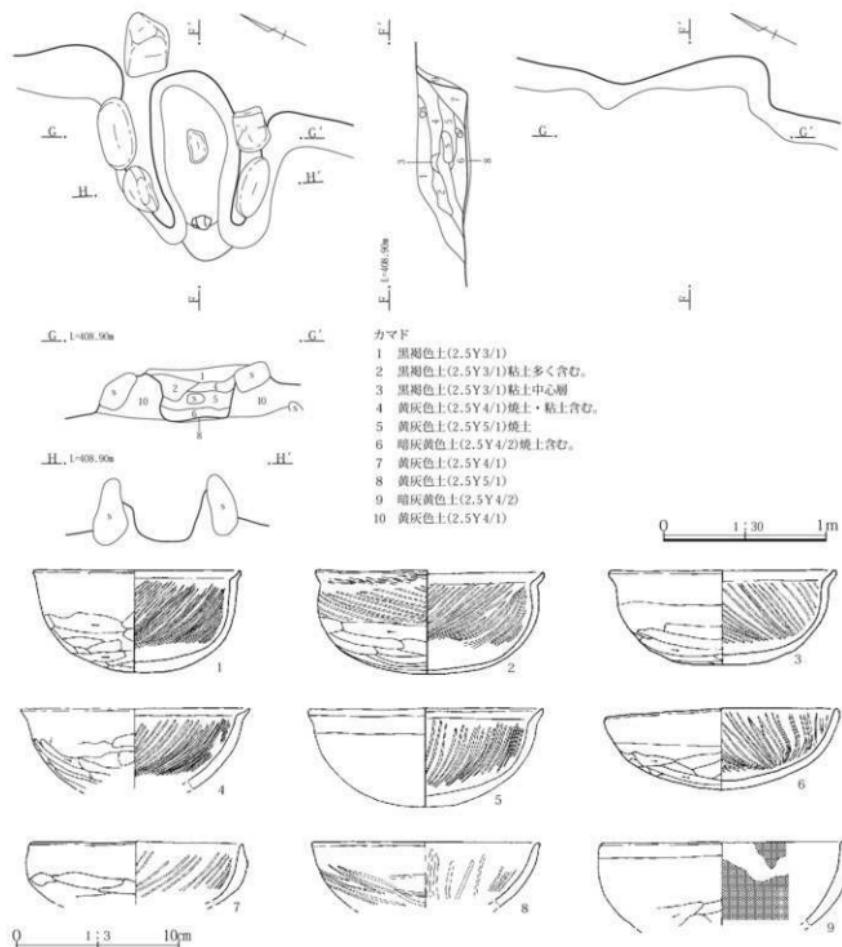
位 置 5区西部中央 3号竪穴状遺構東にある。 グリッド 2F～2H-43～45 座標値 X=61159～61167、Y=93213～93220 遺存状況・重複 建物全体が遺存している。西側の3号竪穴状遺構を壊している。 埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土により埋没する。 形



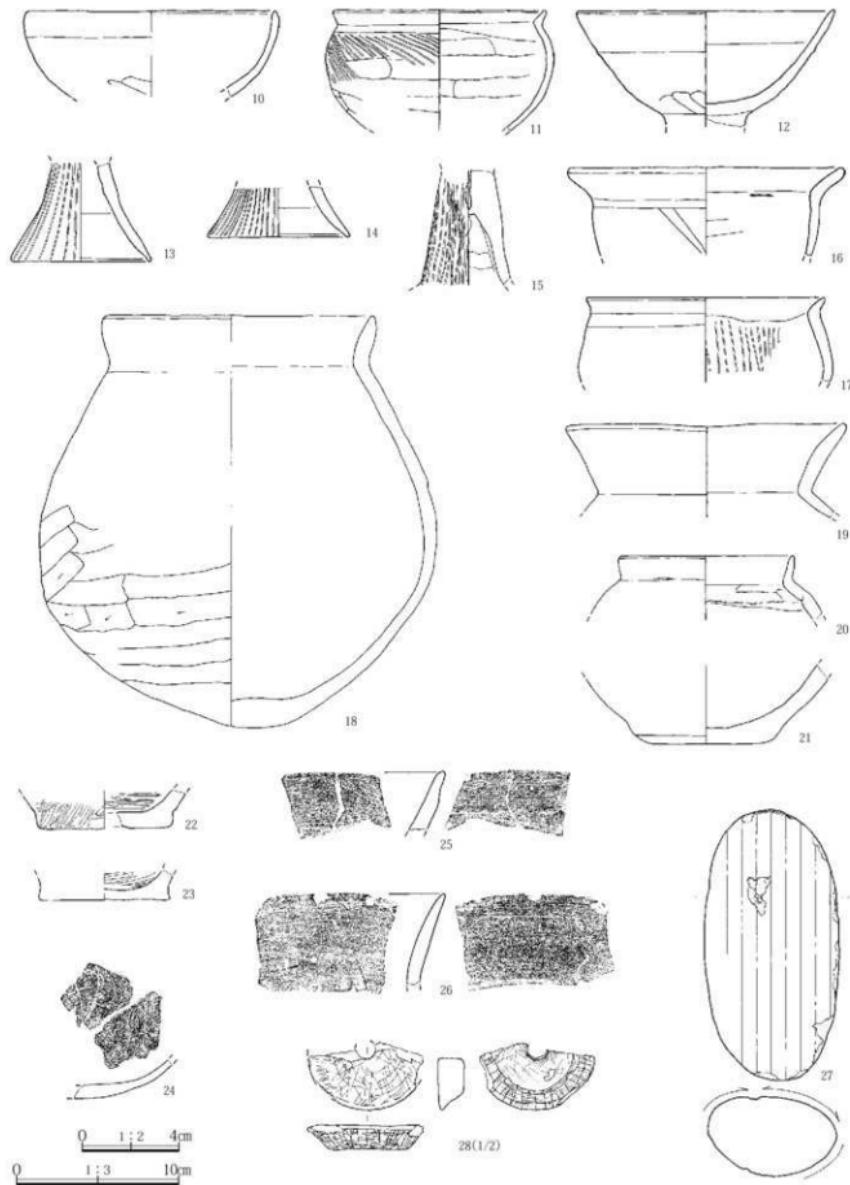
第72図 6号竪穴建物平面図・遺物出土状況図・土層断面図

状 方形 規 模 東西5.24m南北6.30m 長軸方向N-60°-E 床面積 28.5m² 床面・壁 床面は、基本土層の8層の黄褐色ローム土層を一部掘り込んで、凹部に上層の黒褐色・灰黃褐色土を埋めて整えている。壁の高さは31~46cmあり、ある程度遺存している。 カマド カマドは北東方向に向いている。カマド袖は、両袖とともに袖先端近くの石は縦置きにして、袖の形状の基礎

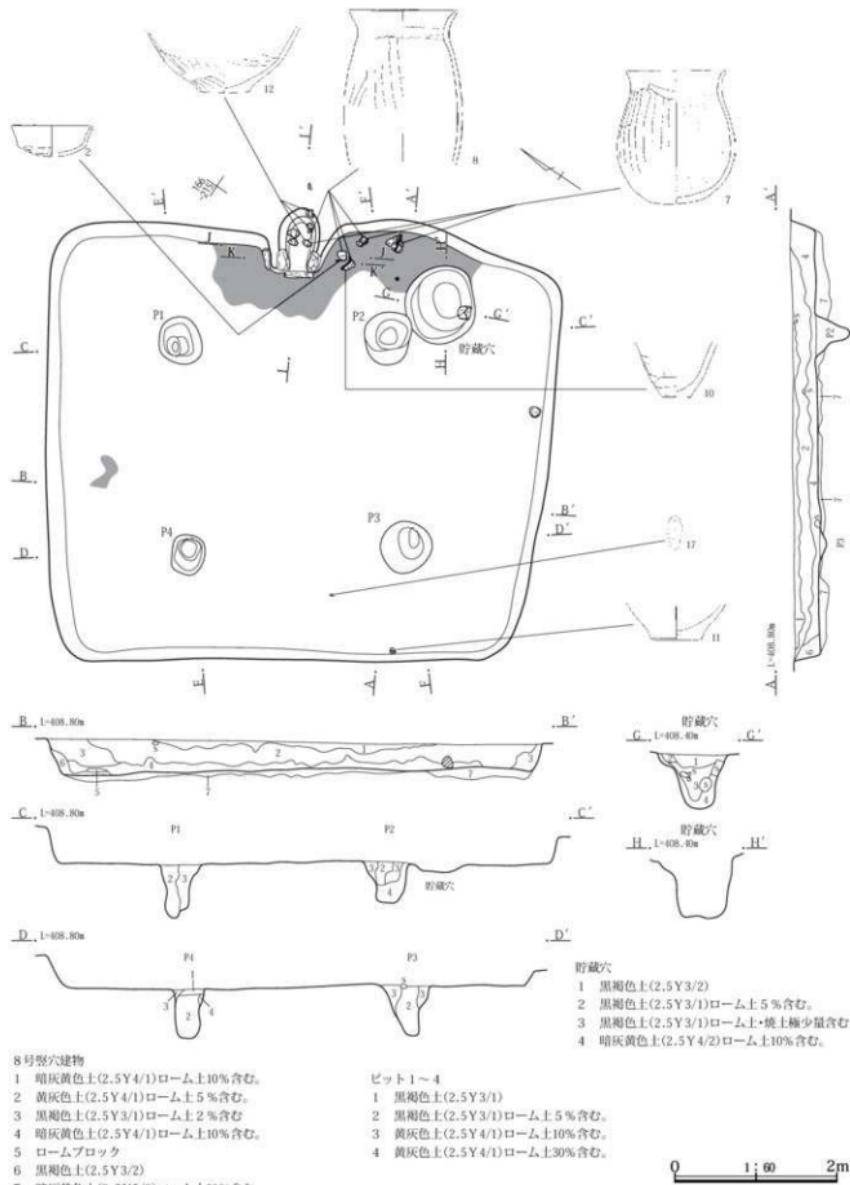
を形作っている。煙道も短く、壁より35cmほど外側に斜めに立ち上がる。燃焼部に焼土面が拡がっている。 柱穴 4本の柱穴が確認できている。P1~P4は、長径49~62cmを有するもので、深さは50~65cmである。柱間は2.55m~2.75mである。 貯藏穴 カマドに向かって右の南東隅に長さ90cm、幅80cm、深さ75cmで構築されている。 入口 入口は南西辺にあると推定する。



第73図 6号竪穴建物カマド図・土層断面図・出土遺物図(1)



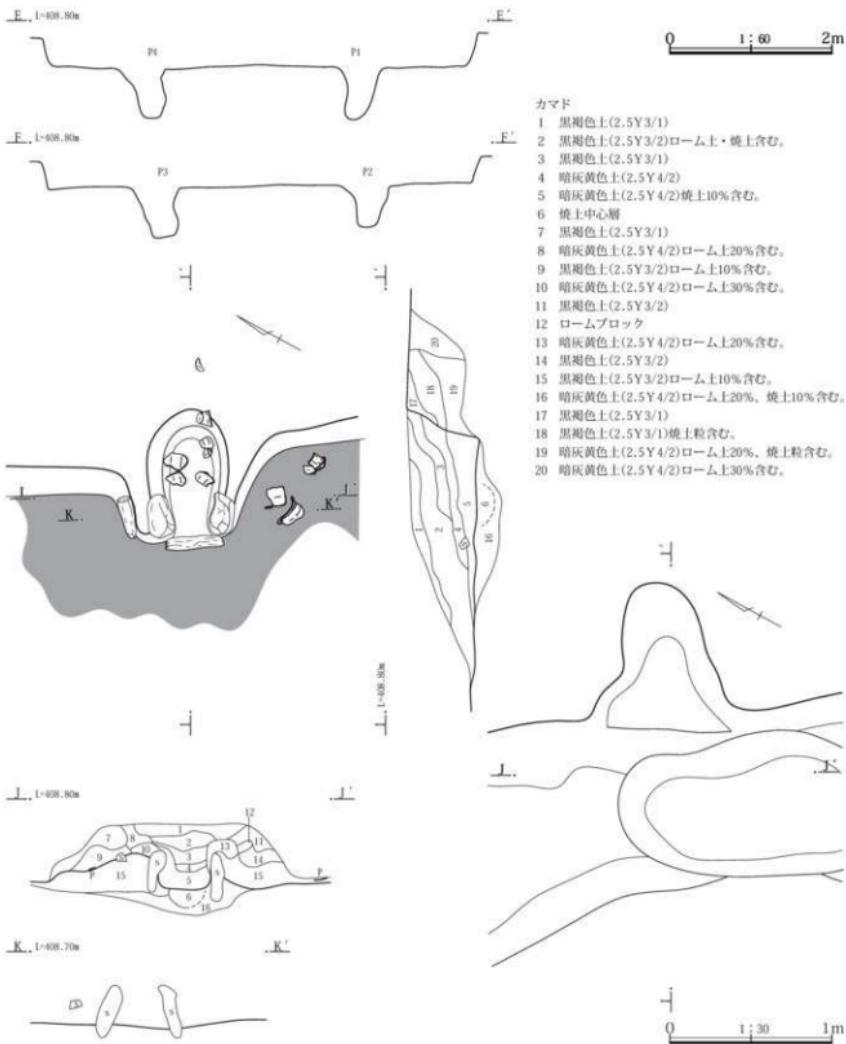
第74図 6号窯穴建物出土遺物図(2)



第75図 8号竖穴建物平面図・遺物出土状況図・土層断面図

床面下 床面は、四周を幅0.9～1.5mの幅で6～10cm掘くぼめている。その溝状の窪みに暗灰黄色土を埋めて床面を形成している。また、カマド向かって右下側に長165cm、幅95cm、深さ7～10cmの掘方もある。 遺物出

土状況・遺物 遺物は、カマド向かって右側から甕(7)、底部(12)、須恵器模倣(2)、甕(10)が出土している。入口付近では、剣形石製模造品(17)が出土している。掘方南東部より土製勾玉(16)が出土している。出土



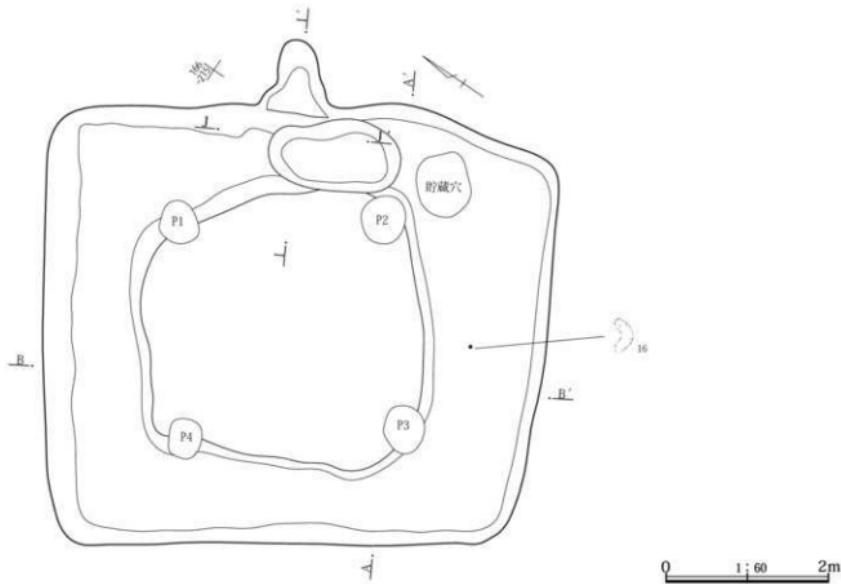
第76図 8号竖穴建物断面図・カマド図・土層断面図

位置不明の土器を含めてみてみると、須恵器模倣杯の口辺部が外反しているもの(1～4)を中心に構成されている。壺は長胴化したもの(8)がある。掘方からの土製勾玉の出土や入口部での劍形石模倣品の出土など、建物儀礼に関わる可能性がある遺物群の出土がある。未掲載遺物の器種別構成は、壺・壺類2210g、杯・椀類255g、高杯他類162gである。壺・壺の出土比率が高い。**所見・時期** 四周を溝状に掘る掘方を有する建物で、3号竪穴建物と同様の造りを行っている。建物の時期は、須恵器模倣杯の外反タイプが中心であり、6世紀第1四半世紀と推定する。

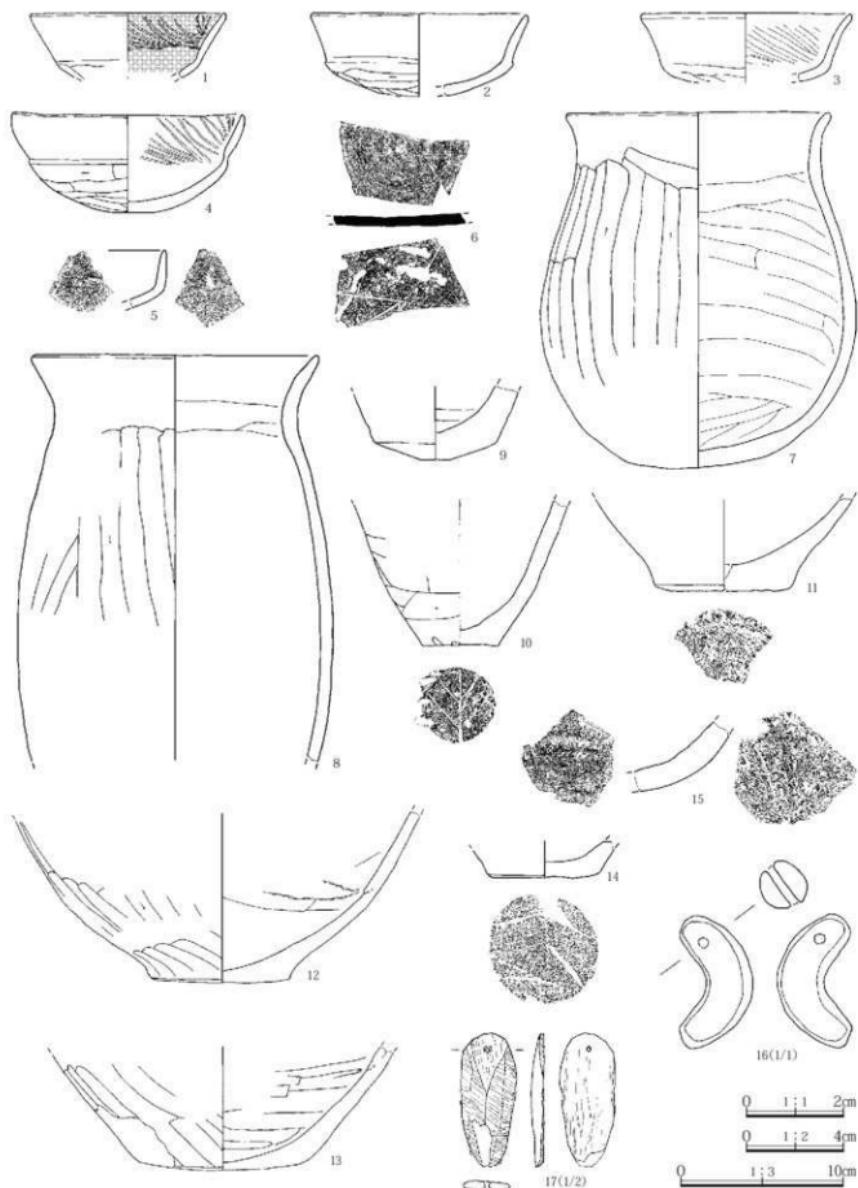
15号竪穴建物(第79～81図 PL.34・35・98～100)

位 置 5区北部調査区境界部にある。 グリッド2J・2K-39～41 座標値 X=61178～61182、Y=-93193～-93200 遺存状況・重複 北部が調査区外で、北側コーナーが未調査である。深さが浅く、遺存状況は悪いが外形は残る。重複は認められ無い。 埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土により埋没する。 形 状 方形

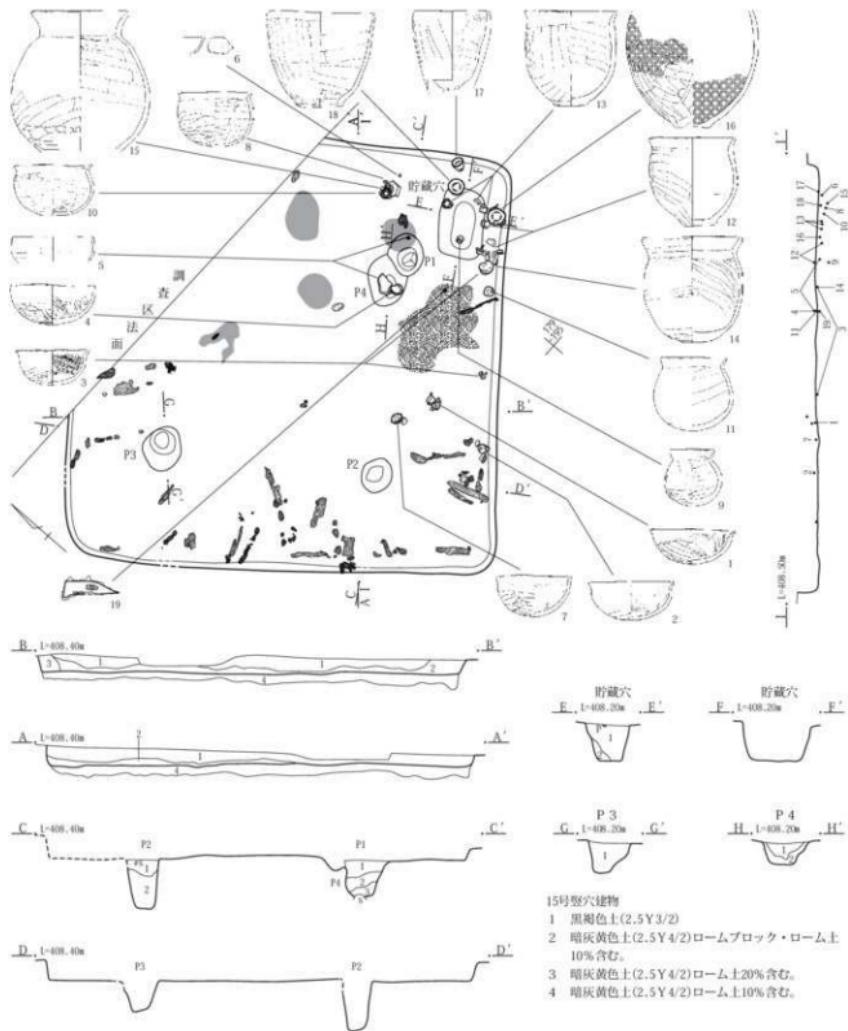
規 模 東西5.18m、南北5.26m 長軸方向 N-51° -E 床面積 21.349m² 床面・壁 床面は、整土により下層の礫を隠すように土でならす。壁の高さは6～27cmで遺存度が低い。 炉・カマド 炉・カマド共に確認できなかった。 柱 穴 北部の柱穴以外の3つの柱穴P1～P3を検出した。長径47～54cm、深さ40～62cmである。P1のすぐ横から古い柱穴と推定する長径62cm、深さ26cmのP4が確認された。P1の前段階の柱穴と推定する。柱間は、2.65mである。 貯藏穴 東側に長さ85cm、幅55cm、深さ45cmの貯藏穴がある。 入 口 入口は他の竪穴建物から考えると西方向と推定している。 床面下 床面下から礫が出土するので、それを土で覆っている。南東辺沿いにやや深く掘削した痕跡がある。 遺物出土状況・遺物 遺物は、貯藏穴及びその周辺からと、P1・4周辺、南部の3ヶ所に集中する。貯藏穴の中からは、小型壺(9・13)が2個出土している。貯藏穴東側からは、壺(16)・小型壺(11・12・14)が集中する。貯藏穴の北側には、甌(18)と多孔甌(17)が出土しており、特に多孔甌は重要である。貯藏穴南には、刀子



第77図 8号竪穴建物床下図



第78図 8号竖穴出土遺物図



貯藏穴

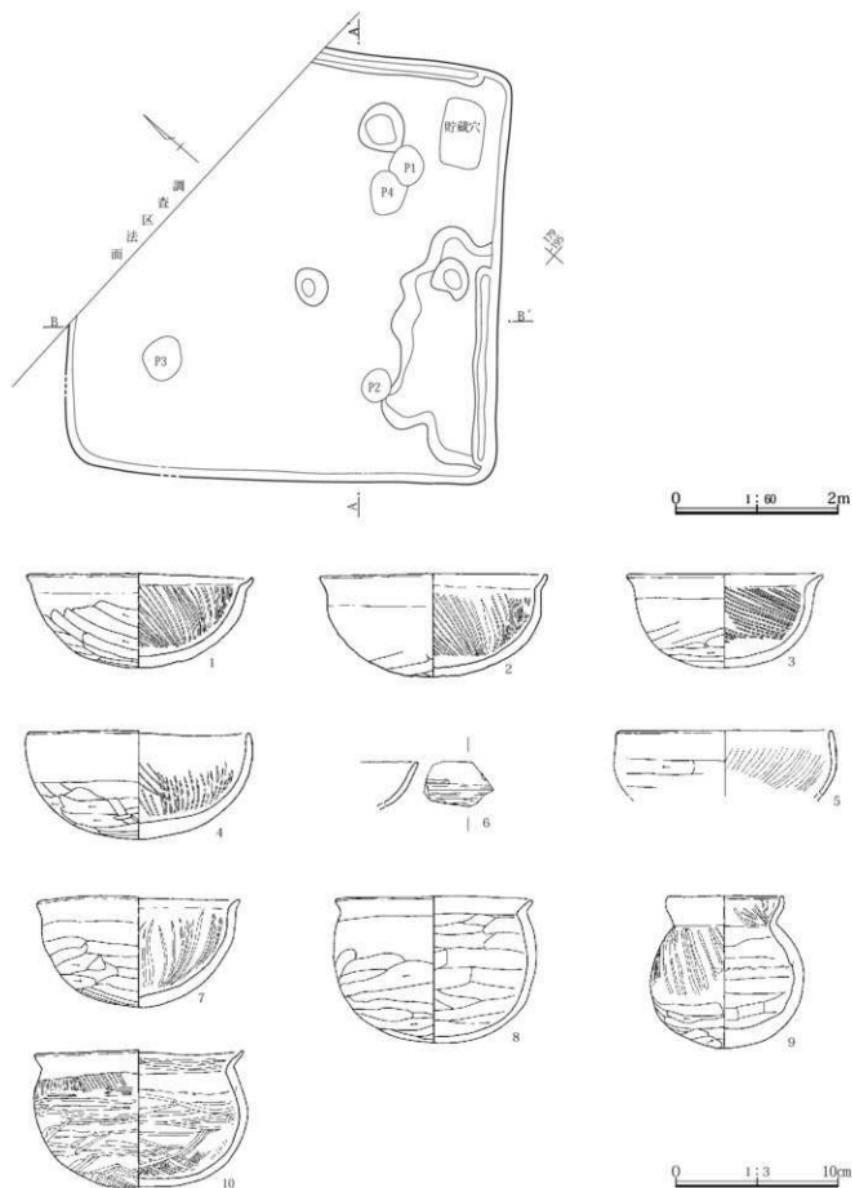
- 1 噴灰黄色土(2.5Y4/2)炭化物・焼上を極少量含み、堆積密で粘性あり。土器片を含む。
- 2 噴灰黄色土(2.5Y4/1)ローム粒・ローム小ブロックを含み、堆積密で粘性あり。

ピット1~4

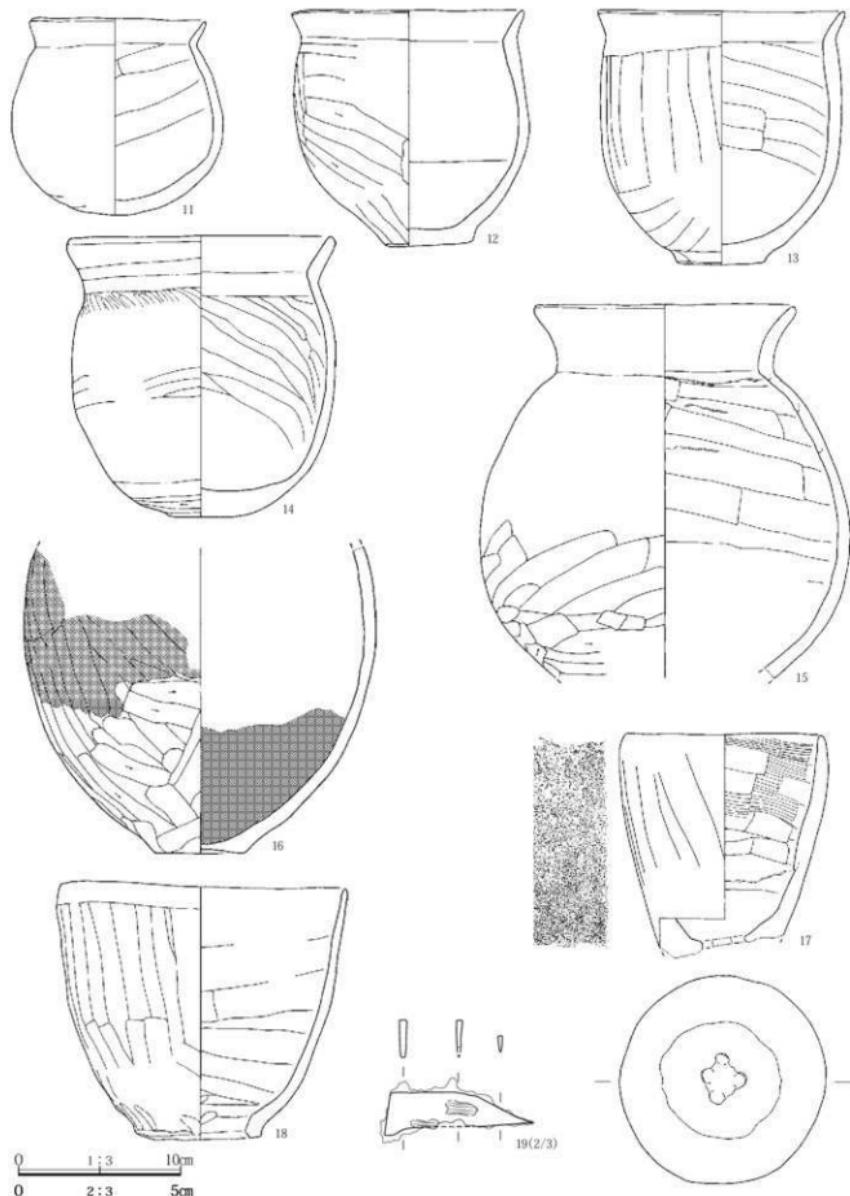
- 1 噴灰黄色土(2.5Y4/2)ローム粒・ロームブロックを極少量含み、堆積密で粘性あり。
- 2 噴灰黄色土(2.5Y4/2)ロームブロックをやや多く含み、堆積密で粘性あり。
- 3 噴灰黄色土(2.5Y4/2)大型のロームブロックを多く含み、堆積密で粘性あり。

0 1:60 2m

第79図 15号竪穴建物平面図・遺物出土状況図・土層断面図



第80図 15号堅穴建物床下図・出土遺物図(1)



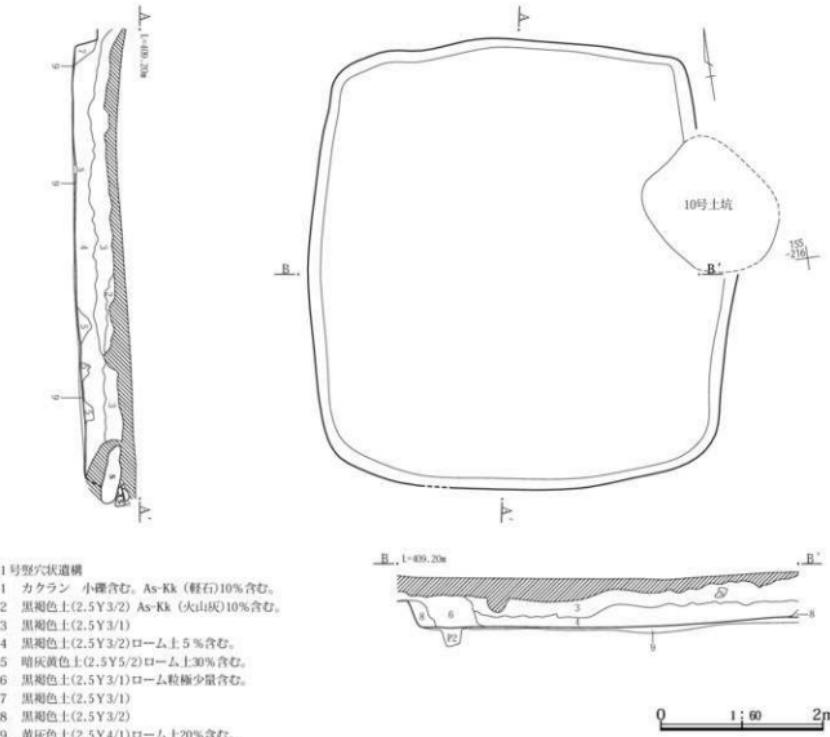
第81圖 15号墳穴建物出土遺物図(2)

状鉄器(19)が出土した。P 1・4 及びその北側からは、内湾口縁杯(4・5)、鉢(8)と甕(10・15)が出土した。さらに、南側からは内斜口縁杯3点(1~3・7)が出土している。内斜口縁杯・小型甕・瓶が中心となる組成である。未掲載遺物の器種別構成は甕・甕類が540g、杯・椀類が42gである。口唇の立ち上がりの強い内斜口縁杯が特徴である。 所見・時期 多孔陶の出土は渡来系の遺物として重要である。刀子状の鉄器が出土したことでも興味深い。建物の時期は、口唇の立ち上がりの強い内斜口縁杯(1~3)とあまり長胴化を見せない甕などから、5世紀後半と推定する。

竪穴状遺構

1号竪穴状遺構(第82・83図 PL.36・100)

位 置 5区西南部、6号竪穴建物の西側にある。 グリッド 2E・2F-44・45 座標値 X=61152 ~ 61158、Y=-93216 ~ -93222 遺存状況・重複 東側の6号竪穴建物を壊している。東辺を10号土坑により埋されている。 埋土状況 基本上層6層土の黒褐色土により埋没する。上部はAs-Kkの混じりが多い。 形 状 方形 規 模 東西5.38m、南北5.54m 長軸方向 N-10°-E 床面積 22.416 m² 床面・壁 床面は、整土により下層の礫を隠すように土でならす。壁の高さは15~33cmで遺存度が低い。 炉・カマド 炉・カマド共に確認できなかった。 柱 穴 明瞭な柱穴は確認できなかった。 入 口 入口は他の竪穴建物から考えると南方向と推定している。 床面下 床面を数cm下げると、特に北側か



第82図 1号竪穴状遺構平面図・土層断面図

ら縦混じりの層が出てくる。この縦混じりの凹凸部に土を入れてならしている。ピットが2つ南辺(P1)と西辺(P2)の床下から検出された。長径20・40cmで、深さは19・16cmと浅い。

遺物出土状況・遺物 遺物は、出土状況が明瞭なものは無い。内斜口縁杯(1)、壇口辺部(4)、高杯脚部(3)、甕口辺部(6)や凸部のある底部(7)、須恵器甕口辺部片(5)などが出土している。未掲載遺物の器種別構成は壺・甕類が1380g、杯・碗類が181g、高杯他が62gである。

所見・時期 建物の時期は、内斜口縁杯の口辺部の平坦化したものや、須恵器の脛を見ると5世紀末と推定される。前述したように、炉・カマド・明瞭な柱穴が確認できないことから、竪穴状遺構とした。

2号竪穴状遺構(第84・85図 PL.37・100・101)

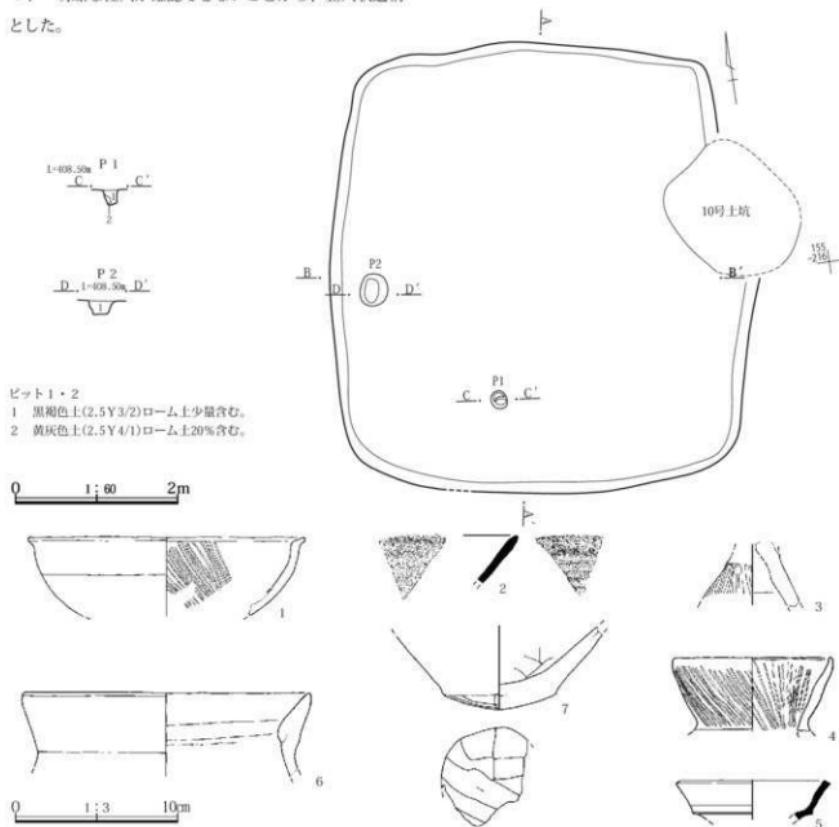
位 置 5区中央部、1号墳周堀南西部にある。グリッド 2E ~ 2G-40・41 座標値 X=61154 ~ 61160、Y=93195 ~ 93201 遺存状況・重複 深さが浅く、遺存状況は悪いが外形は残る。重複は認められ無い。

埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土により埋没する。

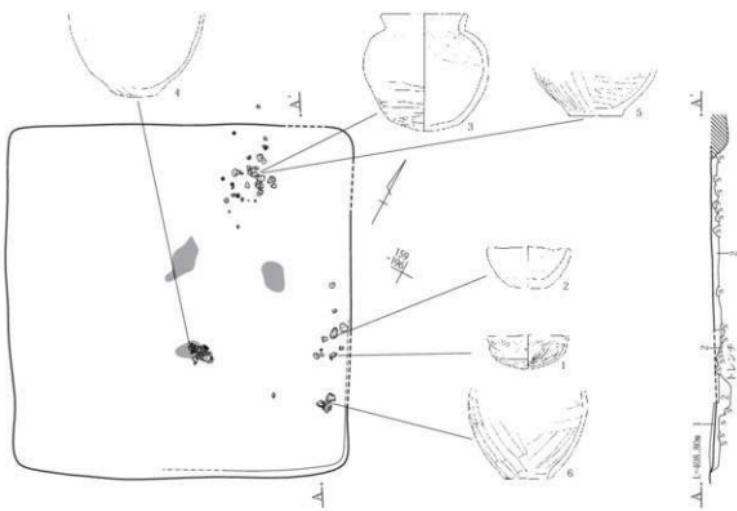
形 状 方形 規 模 東西4.22m、南北4.36m 長軸方向 N-61°-E 床面積 17.05m² 床面・壁 床面は、整土により下層の縫を隠すように土でならす。壁の高さは3cmで極めて遺存度が低い。

炉・カマド 炉・カマドと共に確認できなかった。

柱 穴 確認できなかった。



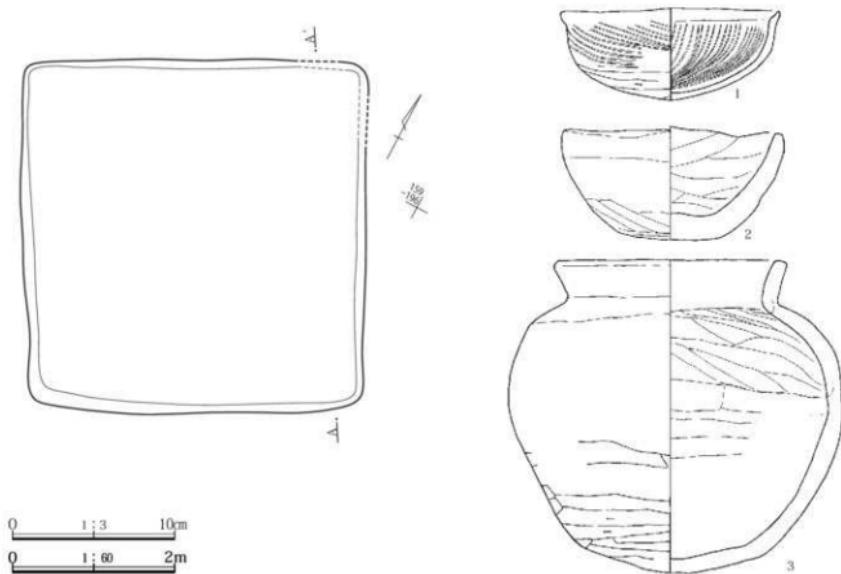
第83図 1号竪穴状遺構床下図・土層断面図・出土遺物図



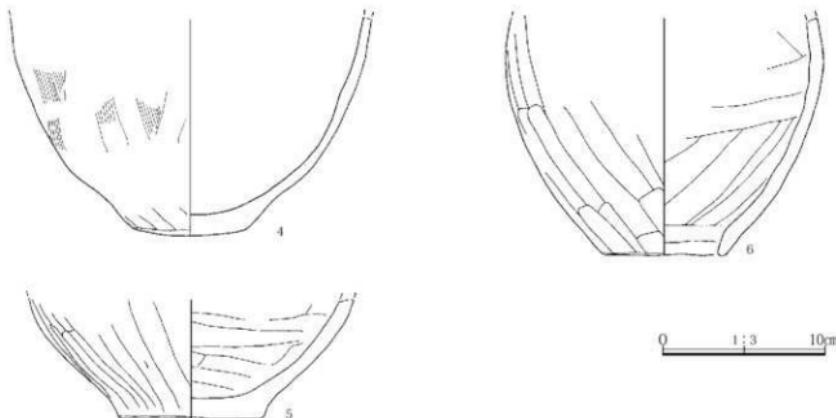
2号竖穴状遺構

1 黒褐色土(2.5Y3/1)ローム粒を極少量含み、堆積密で粘性あり。

2 黒褐色土(2.5Y3/1)褐色土粒を多く含むみ、堆積密で粘性あり。地山縫隙の上面で止めている。



第84図 2号竖穴状遺構平面図・遺物出土状況図・土層断面図・床下図・出土遺物図(1)



第85図 2号竪穴状遺構出土遺物図(2)

入口 入口は他の竪穴建物から考えると南方向と推定している。床面下 床面を数cm下げると、特に南西側から礫混じりの層が出てくる。この礫混じりの凹凸部に土を入れてならしている。遺物出土状況・遺物 遺物は、北部から壺(3)、底部(5)が、南東部辺から、小型鉢(2)、内斜口縁杯(1)、瓶(6)が、南側中央から壺(4)が出土している。未掲載遺物の器種別構成は壺・壺類が1110g、杯・椀類が58g、高杯他類が142gである。口唇の立ち上がりの強い内斜口縁杯(1)と粗製の小型鉢(2)が特徴である。

所見・時期 口唇の立ち上がりの強い内斜口縁杯(1)と粗製の小型鉢(2)、あまり長胴化を見せない壺などから、5世紀後半～6世紀前半と推定する。炉・カマド・柱穴ともに確認できなかったので、竪穴状遺構とした。

3号竪穴状遺構(第86図 PL.38-1~4)

位置 5区西端中央部、8号竪穴建物の西側にある。
グリッド 2G・2H-44・45 **座標値** X=61161～61167、Y=-93219～-93224 **遺存状況・重複** 東側の8号竪穴建物により北～東部壊されている。
埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土により埋没する。
形 状 方形
規 模 東西4.16m、南北4.88m **長軸方向** N-40°
-E **床面積** 17.04m² **床面・壁** 床面は、整土により

下層の礫を隠すように土でならす。壁の高さは1.4～2.4cmで極めて遺存度が低い。
炉・カマド 炉・カマド共に確認できなかった。
柱穴他 確認できなかった。
貯蔵穴 確認できなかった。
入口 入口は他の竪穴建物から考えると南方向と推定している。
床面下 床面下から礫が出土するので、それを土で覆っている。
遺物出土状況・遺物 遺物は、出土していない。
所見・時期 建物の時期は、この建物を壊している8号竪穴建物が、6世紀中頃であり、それ以前であることは確かである。確認面が浅く、炉・カマド・柱穴・遺物共に検出できず、竪穴状遺構とした。

掘立柱建物

1号掘立柱建物(第87図 PL.39-1)

位 置 5区南西部端部、3号竪穴建物の東 **グリッド** 2C・2D-43～45 **座標値** X=61140～61145、Y=-93214～-93220 **遺存状況・重複** 柱穴の残りは良い。重複は無い。
埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土に覆われている。
形 状 長方形 **2間×1間** **規 模** 術行2間 5.4m、梁行1間 2.0m、**長軸方向** N-55°
-E **床面積** 10.508m² **柱 穴** P1～P6までの柱穴。長径28～43cm、深さ20～39cmである。柱痕から径5～15cmの柱が建っていた可能性がある。
遺物出土

状況・遺物 遺物は出土しなかった。 所見・時期 古墳時代遺構面と同じ面での検出で、周りの遺構も古墳時代のものが多いことなどから古墳時代と推定した。

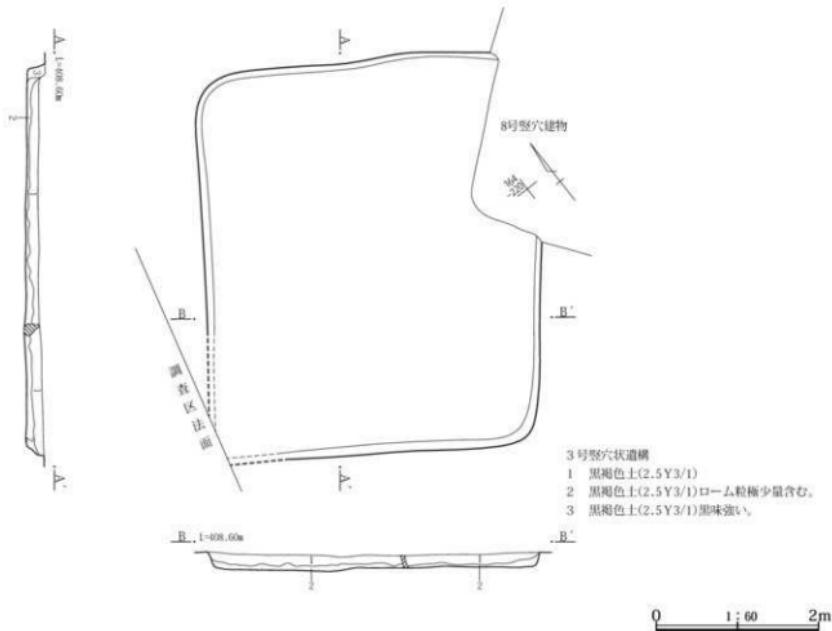
2号掘立柱建物(第87図 PL.39-2)

位置 5区中央部、2号竪穴状遺構の北、1号墳の西
グリッド 2G・2H-40・41 **座標値** X=61162～61166、
 Y=-93196～-93202 **遺存状況・重複** 立柱穴の残りは良い。
埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土に覆われている。
形 状 長方形 3間×1間
規 模 桁行3間 6.0m、梁行1間 2.3m、長軸方向
 N-67°-E **床面積** 13.052m² **柱 穴** P1～P8までの柱穴。長径26～42cm、深さ28～48cmである。柱痕から径11～17cmの柱が建っていた可能性がある。
遺物出土状況・遺物 遺物は出土しなかった。 所見・時期 古墳時代遺構面と同じ面での検出で、周りの遺構も

古墳時代のものが多いことなどから古墳時代と推定した。

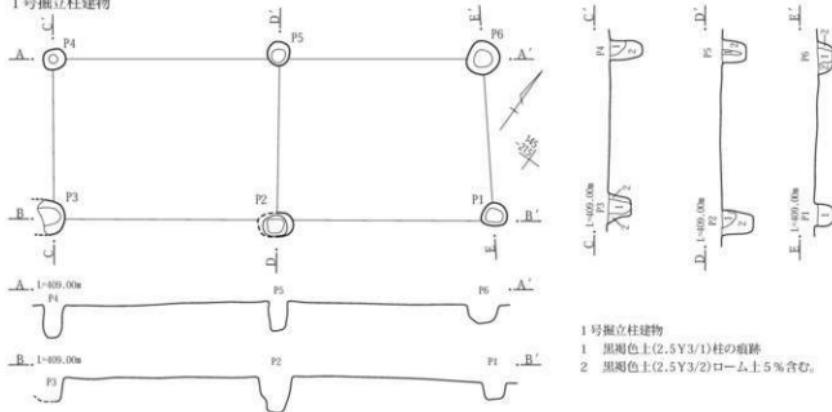
3号掘立柱建物(第87図 PL.38-5)

位 置 5区北西、19号竪穴建物の中 グリッド 2H-43・44 **座標値** X=61166～61169、Y=-93213～-93216 **遺存状況・重複** 立柱穴の残りは良い。弥生時代後期の19号竪穴建物を壊している。 **埋土状況** 基本土層6層土の黒褐色土に覆われている。
形 状 方形 1間×1間 **規 模** 桁行1間 1.8m、梁行1間 1.9m、長軸方向 N-48°-W **床面積** 3.485m² **柱 穴** P1～P4までの柱穴。長径25～33cm、深さ20～37cmである。
遺物出土状況・遺物 遺物は出土しなかった。
所見・時期 古墳時代遺構面と同じ面での検出で、周囲の遺構も古墳時代のものが多いことなどから古墳時代と推定した。



第86図 3号竪穴状遺構平面図・土層断面図

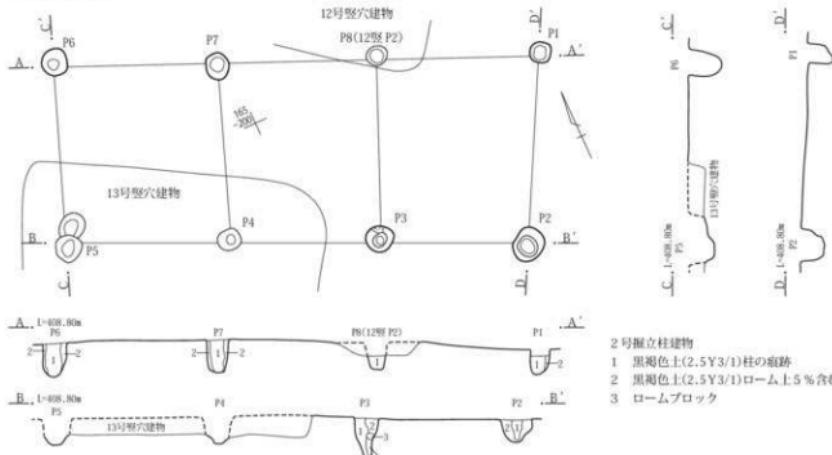
1号掘立柱建物



1号掘立柱建物

- 1 黒褐色土(2.5Y3/1)柱の痕跡
2 黒褐色土(2.5Y3/2)ローム土5%含む。

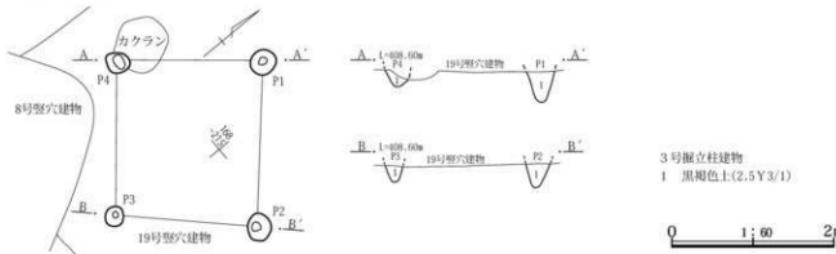
2号掘立柱建物



2号掘立柱建物

- 1 黒褐色土(2.5Y3/1)柱の痕跡
2 黒褐色土(2.5Y3/1)ローム土5%含む。
3 ロームブロック

3号掘立柱建物



3号掘立柱建物

- 1 黒褐色土(2.5Y3/1)

0 1:60 2m

第87図 1～3号掘立柱建物平面図・土層断面図

古 墳

全体状況(第88図 PL.40)

古墳は、5区の東側、段丘が南東方向に降下する端部

に位置する。石室の開口方向も、南東方向に向いており、下方から見上げるようにして古墳を望むことになる位置を意識して選定したものと思われる。1号墳は北側の周堀も良く残り、石室の残りも良い。対して、西側の2号



第88図 1～3号墳全体図

墳は周囲が北側で一部確認できるのみで、石室の残りも悪いので、後世の破壊が激しかったものと思われる。興味深いのは3号墳で1・2号墳の間、やや南東よりに下がった地点で構築されており、北側の周囲の遺存がほとんど無く、石室の残りも良くない。3基が並ぶ古墳の位置は後章で述べるように四戸古墳群からすると北側に位置するものである。豊穴建物群は、この古墳群の西側にあり、生活域と墓域が密接している例として重要である。

1号墳(第89～129図 PL.41～62・101～116)

現状(PL.21-2・4) 四戸古墳群は総数24基が確認されていたが、現在は群馬大学が調査した4基以外はほとんど無く、石室の残りも良くない。3号墳と名付けた当古墳は、上毛古墳群では岩島村24号墳となる。規模は不詳で、遺物も出土の記録は無い。

位置(第88図) 5区東部端南東部へ地形が落ち込む手前にある。3号墳が南西14mの所に位置する。2号墳は、南西20mの所に位置する。北側へ約100m離れた箇所に1基、岩島村25号墳(十五塚、刀・馬具・土器・埴輪出土)がある。この離れた古墳を除くと、四戸古墳群はこの1号墳をほぼ北端にして、南側に集中して22基が分布する。

グリッド 2F ~ 21-36 ~ 40

座標標 X=61155 ~ 61172、Y=-93176 ~ -93196

墳丘・石室の調査経過・遺存状況(PL.41-5、PL.42-2)

墳丘はほとんど残っていない。調査前には、ある程度の墳丘が遺存しているように見える高まりがあったが、畑の耕作等で、周りを削られ、ほとんどの葺石や石室の天井石や側壁石上部などがすべて外され、それらの石が積まれて高まりになっていたというが現状であった。墳丘部の遺存部及び周囲の調査をまず行い、その過程で、埴輪が大量に出土した。特に石室入口前面に円筒埴輪以外に大刀形埴輪が出土し、須恵器も出土した。石室前での埴輪・土器配置を知る良い情報である。また、羨門前から羨門幅と同じ幅で1段の石列が2mほど石室の開口方向の南東方向に並列して検出された。ほとんど類例が無いものであるが、羨道の要素を持つものと考えられる。埴輪は石室前から主に左側に基壇面上から出土し、器財埴輪のほか、円筒埴輪などが一部、原位置で確認できたものもある。周囲は深く、また大量の埴輪が落ち込んで出土している。周囲は円弧長12.6mあるもので、石室の北側に円弧状に巡るが、少し西側に偏っているのが

調査途中で判明した。円弧状の周囲東端の立ち上がりから3.2m南東で長4.8mの小さな軸が掘削されている。埴輪は、墳丘の東側には、すでに開墾等で掘削されていて、ほとんど出土していない。主に石室前面～西～北にかけて、円筒・鞍・柄・大刀形埴輪などが主に周囲内から多数出土しており、その位置を記録する為に番号を振って取り上げていった。埴輪は原位置から移動していると言え、倒れた方向から、およその元の配置が推定できる状況である。

次に、石室の調査であるが、石室があった箇所に積まれていた石を外していくと、本来の側壁や墳丘の残存部などが現われてきた。動いている石を上から随時外していく。この作業に非常に時間がかかった。石が動いているかどうか判断を下すのが容易ではなかったからである。天井石や側壁の石などが石室内外に崩落している状況で、一部の石は割れていた。盗掘破壊に伴う側壁・天井石の破壊痕跡と推定する。本来の玄室・羨道の側壁を露出して、玄室部では2～3段の側壁が残存していることが分かった。羨道部では閉塞石の調査を行い、土と石が混じった閉塞状況を露出させた。羨道部では4段の側壁が遺存していることが分かった。玄室部では、遺物の出土が想定されるので、床面に近づく段階で、丁寧な調査を行い、鉄器を確認した。かく乱中で鉄器がかなり出土しており、やむをえず、そのまま取り上げた。床面は、小礫が敷き詰められている。羨道部は、土石混じりの閉塞を外すと、やや大き目の礫が敷き詰められている。玄室の床面とは明らかに床面に敷く石を変えている。石室の周りの控え積みの調査も並行して行われた。50～80cmほどの幅を有する石積である。さらに外側にある盛り土と併行して側壁の石とともに控え積みとして積み上げていくものである。石室主体部と並行して調査を行い、上段の石から順に外していく、最終的には、奥側壁の石を全て外して、奥・側壁の下の石を敷いている状況、さらにその下の据え置き穴の確認を行った。石室構築過程の復元を行えるように調査した。

墳丘(第89図 PL.41-1) 墳丘の調査は、先述したようにほとんど墳丘本体の遺存が無いために、残存する墳丘盛土、石室西側の一部基壇石列、石室前面の羨道状遺構、周囲と、墳丘端から周囲にかけての膨大な埴輪群の調査となる。以下、墳丘盛土、石列、羨道状遺構、周

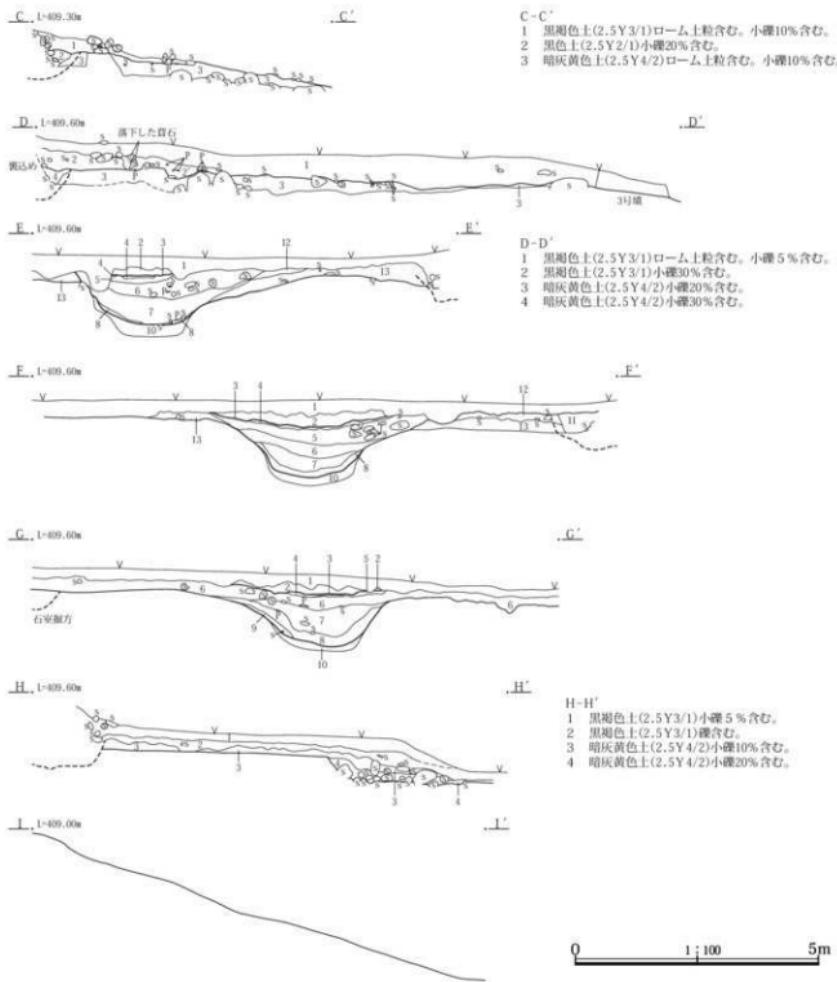


第89図 1号墳全体図



第90図 1号墳埴丘土層断面図(1)

第5章 発見された遺構と遺物



- E-E'・F-F'・G-G'
- 1 黒褐色土(2.5Y3/1) As-粘粒を多く含み、堆積やや粗で粘性あり。現耕作上 As-粗粒
 - 2 黒褐色土(2.5Y3/1) As-粘粒を極少量含む。
 - 3 黒褐色土(2.5Y3/1) As-粘粒を極少量含む。
 - 4 黄褐色土(2.5Y5/3)織かい砂層。As-Khのアッシュ。
 - 5 黒褐色土(2.5Y2/1)埴丘側には埴石と考えられる塊があり、埴輪を含む。堆積密で粘性やや強い。
 - 6 黒色土(2.5Y2/1)埴輪片・小礫極少含むみ。堆積密で粘性強い。
 - 7 黑褐色土(2.5Y3/2)1層よりやや空明るく、含有物はあまり無い。堆積密で粘性あり。
 - 8 暗灰黄色土(2.5Y4/2)7層目にあたる壁のロームが含まれる層。堆積密で粘性あり。
 - 9 暗灰黄色土(2.5Y4/2)ローム上粒含む。
 - 10 にぶい黄色土(2.5/6/4)含有物なし。堆積密で粘性あり。地山
 - 11 黑褐色土(2.5Y2/1)ローム小ブロック・小礫少量含む。石室の貯込み石を入れるために穴。堆積密で粘性あり。
 - 12 黑褐色土(2.5Y2/1)堆内堆積の5層目に近い。
 - 13 黑褐色土(2.5Y2/1)堆内堆積の7層目に近い。

第91図 1号埴埴丘土層断面図(2)

墳丘基壇(第89図) 墳丘の基壇面は、地山面をそのまま活かしたものと想定される。幅は類例からすると1~2mほどと考えられる。基壇面は墓道状遺構の西側から遺存し、葺石列の遺存とともに基壇面の幅がある程度分かる。ただし、地山礫がかなり露出しており、南西部の遺存状況は悪い。西側周堀が始まるあたりから基壇面の残りは良く、周堀内側の立ち上がりから30cmほどの箇所に埴輪を据えている。埴輪は1個体ずつ据え置くような形で置いているが、明瞭な据え置き穴は無い。基壇面内側の墳丘の北側石列は残念ながら、一切遺存せず、基壇面の幅は明瞭ではない。先述したように類例からすれば1~2mほどと想定する。基壇は北側から北東方向へ行くにつれ、後世の墳丘の掘削により変更されており、特に東部から東南部にかけては、基壇面・埴輪ともほとんど確認できなかった。

墓道状遺構(第92・96図 PL.43) 墓道状遺構については、漢門前より35cmほど離れて長径16~52cmほどの礫が石室の開口方向の延長に漢門の幅のまま並列して南東に延びている。長さ2m、内幅70cmの石列である。並んでいる石の長軸方向は、石室の開口方向に合せた南東方向で平置きである。石は1石のみで、積み上げは現状では認められず、積み上げは無かったものと推定している。明らかに墓道を意識した施設と考えられる。遺物は、須恵器高杯脚部片が2個(28・29)墓前状施設の東石列の漢門寄り内側から出土している。また、内面ヘラナデ後に煤が付着した鉢状の土器鉢(33)が西側石列の南端近くから出土している。円筒埴輪の口辺部(89)が東石列内側の漢門寄り底部(95)が西石列内側から破片で出土しているが、共に原位置より動いた可能性が高い。東石列中央部外側に、短頭壺(26)が出土している。この短頭壺は石列内側から倒れて移動したものと推定する。以上まとめるところ、墓道状遺構は、漢門から同じ幅で1段の並行する石列を設置するもので、そこに、須恵器高杯、須恵器短頭壺、内面黒色の土器鉢などを置くものである。

周 堀(第89・91図 PL.44) 周堀は山寄せ古墳や墓道・前庭を持つ古墳に特有の石室奥側から円弧状に周堀を掘削して、石室入口付近手前で堀を立ち上げて、石室前面には周堀を廻さないものである。周堀は、円弧長12.6m、円弧の高さ(矢長)6.7m、弦長20.3mで、立ち上がり幅2.45~3.95m、深さ0.50~1.34mで南に聞く

円弧状に掘削されている。東側にも、先ほどの円弧状の堀が一端立ち上がって終了した後、3.1m離れた所で、長さ5.1m、幅3.5m、深さ1.1mの不整梢円形の平面形態の東側の堀が掘削されている。PL.44-4でも明瞭に分かる様に、掘り残した箇所は、礫層がしっかりと露出していて掘り抜くのが困難なため、礫層が密な箇所を避けて軟らかい所を掘削したものと思われる。墳丘を構築するための土が周堀の掘削により得られるので、石室の周りを積み上げる盛土の分が必要となる。先述したように土量としてはそれほどの量では無いので、円弧状の周堀のみで間に合ったのであろう。円弧状の周堀の掘削の単位の痕跡がある程度分かれり(第89図)、西側から、長さ3.5m、5m、6m、5mといった4つの大きな単位で、掘り込みが区分され、それぞれの箇所ごとに掘削されているようである。後期後半から堀の掘削後に、掘削痕跡を残さないように整形するようなことはなくなってくるので、反対に掘削の単位がある程度分かれる様になるのである。堀にはAs-Kkのアッシュを含む層が堀の埋まった段階でほぼ水平に堆積していた(第91図)。As-Kk降下時にはほぼ堀が埋まっていたことが推定できる。

埴輪・土器出土状況(第92~95図 PL.45~50) 墳輪は膨大な量が出土した。石室東側は、表面が削られており、埴輪もほとんど出土していない。石室前面の南から西さらに北方向まで埴輪は万遍なく出土している。また須恵器を中心とした土器が石室前面から出土している。墓道状遺構での出土状況は先述したので、石室前面と墳丘基壇面、周堀に倒れ込んで出土した埴輪・土器の出土状況について記す。

石室前面土器・埴輪出土状況(第92図・第93図-①・②、PL.45-3~PL.47-4) 石室正面には遺物は出土していない。漢門東西両方から土器・埴輪が出土する。

東側から見ていく。まず、漢門東側から1m、石列より10cmの箇所に円筒埴輪(51)(PL.47-3)があり、次に須恵器の短頭壺(27)、そのすぐ東隣に壺(32)が並んで出土している。さらに東隣に、恐らく朝顔形円筒埴輪と推定される埴輪(107)(PL.47-3・4)が検出されている。石室東側に西から円筒埴輪・須恵器短頭壺・須恵器壺・朝顔形円筒埴輪の順で立て並べていた可能性が高い(第93図-②)。

西側は、西側漢門前から、円筒埴輪(76)、須恵器大壺

(45)、鞍形埴輪(117)、円筒埴輪(48)、大刀形埴輪(190・238・186・189・187)(PL.45-8, PL.47-1)、円筒埴輪(93・101・87・96・79・103)が並ぶように出土している。さらに南側に朝顔形円筒埴輪(106)、円筒埴輪(91・85・56)が、やや南に倒れた状況で出土している。さらに西側に円筒埴輪(73・81)と大刀形埴輪(195)が出土している。

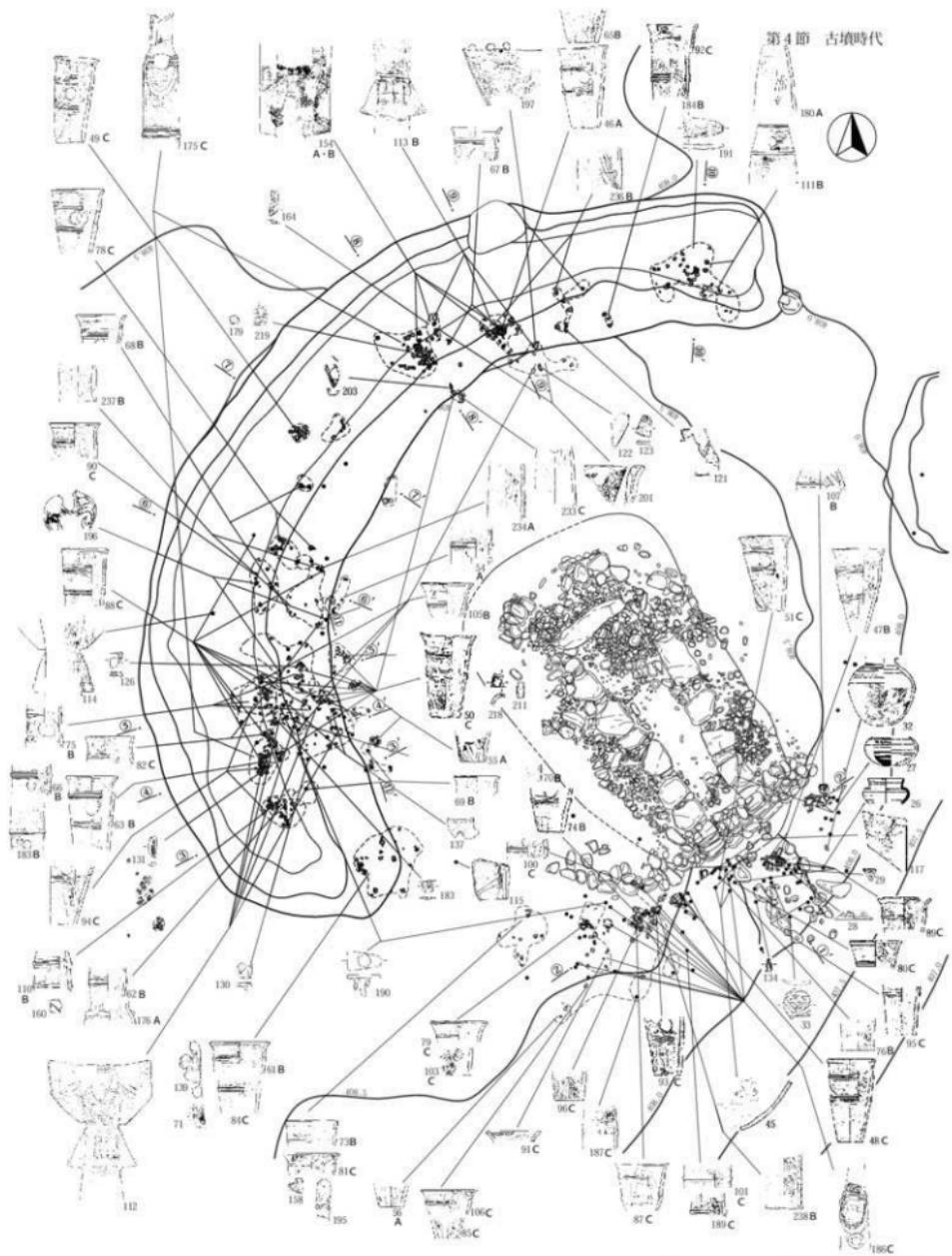
復原すると、西側には、円筒埴輪・須恵器大甕・鞍形埴輪・円筒埴輪・大刀形埴輪を並んで置き、その後、朝顔形円筒埴輪を含む円筒埴輪を少なくとも7本以上並べている。79の円筒埴輪から少し角度が北西側に寄っており、ここから屈曲して円形状に基壇面の端部に円筒埴輪を中心とした埴輪を配列していくものと思われる。

墳丘基壇・埴輪出土状況(第92・93～95図 PL.47-5～PL.50) 石室前面の石列からの埴輪・土器の出土状況は記したので、墳丘基壇の周堀立ち上がりからの埴輪の出土状況について記す。まず、器財埴輪について先行して記す。鞍形埴輪の翼部の破片(115)が周堀立ち上がりの南端付近から出土している。鞍形埴輪の胴部と推定される破片(139)が、先ほどの鞍から南に出土し、また、大刀形埴輪基部(176)と朝顔形埴輪と推定される破片(110)が2個、周堀南端から2m北の付近で、周堀中央部や上部から出土している。鞍形埴輪(112)が周堀南端から3.8m北の付近で、大型破片が、堀が70cmほど埋まった段階で出土している(第93図-④)。ほぼ同じ箇所で、鞍の鐵部分が表現された破片(130)も出土している。さらに北上して、堀南端から6.6mの箇所で鞍形埴輪の胴部・翼・ヒレの一部(114)が出土している。また鞍形埴輪の鐵部(126)、背板の支部(131)なども近い範囲で出土しており、いずれも鞍形埴輪に関連するものである。鞍形埴輪が複数この出土場所に近い基壇面があるいは墳丘頂部の西側に設置してあったものが倒壊して、周堀に達したものか2つの可能性が考えられるが、倒壊状況を考えると基壇面に設置してあったと考えた方が整合的である。鞘形埴輪(196)がさきほどの鞍形埴輪群の北側から破片となって出土している(第94図-⑥)。3つの破片のうち、1つは堀底から68cmの所から出土しているが、他の破片は基壇面肩部近くで出土している。この基壇面から倒壊したものと考えたい。というのは、鞘の基部の可能性のある埴輪(234)が基壇面近くの堀立ち上

りから出土しているからである。大刀形埴輪胴部片(175)が、北側周堀立ち上がりより7.5m西の地点の北西部周堀60～80cm上から出土している(第93図-④)。東へ50cmほどの箇所で盾形埴輪(154)が堀底部から8cmから40cmの箇所から出土している。この盾の基部の可能性のある埴輪(233)が基壇面端から出土している(第95図-⑧)。ほぼ同じ箇所で、堀底から14～18cmの堀の立ち上がりに近い位置で、鞍形埴輪(121・123・113・122)が出土している。このように近い所から大刀・盾・鞍と武器・武具形埴輪が出土していることは興味深い。この出土位置のすぐ南側の基壇面に埴輪が設置されていた可能性がある。その意味で、ほぼ直線状に立ち上がる盾埴輪の器台と想定される埴輪(233)(PL.48-5)が原位置と想定される場所から出土していることは重要である。家形埴輪屋根と鰐木(197～200)が、鞍形埴輪とほぼ同じ地点で、堀底より8～42cmの間隔を挟んで出土した(第95図-⑨)。同一個体の可能性のある家形埴輪屋根片(201)も近くから出土した。家形埴輪が基壇面から出土することはあまり無く、墳丘頂部から転げ落ちた可能性を考えている。円弧状の周堀の東部の端の立ち上がり際に大刀形埴輪の鞘部(180)及び大刀の把部片(191)が出土している(第95図-⑩ PL.50-2)。周堀の底から53～75cmほど上から出土している。この埴輪もこの付近に配置していた可能性が高い。以上周堀際の基壇面の器財埴輪群は、南西部の周堀の起点から鞍・大刀・大刀・鞍・柄・大刀・盾・大刀・大刀といった順に配置してあった可能性が高い。家形埴輪は墳丘頂部に配置してあったと推定する。

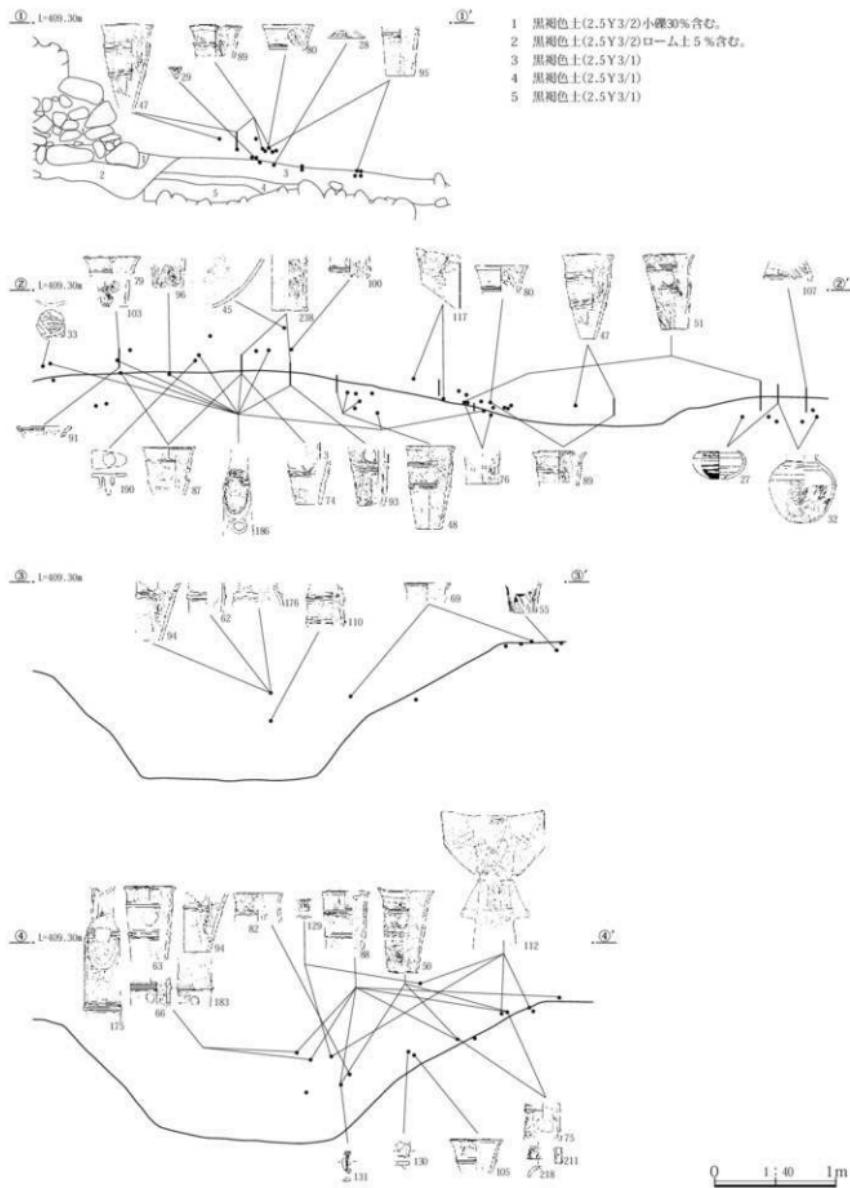
円筒・朝顔形埴輪について記す。周堀南西部の起点から見ると、いくつか円筒埴輪が原位置で出土している箇所が分かる。周堀起点南から3.2mの基壇面際、堀立ち上がりから30cmの位置に円筒埴輪(55)(PL.48-3)、この埴輪から60～90cmごとの間隔で、円筒埴輪(88)、円筒埴輪(55)(PL.48-4)が樹立していたと推定している。さらに多数の破片(94・61・63・75・69・62・54・82)が、周堀から転落した状況で出土している(PL.48-6～8)。円筒埴輪(50)のやや南側で周堀に転落した状況で朝顔形円筒埴輪(105)が出土している。朝顔形円筒埴輪の北側から、円筒埴輪(54)が基壇面から出土している。周堀に転落した形で、南から(68・90・78・49)と円筒埴輪片が出土している。北側の器財埴輪が多く出土している地区

第4節 古墳時代



第92図 1号埴土器・埴出土状況図

0 1 100 5m



第93図 1号埴土器・埴輪出土垂直分布図(1)

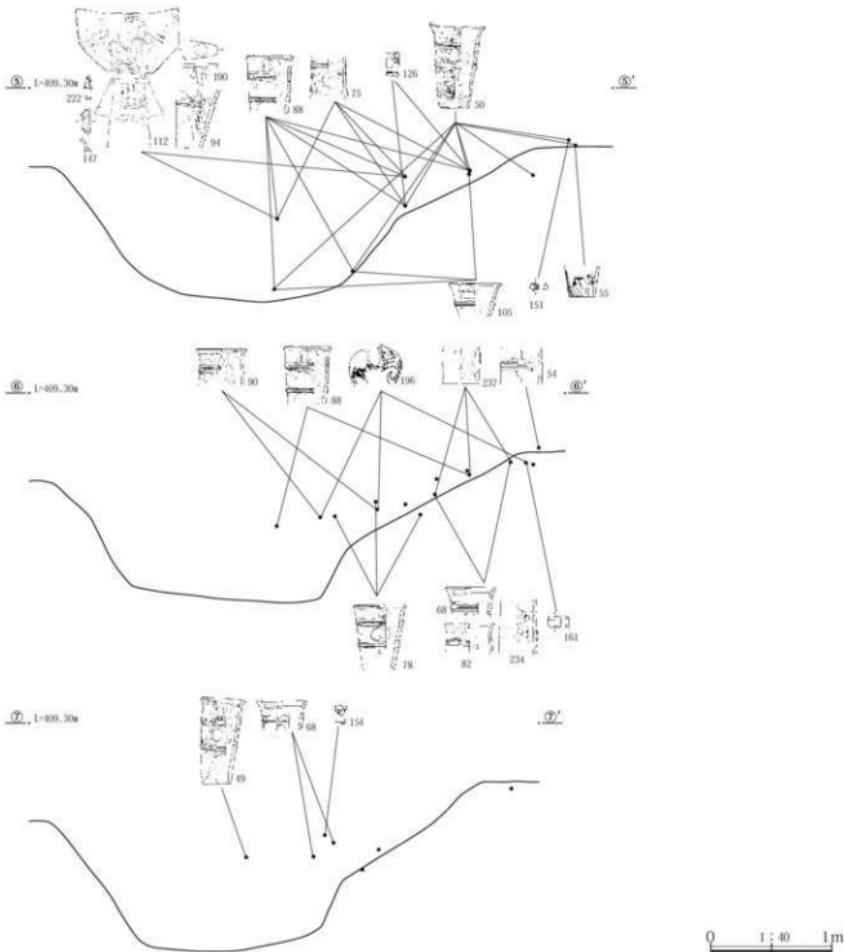
(PL.49-4、PL.50-1)では、円筒埴輪は、西から(67・65・46・92)の順で周堀から出土している。

以上、埴丘基壇の埴輪は、堀の立ち上がりから30cmほど内側の基壇面に埴輪を樹立させている。円筒埴輪を中心とし、少数の朝顔形円筒埴輪を入れて、鞍・大刀・柄・盾の埴輪を南側と北側にある程度集中して置いている。器財埴輪を置いた順序を想定したが、円筒埴輪との配置

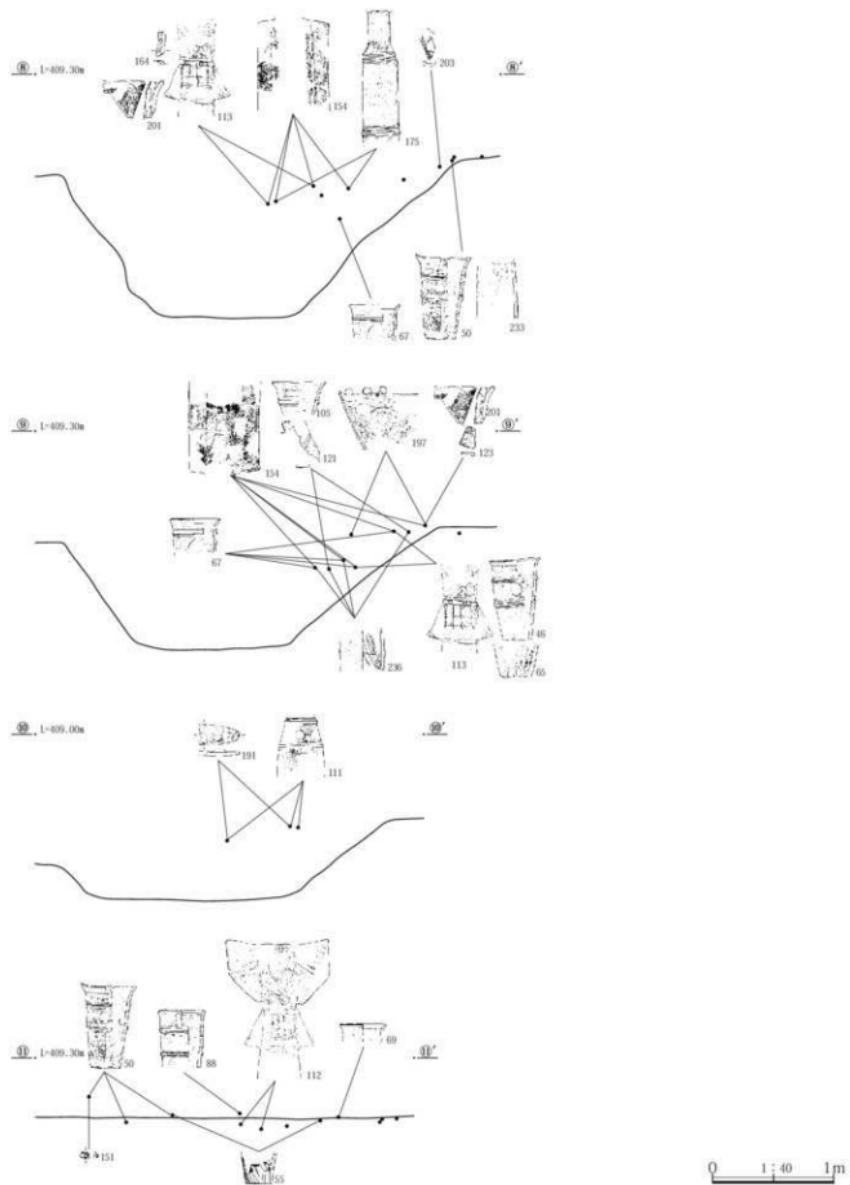
における関係性などは明らかにすることができなかつた。

石室(第96・97図 PL.51～60)

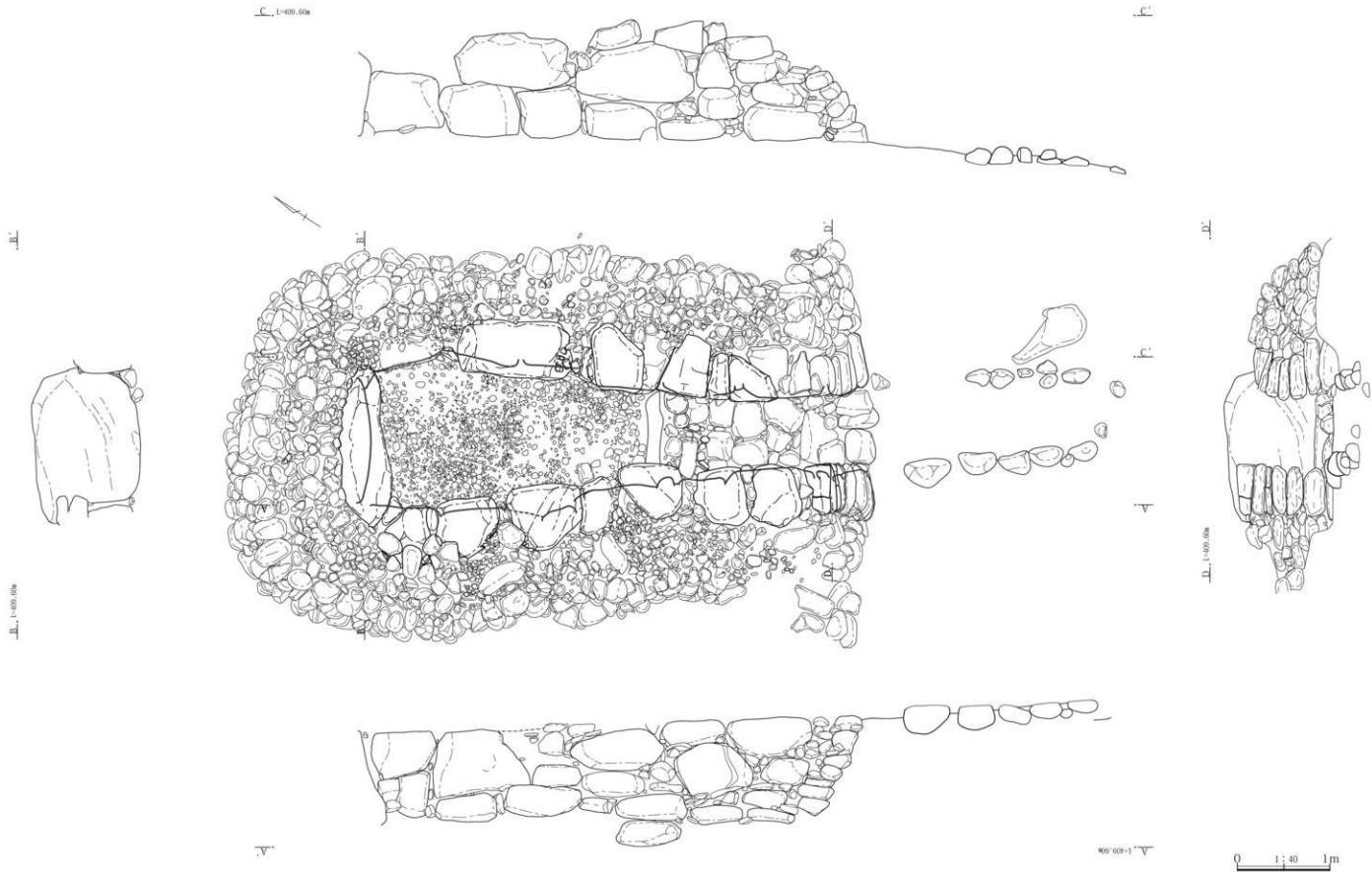
石室は破壊が激しかったが、奥壁・側壁・袖石・羨道・羨門とともに下段部を中心に遺存しており、石室の概要は知ることができた。調査期間の関係で、石室の石材種の詳細な同定や石室使用石材の個々の重さを含めた計



第94図 1号埴土器・埴輪出土垂直分布図(2)



第95図 1号埴土器・埴輸出土垂直分布図(3)

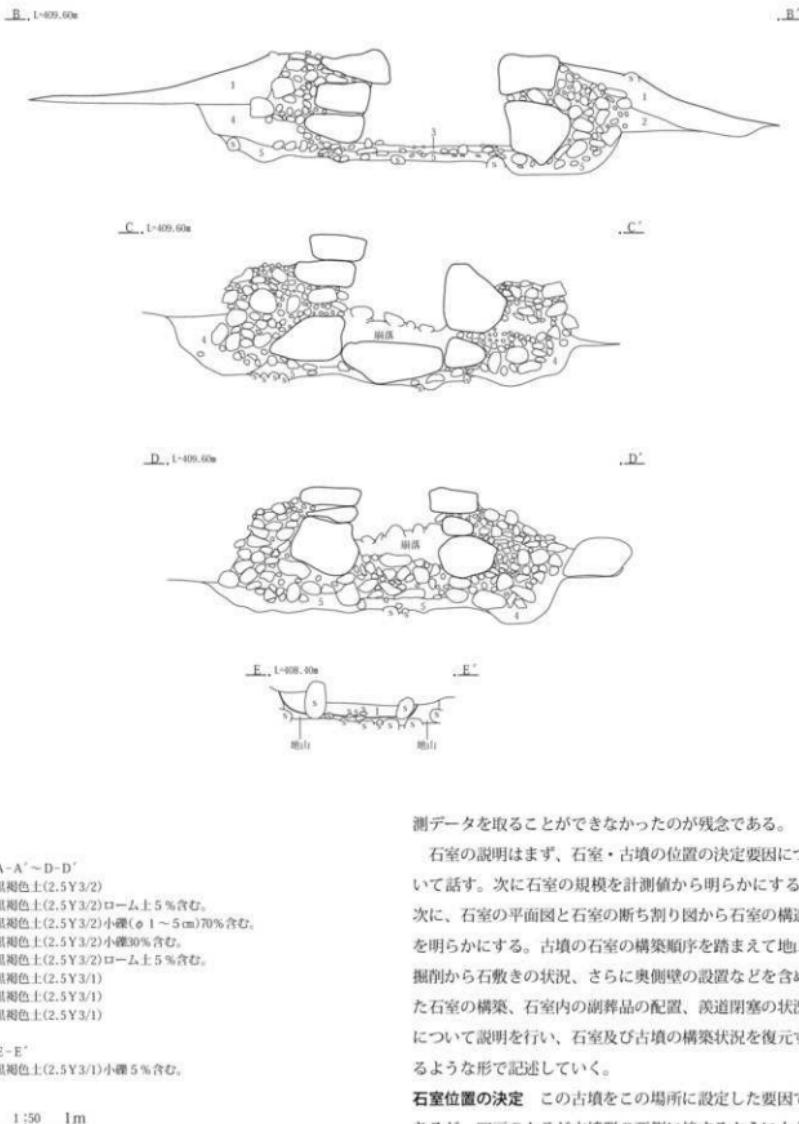


第96图 1号填石室展开图

0 1:40 1m



第97圖 1号填石室平面図・土層断面図



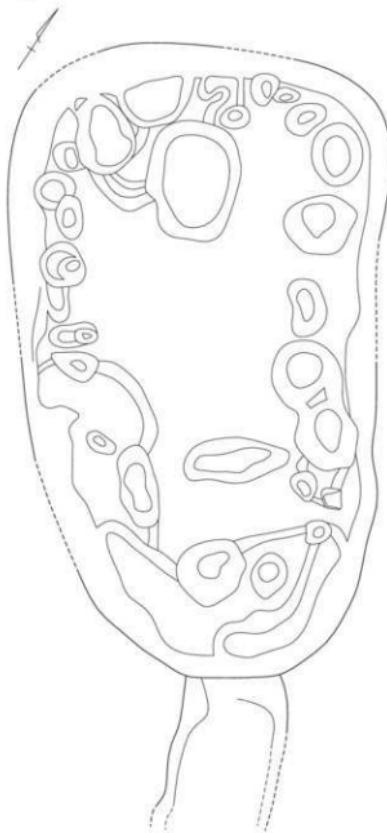
第98図 1号墳石室土層断面図

測データを取ることができなかったのが残念である。

石室の説明はまず、石室・古墳の位置の決定要因について話す。次に石室の規模を計測値から明らかにする。次に、石室の平面図と石室の断ち割り図から石室の構造を明らかにする。古墳の石室の構築順序を踏まえて地山掘削から石敷きの状況、さらに奥側壁の設置などを含めた石室の構築、石室内の副葬品の配置、羨道閉塞の状況について説明を行い、石室及び古墳の構築状況を復元するような形で記述していく。

石室位置の決定 この古墳をこの場所に設定した要因であるが、四戸のムラが古墳群の西側に接するように大きく展開している状況があり、墓域の設置を考慮した場合、ムラから離れているが、ムラ人からも望める場所に

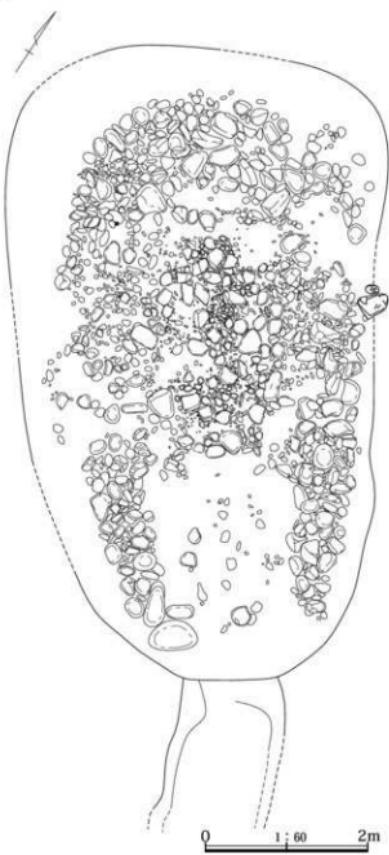
築くものと推定する。先述したように、温川と吾妻川の河岸段丘により形成された最下位段丘である伊勢町1面上に立地しているが、東側はさらに5mほど温川方面に向かって下がり段状を呈している。この段差を利用して、古墳を段差の上段立ち上がりに築き、石室の開口方向も、南東方向の温川方面から見た際に、古墳の大きさが視覚的に大きく見えるような位置に古墳を築いたと推定する。また、この近くを通る高崎・渋川・信濃につながると思定される道からも良く見えたことと思われる。それがこの位置に古墳を築いた大きな要因と考えられる。ま
①



た、地山の基本土層7~9層は、多くの礫が含まれている層で、硬い基盤面を構成し層中に含まれる多量の礫を石室床面の石、葺石などに利用したものと思われる。

石室の方位・規模 1号墳石室の方位はN-34°-Wで開口方向は南南東方向になる。次に石室の規模を記述する。なお、側壁を表現する時には、羨門入口から奥壁に向かって右の壁石を右側壁、左を左側壁とする。石室全長は5.4mで、玄室長2.25m(右)、2.32m(左)、玄室幅1.43m(奥)、1.28m(前)、玄室高1.08+m(右)、0.96+m(左)、羨道長3.03m(右)、3.00m(左)、羨道幅1.10m(奥)、

②

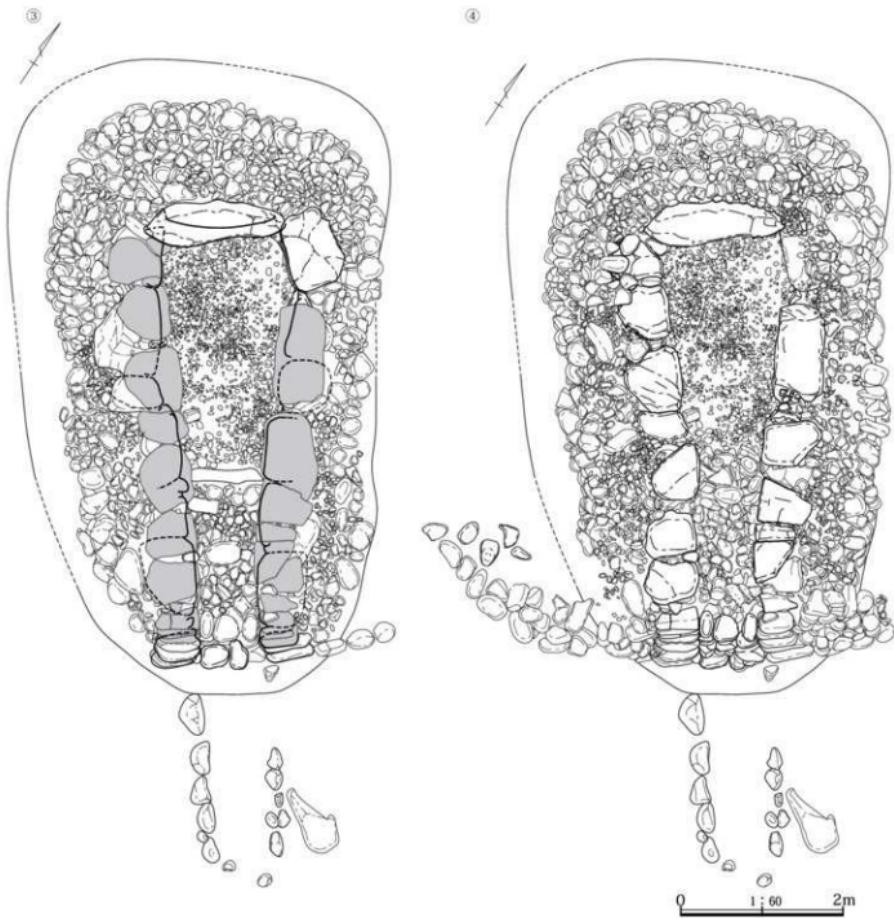


第99図 1号墳構築過程図①・②

0.83m(前)、羨道高1.28+m(右)、1.35+m(左)、羨道長2.56m(右)、2.50m(左)、羨道幅0.77m(奥)、0.60m(前)、羨道高0.27m(右)、0.13+m(左)の両袖横穴式石室である。石室の全長は5.4mと中型クラスである。特徴的なのは、玄室長が2.25～2.32mに対して、羨道長が3.00～3.03mと羨道の方が70cmほど長いということである。このような特徴は時期的にやや古いことを示している。

石室の構築 石室の構築であるが、地山が大量の礫を含

んだ層であるので、それらの礫をうまく利用しながら、構築していくものである。第99図-① PL.51・PL.52-1～4を見てみると、石室構築の際に、石室のラインの最大60cmほど外側から20～60cmほど掘り下げて、特に外周に複数の穴を掘削した状況が分かる。また、石室の床面になる箇所は、掘り込みも浅くして、地山を活かすようにしている。というのは、この図では示していないが、面積の半分ほどは、地山礫層の礫露出が認められ



第100図 1号墳構築過程図③・④

(PL.51-3~4)、硬い地盤の礫層を利用して石室が構築され、床面にも活かしていることが想定される。外周の穴は実際の奥・側壁よりさらに外側に掘削されており、この穴が奥・側壁の据え置き穴ではなく、石室の裏込めも含めた外側線ラインに沿って掘られたもので、上から入り込んだ水分を外側線間に沁みませて、石室内部の乾燥化をはかるものと推定する。そのことは、石室の断面図(第98図)のA~Dセクションを見ても分かる。また、墓道状遺構の下にも墓道より少し幅を拡げた窪みがあり(第99図-①・第98図-E PL.43-4))この窪みも基本的には、水分を下に沁み込ませて南東側に排水する役割を持ったものであろう。

基礎が設置されると、次は、礫を敷く作業である。第99図-② PL.53に示したように、奥側壁の下にも万遍なく長径5~60cmほどの礫を敷く。特に奥壁、玄室床面には大き目の礫(長径20~40cm)を置く場合が多い。奥壁の安定と、玄室床面という最も重要な箇所での基盤の整備を示すものであろう。また、羨道部の外側にもやや大き目の礫を置いている。さらに、羨道床面には、礫を敷いていない。この後の工程で大き目の礫を敷くことになる。玄室床面に比べて羨道床面は簡略化していることを示していると想定している。

玄室の構築 次が玄室の奥壁・側壁の設置と羨道の側壁の設置である(第96~98・100図-③ PL.59-4)。第96図の側壁図を見ると明瞭に分かるのは、右壁(東壁)が奥壁から接して大き目の長70~80cmほどの石を1段目に密接して据えて、2段目には長120cmのさらに大きな石を用いて積み上げているのに対して、左壁(西壁)は、奥壁に接して第1段の長70cmの石を配置した後、つづいて南に底辺が70cmで、上辺が105cmという不安定な石を配置し、次の石までに空間があくので小礫を詰めて、その後に長100cmの石を配置するというように、石の配置が右壁に比べ左壁はアンバランスであることである。これは、右壁の構築が奥壁を起点に先に行われて、右壁第一段構築後に、左壁の構築が次に行われた際に、右壁に合せて構築するも、うまく石の配置・構築ができない状況が玄室中央の箇所に現れて、そこに、小石を調整石として詰め込み、両隣の大石との組み合わせを調整して構築しているからである。つまり、玄室右壁第一段を構築後、左壁第一段を構築していることが想定される。

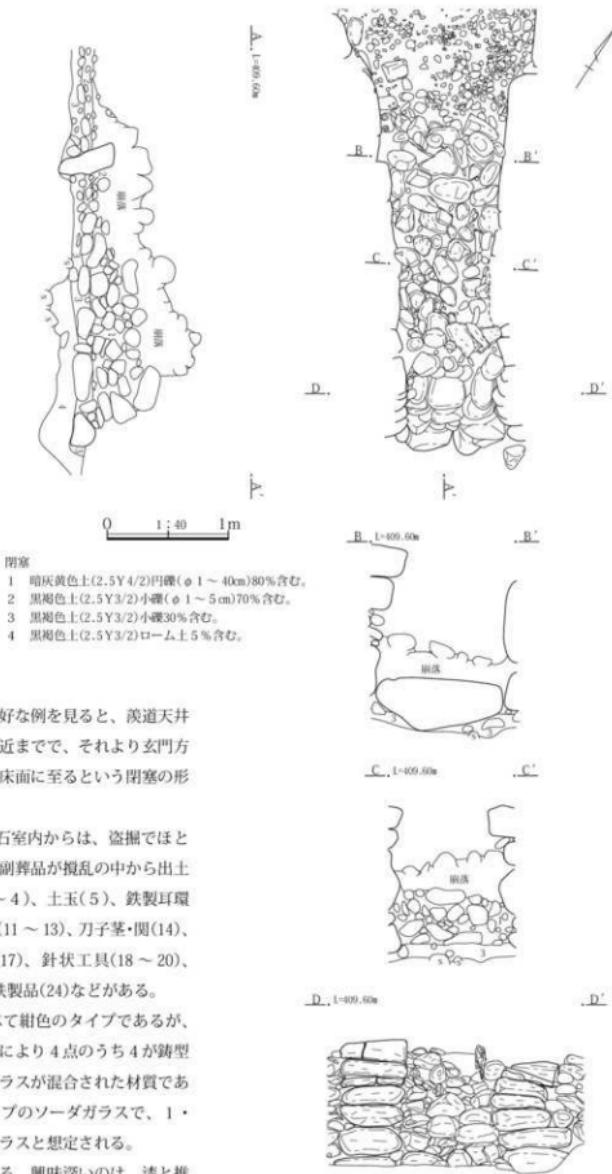
裏込めについては、側壁を配置する際に、第1段の側壁の裏側に裏込めの礫を詰めている(第97図-A・第98図-B~D PL.58-2~5、PL.59-2・3・5、PL.60)。裏込めの礫の外側に盛土を被せる。さらに第2段目の側壁石を置き、その外側に裏込めの礫を押さえに被せ、さらにその裏込めの礫を押さえるように盛土を被せている。側壁石、裏込め、盛土をセットで石室を構築していくのである。これ以降は3段目の側壁が一部遺存するものの、裏込めの礫や盛土との関係は明瞭ではなく、確認はできない。裏込めの礫は、石室に相似形に、長軸6.5m、短軸4.0mの隅丸長方形状に構成されるのが分かる(第100図-④)。

羨道の構築 羨道(第96~98図 PL.53-3・4、PL.54)の第一段の石は玄室の樋石を境界にして、その先から玄室側壁と連続して左右壁とともに長64~90cm、高さ24~40cmの大きさの石を2石ずつ対称する形で置いている。その先に羨門部を、長48~54cm、幅30~40cmほどの羨門基部石を横積みに置いて、その上に、斜めに奥壁よりも傾斜をつけながら一石ずつ同じように横積みに積み上げて、羨門を構成する。

天井石・床面礫 側壁の構築が終われば天井石が架構される。天井石は遺存していないので工程復元はできない。他例からすると、玄室・羨道の中に土を入れて安定させ、埴丘の盛土の上を石室の長軸に直交する方向で、片方の方向から天井石を引き揚げていき、設置されたものと思われる。床面への礫の散布は天井石構築後に行われたと想定され、玄室では1~10cmほどの大きさの小礫が敷かれた。羨道では3~30cmほどの、玄室に比べやや大き目の平たい石を選んで敷いている。玄室の様に、これら平たい礫の上に小礫を置くことはしていない。玄室と羨道の床面の違いが明瞭に分かる点である。

玄室の高さは本来1.8mほど、羨道の高さは1.3mほどあったと想定すれば、いずれも、1~3段ほどの石が倒壊してしまっているものと推定する。石室の素材は、粗粒輝石安山岩と推定している。周辺から多く産出する火成岩である。

羨道の閉塞(第101図 PL.43-1~3、PL.46-1、PL.62-3~6) 遺体を安置後、羨道を閉塞する。羨道は、黒褐色土と礫(5~35cm)を併せ用いて閉じている。入口部は、羨門に合せて奥壁方向にやや傾斜をつける形



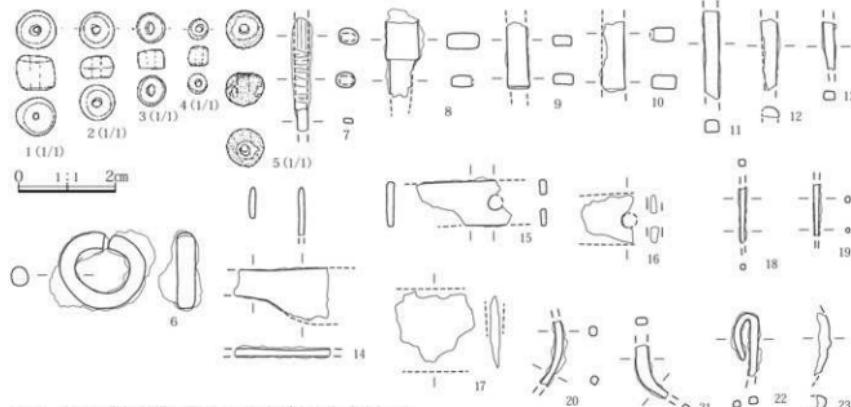
で積み上げている。閉塞の良好な例を見ると、羨道天井石まで積み上げるのは羨門付近までで、それより玄門方向へは、緩やかな傾斜で羨道床面に至るという閉塞の形が多い。

石室内出土遺物(第102図) 石室内からは、盜掘でほとんど失われているが、数点の副葬品が撲滅の中から出土している。ガラス玉4点(1~4)、土玉(5)、鉄製耳環(6)、鐵頸茎部(7~10)、茎(11~13)、刀子茎・闊(14)、刀子茎(15・16)、刀子刃部(17)、針状工具(18~20)、棒状品(21~23)、フック状鉄製品(24)などがある。

ガラス玉(1~4)は、すべて紺色のタイプであるが、蛍光X線分析(第6章第8節)により4点のうち4点が鉢型法で、ソーダガラスとカリガラスが混合された材質である。3はナトロン主体のタイプのソーダガラスで、1・2は植物灰タイプのソーダガラスと想定される。

土玉(5)が1つ出土している。興味深いのは、漆と推定される物質が塗られているようであり、このような土

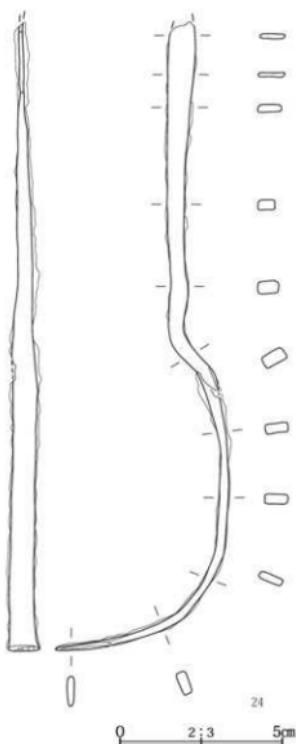
第101図 1号墳閉塞部平面図・土層断面図・断面図



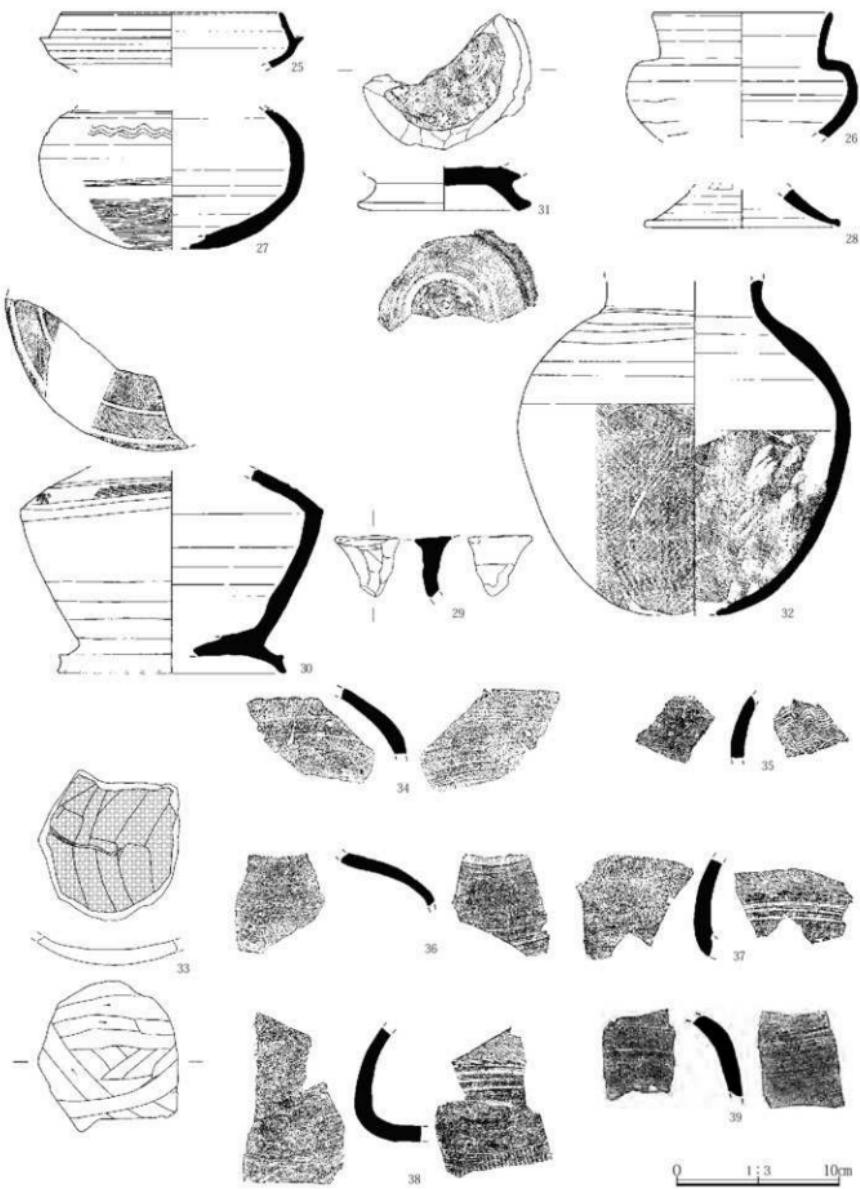
玉は、実は6世紀前半に遡る四戸IV号墳からも出土している。継続的に四戸古墳群では土玉を副葬する行為が続いていることが分かる。鉄製の耳環(6)が出土している。金銅製耳環に比べ出土例は少ない。

鐵は、茎に木質とその上を巻いている樹皮がよく遺存しているもの(7)がある。頭と茎の間の部分が残るもの(8~10)もある。他は頭・茎(11~13)である。直刀の刃部片(17)がある。

刀子の破片が4個体あり、茎が3点(14~16)あり、複数の刀子があった可能性が高い。針状の工具片と推定される破片(18~20)が3つ出土している。おそらく針と推定する。針は、小片の為、見逃されることが多いが、副葬品の再整理などをするとよく確認される遺物で、副葬品の中の工具で一定の役割を果たしているものである。棒状品が3点(21~23)、用途は不明である。注意すべきは、フック状の鉄製品(24)で、柄部はフック部に対して直交する形である。柄先がとくに薄手でたたき延ばされており、フック部に近づくにつれやや厚みを持ち始め平らな部分が90度回転して横から見ると細くなる形態となり、正面から見ると幅広になる。器壁に差し込みやすいように柄の先を薄くした後にだんだんと広くして、フックが良く引っかかる様に、方向を90度変えた可能性が高い。今までの鈎状工具と呼称された一群は、直線状のものが多くそれに、丸まった先端部が付くというようなものが多かったが、少し形態が異なる。所属時期も含めて検討すべきものであろう。新しい製品である可能性もある。

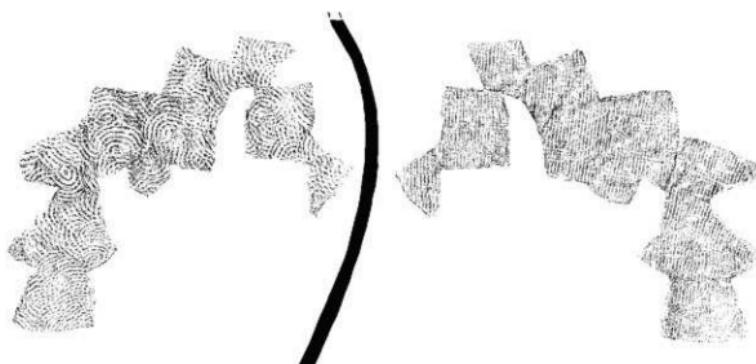


第102図 1号墳出土副葬品図

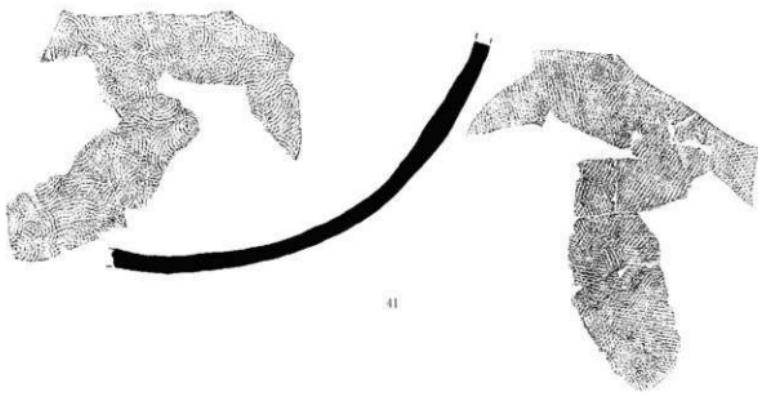


第103図 1号墳出土土器図(1)

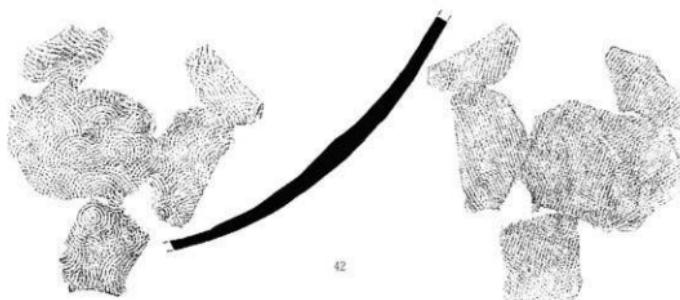
0 1:3 10cm



40



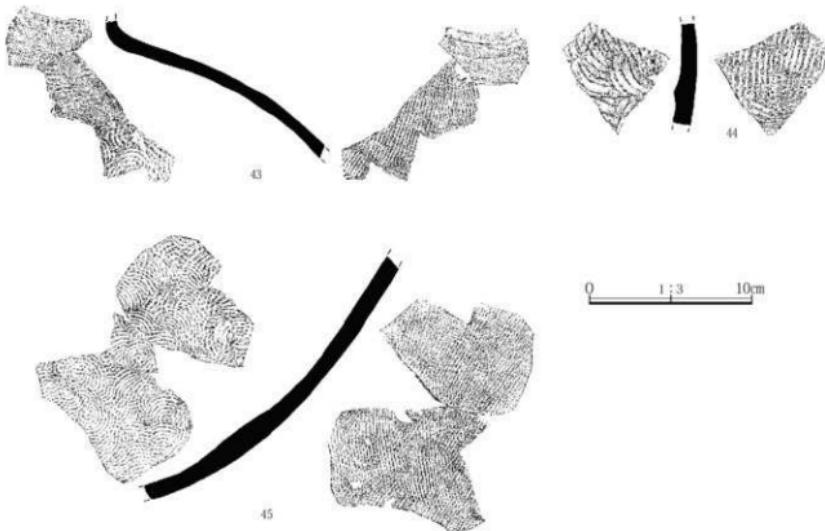
41



42

0 1 : 3 10cm

第104図 1号墳出土土器図(2)



第105図 1号墳出土土器図(3)

埴丘・基壇・墓道からの出土遺物(第103～128図)

須恵器(第103～105図) 須恵器は、古墳の東斜面から出土した須恵器杯(25)が時期を示す非常に良い例である。杯径が大きいが、立ち上がりは斜めにやや短めになっている所から、MT85併行の須恵器杯と推定する。須恵器高杯(28・29)が2個墓道状遺構内から出土している。高杯は、長脚高杯で、おそらく2段透かし高杯と推定されるもので、TK43併行期である。漠門東側から出土した須恵器壺(32)は、あまり類例を見ない形態であるが、TK43併行期と推定できる。やはり漠門東側から出土した短頸壺(26)とやはり短頸壺(27)と推定するものは、TK43併行期と推定する。それ以外の須恵器では、壺の破片が東斜面を中心一部南斜面から多く出土している(35・37～45)が、TK43併行期のものが多いと推定するが、正確な時期比定は難しい。提瓶の可能性がある(34)と壺(36)も出土している。時期の比定は難しい。土師器では、内面が焼してある椀か鉢の可能性のある土器(33)が墓道状遺構から出土している。時期ははっきりしない。時期が降る須恵器もいくつかある。いずれも長頸瓶で、脚台のみのもの(31)と、脚台部から肩部までのもの(30)である。共に古墳の東斜面から出土している。7世紀後半代に比

定できるもので、明らかに1号墳の構築時とは異なる時期の須恵器で、初葬後の供養時にお供えした須恵器と推定する。このように6世紀後半の須恵器と、7世紀後半の須恵器の2種類が古墳から出土している。

埴輪

全體状況

この古墳からは、円筒・朝顔形、鞍形、盾形、大刀形、鞆形、家形、人物などの埴輪が出土している。円筒が多く完形品で6本、朝顔形は7本ほど出土した。器財埴輪の中では鞍が多く4本以上、盾形は1本以上、大刀形は3本以上、鞆形は1本、家形は1本以上、人物1体以上である。円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪の順に説明する。

円筒埴輪

円筒埴輪が数多く出土した。円筒埴輪は、完形品から未掲載遺物を含めた小片までも含めた分類を行う。ハケメの数、色調、突帯形、底部調整有無が分類項目となる。小破片も含めた分類ということで、ハケメ数による分類は、ハケメ数の多い密から粗へ、3分類(幅2cmの範囲に入るハケメ数で区分)する。A類(18～14本)、B類(13～8本)、C類(7～5本)である。

焼きや胎土の違いなどからくる色調で3分類する。I

類(にぶい赤褐色)、II類(にぶい褐色・明赤褐色)、III類(橙色)に区分する。

突帯は断面形状で3分類する。台形・M形・三角形である。M形はさらに3分類して、M1形(突出部上部が高い)、M2形(両方の突出部が同じ高さ)、M3形(突出部下部が高い)に細分するが、埴輪を比較する際には、M形3分類を一つにしてM形として、台形、M形、三角形の3分類で比較する。

外面調整は、タテハケ後、口縁ヨコナデはすべての円筒埴輪に共通するものだが、底部調整をするものと、底部調整をしないものに区分する。

口縁形態は外反し、口唇部が外斜し、指で押さえて中央が少し窪む形態を取る共通の様相を示すので、区分はしない。

内面調整は、底部から胴部にかけてタテ・ナナメハケ・ナデを中心とし、口辺もタテ・ナナメハケで、口縁はヨコナデという調整を行っており、分類はしない。

まず、初めに、ほぼ完形品に復元できた資料6点についてその特徴を記し、その後、図化した資料及び未掲載資料も含めた、当古墳の円筒埴輪について記す。

完形品6点で当古墳の円筒埴輪について示す。中里(2002)によると群馬県西部の2条3段の埴輪は、口径・底径の矮小化、第1段の伸長化、第3段の短縮化の中で起こっているとの指摘がある。この指摘のもとに、当古墳の完形円筒埴輪について、各部位のデータとその比率を、ハケメ本数の分類を基に、以下呈示する。

それぞれの資料は、番号、器高、口径、底径、ハケメ本数分類、色調分類、突帯形、底部調整の有無 ①器高に対する第1段が占める%、②器高に対する第3段(口辺部)が占める%、③各段の比率(2段目を1とした場合の比率(1段目:1(2段目):3段目)を示す。

46 器高33.8cm、口径19.2cm、底径11.8cm、ハケメA類(18本)、色調I類(にぶい赤褐色)、突帯M1形、底部調整有 ①41%、②24%、③1.43:1:0.82。内面第3段に×印の記号あり。

47 器高35.0cm、口径21.4cm、底径(11.0)cm、ハケメB類(12本)、色調II類(明赤褐色)、突帯M2・3形、底部調整有 ①40%、②26%、③1.17:1:0.75。

48 器高35.3cm、口径17.3cm、底径12.1cm、ハケメC類(7本)、色調II類(明赤褐色)、突帯台1・M1形、底部

調整有 ①46%、②24%、③1.51:1:0.80。

49 器高34.6cm、口径22.3cm、底径12.1cm、ハケメC類(6本)、色調II類(明赤褐色)、突帯三角形、底部調整有 ①50%、②22%、③1.76:1:0.77。

50 器高34.2cm、口径12.3cm、底径10.5cm、ハケメC類(6本)、色調II類(明赤褐色)、突帯M1形、底部調整有 ①53%、②22%、③2.13:1:0.87。

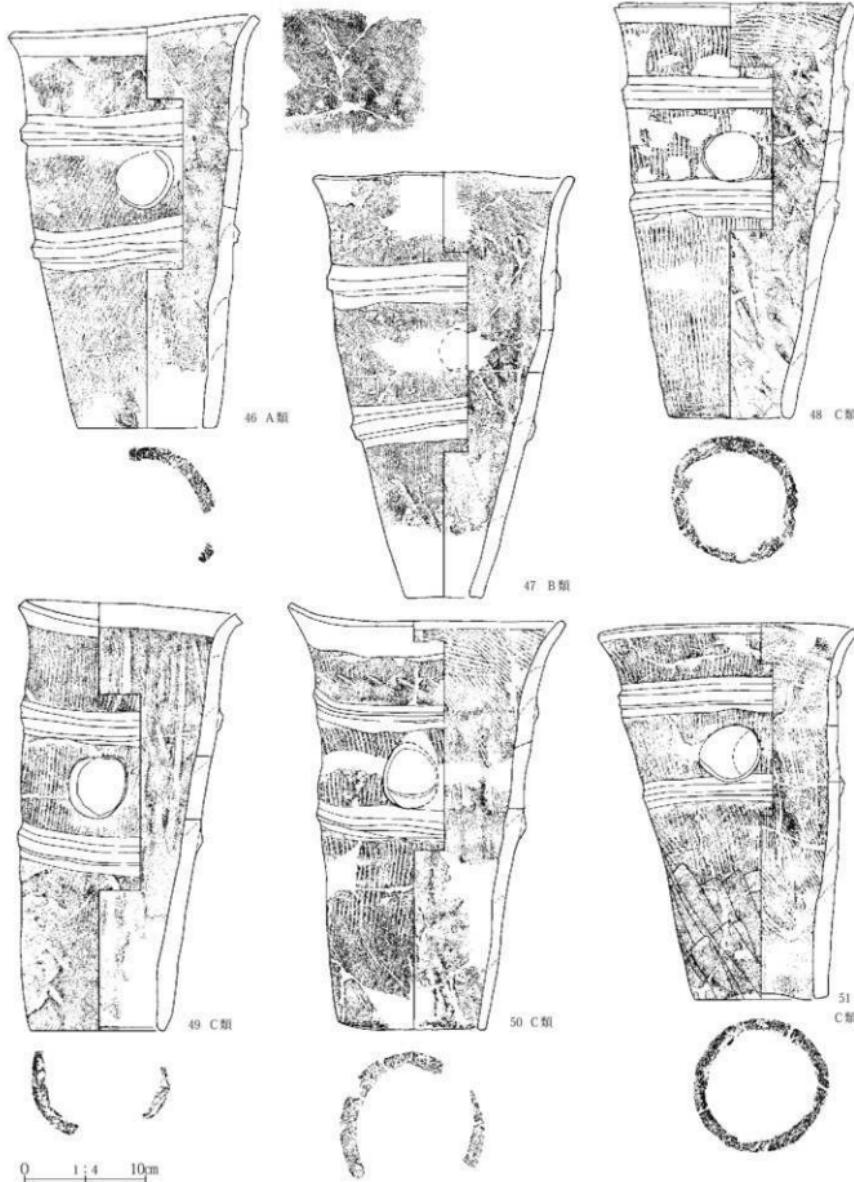
51 器高30.6cm、口径20.5cm、底径11.0cm、ハケメC類(5本)、色調III類(橙色)、突帯台1・M1形、底部調整有 ①54%、②14%、③2.02:1:0.52。

以上の完形品6点をみると、器高は30.6~35.3cmで、平均すると33.9cmで、ほぼ34cm代と推定する。口径は、19.2~22.3cm、底径は10.5~12.1cmである。口径の平均は20.6cm、底径の平均は11.4cmとなる。ハケメ本数では、18本以上のA類が1例、9~12本のB類が1例、6~7本のC類が4例となる。色調は、にぶい赤褐色(I類)、明赤褐色(II類)、橙色(III類)の3種類があり、II類が多く4例で、I・III類が1例ずつである。突帯形はM形が多く、台形、三角形と続く。

器高に対する第1段が占める比率は、50%を境に、それより下の40、41、46%と、50%より上の50、53、54%がある。第1段の基底部が、器高の半分近くから半分より多くの高さを占めている。また、器高に対する第3段(口縁高)が占める比率は、18~26%であるが、18%は例外的で、ほぼ22~26%に収まり、平均すると23.6%となる。口縁の高さが狭くなり、ほぼ器高の1/4以下に収まる形態となる。

ハケメ本数と、他の埴輪要素について相関関係がないか検討してみる。ハケメA類の埴輪は1例のみある。色調I類で、突帯M形で、第1段の比率が41%と低めで、口縁高は24%と高い。ハケメB類の埴輪も1例ある。色調II類で、突帯M形で、第1段の比率が40%と高い。口縁高も26%と高い。ハケメC類の埴輪は4例ある。色調II類2例、III類2例ある。突帯形は台形・M字形・三角形がある。第1段の比率が46、50、53、54%と第1段が器高のほぼ半分かそれ以上となっている。第3段の口縁高の比率も22%が2例と24%と14%が1例ずつで口縁の高さが少なくなっている。

以上まとめてみると、ハケメA類埴輪は、第1段の比率が器高に対して低めで、口縁高はある程度の高さを持



第106図 1号墳出土円筒埴輪図(1)完形

つ。ハケメB類埴輪は第1段の比率は高く、口縁高もある程度の高さを持つ。それがハケメ数C類埴輪になると第1段の比率は、器高の半分かそれ以上の高さとなり、口縁の高さは低くなっている。A類からB類さらにC類となるにつれ、第1段の高さが器高に占める割合が高くなり、口縁の高さは低くなる傾向になる。色調はII類が多く、III類、I類と続く。突帯形は、M形が主で、一部に台形、三角形があり、特に三角形はC類埴輪に多い。底部調整は殆どの埴輪で行われている。

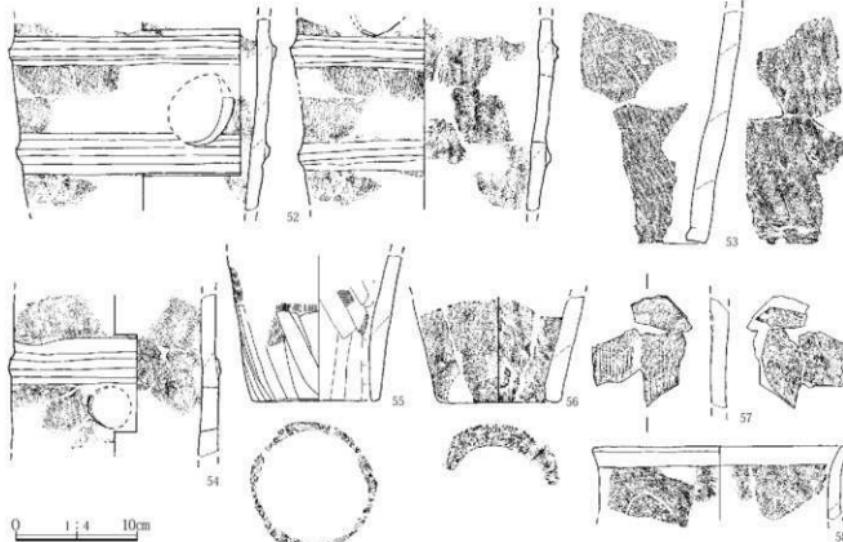
これら完形品のデータである程度円筒埴輪の概略の傾向を知ることができたが、図に掲載した破片資料のデータと先述した完形資料を併せて分類・検討する。さらに未掲載資料についても同様に完形品で見た特徴と同じ傾向があるか分類して検討する。

図化したハケメA類埴輪(18~14本)8例は、ハケメ数18本(2例)、16本(2例)、15本(2例)、14本(1例)、17本(1例)の構成である。焼きや胎土を示す色調はにぶい赤褐色のI類(5例)が多く、明赤褐色のII類が2例ある。少し赤味が強く暗い色調を呈するものが多い。突帶は、基本M字形である。底部調整をしているもの(46・55)と、底部調整が無いもの(53・56)がある。ただし、

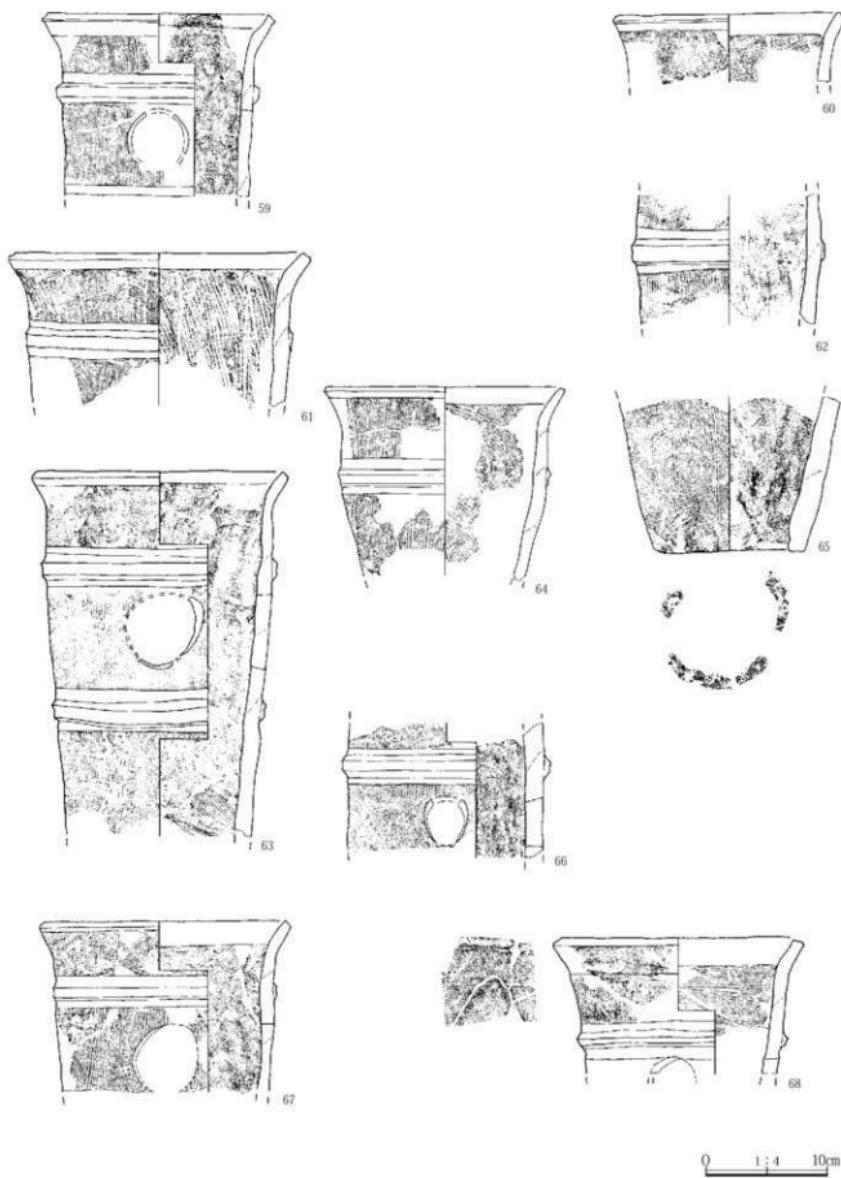
破片資料なので一部のみの底部調整であれば見落とすことがある。また、複数のハケメを持つものがあり、57は、A類(18本)とB類(8本)の2つのハケメで整形している。

未掲載遺物の埴輪片資料のハケメA類(18~14本)資料は、総重量24,730gある。色調はI類(にぶい赤褐色)が6,960g、II類(明赤褐色、にぶい褐色)が16,640g、III類(橙色)が1130gである。突帶の形態は、M形が中心で、台形も少し認められる。色調では、A類は、基本的に色調はII類が主で、I類が続き、少量のIII類がある。図化された埴輪とは色調では異なるが、I類が多めであるという傾向は認められる。突帶はM形が中心で、一部台形がある。

図化したハケメ数B類埴輪(12~8本)20例は、12本(5例)、11本(4例)、10本(2例)、9本(7例)、8本(2例)の構成である。焼きや胎土を示す色調はII類(明赤褐色13例)が多く、III類(橙色・明褐色)が4例ある。やや明るめの色調のものが多い。突帶は、基本M形で、ごく一部に三角形がある。底部調整をしているもの(47・65・71・74・77)と、底部調整が無いもの(76)がある。外面口縁部に△の線刻例(68)がある。



第107図 1号墳出土円筒埴輪図(2)A類埴輪(18~14本)



第108図 1号墳出土円筒埴輪図(3)B類(12 ~ 10本)

未掲載遺物の埴輪片資料のハケメ数B類(13~8本)は、総重量は46,110gである。色調はI類(にぶい赤褐色)が24,070g、II類(にぶい褐色)が19,640g、III類(橙色)が2,400gである。突帯の形態は、M形が中心で、一部三角形が認められる。焼きや胎土を示す色調では、ハケメB類は、基本的に色調はI類が主で、II類が続き、少量のIII類がある。突帯はM形が中心で、三角形が少量ある。

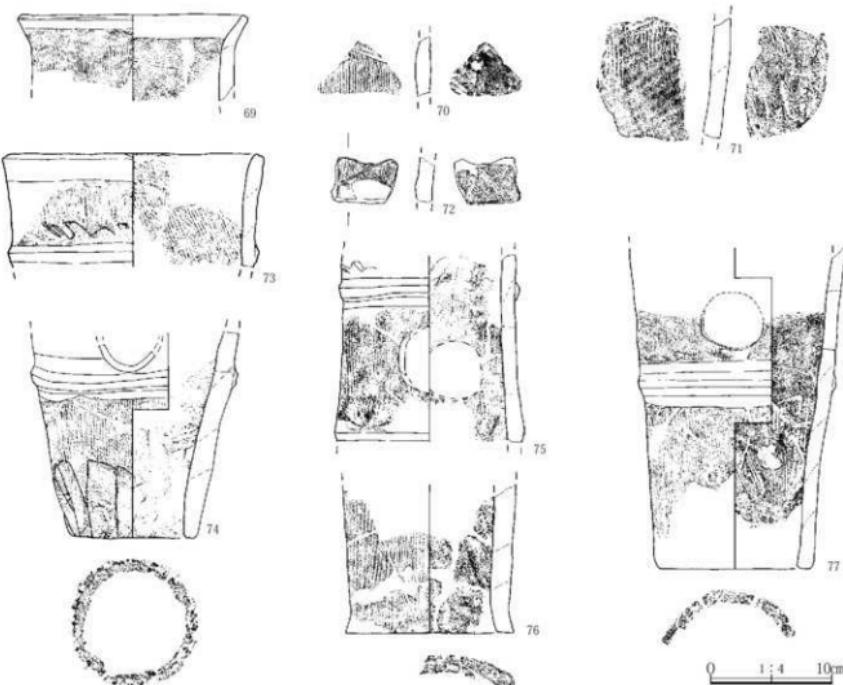
図化したハケメC類埴輪(7~5本)31例は、7本(9例)、6本(21例)、5本(1例)の構成である。焼きや胎土を示す色調はII類(明赤褐色14例、にぶい褐色4例)とIII類(橙色12例)がほぼ同数ある。I類(にぶい赤褐色)が1例と少ない。やや明るく黄色い色味が強い色調のものが多い。突帯は、M形が18例と多いが、三角形も9例とある程度の比率である。底部調整をしているもの(48・49・50・51・93・94・95・104)と、底部調整が無いもの(96、103)がある。底部調整しているものが多い。口辺部外面

に×の記号を線刻している例(82・86)と口辺部内面上辺部に×印の記号を線刻した例(87)、外面2段透かし孔左に×の線刻例(88)がある。

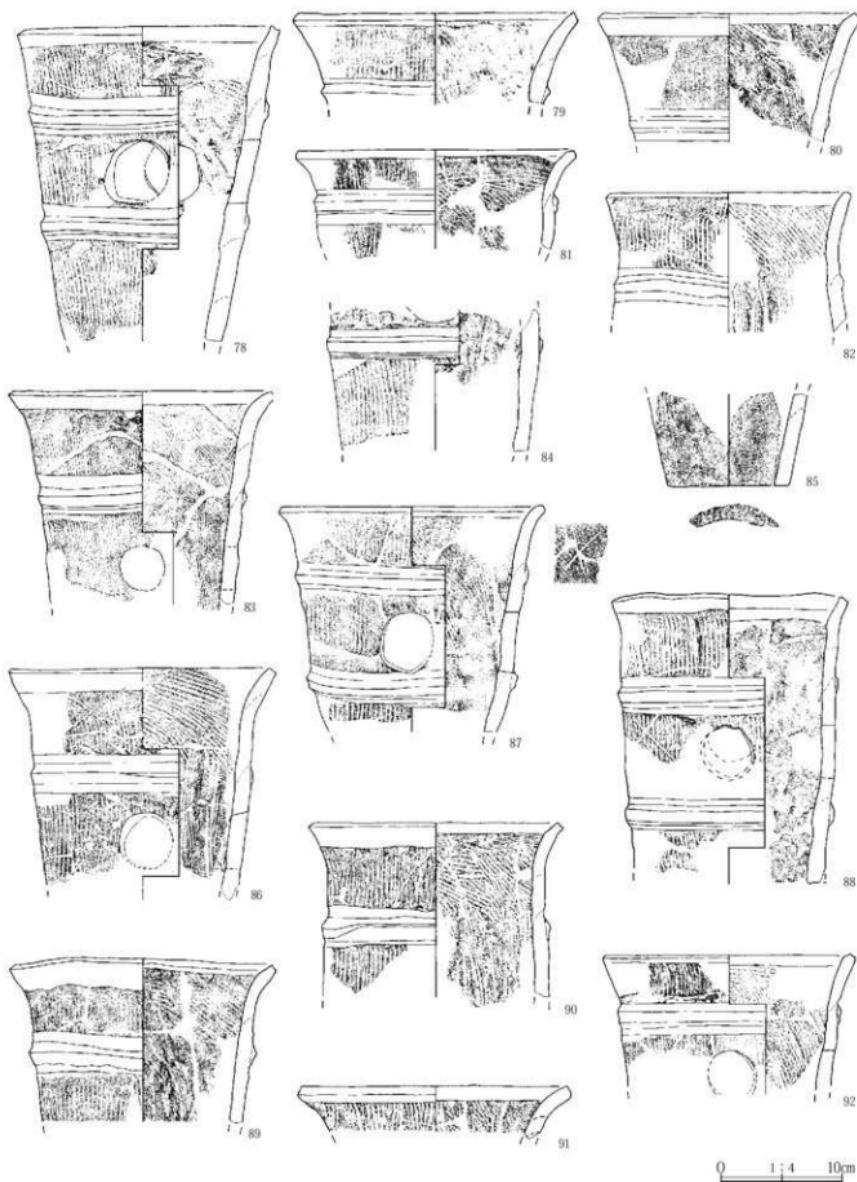
未掲載遺物の埴輪片資料のハケメC類(7~5本)は、総重量は12,430gである。色調はI類(にぶい赤褐色)が7,660g、II類(にぶい褐色)が4,620g、III類(橙色)が150gである。突帯の形態は、M形と三角形がほぼ半々で認められる。焼きや胎土を示す色調では、C類は、基本的に色調はI類が主で、II類が続き、III類が少なめである。突帯はM形と三角形が半々である。

以上のハケメが密なものから粗なもの、A~C類に大きく分けると、大まかな円筒埴輪の特徴が見える。

ハケメ数の密~粗の埴輪を比較すると、色調は、粗密に関係なくII類が主であるが、ハケメA類は色調II類が主でありながら、I類もある程度含まれやや暗めの色調のものが多い。ハケメB類はII類が中心となる。ハケメ



第109図 1号墳出土円筒埴輪図(4)B類(9~8本)

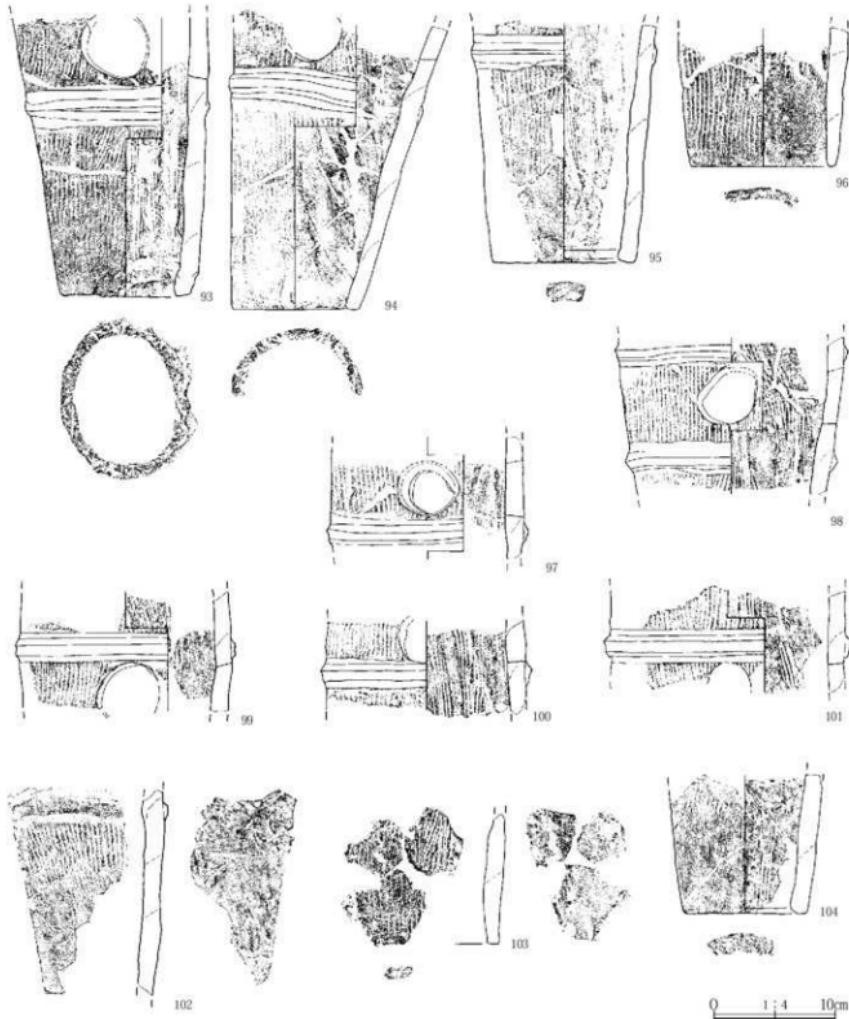


第110図 1号墳出土円筒埴輪図(5)C類(7~6本)

C類はⅡ類が主であるが、黄色味の強いⅢ類が目立つ。突帶を見ると、ハケメA類は、M形が中心をなすも、台形が一部ある。ハケメB類は、M形が中心で、一部三角形がある。ハケメC類は、M形と三角形が半々にある。

つまり、ハケメが密なA類から粗のC類に行くにつれ、

突帶の形態は、台形のものが減り、M形が中心となり、三角形のものが増える傾向がある。突帶の省略化の傾向を示している。一古墳内の円筒埴輪の様相なので、工人差を示す可能性が高い。



第111図 1号墳出土円筒埴輪図(6)C類(6本)

朝顔形円筒埴輪

朝顔形円筒埴輪は、5本以上出土している。7例図示できる。ハケメ数でA類は1例、B類が5例、C類が1例である。

A類(16本)の109は、上にすぼまったく後に聞く口辺部への移行部である。II類(明赤褐色)、突帯はM形である。径がやや狭い。

B類(8~11本)の105は、朝顔形に聞く口辺部でII類(明赤褐色)である。外面口辺部に○の刻線がある。他の107・108・110・111は、第2~3段破片で、すぼまったく後に聞く口辺部への移行部である。いずれもII類(明赤褐色)、突帯はM形である。

C類(6本)は、106が朝顔形に聞く口辺部の破片で、III類(橙色)で、突帯はM形である。

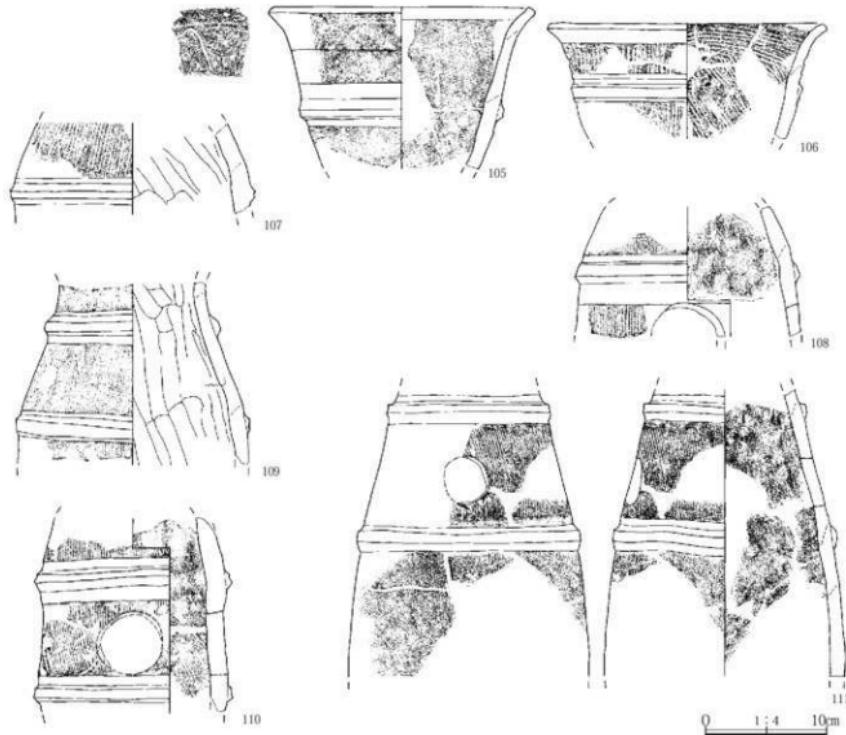
朝顔形円筒埴輪は、円筒埴輪の傾向に近似しており、A類にはII類、突帯はM形、B類にはII類、M形、C類にはIII類、M形のものである。

形象埴輪

形象埴輪は、器財埴輪が多数出土している。特に鞍形埴輪は4個体以上が出土している。鞍形埴輪が1個、大刀形埴輪が2個以上、盾形埴輪が1個、家形埴輪が1個出土している。さらに人物埴輪の破片と想定されるものを出土している。基本的に器財埴輪を中心とした組成である。

鞍形埴輪

鞍形埴輪は、器財埴輪中、最も多く出土したものである。4本以上配置されたものと思われる。まず初めに、残存部分が多く残りが良いものを説明し、その後遺存し



第112図 1号墳出土朝顔形埴輪図

た部品ごとに説明する。

112 鞍形埴輪で良好な残りの例である。下板部は剥落しているが、下板部に続く部位の円筒器台部の矢筒部となることを示す突部のすぐ上に巾3cmの帯状の剥落がある。下板部に挟まれた矢筒下部の円筒部には、2段の格子状の巾2.1～3.2cm、長4.5cmの線刻が下板部の上端のラインの帯状部まで線刻されている。この線刻部に青色の彩色が施されているが、詳しい状況は不明である。上板部の台形状の板部には、斜め方向に巾2.0～2.5cmの2条の線刻が施されている。円筒基部を形成後、下板部を貼り付けた後、上板部までの円筒を形成する。上板部を接合するために、薄くした上板の接合部を半円状の脛部で挟み込んで上板部を形成している。上板部には現状では彩色は認められない。背負紐と推定される紐が貼付されていたと思われるが剥落している。鐵が表現される箇所の基部では、右横方向に綾杉文が線刻されている。綾杉文の上には、円形浮文が4個貼付されていた痕跡が残る。この円形浮文の痕跡の箇所に鐵の矢柄の形に凹ませた痕跡が3ヶ所ある。この上に鐵の表現をしたと部品があったと思われるが欠失している。ハケメはB類(11本)であり、II類(にぶい橙色)で、細砂礫や結晶片岩の混じりがやや多めである。焼成は良好である。

113 112の鞍形埴輪とほぼ同じ造りをしているものである。円筒器台部を構成し、三角形状の下板が側面に貼り付けられている。下板は円筒器台の円形透かし孔とその上の矢筒の下端を示す突部のすぐ上に載る様に貼り付けられている。下板下部には巾4cmの帯状の貼付部があったが、剥落してしまい本来の形が不明である。青の彩色が、下板部及び下板と接合した矢筒円筒部にも残っておりほぼ全面に塗彩していた可能性がある。矢筒円筒部には、巾3.5～4.5cm、高さ4.5cmの格子状の線刻が施されている。下板上端にも幅2cmの帯状部があり、2個の円形浮文が中央4.5cmの間隔を開けて貼り付けてある。背負い紐の痕跡がその上部にあるが、ほぼ剥落している。右側面のフレ部分を観察すると、112と同様に、円筒部を半円状に2つに分けて、上板部の薄い接合部を挿み込むようにして造作していたことが推定される。青の彩色は、上板部の右端に認められるが、全体の彩色状況は不明である。白色の彩色も認められるが、ほとんどが青色と重なる様になっており、本来同じ色が分離した可能性

も考えたい。片岩が入り、ハケメB類(9本)である。色調はII類(明赤褐色)である。

114 112、113同様形態が近似し、同じスタイルの鞍が3つある。下板部から上部にかけての右面が遺存している。下板部の下端に帶状部が横方向に添付され、鉢の表現をした円形浮文が4つ貼り付けられている。下板の上部にも、横方向の帯状部があり、やや大き目の鉢表現と思われる円形浮文が付けられている。帯状部に囲まれた、下板矢筒円筒部に巾2.5cm、長さ3.5cmの格子状の線刻がある。青色の彩色は、矢筒円筒部と下板部の一部、矢筒上板の背板外側と上板部の一部に彩色されている。ハケメB類(11本)、片岩入り、細砂粒あり。II類(明赤褐色)である。

116 矢筒上部と上板部の一部である。上板部は、矢筒の円筒部が半円形になり、上板部の接合部を挿み込んでいる。片岩入る。ハケメB類(10～11本)、II類(明赤褐色)である。矢筒円筒部右側面上部に鉢表現かと思われる円形浮文あり。

鞍上・下板部

115 上板部左側である。矢筒円筒部との接合が良く分かる。円筒部を半円状にして、その間に上板部をやや薄くした接合部に両方から挿み込むようにして接合している。ハケメB類(12本)、色調II類(明赤褐色)。

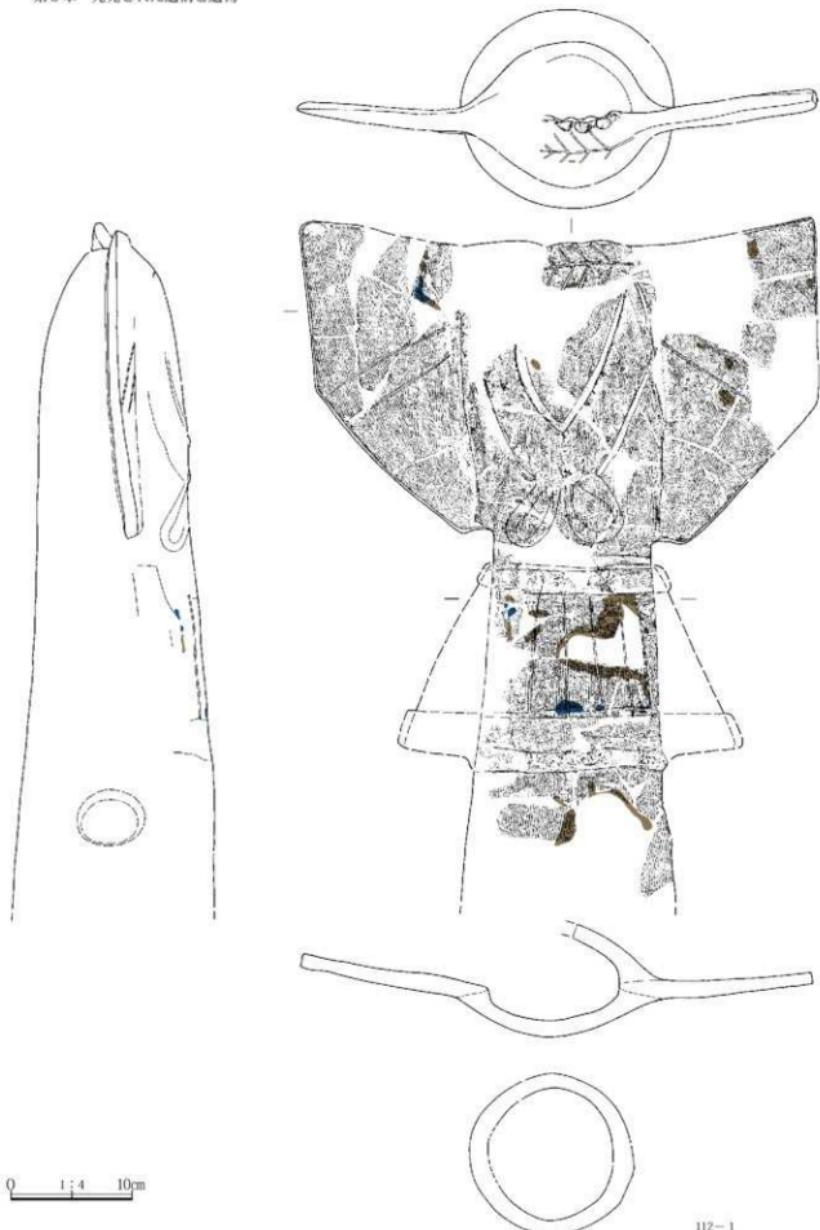
118 下板左部と矢筒円筒部の破片である。下板には、格子状の線刻が円筒部より続いて線刻されている。下板端部の帶状部が横方向に延びている。帶状部に一部残っている箇所には、径0.7cmの円形浮文がある。脣部にベンガラが彩色されている。色調III類(橙色)。

117 鞍の上板部左側の2/3の破片である。巾1.5cmの斜め左方向に向かう2条の線刻がある。線刻の内側にはベンガラが塗彩されている。また、線刻の右下板部下部には青色の塗彩が施されている。ハケメB類(8本)、II類(明赤褐色)である。

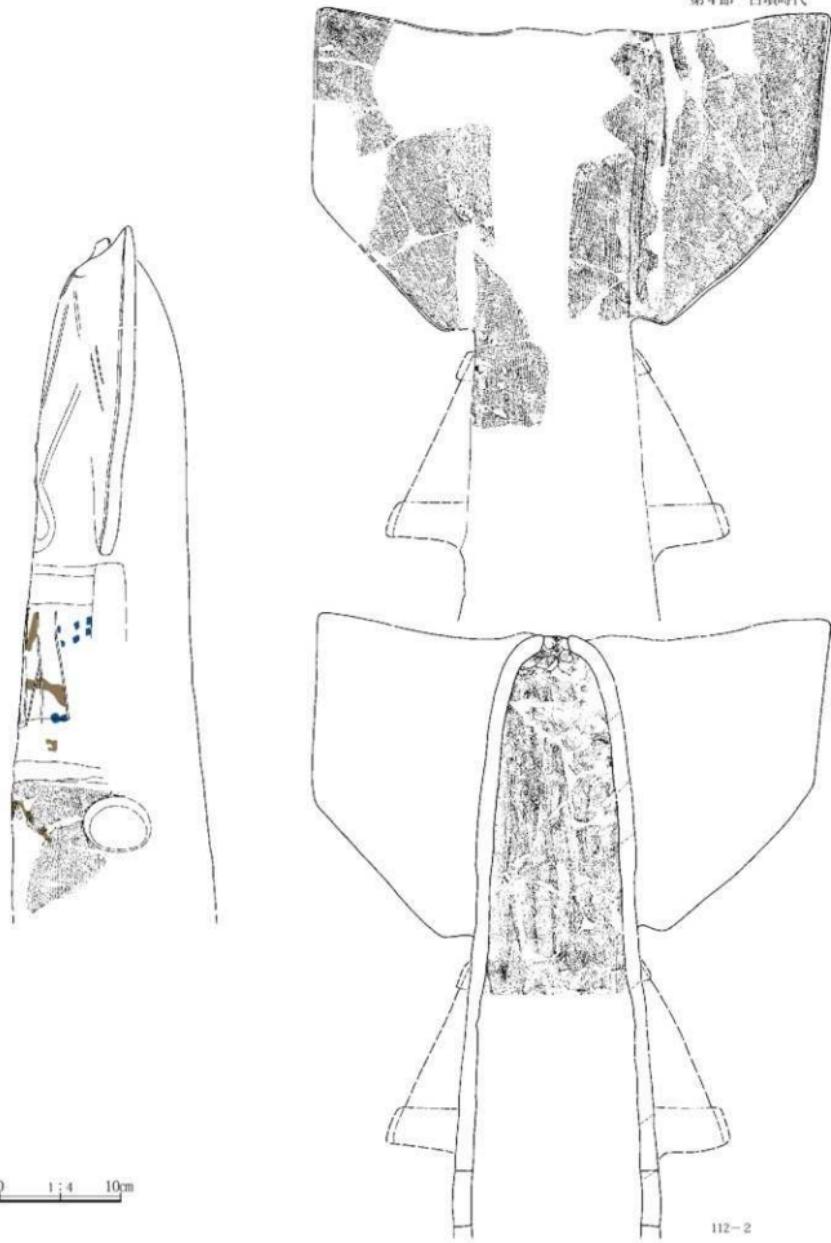
120 鞍の上板部右端部。ハケメA類(14～15本)。III類(橙色)で明るめである。

119 鞍の上板右側部上部である。盾の右側上端部の可能性もある。表面タテハケのみ。ハケメC類(7本)。色調III類(橙色)。

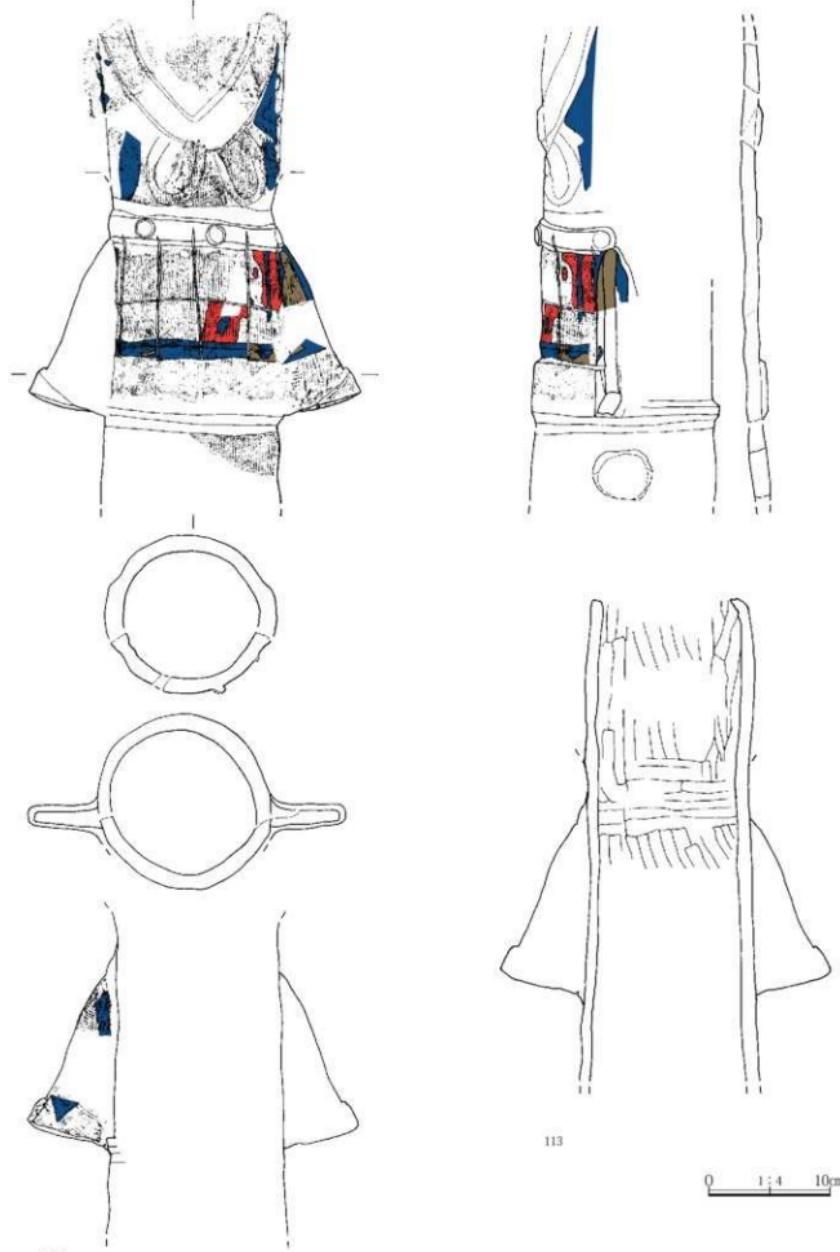
121 鞍の左上板上部破片である。2条の線刻が左下斜め方向に線刻されている。ハケメB類(11本)、色調II類

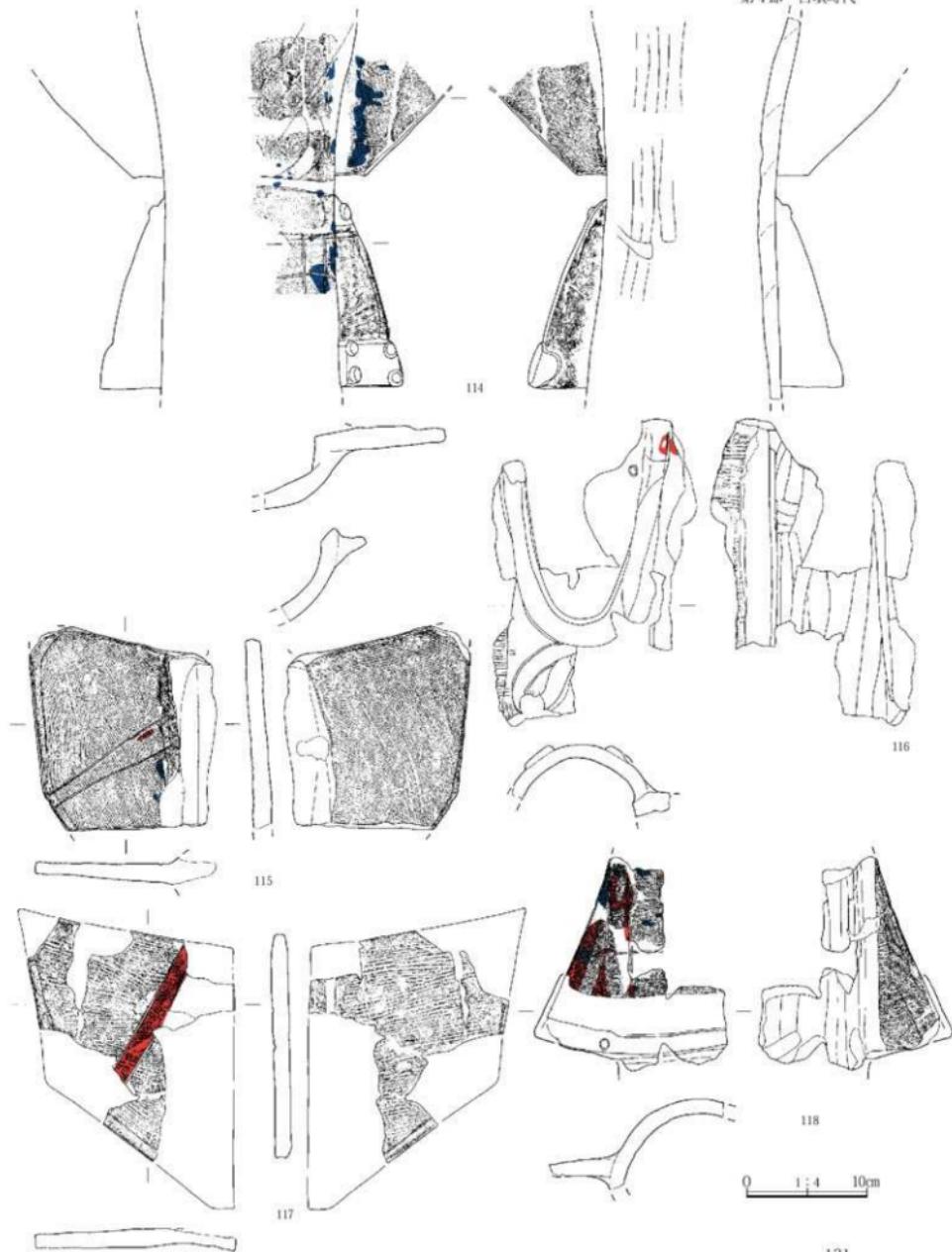


第113図 1号埴出土假形埴輪図(1)



第114圖 1号墳出土假形埴輪図(2)





第116図 1号墳出土叔形埴輪(4)上・下板

第5章 発見された遺構と遺物

(明赤褐色)細砂粒多め。

122 鞍の左上板上側端部の破片。ハケメB類(9本)、色調III類(橙色)。細砂粒、片岩含む。

123 鞍の左下板、左脚部破片。下板下の巾4.4cmの帯状部が側面から一部裏面まで及んでいる。剥落し、剥離痕があるのみである。帯状部の上は、青色の塗彩が施されている。

124 鞍の左上板。2条の線刻が入る。色調III類(橙色)。片岩入る。

鞍鐵部

125 鞍の鐵部分で、鐵は背板状に5本表現されているが、長頭の腸抉長三角形鐵を表現しているものである。裏側には背板を支える支脚が2本貼付されている。色調III類(橙色)。

126 鞍の鐵部分で、1本の長頭の腸抉長三角形鐵を表現している。裏側に支脚がある。

127 鞍の鐵部分である。背板の造りは、2枚作りで、断面を見ると2枚の板状部の間に3つの棒板状のものが挟み込まれている。鐵の造作をした痕跡と想定しており、失敗であったのか、その3本の上から板を重ねている。鐵の基部のほうに青色の彩色がある。

128 鐵が4本表現されているが、ほとんど剥落している。逆刺の刻線の痕跡から長頭腸抉長三角形鐵を表現しているものと想定する。色調III類(橙色)。

129 鐵が2本表現されている。明瞭な長頭腸抉長三角形鐵を表現している。裏側剥離。

130 鞍鐵背板裏の棒状の支えである。131～135は、いずれも背板裏の支えが剥落したものである。

136 鞍の口部分で、右横方向の矢羽根文がある。円形浮文を貼付した跡が2点ある。

鞍矢筒円筒部

137 矢筒円筒部に下板の一部が付着している。下板との接合には、断面三角形の粘土紐を貼り付けて補強している。ハケメB類(12本)。色調III類(橙色)。

138 矢筒円筒部と下板の一部がある。格子状の線刻が認められる。ベンガラの上から青色が塗彩されている。ハケメB類(9本)色調II類(にぶい赤褐色)。

139 鞍の矢筒円筒部。棒状の剥離痕跡、断面三角形の剥離痕跡あり。ハケメB類(12本)。II類(明褐色)。

140 矢筒円筒部。棒状の剥離痕跡あり。

141 矢筒円筒部。2条の線刻で、背負紐の表現をしているものと推定。ハケメB類(8本)。II類(明褐色)。

142 鞍の板状部の断面三角形の補強部片。ハケメA類(16本)、色調II類(明赤褐色)。

143 鞍の矢筒円筒部と板部の接合部付近。ハケメA類(15本)、色調III類(橙色)

144 鞍の矢筒円筒上部で、背負紐の表現がされている。ハケメB類(10本)、色調III類(橙色)。

145 鞍の矢筒部で、板状部との接合面残る。断面三角形状の補強部も残る。斜めに入る2条の線刻あり。盾の可能性もあり。ハケメA類(14本)、色調II類(明赤褐色)

146 鞍の矢筒円筒部と板部の接合部付近。ハケメ数不明、色調III類(橙色)

147 鞍の矢筒部である。板状の接合面の痕跡残る。ハケメB類(8本)、色調II類(明褐色)。

148 鞍矢筒円筒部が盾内区と推定。直線状や斜右上方の刻線あり。青色の塗彩あり。鞍の可能性が高い。ハケメA類(13～14本)。色調II類(にぶい赤褐色)。

矢筒帶状部・紐部

149 鞍矢筒円筒部の背負紐の一部。ベンガラ塗彩されている。ハケメA類(13本)、色調III類(橙色)。

150 鞍背負紐部。ハケメA類(14本)、色調II類(明赤褐色)

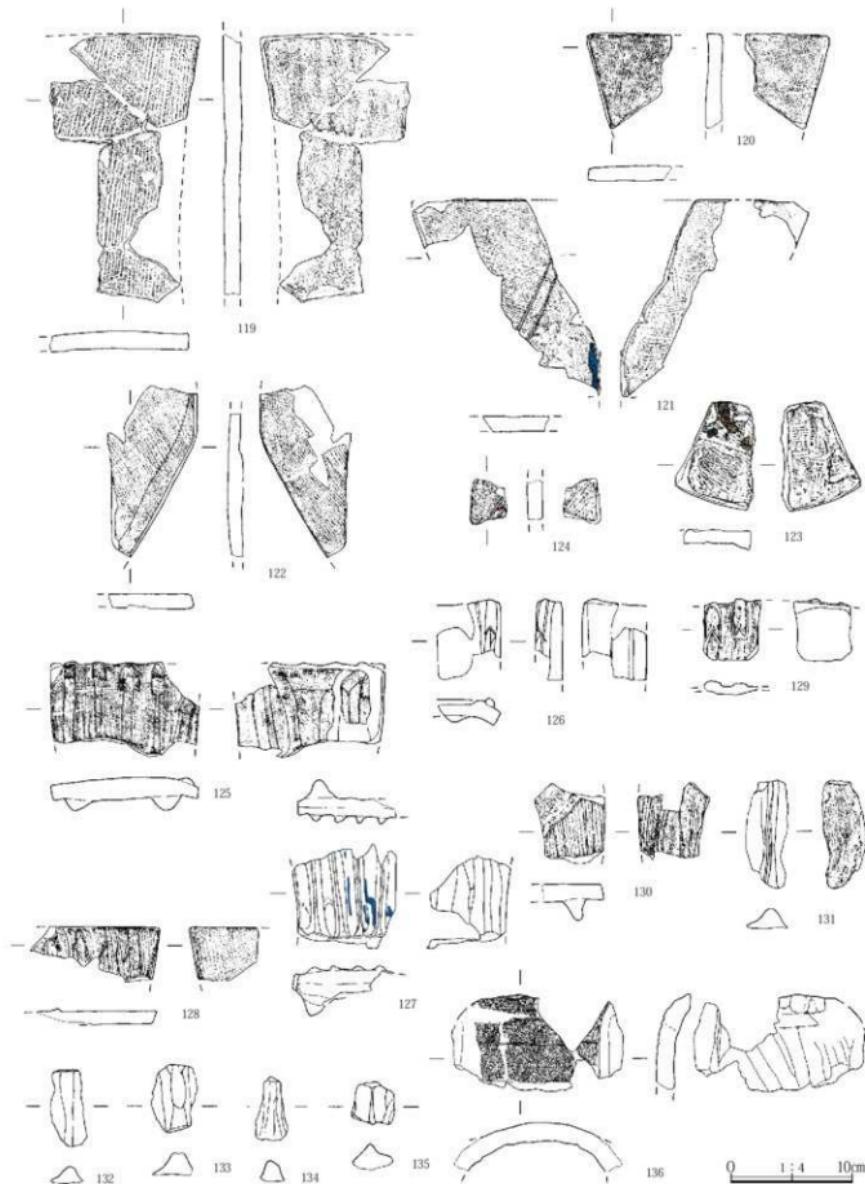
151・152 鞍の上下板の帯状部鉄の破片。

153 鞍の下板上の帯状部と推定。2つの鉄あり。

盾形

盾形埴輪は、1本以上ある。完形に近い例以外は小破片で実態は不明である。

154 残存部分の多い盾である。盾の外区の板状部は、内区円筒部を半円状にして挟み込むようにして押さえ、さらに断面三角形の補強帯で押さえている。内区円筒部には、タテハケ(8～17本)を施し、外区板状部はヨコハケを施している。板状部外側にはナデを施しており、外側1.1cmの中に刻線で区画する。内区には中央部がすぼまる形態の長方形の刻線が施され、それに沿って三角形状の刻線が、中央部刻線に向かって左右内区円筒部から外区板状部まで施される。内区円筒部中央には、中央部がすぼまる長方形の区画中に、2条の横方向の刻線がある。内面はタテナデである。ほぼ全面にベンガラが塗彩され、その上から一部に青色の塗彩がなされている。



第117図 1号墳出土鞍形埴輪(5)上板・鐵



第118図 1号墳出土鞍形埴輪(6)矢筒部

ハケメ A～B類(8～17本)、胎土色調はⅢ類(橙色)である。

155 盾形埴輪の内区円筒部下端部。弧状を呈している。タテハケメの後に、三角形文(鎧葉文)を線刻している。測先端部には、巾1.1cmの横方向の刻線がある。ベンガラが塗彩され、その上から青色が彩色されている。胎土色調は橙色。

156 盾形埴輪上部側縁部。ヨコハケメ後、側線部に巾1.2cmの刻線がある。刻線内部に青色が塗彩されている。胎土色調はⅢ類(橙色)。

157 盾形埴輪外区右上端板状部片。表裏ともにナナメハケメ。ハケメ B類(10本)胎土色調はⅡ類(にぶい赤褐色)。

158 盾形埴輪外区板状部、接合部片の可能性高い。板状部を挟むように半円部の一部が残る。ナナメハケメ後に、斜め下方に刻線あり。ハケメ A類(16本)、胎土色調はⅢ類(橙色)。

159 盾形埴輪上端部片と推定。表にはベンガラ塗布後、青色を彩色している。ハケメ C類(7本)、色調はⅢ類(橙色)。

160 盾形埴輪内区円筒部の刻線のある破片。Ⅲ類(橙色)。

161 盾形埴輪外区板状部破片。一部刻線あり。ベンガラが一部塗彩されている。ハケメ B類(12本)、色調はⅢ類(橙色)。

162 盾形埴輪外区板状部片。表裏ナナメハケメ、板状部を半円状の内区で挟み込むようにした痕跡がある。ハケメ A類(19本)、色調はⅡ類(にぶい褐色)。

163 鞍の板部か盾の外区になる。線刻で三角形と推定される刻線があり、盾の可能性が高い。

164 鞍矢筒円筒部、盾の内区と推定。補強帯の剥離、線刻からすると盾の可能性が高い。刻線内にベンガラの塗彩あり。ハケメ A類(14～15本)、色調Ⅲ類(橙色)。

165 鞍矢筒円筒部か盾内区と板状部、外区との接合部破片と推定する。側線から1～2cmほどの箇所に縱方向の刻線があり、その区画内側に三角形状の刻線があり、ハケメが施されている。また、青と赤の塗彩が施されている。盾の可能性が高い。ハケメ C類(7本)、色調Ⅲ類(橙色)。

166 鞍矢筒円筒部か盾内区と推定。斜めの刻線に入る。

ベンガラ塗彩あり。盾の可能性高い。色調Ⅲ類(橙色)。

167 鞍板部か盾外区の接合補強部付近の破片と推定。三角形状の刻線あり。外側の区画にベンガラ塗彩。三角形状の刻線からすると盾の可能性高い。色調Ⅲ類(橙色)。

168 鞍板部か、盾外区の接合部付近の破片。2条の刻線で、斜めに区画されている。区画内部にベンガラが塗彩されている。盾の可能性高い。色調Ⅲ類(橙色)。

鞍・盾両方の可能性あるもの

鞍・盾の部品で区別できないものをまとめている。

169 鞍・盾の円筒部の一部。裏側に剥離痕跡あり。

170 鞍の板部か盾の外区の破片と推定。3条の線刻あり。ハケメ C類(6本)、Ⅱ類(明褐色)。

171 矢筒部、盾中央部で線刻あり。ハケメ A類(15本)、Ⅱ類(明褐色)。

172 鞍矢筒円筒部か盾内区で、板状部、外区との接合部破片。両方向からの剥離痕跡あり。一部にベンガラ塗彩が施されている。ハケメ A類(16本)。色調Ⅲ類(橙色)。

173 鞍矢筒円筒部か盾内区部品と推定。ハケメ B類(10本)。色調Ⅱ類(にぶい褐色)。

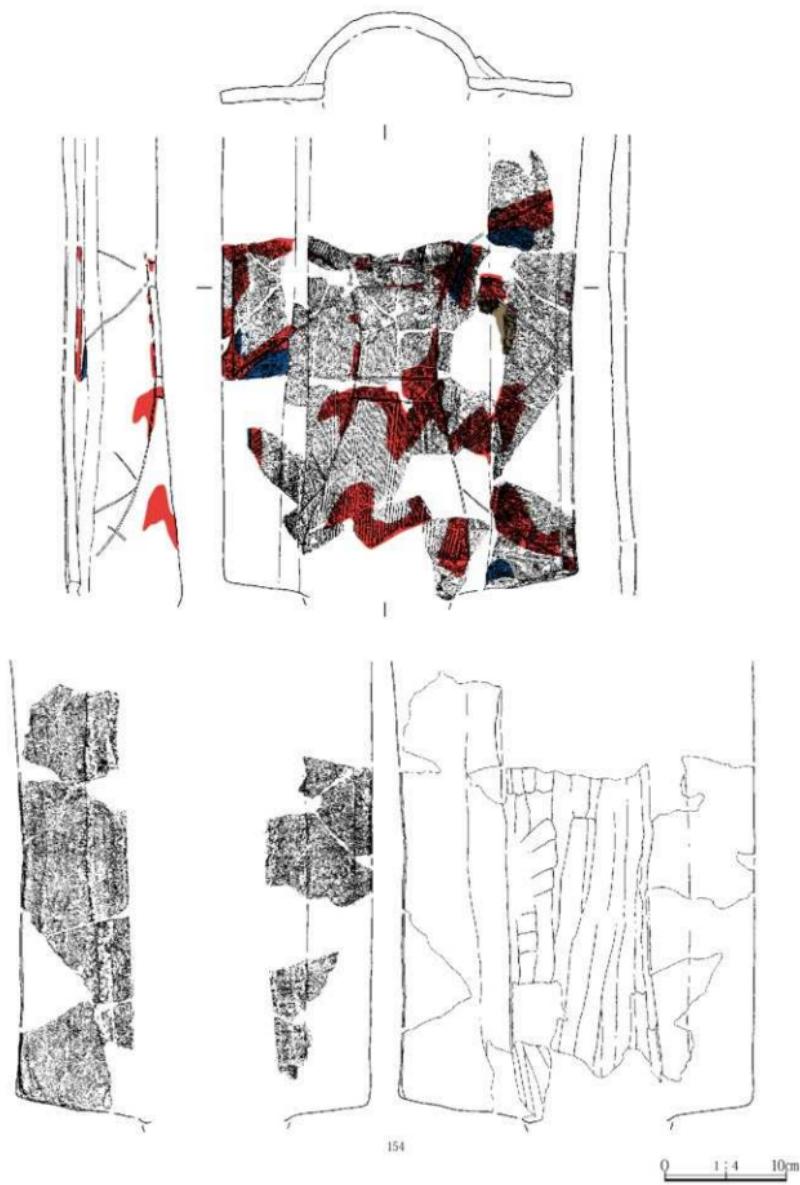
174 鞍板部か盾外区と推定。直線状の縱方向の刻線あり。それに沿ってベンガラ塗彩。色調Ⅱ類(にぶい赤褐色)。

大刀形

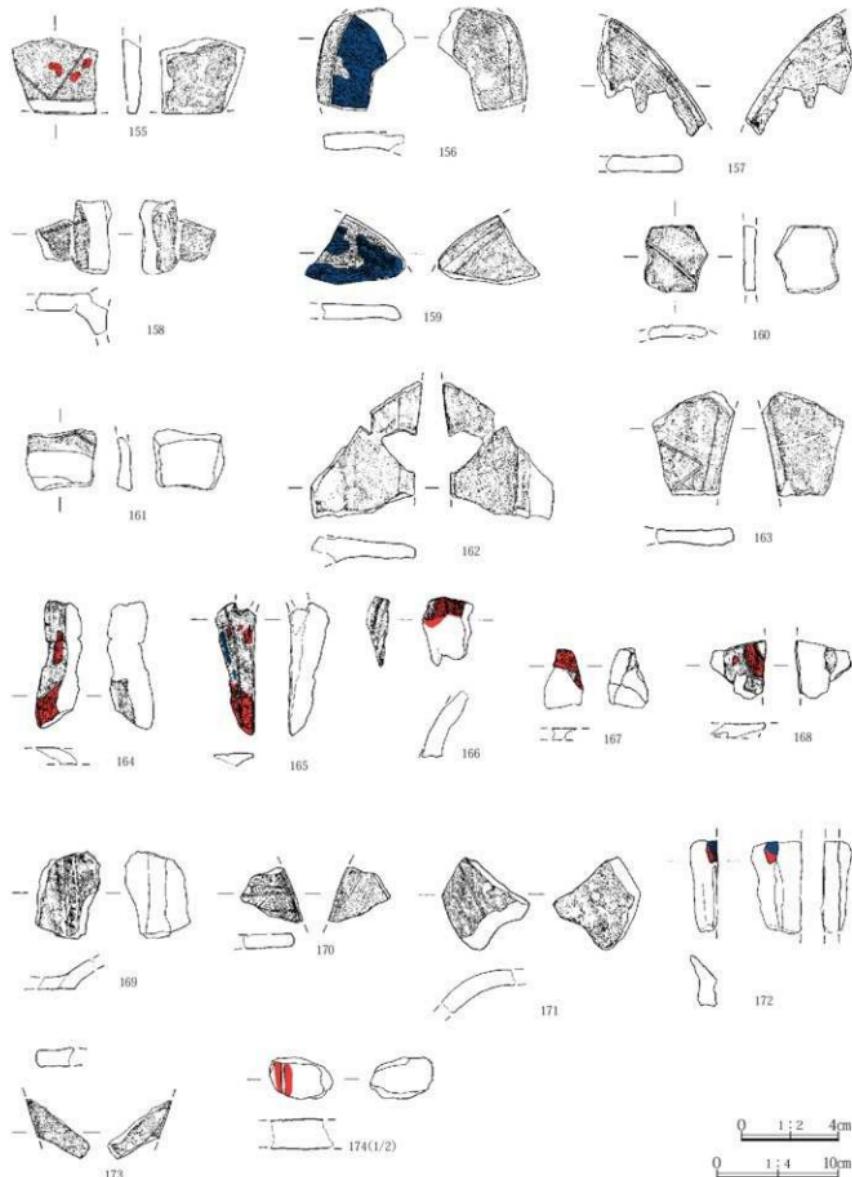
大刀形は残りの良いものが多く、4本以上確認できる。基壇の南西側から間隔を開けて他の武器武具埴輪と共に立てられている。

175 大刀形の柄頭と柄間、鞘部及び一部基台部がある。柄頭は剥落しているが、組状に表現された2条の棒板状の造作が把部に重ねている。柄頭に2条のM字形突帯が巡らされており、柄縁金具を表現したものと思われる。その柄縁2条突帯に勾金を装着していた剥離痕跡がある。柄縁の下の突帯から、勾金装着部の下方向に吊紐の表現が、U字形の粘土帶貼付である。さらにその下に結びの表現がある。柄縁の下の突帯から、下方の鞘尻表現とされる2条のM字形突帯の上の突帯に繋がる直線状の棒状の隆起線の表現がある。鞘部の刃部を示している可能性がある。基台には、勾金の方向に直交する左右側面に円形透かし孔がある。一部青色の彩色がある。ハケメ C類(6本)、色調Ⅱ類(明褐色)。

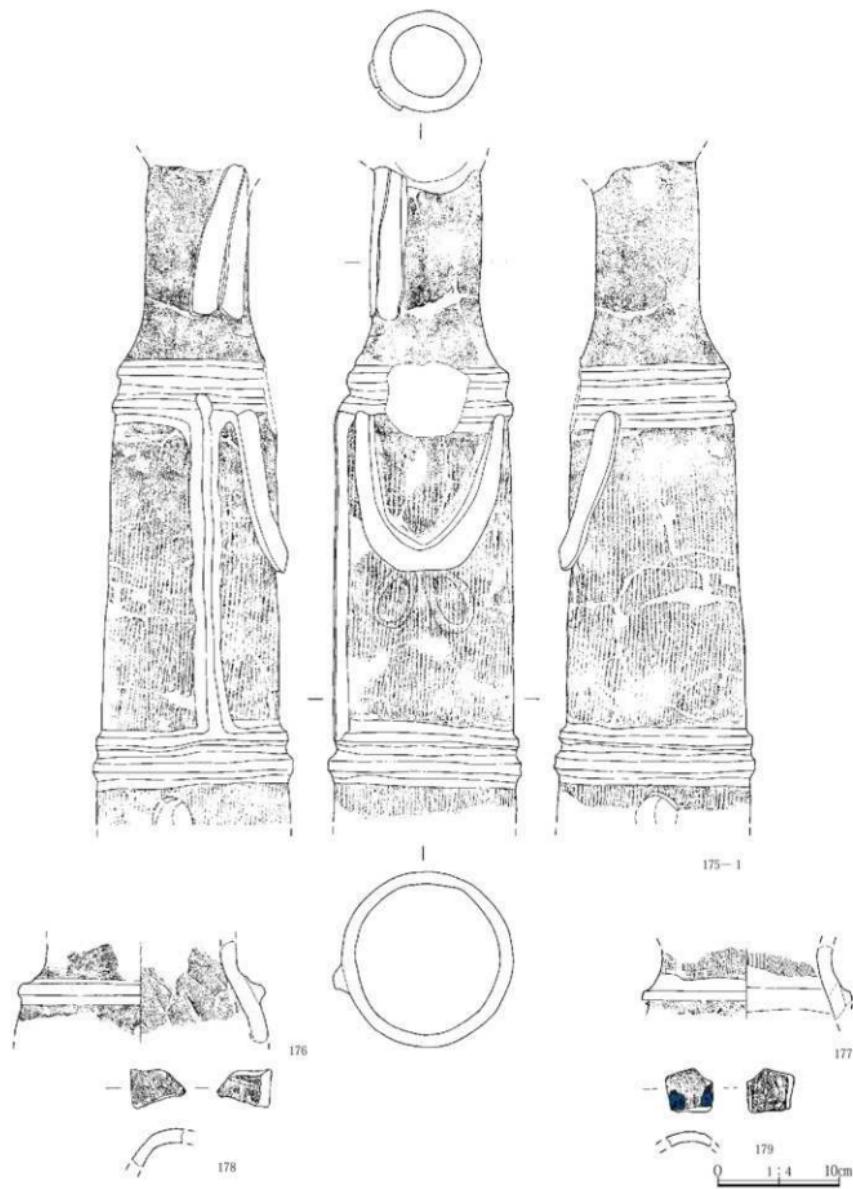
176 残存部の鞘部が21cmで、柄部を示すM字形突帯が



第119図 1号埴出土埴形埴輪(1)



第120図 1号墳出土盾形埴輪図(2)軸・盾図



第121図 1号墳出土大刀形埴輪図(1)



第122図 1号墳出土大刀形埴輪図(2)

- 一条巡る。柄部径は15cmある。やや大型の大刀形埴輪。ハケメ A類(16本)、色調II類(明赤褐色)。
- 177 柄部はタテハケメで鞘口を示す箇所に突帶を巡らせた痕跡がある。ハケメ B類(12本)、色調I類(にぶい赤褐色)。
- 178 柄部片。タテハケメ。ハケメ B類(13~14本)。色調III類(橙色)。
- 179 柄部片。タテハケメ。ハケメ不明。色調II類(にぶい橙色)。
- 180 吊紐の一部が遺存する鞘部破片。表面タテハケメ。ハケメ A類(15本)。色調III類(橙色)。
- 181 鞘口を示す2条のM字形突帯が残る。ハケメ A類(20本)、色調II類(にぶい橙色)。
- 182 柄の破片。外面タテハケメ。ハケメ A類(16本)。色調II類(明赤褐色)。
- 183 基部と鞘部の下部である。基部には円孔透かしがあり、M字形突帯が巡る。突帯のすぐ上に吊紐と推定される剥離痕跡がある。ハケメ B類(11本)、色調II類(にぶい赤褐色)。
- 184 大刀形埴輪の鞘尻部の破片の可能性高い。M字形の2条の突帯がある。ハケメ B類(12本)。色調III類(橙色)。
- 185 鞘口に勾金を貼付した痕跡が認められる。
- 186 柄部と勾金及び鞘上部である。鞘部には、U字形の吊紐とそれに近接して、楕円形と推定される剥離痕があり、鞘口を示す2条の台形状の突帯がある。勾金が、突帯部から上方に延び、長方形状で、中央を半円球状にして貫通しない孔が中央にある三輪玉を表現している。ハケメ C類(6本)、色調II類(にぶい橙色)。
- 187 円筒基台部で、円孔スカシを持つ。径の大きさを見ると大刀形埴輪の基台の可能性が高い。ハケメ C類(7本)。色調III類(橙色)。
- 188 円筒器台部で、径の大きさを見ると大刀形埴輪の可能性大。ハケメ C類(6本)。色調II類(にぶい橙色)。
- 189 円筒器台部。径の大きさを考えると大刀形埴輪の可能性が高い。ハケメ C類(6本)。色調II類(にぶい橙色)。
- 190 柄頭部、柄上部片。玉縁大刀柄頭の頭頂部遺存、勾玉、補強帶粘土の剥落の痕跡あり。頭頂部には裏側中央部に長7.5cmの棒状粘土を装着している。径6cmの円

筒状の柄部が一部遺存している。ハケメ B類(8本)。色調III類(橙色)。

191 柄頭部。玉縁大刀柄頭の形態残る。上面に勾金装着のための補強帶と、側面には勾金装着痕跡、裏に円筒像の柄間部を装着した長楕円形の痕跡と、棒状の支えを装着した円形状の痕跡がある。ハケメ A類(14本)。色調III類(橙色)。

192 勾金片。三輪玉装着痕跡あり。中央に下まで貫通する孔あり。

193 勾金片。三輪玉の半円球状の中央部が遺存。中央部の上から下に孔が貫通する。色調II類(明褐色)。

194 勾金上部片。三輪玉の半円球状の中央部が2つ遺存。左右の半截状の玉は欠失している。中央の半円球状の上から、勾金板部、裏側の支えまで貫通している。勾金が屈曲する手前にもう1.2cmの帯環状の表現がある。ベンガラで勾金板部が塗彩されている。三輪玉にかすかに青色の塗彩痕跡あり。ハケメ A類(16本)。色調II類(明褐色)。

195 勾金上端部片。三輪玉の剥離痕跡2ヶ所あり。勾金先端は左側が斜めに切られている。両段であるかは欠失しているため不明。色調III類(橙色)。

鞘形

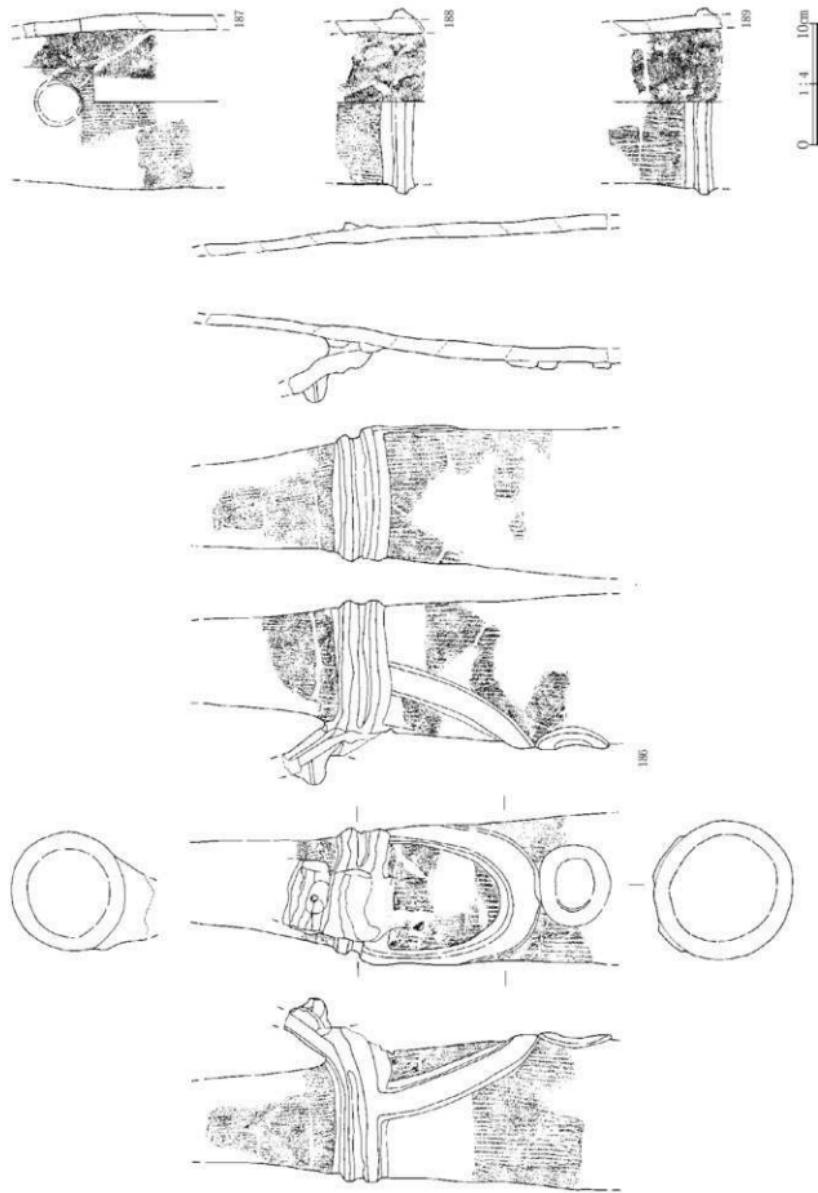
ほぼ全体が分るものが、西北部周囲より出土した。

196 径4cm強の粘土帯3段に組み上げ、上部の手を入れる箇所にさらに1段の合計4段の粘土帯を積み上げて整形している。表面には、渦巻文の文様を線刻で施している。手部右側には、上部には巾2.2cmの帯状帯を設け、径1~2mmの孔を斜め下から開けている。ベンガラを主に渦巻文の刻線区画内に塗彩するが、他の手部にも全体的に施しているようであり、その様相ははっきりしない。文様下部に白色及び青色の彩色が数ヶ所で認められる。赤と青(白)の塗彩が施されている。ハケメ B類(10本)、色調III類(橙色)。

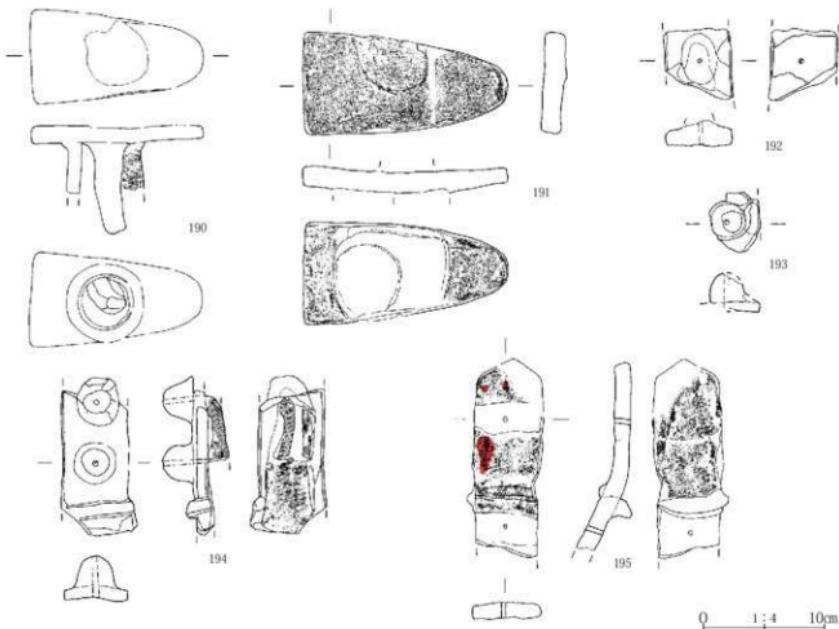
家形

家形は、古墳周囲北側から出土している。2個体の可能性もある。

197 家形埴輪切妻屋根部の破片。2段の粘土板を棟部で接合する。棟は帯状に厚く表現している。ベンガラで波状の文様を施している。屋根部には、2条の刻線で大型の渦巻文に小型の渦巻文が派生する形態で線刻され



第123図 1号埴生土大方形埴輪図(3)



第124図 1号墳出土大刀形埴輪図(4)

る。渦巻文の区画内部にはベンガラで塗彩している。反対面は三段刻線で区分し、その刻線上に線刻した三角文を刻線で表現する。三角文の区画内部をベンガラで塗彩している。破風は、屋根の端部をほぼ直に曲げて表現している。外面はヨコハケ後ナデ仕上げである。内面は下から縦方向のハケメ、上がヨコハケ後、粗いナデを施した雑な造りである。堅魚木は3個屋根に装着されていた(198・199・200)。うち1個がほぼ完形(199)で、中央がやや細めになる長方形形状の造りで、堅魚木から棟まで貫通する径4~5cmの穿孔がある。色調I類(にぶい赤褐色)。

201 家形埴輪屋根。破風から屋根にかけての破片。渦巻文の一部が2条の刻線で施されている。刻線内にはベンガラが付着している。色調III類(橙色)。

202 家形埴輪の壁の角から側面の一部。屋根部に近い部位と推定。角には丸みをつけて粘土板を貼り付けた痕跡あり。三角形状の刻線が認められる。刻線内にベンガ

ラが塗彩されている。色調II類(明褐色)。

203 家形埴輪屋根破風板部。197と同一個体の可能性あり。三角形状の刻線が入る可能性あり。区画内にベンガラ塗彩。屋根から直に屈曲して巾2.4cmの破風板を形成。III類(橙色)。

204 家形埴輪の壁の一部。柱の表現がある。2条の線刻で一部区画されている。刻線内は赤色の塗彩である。端部は弧状に曲がる。

205 屋根の軒先と推定される。端部は弧状に曲がる。

206 屋根の軒先と推定される。端部は鈍角に曲がり屈曲している。

207 家の壁に付いていた柱の一部と推定。色調III類(橙色)。

208 家の屋根と推定。刻線で三角形が表現されている。刻線内にベンガラが塗彩されている。色調II類(にぶい橙色)。

209 家形埴輪壁か? 緩やかに大きな弧状の断面を呈す

る。ハケメB類(8本)、色調III類(橙色)。

210 家形埴輪壁か。緩やかに弧状を呈している。ハケメB類(8本)、色調III類(橙色)。209と210は同一個体の可能性あり。

211 堅魚木破片。棟との接合痕跡あり。上から下に貫通する径0.6cmの穿孔がある。

212 堅魚木破片。下面一部欠損。上から下まで貫通する径0.5cmの穿孔あり。ベンガラが上面に一部塗彩され

ている。

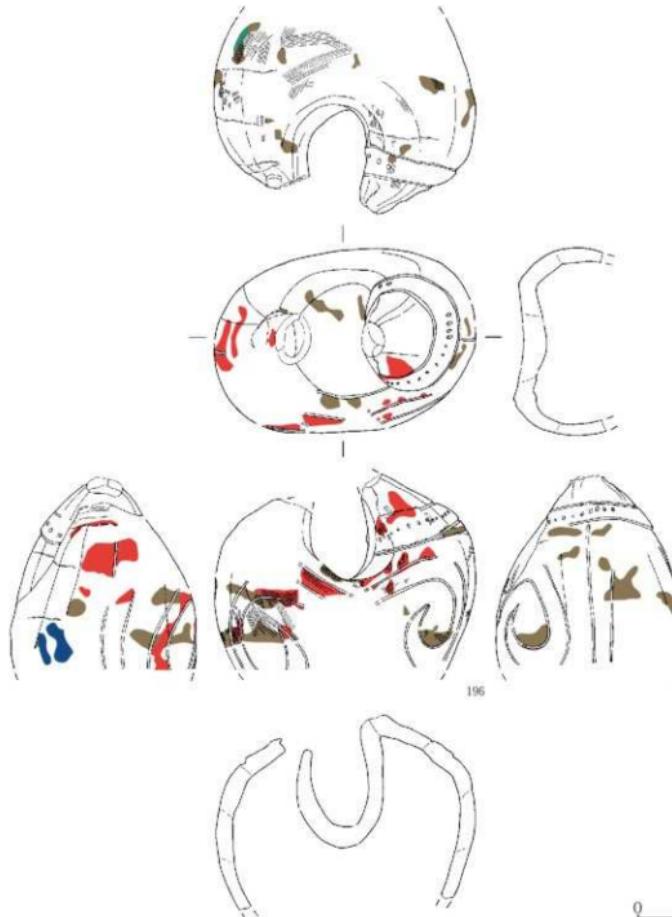
人 物

人物は小破片ばかりで、実態は不明である。

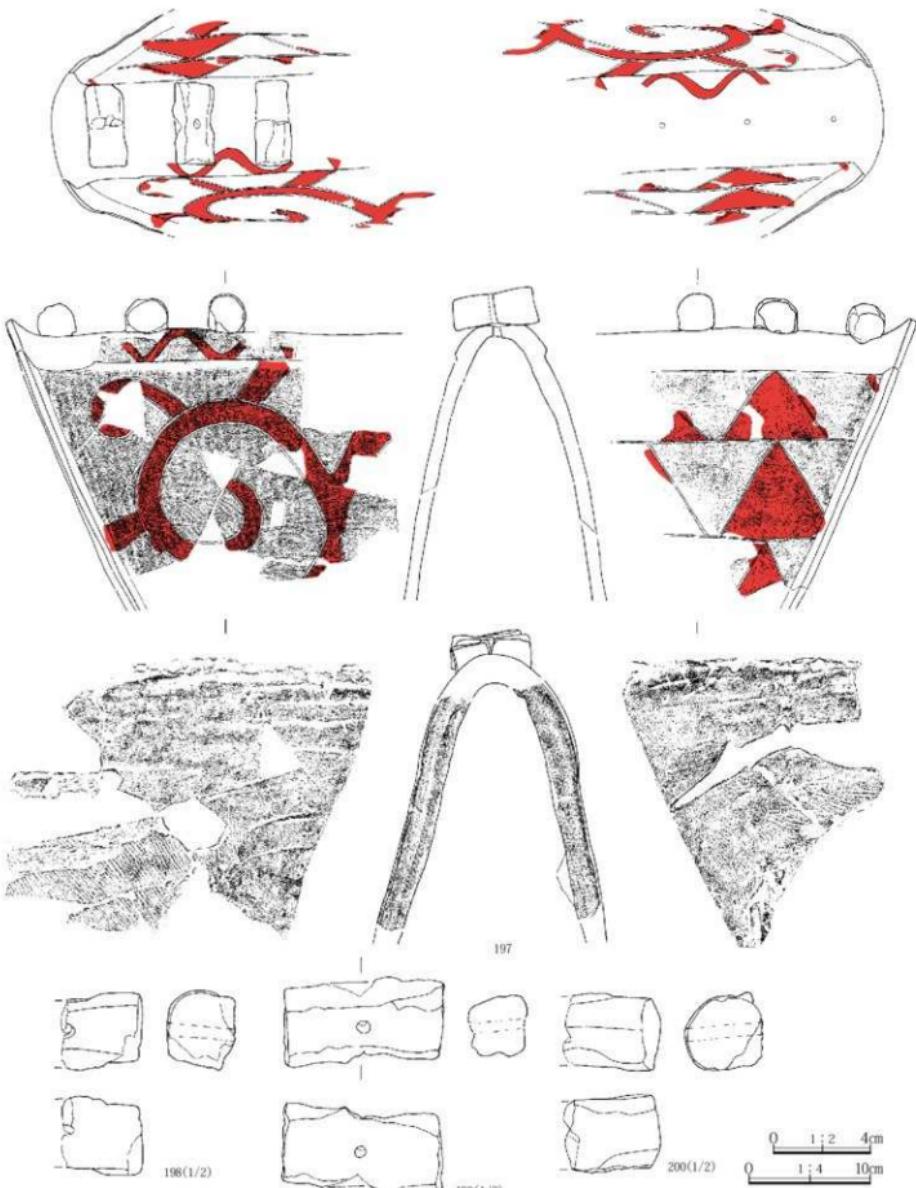
213 人物鼻 剥離している。鼻の穴を2条の深い刻線で造作している。色調III類(橙色)。

214 棒状で先端が尖る造形。長さ4cm、厚1cm大で装飾品か? 色調III類(橙色)。

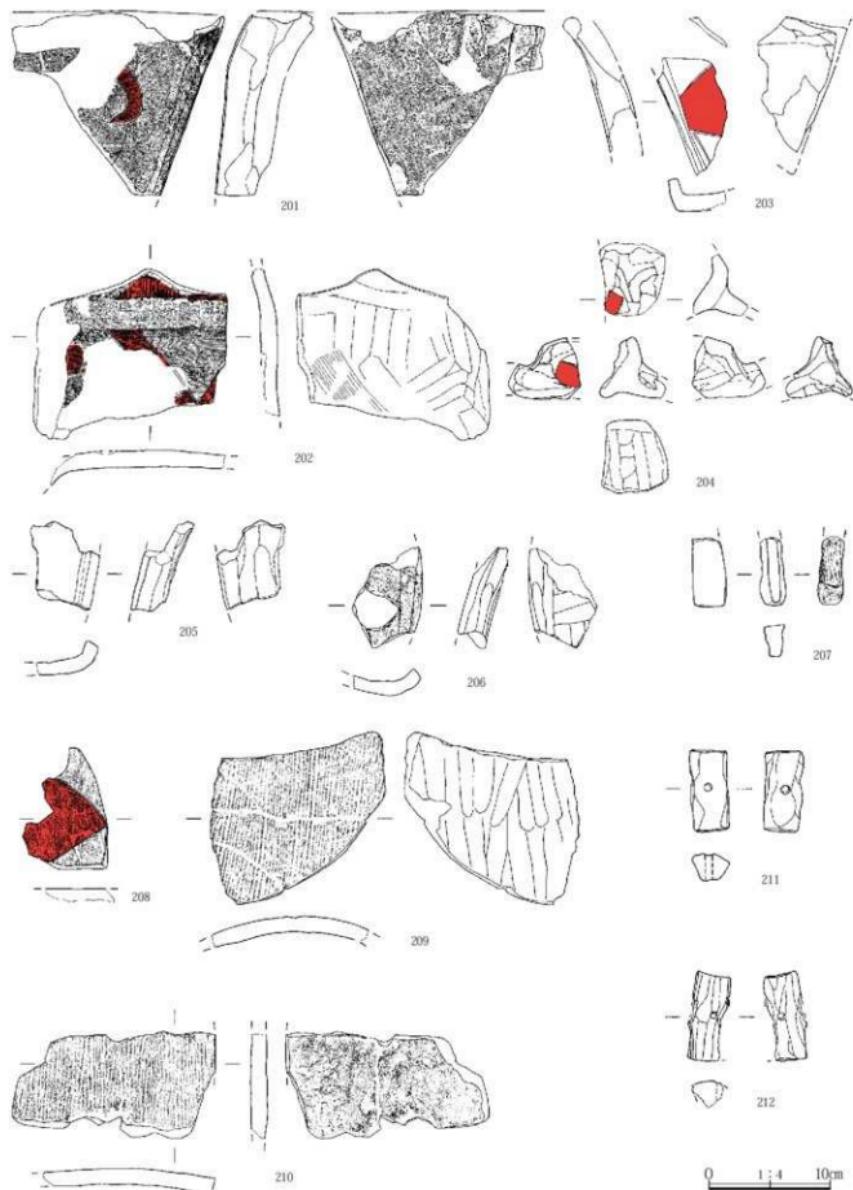
215 長2cmの勾玉状の小型品。おそらく人物の頭を飾



第125図 1号墳出土瓶形埴輪図



第126図 1号墳出土家形埴輪(1)



第127図 1号墳出土家形埴輪図(2)

る勾玉飾りが剥落したものと推定する。色調Ⅲ類(橙色)。

216 長2.1cm、巾0.7cmの先端が尖る棒状品。人物の装飾の一郎と推定。色調Ⅲ類(橙色)。

不明品・基台部

はっきりと分類できないもの、及び形象埴輪の基台部をまとめて説明する。

217 ほぞのある棒状で先が細くなる形態を有する。小さいが人物埴輪の腕の可能性もある。色調Ⅲ類(橙色)。

218 底部破片。径0.5cmの穿孔下端部にあり。上下面ともに接合痕跡あり。色調Ⅱ類(明褐色)。

219 形象埴輪の部材。径2.1cm程の小円孔透かしの一部が残存。断面を見ると2枚の粘土板を重ねて縫じ合わせて端部を形成している。器種不明。ハケメA類(16本)、色調Ⅲ類(橙色)。

220 U字形に加工したと思われ、裏側が一部剥離している。器種不明。色調Ⅱ類(にぶい橙色)。

221 円棒状の造り。裏側と片側面に剥離痕跡あり。器種不明。色調Ⅱ類(にぶい橙色)。

222 やや円弧状の板状品。丁寧になでている。剥離痕が裏面と左右両側面にある色調Ⅱ類(明褐色)。

223 帽子の部分品か?家形埴輪の下屋根の軒先の可能性もある。

224 0.5~1.2cmの厚みを持つ弧状を呈するもの。器種不明。色調Ⅲ類(橙色)。

225 外側にやや屈曲してひろがる形態。人物の服の裾か?ハケメA類(15本)、色調Ⅲ類(橙色)。

226 225と近似する。やや外側に広い形態である。器種不明。色調Ⅲ類(橙色)。

227 小孔を有し、端部は細く加工している。色調Ⅲ類(橙色)。

228 顶部がひろがる楕円形状の破片。器種不明。色調Ⅱ類(明赤褐色)。

229 径1.5cmの棒状で頂部がやや尖るもの。器種不明。

230 巾1.5cmの板状でやや湾曲する。下部には剥離した痕跡あり。器種不明。

231 ほぼ垂直に立ち上がる。矢筒部下段外区の板状部と推定されるが剥離した痕跡あり。M字形の突帯あり。下段の円形透かし孔あり。上段左上端部に青色の塗彩痕跡あり。ハケメA類(15本)、色調Ⅲ類(橙色)。

232 上部に行くにつれ細くなる。(下(16.0cm)上

(13.5cm))形象埴輪の基台。下端まで無く、底部調整の有無は不明。円形の可能性の高い透かし孔の下端部がある。ハケメA類(14~16本)、Ⅲ類(橙色)。

233 上部に行くにつれ細くなる。(下(16.5cm)上(13.0cm))形象埴輪の基台。下端まで無く、底部調整の有無は不明。円形と推定される透かし孔の下端がある。出土状況から盾の基台の可能性ある。ハケメC類(7本)、色調Ⅱ類(明褐色)。

234 上部に行くにつれ細くなる。(下(15.0cm)上(13.5cm))形象埴輪の基台。下端まで無く、底部調整の有無は不明。瓶の基台の可能性ある。ハケメA類(16本)、色調Ⅱ類(明褐色)。

235 上部に行くに従い細くなる。形象埴輪の基台。下端部は無く、底部調整の有無は不明。出土状況から瓶の基台の可能性がある。ハケメA類(16本)、色調Ⅱ類(にぶい橙色)。

236 ほぼ直線状に立ち上がる。形象埴輪の基台。ハケメB類(9本)、色調Ⅱ類(にぶい赤褐色)。

237 ほぼ直線状に立ち上がる。形象埴輪の基台。ハケメB類(10本)、色調Ⅱ類(赤褐色)。

238 ほぼ直線状に立ち上がる基台。形象埴輪の基台。底部調整は無い。ハケメB類(8本)。色調Ⅲ類(橙色)。

まとめ(第92回)

個々の埴輪の分類をしたうえでの先述した、埴輪の出土状況と考え併せて埴輪全体の配列について想定する。

円筒埴輪はハケメB類埴輪が主で、次にC類埴輪、A類埴輪と続く。C類埴輪は石室前面を中心に出土しており、一部基壇から出土している。B類埴輪は墳丘基壇の南西部から北部にかけて多く出土している。A類埴輪は墳丘基壇西から北にかけて出土している。

つまり、石室前面にはC類埴輪が中心で、一部B類が入る。墳丘基壇にはB類埴輪が中心に配列され、一部にC類とA類が配置されているという状況で、場所ごとにある程度のまとまりをもって同系統の埴輪が配置されている。

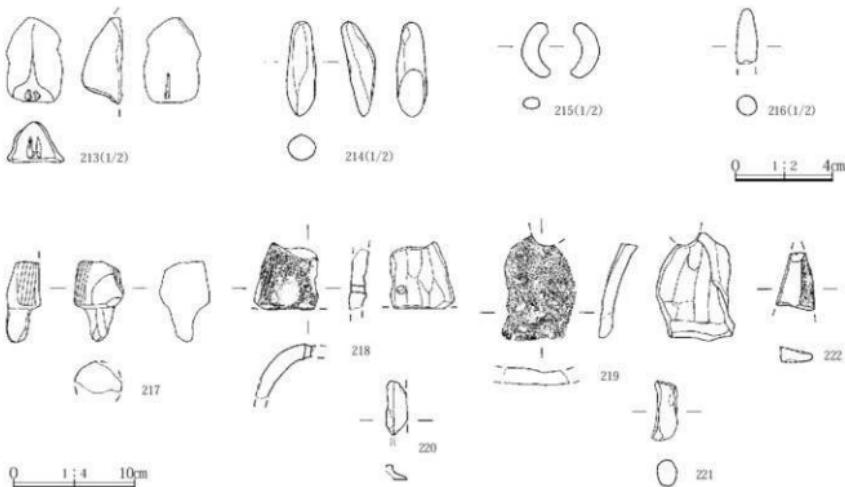
朝顔形埴輪は、B・C類で、石室前面の両端部(107・106)と、墳丘基壇上のやはり両端部付近(105・110・111)から出土している。鞍形埴輪は石室羨門左側(117)にあり、大刀形埴輪が石室前面左側(186・195・190)に配置している。さらに基壇部の南西側から鞍(115)、大

刀(176)、鞍(112)、鞍(114)、鞆(196)、大刀(175)・盾(154)・鞍(113)・大刀(191)といった順番に間隔を開けて置いていったものと思われる。家形埴輪は、基壇部北側から屋根が出土しているが埴丘上から転落したものと考えたい。

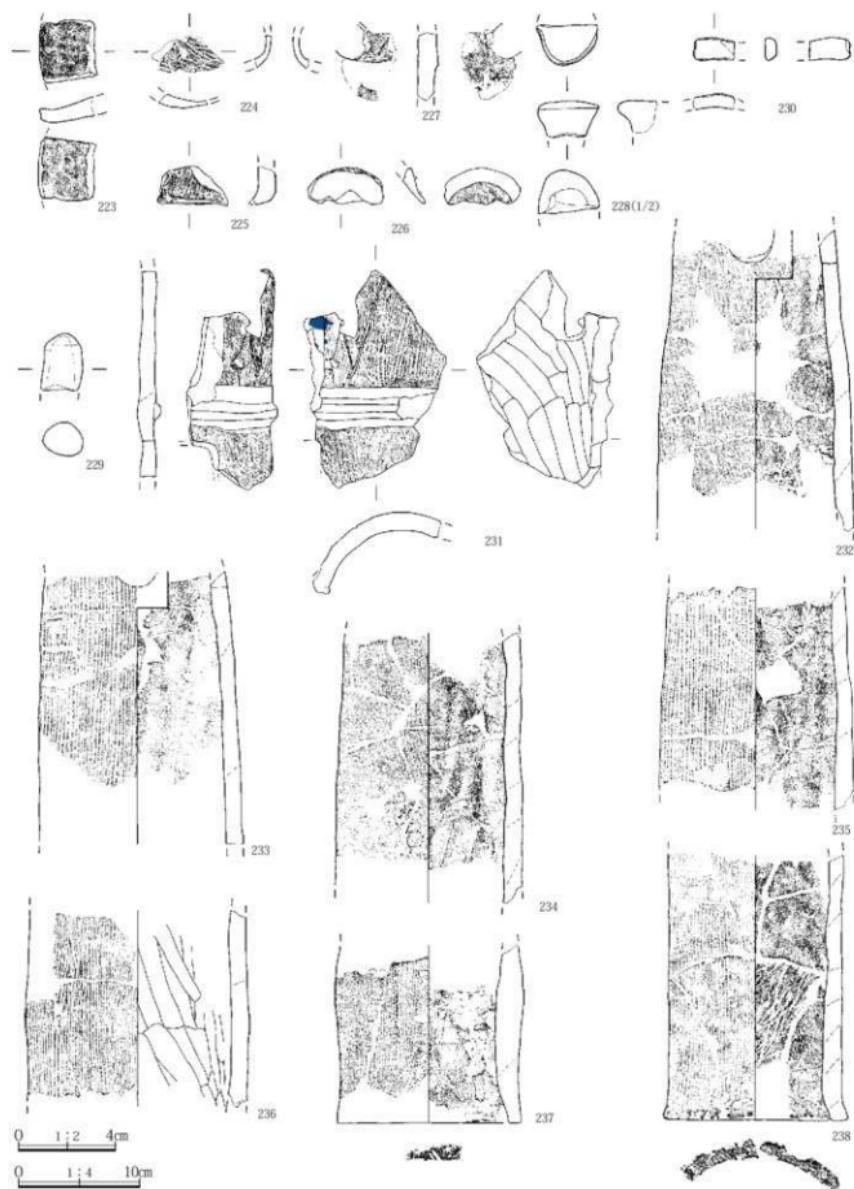
この古墳は、東側が大きく掘削されていてそこに樹立していたと想定される埴輪の情報は欠落している。そういった情報の欠落を考慮しても、馬形埴輪の破片が一片も見つかないので、この古墳には馬形埴輪は樹立されていなかったか少なかった可能性がある。人物埴輪も小破片のみで人物種の想定も難しい状況で、人物埴輪や馬形埴輪が埴丘東側に集中していた場合には想定が変更となるが、埴丘東側も西側と同様な埴輪配列であったとすれば、人物・馬の配列は基本的にごく少数であった可能性が高い。そして、器財埴輪のうち、武器武具埴輪である鞍を中心に大刀、盾、鞆の構成で石室前面、基壇部に樹立されていたものと推定する。この1号墳は器財埴輪を多用する古墳として捉えることができるだろう。

また、吾妻川下流域の渋川市、旧子持村所在の古墳では、埴輪が樹立される時期の古墳であっても、埴輪が無い古墳がある。それに対して中流域は埴輪を樹立する率が高いと想定している。このことは、藤岡地域の埴輪窯

から榛名山南西麓の烏川沿いに埴輪が安定して供給されていたことが要因の一つと推定している。



第128図 1号墳出土人物・不明埴輪図



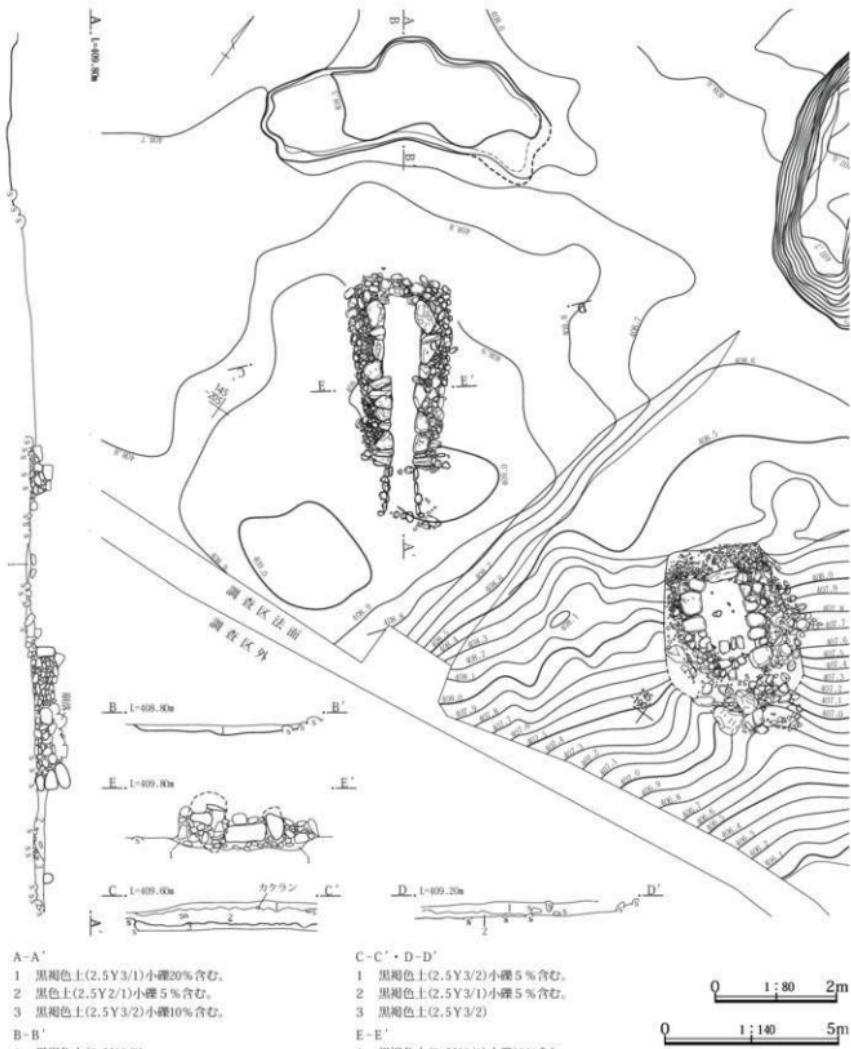
第129図 1号墳出土不明・形象埴輪基台図

2号墳(第130～136図 PL.63～72・116)

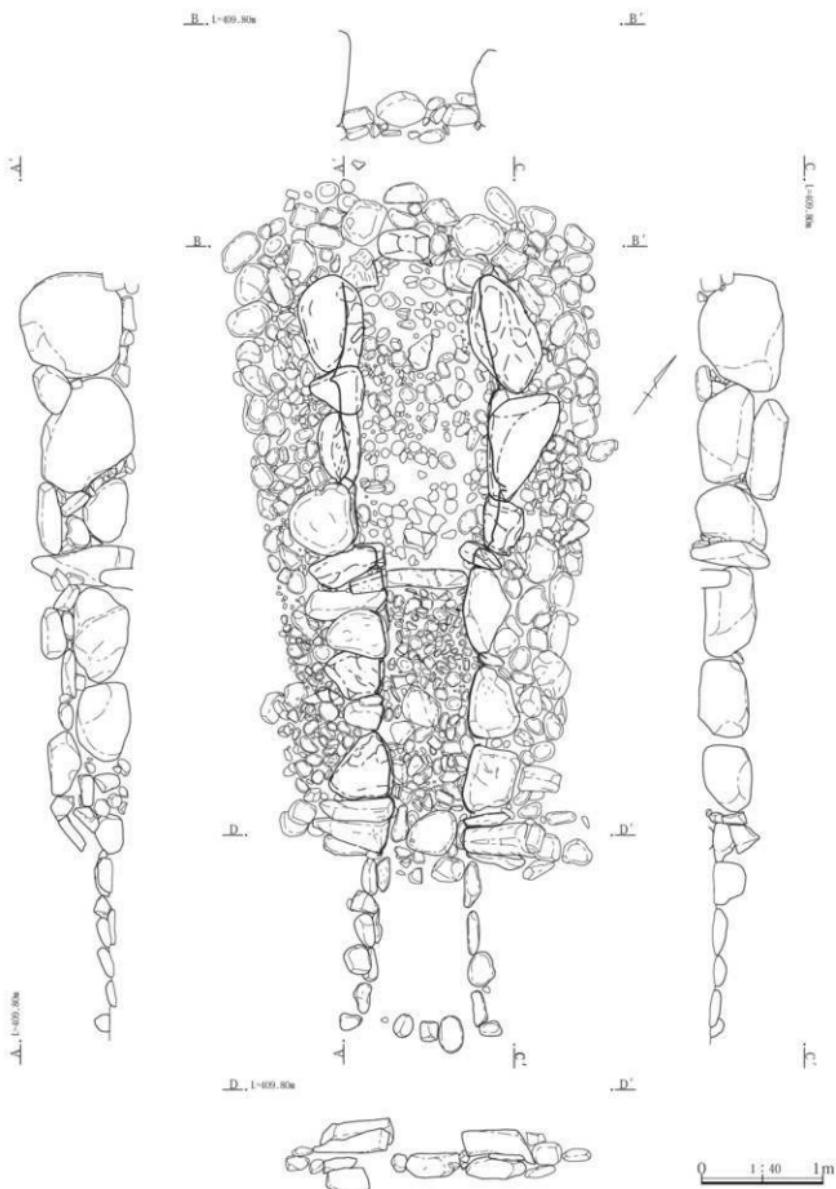
現 状(PL.63-2・3) 本調査で2号墳と名付けた当古墳は、群馬県古墳総覧では、岩島村23号墳となる。墳形は不詳で、削平となっていて、既に平夷されていたこと

が分かる。実際、調査前は、動かされた葺石が平面構円形状に積み上げられていて、古墳があったことは分かるが、その墳形については分からない状況であった。

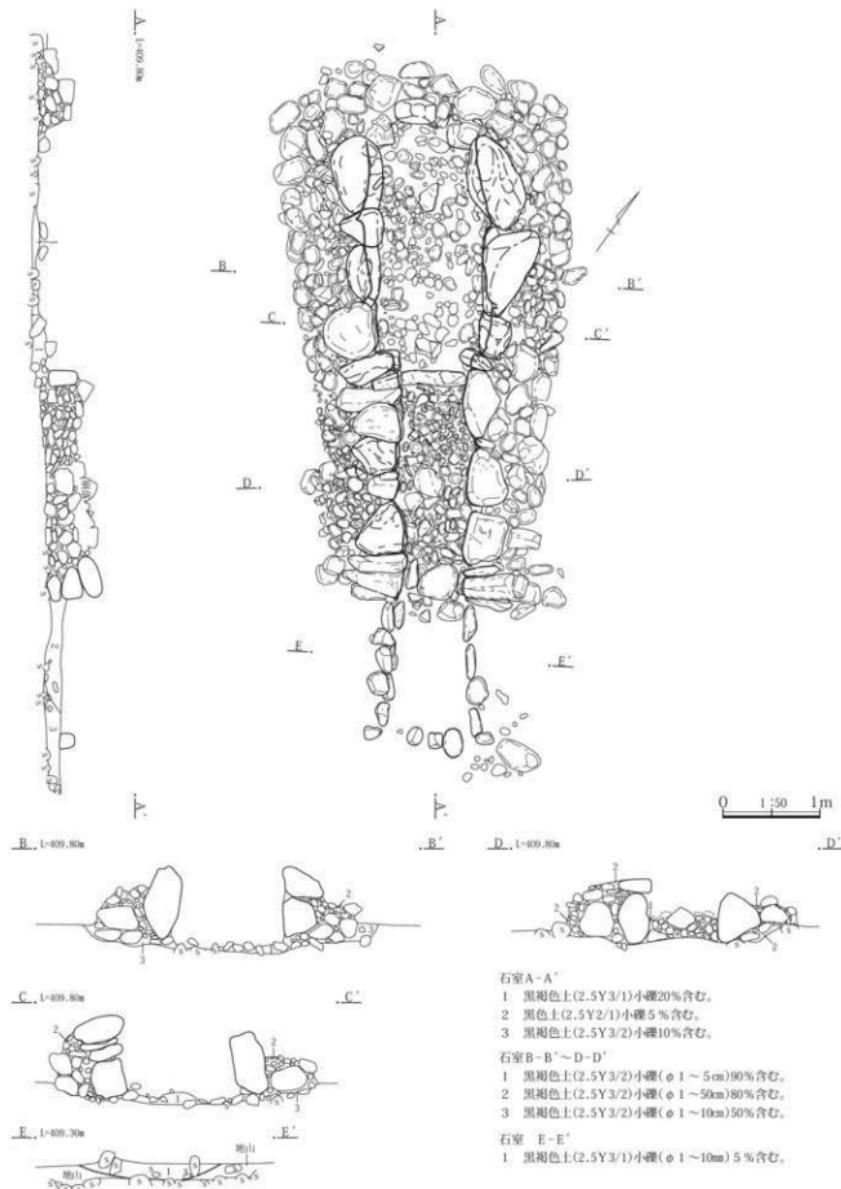
位 置(第88図、PL.40) 2号墳石室は、1号墳石室か



第130図 2号墳平面図・土層断面図



第131図 2号填石室展开図



第132図 2号填石室平面図・土層断面図

ら南西へ20m、3号墳石室から西北西へ11mの位置にあり、墳丘があったと想定すると、1号墳とはほぼ接するよう、3号墳は2号墳の周囲のすぐ東に位置する。

グリッド 2D ~ 2F-40 ~ 42

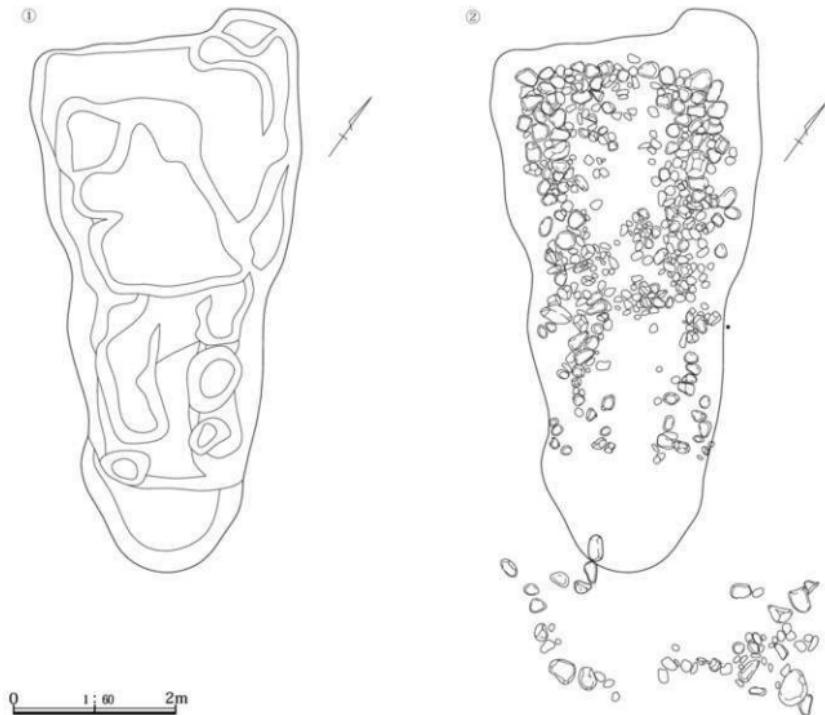
座標値 X=61145 ~ 61157、Y=-93197 ~ -93209

墳丘・石室の調査経過・遺存状況(PL.63-4) 墳丘はほとんど残っておらず、石室の裏込め石が僅かに残る状況である。玄室・狭道の側壁が1~2段残るのみである。上から崩落した石が多くあり、おそらく側壁・奥壁・天井石が混じりっているものと推定する。これらの石を外した段階で、当時のままの側壁石列が出てくる。狭道にも多くの礫が入っているが、一部は閉塞のための礫石であり、その分別には苦労したが、隙間の多い礫がある箇所が崩落に伴う礫で、土と礫が詰まっている形になっ

ているのが閉塞に伴う礫石と土を詰めたものである。奥壁は外れて無くなっていた。狭門からの石列も裏込め石の範囲以上に外側に展開しなかった。墓道状の施設は1号墳同様に検出された。裏込めは、50cm幅ほどで側壁第1段を設置する際に、石の裏側に土とともに詰めたものである。

遺物は鉄器が出土したが、原位置を保つものではなく、フルイ等による一括遺物である。鐵刃部片、留金具、多数の釘が出土している。土器は7世紀代の須恵器、土師器が出土している。

墳丘 墳丘は、痕跡も残っていないが、石室北側に周囲の痕跡が残っていた。石室奥壁推定位置より北に4.6mの箇所に周囲が掘削されていた最下部の痕跡があるので、墳丘があったことが分かる。周囲の規模から墳丘径



第133図 2号墳構築過程図①・②

は推定で径11.2mとなる。

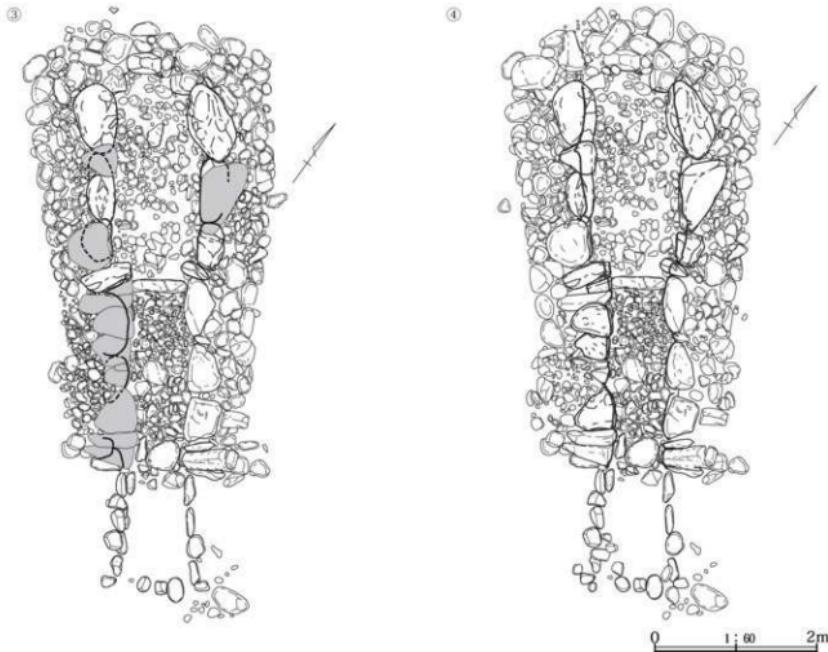
墓道状遺構(第131図 PL.64-2~5) 1号墳同様、羨門から延長線状に1段の石列がゆるいハの字形に拡がる形で伸びている。1号墳との違いはこのハの字形にやや聞くことである。石は1段のみで、積み上げは無い。

周 墓(第130図) 長8.4m、幅2.8m、深さ16cmの規模である。極めて浅いが、本来はもう少し深さがあつてある程度の土を採取できたが、畑等の開墾・耕作により本来の深さよりかなり削られてしまったものと推定する。そうでなければこの箇所から採取した土で墳丘を形成するので、土量が足りず、墳丘を構築できないことになる。また、石室の西側、東側ともに等高線を見ると少し窪みがあるが、遺構として周囲と認定できるまでは無く、痕跡を示していると思われる。

石室の方位・規模(第130・131図 PL.64~72) 石室の方向はN-35°-Wで1号墳とほぼ同じである。開口方向は南南東となる。石室の規模を次に示す。石室全

長4.6m、玄室右壁長2.25m、左壁長2.30m、玄室幅奥1.10m、前0.75m、玄室高右壁0.75+m、左壁0.93+m、羨道右壁長2.30m、左壁長2.32m、羨道幅奥0.73m、前0.70m、羨道高右壁0.50+m、左壁0.73+mの両袖横穴式石室である。玄室と羨道の長さがほぼ同じであるのが特徴的である。高さは第1段が残っているだけのが多く、高さの数値は参考程度である。以下、石室を構築順に説明していく。

玄室の構築(第133・134図) 地山が大量の礫を含んだものであることを1号墳同様利用している。地山礫が検出されはじめるとほどまで掘っている(第133図-①PL.65)。特に玄室には地山礫の出土が多い。その他の地點は地山礫が表れていない。地山礫を出して玄室の石を支える強度をある程度確保した可能性がある。羨道右側壁を中心にして側壁石を置く穴を3つ掘削している。左羨道側壁は、石を据え置く穴を溝状に一連で掘削している。玄室の区画は1段下がる様に玄室幅より少し幅広に掘削



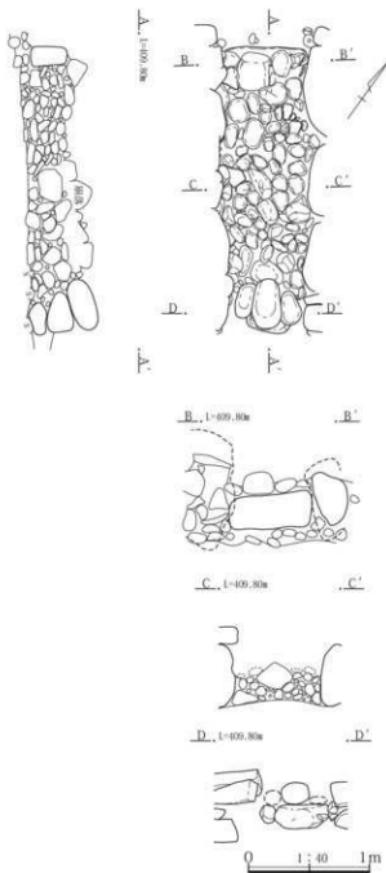
第134図 2号墳構築過程図③・④

している。1号墳同様に水分を下に浸透させる機能を持つていたと想定している。

次に玄室部と周辺に平たい5~30cmの小礫を置いている(第133図-② PL.66)。大分動かされているので、明瞭ではないが、玄室部分では、意識して平たい礫を置いているのが分かる。奥・側壁を置く玄室から羨道にかけての外周部分に5~40cmの小礫を置き、重さのある奥・測石を支える役割を有している(第132図-②)。1段目の側壁列の図(第134図-③)を見ると、いずれも右壁は大きい石を置いているが、左壁は大小の石を置いているのが分かる。さらに、それらの石の上に2~3石目を置いたものが、次の(第134-④図)である。1石目の上に大きな石を、石同士の隙間がある箇所には小さい礫などを置いているのが分かる。この石の配置は側面から見るとよく分る(第131図)。右壁(東壁)は、巨石を奥壁の隣に置き、続いて大きい石を奥壁側から配置して、羨道の側壁の間に細長い石を挿み込むようにして置き、玄門として位置付けたものと推定する。同じように、玄室反対側の左壁において、奥壁から巨石を2個置いた後に、調整石を3~4個置いた後に、右壁と同じように縦長の玄門を意識した石を置いている。このように見ると、いずれも玄室は、奥壁方向から羨道に向かって構築するも、右壁は整合的に築き、左壁は、玄門石の間に調整石を置いて構築している。つまり、まず、右壁を先に配置し、その後右壁に合せるようにして左壁を配置して足りない箇所に小礫を置いて調整したものと推定する。

羨道の構築(第131図 PL.68-3、PL.70-1・2・4)

羨道の床面は、玄室より小さめの礫を敷いている。その礫の上に側壁石を置く。右壁は、玄門から大きな石を3石配置して、羨門との間にほんの少し隙間が開いた箇所に細長い石を縦に置いて、羨門に至るものである。羨道左壁は、玄門から大きな石を2個置いた後に、小礫を調整石として5~6個置いた後に、羨門に至るもので、羨門と左羨道との間にかなり間が空いてしまっている箇所に小礫を補てんしている。玄室同様、右壁を先行して構築し、その右壁の長さに合わせて左壁を配置したものと推定する。これらの壁石の配置により石室の構築は行われるが、石を積むごとに、控え積みの小礫や、さらに関室の埴土盛り土を積み上げることで安定させていることは、1号墳で示した通りである。この古墳の現状の平

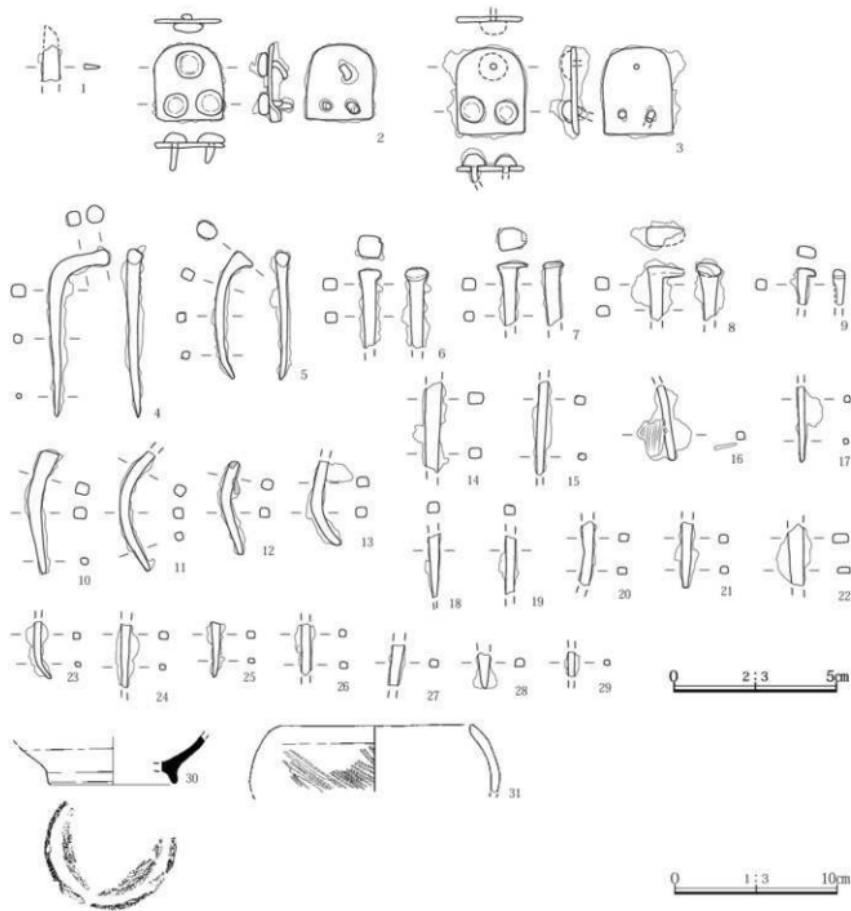


第135図 2号墳閉塞部平面図・断面図

面図は第134図-④であるが、さらに上に壁石が積まれ、天井石が載っていたのである。

羨道の閉塞(第135図 PL.71-1~5) 閉塞は、黒褐色土と礫(5~40cm)を併用して閉じている(第134図)。羨門に並ぶ入口付近は、羨門の傾斜と合わせるように礫を積み上げている。閉塞は、1号墳同様、羨門部付近以外は、羨道天井石までは届かず、緩やかな傾斜を持って羨道床面に至るものと推定する。

石室内出土遺物(第136図) 石室内は破壊と盜掘でほとんどの遺物は失われていたが、一部細片で出土してい



第136図 2号墳出土副葬品図・土器図

る。長頸鐵の片刃鐵の先端部(1)、留金具2個体(2・3)と釘である(4~29)。鐵は、片刃の鐵と考えられるが、時期が分る間の部分は欠失しているので、時期比定は難しい。留金具は、馬具の一部で、革留金具と推定する。コハゼ形の鉄地板に、鋒が3つ三角形状に打ち込まれているもので、金銅や銀の使用は確認できない。馬具の破片はこれ以外は一切出土していない。釘は大形のものは11.5cmあり、中形が7.4cmである。それ以外は小片で大きさが分るものは無い。釘はいずれも柏釘と想定される。

棺の木質材は遺存していなかった。墳丘に南西部の2トレンチから須恵器台付椀(30)、土師器鉢(31)が出土している。時期的には7世紀後半代で、この古墳の追葬がその後の供養の時期と推定する。

構築時期 この古墳の構築時期であるが、埴輪が無いこと、釘の出土、石室形態などから、7世紀前半と推定される。

3号墳(第137～144図 PL.73～77・116～118)

現 状(PL.77-3・5) 本調査で3号墳と名付けた当古墳は、上毛古墳総覧には記載されていない総観漏古墳である。1号墳と2号墳の間に挟まれるようにして、墳丘はほとんど痕跡さえ残されていない状況で発見された。奥壁が少し見える程度で、他は天井石から側壁上段まで、完全に壊されていて周りの地山礫との区別がつかない状況で検出されたものである。

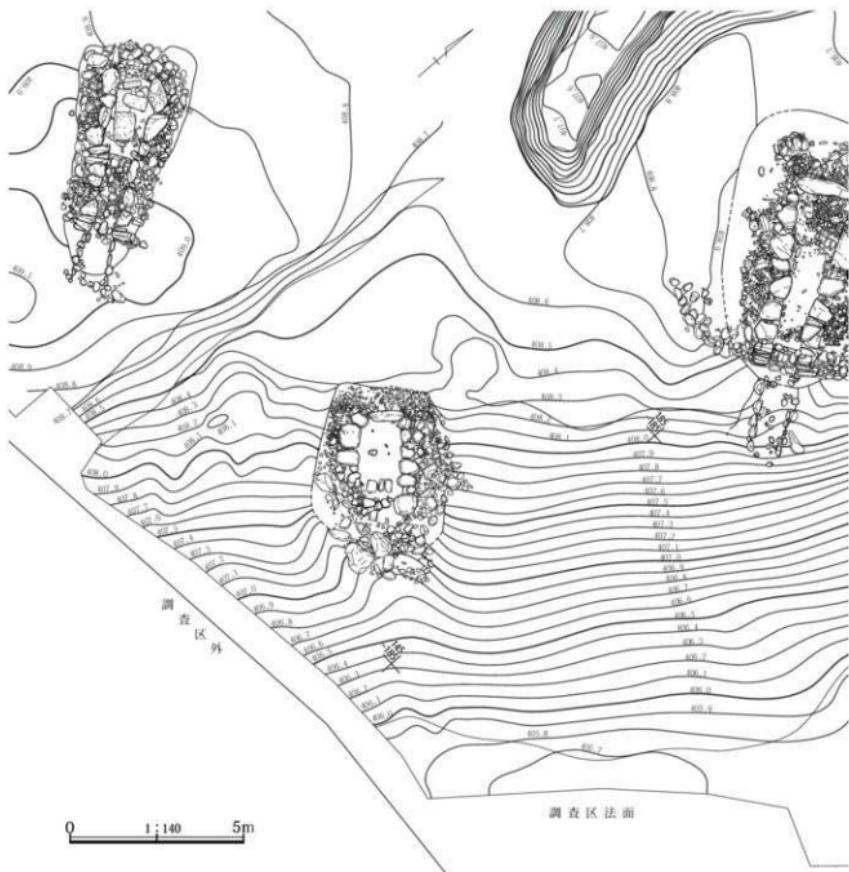
位 置(第88・137図 PL.40) 3号墳石室は、1号墳石室から南へ14m、2号墳石室から東へ12mの場所にある。

3基の中では、最も傾斜面の南東に位置し、かなりの田勾配の地形に立地する。

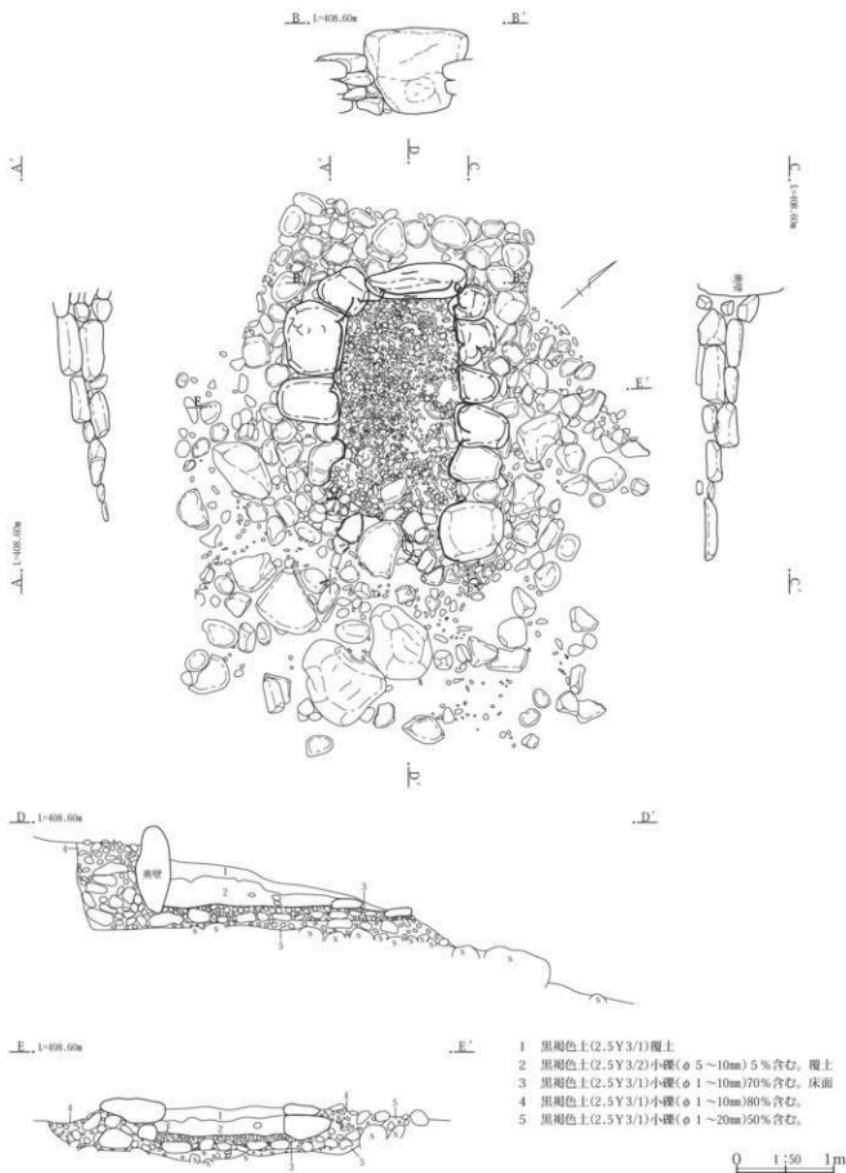
グリッド 2D・2E-38・39

座標値 X=61145～61150, Y=-93186～-93191

墳丘・石室の調査経過・遺存状況(PL.77-3・5) 墳丘は残っていなかった。ただし、石室の北側から西側にかけての石室の奥壁裏側を中心ほんの少し窪みがあり、周囲の痕跡と想定される。石室は地山の礫をはずしていく中で確認されたもので、予想外の場所での石室の発見となつた。奥側壁は1～2段ずつ遺存していた。石室内の



第137図 3号墳平面図



第138図 3号填石室展開図・土層断面図

副葬品は遺存状況が以外と良好で、原位置を確認しながら遺物を取り上げていった。石室は、上の石から順次取り外していく、石室の構築順序が分るように調査した。羨道部は破壊されており、墓道状遺構なども確認できなかった。

墳丘(第137図) 周堀の痕跡からすると、復元直径8mほどの墳丘であった可能性が高い。

周堀(第137図) 石室の北側1.4mには円形状の窪みがあり、奥壁裏側4.2mの箇所にも等高線から見ると円弧状の窪みがあり、さらに石室西側2.8mの箇所にも溝状の窪みがある。これらは石室北側に展開する円弧状に拡がる周堀の痕跡と推定される。周堀の円弧長9.8m、幅1.4m、深さ10cmである。1・2号墳同様の石室の裏側を円弧状に掘削する山寄せ形の古墳である。

石室の方位・規模(第138～140図 PL.74～77) 石室の方位はN-48°Wで開口方向は南東である。規模を紹介する。石室全長3.40m、玄室右壁長2.17m、左壁長2.22m、玄室幅0.80m、前1.17m、玄室高右壁0.63m、左壁0.67m、羨道右壁長1.55m、左壁長1.59m、羨道幅奥0.50m、前0.60m、羨道高右壁12cm、左壁6cmである。玄室は2.2mと短く、幅狭である。左袖は不明であるが、両袖横六式石室と推定する。

玄室の構築 石室の構築順序(第139図)であるが、まず裏込めを行う箇所も含めたほぼ台形状の底辺3.8m、上辺2.7m、高さ4.6mの範囲を、傾斜面北側の高さがある地形から、90cmほど掘削した痕跡が現状で残る(第139図-① PL.73-2、PL.74-1)。本来の古墳・石室の高さからすると本来はもっと深さがあったものと思われる。次に、長さ20～30cmの平石を玄室床面及び奥側壁据置箇所に配置している(第139図-② PL.75-8、PL.76-1)。次に、奥壁・側壁第1段を据え置く(第139図-③)が、特徴的なのは、奥壁と両側壁の間に斜めに礫を入れて隅が丸くなるように配置していることである(第138図)。右側壁は、羨道と想定される、玄室から20cm以上内側に突出させている石があり、その羨門までは、一部調整石も含めた壁石の配置をしている。奥壁から石を配置したものと推定する。左側壁は、やはり調整石と想定されるような石を置いているが、遺存状況が悪い。奥壁際の側壁が大きな石なのでやはり奥壁から配置したものと推定する。

羨道の構築 羨道の石は右側壁の羨門以外は遺存しておらず、羨道の構築状況は不明である。玄室部には、長径1～5cmほどの小礫を5～10cmほどの厚さで敷き詰めている。この床面上に鉄製品を主とする副葬品が配置された。羨道部の床面は擾乱が激しくはっきりしない。羨道部の先端部付近にある長径82～88cmの大石2つは、地山礫の中に埋まっているもので、この石の上に羨道部があったものと思われる(第138図-D)。この石の南部はすでに傾斜が始まており、元々の地形の状況を示すものと想定すれば、羨道に対応するような施設はなかつた可能性が高い。

石室内遺物出土状況(第140図 PL.77-1) 石室内からは、擾乱が激しいにも関わらず、左側壁を中心に多くの鉄製品が出土した。全長67cmの直刀が玄室の主軸と少し離れて、左側壁中央で、柄を北西にして切先が南東方向に向いて刃を南側にして出土している。刀の吊手金具も2個刀の周囲から出土している。刀の切先には多数の鐵が付着しており長頸鑿箭籠5本以上を中心平根鐵の腸抉長三角形鐵4本、重抉三角形鐵1本が出土し、それ以外でも刀の周辺に長頸鑿箭籠3本以上、平根腸抉長三角形鐵3本が出土している。小刀が直刀に沿う様に切先の北西側から、茎は羨道側、刃を北側に向けて全長28.6cmの小刀が出土した。他に場所は不明だが、鉄刀子片・鉄円環片・小型釘片が出土している。

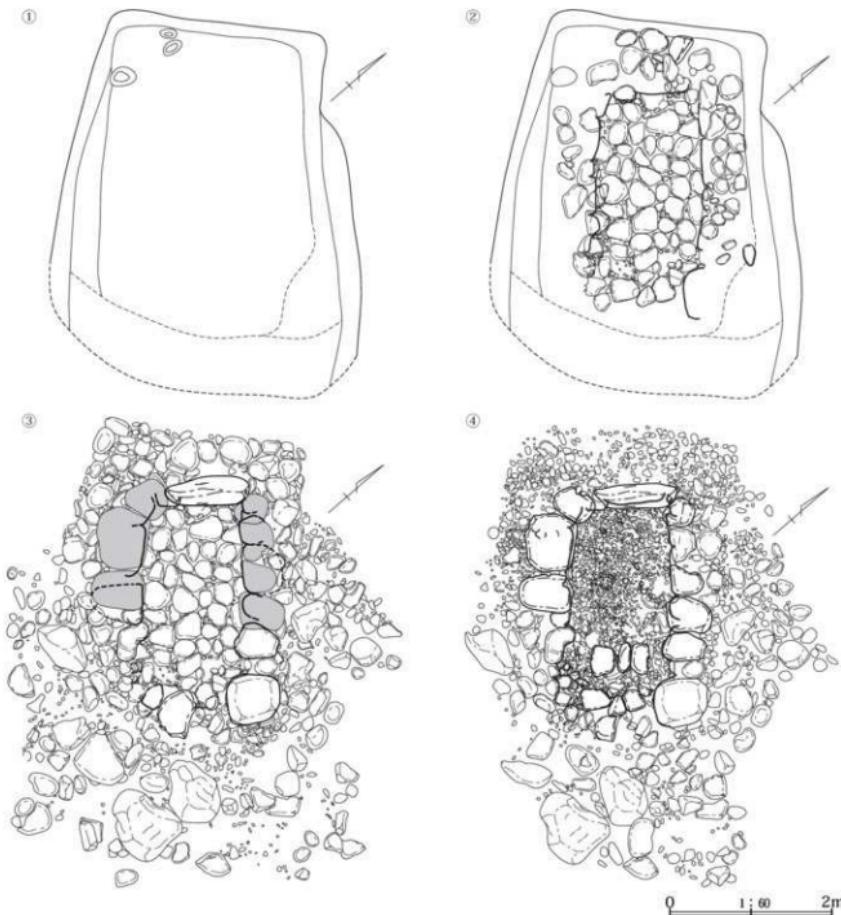
出土遺物(第141～144図) 出土遺物は副葬品が中心で、まず直刀は全長67cmとやや長い刀である(1)。茎長は7.6cmで、茎尻は圓円尻である。目釘は無い。また茎に柄が遺存する木質の付着はない。背闊は直闊である。刃闊は斜闊で、背闊より刃側に寄っている。刃身は細長く、幅2.4cmである。刃部にも鞘の遺存は無い。刃先には鐵が多く付着している。主に長頸鑿箭籠である。足金具(3・4)が2個、刀の周辺で出土しており、本来この刀に装着していたものと想定する。直刀とセットで小刀が直刀の横に置かれていた。小刀(2)には、鍔が残り、茎には目釘が遺存していた。また、木質が柄に付着している。棟・刃闊ともに角闊で、対象位置にある。刃身は、先端にいくに連れて細くなるのでややふくらを持って切先に至るものである。刃身に鞘の木質の付着は無い。

鐵は多種類の形態のものが出土している。平根腸抉長三角形鐵は大型のもの(5・6・8・9)と、小型のもの

(7・12)がある。大型のものは全長が13.5cmに及びもので、極めて大型で長いものである。7世紀代にある程度の地域性を持って出現する鎌である。小型のものは通有の逆刺を持つ一群の鎌である。平根重抜の五角形鎌(10)は特徴的で、7世紀代に出土するものである。長頭鑿箭鎌(15～25)は、ほぼ同形同大のもので、刃部から頭部に至る関が撫閑状になり先端部分のみに刃が集約される

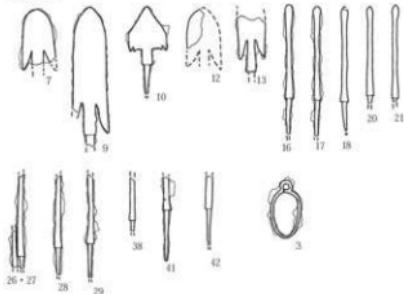
ものである。刃先端部を数えると、11本は確認できた。頭部の本数なども考慮すると30本ほどの副葬があった可能性が高い。他に頭・茎の鎌破片(26～42)のほとんどは長頭鑿箭鎌である。

刀子(76)は刃部の先端のみで小型の刀子である。円弧状で、二つの段を有する薄手の造りの製品(77)は、馬具の一部の可能性があるが不明である。円板状の鉄製品

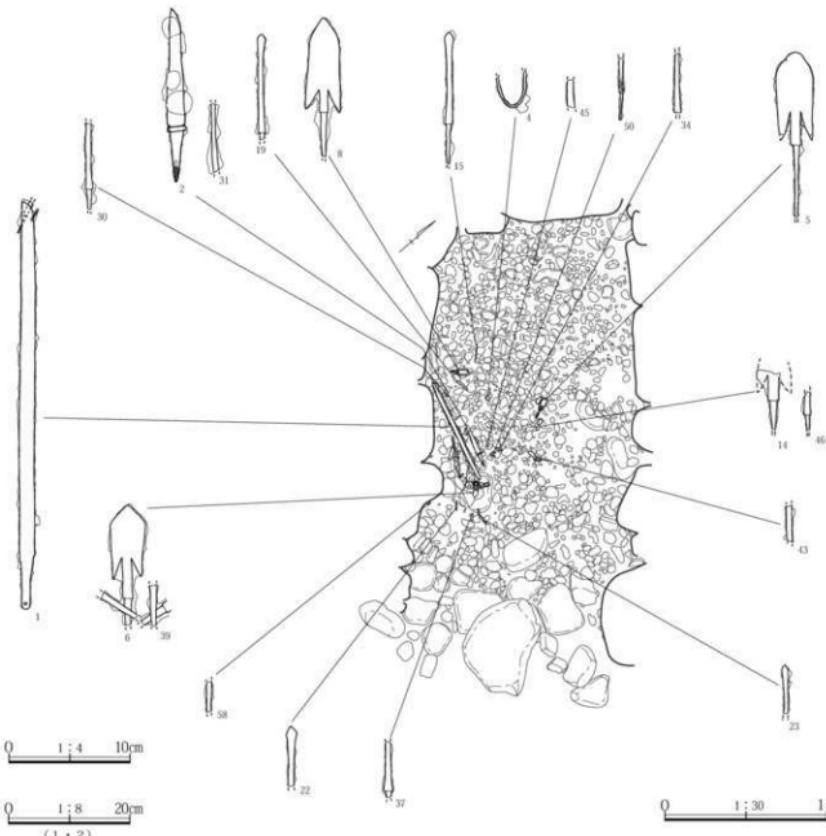
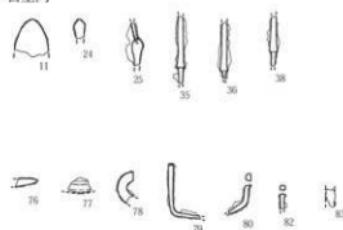


第139図 3号墳構築過程図

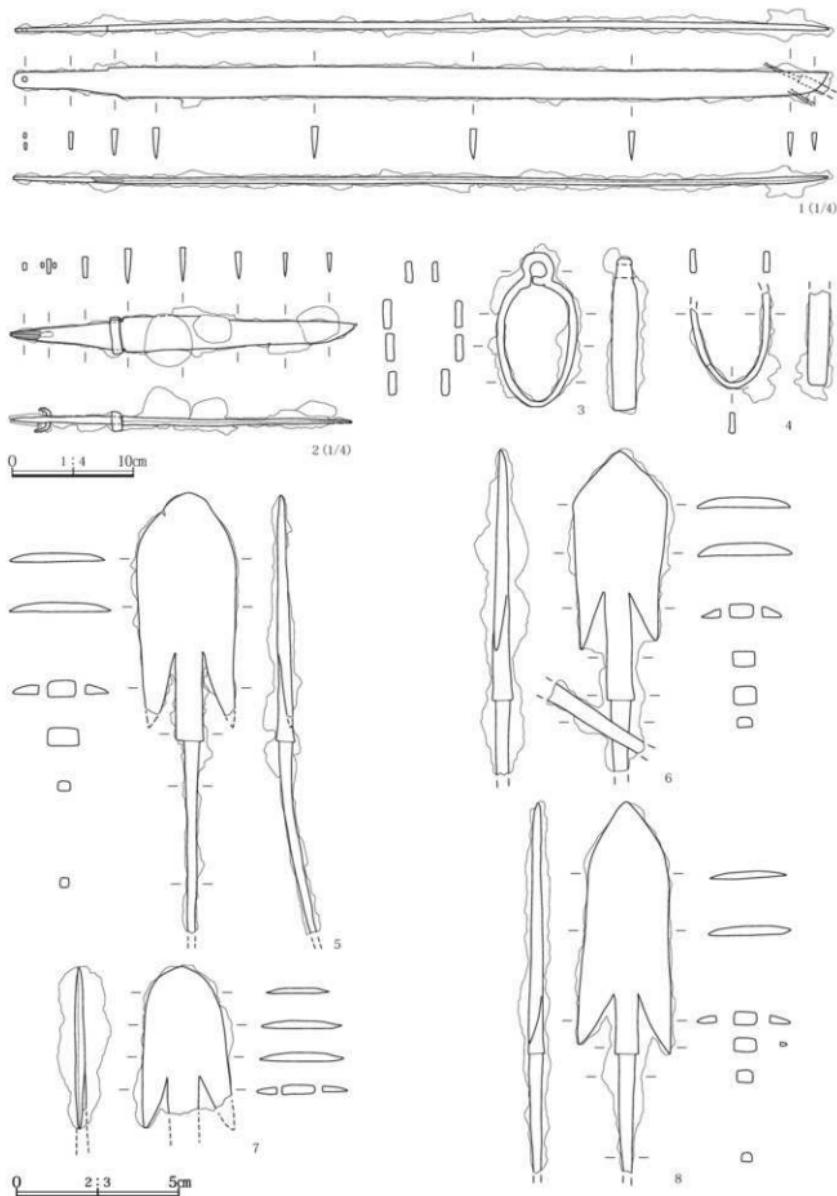
1に付着



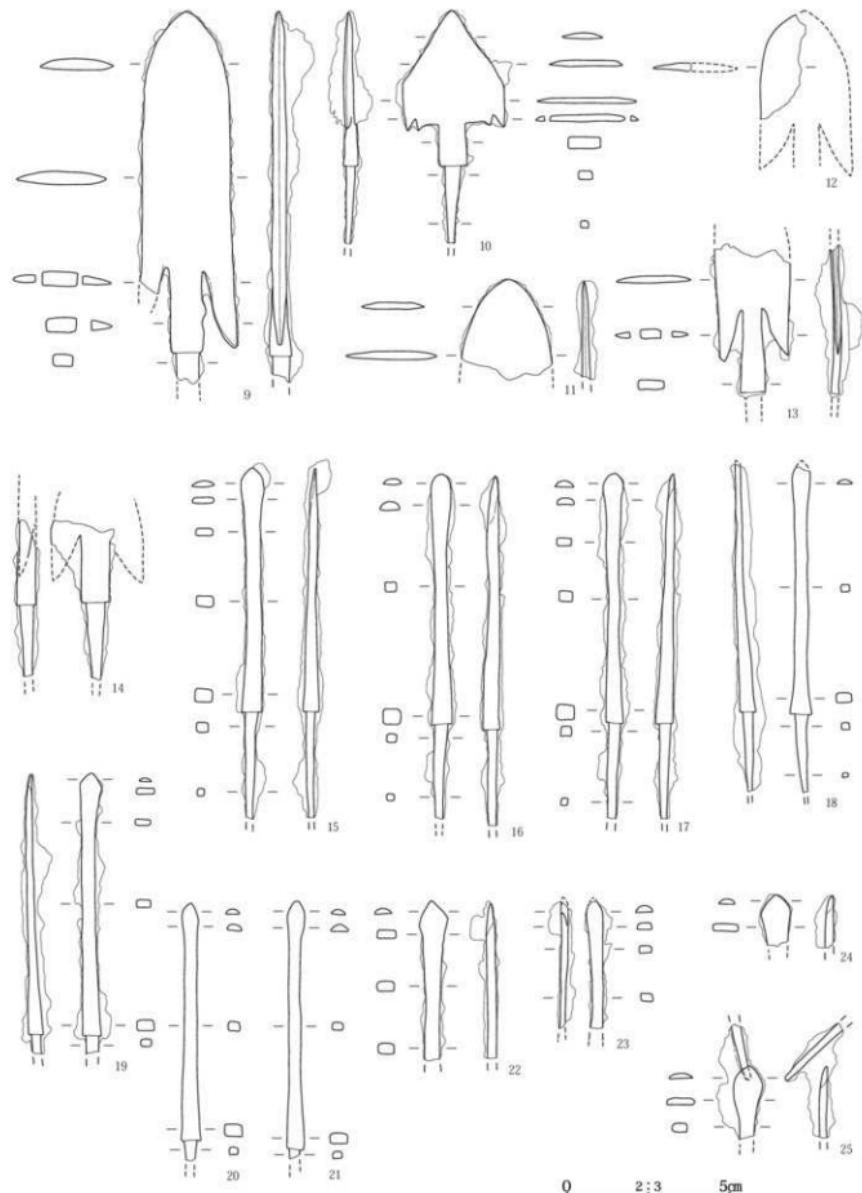
石室内



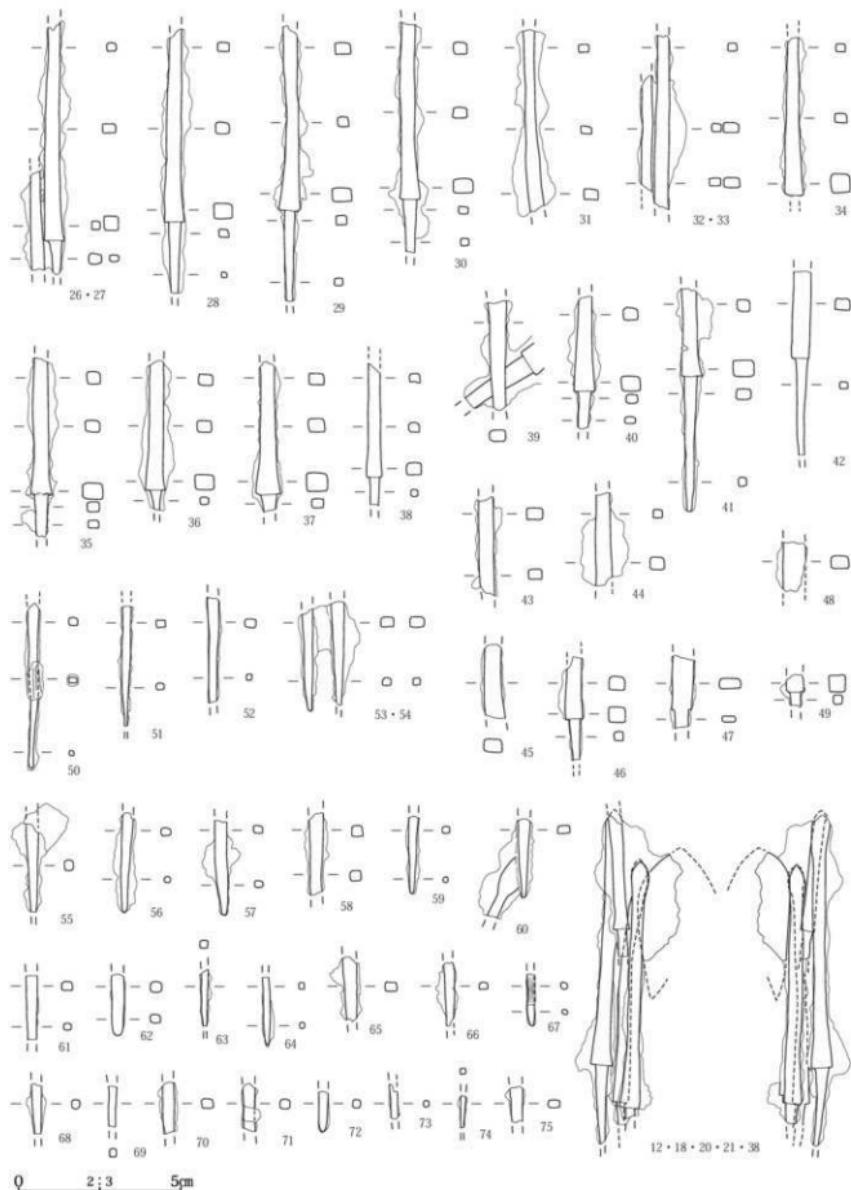
第140図 3号填石室副葬品出土状況図



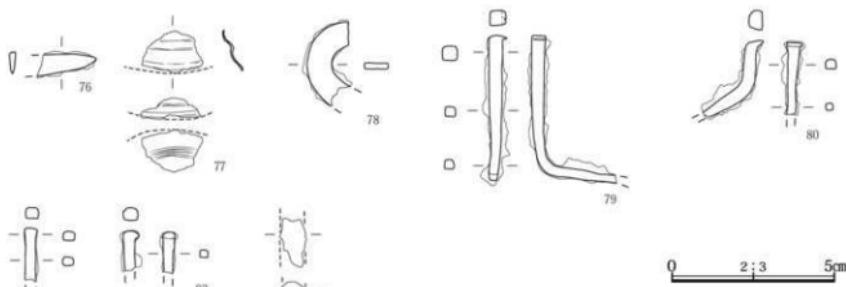
第141圖 3号墳出土副葬品圖(1)



第142図 3号墳出土副葬品図(2)



第143図 3号墳出土副葬品図(3)



第144図 3号墳出土副葬品図(4)

(78)も用途不明である。鉄釘が数点(79～82)出土している。大形(79)と小型(80～82)がある。板状で断面が蒲鉾形のもの(83)は用途不明である。

年代 古墳の年代は、長頭鑿箭鐵の刃部の形状を見るに極端に刃が先端に集約しておらず、斜間もややくびれを有する形態のものが多く、鑿箭の発達形態ではない。ただし、鐵身間は明瞭な方形間で、棘状間は一切無い。平根鐵も特徴的な、大形脛抉長三角形鐵や五角形鐵が共伴しており、これらの形態や組み合わせからすると7世紀中頃に比定する。吊手金具を有する直刀も、その編年を支持するものである。

三古墳の関係 密に接している1～3号墳は、時期的に少しずつずれると想定する。1号墳は、須恵器と埴輪の構成から6世紀後半、2号墳は、埴輪の消滅、釘の出土などから7世紀前半、3号墳が、長頭鑿箭鐵の形態や平根鐵の種類などから7世紀中頃と考えている。立地等を考えても上述のような順序で築かれていたと推定できる。6世紀後半、最も大きな1号墳が良好な場所を占地して構築される。次に、そのすぐ西隣に2号墳が構築され、最後の7世紀中頃に1号と2号の間で、傾斜が急で場所としてはあまり良好でない地点に3号墳を構築するのである。

ピット群

1～4号ピット(第145図)

位 置 5区西端部中央、1号竪穴状遺構の西 グリッド 2E・2F-45 座標値 X=61153～61157、Y=-93222～-93223 遺存状況・重複 柱穴の残りは良い。重複は無い。 埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土に覆われている。ピット P1～P4までの4基のピット群。長径30～45cm、深さ21～40cmである。 遺物出土状況・遺物 遺物は出土しなかった。 所見・時期 古墳時代遺構面と同じ面での検出で、周りの遺構も古墳時代のものが多いことなどから古墳時代と推定した。

14・15・17～22号ピット(第145図)

位 置 5区中央部北、2号掘立柱建物北 グリッド 2H～2J-40～42 座標値 X=61170～61176、Y=-93196～-93205 遺存状況・重複 柱穴の残りは良い。重複は無い。 埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土に覆われている。ピット P14・15・17～22までの8基のピット群。長径19～55cm、深さ16～61cmである。柱痕から、P14は径7cmの柱が建っていた可能性がある。 遺物出土状況・遺物 遺物は出土しなかった。 所見・時期 古墳時代遺構面と同じ面での検出で、周りの遺構も古墳時代のものが多いことなどから古墳時代と推定した。

土 坑

10号土坑(第146図 PL.78-1・2)

位 置 5区西部、6号竪穴建物と1号竪穴状遺構の間 グリッド 2E・2F-44 座標値 X=61154～61156、Y=-93216～-93217 遺存状況・重複 完存。一部掘りすぎで破線表現となる。弥生時代の10号竪穴建物、古墳時代の6号竪穴建物と1号竪穴状遺構を壊している。 埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土に覆われている。 形状 不整形 規 模 長軸1.68m、短軸1.38m、深さ48cm 長軸方向 N-36°-W 遺物出土状況・遺物 遺物は出土しなかった。 所見・時期 古墳時代遺構面と同じ面での検出で、周りの遺構も古墳時代のものが多いことなどから古墳時代と推定した。

12号土坑(第146図 PL.78-3)

位 置 5区中央部、2号掘立柱建物北西 グリッド 2H-41 座標値 X=61187・61188、Y=-93202～-93203 遺存状況・重複 完存。 埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土に覆われている。 形状 楕円形 規 模 長軸1.34m、短軸1.11m、深さ25cm 長軸方向 N-65°-W 遺物出土状況・遺物 遺物は出土しなかった。 所見・時期 古墳時代遺構面と同じ面での検出で、周りの遺構も古墳時代のものが多いことなどから古墳時代と推定した。

13号土坑(第146図 PL.78-4)

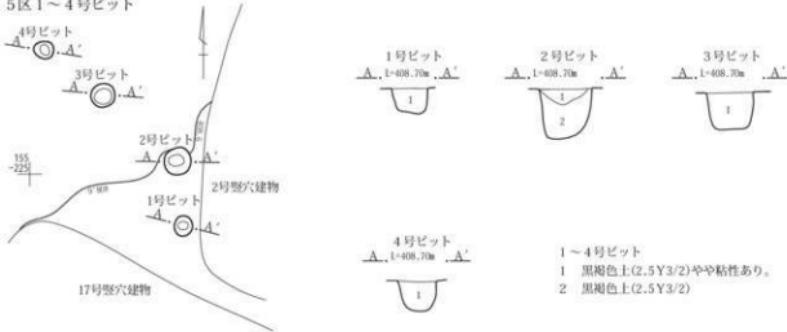
位 置 5区南東部、3号墳の北側 グリッド 2E-38・39 座標値 X=61151～61153、Y=-93189～-93190 遺存状況・重複 ほぼ完存。3号墳の周堀があったと想定される地点である。周堀との重複関係は不明。 埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土に覆われている。 形状 楕円形 規 模 長軸1.40m、短軸1.36m、深さ50cm 長軸方向 N-65°-W 遺物出土状況・遺物 遺物は出土しなかった。 所見・時期 古墳時代遺構面と同じ面での検出で、周りの遺構も古墳時代のものが多いことなどから古墳時代と推定した。3号墳の周堀の掘削痕跡の可能性がある。

14号土坑(第147図 PL.78-5・6)

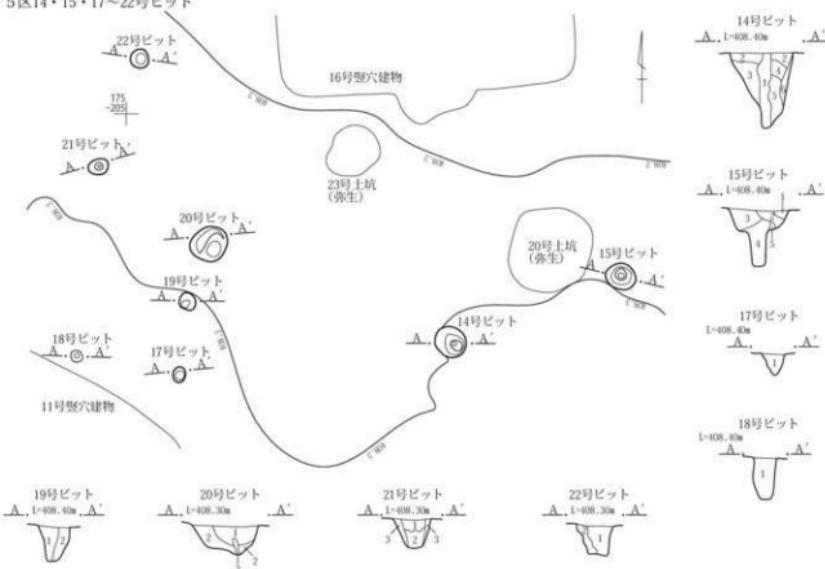
位 置 5区南東部、3号墳の西側 24号土坑の北西 グリッド 2D-39・40 座標値 X=61146・61147、Y=-93193～-93195 遺存状況・重複 浅めであるが、ほぼ完存。3号墳の周堀があったと想定される地点である。周堀との重複関係は不明。 埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土に覆われている。 形状 楕円形 規 模 長軸1.76m、短軸1.71m、深さ36cm 長軸方向 N-59°-W 遺物出土状況・遺物 遺物は出土しなかった。 所見・時期 古墳時代遺構面と同じ面での検出で、周りの遺構も古墳時代のものが多いことなどから古墳時代と推定した。3号墳の周堀の掘削痕跡の可能性がある。

第5章 発見された遺構と遺物

5区1~4号ピット

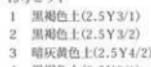


5区14・15・17~22号ピット



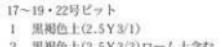
14号ピット

15号ピット

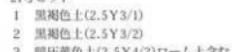


20号ピット

17~19・22号ピット



21号ピット



0 平面 1:80 2m

0 断面 1:40 1m

第145図 5区ピット平面図・土層断面図

24号土坑(第147図 PL.78-5)

位 置 5区南東部、3号墳の西側 14号土坑の南東

グリッド 2D-39・40 座標値 X=61145 ~ 61147、Y=-

93192 ~ -93193 遺存状況・重複 浅めであるが、ほぼ

完存。3号墳の周堀があったと想定される地点である14

号土坑に壊されている。周堀との重複関係は不明。

埋 土 状 態 基本土層6層土の黒褐色土に覆われている。

形 状 不整形 規 模 長軸1.32m、短軸1.02m、

深さ29cm 長軸方向 N-13°-W 遺物出土状況・遺物

遺物は出土しなかった。 所見・時期 古墳時代遺構面

と同じ面での検出で、周りの遺構も古墳時代のものが多いことなどから古墳時代と推定した。14号土坑同様に、

3号墳の周堀となる可能性がある。

15号土坑(第147図 PL.78-7・8)

位 置 5区中央部、1号墳の北西側、2号掘立柱建物

の北側、16号土坑のすぐ東 グリッド 2H-40 座標値

X=61165・61166、Y=-93196 ~ -93197 遺存状況・重複

ほぼ完存。弥生時代の12号竪穴建物を壊している。 埋

土 状 態 基本土層6層土の黒褐色土に覆われている。

形 状 不整橢円形 規 模 長径1.25m、短径1.06m、

深さ88cm 長軸方向 N-59°-W 遺物出土状況・遺物

遺物は出土しなかった。 所見・時期 弥生時代の12号

竪穴建物を壊しており、古墳時代遺構面と同じ面での検

出で、周りの遺構も古墳時代のものが多いことなどから

古墳時代と推定した。1号墳の周堀のすぐ北東側であり、

1号墳に隣接する遺構の可能性もある。

5区10号土坑



10号土坑

1 黒褐色土(2.5Y3/2)ローム土粒極少量含む。

2 黒褐色土(2.5Y3/2)ローム土粒5%含む。

3 喰灰黄色土(2.5Y4/2)ローム土10%含む。炭化物極少量含む。

12号土坑

1 黒褐色土(2.5Y3/2)小礫含む。

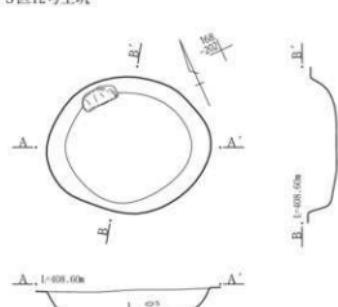
13号土坑

1 黒褐色土(2.5Y3/1)円礫(ø 1~20cm)30%含む。

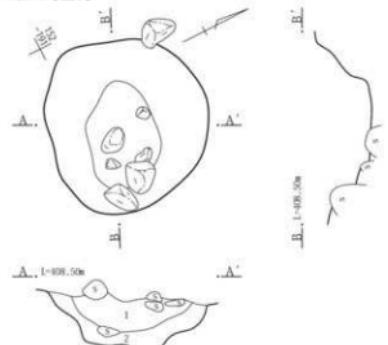
2 黒褐色土(2.5Y3/2)ローム土10%含む。

0 1:40 1m

5区12号土坑



5区13号土坑

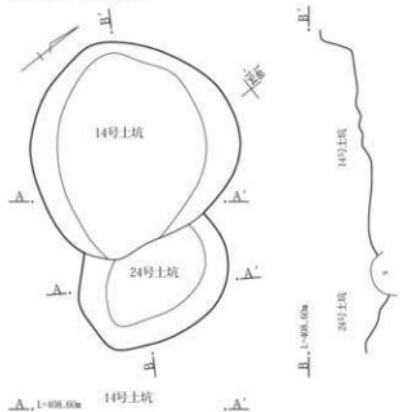


第146図 10・12・13号土坑平面図・土層断面図・断面図

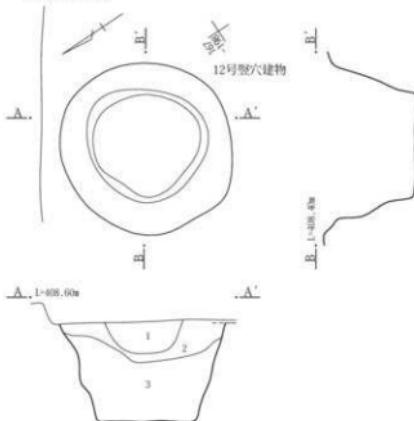
16号土坑(第147図)

位置 5区中央部、1号墳の北西側、2号掘立柱建物の北側、15号土坑のすぐ西 グリッド 2H-40 座標値 X=61167・61168、Y=-93197～-93199 遺存状況・重複 ほぼ完存。弥生時代の12号竪穴建物を壊しており、埋

5区14号・24号土坑



5区16号土坑

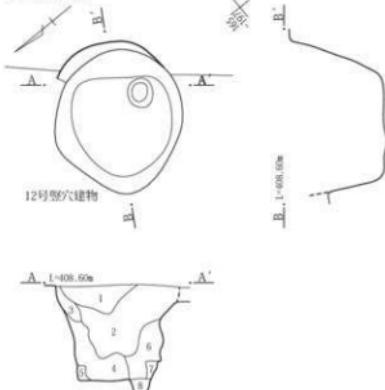


土状況 基本土層6層土の黒褐色土に覆われている。

形 状 円形 規 模 径1.42m、深さ76cm 遺物出土

状況・遺物 遺物は出土しなかった。所見・時期 弥生時代の12号竪穴建物を壊しており、古墳時代遺構面と同じ面での検出で、周りの遺構も古墳時代のものが多いことなどから古墳時代と推定した。1号墳の周堀のすぐ北東側であり、1号墳に関連する遺構の可能性もある。

5区15号土坑



14号土坑

1 黒褐色土(2.5Y3/1)円礫(Φ 1～20mm)10%含む。

15号土坑

- 1 黒褐色土(2.5Y3/1)
- 2 黒褐色土(2.5Y3/2)
- 3 黄灰色土(2.5Y4/1)
- 4 噴灰黄色土(2.5Y4/2)ロームブロック30%含む。
- 5 ローム上中心層
- 6 黄灰色土(2.5Y4/1)ローム上30%含む。
- 7 ロームブロック
- 8 黒褐色土(2.5Y3/1)

16号土坑

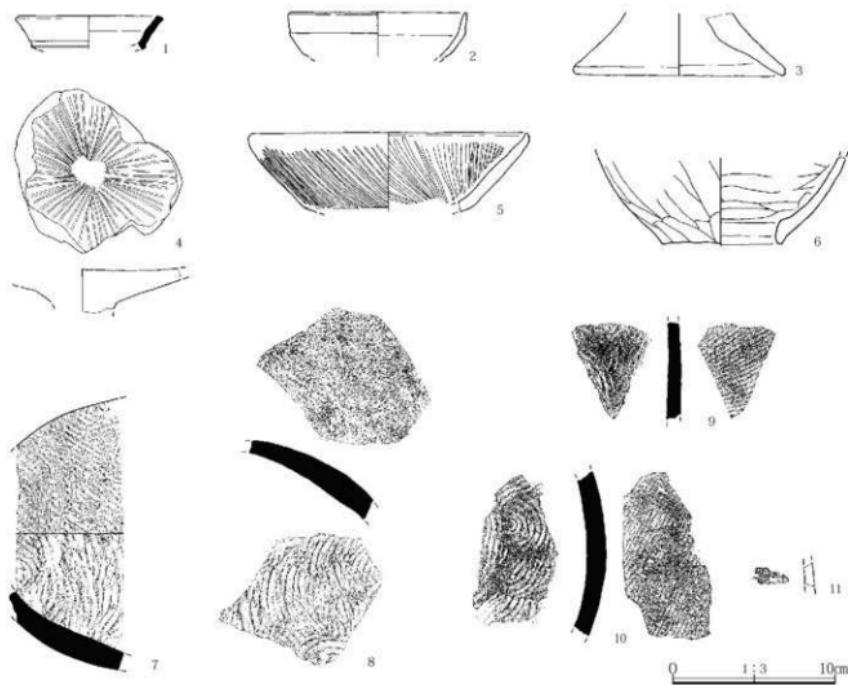
- 1 黒褐色土(2.5Y3/1)
- 2 黒褐色土(2.5Y3/2)
- 3 噴灰黄色土(2.5Y4/2)

0 1:40 1m

第147図 14・15・16・24号土坑平面図・土層断面図・断面図

遺構外出土遺物（第148図 PL.118）

遺構外や、他の時期の遺構の覆土から遺物が出土している。弥生時代の竪穴建物の覆土から、須恵器甕(1)、土師器台付甕(3)が出土し、5区のグリッドから土師器高杯(4・5)、瓶(6)、須恵器横瓶(7)、須恵器甕(8～10)が出土している。また、甕(11)には、圧痕がありイネ種子(頃果)と同定された。古墳時代の遺構群としては西の5区に集中的に検出され、東の段丘下の6区には明瞭な遺構は検出されなかったが、遺物はある程度出土しており、6区でも何らかの空間利用をしていた可能性がある。



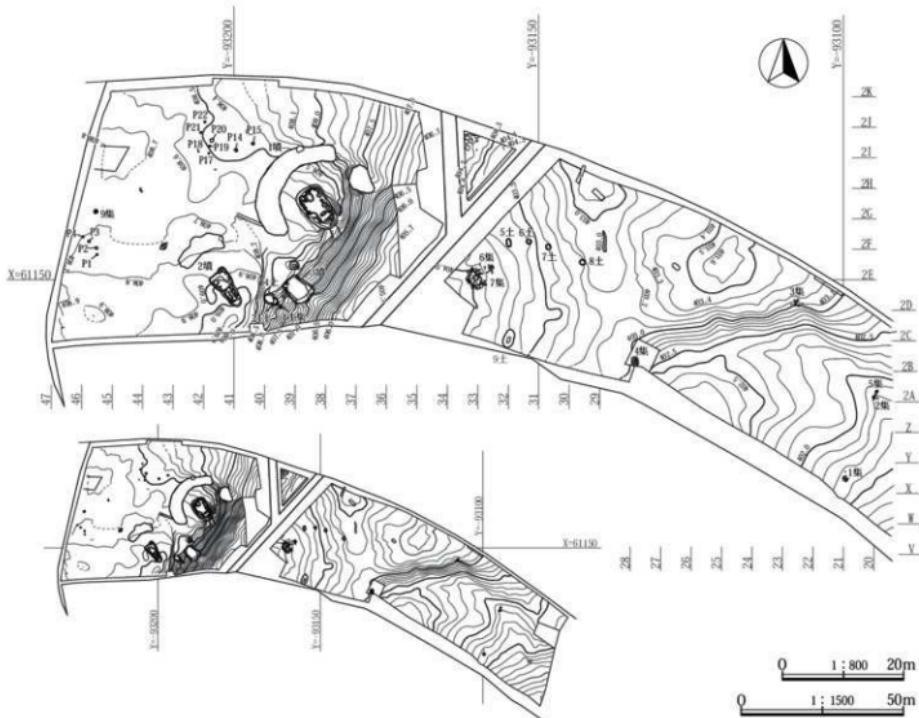
第148図 古墳時代 遺構外出土遺物図

第5節 古代

全体状況（第149図）

古代の遺構は、竪穴建物・掘立柱建物ともに無く、基本的に遺構量は少ない。特徴的なのは、集石遺構で、8基の集石と1基の土器集中が検出された。集石遺構の特徴は、あまり重ね置きしない形で石を並べ、石の上部などに杯・甕などを置いていることである。また9号集石遺構を除いて全て比高4mほどある下段の東側の6区にある。土坑も同じように6区から検出されている。集石については、遺構の性格がはっきりしないが、4号集石においては、焼骨が出土し、これらの集石遺構が墓である可能性が示されている。

集 石

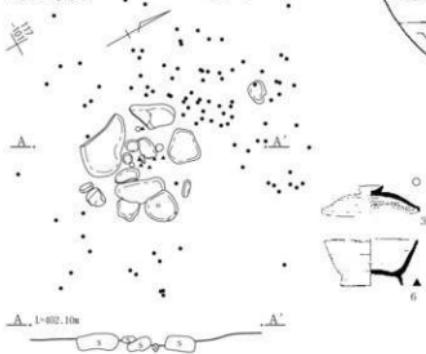
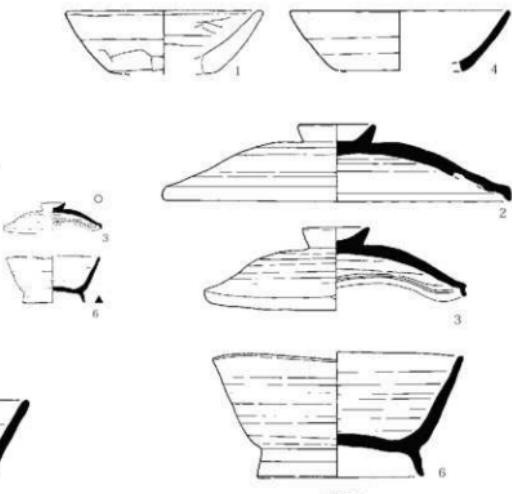


第149図 古代面全体図

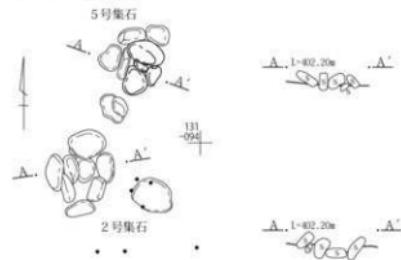
1号集石(第150図 PL.79-1・2、PL.118)

位 置 6区南東部端 南部へ地形が落ち込む手前にある。 グリッド X=20・21 座標値 X=61116～61118、Y=93099・93100 遺存状況・重複 10～53cmの石が15～16個集中する。石同士の重複は無く、石の下に土坑状の施設は無い。他の遺構との重複は無い。 埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土に覆われている。 形状 不整精円形 規 模 長軸1.00m、短軸0.98m 長軸方向 N-17°-W 遺物出土状況・遺物 遺物は集石の上や集石北側などから破片で出土している。須恵器杯蓋(3)と杯身(6)は集石中央部から出土している。未掲載遺物は、須恵器杯碗類の破片が140gある 所見・時期 集石とそれに伴う土器群といった組み合わせの遺構が今までの類例も無く性格は不明である。須恵器杯蓋の形態より、奈良時代の8世紀後半と推定する。

6区1号集石

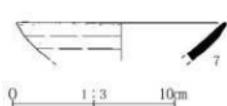
 Δ_1 1-02.10m

6区2・5号集石

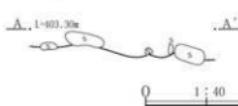
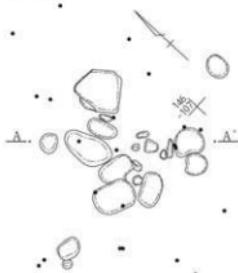


5号集石

2号集石



6区3号集石



第150圖 1・2・3・5号集石平面図・断面図・出土遺物図

2号集石(第150図 PL.79-3・4、80-2)

位 置 6区東端部北、5号集石がすぐ北側にある。
グリッド 2A-19・20 **座標値** X=61130～61131、Y=-93094・-93095 **遺存状況・重複** 20～34cmの石が9個集中する。石同士の重複は無く、石の下に土坑状の施設は無い。他の遺構との重複は無い。**埋土状況** 基本土層6層土の黒褐色土に覆われている。**形 状** 不整橢円形 **規 模** 長軸0.63m、短軸0.54m **長軸方向** N-0° **遺物出土状況・遺物** 遺物は主に集石の南側から破片で出土している。須恵器杯身(7)が出土している。未掲載遺物は須恵器杯碗類が16gある。**所見・時期** 性格は不明である。須恵器杯身の形態より、9世紀後半と推定する。

5号集石(第150図 PL.79-4、80-1・2)

位 置 6区東端部北、2号集石がすぐ南側にある。
グリッド 2A-19 **座標値** X=61131、Y=-93094 **遺存状況・重複** 12～37cmの石が10個集中する。石同士が少し重複し、石の下に土坑状の施設は無い。他の遺構との重複は無い。**埋土状況** 基本土層6層土の黒褐色土に覆われている。**形 状** 不整橢円形 **規 模** 長軸0.88m、短軸0.55m **長軸方向** N-25°-E **遺物出土状況・遺物** 遺物は出土していない。**所見・時期** 性格は不明である。周辺の集石遺構から奈良時代の8世紀代と推定する。

3号集石(第150図 PL.79-5・6)

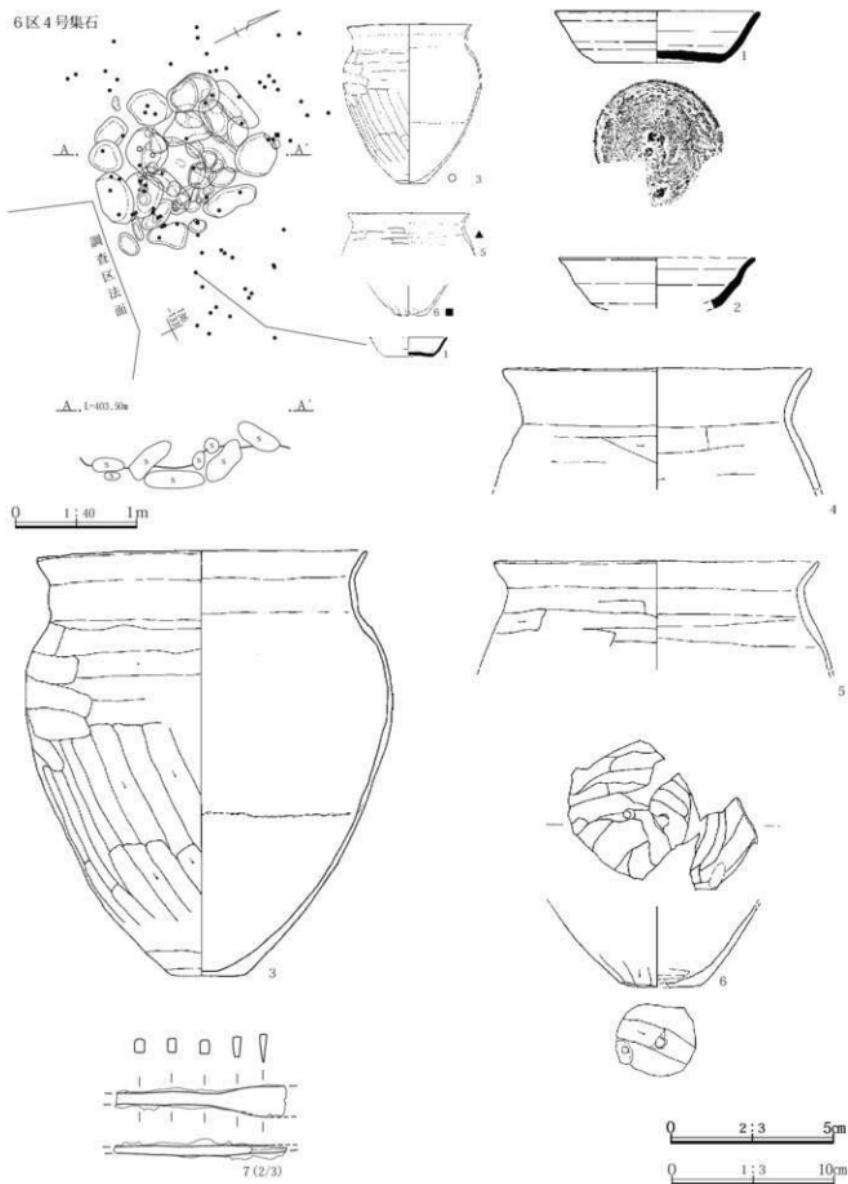
位 置 6区中央部北にある。**グリッド** 2C・2D-22
座標値 X=61144・61145、Y=-93106～-93108 **遺存状況・重複** 8～38cmの石が10個集中する。石同士の重複は無く、石の下に土坑状の施設は無い。他の遺構との重複は無い。**埋土状況** 基本土層6層土の黒褐色土に覆われている。**形 状** 不整橢円形 **規 模** 長軸1.24m、短軸1.05m **長軸方向** N-32°-E **遺物出土状況・遺物** 遺物は集石の内部や周辺から全体的に破片で出土している。未掲載遺物は土師器壺片が15g出土している。**所見・時期** 性格は不明である。掲載できる時期比定の可能な土師器がない。周辺の集石遺構から奈良時代の8世紀代と推定する。

4号集石(第151図 PL.79-7・8、PL.119)

位 置 6区西部南端 **グリッド** 2B-27 **座標値** X=61135～611137、Y=-93128・-93129 **遺存状況・重複** 8～49cmの石が40個集中する。石同士の重複があり、中央部に向かい椀状に下るように石が置かれている。他の遺構との重複は無い。**埋土状況** 基本土層6層土の黒褐色土に覆われている。**形 状** 不整橢円形 **規 模** 長軸1.47m、短軸1.25m **長軸方向** N-15°-W **遺物出土状況・遺物** 遺物は集石の上や集石周辺などから破片で出土している。土師器壺(3)は集石中央やや西よりの石の上から、そのまま南から同じく土師器壺(4)、集石南東部から、底部(6)、須恵器杯身(1)は、集石群から外れた南東側から出土している。須恵器杯・椀(1・2)や、くの字口辺の壺(4・5)とコの字口辺の壺(3)が出土している。底部に穿孔のある土器(6)、刀子状の鉄器(7)も1点出土している。また、焼成された骨の細片が、集石中央下部より出土した。生焼け状態のものが無いので、白色を呈する650°C以上の高温で焼かれたもので、形状から見て人骨の可能性がある(第6章自然科学研究第9節参照)。未掲載遺物は、土師器壺類500g、須恵器杯碗類が5gある。**所見・時期** 性格は不明であるが、人骨の可能性のある骨細片の出土から墓である可能性も想定できる。他の集石遺構についても墓の可能性を考える根拠の一つとなる。須恵器杯身の形態、土師器壺の口辺形態より、8世紀後半～9世紀後半と推定する。

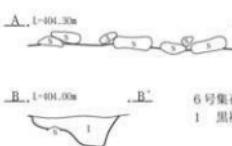
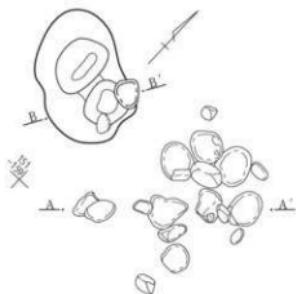
6号集石(第152図 PL.80-3・4)

位 置 6区西端部南、7号集石がすぐ南側にある。
グリッド 2E-32 **座標値** X=61150～61152、Y=-93157～-93159 **遺存状況・重複** 16～34cmの石が20個集中する。石同士の重複が少し有り、西に50cm離れた所で、形状が不整橢円形で、長径102cm、短径70cm、深さ24cmの土坑状の遺構がある。他の遺構との重複は無い。**埋土状況** 基本土層6層土の黒褐色土に覆われている。**形 状** 不整橢円形 **規 模** 長軸1.16m、短軸0.98m **長軸方向** N-6°-E **遺物出土状況・遺物** 遺物の出土位置は不明である。未掲載遺物は土師器壺類が63g、須恵器杯碗類が21gある。**所見・時期** 性格は不明である。須恵器椀の形態より、9世紀前半と推定する。

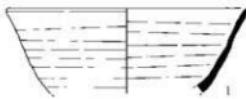


第151図 4号集石平面図・断面図・出土遺物図

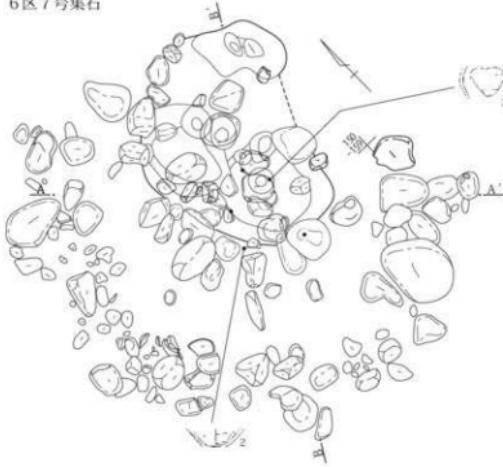
6区6号集石



6号集石
1 黒褐色土(2.5Y3/1)

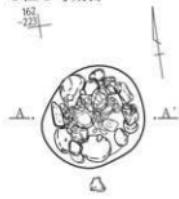


6区7号集石



7号集石
1 黒褐色土(2.5Y3/1)

5区9号集石



9号集石
1 黒褐色土(2.5Y3/1)

0 1:3 10cm

0 1:40 1m

第152図 6・7・9号集石平面図・土層断面図・出土遺物図

7号集石(第152図 PL.80-5~8、81-1)

位 置 6区西端部南、6号集石がすぐ南側にある。
グリッド 2D・2E-32・33 **座標値** X=61140 ~ 611146、Y=-93158 ~ -93161 **遺存状況・重複** 長径10 ~ 42cmの石で中央部に不整の橢円形状に46個集石され、さらにその周りを囲むように主に南側を中心に径3.93mに達する円弧状に長径3 ~ 64cmの石が90個埋められている。中央部の石の集石部の下には、長径142cm、短径90cmの土坑上の落ち込みがあり、小礫が入る。中央部・周回部とともに石同士の重複がある。他の遺構との重複は無い。

埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土に覆われている。
形 状 不整橢円形 **規 模** 長軸3.93m、短軸3.10m
長軸方向 N-0° **遺物出土状況・遺物** 遺物は中央部の集石から多く破片で出土している。未掲載遺物は、土師器壺類143g、須恵器杯碗類が2gある。
所見・時期 他の集石遺構に比べ、中央の集石と周りを囲む集石群の2重の造りで、さらに中央集石群の下には土坑状の遺構があり、この土坑の存在に注意する必要がある。遺物はこの土坑を中心とした地点で土師器片以外に出土していない。土師器の形態より、9世紀前半と推定する。

9号集石(第152図 PL.81-2・3)

位 置 5区西端部中央、古墳時代の3号竪穴状遺構がすぐ北側にある。
グリッド 2G-45 **座標値** X=61160 ~ 61161、Y=-93222 **遺存状況・重複** 3 ~ 28cmの石が約30個集中する。石同士が重複し、石の下に土坑状の施設がある。土坑の覆土の中に大小の礫が充満している。他の遺構との重複は無い。
埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土に覆われている。
形 状 不整橢円形 **規 模** 長軸0.75m、短軸0.70m **長軸方向** N-45° ~ E
遺物出土状況・遺物 遺物は出土していない。
所見・時期 性格は不明である。6区の集石遺構の例から奈良時代の8世紀代と推定する。

土器集中**1号土器集中(第153図 PL.81-4・5、PL.119)**

位 置 5区南東部、3号墳の西、14・24号土坑の南側にある。
グリッド 2D-39 **座標値** X=61145 ~ 61146、Y=-93191 ~ -93193 **遺存状況・重複** 土器の破片が集中して出土している。土器は南北に少し分けられる。他

の遺構との重複は無い。
埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土に覆われている。形 状 不整形 規 模 長軸1.50m、短軸0.80m
遺物出土状況・遺物 南側から、須恵器蓋杯(1)、須恵器碗(5)がある。北側から甕(7)も出土している。南側から大形甕(6)が破片となって出土している。
所見・時期 性格は不明である。須恵器杯の形態より、奈良時代の8世紀前半～中頃と推定する。

土 坑**5号土坑(第154図 PL.81-6・7)**

位 置 6区西端部中央、6号土坑の西側 **グリッド** 2F-31 **座標値** X=61155 ~ 61156、Y=-93154 ~ -93155 **遺存状況・重複** 完存。重複は無い。
埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土で埋没している。
形 状 圓丸長方形 **規 模** 長軸1.34m、短軸0.72m、深さ28cm **長軸方向** N-8° ~ W **遺物出土状況・遺物** 遺物は出土しなかった。
所見・時期 古代遺構面と同じ面での検出で、周りの遺構も古代のものが多いことなどから古代と推定した。

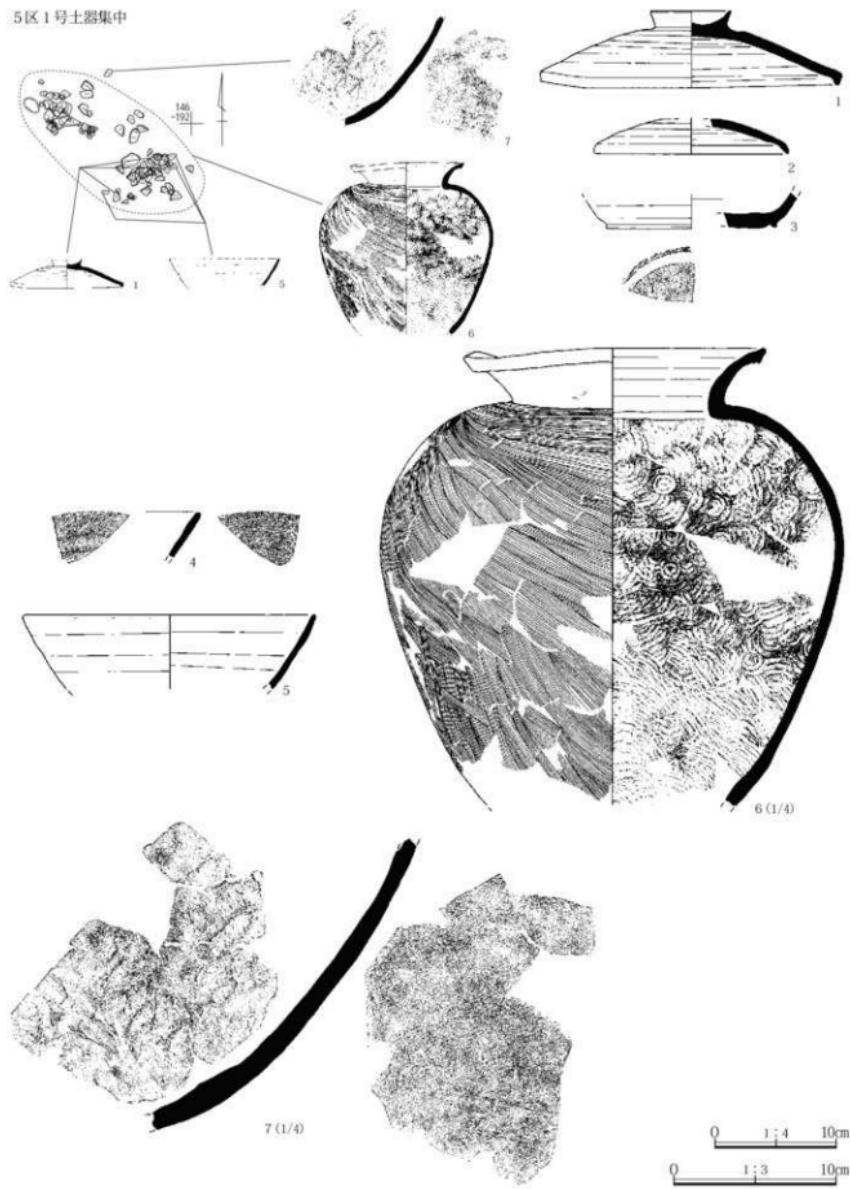
6号土坑(第154図 PL.81-8、82-1)

位 置 6区西端部中央、5号土坑の東、7号土坑の西側 **グリッド** 2E・2F-30 **座標値** X=61155 ~ 61156、Y=-93151 ~ -93152 **遺存状況・重複** 完存。重複は無い。
埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土で埋没している。
形 状 不整円形 **規 模** 長軸0.84m、短軸0.80m、深さ30cm **長軸方向** N-47° ~ W **遺物出土状況・遺物** 遺物は出土しなかった。
所見・時期 古代遺構面と同じ面での検出で、周りの遺構も古代のものが多いことなどから古代と推定した。

7号土坑(第154図 PL.82-2・3)

位 置 6区西端部中央、6号土坑の東、8号土坑の西側 **グリッド** 2E・2F-30 **座標値** X=61154 ~ 61155、Y=-93147 ~ -93148 **遺存状況・重複** 完存。重複は無い。
埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土で埋没している。
形 状 不整円形 **規 模** 長軸0.94m、短軸0.86m、深さ20cm **長軸方向** N-0° **遺物出土状況・遺物** 遺物は出土しなかった。
所見・時期 古代遺構面と同じ面での検出で、周りの遺構も古代のものが多いことなどから古代と推定した。

5区1号土器集中



第153図 1号土器集中平面図・出土遺物図

8号土坑(第154図 PL.82-4・5)

位 置 6区西端部中央、7号土坑の東側 グリッド2

E-29 座標値 X=61152・61153、Y=-93142・-93143 遺

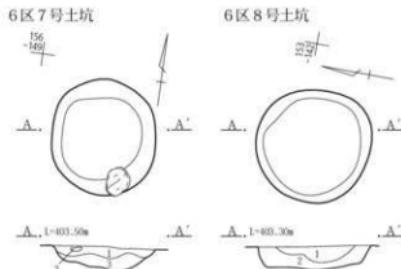
存状況・重複 完存。重複は無い。 埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土で埋没している。 形 状 円形
規 模 径0.92m、深さ24cm 長軸方向 N-0° 遺物
出土状況・遺物 遺物は出土しなかった。 所見・時期
古代遺構面と同じ面での検出で、周りの遺構も古代のも

のが多いことなどから古代と推定した。

9号土坑(第154図 PL.82-6～8)

位 置 6区西部南端 グリッド2B・2C-31・32 座

標値 X=61138～61142、Y=-93153～-93155 遺存状況・重複 完存。重複は無い。 埋土状況 基本土層6層土の黒褐色土で埋没している。 形 状 長楕円形
規 模 長径3.04m、短径1.73m、深さ82cm 長軸方向



0 1:40 1m

第154図 5～9号土坑平面図・土層断面図

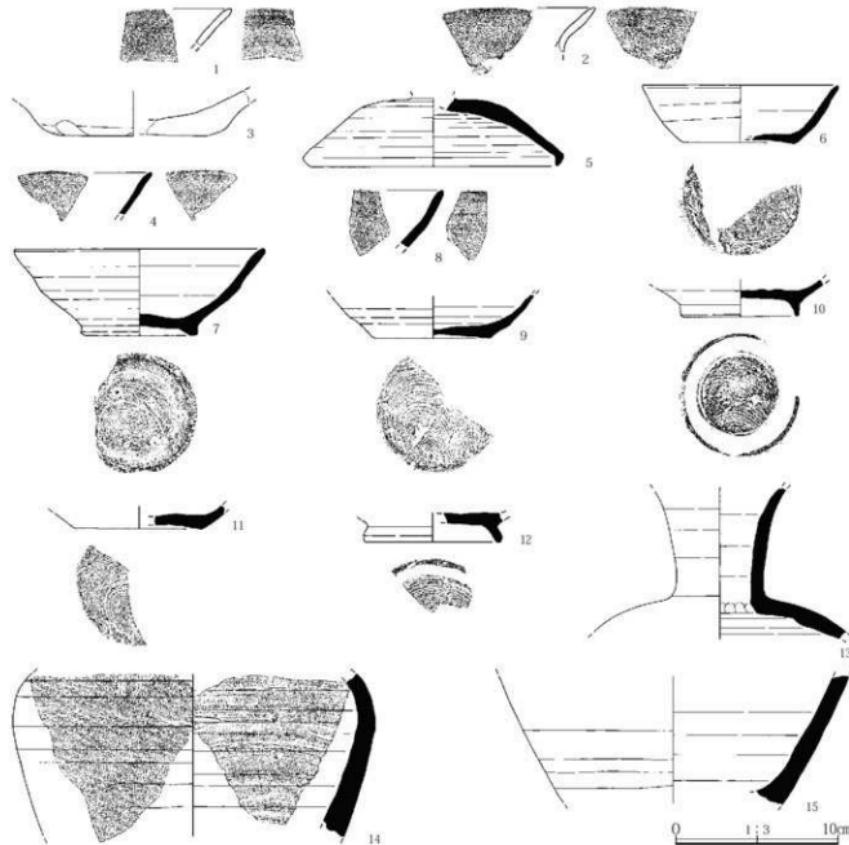
N-18°-E 遺物出土状況・遺物 遺物は出土しなかつた。 所見・時期 古代遺構面と同じ面での検出で、周りの遺構も古代のものが多いことなどから古代と推定した。

遺構外出土遺物 (第155図 PL.120)

遺構外からもいくつか古代の遺物が出土している。5・6区のグリッド出土として主にAs-Kkより下層から出土する。土器は、杯(1)、甕(2・3)、須恵器は、杯蓋(5)、杯(4・6・8)、椀(7・9～12)、壺(14)、長頸壺(13)、甕(15)などが出土している。今回の調査では、

古代の遺構は、5区にある9号集石遺構を除くと、全て6区に集中する。ただし、遺物の出土は、5区にも椀類(7・9・10)などある程度認められる。四戸の古墳群の調査区の西側に位置する四戸遺跡の調査で明らかになつたように、居住城として古代でも利用されているので、四戸の古墳群の西側にあたる5区でも、空間利用されていた可能性がある。

集石遺構は、4号集石での骨の出土から見て墓の可能性が高く、6区及び5区の一部も、主に墓域として利用されたものと推定できる。



第155図 古代面 遺構外出土遺物図

第6節 中世以降

全体状況(第156図)

中世以降の遺構は、調査区東側6区に限定される。2基の土坑墓、2基の土坑と4枚の畠がある。四戸の古墳群がある箇所は、古墳の遺存により耕作地化することも難しく、土地利用しにくい土地であったと思われる。

土坑墓

1号土坑墓(第157図 PL.83-1~4、PL.120)

位 置 6区西部北、2号土坑墓がすぐ北東にある。

グリッド 2F-28 座標値 X=61156~61158, Y=-93136・-93137 遺存状況・重複 完存。6~50cmの石が土坑内下部に重ね置きされている。他の遺構との重複は無い。**埋土状況** 黒く汚れたAs-Kk(軽石)を含む黒褐色土で埋没している。**形 状** 楕円形 **規 模** 長軸1.60m、短軸1.26m、深さ69cm **長軸方向** N-43°-W **人骨・遺物出土状況・遺物** 非常に残りの悪い状況で頭骨・鎖骨・上腕骨・大腿骨の一部が石の下から少し浮いた状況で出土している。副葬された冥銭としての六文銭が胸のあたりを中心に出土している。銭は全て北宋銭と推定され、皇宋通寶2枚、洪武通寶1枚



第156図 中世以降面全体図

ともう1枚の銭名不明の銭が着した2枚重ね、元符通寶1枚と銭名不明1枚の合計6枚が出土している。所見・時期 骨の保存状況が悪く、下顎骨下頬体、鎖骨骨幹部、上腕骨骨幹部、大腿骨骨幹部のみが確認でき、性別は女性、年齢は成人段階に達していたと推定される人物が埋葬されたことが分かった。(第6章自然科学分析 第9節参照)また、副葬された冥銭としての六文銭が6

枚納められており、土坑墓の時期は、北宋銭(模鋳銭の可能性あり)の副葬などから中世以降と推定する。

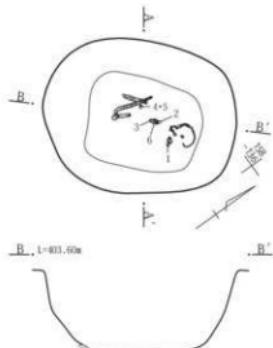
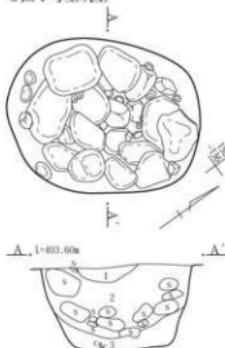
2号土坑墓(第157図 PL.83-5、84-1・2、PL.120)

位 置 6区西部北、1号土坑墓がすぐ南西にある。

グリッド 2F-27 座標値 X=61158 ~ 61160, Y=93132

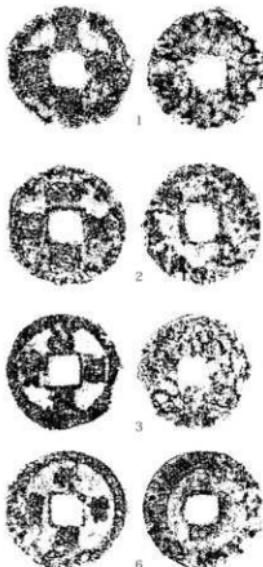
~ 93134 遺存状況・重複 完存。他の遺構との重複

6区 1号土坑墓

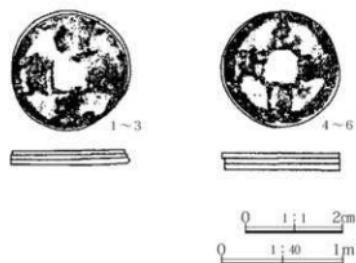


1号土坑墓

- 1 黒褐色土(2.5Y3/1)黒く汚れたAs-Kk(軽石)多く含む。
- 2 黒褐色土(2.5Y3/2)黒く汚れたAs-Kk(軽石)多く含む。円礫(Φ1~30cm)30%含む。
- 3 黒褐色土(2.5Y3/1)



6区 2号土坑墓



第157図 1・2号土坑墓平面図・土層断面図・断面図・出土遺物図

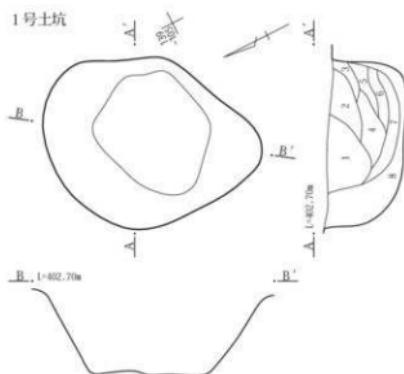
は無い。埋土状況 黒く汚れたAs-Kk(軽石)を含む黒褐色土で埋没している。形 状 圓丸長方形 規 模 長軸1.52m、短軸1.08m、深さ59cm 長軸方向 N-62°-W 人骨・遺物出土状況・遺物 非常に残りの悪い状況で頭骨・寛骨・大腿骨骨の一部が土坑床面直上から出土した。銅錢も数枚同じレベルで出土している。所見・時期 骨の保存状況が悪く、確認できたのは、左側頭骨・寛骨白部・大腿骨頭部・大腿骨骨幹部の一部である。性別は男性、年齢は成人段階に達して、壯・熟年程度の可能性が高い人物が埋葬されたと推定する。(第6章自然科学分析第9節参照)また、副葬された冥銭としての六文銭が体部を中心とした箇所に納められていた。体の西側に開元通寶1枚と銭名不明の銭2枚の計3枚の銭、体の東側に天祐通寶1枚と銭名不明の銭2枚の計3枚の銭、すべて北宋銭と推定されるが、それぞれ錯着して計6枚が出土している。土坑墓の時期は、北宋銭の副葬などから中世と推定する。

土 坑

1号土坑(第158図 PL.84-3)

位 置 6区東部北側、1号畠の南側 グリッド 2B

1号土坑



1号土坑

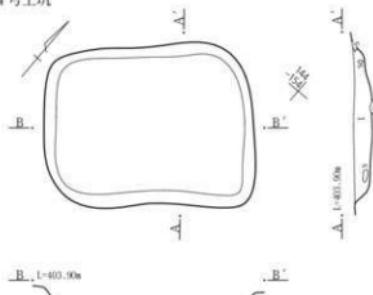
- 1 黒褐色土(2.5Y3/1)黒く汚れたAs-Kk(軽石)多く含む。
- 2 黒褐色土(2.5Y3/2) As-Kk(軽石)30%含む。
- 3 As-Kk中心層
- 4 黒褐色土(2.5Y3/1) As-Kk(軽石)20%含む。
- 5 黒褐色土(2.5Y3/2) As-Kk(軽石)30%含む。
- 6 黒褐色土(2.5Y3/2)
- 7 喀灰黄色土(2.5Y4/2)
- 8 黒褐色土(2.5Y3/2)

2C-22 産標値 X=61138 ~ 61140、Y=93104 ~ 93106
遺存状況・重複 完存。重複は無い。埋土状況 黒く汚れたAs-Kk(軽石)を含む黒褐色土で埋没している。形 状 不整形 規 模 長軸1.82m、短軸1.42m、深さ20cm 長軸方向 N-35°-E 遺物出土状況・遺物 遺物は出土しなかった。所見・時期 中近世遺構面と同じ面での検出で、埋土もAs-Kkの混じりの土により埋没しており、周りの遺構も中近世のものが多いことなどから中近世と推定した。

4号土坑(第158図 PL.84-4)

位 置 6区西部南側、3号畠の西側 グリッド 2C-31・32 産標値 X=61142 ~ 61143、Y=93153 ~ 93155 遺存状況・重複 完存。深さが無い。重複は無い。埋土状況 黒く汚れたAs-Kk(軽石)を含む黒褐色土で埋没している。形 状 圓丸長方形 規 模 長軸1.72m、短軸1.34m、深さ18cm 長軸方向 N-50°-E 遺物出土状況・遺物 遺物は出土しなかった。所見・時期 中近世遺構面と同じ面での検出で、埋土もAs-Kkの混じりの土により埋没しており、周りの遺構も中近世のものが多いことなどから中近世と推定した。

4号土坑



4号土坑

- 1 黒褐色土(2.5Y3/1)黒く汚れたAs-Kk(軽石)多く含む。

0 1:40 1m

第158図 1・4号土坑平面図・土層断面図

畠

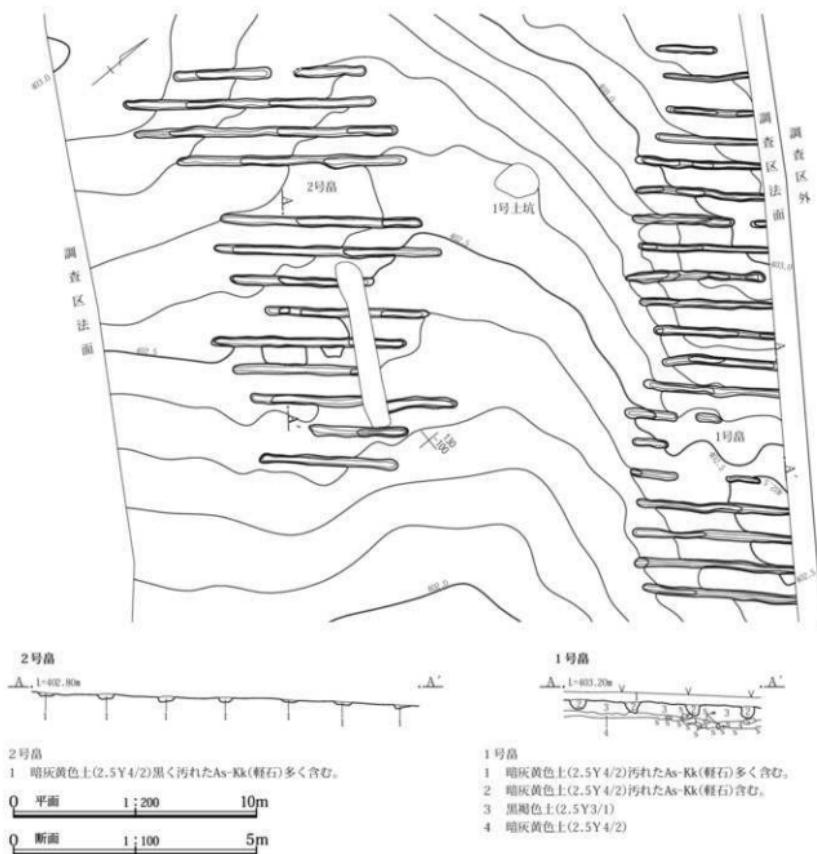
1号畠(第159図 PL.84-5~8)

位 置 6区東部北側、2号畠の北側 グリッド 2A ~ 2B-18 ~ 22 座標値 X=61132 ~ 61149、Y=-93085 ~ -93106 遺存状況・重複 故の北側は調査区外である。重複は無い。埋土状況 黒く汚れたAs-Kk(軽石)を含む暗灰黄色土が故に入る。故形状 短冊形と推定 故規模 長6.5+m、幅60 ~ 130cm、故高1 ~ 21cm 故間20 ~ 45cm 故数 19+ 故方向 N-43° ~ E 畠規模

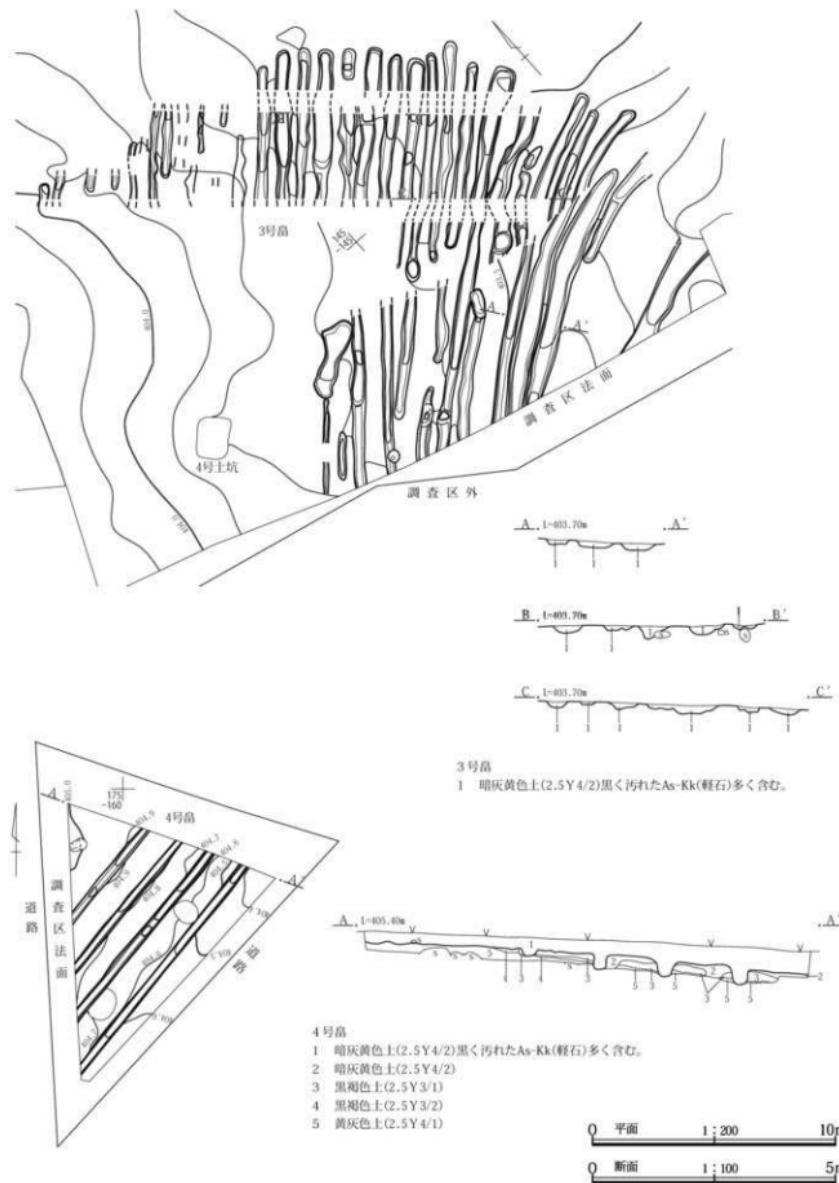
長22.5m、幅6.6+m、面積121.66m² 遺物出土状況・遺物 遺物は出土しなかった。所見・時期 中世遺構面と同じ面での検出で、故に入る土もAs-Kkの混じりの土で、周りの遺構も中世のものが多いことなどから中世と推定した。

2号畠(第159図 PL.85-1・2)

位 置 6区東部南側、1号畠の南側 グリッド Y ~ 2B-21 ~ 24 座標値 X=61124 ~ 61137、Y=-93100 ~ -93118 遺存状況・重複 故の両端は確認できない所

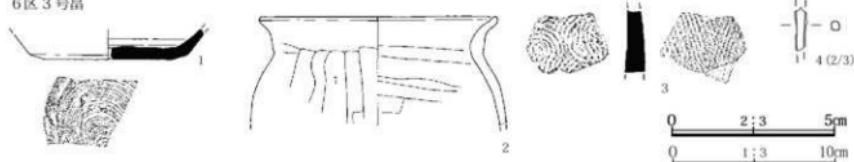


第159図 1・2号畠平面図・土層断面図



第160図 3・4号坑平面図・土層断面図

6区3号墓



第161図 3号墓出土遺物図

が多く、明瞭でない。重複は無い。 埋土状況 黒く汚れたAs-Kk(軽石)を含む暗灰黄色土が歓間に入る。

歓形状 短冊形と推定 **歓規模** 長10.8m、幅50～

215cm、歓高1～9cm 歓間30～55cm **歓数** 12+ **歓**

方向 N-40°～E **墓規模** 長16.4m、幅10.8m、面積

140.45m² **遺物出土状況・遺物** 遺物は出土しなかった。

所見・時期 中世遺構面と同じ面での検出で、歓間に入る土もAs-Kkの混じりの土で、周りの遺構も中世のものが多いことなどから中世と推定した。

3号墓(第160・161図-1～4 PL.85-3～8、PL.120)

位 置 6区西部南側、1・2号土坑墓南側 グリッド

2B～2F-27～31 座標値 X=61134～61155、Y=-93133

～-93158 **遺存状況・重複** 歓の南がわは確認できな

い所が多く、明瞭でない。重複は無い。 埋土状況 黒く汚れたAs-Kk(軽石)を含む暗灰黄色土が歓間に入る。

歓形状 短冊形と推定 **歓規模** 長15.9+m、幅10～

90cm、歓高3～12cm 歓間20～100cm **歓数** 31+ **歓**

方向 N-52°～E **墓規模** 長27.8+m、幅18.3+m、面

積200.167m² **遺物出土状況・遺物** 遺物は須恵器(1・

3)、土師器甕(2)、棒状鉄器片(4)が出土した。 **所見・**

時期 東側は、少し歓方向が東方向に振れている。中世

遺構面と同じ面での検出で、歓間に入る土もAs-Kkの混

じりの土で、周りの遺構も中世のものが多いことなどか

ら中世と推定した。

4号墓(第160図)

位 置 6区西端部北側、3号墓土壤墓南側 グリッド

2G～2I-31～33 座標値 X=61163～61173、Y=-96154

～-93161 **遺存状況・重複** 墓の四辺ともに道路等によ

り調査が行えず確認できなかった。重複は無い。 埋土

状況 黒く汚れたAs-Kk(軽石)を含む暗灰黄色土が歓間

に入る。 **歓形状** 短冊形と推定 **歓規模** 長10.5+m、

幅90～115cm、歓高7～29cm 歓間30～45cm **歓**

数 3+ **歓方向** N-40°～E **墓規模** 長10.8+m、幅

4.5+m、面積34.35m² **遺物出土状況・遺物** 遺物は出土

しなかった。 **所見・時期** 歓の残りは良いが、四辺が

道路等で確認できない。中世遺構面と同じ面での検出で、

歓間に入る土もAs-Kk混じりの土で、周りの遺構も中世の

のものが多いことなどから中世と推定した。

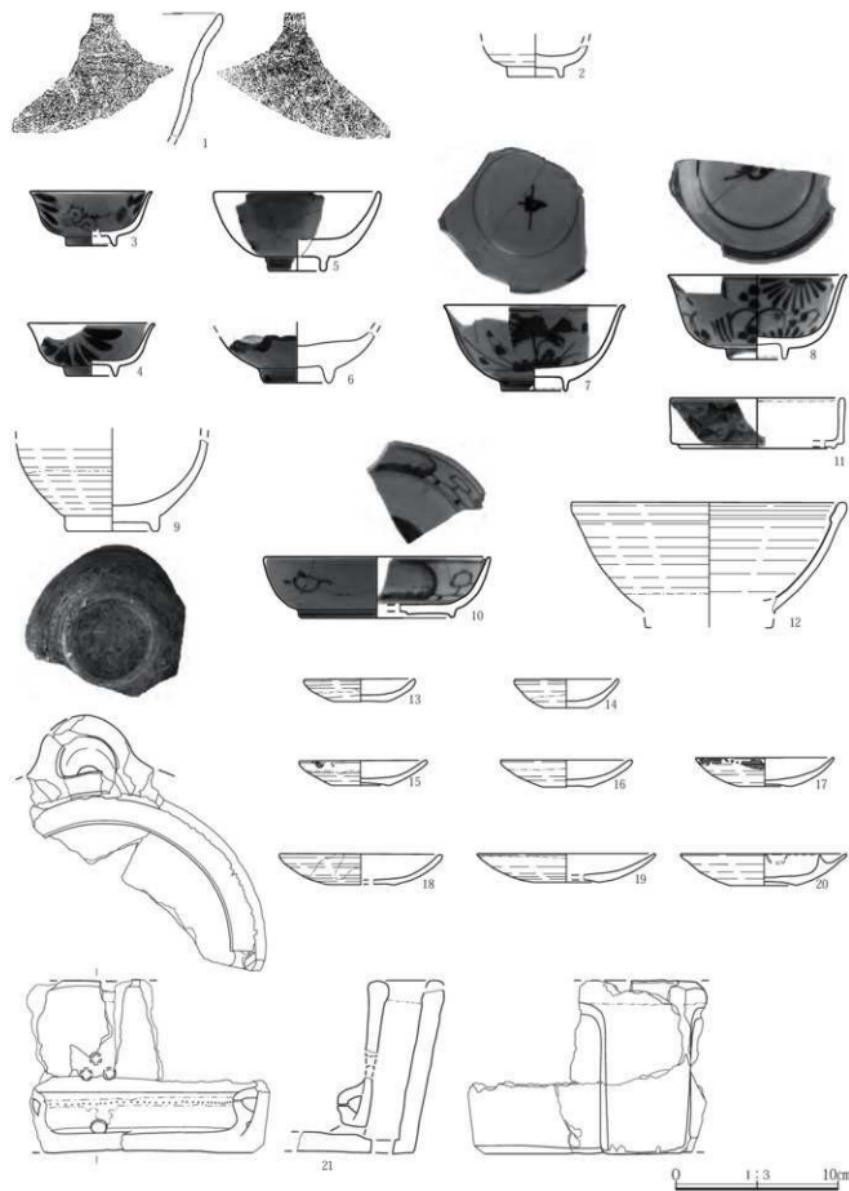
遺構外出土遺物 (第162・163図 PL.120・121)

中世に相当する遺物が少量出土している。

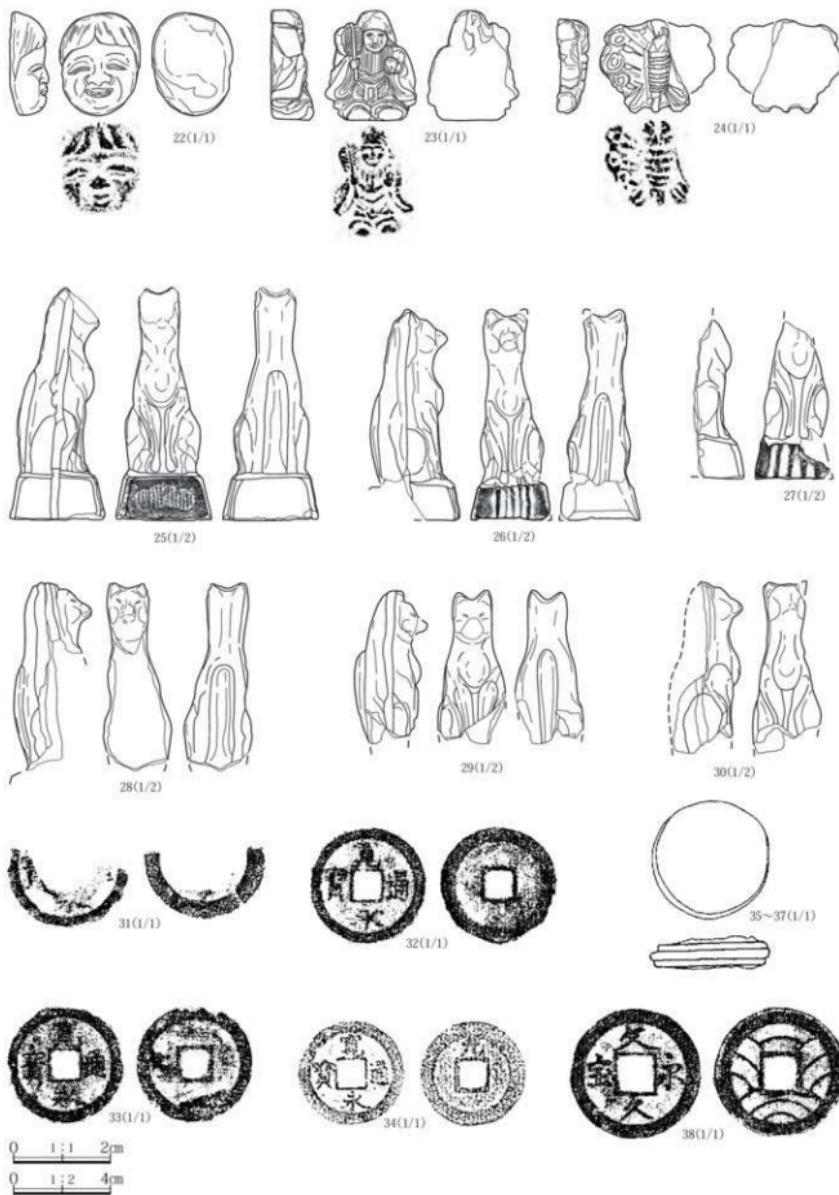
土鍋(1)は、軟質陶器で中世と推定される。白磁小碗(2)も出土している。近世と推定される。瀬戸・美濃焼、肥前焼と産地不詳の3種類がある。器種は小杯、染付碗、碗、染付皿、段重、片口鉢、燈明皿、煮瀬鍋である。

瀬戸・美濃焼の色絵小杯(3・4)、肥前磁器の染付碗(5)、肥前陶器の陶胎染付碗(6)、瀬戸・美濃焼の染付碗(7・8)、瀬戸・美濃焼の碗(9)、肥前焼陶磁染付皿(10)、肥前焼染付段重(11)、瀬戸・美濃焼片口鉢(12)、瀬戸・美濃焼燈明皿(13・14・18)、産地不詳燈明皿(16・17・19・20)、産地不詳の蕪煮鍋(21)を図示した。玩貝(22～24)、土人形(25～30)も出土した。

銭貨は、寛永通寶が、3号墳の石室や南側、1トレンチ内より計5枚出土している。銅銭の寛永通寶(31、32)は新寛永(寛文8(1697)年～)である。また、鉄一文銭(35～37)が3枚、鋳着してまとめて出土している。他に、文久永寶(草文)(38)が1号竪穴状遺構の覆土上層から出土している。2D-42・2E-42グリッドからも寛永通寶が出土しており、2D-42グリッド例(33)は新寛永(寛文8(1697)年～)で、2E-42グリッド例(34)は大阪高津鑄造例(寛保元(1740)年～)である。



第162図 中世以降遺構外出土遺物図(1)



第163図 中世以降遺構外出土遺物図(2)

第7節 時代不明遺構外遺物について

全体状況

時代が不明な遺物は、5・6区ともに出土している。特に鉄器は時期差が明瞭に形態に発現しないため、時期判定がつかずこの項に入れた。

土製・石製品(第164図-1・2 PL.121)

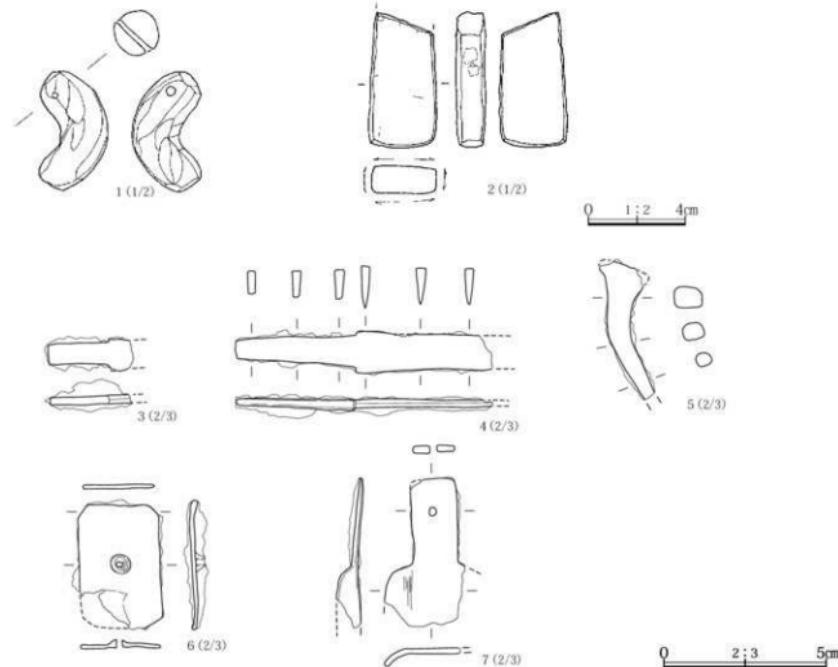
土製勾玉(1)が、5区から出土している。土製勾玉は、縄文時代から中世まで使用されるもので、特に弥生時代から古墳時代にかけて多くの出土を群馬県でも認められ、当遺跡でも弥生時代11号竪穴建物(第42図-40)と古墳時代8号竪穴建物掘方(第78図-16)からそれぞれ出土している。5区一括で取り上げたこの土製勾玉をどの時期に比定するかは困難であるので、時代不明遺物に入

れている。3点の土製勾玉を有することは、この遺跡での土製勾玉の使用が盛んであった可能性を示している。

粗粒輝石安山岩製の砥石(2)が5区より出土した。表面裏面に砥面があり、左右両側面と下部小口面にも滑らかな面があり砥面の可能性があるものである。

鉄製品(第164図-3～7 PL.121)

鉄製品がいくつか出土している。刀子の茎2点(3・4)が5・6区から1点ずつ出土している。釘と推定する鉄製品(5)は、5区からの出土で、7世紀中頃以降である。方形鐵板(6)で、中央に紙が打ち付けてあるような板状品や、穿孔のある柄が付いて肩を有して少しアルを持つているもの(7)がある。



第164図 時代不明出土遺物図

第6章 自然科学分析

第1節 分析の目的と成果

四戸の古墳群では、様々な分析を行うことが必要な遺物群が出土した。以下、各種分析の目的と得られた成果について簡単に記す。対象試料が示す年代順に配列した。詳細なデータ・結果については次節以降の分析報告を参照いただきたい。

①圧痕同定分析(第2節)

目的：弥生時代の竪穴建物が調査されており、多数の弥生土器が出土している。それらの土器の一部には、圧痕が器面に残されたものが観察された。それら土器の器面に遺存した圧痕の同定をすることで、種実を明らかにする。その結果により、吾妻川中流域という山間部での農業や穀物使用の実態を明らかにできる可能性がある。

分析方法：あらかじめ採取した圧痕レプリカを实体顕微鏡下や走査顕微鏡下で同定を行い、必要に応じてサイズ計測を行い大きさを検討し、種実の同定を行う。

分析結果：116点の圧痕レプリカのうち、69点が種実圧痕と同定された。3つの分類群が確認された。

①イネ・イネ？ 穂・穂殻・種子	計66点
②キビ種子	計1点
③アサ・アサ科	計2点

食用に可能なイネ66点、キビ1点、アサ2点が同定できた。特にイネの圧痕が多く確認され、1個の土器に複数の種実圧痕が確認される場合もあった。

成果：弥生時代後期において、吾妻川中流域という山間部でありながら、イネを多数出土したことから、山間部であっても多くのイネの栽培がなされていたことを示す重要な成果である。

②灰像分析(第3節)

目的：弥生時代後期の竪穴建物から2点の有孔鉢と1点の片口鉢(分析2ヶ所)と壇、古墳時代後期の竪穴建物から1点の壇に灰が内部に付着している。これらの灰を灰像分析により珪酸形骸・珪酸以外の形骸を顕微鏡で観察

することで、付着物の植物種が明らかとなる。当時の人々の食材や他の用途での植物利用を明らかにすることができます。

分析方法：土器内面より灰資料を採取し、恒温乾燥機で乾燥する。乾燥した灰資料を電気炉灰下法により灰化する。プレパラートを作製し、偏光顕微鏡を用いて同定を行う。

分析結果：栽培植物に由来する植物珪酸体は残念ながら検出されなかった。イネ科栽培植物が利用された可能性について言及することはできない。イネ穀殻の植物珪酸体も検出されないことから、イネ穀が入っていた可能性も認められ無い。

キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族型、タケ亜科メダケ節型、タケ亜科ネザサ節型のイネ科植物の起動細胞に形成される植物珪酸体が含まれていた。

成果：イネ科栽培植物の利用は認められ無い。それ以外のイネ科植物が土器内で焼成されたか、あるいは外部で焼成された後に土器内に入ったものと推定される。

③赤色顔料分析(第4節)

目的：赤色顔料には水銀朱が主成分となる朱と、赤色の酸化鉄を主成分とするベンガラがある。ベンガラには鉄鉱石を中心とする鉱物系のベンガラ、水田の鍛みなどで形成されるパイプ状の鉄細菌を焼成して造られる生物系のベンガラの2種がある。さらに金井東裏遺跡において120個以上の「赤玉」が出土し、ベンガラの素材と仮定し、これ以外の県内のほぼ同時期のベンガラについても比較のため分析をした結果、赤黄色あるいは赤土と呼ばれる堆積土層を原料としたベンガラであることが想定された。ベンガラに3種類あることが判明したのである。四戸の古墳群の場所は金井東裏遺跡から20km吾妻川を遡った地点にあり、この地で、どのような素材のベンガラを使用したものか、弥生時代後期と古墳時代後期の試料を使用して明らかにするものである。

分析方法：目視及び実体顕微鏡で直接観察後、赤色顔料を採取する。資料は弥生時代後期赤彩土器8点、赤彩埴

輪2点から、極少量(耳かき1杯未満)の資料を採取する。実体顕微鏡及び生物顕微鏡で、パイプ状の有無などの観察を行い、主成分元素を知るために蛍光X線分析を行う。朱はHgが、ベンガラはFeが検出される。一部試料では、X線回折で更に詳細な主成分元素の比定を行う。

分析結果：弥生後期土器の赤色顔料6点、埴輪赤色顔料2点の計8点すべてが、パイプ状の鉄細菌を焼成して赤化したパイプ状ベンガラであることが分かった。

成果：今までの群馬県内の弥生時代～古墳時代の赤彩土器・赤彩埴輪は全てベンガラであることが分かっている。特に弥生時代～4世紀後半まではパイプ状ベンガラが多いのが特徴で、今回の分析でも弥生土器についてはその傾向の中にあり、パイプ状ベンガラである。興味深いのは、古墳時代の1号墳の赤彩家形埴輪で、県内の赤彩埴輪の多くが赤土素材起源のベンガラである中で、パイプ状ベンガラという結果が出たことである。実は、四戸の古墳群の埴輪は肉眼観察や、後述するように、薄片作製胎土分析や蛍光X線による産地同定分析から藤岡産の埴輪であることが分かっている。そして、藤岡の七ヶ所古墳から出土した藤岡産の赤彩埴輪のベンガラは、他地域の赤彩埴輪のベンガラが赤土素材のベンガラであるのに対して、パイプ状ベンガラである。藤岡産の埴輪は赤彩する際に、鉄細菌を焼成したパイプ状ベンガラを使用とする特徴がある可能性を示すものである。

④埴輪の顔料分析(第5節)

目的：四戸の1号墳の形象埴輪(鞍)に塗布された、青色・白色顔料についてその素材を明らかにする。特に青色の顔料は珍しく貴重である。

分析方法：元素マッピング分析で、元素の分布を調査後、蛍光X線分析と蛍光X線回折を行って特徴的な元素の同定を行い、顔料の素材を比定する。

分析結果：青色・白色顔料ともに、雲母・緑泥石といった粘土鉱物を中心としたもので、石英・斜長石も検出された。それぞれ青色粘土・白色粘土と考えられるという分析結果である。

成果：九州装飾古墳の彩色壁画に使用された青色顔料は、雲母類と呼ばれる粘土鉱物や石英・長石を含む多結晶の集合体であるとした報告がある。また、分光光度計による測色の結果より、青色というより灰色と呼ぶほう

が妥当としている。今回の青色顔料も、九州装飾古墳壁画で使用された青色(灰色)顔料に成分が近いものと思われる。青と白の2つの顔料が、ほぼ同じ粘土鉱物であることが分かったことは成果であるが、色の違いを示す素材が特定できなかったことが今後の課題である。

当初は、白色の顔料を下地にして、その上に青い顔料を塗っていると想定したが、実体顕微鏡などの観察から必ずしも重ね塗りするような形態でない可能性がある。青色単色の場合や、白と青が交じり合うような形で塗られている箇所もある。白色が灰色に近いものもあり、青色が退色して白色化した可能性もあることを考えたい。

⑤土師器・埴輪の薄片作製胎土分析(第6節)

目的：竖穴建物から出土した土師器や四戸1号墳から出土した埴輪について、どこの土を使用して作製したのか明らかにする。

分析方法：土器・埴輪の薄片試料の一部をダイアモンドカッターで切断し、0.03mmの厚さに研磨する。薄片を偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用いて観察し、胎土中に含まれる鉱物片・岩石片及び微化石の種類構成等を明らかにして、それぞれの胎土の鉱物・岩石別出現頻度や、砂粒の粒径ヒストグラムなどを作製して、それぞれの薄片の胎土の特徴を明らかにする。

分析結果：土師器と埴輪の間で、胎土中に含まれる碎屑物の鉱物や岩石の種類構成が大きく異なることが確認された。土師器は、通常多く含まれる石英以外で、石英と同程度かそれに次ぐほど量含まれている斜長石が多量に含まれている。また、凝灰岩・流紋岩・ディサイト・安山岩・溶結凝灰岩などの岩石片が含まれていることを考慮すると、火山噴出物が広く分布する箇所の土と考えられる。吾妻川流域では、新第三紀鮮新世の火山岩類や第四紀中期更新世の火碎流堆積物が広く分布し、下流右岸には榛名火山の火山麓扇状地堆積物がある。これらの地質分布から、四戸の古墳群出土の土師器類は、いずれも近傍の吾妻川流域で作られた可能性が想定される。埴輪は、特徴的な組成を示している。特に多量に結晶片岩が含まれることから、三波川変成帶で結晶片岩の分布が特に多く埴輪生産が盛んな藤岡市周辺の可能性が想定された。

成果：土師器は、火山灰噴出物が広く分布する箇所の土

を使用しているところから、具体的には遺跡近傍の吾妻川流域で造られていると推定した。土師器の中の、内斜・内湾・須恵器模倣杯などの赤味があり造りが良好な一群は、斜長石が多く含まれ、粒径も極細粒が比率が多いなどある程度の共通性があり、制作地との関連性があるかどうか興味深いところである。埴輪は多量の結晶片岩を含むところから、三波川変成帯に入る藤岡産の埴輪と推定された。後述する、蛍光X線分析の結果により2重の検証ができる。

⑥須恵器・埴輪の産地分析(第7節)

目的：四戸の1号墳よりは、埴輪が大量に出土し、前庭よりは須恵器がいくつか出土している。他に古代の1号土器集中からも須恵器が出土している。吾妻地域では、須恵器・土師器の蛍光X線分析はほとんど行われていない。そこで、それら須恵器・埴輪について蛍光X線分析を行い、産地の同定を行うものである。

分析方法：試料を乳鉢で100メッシュ以下に粉碎し、電動圧縮機で高圧をかけてプレスし、2cmほどの綫剤試料を作製する。Na、K、Ca、Fe、Rb、Srの6元素を対象として、蛍光X線を照射し、それぞれの元素の比率から産地同定を行う。須恵器9点、埴輪6点を分析した。

分析結果：花崗岩系の粘土を素材とするNo.7の須恵器は、K-Ca、Rb-Srの両分布図で「陶邑領域」に対応しているので、陶邑産の須恵器である可能性がある。他の須恵器はすべて、安山岩系の岩石に由来する粘土が素材となっており、関東地域で作られた須恵器の可能性が高い。No.3、8、9は、K、Rbが比較的高く、関東産と推定するが産地不明である。

埴輪は、K-Ca、Rb-Srの両分布図で良くまとまり、同じ所で作られた埴輪であることは明白である。分布図からすると、藤岡市に所在する本郷埴輪窯跡群の分布領域に対応し、同埴輪窯で生産された可能性がある。

分析成果：須恵器の結果は、陶邑産の可能性あるもの1点、茨城県産の可能性のあるもの4点、不明のものが4点である。埴輪の結果は、藤岡市本郷埴輪窯産の可能性ありということで、薄片作製胎土分析の結果、及び肉眼観察での、結晶片岩・海綿骨針の存在からの藤岡産埴輪ということ一致した。

⑦ガラス玉の蛍光X線分析(第8節)

目的：6世紀後半の四戸の1号墳からガラス玉が4点出土しており、蛍光X線分析により、素材の同定を想定できる。

分析方法：測定対象の物質に一定以上のX線を放射すると、元素固有の蛍光X線が出来ることにより、元素の比定を行うことができる。

分析結果：4点のうち、No.1が鋳型法、No.2~4が引き伸ばし法のガラス玉である。No.1の試料は、K₂Oの値が他の3点に比べ非常に高いが、ナトリウムがかなり検出されているので、ソーダガラスとカリガラスが混合された材質である可能性が高い。

No.2~4は、ソーダガラスと推定される。更にMgO、K₂O、CaO、Al₂O₃、TiO₂の含有量から既存の5グループのうち、No.2はナトロン主体のタイプのソーダガラス(GropSIV)に帰属し、No.3・4は植物灰タイプのソーダガラス(GropSIII B)に帰属する可能性が高い。

分析成果：蛍光X線分析により、それぞれのガラス玉の素材及び製作法が想定された。No.1は鋳型法で、ソーダガラスとカリガラスが混合された材質である。No.2はナトロン主体のタイプのソーダガラスで、No.3・4は植物灰タイプのソーダガラスと想定される。群馬大学で調査した6世紀前半のガラス玉も別件で分析しており、今後、5世紀後半~6世紀前半の分析をする際に検討する予定である。なお、ガラス玉分析に関しては、林史夫(群馬大学機器分析センター)、田村朋美(奈良文化財研究所)、大賀克彦(奈良女子大学)の3氏に指導助言を受けた。

⑧人骨の人類学的研究(第9節)

目的：2基の土坑墓と1基の集石遺構から人骨が出土したので、その人骨の年齢・性別等を明らかにする。

分析方法：人骨の各部位の肉眼観察により、人骨部位の同定、残存部位からの年齢・性別の推定を行う。

分析結果：1号土坑墓人骨は、骨の保存状態は不良である。同定できた骨は、頭骨は下頸骨の下頸体、四肢骨は、左右不明の鎖骨骨幹部片、上腕骨骨幹部片、左右の大脛骨骨幹部である。年齢は、下頸の右オトガイ孔上部の小白歯部の歯槽が閉鎖していることから、成人段階に達し

ていた。性別は、大腿骨骨幹部が華奢であることから女性と推定。

2号土坑墓人骨は、骨の保存状態は不良である。頭骨は、左側頭骨内耳孔部片、四肢骨は、寛骨臼部片、大腿骨頭部片、左右の大脛骨幹部である。年齢は、大腿骨骨幹部の発達具合と、寛骨臼並びに大腿骨頭部に加齢性の骨変化等が見られることから成人段階でも壯・熟年程度の可能性高い。性別は、寛骨臼、大腿骨骨頭、大腿骨骨幹部が頑強なことより、男性と推定される。

4号集石骨は、細片化が著しい四肢骨が多数遺存。ほとんどが数mm程度である。白色の色調を呈し焼成されている。650°C以上のかなりの高温で焼かれたものと推定。骨はヒトを否定する要素はみられない。

分析成果：極めて残りの悪い骨であったが、1号土坑墓人骨は成人段階に達した女性、2号土坑墓人骨は、壯・熟年程度の男性ということが推定された。さらに、遺構や出土土器などで遺構の性格がはっきりしなかった4号集石から、ヒトと推定可能な焼骨が出土したことで集石遺構群が墓である可能性を示すことができた。

第2節 圧痕同定分析

1. はじめに

群馬県吾妻郡東吾妻町大字三島地内に所在する四戸の古墳群は、吾妻川中流域の右岸に位置する。遺跡では弥生時代後期後半を中心とした竪穴建物が多数検出されている。ここでは、レプリカ法により、弥生時代の土器に確認された種実圧痕の同定を行った。

2. 試料と方法

試料は、群馬県埋蔵文化財調査事業団によってあらかじめ作製された圧痕のレプリカ116点である。圧痕が確認された土器の時期は、弥生時代後期中葉～後半である。

同定では、最初に実体顕微鏡下で圧痕レプリカを観察し、同定の根拠となる部位が残っている試料を同定した。次に、代表的な分類群の圧痕レプリカについて走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製 超深度マルチアンダルレンズVH-X-D500/D510)で写真撮影を行った。計測が可能な試料については、デジタルノギスで計測した。圧痕レプリカは、群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

3. 結果

116点の圧痕レプリカのうち、70点が何らかの種実圧痕と同定された。確認されたのは草本植物のみで、イネ科・穀殻・種子(穎果)(?を含む)とキビ種子(穎果)、アサ核の3分類群が確認された。科以上の詳細な同定はできないものの何らかの種実圧痕と考えられる一群を不明種実、種実圧痕の可能性があるものの特徴が不明瞭な一群を不明種実?とした。他に、不明の木材と茎状が得られ、植物以外では不明の昆虫が得られた。種実や植物、昆虫とも判断できない不明圧痕も確認された(第5～7表)。

以下では、確認された分類群について記載を行い、図版に走査型電子顕微鏡写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田(2003-)に準拠し、APG IIIリストの順とした。

(1)イネ・イネ? *Oryza sativa* L./*Oryza sativa* L.? 穀・穀殻・種子(穎果)

穀は上面観が楕円形で、側面観が長椭円形。2条の稭があり、表面には四角形の網目状の隆線と隆線上の顆粒状突起が規則正しくなる。穀殻は扁平。種子(穎果)は上面観が両凸レンズ形、側面観が楕円形。両面に縱方向の2本の浅い溝がある。形態は似るが、細部が不明瞭な試料には?を付けた。

(2)キビ *Panicum miliaceum* L. 種子(穎果) イネ科 上面観は楕円形、側面観は円形に近い。レプリカでは胚が欠けているが、長さは全長の1/2程度とみられる。

(3)アサ *Cannabis sativa* L. 核 アサ科

上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形で、側面に稭がある。下端にはやや突出した楕円形の大きな着点がある。

(4)不明 Unknown 種実

上面観は楕円形、側面観は楕円形で下端がやや薄くなる。オーバーハングしており、形態から種実の可能性が考えられるが、表面に特徴的な部分が残存しておらず、不明。

第5表 四戸の古墳群出土土器の圧痕の同定結果

分類群	部位	弥生時代
		後期中葉～後半
イネ	穂	38
	穂殻	2
	種子(頬果)	25
イネ?	種子(頬果)	2
キビ	種子(頬果)	1
アサ	穂	2
不明	種実	1
	種実?	2
	木材	4
	茎状	1
	昆虫	1
	不明	2

4. 考察

四戸の古墳群から出土した弥生時代後期中葉～後半の土器の圧痕のレプリカを同定した結果、70点が種実であった。確認されたのは、食用などに利用可能なイネとキビ、アサであった。イネは、食用にならない穂殻だけでなく、食用部位である種子(頬果)や穂の圧痕が多かった。種実の保管や調理の場が、土器製作の場に近かった可能性が考えられる。

今回は、イネの圧痕が多い傾向が認められ、1個体の土器に複数の種実圧痕が確認される例もあった。圧痕が多い個体としては、10号竪穴建物(第36図-4)で15点のイネが、10号竪穴建物(第36図-3)で9点のイネが確認され、いずれも穂と種子(頬果)が混在していた。種実圧痕が複数確認された土器については、土器胎土内にも種実の痕跡が残っている可能性がある。なお、群馬県内では沖II遺跡で弥生時代前期～中期前半の種実圧痕が、中野谷原遺跡で弥生時代中期前半の種実圧痕が確認されており、アワやキビなどの雑穀が主体で、イネが少數という組成が報告されている(設楽・高瀬、2014)。今回は、やや時期が下る弥生時代後期中葉～後半の土器でイネ圧痕が多く見つかったという点が重要な成果であり、本地域において利用された主な穀物の推移を示すのか、大型植物遺体分析の成果も含めて今後の類例増加が注目される。

引用文献

- 設楽博己・高瀬克範(2014)西関東地方における穀物栽培の開始、国立歴史民俗博物館研究報告、185、511-530。
米倉浩司・梶田 忠(2003-) BG Plants 和名一学名インデックス(YList),
<http://ylist.info>

第6表 四戸の古墳群出土土器の圧痕一覧(1)

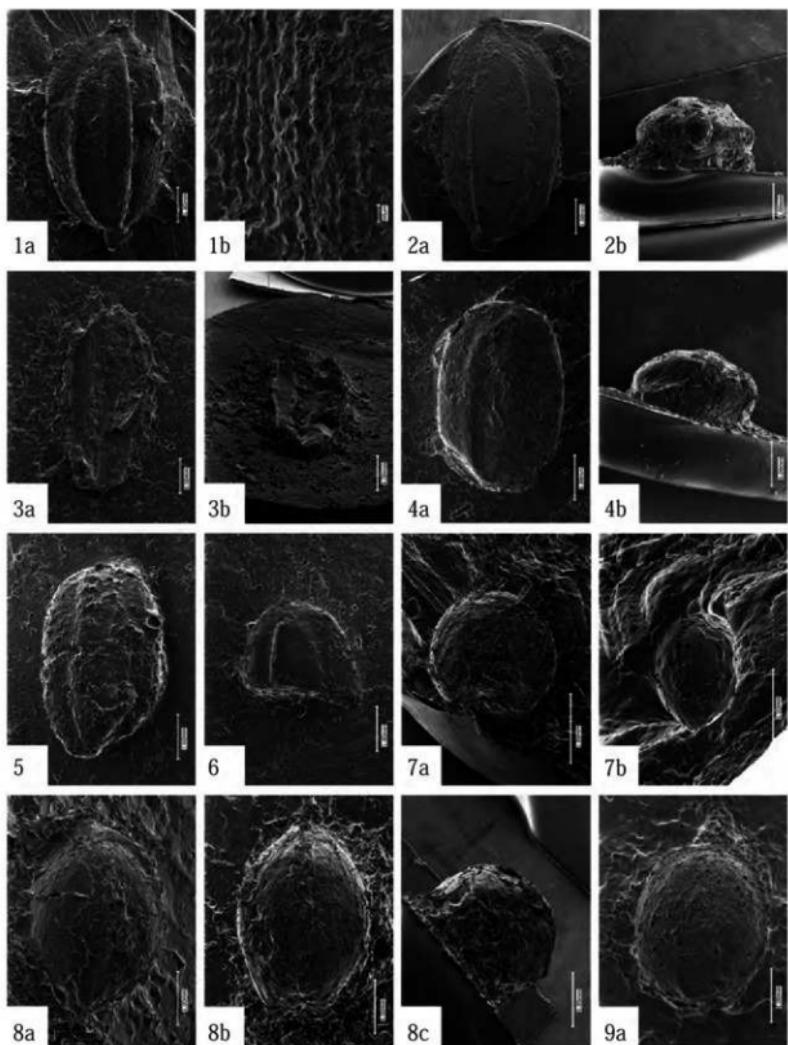
No.	土器個体番号	器種	出土遺構	同定結果			大きさ(mm)		
				分類群	部位	備考	長さ	幅	厚さ
1	2	壺	17型建	イネ	柄	破損	(5.8)	(2.5)	(0.8)
2				イネ	種子(頸果)	割れ	(3.4)	3.1	(1.5)
3				イネ	種子(頸果)		(4.7)	2.8	(1.5)
4				イネ	柄		5.7	(3.0)	2.0
5				イネ	種子(頸果)		5.1	2.9	2.1
6				イネ	柄		5.7	3.4	(1.9)
7				イネ	種子(頸果)	割れ	(2.1)	2.7	(1.7)
8	4	壺	17型建	×			-	-	-
9				アサ	核		3.9	(2.4)	2.6
10				アサ	核		3.2	2.6	(1.5)
11				不明	木材		-	-	-
12	16	甕	17型建	イネ	柄	破損	(4.9)	(2.8)	(1.6)
13	21	甕	17型建	×			-	-	-
14	×			-	-	-			
15	17	甕	17型建	×			-	-	-
16	20	甕	17型建	イネ	柄	破損	(4.6)	3.3	2.3
17	30	台付甕	17型建	イネ	種子(頸果)	小破片	(1.7)	(1.7)	(1.3)
18	×			-	-	-			
19	31	台付甕	17型建	イネ	柄		6.1	3.4	(1.7)
20	5	甕	11型建	不明	木材		-	-	-
21	6	甕	7型建	イネ	柄		(5.4)	3.4	2.0
22				イネ	柄	一部	-	-	-
23				イネ	柄股	破片	-	-	-
24				イネ	柄股	破片	-	-	-
25				イネ	柄		(5.3)	3.3	2.2
26				イネ	柄		(5.0)	(3.3)	2.1
27				8	甕	7型建	×	-	-
28	3	甕	10型建	イネ	柄		5.7	3.5	2.3
29				イネ	柄		(5.4)	3.2	(1.7)
30				イネ	柄		5.9	3.4	(2.2)
31				-		なし	-	-	-
32				イネ	種子(頸果)	割れ	-	-	-
33				イネ	柄		(5.7)	3.5	2.3
34				イネ	柄		(6.8)	(3.4)	2.0
35	4	甕	10型建	イネ	柄		6.0	3.6	2.3
36				イネ	柄		5.6	3.2	(1.7)
37				イネ	柄		(6.4)	3.5	(1.9)
38				イネ	種子(頸果)		4.3	2.9	(1.7)
39				イネ	種子(頸果)		4.2	3.0	1.9
40				イネ	種子(頸果)		4.8	3.0	(1.7)
41				イネ	種子(頸果)		5.1	(2.8)	2.1
42	5	甕	11型建	イネ	種子(頸果)		4.6	2.8	1.9
43				イネ	柄		6.0	3.4	2.2
44				イネ	種子(頸果)	一部割れ	4.7	(3.1)	1.9
45				イネ	種子(頸果)		4.5	3.0	(1.7)
46				イネ	柄		6.4	3.1	2.1
47				イネ	柄		(5.1)	(3.1)	(2.3)
48				イネ	種子(頸果)		(4.4)	2.8	1.9
49	6	甕	11型建	イネ	種子(頸果)		(5.0)	2.8	1.8
50				イネ	柄		6.1	3.5	2.0
51				イネ	種子(頸果)	一部	-	-	-
52				不明	種実		5.3	3.3	(2.4)
53				イネ	種子(頸果)		4.5	2.9	1.9
54	3	小型甕	12型建	イネ	種子(頸果)	割れ	(2.7)	2.7	1.9
55	3	甕	13型建	×			-	-	-
56	8	甕	21型建	イネ?	種子(頸果)	広範囲の中の1ヶ所	-	-	-
57	35	甕	11型建	不明	種実?	棱線あり	(3.0)	-	(2.0)
58	20	甕	7型建	×			-	-	-
59	43	甕	11型建	イネ	種子(頸果)	割れ目	4.5	2.7	(1.9)
60	44	台付甕	11型建	イネ	柄		5.8	3.4	1.8

括弧内は残存値

第7表 四戸の古墳群出土土器の狂痕一覧(2)

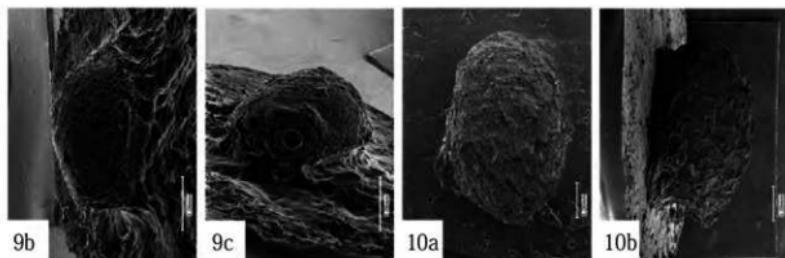
No.	土器製体番号	器種	出土遺構	同定結果			大きさ(mm)		
				分類群	部位	備考	長さ	幅	厚さ
61	12	甕	13型建	×			-	-	-
62	46	甕	17型建	×			-	-	-
63	47	甕	17型建	不明			-	-	-
64	48	甕	17型建	×			-	-	-
65				イネ	鶴		(6.2)	3.5	(1.9)
66	27	台付甕	遺外(2墳)	イネ	鶴	一部	-	-	-
67				イネ	鶴		5.5	(2.1)	2.3
68	5	甕	遺外(1墳)	イネ	鶴	一部	-	-	-
69	6	甕	遺外(1墳)	×			-	-	-
70				×			-	-	-
71	7	甕	遺外(1墳)	イネ	鶴		(5.6)	3.4	(1.9)
72	43	甕	遺外	イネ	鶴		(5.6)	3.1	(1.8)
73	44	甕	遺外	イネ	種子(頸果)		4.5	3.0	(1.6)
74				不明	茎状		-	-	-
75				×			-	-	-
76				イネ	鶴		-	-	-
77				-		76・77とその周辺のレプリカ	-	-	-
78	9	小型甕	遺外(1墳)	×			-	-	-
79				×			-	-	-
80	20224	甕	?	不明	木材		-	-	-
81	36	甕	11型建	不明	昆虫	頭部	-	-	-
82				×			-	-	-
83	12	甕	10型建	イネ	種子(頸果)		(4.6)	3.2	2.1
84	45	甕	8型建	×			-	-	-
85	45	高杯	11型建	×			-	-	-
86	11	甕	13型建	イネ	種子(頸果)		4.8	3.2	(1.5)
87	42	甕	11型建	イネ	鶴		6.5	3.4	(1.6)
88				イネ	種子(頸果)	割れ	-	-	-
89	46	高杯	11型建	イネ?	種子(頸果)		5.3	3.1	(1.4)
90				×			-	-	-
91	20232	甕		×			-	-	-
92	20233	甕	15型建	イネ	種子(頸果)	割れ	-	-	-
93	17	甕	16型建	イネ	鶴		(5.1)	3.2	2.1
94	51	-	-	×			-	-	-
95	44	甕	17型建	×			-	-	-
96	45	甕	17型建	×			-	-	-
97	50	甕	17型建	×			-	-	-
98	14	甕	21型建	イネ	鶴		(6.2)	3.1	(1.9)
99	19	甕	遺外(1墳)	×			-	-	-
100	17	甕	遺外(1墳)	イネ	鶴		(5.2)	3.1	(1.4)
101	20242	-	1墳	×			-	-	-
102				×			-	-	-
103	18	甕	遺外(1墳)	不明	種定?		(3.1)	2.2	(1.7)
104	26	甕	遺外(2墳)	×			-	-	-
105	52	甕	遺外	イネ	鶴		5.9	3.6	2.2
106	51	甕	遺外	イネ	鶴		(4.7)	3.1	(1.6)
107	58	甕	遺外	不明		植物の破片もしくは昆蟲の羽か	(5.1)	(2.1)	-
108	47	甕	遺外	×			-	-	-
109	45	甕	遺外	イネ	鶴		(4.8)	(3.6)	(2.1)
110	33	甕	遺外	×			-	-	-
111				キビ	種子(頸果)		(1.7)	1.9	1.2
112	53	甕	遺外	不明	木材		-	-	-
113	54	甕	遺外	イネ	鶴	一部	-	-	-
114	20253	-	不明	イネ	種子(頸果)	割れ	-	-	-
115	20254	不明	不明	×			-	-	-
116	20255	-	不明	×			-	-	-

括弧内は残存値



図版1 四戸古墳群出土土器の压痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真(1)

1. イネ柄(No.28: 第36図-3, 10堅建)。
2. イネ柄(No.87: 第42図-42, 11堅建)。
3. イネ柄殻(No.24: 第33図-6, 7堅建)。
4. イネ種子(頬果)(No.45: 第36図-4, 10堅建)。
5. イネ種子(頬果)(No.59: 第42図-43, 11堅建)。
6. イネ種子(頬果)(No.7: 第52図-4, 17堅建)。
7. キビ種子(頬果)(No.111: 第66図-33, 南西)。
8. アサ核(No.9: 第52図-4, 17堅建)。
9. アサ核(No.10: 第52図-4, 17堅建)。



図版2 四戸古墳群出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真(2)
9. アサ核(No.10: 第52図-4, 17号建)、10. 不明種実(No.52: 第36図-4, 10号建)

第3節 灰像分析

1. はじめに

群馬県東吾妻町に所在する四戸の古墳群で調査された弥生土器内部の灰と土師器内部の灰について、灰の母植物を明らかにする目的で灰像(植物珪酸体)分析を行った。

2. 試料

分析対象となった土器は、弥生時代後期後半の10号竪穴建物から出土した有孔鉢、同13号竪穴建物から出土した有孔鉢、同17号竪穴建物から出土した片口鉢と壺、古墳時代後期とされる15号竪穴建物から出土した壺である。試料の詳細を第8表に示す。

第8表 四戸の古墳群の灰像分析試料一覧表

試料	種類	器種名	採取箇所	出土場所	時期	備考
No 1	弥生上器	有孔鉢	内面側部	10号竪穴建物	後期後半	第36図-8
No 2	弥生上器	有孔鉢	底部穿孔部	13号竪穴建物	後期後半	第45図-10
No 3	弥生上器	片口鉢	内面側部	17号竪穴建物	後期後半	第56図-37
No 4	弥生上器	片口鉢	内面側部	17号竪穴建物	後期後半	第56図-37
No 5	弥生土器	壺	内面側部	17号竪穴建物	後期後半	第53図-5
No 6	土師器	壺	内面側部	15号竪穴建物	後期	第81図-17

4. 結果

観察結果を第9表に示す。

第9表 四戸の古墳群の灰像(植物珪酸体)分析結果

分類群(和名・学名)	No 1	No 2	No 3	No 4	No 5	No 6
イネ科 キビ族型	Gramineae (Grasses) <i>Panicace type</i>	△	-	-	△	△
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	△	-	-	△	-
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	△	△	△	△	△
クサクサ族型	<i>Andropogonace type</i>	△	-	△	-	-
タケ亜科	<i>Bambusoideae (Bamboo)</i>	-	-	-	-	-
ネザサ節型	<i>Pleioblastus sect. Nezasa</i>	-	-	-	○	△
メダケ節型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>	△	△	-	-	-
未分類等	Unknown	△	△	△	△	△

○: 多く検出、○: 検出、△: 少量検出

1) 試料No 1 (10号竪穴建物 第36図-8 有孔鉢)

検出された植物珪酸体は、キビ族型、ヨシ属、スキ属型、ウシクサ族型、タケ亜科メダケ節型の機動細胞珪酸体および未分類である。いずれの分類群も少量である。

2) 試料No 2 (13号竪穴建物 第45図-10 有孔鉢)

スキ属型とタケ亜科メダケ節型の機動細胞珪酸体および未分類が検出されたが、いずれも少量である。

3) 試料No 3 (17号竪穴建物 第56図-37 片口鉢上部)

スキ属型とウシクサ族型の機動細胞珪酸体および未分類が検出されたが、いずれも少量である。

4) 試料No 4 (17号竪穴建物 第56図-37 片口鉢下部)

キビ族型、スキ属型、タケ亜科ネザサ節型の機動細胞珪酸体と未分類が検出された。いずれの分類群も少量である。

5) 試料No 5 (17号竪穴建物 第53図-5 壁)

タケ亜科メダケ節型の機動細胞珪酸体がやや多く検出された。他には、キビ族型、ヨシ属、スキ属型、ウシクサ族型、タケ亜科ネザサ節型の機動細胞珪酸体および未分類が少量検出された。

6) 試料No 6 (15号竪穴建物 第81図-17 壁)

スキ属型とタケ亜科メダケ節型の機動細胞珪酸体および未分類が少量検出された。

5. 考察

弥生時代後期後半および古墳時代後期の竪穴建物跡から出土した土器に付着した灰の母植物を調べた結果、10号竪穴建物出土有孔鉢内の灰(試料No 1)には、イヌビエ属・エノコログサ属などのキビ族型、ヨシ属、スキ属型、ウシクサ族型、タケ亜科メダケ節型の葉身の機動細胞に形成される植物珪酸体が含まれていた。いずれも量的に少なく、珪化細胞組織は分解されていた。こうしたことから、何らかの目的を持ってこれらの植物が土器内部で焼成されたか、あるいは外部で焼成された後に土器内に入れられたか混入したとみられる。

13号竪穴建物出土有孔鉢内の灰(試料No 2)には、スキ属型とタケ亜科メダケ節型の葉身の機動細胞に形成される植物珪酸体が、17号竪穴建物出土片口鉢内上部の灰(試料No 3)には、スキ属型とウシクサ族型の葉身の機動細胞に形成される植物珪酸体が、17号竪穴建物出土片口鉢内下部の灰(試料No 4)には、キビ族型、スキ属型、

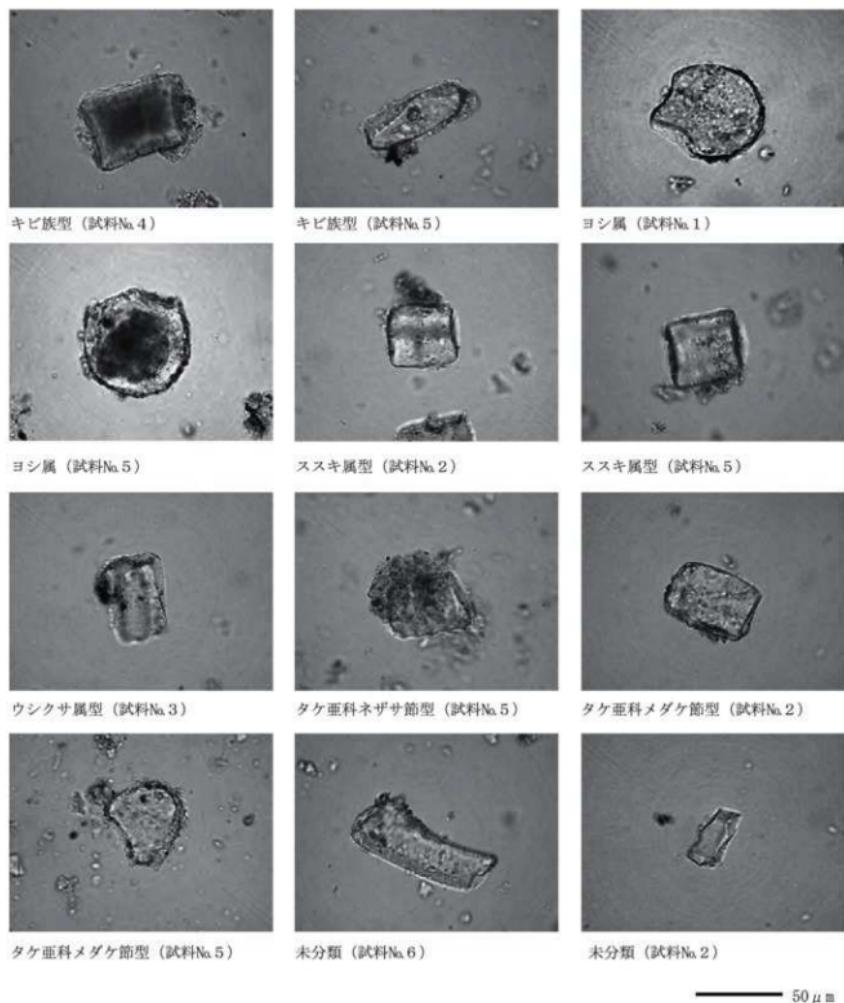
タケ亜科ネザサ節型の機動細胞に形成される植物珪酸体が、17号竪穴建物出土壺内の灰(試料No 5)には、キビ族型、ヨシ属、スキ属型、ウシクサ族型、タケ亜科ネザサ節型、タケ亜科メダケ節型の機動細胞に形成される植物珪酸体が、15号竪穴建物出土壺内の灰(試料No 6)には、スキ属型とタケ亜科メダケ節型の機動細胞に形成される植物珪酸体が含まれていた。10号竪穴建物出土有孔鉢同様、これらの植物が土器内で焼成されたか、あるいは外部で焼成された後に土器に入れられたか混入したとみられる。

これらイネ科植物の葉身の利用に関しては、除湿目的や着火材、燃焼材、屋根材、壁材、敷物などに使用された可能性が考えられるが、ここでの用途については不明である。

なお、栽培植物に由来する植物珪酸体(イネ、ムギ類、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、キビ属型(キビが含まれる)、ジュズダマ属型(ハトムギが含まれる)、オヒシハ属(シコクヒエが含まれる)、モロコシ属型、トウモロコシ属型など)は、いずれの試料からも検出されなかった。このことから、イネ科栽培植物が利用された可能性について言及することはできない。また、イネ科の植物珪酸体も検出されていないことから、イネ科が入っていた可能性は認められない。

参考文献

- 杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オバール)、考古学と植物学、同成社、p.189-213。
- 杉山真二・藤原宏志(1986)機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—、考古学と自然科学、19, p.69-84。
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志(1988)機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追跡のための基礎資料として—、考古学と自然科学、20, p.81-92。
- 藤原宏志(1996)プラント・オバール分析法の基礎的研究(I)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—、考古学と自然科学、9, p.15-29。



図版3 四戸の古墳群の植物珪酸体

第4節 赤色顔料分析

志賀 智史(九州国立博物館)

1. はじめに

群馬県吾妻郡東吾妻町にある四戸の古墳群から出土した赤色顔料について分析調査を行った。調査資料は、古墳群下層の弥生時代後期の竪穴建物から出土した赤彩土器と古墳時代後期の1号古墳から出土した赤彩ある家形埴輪である。

これまでの調査によって弥生時代～古墳時代の出土赤色顔料は、水銀を主成分とする朱(化学組成はHgS)、鉱物名称は辰砂(Cinnabar,HgS)と、赤色の酸化鉄を主成分とするベンガラ(化学組成は $\alpha\text{-Fe}_2\text{O}_3$)、鉱物名は赤鉄鉱(Hematite)等の二種類が知られている。

2. 調査方法

調査は、最初に遺物保管場所を訪問し、白色光を用いて目視と持続型实体顕微鏡(20倍)で資料を直接観察し、現状を把握した。分析資料の採取は、筆者が行なった。採取資料は、赤彩土器6点と赤彩埴輪2点の計8点となった。これらの資料を持ち帰り、次に述べる詳細な分析調査を行い、各調査結果から総合的に判断して赤色顔料の種類を判別した。

(1)顕微鏡観察

顕微鏡観察は赤色物の有無、付着状況、二種類の赤色顔料や遺跡土壤の混在状況、粒子形態、有機物の有無等を知るために行った。調査前に資料を自然乾燥させた。

実体顕微鏡(7~100倍)では、白色光に近い光で資料を直接観察し、遺物保管場所での調査所見を再確認した。赤色顔料が塊状に遺存する場合、朱はショッキングピンク色～オレンジ色に、ベンガラは暗赤色等に見える。

生物顕微鏡(50~1000倍)では、実体顕微鏡での観察結果をふまえ、合成樹脂オイキットを用いてプレパラートに封入した資料を、側射光及び透過光を用いて観察した。側射光では朱はルビー色の樹脂状光沢を持つ透き通った粒子に、ベンガラは暗赤色等の微粒子で、直径約1 μmのパイプ状、螺旋状、不定形等の粒子が観察される。

(2)蛍光X線分析

主成分元素を知るために行った。朱はHg(水銀)が、ベ

ンガラはFe(鉄)が検出される。資料をそのままの状態で測定したため、ベンガラの場合は、遺跡土壤や土器胎土に含まれているFeとの区別は困難である。その他の元素についても遺跡土壤由来の元素との区別は困難である。

測定には、据置型のHORIBA XGT-5200 (Rh, 50kv, 100s, SDD, 測定径約100 μm, 検出器付近真空, 検出元素Na-U)を用いた。

(3)X線回折

一部の資料について、結晶構造を知るために行った。朱は辰砂(Cinnabar,HgS)が、ベンガラは赤鉄鉱(Hematite, $\alpha\text{-Fe}_2\text{O}_3$)が同定される。資料をそのままの状態で測定したため、土器胎土に含まれる鉱物も検出されている。また、分析資料が微量であったため測定時の資料の混入を防ぐため、資料を薬包紙に乗せた状態で測定を行っており、10°~26°付近で紙由来の二つのピークが検出されている。

測定には、RIGAKU RINT Ultima III (Cu, 40kV, 40mA, 平行法)を用いた。

3. 調査結果のまとめと考察

調査結果を第10表に示す。特徴的な写真とグラフを第165~167図に示す。

弥生土器(資料1~6)の赤彩は、外面と口縁部内面といった見える部分にのみ行われている。埴輪(資料7~8)の赤彩は、沈線による区画文部分にラフに行われている。

赤色層は、いずれも胎土とは明瞭に異なる色調で、器面にしっかりと付着しており、特に弥生土器は表面研磨前に赤彩がなされており、土器焼成前に赤色顔料が塗布されていると考えられる。

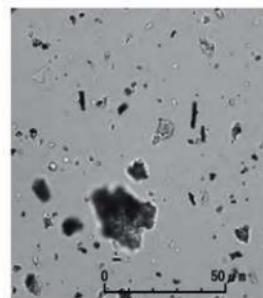
赤色顔料の種類は、生物顕微鏡観察でベンガラ特有の粒子を認め(第165図)、蛍光X線分析でFeを検出した(第166図)ため、ベンガラと判断した。X線回折では一般的なベンガラの鉱物組成である赤鉄鉱を同定した(第167図)。

ベンガラの粒子形態は、パイプ状粒子が含まれていた(以下、ベンガラ(P))。資料4と資料6のパイプ状粒子は十分な量が確認できたが、これら以外の資料でのパイプ状粒子は非常に微量で発見し辛かった。この差が何を意味するかは不明である。経験的に赤彩土器や赤彩埴輪に用いられたベンガラの粒子形態の判別は大変難しいことが多い。

ベンガラに含まれるパイプ状粒子については、川や池の濁みに棲む鉄細菌が原料であることが明らかになっており(岡田1997)、日本国内ではオーソドックスなベンガラである。

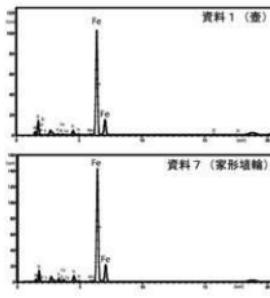
群馬県内の弥生時代～古墳時代の赤彩土器・赤彩埴輪に採用された赤色顔料については、これまでの調査結果から全てベンガラであることが判明している(志賀2015・2016・2019)。この傾向は、全国的にも一致している。また、ベンガラには、今回検出したベンガラ(P)だけでなく、鉄鉱石・赤土素材と推定される不定形粒子だけで構成されたベンガラ(不定形)や、鉄細菌素材の螺旋状粒子を含むベンガラ(R)も検出されている。現在、その形態と出土地域、時期、土器の系統などとの関連性や採用の背景を知るために、分析調査を行っている。

今回の調査結果は、これまで調査事例の少なかった群馬県北西部の吾妻地域での赤彩土器・赤彩埴輪で採用されたベンガラの様相を知る上で貴重なものとなった。

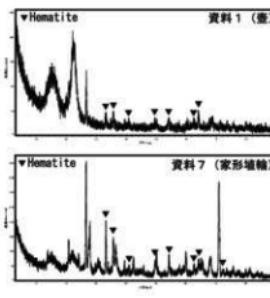


第165図 資料4(鉢)のベンガラ
(透過光500倍)

ベンガラには直径約1 μmのパイプ状粒子が含まれていた。



第166図 蛍光X線スペクトル図
主成分はFe(鉄)で、他にベンガラに由来する特徴的な元素は認められなかった。



第167図 X線回折図
赤鉄鉱(Hematite)以外にベンガラに由来する特徴的な鉱物は認められなかった。10°～25°付近の幅広のピークは、葉包紙による。

第10表 四戸の古墳群出土の赤色顔料分析結果一覧

資料	遺構	遺物	辨別	時期	調査方法		各分析結果			赤色顔料の種類	備考
					顕微鏡	X RF	回折	生物顕微鏡	XRF		
1	17号竪穴建物	壺(外面)		第52図-2	赤・後・後	○	○	○	○	ベンガラ(P)	Fe 赤鉄鉱 ベンガラ(P) パイプ状粒子は極微量
2	17号竪穴建物	壺(外面)		第53図-5	赤・後・後	○	○	○	—	ベンガラ(P)	Fe — ベンガラ(P) パイプ状粒子は極微量
3	17号竪穴建物	高杯(外面)		第56図-27	赤・後・後	○	○	○	—	ベンガラ(P)	Fe — ベンガラ(P) パイプ状粒子は極微量
4	11号竪穴建物	壺(外面)		第42図-33	赤・後・後	○	○	○	—	ベンガラ(P)	— ベンガラ(P)
5	11号竪穴建物	高杯(外面)		第41図-18	赤・後・後	○	○	○	—	ベンガラ(P)	Fe — ベンガラ(P) パイプ状粒子は極微量
6	11号竪穴建物	高杯(外面)		第41図-20	赤・後・後	○	○	○	—	ベンガラ(P)	Fe — ベンガラ(P)
7	1号古墳	家形埴輪(外面)		第126図-197	古・後・中	○	○	○	○	ベンガラ(P)	Fe 赤鉄鉱 ベンガラ(P) パイプ状粒子は極微量
8	1号古墳	家形埴輪(外面)		第127図-202	古・後・中	○	○	○	—	ベンガラ(P)	Fe — ベンガラ(P) パイプ状粒子は極微量

第5節 塗輪の顔料分析

1. はじめに

吾妻郡東吾妻町大字三島地内に所在する四戸の古墳群から出土した塗輪に付着する顔料について、各種分析を行い、顔料の種類を検討した。

2. 試料と方法

分析対象は、1号墳より出土した鞍形埴輪に付着する青色および白色顔料である(第11表、図版4-1a、5-1a、2-2a)。鞍形埴輪とみられる破片は多数出土しており、今回の破片3点が同一個体かは不明であるが、いずれも同じ構造の鞍形埴輪の破片とみられている。なお、青色顔料は、出土埴輪の中でも鞍、盾、柄に確認されている。埴輪の時期は、6世紀後半とみられている。埴輪30168は、多少の凹凸はあるものの、比較的平坦な面に青色顔料(分析No. 1)と白色顔料(分析No. 2)の両方が付着していたため、元素マッピング分析を行って元素の分布を調査した。また、埴輪30169からは青色顔料(分析No. 3)を、埴輪30149からは白色顔料(分析No. 4)を、それぞれ少量採取して蛍光X線分析およびX線回折分析の試料とした。

【元素マッピング分析】

元素マッピング分析には、蛍光X線分析装置の一種である株式会社堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000Type IIを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1.00mAのロジウム(Rh)ターゲット、X線ビーム径が100μmまたは10μm、X線検出器は高純度Si検出器で、検出可能元素はナトリウム(Na)～ウラン(U)であるが、ナトリウム、マグネシウム(Mg)といった軽元素は蛍光X線分析装置の性質上、検出感度が悪い。本装置は、試料ステージを走査させながらの測定により、元素マッピング分析が可能となる。

測定は、青色顔料(分析No. 1)と白色顔料(分析No. 2)の付着する面に対して、非破壊で行った。測定条件は、管電圧15kV、管電流1.00mA、ビーム径100μm、測定時間3000sを10回走査に設定した。

【蛍光X線分析】

蛍光X線分析には、元素マッピング分析に使用した

XGT-5000Type IIを使用して、X線ビーム径100μmでポイント分析を行った。

測定試料として、青色顔料(分析No. 3)と白色顔料(分析No. 4)をそれぞれ実体顕微鏡下で、セロハンテープに極微量採取した。測定条件は、管電圧50kV、管電流自動設定、ビーム径100μm、測定時間500sに設定した。定量分析は、ノンスタンダードFP法による半定量分析を装置付属ソフトで行った。

【X線回折分析】

X線回折分析には、株式会社リガク製X線回折装置MiniFlex600を使用した。装置は、X線管が銅(Cu)ターゲット、検出器が一次元半導体検出器(D/teX Ultra)を使用している。

測定試料として、青色顔料(分析No. 3)と白色顔料(分析No. 4)をそれぞれ実体顕微鏡下で、少量採取した。採取した試料は、無反射試料板の上に置き、イオン交換水を少量滴下して分散させた後、乾燥させて簡易的な定方位試料を作製し、分析試料とした。測定条件は、40kV、15mA、入射ソーラスリット2.5°、入射高さ制限スリット10.0mm、発散スリット1.250°、散乱スリット8.0mm、受光ソーラスリット2.5°、受光スリット13.0mm(Open)、Kβ フィルタにNi0.03mm、走査速度2.0°/min、ステップ幅0.02°、走査範囲3°～70°、蛍光X線減モードに設定し、回転試料台で試料を回転させつつ測定した。

さらに通常の測定後、測定試料にエチレン glycol 10%水溶液を噴霧し、適度な半乾き状態にしてエチレン glycol(EG)処理試料を作製し、再度測定して粘土鉱物に由来すると考えられるピークの変化を確認した。EG処理試料の測定条件は、通常測定と同様だが、走査範囲は3°～35°とした。

なお、X線回折分析では、斜長石(曹長石や灰長石など)や、粘土鉱物の雲母(セリサイト、イライト、セラドナイト、海緑石など)、緑泥石(クリノクロア、シャモサイトなど)などの細分は容易ではなく、回折パターンの図中では一例として典型的な鉱物のピークを示すが、考察では斜長石、雲母、緑泥石といった総称を用いた。

3. 結果

分析No. 1、2の元素マッピング分析により得られた、アルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、リン(P)、硫黄(S)、カ

リウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)のマッピング図を、図版4-1aに示す。なお、一部元素のマッピング図は強調処理を施している。

また、分析No. 3と4の蛍光X線分析により得られたスペクトルおよびFP法による半定量分析結果を、第168図4-1a、2aに示す。2点とも、ケイ素(Si)、アルミニウム(Al)、カリウム(K)、鉄(Fe)が主に検出され、他にリン(P)、硫黄(S)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)が検出された。

さらに、分析No. 3と4のX線回折分析により得られた回折パターンを、第168図-1b、2bに示す。2点とも、 6.2° (14 \AA)、 8.8° (10 \AA)、 12.5° (7 \AA)といった位置に、粘土鉱物の底面反射に由来すると考えられる明瞭なピークが検出された。また、EG処理による底面反射の膨張はみられなかった。ほかに、石英(Quartz)、斜長石(図では曹長石Albite)と一致するピークが、粘土鉱物のピークほど明瞭ではないが検出された。

また、分析No. 1～4の実体顕微鏡画像を図版4-1b、5-1b、5-2bに、分析No. 3と4の採取試料の生物顕微鏡観察により得られた画像を図版5-1c、5-2cに示す。

4. 考察

元素マッピング分析では、青色部、白色部とともにケイ素(Si)とカリウム(K)の輝度が、胎土よりも若干ではあるが高い傾向がみられた。その一方で、元素マッピング分析、蛍光X線分析、X線回折分析とともに、青色顔料と白色顔料の化学組成上の明瞭な差異はみられなかった。

両顔料の成分について、X線回折分析の結果を基に検討する。X線回折分析では、 8.8° (10 \AA)に明瞭なピークが検出され、EG処理でもピークが変化していないため、雲母粘土鉱物(図では金雲母Phlogopite)が含まれていると考えられる。また、 6.2° (14 \AA)の明瞭なピークは、EG処理ではピークは変化せず、かつ 12.5° (7 \AA)などに高次反射とみられる高いピークがみられるため、緑泥石(図ではクリノクロアClinochlore)のピークの可能性が高いと推定される。以上、雲母、緑泥石といった粘土鉱物に、石英、斜長石といった造岩鉱物が、顔料から検出された。

朽津・川野邊(2000)では、九州地方の装飾古墳に使用されている緑または青とされる顔料について、緑土とよ

ばれる緑色顔料がほぼ單一の緑色物質の集合体であるのに対し、青色(灰色)顔料は雲母類と思われる粘土鉱物や石英、長石を含む多結晶の集合体であるとした。なお、この青色顔料について朽津・川野邊(2000)では、分光光度計による測色の結果より、青というよりも灰と呼ぶ方が妥当ではないかと提唱している。

今回、対象となった鞍形埴輪に付着する青色顔料も、彩度が低く、粘土鉱物に石英、斜長石といった鉱物が混ざっており、顕微鏡観察においても單一ではなく、様々な鉱物を含む様子が観察されるため、九州地方の装飾古墳に使用されている青色(灰色)顔料に近い物質ではないかと考えられる。なお、今回の試料からは、雲母だけではなく、おそらく緑泥石とみられる粘土鉱物も顕著に検出されており、緑泥石も色調に影響を与える可能性がある。また、今回の分析では、青色部分と白色部分に化学組成上の明確な差異がみられなかった。種類としては、それぞれ青色(灰色)粘土、白色粘土と考えられるが、粘土鉱物を特定しきれなかったため、色調の違いが何に起因するのか、課題が残った。

5. おわりに

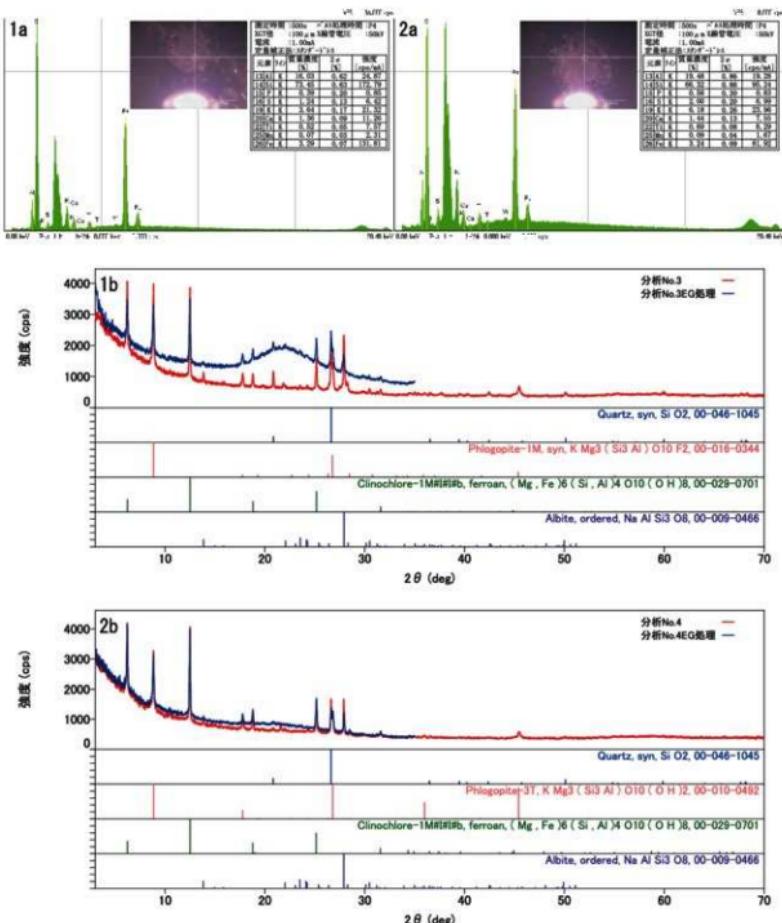
四戸の古墳群の1号墳から出土した、6世紀後半の鞍形埴輪に付着する顔料について分析した結果、青色顔料、白色顔料とともに、主に雲母、緑泥石といった粘土鉱物が検出され、ほかに石英、斜長石も検出された。それぞれ、青色粘土、白色粘土と考えられる。

引用・参考文献

- 朽津伸明・川野邊涉(2000)九州装飾古墳の緑と「青」について—福岡県下の例—、保存科学、39、24-32、東京文化財研究所。
- 朽津伸明・中牟田義博・三木孝(2003)日本における緑色顔料「緑上」の使用について、考古学と自然科学、46、55-66、日本文化財科学会。
- 成瀬正和(2013)装飾古墳の色料について、古墳壁画の保存活用に関する検討会 装飾古墳ワーキンググループ(第6回)資料。
- 日本粘土学会編(2009)粘土ハンドブック第三版、990p、技報堂出版。
- リガク編(2010)X線回折ハンドブック、243p、リガク。

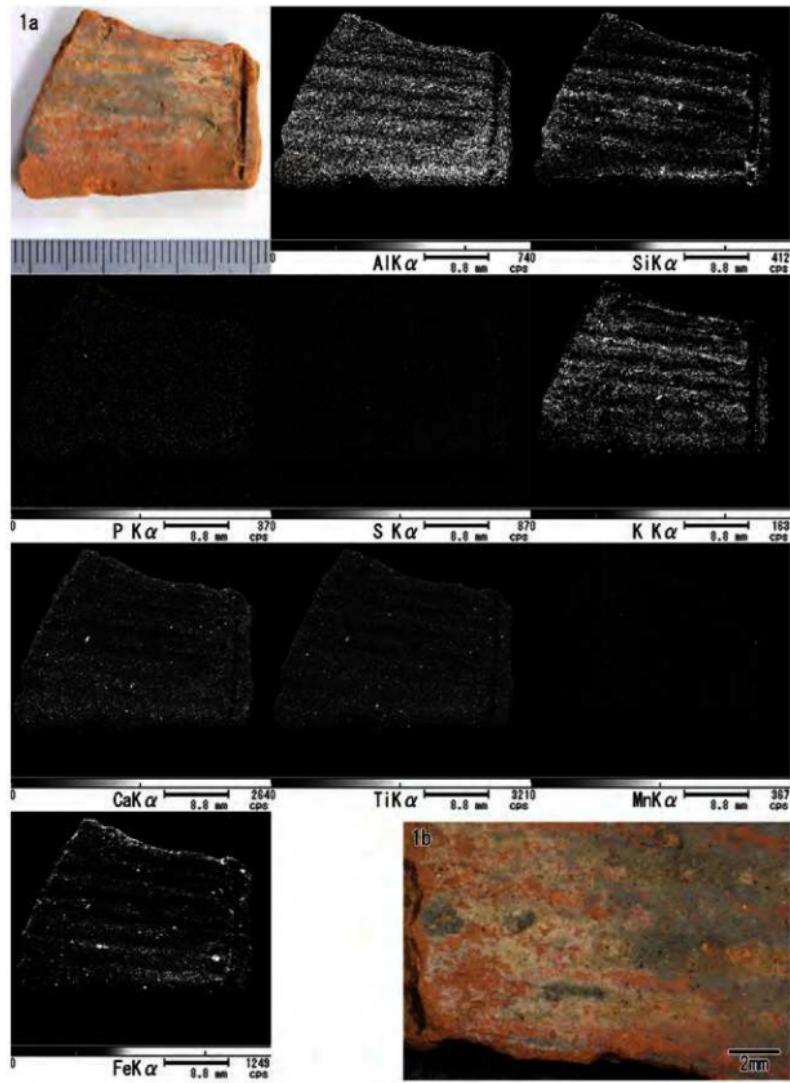
第11表 塗輪の顔料分析対象一覧

分析No.	色	種類	器種	部位	試料番号	出上場所	時期	分析項目
1	青	塗輪	輪形	翼部片	30168	1号墳	6世紀後半	顔料付着面の元素マッピング分析
2	白				30168			顔料付着面の元素マッピング分析
3	青				30169			青色顔料を少量採取して蛍光X線およびX線回折分析
4	白				30149			白色顔料を少量採取して蛍光X線およびX線回折分析

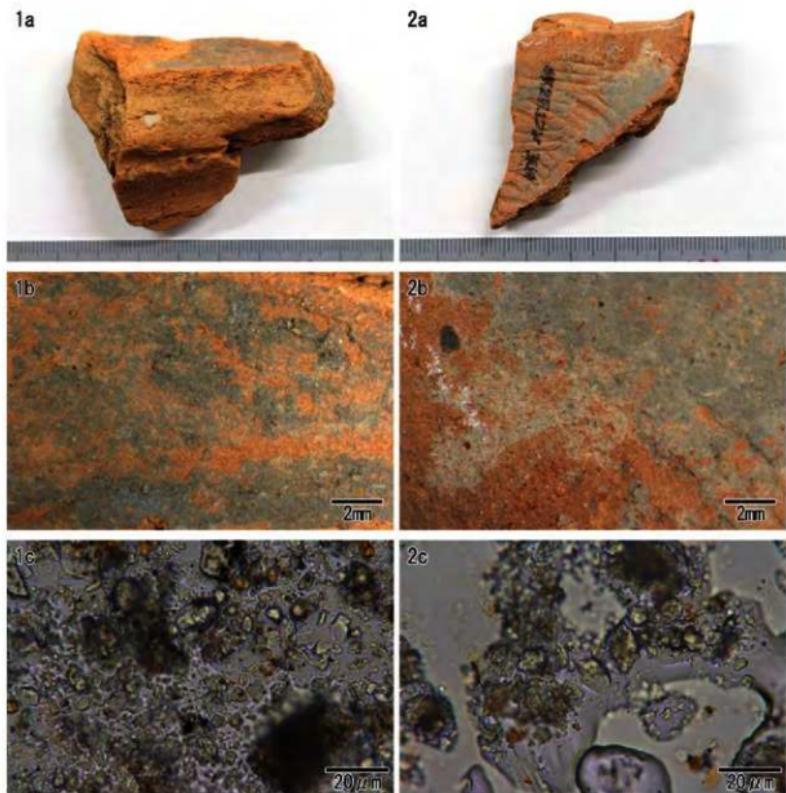


第168図 蛍光X線分析結果(a)とX線回折分析結果(b)

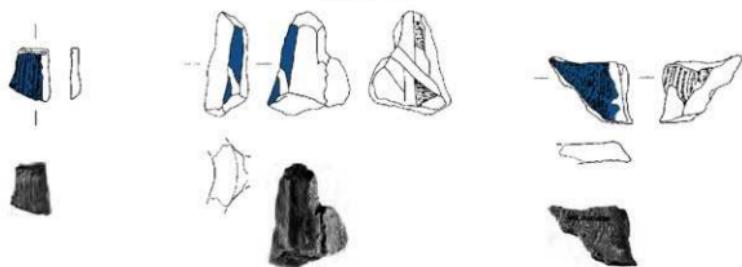
1. 分析No. 3 2. 分析No. 4



図版4 分析No. 1、2の元素マッピング図(a)と実体顕微鏡写真(b)
Al:アルミニウム(強調処理) Si:ケイ素(強調処理) P:リン S:硫黄 K:カリウム(強調処理)
Ca:カルシウム Ti:チタン Mn:マンガン Fe:鉄(強調処理)



分析試料図・写真



図版5 分析対象遺物写真(a)、実体顕微鏡写真(b)、採取試料の生物顕微鏡写真(c)

1. 分析No. 3 2. 分析No. 4

0 1:3 10cm

第6節 土師器・埴輪の薄片作製 胎土分析

はじめに

群馬県吾妻郡東吾妻町に所在する四戸の古墳群は、吾妻川中流域の温川との合流点付近右岸に形成された狭小な段丘上に位置する。段丘の表層にはいわゆる関東ローム層の被覆は認められておらず、完新世に形成された段丘とされている(群馬県, 2003)。本分析調査では、古墳または周囲の遺構より出土した土師器および古墳より出土した埴輪の材質(胎土)に着目し、その特性を明らかにすることによって、当該期の土器や埴輪の製作に関わる資料を作成する。

1. 試料

試料は、四戸の古墳群から出土した古墳時代の土師器片6点と埴輪片6点の計12点である。各試料には試料No. 1～12が付されており、No. 1～6は土師器片、No. 7～12は埴輪片である。土師器の器種の内訳は杯が4点、甕と高杯が1点ずつ、埴輪はいずれも円筒埴輪である。試料の一覧を第12表に示す。

2. 分析方法

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用いて観察し、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成等を明らかにした。

なお、土器胎土および赤玉の薄片のデータの表示は、松田ほか(1999)が示した仕様に従う。砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細織～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを表示する。

3. 結果

結果を第13表、第169～172図に示す。胎土中の碎屑物について、鉱物・岩石の種類構成、粒径組成、碎屑物の割合の順に述べる。

a) 鉱物・岩石

土師器片6点は、いずれも石英と斜長石の鉱物片を比較的多く含み、白雲母と黒雲母および不透明鉱物を少量または微量伴うことが特徴である。しかし、それ以外の鉱物片や岩石片の種類には、試料によって若干の違いが認められる。

No. 1は、鉱物片では斜方輝石と角閃石を微量含み、岩石片では流紋岩・デイサイトを比較的多く含むことが特徴であり、チャートおよび凝灰岩も極めて微量含まれる。No. 2も鉱物片では斜方輝石と角閃石を微量含むが、岩石片では流紋岩・デイサイトに加えて安山岩も含み、極めて微量の溶結凝灰岩や花崗岩類などの岩石片も含まれる。No. 3は鉱物片では斜方輝石は含まれるが、角閃石は含まれない。岩石片では多結晶石英が比較的多いが、流紋岩・デイサイトは極めて微量である。No. 4は鉱物片では斜方輝石と单斜輝石を含むが、角閃石は含まれない。また、岩石片では多結晶石英が比較的多いが、他に頁岩、砂岩、凝灰岩、溶結凝灰岩なども微量または極めて微量含まれる。No. 5は鉱物片では斜方輝石と单斜輝石および角閃石が含まれ、岩石片では流紋岩・デイサイトと安山岩および頁岩が微量含まれる。No. 6は、鉱物片ではNo. 5と同様に斜方輝石と单斜輝石および角閃石が含まれるが、岩石片では多結晶石英が比較的多く、他に頁岩、砂岩、凝灰岩、溶結凝灰岩、流紋岩・デイサイト、安山岩および花崗岩類まで多種類の岩石片が微量または極めて微量含まれる。

埴輪片6点の試料は、ほぼ同様の鉱物・岩石組成を示す。いずれも石英の鉱物片と結晶片岩の岩石片を多く含むことが特徴であり、他に少量の白雲母の鉱物片や微量のカリ長石や斜長石および角閃石などの鉱物片を含む。

b) 粒径組成

土師器も埴輪も全点ともに極細粒砂の割合が最も高い。次いで割合の高い粒径は、多くの試料で細粒砂であるが、土師器のNo. 2と埴輪のNo. 9およびNo. 10は極細粒砂に次いで中粒砂の割合が高く、土師器のNo. 1と

No. 6 では細粒砂と中粒砂の割合が等しい。

c) 砕屑物の割合

土師器試料では、No. 1～3、6 の 4 点が 20% 前後であり、No. 4 と No. 5 はそれより若干低い 15% 程度である。埴輪試料では、No. 9～11 の 3 点が 20% 弱の値を示し、No. 7 と No. 8 は 25% 程度、No. 12 は 30% 程度を示す。

4. 考察

本分析調査では、まず土師器と埴輪との間で、胎土中に含まれる砕屑物の鉱物や岩石の種類構成が大きく異なることが確認された。一般に胎土中の鉱物や岩石は、材料となった粘土や砂の採取地の地質学的背景を反映していると考えられるから、土師器と埴輪とでは、その材料採取地が、ひいてはその製作地が全く異なる地域であることが推定される。一方で、土師器試料 6 点の間では、共通した種類の鉱物片や岩石片が認められることから、その材料採取地および製作地は互いに近接した地域内にあることが推定され、埴輪については、粒径組成や砕屑物の割合のばらつきも少ないと考慮すれば、おそらく 1ヶ所で作られたものである可能性が高いと考えられる。

ここで土師器試料の胎土から推定される地質学的背景について考えてみたい。土器の材料となる砂の由来は河川砂などが想定されることが多いが、その場合の砂の鉱物組成は、物理的化学的に風化変質に対する抵抗性の高い石英が相対的に多く含まれる組成となる。本分析調査の土師器試料における石英の多い組成はこのことを示していると考えられる。また、石英に次いでまたは試料によっては石英と同量程度に多く含まれる斜長石は、斜長石が多量に含まれるような地質学的背景を有する地域の砂に由来することを示唆している。斜長石が多量に含まれるような地質学的背景とは、凝灰岩や流紋岩・デイサイトや安山岩および溶結凝灰岩などの土師器試料の胎土に含まれる岩石片の種類を考慮すれば、おそらく火山噴出物が広く分布することであると考えられる。

中野ほか(1998)により、四戸の古墳群周辺の地質分布を確認することができるが、吾妻川上流域の両岸には新第三紀鮮新世の火山岩類や第四紀中期更新世の火砕流堆積物が広く分布し、四戸の古墳群のすぐ下流側には右岸に広く榛名火山の火山麓扇状地堆積物が広がる。これらの地質分布から、四戸の古墳群出土の土師器は、いず

れも近傍の吾妻川流域で作られた可能性が高いと考えられる。試料によって鉱物組成や岩石組成が若干異なっているのは、より局所的な材料採取地の違いを示唆していると考えられる。現時点では、材料採取地の違いが製作場所や製作集団の違いを示しているかどうかは不明である。今後、吾妻川流域での土師器の分析事例を蓄積することにより、製作地域の絞り込みも期待される。

埴輪試料の胎土の第一の特徴は、多量に含まれる結晶片岩の岩石片である。結晶片岩は、岩石の中では物理的な風化変質に対してやや脆弱な性質であることから、河川砂中に多量に含まれるとすれば、結晶片岩の分布域近傍の河川砂であることが想定される。上述した中野ほか(1998)では、結晶片岩の分布域は吾妻川流域には認められず、四戸の古墳群から最も近い分布域としては群馬県南西部の関東山地に中生代ジュラ紀の変成岩帶である三波川帯を認めることができる。三波川帯の分布する神流川流域の下流域に位置する藤岡市には、本郷埴輪窯跡に代表される埴輪の製作地が確認されていることも考慮すれば、四戸の古墳群出土埴輪は神流川下流域で製作されて搬入されたものである可能性が高いと考えられる。今後、吾妻川流域およびその周辺に分布する古墳出土の埴輪の胎土分析を行うことにより、藤岡地域作製の埴輪の分布域を確認することが可能となり、群馬県内の埴輪供給状況を示す重要な資料の作成につながることが期待される。

引用文献

- 群馬県、1993.1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図) 中之条。
- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高、1999、瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の觀察—岩石学的・堆積学的による—、日本文化財科学会第16回大会発表要旨集、120-121。
- 中野 俊・竹内圭史・加藤研一・酒井 利・濱崎恵志・広島俊男・飼澤正夫、1998、20万分の1地質図幅、長野、地質調査所。

第12表 薄片作製胎土分析試料一覧

No.	種類	器種名	部位名	出土場所	時期	法量(幅)	法量(高)	備考(分類等)	測定番号
1	土師器	内窓口縁杯	口辺部	6号堅建	5世紀後半	6.5	5		第173回-1
2	土師器	内窓口縁杯	口辺部	5号堅建	5世紀後半	7	3.5		第173回-2
3	土師器	須恵器模倣杯	口辺部	1号埴石室裏込顔方	6世紀前半	4.5	3.5		第173回-3
4	土師器	輪広内窓口縁杯	口辺部	1号埴東斜面	6世紀後半?	7	4		第173回-4
5	土師器	甕	口辺部	2D-44Gr.2面	6世紀後半	8	5		第173回-5
6	土師器	高杯	脚部	5区東斜面	5世紀中頃	5.5	8		第173回-6
7	埴輪	円筒	胴部	1号墳Eトレチ	6世紀後半	8	5	ハケメA類	第173回-7
8	埴輪	円筒	胴部	1号埴東斜面	6世紀後半	8.5	4	ハケメC類	第173回-8
9	埴輪	円筒	口辺部	1号埴東斜面	6世紀後半	4.5	5	ハケメB類	第173回-9
10	埴輪	円筒	胴部	1号墳No.30	6世紀後半	7.5	8	ハケメC類	第173回-10
11	埴輪	円筒	胴部	1号墳No.73	6世紀後半	11	7	ハケメB類	第173回-11
12	埴輪	円筒	口辺部	1号墳周壁	6世紀後半	7	5	ハケメA類	第173回-12

第13表 薄片作製胎土分析試料観察結果(1)

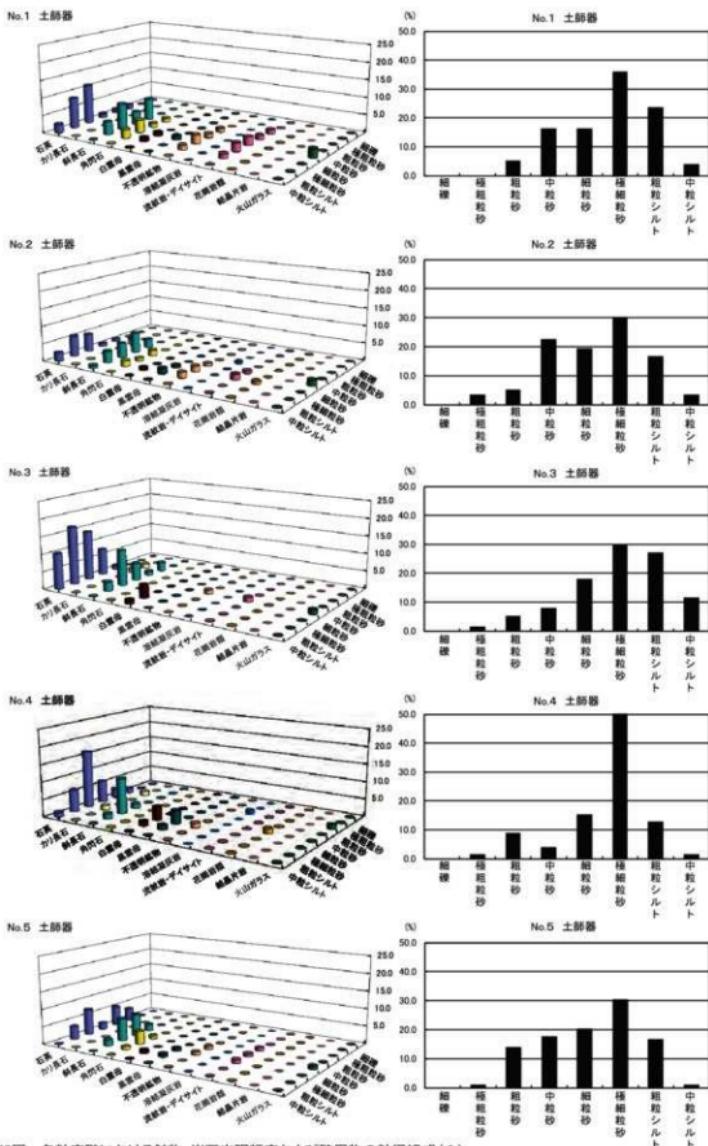
No.	砂粒区分	砂粒の種類構成												合計													
		石英	斜長石	斜方輝石	单斜輝石	角閃石	白雲母	黑雲母	ジルコン	不明透光物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	花崗岩類	結晶片岩	ホルンブッシュ	軽石英	珪質岩	珪化岩	火山ガラス	固質物	酸化鉄核	粘土塊	植物珪化体		
1	細繊																									0	
	極粗粒砂																									0	
	粗粒砂	1									1					1									1	4	
	中粒砂	1	5	1	1						1				1										1	13	
	細粒砂	1	3	1	1						1				2										2	13	
	極細粒砂	9	6	1	3						1	1			2										1	29	
	粗粒シルト	7	3		2		1			1				1											3	19	
2	中粒シルト	2																								1	3
	基質																									343	
	孔隙																									16	
	備考	基質は粘土鉱物により埋められる。火山ガラスは軽石型。																									
	細繊																									0	
	極粗粒砂																									0	
	粗粒砂	1									1															3	
3	中粒砂	1	5	1	1						1				1										12	27	
	細粒砂	1	3	1	1						1				2										6	23	
	極細粒砂	9	6	1	3						1	1			2										1	36	
	粗粒シルト	7	4	1	2		1	2		2					1										1	20	
	中粒シルト	3	1																							4	
	基質																									431	
	孔隙																									22	
4	備考	基質は褐色粘土、セリサイト、酸化鉄などで埋められる。火山ガラスは軽石型。																									
	細繊																									0	
	極粗粒砂																									1	
	粗粒砂	1	2	1																						4	
	中粒砂	1	1	1	1																					6	
	細粒砂	6	4							1					1										14		
	極細粒砂	11	8	1											3											23	
5	粗粒シルト	13	2	2						3															1	21	
	中粒シルト	8								1															9		
	基質																									305	
	孔隙																									9	
	備考	基質は褐色粘土、セリサイト、酸化鉄などで埋められる。火山ガラスは軽石型。																									
	細繊																									0	
	極粗粒砂																									1	
	粗粒砂	1	1																							7	
6	中粒砂	2																								1	
	細粒砂	5	1	1	1										1	1									3		
	極細粒砂	13	1	8	3	2			3	3		1	1	1	2		4							3	45		
	粗粒シルト	5	1	1	1				1	1															10		
	中粒シルト	1																								1	
	基質																									465	
	孔隙																									23	
7	備考	基質は褐色粘土、セリサイト、酸化鉄などで埋められる。火山ガラスは軽石型。																									
	細繊																									0	

第13表 薄片作製胎土分析試料観察結果(2)

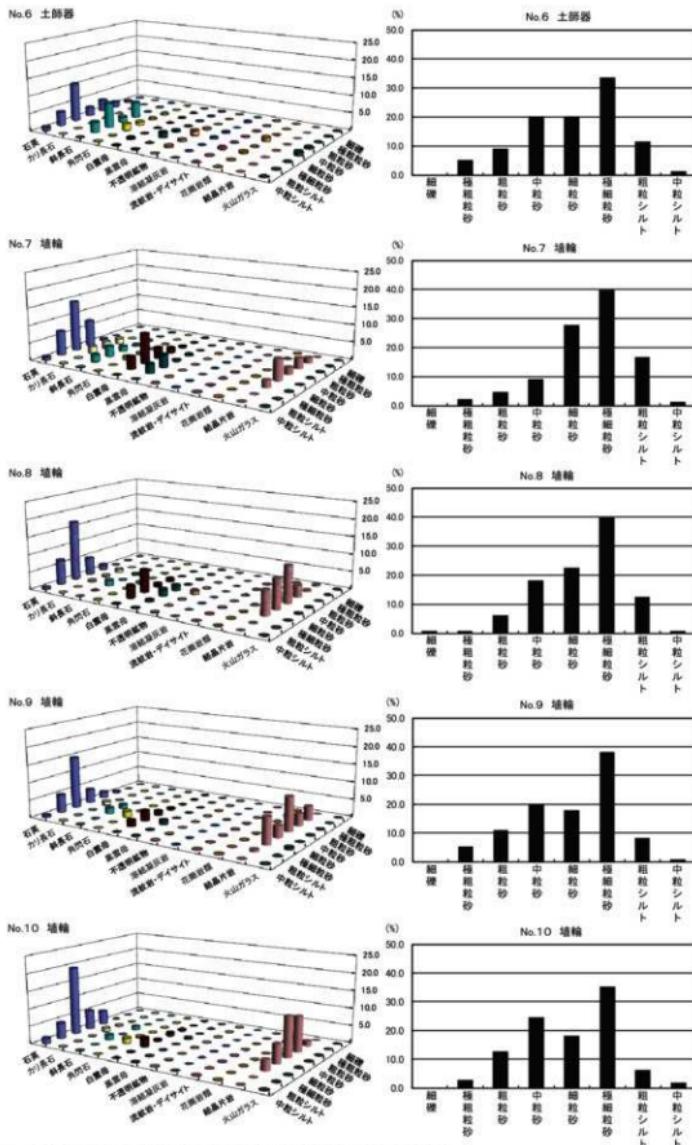
No.	砂粒区分	砂粒の種類構成																合計				
		鉱物片				岩石片				その他												
石英	カリ長石	斜方輝石	單斜輝石	白雲母	黒雲母	ジルコン	不透明鉱物	チャート	頁岩	凝灰岩	溶結凝灰岩	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	ホルンフェルス	軽石英	珪化岩	火山ガラス	粘質物	酸化鉄結核	粘土塊	植物珪酸体
5	細礫																				0	
	極粗粒砂	4		2	1				1											1	1	
	粗粒砂	6	2						1	1	1	3							2	5	15	
	中粒砂	2	7	3		1	1		1	1	1								2	4	19	
	細粒砂	8	7	2	2	4	1	1	1			1							1	3	1	22
	極細粒砂	4	2	2	2	1	1	1											5	1	33	
	粗粒シルト					1													5		18	
	中粒シルト																			1		
	基質																			602		
	孔隙																			22		
	備考	基質は褐色粘土、セリサイト、酸化鉄などで埋められる。火山ガラスはパブル型。																				
6	砂	細礫																			0	
	極粗粒砂	1							1	1	1						1	4	1	10		
	粗粒砂	3		1	1				1		1						1	9	1	18		
	中粒砂	7	9		1				1		1	1	2				1	17	40			
	細粒砂	5	3	3	2	1	3		1	1	1						2	18	40			
	極細粒砂	22	14	3	4	4	3	1	1	1	1	1	5	1			7		67			
	粗粒シルト	8	6	1	3		1	1									3		23			
	中粒シルト	2																2				
	基質																	830				
	孔隙																	50				
	備考	基質は褐色粘土、セリサイト、酸化鉄などで埋められる。火山ガラスは淡褐色パブル型、軽石型を示す。																				
7	砂	細礫																		0		
	極粗粒砂																		1	4		
	粗粒砂	1				1													9			
	中粒砂	1	3	1			3	1					3	4				1	1	18		
	細粒砂	15	4	3		1	6	1	1				12	12					55			
	極細粒砂	29	4	6	2	2	17	7	1				7	4				79				
	粗粒シルト	14	4	4	1	7	5						2					33				
	中粒シルト	2																2				
	基質																	569				
	孔隙																	32				
	備考	基質は褐色粘土、セリサイト、酸化鉄などで埋められる。																				
8	砂	細礫																		1		
	極粗粒砂																		1			
	粗粒砂	3	2	1			2		1				7				1	2	12			
	中粒砂	10	1		1	1	2	3	2	1			21				2	2	36			
	細粒砂	34	1	3	1	1	13	4	2				6	14				79				
	極細粒砂	14			1	7	1						2					25				
	粗粒シルト	1																1				
	中粒シルト																	555				
	基質																	39				
	孔隙																					
	備考	基質は褐色粘土、セリサイト、酸化鉄などで埋められる。																				

第13表 薄片作製試土分析試料観察結果(3)

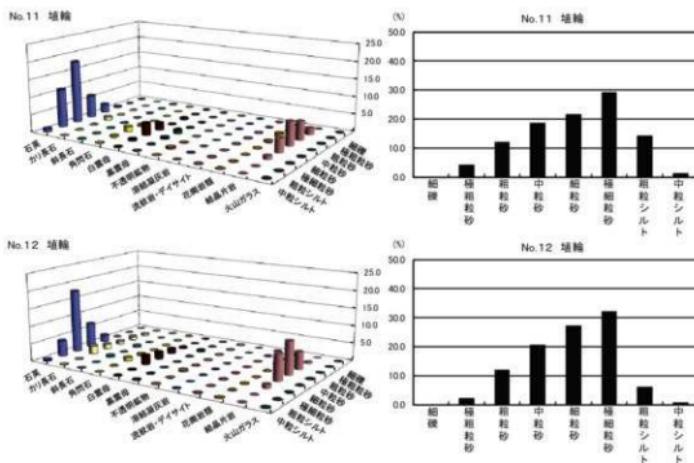
No	砂粒区分	砂粒の種類構成																合計								
		石英	斜長石	斜方輝石	单斜輝石	角閃石	蛇紋角閃石	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	溶結凝灰岩	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	結晶片岩	ホルンフェルス	軽石英	変質岩	珪化岩	凝灰物	酸化鉄結核	粘土塊	植物珪酸体	
9	細	細																							0	
	極粗粒砂																								9	
	粗粒砂	1								1	4	1						6		3				3	19	
	中粒砂	3		1						1		2	2			3	17		2		3	1			35	
	細粒砂	7	2	2	1					2			1			9	6						1		31	
	極細粒砂	26	3			3	5	2				4			7	13				1	3				67	
	粗粒シルト	9						3				1							1						14	
	中粒シルト	1																							1	
	基質																								806	
	孔隙																								24	
10	細	基質は褐色粘土、セリサイト、酸化鉄などで埋められる。基質に炭酸鉄鉱物が微量含まれる。																								
	極粗粒砂																		3						2	5
	粗粒砂									1		1						20						2	1	25
	中粒砂	8	1	2					2	1		2				4	23	1			4	1			49	
	細粒砂	11	2						1	1		1	2			5	11				2				36	
	極細粒砂	39	3	1		3	5				1	1			10	6				1					70	
	粗粒シルト	9		1												1								1	12	
	中粒シルト	3																							3	
	基質																								803	
	孔隙																								39	
11	細	基質は褐色粘土、セリサイト、酸化鉄などで埋められる。																								
	極粗粒砂																	4						2	8	
	粗粒砂	1							1		3	1	2			1	2	11		1				1	24	
	中粒砂	5									2	4	4	2		3	1	14			1	1			37	
	細粒砂	13	2	1	1	1	4	2					2		4	8			1		5	1			43	
	極細粒砂	36		1		3	7	1	1						6	2				1					58	
	粗粒シルト	22		1	1	1	1	1												1					28	
	中粒シルト	2																							2	
	基質																								839	
	孔隙																								35	
12	細	基質は褐色粘土、セリサイト、酸化鉄などで埋められる。バブル型火山ガラスあり。																							0	
	極粗粒砂	1															1	1						1	4	
	粗粒砂	2							1	1		2				3	1	10	3						24	
	中粒砂	4	2	1				3			3	1	1			6	19				1				41	
	細粒砂	14	3	1	1	4				1	1	1	2			9	15			1	1				54	
	極細粒砂	36	5	1	2	2	5			1	1	1	1			7	2				1				64	
	粗粒シルト	9		2	1																				12	
	中粒シルト	1																							1	
	基質																								430	
	孔隙																								23	
	備考	基質は褐色粘土、セリサイト、酸化鉄などで埋められる。																								



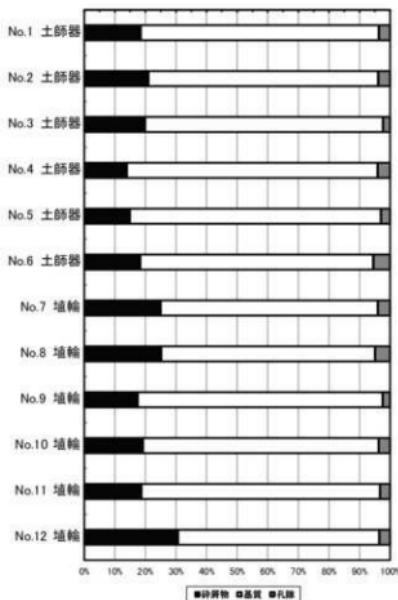
第169図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度および碎屑物の粒径組成(1)



第170図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度および碎屑物の粒径組成（2）

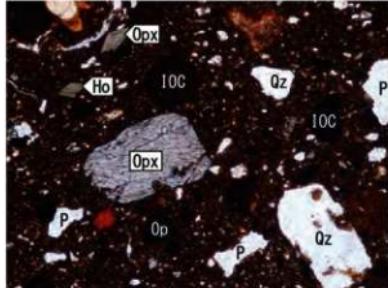


第171図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度および碎屑物の粒径組成(3)

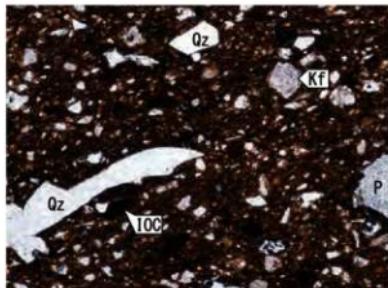


第172図 碎屑物・基質・孔隙の割合

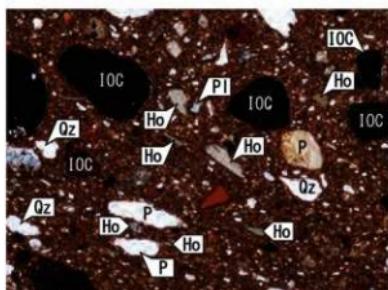
図版6 胎土薄片(1)



1. No. 2 土師器 内湾口縁杯 口辺部 5号竪建 5世紀後半



2. No. 4 土師器 幅広内湾口縁杯 口辺部 1号墳東斜面 6世紀後半?

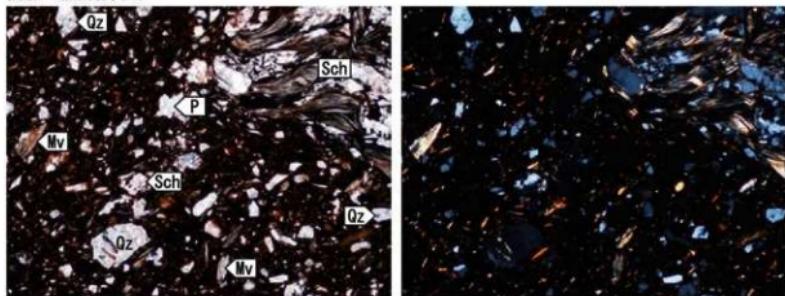


3. No. 6 土師器 高杯脚部 2区東斜面 5世紀中頃

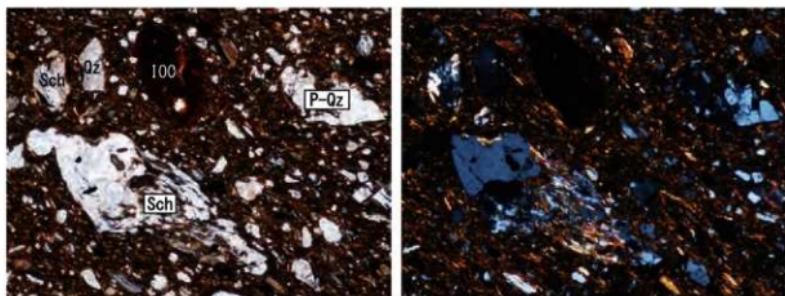
Qz:石英, Kf:カリ長石, PI:斜長石, Opx:斜方輝石, Ho:角閃石, Op:不透明鉱物, IQC:酸化鉄結核, P:孔隙.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー。

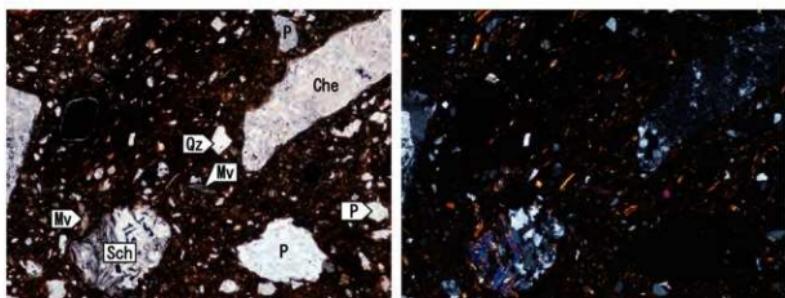
図版7 胎土薄片(2)



4. No. 7 塙輪 円筒胴部 1号墳5号トレンチ 6世紀後半



5. No. 10 塙輪 円筒胴部 1号墳No80 6世紀後半



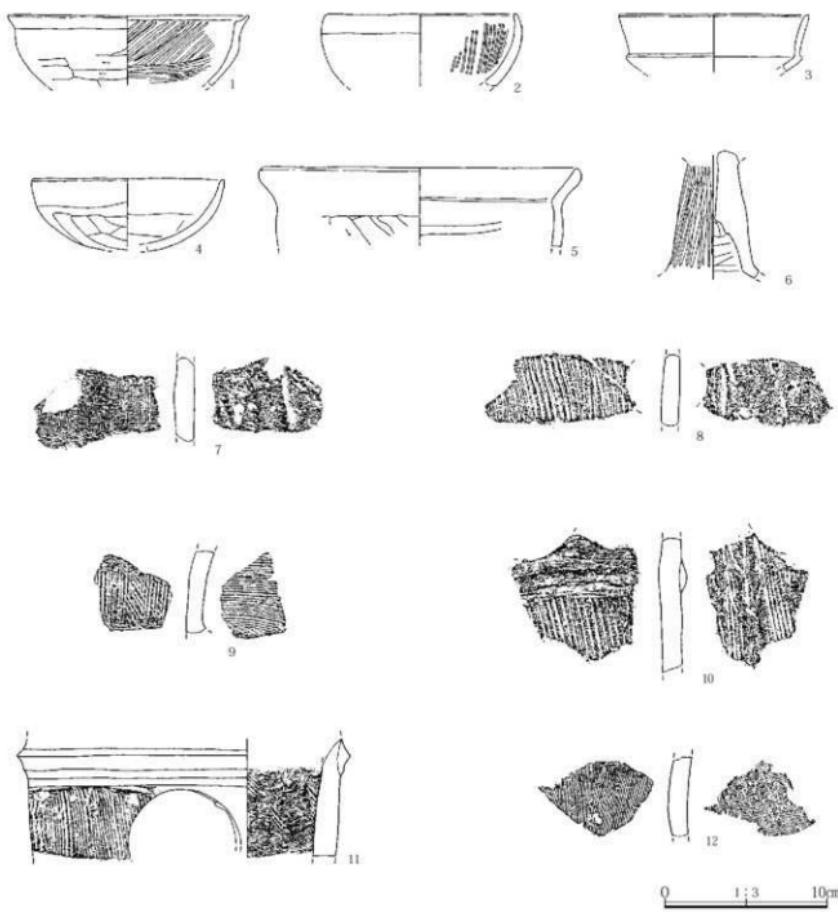
6. No. 11 塙輪 円筒胴部 1号墳No73 6世紀後半

Qz:石英, Mv:白雲母, Che:チャート, P-Qz:多結晶石英, Sch:片岩,

IOC:酸化鉄結核, P:孔隙.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm



第173図 土師器・埴輪产地同定分析試料図(番号は第13表の番号に対応)

第7節 須恵器・埴輪の产地分析

三辻 利一(奈良教育大学名誉教授)
犬木 努(大阪大谷大学)

1. はじめに

全国各地の窯跡(群)出土須恵器、埴輪を大量に分析した結果、窯跡(群)出土須恵器、埴輪はK-Ca、Rb-Srの両分布図上で、窯跡(群)ごとにまとめて分布し、かつ、地域差を示すことが明らかになった。さらに、全国各地の花崗岩類の岩片試料を大量に分析した結果、花崗岩類の岩片試料も両分布図上で地域ごとにまとめて分布し、地域差があることを示された。

全国各地の花崗岩類は、両分布図上で、「花崗岩類のベルト帯」を形成する。「花崗岩類のベルト帯」がKとCa、RbとSrが逆相間の関係をもつことから、この関係は、花崗岩類を構成する主成分鉱物、カリ長石 $K(Si \cdot Al_2)O_6$ と曹長石 $Na(Si \cdot Al_2)O_6$ 、曹長石と灰長石 $Ca(Si_2 \cdot Al_2)O_6$ の間に互いにイオン置換して完全固溶体を作る。その結果、K (Rb)とCa (Sr)からみて種々の化学組成をもつカリ長石系列の長石類と斜長石系列の長石類を形成することで説明できる。

さらに、窯跡(群)出土須恵器の化学特性が、後背地の地質を構成する花崗岩類の化学特性によく対応するところから、窯跡(群)出土須恵器の両分布図上における地域差の原因も母岩の長石類であることが理解された。この結果、K-Ca、Rb-Srの両分布図は、土器類の产地問題の研究に活用できることが明らかになった。

本報告では、群馬県吾妻郡東吾妻町に所在する四戸1号墳出土須恵器および埴輪から採取した試料について蛍光X線分析を行い、K-Ca、Rb-Srの両分布図上で定性的に比較する方法でその生産地を推定した結果を報告する。

2. 分析方法

大阪大谷大学博物館に設置されている理学電機製RIX2100(波長分散型)の蛍光X線分析装置で分析した。この装置には、TAP、Ge、LiFの3枚の分光結晶と、ガスフロー比例計数管、シンチレーションカウンターの二つの検出器が装備されており、また、50試料が同時に搭載

できる試料交換器に連結された完全自動式の分析装置である。土器の伝播や生産・供給問題の研究には基礎研究の材料として大量の土器試料や岩石試料の分析が必要なので、完全自動式の蛍光X線分析装置は不可欠である。

遺物片試料はタンクステンカーバイド製乳鉢で100メッシュ以下に粉砕する。粉末試料は塩化ビニル製リングを枠にして、電動圧縮機で高圧をかけてプレスし、内径20mm、厚さ5mmの鋳造試料を作成し、蛍光X線分析用の試料とした。X線管球は50KV、50mAの条件下で作動させた。Na、K、Ca、Fe、Rb、Srの6元素を分析した。

分析値は、同じ日に測定された岩石標準試料JC-1の各元素の蛍光X線強度を使って標準化した値で表示した。JC-1による標準化値とは、測定された各元素の蛍光X線強度をJC-1の各元素の蛍光X線強度で標準化した値であり、相対的な蛍光X線強度である。種々の岩石標準試料を使って測定した結果、JC-1による標準化値と各元素の含有量の間に直線性があることも確認されている。土器類の产地問題の基礎研究をする上では、大量の土器試料や岩石試料の分析処理が必要なので、JC-1による標準化法は有効である。主成分元素のみならず、微量元素を含めて、2次元分布図上で地域差を比較したり、产地への帰属条件を求めるための数理統計計算をする上でも大変便利である。

3. 分析結果

第14表には、今回分析した四戸1号墳出土の須恵器および埴輪の分析値を示す。この結果から、K-Ca、Rb-Srの両分布図とK-Rb、Ca-Srの両相関図が作成された。

1)須恵器の分析結果

まず、四戸1号墳出土須恵器の分析結果について説明する(^{注1)}。

第174図には、K-Ca、Rb-Srの両分布図を示す。

両分布図ではK (Rb)が比較的多く、Ca (Sr)が比較的小ない「第1グループ」と、逆に、K (Rb)が比較的小なく、Ca (Sr)が比較的多い「第2グループ」の2群に分かれることがわかる。須恵器には、少なくとも2ヶ所の生産地があったことを示す。

さらに、第1グループをみると、「1号土器集中」出土のNo. 8、9の2点は両分布図で近接して分布しており、胎土は同じであることを示すが、No. 3とNo. 7はK-Ca

分布図では少し離れて分布しており、別産地の製品である可能性がある。

また、第2グループでも、No. 1、4、5、6の4点の須恵器は両分布図で近接して分布しており、同じ産地の製品であるが、No. 2は集団から離れて分布しており別産地の可能性もある。

第175図には、K-Rb、Ca-Srの両相関図を示す。

両相関図は、土器の素材となった粘土の母岩に関する情報をもっていることが知られている。Ca-Sr相関図では、玄武岩系の岩石に由来する粘土が素材であれば、勾配(1:1)の直線の上側の領域に、また、花崗岩系の岩石に由来する粘土が素材であれば、勾配(1:3)の直線沿いか、その下の領域に分布することが知られている。そして、長石系因子からみて、その中間の化学特性をもつ安山岩やデイサイト系の岩石に由来する粘土を素材としている土器は勾配(1:1)と勾配(1:3)の直線の間の領域に分布することが知られている。

第175図を見ると、No. 7の試料は勾配(1:3)の直線の近く分布しており、花崗岩系の岩石に由来する粘土が素材となっている可能性がある。他の試料はすべて、勾配(1:1)の直線沿いか、その下側の領域に分布しており、デイサイトよりもむしろ、安山岩系の岩石に由来する粘土を素材としていることを示している。

したがって、第1グループの集団の中では、No. 7だけが別産地の製品で、他の須恵器は安山岩系の岩石に由来する粘土が素材となっていることを示している。この中でも、No. 1、4、5、6の4点とNo. 8、9の2点は、それぞれ、まとまって分布しており、同じ産地の製品である可能性がある。No. 2とNo. 3の須恵器は、両相関図でも他の須恵器から離れて分布しており、別産地の製品と考えられる。

このように、両分布図と両相関図から、須恵器はNo. 8、9のグループとNo. 1、4、5、6のグループに大きく分類され、No. 2、No. 3、No. 7は別胎土であると考えられた。

ここで、Fe因子とNa因子を比較した。第176図に示す。Fe因子では、No. 7にはFeが少なく、逆に、No. 2にはFeが多い。その結果、Fe因子ではNo. 7とNo. 2は他の試料から大きく離れて分布する。No. 8、9とNo. 1、4、5、6はFe因子でも類似しており、それぞれまとまっ

て分布することがわかる。

他方、Na因子をみると、No. 8、9とNo. 7にはNaが少なく、逆に、No. 1、4、5、6にはNaが多い。そして、No. 2とNo. 3の2点は、他の須恵器から孤立して分布していることがわかる。この2点の須恵器は、Na因子からは他の須恵器胎土とは異なることを示している。

この結果をまとめると、K-Ca、Rb-Srの両分布図で第1グループと分類された須恵器のうち、「1号土器集中」出土のNo. 8、9はFe、Na因子でも類似しており、同じ胎土をもつ須恵器であり同じ生産地で作られた須恵器であるが、No. 3とNo. 7はそれぞれ別産地の製品であると考えられる。

第2グループに分類された須恵器のうち、No. 1、4、5、6の4点の須恵器は、Fe、Na因子でもまとめて分布しており、同じ胎土をもつ須恵器であるが、No. 2はFe因子やNa因子では第2グループの試料集団から離れて分布しており、別胎土をもつ須恵器であると判断された。

このように、第1グループ、第2グループの中でも、別胎土であると推定される須恵器があり、四戸1号墳出土須恵器の胎土は多様である。生産地も何ヶ所かあることが考えられる。

以上の結果から須恵器の生産地を推定すると、花崗岩系の岩石に由来する粘土を素材とした考えられるNo. 7の須恵器は、K-Ca、Rb-Srの両分布図で「陶邑領域」に対応しており、陶邑産の須恵器である可能性がある。当該須恵器の考古学的特徴を確認する必要がある。

他の須恵器はすべて、安山岩系の岩石に由来する粘土が素材となっており、関東地域で作られた須恵器である可能性が高い。K、Rbが比較的高いNo. 8、9とNo. 3の3点は、関東地域でも該当する窓跡がなく、産地不明である。

このように、四戸1号墳では、胎土分析からみると多様な胎土をもつ須恵器が出土しており、興味深い。あらためて当該須恵器の考古学的特徴を確認する必要がある。

2) 墳輪の分析結果

次に、四戸1号墳出土埴輪の分析データについて説明する。

第177図には、K-Ca、Rb-Srの両分布図を示す。両分布図で埴輪試料はよくまとめて分布しており、同じ所で

作られた埴輪であることは明白である。その分布位置は、群馬県藤岡市に所在する本郷窯跡群出土埴輪の分布領域に対応する。

さらに、第178図には、K-Rb、Ca-Srの両相関図を示す。K-Rb相関図では試料集団は勾配(1:1)の直線の上側の領域に分布し、玄武岩系の岩石に由来する粘土が素材となっていることを示している。さらに、Ca-Sr相関図でも、試料集団は勾配(1:1)の直線の上側の領域に分布し、玄武岩系の岩石に由来する粘土を素材としていることが確認できる。さらに、第14表をみると、Fe量も多いことがわかる。

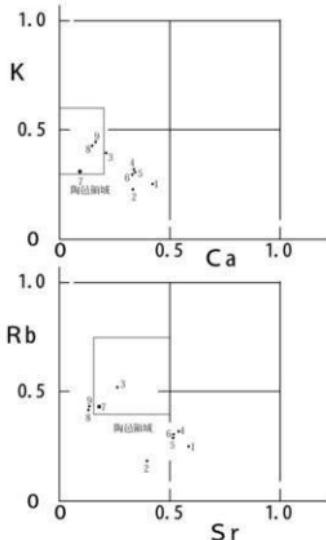
これらはいずれも、群馬県内に広く分布する粘土の化学特性を示しており、群馬県内で作られた埴輪であることを明示する。なかでも、本郷窯跡群から供給された埴輪である可能性がある。

註

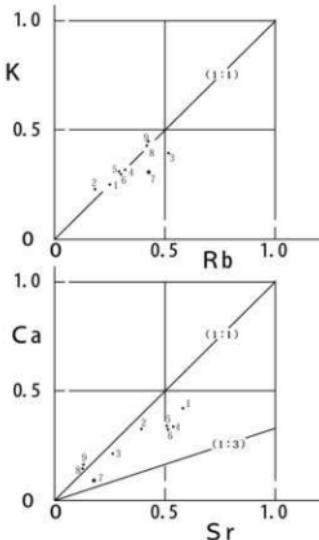
1) 今回、「四戸1号埴出土須恵器」として提供された試料のうち、「1号土器集中」出土の須恵器2点(試料No.8・9)は平安時代の須恵器であるが、便宜的に「四戸1号埴出土須恵器」として取り扱う。

参考文献(刊行順)

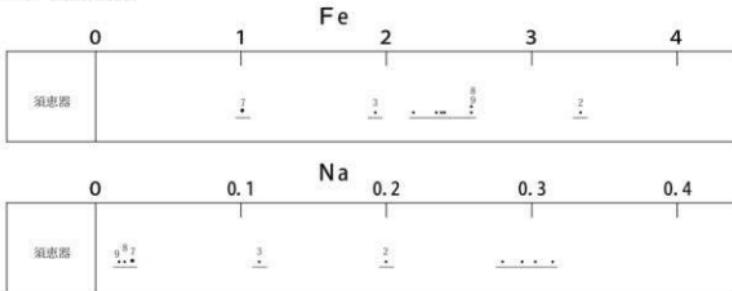
- 三辻利一・山崎 武・新井 端・太田博之・山川俊一郎2000「統計学的手法による古代・中世土器の産地問題に関する研究(第12回)」『情報考古学』第6巻第2号、日本情報考古学会、38~54頁
- 三辻利一・2013「新しい土器の考古学」同成社
- 三辻利一・犬木 努・近藤麻美2018「関東地域の埴輪の蛍光X線分析(1)――窯跡群の分類―」『埴輪研究会誌』第18号、埴輪研究会、28~58頁
- 三辻利一・犬木 努2019「金井東裏遺跡出土須恵器の蛍光X線分析」『金井東裏遺跡(古墳時代編)理学分析編・考察編』群馬県埋蔵文化財調査事業団、200~206頁



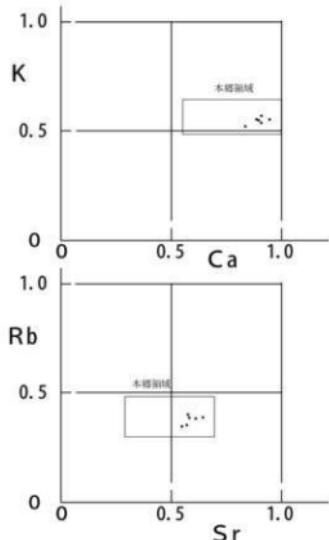
第174図 四戸1号埴出土須恵器の両分布図



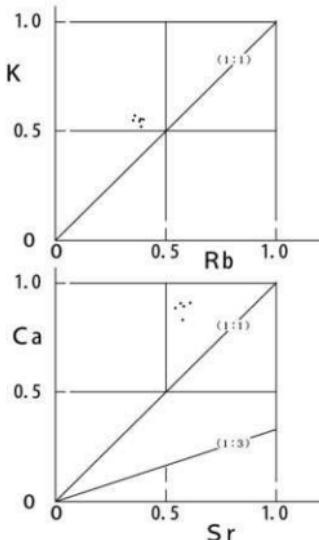
第175図 四戸1号埴出土須恵器の両相関図



第176図 四戸1号墳出土須恵器のFeとNaの1次元分布図



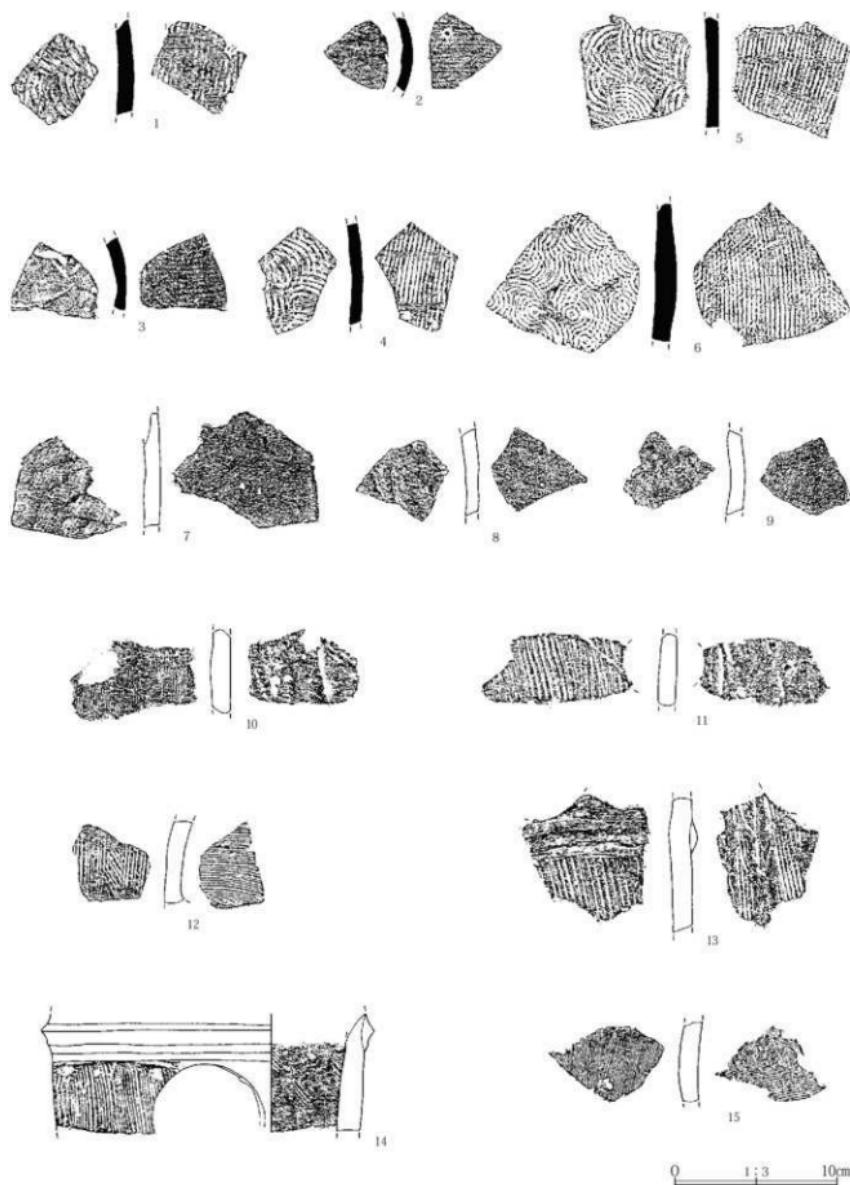
第177図 四戸1号墳出土埴輪の両分布図



第178図 四戸1号墳出土埴輪の両相関図

第14表 四戸1号墳出土須恵器・埴輪の蛍光X線分析値

三社研所 No.	試料 No.	種類	器種	分析値						出土地所	辨別番号
				K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na		
R2-1	1	須恵器	甕	0.253	0.424	2.18	0.249	0.584	0.279	5区南西部	第179回-1
R2-2	2	須恵器	甕	0.233	0.334	3.34	0.177	0.390	0.203	1号墳日トレンチ	第179回-2
R2-3	3	須恵器	甕	0.395	0.209	1.92	0.519	0.263	0.112	1号墳東斜面	第179回-3
R2-4	4	須恵器	甕	0.321	0.336	2.34	0.323	0.535	0.314	1号墳Fトレンチ	第179回-4
R2-5	5	須恵器	甕	0.310	0.337	2.38	0.293	0.509	0.302	1号墳No.137・東斜面	第179回-5
R2-6	6	須恵器	甕	0.303	0.329	2.40	0.304	0.511	0.293	1号墳一括	第179回-6
R2-7	7	須恵器	甕	0.311	0.098	1.02	0.430	0.183	0.024	1号墳東斜面	第179回-7
R2-8	8	須恵器	甕	0.428	0.148	2.57	0.419	0.131	0.020	1号土器集中	第179回-8
R2-9	9	須恵器	甕	0.446	0.157	2.58	0.423	0.132	0.017	1号土器集中	第179回-9
R2-10	10	埴輪	円筒	0.568	0.914	4.51	0.358	0.567	0.202	1号墳Eトレンチ	第179回-10
R2-11	11	埴輪	円筒	0.547	0.887	4.63	0.353	0.545	0.207	1号墳東斜面	第179回-11
R2-12	12	埴輪	円筒	0.523	0.837	4.42	0.391	0.582	0.201	1号墳東斜面	第179回-12
R2-13	13	埴輪	円筒	0.544	0.914	4.07	0.385	0.609	0.217	1号墳No.80	第179回-13
R2-14	14	埴輪	円筒	0.547	0.898	4.34	0.395	0.575	0.219	1号墳No.73	第179回-14
R2-15	15	埴輪	円筒	0.553	0.949	3.80	0.387	0.645	0.249	1号墳周壁	第179回-15



第179図 須恵器・埴輪の胎土分析試料図(番号は第14表の番号に対応)

第8節 ガラス玉の蛍光X線分析

【測定装置】

蛍光X線分析装置(XRF、日立ハイテクサイエンス製 エレメントモニタEA1200VX)

【測定条件】

- ・使用管球：ロジウム
- ・加速電圧+
- 1次フィルタ：15kV+フィルタなし(Na～Sの測定に使用)
15kV+Crフィルタ(Cl～Crの測定に使用)
50kV+Pbフィルタ(Mn～Y,Hf～Uの測定に使用)
50kV+Cd (Zr～Baの測定に使用)
- ・ピーキングタイム：1.0 μsec
- ・コリメータ： $\Phi 1mm$
- ・雰囲気：真空(13Pa以下) 30min
- ・測定時間：300s (フィルタごと)

【解析方法】

ガラス試料の解析にはNIST-620 Soda-Lime Flat Glassを標準試料として計測したデータを適用し、ガラス以外の試料の解析には装置に搭載されている汎用的な標準試料のデータを適用し、ファンダメンタルパラメータ法による定量を行った。

【コメント】

第15表に検出された元素と割合を、第16表に元素を単一の酸化物と仮定し再計算したものを示した。表内で“0”という数字は元素の同定はできている、数字がない場合は同定もできていないことを示している。

ガラス分析において、Na, Mg, Al, Siなどの軽い元素は、当初のお試し測定では検出したら困難であったが、真空のための吸引時間を通常2分程度のところを30分にしたこと、解析にガラス標準試料を使用したことで大幅に改善できた。

第15表 ガラス玉4個のXRF分析結果(元素)

	1	2	3	4	
Na	10.18	8.7	8.8	9.75	
Mg	2.23	1.66	2.61	2.81	
Al	2.65	2.11	2.01	2.24	
Si	63.15	72.15	67.07	67.34	
K	15.12	1.46	3.96	4.03	
Ca	1.51	8.16	11.26	10.28	
Ti	0.38	0.61	0.46	0.46	
Mn	1.63	2.35	0.41	0.16	
Fe	2.48	2.09	2.69	2.19	
Co		0.22	0.09	0.08	
Cu	0.36	0.21	0.15	0.15	
Zn	0.17	0.05	0.03	0.13	
Sr	0.01	0.09	0.15	0.12	
Zr	0.04	0.02	0.02	0.02	
Sn	0.01	0.01			
Pb	0.08	0.1	0.26	0.24	

第16表 ガラス玉4個のXRF分析結果(化合物)

	1	2	3	4	
Na ₂ O	10.18	8.48	8.68	9.68	
MgO	2.41	1.75	2.79	3	
Al ₂ O ₃	3.04	2.34	2.27	2.5	
SiO ₂	73.46	79.83	76.28	75.8	
K ₂ O	7.57	0.68	1.91	1.92	
CaO	0.79	4.27	6.02	5.42	
TiO ₂	0.23	0.35	0.27	0.27	
MnO	0.76	1.03	0.18	0.07	
Fe ₂ O ₃	1.27	1.01	1.31	1.06	
CoO		0.09	0.04	0.03	
CuO	0.15	0.08	0.06	0.06	
ZnO	0.07	0.02	0.01	0.05	
SrO	0	0.03	0.06	0.05	
ZrO ₂	0.02	0.01	0.01	0.01	
SnO ₂	0	0	0	0	
PbO	0.03	0.03	0.09	0.08	

第9節 人骨の人類学的研究

奈良 貴史(新潟医療福祉大学)

はじめに

2018年の四戸の古墳群遺跡の発掘調査によって、2基の土坑墓と1基の集石造構から人骨と思われる骨が出土した。本稿はそれらの人類学的報告である。

1号土坑墓人骨(写真図版8)

遺存状況：骨の保存状態は不良である。頭骨は、破損化が著しく、同定できたのは下顎骨の右オトガイ孔を中心とした下顎体のみであり、復元困難である。同定できた四肢骨は、左右不明の鎖骨骨幹部片、上腕骨骨幹部片、左右の大腿骨骨幹部である。

年齢：下顎の右オトガイ孔上部の小白歯部の歯槽が閉鎖していることから、成人段階には達していたと思われる。

性別：性別を推定できる部位が遺存していないため推定が困難であるが、大腿骨骨幹部が華奢であることから女性と思われる。

その他：右大腿骨骨幹部後面に粗線の発達は見られない。

2号土坑墓人骨(写真図版9-1・2)

遺存状況：骨の保存状態は不良である。頭骨は、破損化が著しく、同定できたのは左側頭骨内耳孔部片であり、復元困難である。同定できた四肢骨は、寛骨臼部片、大腿骨骨頭部片、左右の大腿骨骨幹部である。

年齢：大腿骨骨幹部の発達具合から成人段階に達していたと思われる。寛骨臼ならびに大腿骨骨頭部に加齢性の骨変化等がみられないことから成人段階でも壮・老年程度の可能性が高い。

性別：寛骨臼、大腿骨骨頭、大腿骨骨幹部が頑強なことから、男性と推定される。

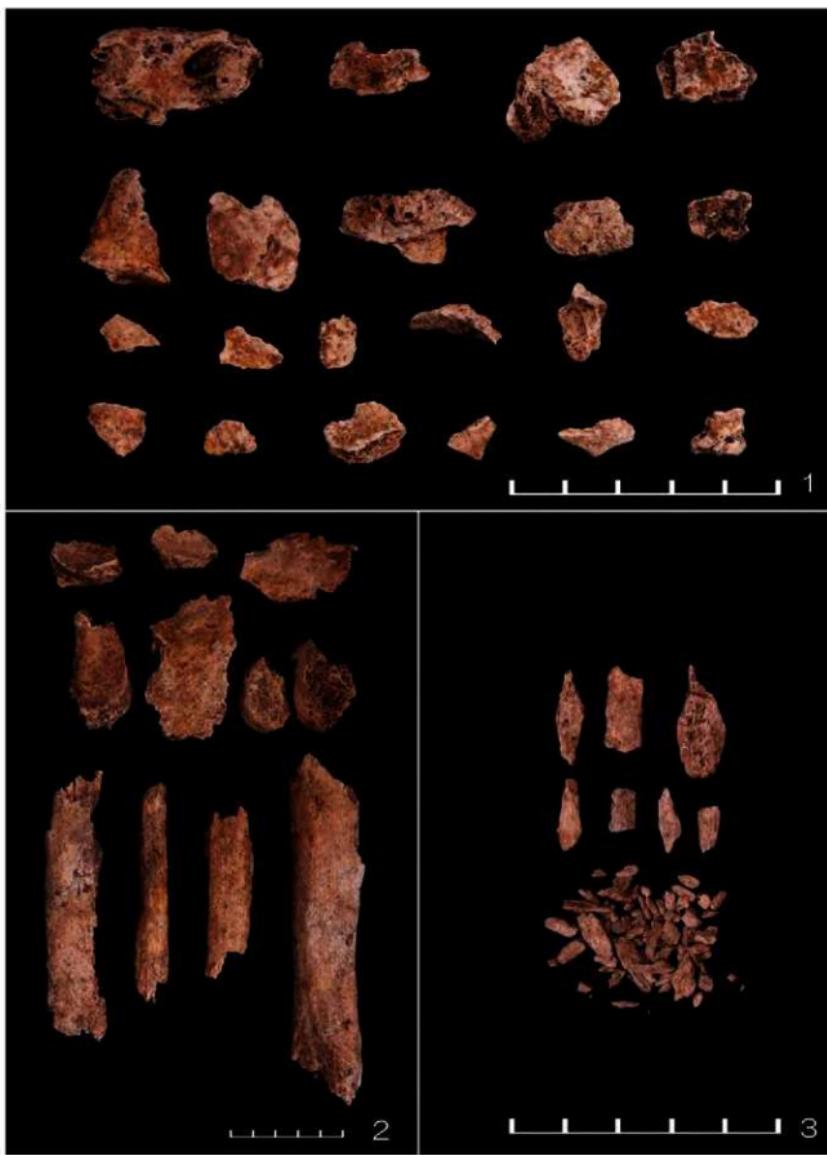
その他：左大腿骨骨幹部後面に粗線の発達がみられ、後方に柱の様に張り出したピラスタがみられる。

4号集石(写真図版9-3)

遺存状況：細片化が著しい四肢骨片が多数遺存する。大きいものでも最大長21mm程度であるが、ほとんどが数mm程度である。総重量3.0gである。すべて白色の色調を呈し、焼成されている。生焼け状態のものが観察されず、色調にむらが認められないので、部位によって焼成温度が違いではなく、白色を呈すほどの650℃以上のかなりの高温で焼かれたものと推定される。ヒトの骨と断定はできないが、形状から見てヒトを否定する要素はみられない。



図版8 1号土坑墓人骨



图版9 2号土坑墓人骨(1·2)、4号集石人骨(3)

第7章 考察

第1節 四戸の古墳群遺跡出土の 弥生土器について

(1) 出土弥生土器の概要

四戸古墳群遺跡では弥生時代の竪穴建物遺構が12基検出されており、本来同一集落を形成した四戸遺跡での検出例を含めて30棟の竪穴建物遺構が確認されている。その後、古墳造営や古墳時代集落形成によって破壊された建物遺構も存在すると推測されることから、実数ではさらに数棟が加わることになる。これらの建物遺構や溝・土坑等の構成遺構群に伴う弥生土器のうち、量的に主要を占める竪穴建物跡出土土器について概要を述べる。

まず、時期については後期に帰属し、樽式の範疇で理解できる。器種組成では、壺、甕、高杯、鉢、台付甕、有孔鉢、片口鉢、蓋、ミニチュア品で構成され、明瞭な区分は難しいが、壺・甕には大～中～小の容量差がみられる。

先に刊行した四戸遺跡報文では、当遺跡出土弥生土器について、樽式における地方類型、時期認定等をまとめた(大木2020a)ので、再度ここで確認しておくこととする。

①時期は弥生時代後期後半～古墳時代前期で、土器の変化から4段階に時期細分できる。

②甕は沼田型の文様構成が主体で、北信地方の箱清水式に類似する器形が多い。

③壺文様には変容の少ないT字文が多用される。

④高杯や台付甕には、樽式通有の類型のほかに箱清水式類似例がみられる。

四戸遺跡出土の後期弥生土器に見られた上記の様相は、本遺跡出土土器の場合でも当てはまる。時期細分では、最古の1段階と、古墳時代に属する4段階を除く2～3段階に属すると判断される。従来の編年観と照合するならば、2段階は樽3期古段階、3段階は樽3期新段階(大木2020b)に相当する。

樽式における地域類型として、口縁～頸部に文様帶をほぼ限定する甕を、利根川上流域の利根・沼田地域～吾妻川流域に分布することから「沼田型」甕と呼んでいる

(大木2019)。本遺跡出土の甕についても、図示資料に限れば64%が沼田型である。これは利根・沼田地域～吾妻川流域総体での比率(大木2020b)とほぼ一致する。また、北信地方の後期後半段階における箱清水式甕と共に通する器形も目立つ。特に後述する5区17号竪穴建物遺構出土例では、図示中約4割が該当する。ただし、搬入品と認定できるものはない。

甕では、頸～肩部文様へのT字文採用頻度(6割弱)に箱清水式の影響を看取できる。ただし、過半を占める折返し口縁や球形胴部の器形は樽式通有のものであり、全体としては樽式の中に文様が取り込まれたものと理解される。赤彩甕の少ないことも同様に解すべきだろう。

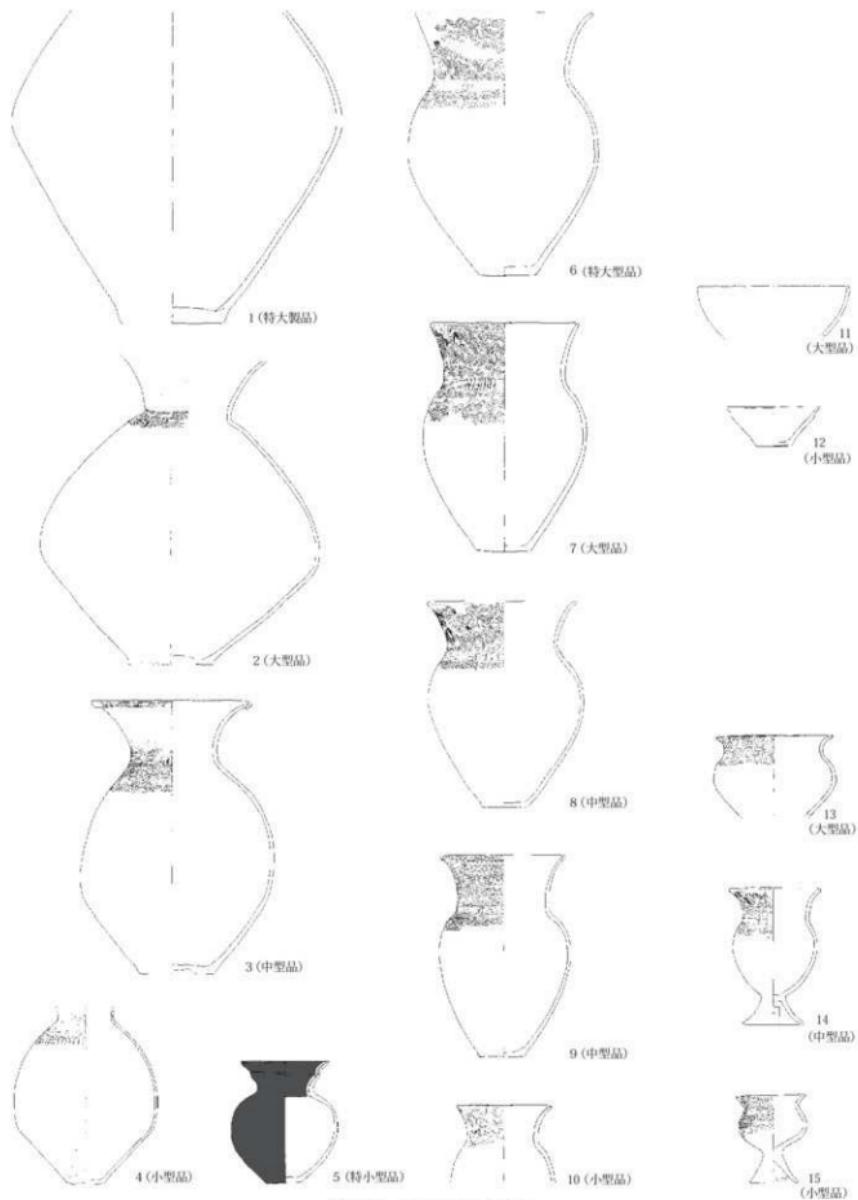
高杯については、箱清水式に見られる深い杯部に浅く聞く脚部の付く類型(第56図-26)がみられる。後期後半の樽式では、杯部が浅く、脚部が大きく聞く形態が一般的なので、この類型は箱清水式の影響とみてよい。台付甕についても同様な例がみられる。胴長の深い甕形に低く聞く脚部の付く類型(第56図-30、第180図-14)がそれである。

以上より、本遺跡出土土器は、樽式の範疇にありながら、濃厚に北信地方の箱清水式の影響を受容していることを再確認できた。

(2) 5区17号竪穴建物跡出土土器の様相

本遺跡で検出された遺構のうち、弥生土器が最ももまとまった状態で出土したのが5区17号竪穴建物跡(第49・50図)である。本跡は床面に分布する炭化材の状態から、焼失家屋と考えられる。土器の出土状態は、床面上に置かれていたものと、焼失後間もない括廐棄を示す。この両者にわずかな時間差を想定しても、使用時での一括性とかけ離れることはないと考えられる。換言すれば、日常生活用土器の組み合わせの一実例を示すと考えてよい。

出土土器器種組成比率は、非掲載破片の重量比で壺類3割、甕類6割強、高杯・鉢類と台付甕で約8%となる。図示資料では壺2割、甕5割、高杯・鉢で2割強、台付甕が1割である。破片重量比では、壺が他器種に比べて



第180図 壺・壺の容量分類図

大きく重いものが多いことを勘案すれば、実個体数は図示資料に近い比率となろう。

次に同一器種による大きさを比較してみたい。図示した壺6点、甕6点、台付甕2点、鉢2点、片口鉢1点の大きさと容量を示したのが第17表である。容量は器形上端までの深さで計測してある。参考に「口径・器高」を併記した。表右欄の係数は、同一器種における小型品ないし特小型品の容量を1とした場合の乗数値である。備考欄には、便宜的に「特大型」から「特小型」までの大きさによる類別名称を与えた。このうち、壺・甕とも中型品・小型品の出土点数が最も多く、この傾向は本竪穴建物跡に限らず一般的なものと思われ、日常生活で使用される頻度が最も高かった大きさと考えてよい。

容量を計測して気づくのは、一般的な大きさの尺度とする「口径・器高」による大きさ分類が、必ずしも容量差とパラレルではないことだ。17号竪穴建物跡出土例では、口径・器高から「中型品」とした第180図9よりも、同じ「中型品」である同図8は1.5倍の容量を持つ。これは、容量の増減が体部の膨張度合いに大きく影響されるためである。同一器高ならば、スリムな器形よりも丸みの強い器形のほうが、容量が大きくなるのは明らかである。このことは、弥生後期後半に顕著な器形の球形化と器高の減少傾向が、単なるデザイン上の変化にとどまらず、容量不变、あるいは増量といった実用面での影響を勘案したものであることは間違いないだろう。容量比に目を転じると、6.5ℓ前後の中型甕(第180図-9)を1として、大型甕(同図-7)は約2倍、特大型甕(同図-6)は3倍弱となり、「口径・器高」の差を大きく凌駕する。同じ煮炊用土器でありながら、ここまで容量差は何らかの使い分けをしていた可能性を示唆するものではないか。現代における鍋やフライパンの大中小に匹敵するセット関係を想起させるのである。小型甕の容量は、完形品が共伴しなかつたため計測していないが、他遺構出土例を参考にすれば、中型甕の1/2以下になることが推測される。台付甕についても同様で、大型品(第180図-13)は復元推定地で2.7ℓ、中型品(同図-14)は1.72ℓ、小型品(同図-15)は0.43ℓと、概ね6:4:1の容量比を示す。同じ加熱用土器におけるこのような容量の分化は、内容物の種類や量、温度や時間調整といった多様な加熱方法に対応したものと類推できよう。ちなみに、第180図-

14の中型台付甕は、樽式に見られない北信の箱清水式に類する形状であるが、中間的な分量の加熱用として機能したのは間違いない。さらに、食べ物の「盛り器」とされる鉢について、小型品(第180図-12)に対して、大型品(同図-11)の容量は5倍になる。このことから、前者を銘々器と位置づけた場合、後者が5杯分の容量をもつ共用器として使用されたとの解釈も可能であろう。また、小型鉢とほぼ近似した容量を測る小型高杯4点(第56図-26~29)についても、その数倍の容量をもつ大型高杯の併用を想定しても無理はないだろう。

貯蔵・運搬等の機能を持つ壺については、内容物はもとより非日常品の存在も勘案した多用途が想定できるところから、単純に容量比較はできない。例えば運搬用には、必要な容積を満たしつつ、持ち運びに容易な形と大きさが求められよう。それでも容量比をみると、特小型品(第180図-5)の容量2.34ℓを1として、小型品(同図-4)は約4、中型品(同図-3)は9、大型品(同図-2)は20と、ほぼ整数倍で増えていく。容量尺度の基準となるものの存否は不問とするにしても、どの程度の大きさにすればどれほどの容量を得られるといった、土器製作上の何らかの規格観念があったとの憶測もはたらく。

以上で試みた土器の容量の検討は、あくまで実例1セットに限ることは付記しておきたい。おそらく細分時期や様々な廃棄様態を網羅した遺跡全体のデータ化では、容量分布に有意な集中や偏りは見られないと推測している。17号竪穴建物跡出土品が、良好な一括廃棄品と考えられ、しかも完形品が多いとの好条件があつての検討である。本稿での検討結果の検証には、他遺跡・遺構の同様な好例でのデータと比較するしかない。また、文中で指摘した球形化傾向に伴う容量変化については、一括資料でなくとも時期別データの累積が必要と考えている。

(3) 片口鉢と有孔鉢の用途について

17号竪穴建物跡から出土した完形の片口鉢(第56図-37)、5区10号竪穴建物跡出土有孔鉢(第36図-8)、同じく5区13号竪穴建物跡出土有孔鉢(第45図-10)について、内面に付着した白色物質の灰像分析を行った。その詳細については本報文別稿をご覧いただきたい。

ここで取り上げたのは、この両器種の用途に関わる検

討が必要と考えたからである。片口鉢は栗林式から組成されることが分かっているが、安定した基本組成の一器種となるのは後期の樽式になってからと考えている。有孔鉢も同様であるが、「楕形土器」と分類されるものを同種と考えれば、古墳時代中葉の5世紀代までは安定した存在を示す。このように盛行時期に若干のずれはあるが、樽式期のなかで、日常器としての用途が確立・定着したと考えてよい。この両者に共通するのは上記分析対象とした白色物質の付着である。

片口鉢には、ドロドロしたゲル状の白色物質の付着例がかなりよく知られており、本遺跡例でも内面の体部全体から片口部にかけてべつとりと付着する。この内容物と器形から、濃い液状物質を、量を微調整しながら注ぐための容器として間違いない。一方、有孔鉢は「蒸し器」説と「漏斗・ろ過器」説に二分される。本稿では後説で理解できる可能性が高いと考え、その理由として、前述の白色付着物を捉えたい。上記した白色物質付着の有孔鉢2点のうち、10号竪穴建物跡例は内面の口縁から底孔部まで付着痕が認められ、13号竪穴建物跡例では底孔内側に付着する。のことから、ゲル状の白色物質を上から注いで、孔を通してろ過したと考えたい。では何をろ過したのかが問題になるのだが、特定はできない。主体は植物灰であろうと想定したうえで白色物質の灰像分析を行ったが、特定植物は明確ではなかった。白色物質が灰と仮定したうえで、さらに憶測を重ねれば、灰汁を

遮してアルカリ溶液を作り得る方法が考え得る。灰汁は食料植物の有害物質除去や、分解、衣類洗濯、漂白などの効能が利用されてきたが、弥生時代での利用法を類推するのは非常に難しい。時空を問わずに一般化された利用法ならば、弥生時代後期の樽式土器分布圏で多く見られる片口鉢や有孔鉢と結びつけるには無理がある。あるいは特産的な加工品を生産したものであろうか。とりあえずここでは、有孔鉢が灰汁ろ過用として利用された可能性を指摘するにとどめておく。だがその一方で、本遺跡からは「蒸し器」説に加担する例がみられる。17号竪穴建物跡出土例(第56図-36)がそれで、口縁部のみリング状に赤変した有孔鉢である。この痕跡が、甕に重ねた状態での被熱痕だとすると、蒸し器としての使用に肯定的な資料となるだろう。有孔鉢の使用法について、従来の仮説をより確定的にしたり、前進させる結果は得られなかつたが、使用痕の実例を提示することで、今後の議論の展開につながれば幸いと考えている。

文献

- 大木伸一郎2019「群馬県北部吾妻川流域の後期弥生遺跡について」『研究紀要』37 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 p.p.33-52
大木伸一郎2020a「四戸遺跡出土の弥生土器について」『四戸遺跡』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 p.288-295
大木伸一郎2020b「群馬県における弥生時代後期の土器について」『研究紀要』38 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 p.p.33-52

第17表 2区17号竪穴建物跡出土土器主要器種のデータ

番号	器種	大きさ		備考	件数	
		容積 L	口径 cm		高さ cm	
第53図-8	甕	66.75	—	—	特大型品	
第52図-3	甕	37.62	—	口縁欠。大型品	19.7	△20
第52図-1	甕	20.8	26.4	44.8	中型品	8.9
第52図-4	甕	6.78	—	口縁欠。小型品	3.5	△4
第53図-5	甕	2.34	14.5	20.2	赤彩特小型品	1
第53図-6	甕	1.91	—	—	口縁欠。特小型品	1
第55図-15	甕	6.64	20.5	33.2	中型品	1
第54図-11	甕	6.43	22.2	32	中型品	1
第54図-12	甕	8.41	19.8	32.3	中型品	1.3
第55図-13	甕	9.78	24.5	33.9	中型品	1.5
第54図-10	甕	12.2	24.9	37.5	大型品	1.9
第54図-9	甕	17.99	29.2	43.1	特大型品	2.8
第56図-32	台付甕	2.67	19.0	—	大型品	6.2
第56図-30	台付甕	1.72	15.2	22.5	中型品	4
第56図-31	台付甕	0.43	11.5	14.6	小型品	1
第56図-38	鉢	(2.0)	(22.0)	(10.5)	大型品。口縁~体部片	5
第56図-34	鉢	0.41	15.2	6.0	小型品	1
第56図-37	片口鉢	1.02	13.5	11.5		



第181図 2区17号竪穴建物甕収容量グラフ

第2節 四戸の古墳群と四戸遺跡の集落と墓域の併行関係から見た動向

全体状況(第182・183図、第18表)

古墳は、5区の東側、段丘が南東方向に降下する端部に位置する。1号墳は北側の周堀も良く残り、石室の残りも良い。西側の2号墳は周堀が北側で一部確認できるのみで、石室の残りも悪いので、後世の破壊が激しかったものと思われる。興味深いのは3号墳で1・2号墳の間、やや南東よりに下がった地点で構築されており、北側の周堀の遺存がほとんど無く、石室の残りも良くない。3基が並ぶ古墳の位置は、四戸古墳群全体からすると北側に位置するものである。竪穴建物群は、四戸遺跡として、古墳群の西側にあり、生活域と墓域が密接している例として重要である。四戸遺跡及び四戸の古墳群でのムラと古墳造築の動向を併せて見ていくことにする。

なお、四戸の古墳群については、四戸の古墳群として連番での名称がない。そのため、調査機関名を古墳調査番号の頭に冠して、例えば群馬大学が調査したI～IV号に関しては、群大I～IV号と記し、当事業団が調査した1～3号に関しては、事業団1～3号と仮称して古墳を示し、それ以外の古墳については、上毛古墳総覧での名称を活かして説明することにする。

四戸遺跡・四戸の古墳群の集落の動向(第182図)

四戸遺跡(1～4区)、四戸の古墳群(5・6区)は、古墳時代の竪穴建物96棟を有する、吾妻川中流域右岸の拠点集落である。四戸遺跡・四戸の古墳群には、弥生時代後期から10世紀まで連続して建物がある。そのうち古墳時代は、4世紀が4棟(2区93・96号、3区6・24号)あり、弥生時代後期から古墳時代に継続してムラが続いていたことが分かる。四戸の古墳群との関係で重要な5～7世紀のムラの動向は簡単に歴史的環境で記したが、以下詳細に四戸遺跡のムラの動向を記す。

5世紀前半に比定される竪穴建物は内湾状の杯を持ち、楕円形の杯部に長脚の高杯がある1棟(3区9号)があるのみである。

カマドの導入と関係する5世紀中頃(第182図①)は、内湾・内斜口縁杯を中心で、須恵器模倣杯は含まず、長脚系の高杯、内斜の脚台付椀、古式須恵器高杯(TK208併行)、受け口状口辺の甕、短胴甕、一部甕が入る土

器構成で5棟(2区65号、3区1号、4区10号・32号、5区6号)ある。うち、カマドも2区65号、5区6号には導入されている。カマド導入時に数棟の建物があったことが分かる。

5世紀後半～6世紀初頭(第182図②)は、内湾・内斜口縁杯新タイプと、短脚台付椀、短脚高杯、やや長胴化する甕、甕などの構成で、須恵器模倣杯が、内湾・内斜口縁杯にほとんど入らない時期と共に共存する時期に区分し、それぞれを5世紀後半と5世紀末～6世紀初頭とする。5世紀後半は、2区13号、54号、56号、57号、58号、63号、73号、84号、89号、95号、3区11号、20号、4区9号、5区15号の14棟があり、前代に比べ急激に増加する。5世紀末～6世紀初頭には、須恵器模倣杯と短脚高杯が多く入るのが特徴で、2区37号、40A号、75号、86号、4区27号の5棟がある。5世紀後半と併せてると計19棟あり、この時期の棟数の増加は顕著である。

5世紀後半、5世紀末～6世紀初頭とともに2区と3区の西部に集中して建物が検出される。ただし、5世紀後半に四戸の古墳群の西側の4区(9号)と5区(15号)に1棟ずつ、5世紀末～6世紀初頭に4区に1棟(27号)建物が建造され、特に5区15号竪穴建物は四戸古墳群のすぐそばに位置する。

6世紀になると建物数が全体に増加する。

6世紀前半(第182図③)は、須恵器模倣杯中心で、模倣杯の中に内面磨きのものがあり、直立する口縁が多い構成である。他の土器の構成は前代とあまり変化はないが甕が長胴化する。建物の数は前代と変わらず、1区6号、11号、19号、23号、2区3号、8号、18号、22号、59号、87号、92号、3区4号、21号、4区16号、26号、5区3号の16棟がある。6世紀前半は、やはり2区を中心的に、一部の1区東部と3区西部に建物が集中する。ただし、四戸の古墳群の西側の4区に2棟(21号、16号)、古墳群に近接した5区に1棟(3号)あり、5世紀後半同様、四戸の古墳群に近接して構築された建物もある

6世紀中頃(第182図④)は、杯がほぼ、須恵器模倣杯のみとなり、内面磨きが殆ど無くなり、外反口縁が多く内傾口辺も出てくる。短脚高杯も少なくなり、甕の長胴化がすすむ。建物も継続して建てられている。1区22号、25号、27号、2区7号、25号、28号、32号、36号、55号、73号、74号、76号、100号、3区2号、18号、23号、5

区8号の16棟ある。6世紀中頃は、2区を中心にして、1区の東部と3区の一部の建物が構築されている。ただし、四戸の古墳群に近接して5区に1棟(8号)構築されている。

6世紀後半(第182図⑤)は、杯は須恵器模倣杯のみで、外反と内傾両方あり、やや器高が低くなる。甕がさらに長胴化する。1区1号、4号、15号、17号、29号、2区5号、10号、35号、41号、45号、53号、81号、82号、3区12A号、13A号、15号の17棟がある。6世紀後半は、2区を中心に1区の一部と3区の西部に建物が集中する。四戸の古墳群の側には建物は構築されない。

6世紀前半～後半にかけて、6世紀代全体を通じて計49棟と盛行している。6世紀前半～中頃にかけてまでは、四戸の古墳群に近接した位置にも建物がほんの少し築かれているが6世紀後半になると築かれなくなる。

7世紀になると建物の棟数は半減する。

7世紀前半(第182図⑥)は、須恵器模倣杯が平坦化するもので、甕はさらに長胴化する。1区12号、14号、21号、30号、2区2号、9号、12号、71号、3区7号の9棟がある。7世紀前半は、2区を中心に1区の一部と3区の1棟が構築されており、四戸の古墳群近くには築かれないと示している。

7世紀中頃(第182図⑦)は、土師器杯は須恵器模倣杯から銅鏡を模倣した内湾小型化した杯が増える。甕は長胴化の極致となる。2区6号、88号、90号、91号、94号、3区14号の6棟がある。2区を中心に、3区に1棟ある。四戸の古墳群近くには築かれないと示している。

7世紀後半(第182図⑧)は、銅鏡模倣の土師器杯内湾小型化した杯のみとなる。甕は器壁を薄く削った丸みのある甕が出現する。1区9号、10号、28号、2区21号、30号、62号、4区28号の7棟がある。7世紀後半は、1区と2区の一部に建物が構築され、四戸の古墳群西側やや離れた4区に1棟(28号)が築かれている。基本的に7世紀は、6世紀後半から引き続いて、四戸の古墳群の近くには建物を築かない傾向にある。7世紀は統計22棟と6世紀に比べると建物数は減少する。

8世紀になると前半は15棟、後半は9棟あり7世紀と同様の棟数でムラが継続していることが分かる。8世紀になると四戸の古墳群西側の4区に7棟の建物が構築され、四戸の古墳群近くにも建物が構築され、墓域という

しばりが解かれた可能性が高い。

以上の四戸遺跡・四戸古墳群ムラの変遷を見ると、

4世紀から5世紀前半までは、建物の棟数は少なく、5世紀中頃以降にカマドの導入とともに増え始め、5世紀後半に急増する。2区を建物構築の中心とするも、四戸の古墳群西側にも数棟建物が構築される。

6世紀代は前半～中頃～後半まで、1世紀を通じて、各期20棟弱の数で推移しており、建物数からみると四戸遺跡での最盛期となる。また、四戸の古墳群西側近接地には6世紀前半から中頃までは数棟建物が構築されるが、6世紀後半になると無くなる。

7世紀になると、各期が10棟未満となり、明らかに6世紀より建物数は減少する。また、四戸の古墳群西側近接地には、7世紀後半に1棟あるも、やや離れた所であり、基本的に7世紀には四戸の古墳群近接地には建物は無い。そして8世紀になると古墳の築造が終了し、古墳被葬者への祭儀は引き続いているにせよ、建物が古墳群の西側に構築され、墓域として、建物の構築を控えるような動きが無くなることを示している。

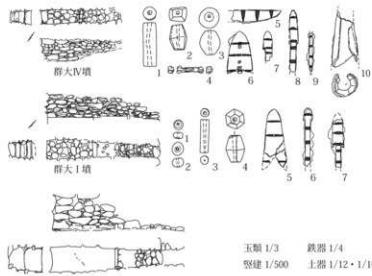
以上の想定は、調査路線区内の情報なので偏りがある可能性があるが、四戸遺跡全体の大まかな傾向は示していると思う。

四戸の古墳群を中心とした古墳の動向

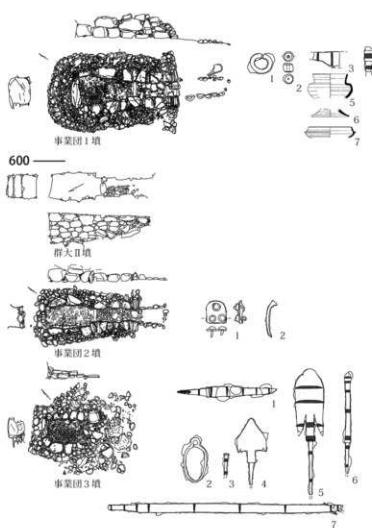
四戸の古墳群については、群馬大学調査の4基と今回報告する当事業団が調査した3基の計7基が遺構・遺物とともに良く分かる資料で、それを調査機関とその際に付けた古墳番号を活かして、群大1～IV号、事業団1～3号として記述する。まず、四戸古墳群及びその南に位置する生原古墳群も合わせた全体の状況を分布図と一覧表で示す(第183図、第18表)。

四戸の古墳群は現状で総数25基(1～24)を数える。うち16基は削平されている。分布図(第183図)を見て分かる様に、四戸の古墳群は、温川と吾妻川に挟まれた南北方向の河岸段丘上に載っている。現在の主要地方道中之条東吾妻線沿いに18基が集中している。南西に離れて2基(岩島村34・35号)(24・25)が南北に並列する。生原古墳群(岩島村36～43号、生原遺跡1号墳)(28～36)は、さらに南の温川を望む河岸段丘上にあり、合計9基ある。うち5基は削平されている。岩島村32・33号墳(26・27)は、大字は生原であるが地形的には四戸の古

500



600



① 5C 中頃

4区10号



5C代



② 5C 後半

2区58号



③ 6C 前半

2区92号



④ 6C 中頃

1区25号



⑤ 6C 後半

1区15号



⑥ 7C 前半

2区2号



⑦ 7C 中頃

2区6号



⑧ 7C 後半

2区62号



第182図 四戸の古墳群・四戸遺跡編年図

5C代



6C 前半



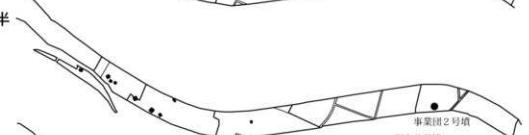
6C 中頃



6C 後半



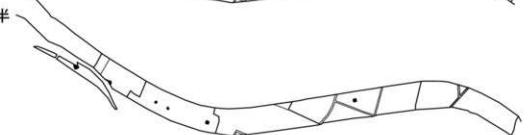
7C 前半



7C 中頃



7C 後半



0 1:6,000 200m

墳群に含まれるものと考えている。この2基を含めると四戸の古墳群の総数は27基となる。

四戸古墳群は群大IV号墳(14)が鐵の形態などから6世紀前半の無袖横穴式石室で、群大I号墳(16)は、IV号墳に比べ巾・長さとともに大きい無袖横穴式石室で、鐵の形態などから6世紀前半でも中頃に近い方である。さらに、群大III号墳(9)は、I号墳に比べさらに大型化した無袖横穴式石室で6世紀中頃に比定される。6世紀後半になると両袖横穴式石室が登場する。武器・武具埴輪を中心とする豊富な器財埴輪を持ち、墓道状構造を有して須恵器を配置する事業団1号墳(2)が登場する。7世紀前半になると、両袖横穴式石室で、埴輪を持たず、釘の使用から年代を比定された事業団2号墳(3)がある。群大II号墳(11)は、埴輪が出土していないこと、玄室がやや胴張りの様相を呈すことなどから、この時期あたりに想定される。7世紀中頃になると、石室の形態は両袖横穴式石室の可能性が高い事業団3号墳(4)が、大型平根鐵と長頸盤管鐵の共伴などから年代が比定される。7世紀後半の明瞭な古墳は確認できなかった。

四戸の古墳群、生原古墳群のうち、発掘古墳以外に未発掘の古墳で、上毛古墳総覧や岩島村誌からの情報で、埴輪を持つ古墳と持たない古墳の様子が分かる。調査古墳と併せて紹介すると、埴輪を持つ古墳が、四戸の古墳群は、事業団1号(2)、群馬大I・III・IV号墳(16・9・14)、岩島村25・29号墳(1・23)の6基がある。また生原古墳群では、生原遺跡1・2号墳(34・35)の2基がある。

埴輪樹立の古墳は、四戸の古墳群27基中6基で2割弱である。生原古墳群では、9基中2基で、やはり2割弱である。もちろん、未調査の表面採集や聞き取りによる情報が多いので不十分であるが、ある程度の時期的な比定は可能であろう。6世紀の古墳であればほぼ例外なく埴輪を樹立していることは、群大I・III・IV号墳や事業団1号墳、生原遺跡1・2号墳から想定できるので、四戸の古墳群、生原古墳群とともに、埴輪を樹立しない7世紀の古墳が多かった可能性を示したい。

四戸の古墳群と四戸のムラの対比動向

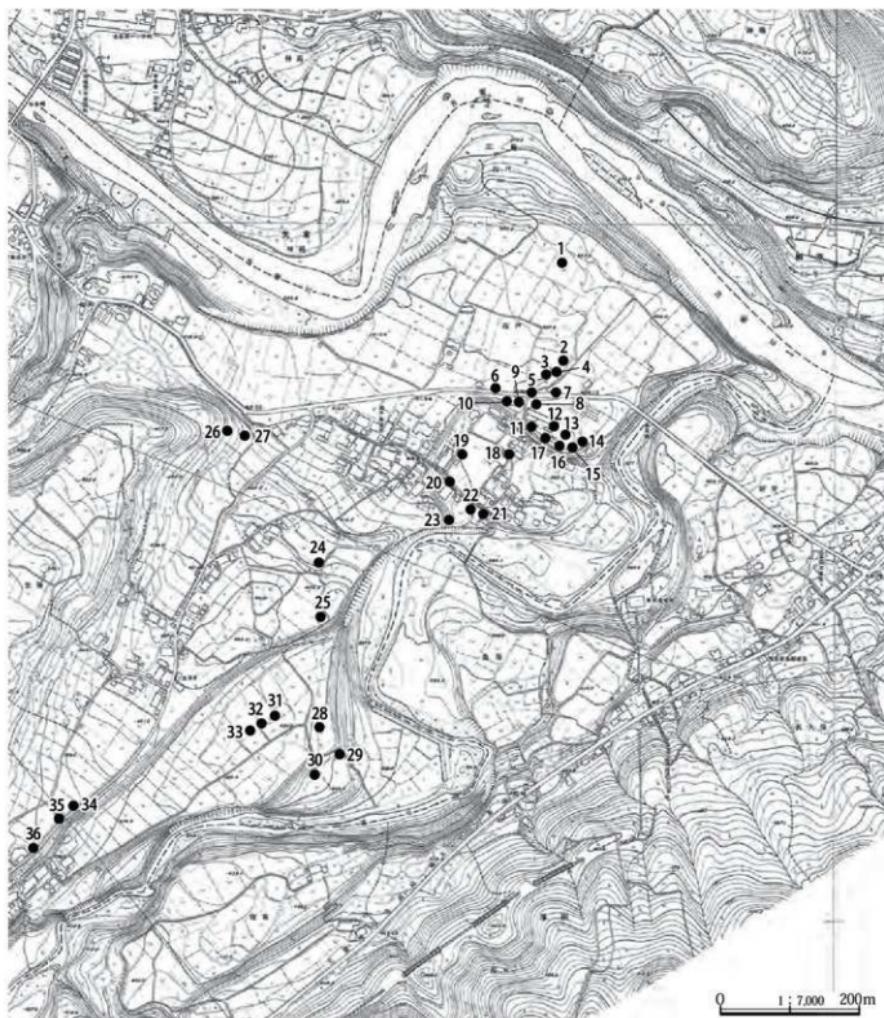
以上述べた集落の動きと四戸の古墳群の古墳築造の動きを対比してみる。

集落は5世紀後半の急増期を経て、6世紀前半は17棟の建物が建てられる。古墳の造営は群大IV・I号が6世

紀前半に始まる。さらに6世紀中頃の群大III号に並行して16棟、6世紀後半の事業団1号に並行して18棟の建物が建造されており、四戸のムラの建物の数が最多の時に、古墳も多く築かれている。なお、6世紀前半から中頃までは、四戸の古墳群の西側近接地に建物が1棟以上築かれている。6世紀後半になると建物は古墳群の近接地には建てられなくなる。7世紀に入り、四戸のムラの建物の数が、前半9棟、中頃6棟、後半7棟と、6世紀に比べ半減している。ただし、古墳は継続して造られており、事業団2号墳、群大II号墳が7世紀前半、事業団3号墳が7世紀中頃に比定されているが、7世紀後半も含めて四戸の古墳群の7世紀代の古墳数は、先述したように6世紀代に比べて増加している可能性がある。なお、建物は6世紀後半以降、四戸の古墳群に近接した地区には建てられず、7世紀後半になってやや離れた4区で1棟の建物が構築されたのみである。6世紀後半以降は、墓域として意識され、建物の構築を控えた可能性があり、古墳の築造が盛んに行われた可能性が高い。古墳の構築が終了した8世紀になると7棟もの建物が古墳群の西側に築かれたことからも、墓域としての役割を終え、再び居住域として利用したのである。四戸の古墳群の東側の6区に古代の集石遺構が築かれ、一部焼骨があることから、墓としての機能を持っていた可能性があり、古墳から墓への変遷をたどれる。

四戸のムラは、四戸の古墳群の西側に幅広く展開しており、調査路線区内のみの情報であるとはいえ、大まかな傾向を示すことができた。四戸の古墳群が、信濃と越後への道の往来に関わる吾妻川と温川を望む合流地点に築かれていることから、交通路の拠点として栄えた四戸のムラの墓域として理解でき、さらに、温川左岸の道行く人々から望める位置にある古墳だったのであろう。6世紀前半に無袖横穴式石室が、県内各所に築かれた時に、いち早くその動きに乗って石室を構築していること、交通路として機能していたと推定される弥生後期～10世紀に亘る集落が継続していること、特にその中でも集落は、5世紀後半から6世紀に盛んに、7世紀には少し低調となるも、6世紀前半から7世紀まで、ムラと古墳は連動した動きを示していることが想定されるのである。

古墳の造営が無くなるとともに、墓を造営したことが分かり、古墳から墓への移行が認められる。



第183図 四戸・生原古墳群分布図

第18表 四戸・生原古墳群一覧表

No	上毛古墳 越後番号	群馬県 越後番号	古墳名	所在地	形状	地目	出土品	時期	備考
1	岩島村25号墳	50	十五塚	三島四戸141	円墳	畠	刀、馬具、土器、埴輪 鏡、ガラス玉、土玉、铁耳環、刀子、 針、円筒・朝顔・鞍・大刀・盾・辆・ 人物埴輪	6世紀後半	石室開口
2	岩島村24号墳	49	事業団1号墳	三島四戸112	円墳	畠		6世紀後半	当報告、埋文事業団 H30年調査
3	岩島村23号墳	48	事業団2号墳	三島四戸114	円墳	山林	留金貝、釘	7世紀前半	当報告、埋文事業団 H30年調査
4	漏	漏	事業団3号墳	三島四戸112	円墳	山林	直刀、吊金具、短刀、鏡、刀子、 釘他	7世紀中頃	当報告、埋文事業団 H30年調査
5	岩島村22号墳	47	無名墳	三島四戸114	円墳	畠			削平
6	岩島村21号墳	46	無名墳	三島四戸115	不詳	畠			削平
7	岩島村20号墳	45	無名墳	三島四戸89-1	円墳	墓地			削平
8	岩島村15号墳	43	無名墳	三島四戸88-1	円墳	畠			削平
9	岩島村13号墳	10	群大田号墳 (らいでん塚)	三島四戸26-1	円墳	畠	刀片、土器、埴輪片	6世紀中頃	群大尾崎研究室、S39 年調査、石室開口
10	岩島村14号墳	42	無名墳	三島四戸26-1	円墳	宅地	土器、埴輪		削平
11	岩島村16号墳	9	群大II号墳	三島四戸87	円墳	畠	土器、馬具	7世紀前半	群大尾崎研究室、S39 年調査、石室開口
12	岩島村17号墳	44	無名墳	三島四戸87	円墳	畠			削平
13	漏	4	四戸86番地古 墳	三島四戸86	不詳	畠			削平
14	漏	7	群大IV号墳 (鳳来塚)	三島四戸85	円墳	畠	管玉、切子玉、纏玉、ガラス玉、 上玉、鏡環、直刀、鉢、鏡、弓 飾金具、刀子、鎧、繩状工具、 (社金具)、埴輪片	6世紀前半	群大尾崎研究室、S42 年調査、石室開口
15	漏	5	四戸85番地古 墳	三島四戸85	円墳	畠	直刀、六窓跨、管玉、ガラス玉?		削平
16	岩島村19号墳	8	群大I号墳 (じゅうに塚)	三島四戸77	円墳	社地	管玉、切子玉、ガラス玉、上玉、直刀、 鏡、鏡、埴輪、土器、石製模造品	6世紀前半	群大尾崎研究室、S39 年調査、石室開口
17	岩島村18号墳	192	無名墳	三島四戸76	円墳	山林			削平
18	岩島村26号墳	51	無名墳	三島四戸71-1	円墳	宅地	勾玉、管玉、玉類		削平
19	岩島村21号墳	56	無名墳	三島四戸68	(前方 後円 墳)	畠	玉類、金環、土器		削平
20	岩島村30号墳	55	無名墳	三島四戸59	不詳	道路			削平
21	岩島村27号墳	52	無名墳	三島四戸53-1	円墳	宅地			削平
22	岩島村28号墳	53	無名墳	三島四戸53-2 甲、56-2	不詳	宅地			削平
23	岩島村29号墳	54	無名墳	三島四戸56-2	円墳	畠	直刀		削平
24	岩島村34号墳	59	無名墳	三島四戸384	円墳	畠	刀、玉類、土器、埴輪		削平
25	岩島村35号墳	60	無名墳	三島四戸373	円墳	畠			削平
26	岩島村32号墳	57	無名墳	三島四戸805	円墳	畠	ガラス玉		石室開口
27	岩島村33号墳	58	無名墳	三島四戸806	円墳	畠			石室開口
28	岩島村36号墳	61	無名墳	三島生原435	不詳	畠			削平
29	岩島村37号墳	62	無名墳	三島生原485	円墳	畠			削平
30	岩島村38号墳	63	無名墳	三島生原488-2	円墳	畠			削平
31	岩島村41号墳	66	無名墳	三島生原509	円墳	畠	金環		
32	岩島村40号墳	65	無名墳	三島生原510	円墳	畠	勾玉、金環		
33	岩島村39号墳	64	無名墳	三島生原511	円墳	畠	馬具		削平
34	漏	1	生原遺跡1号 墳(生原620番 地古墳)	三島生原620	帆立貝 形	畠	金環、勾玉、ガラス玉、刀、鏡、円筒・ 朝顔・家・人物埴輪。(直刀、刀子、 土器、人物埴輪)	6世紀後半	吾妻町教委、H6調査
35	岩島村42号墳	2	生原遺跡2号 墳	三島生原620	円墳	畠	円筒埴輪。(勾玉、金環、管玉、直刀)	6世紀後半	吾妻町教委、H6調査
36	岩島村43号墳	72	無名墳	三島生原580-1	円墳	畠	勾玉、切子玉、纏玉、金環		削平

第3節 四戸の古墳群を中心とした副葬品からみた吾妻地域の古墳と集落の変遷について

はじめに

四戸の古墳群を整理する中で、以前調査した群馬大学の調査分を含めた資料を見通すと、6世紀前半から7世紀中頃までの古墳の様相が副葬品の編年を通して明らかになった。また、吾妻川中流域周辺で、副葬品が明らかになっている古墳がいくつかあり、それらの資料と併せて吾妻川中流域の古墳の編年を、四戸の古墳群を中心にして行う。また、吾妻地域の古墳と集落の状況を概観する。吾妻川下流域の利根川合流域に近い渋川地区の古墳は、榛名山東麓地域の古墳文化を示すものとしてその概要を示すことにとどめる。

竪穴系石槨(5世紀後半～末)(第184図)

四戸の古墳群では横穴式石室導入前の古墳は見つかっていないが、吾妻地域では、横穴式石室導入前の竪穴系石槨が2つ調査されている。中之条町の石ノ塔古墳と東吾妻町の机古墳である。

石ノ塔古墳(第184図①)（杉山2008）は、中之条町南西部の四万川と吾妻川の合流付近の最下段の河岸段丘崖に築かれた古墳である。墳丘が畑の耕作により無くなっていたが、葺石の根石の確認から18m前後の径があったと推定される。埴輪も出土したが器種等は不明である。周堀も存在したと想定されている。主体部は、掘方を持ち、箱式棺状の竪穴系石槨である。壁は板石状の立石を掘方の床面に差し込んで構築している。石室は粘土によって密閉し、石槨の周りも川原石の転石で裏込めしており、非常に丁寧な造りである。長さ1.8m、深さ0.32～0.42cm、北短側壁幅0.48m、南短側壁幅0.32mの北頭位である。鹿角装刀子が2本出土しており(7・8)、うち1本は完形である。鹿角柄が全体に湾曲している。県内の鹿角装刀子の西端出土例である。5世紀中頃から出現する曲刃鎌や無肩式の袋柄斧も出土している。又、全長86.1cm、刃元幅3.2cmの内反りぎみで、茎は直の片角闊で直線状の一文字尻の茎尻で、木鞘と木柄が一部遺存している直刀(5)と、全長67.5cmで刃元幅4.2cmの中細両闊の茎尻形態不明の直刀(6)がある。石ノ塔古墳が含まれる15m以上20m未満の古墳の副葬品として、刀と刀子と鏡の組み合わせが多い傾向がある(杉山2017)が、

このように豊富な副葬品を持つ例はこのクラスでは珍しく、この古墳の被葬者が重要な人物であったことを示す。年代は、副葬品からすると5世紀後半である。

机古墳(第184図②)は、吾妻川をさらに遡り、四戸の古墳群を過ぎて3kmの、吾妻川左岸の河岸段丘に位置する。調査された古墳では、群馬県西端である。墳丘は明瞭でなく、葺石・埴輪も見つからなかった。主体部は、箱式棺状の竪穴系石槨で、板石を立石状に差し込んで構築している。長さ1.7m、深さ0.25～0.31cm、北側壁0.43m、南短側壁0.31mの北頭位である。石槨を粘土で覆うこともなく、周りに転石で石を詰めず、側壁の周りに、板石片を無造作に詰め込んでいるのみである。管玉が数個出土したことであるが、出土位置・現在の所在ともに不明である。少なくも装身具が副葬されたことが推定される。

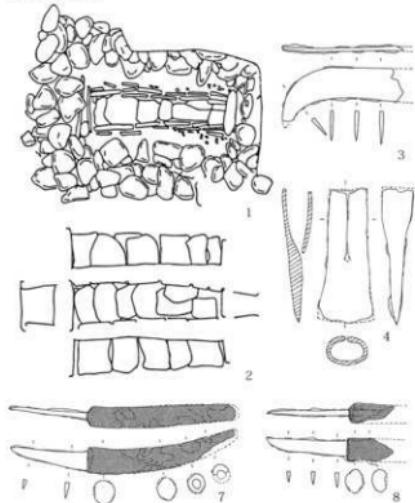
石ノ塔古墳と机古墳を比べると、墳丘の有無、葺石・埴輪の有無、石槨の構造、副葬品の質・量からして明らかに差異がある。しかし、竪穴系石槨の構造自身は板石を差し込んで造る箱式棺状であることなど近似しており、時期的にはほぼ同時期のものとして良いだろう。年代は、5世紀後半と推定する。横穴式石室が構築される以前の吾妻地域の古墳として、これらの古墳が現在の所、吾妻地域で最も古い古墳である。

無袖横穴式石室(6世紀前半～中頃)(第184・185図)

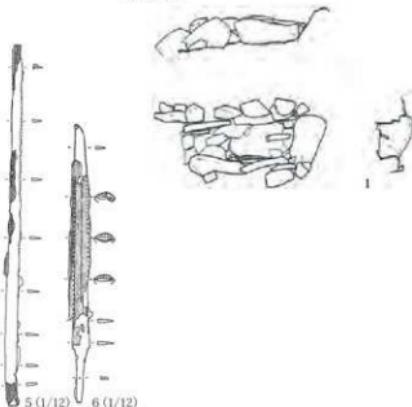
次に出現するのが、無袖横穴式石室である。下郷71号墳(第184図③)は、東吾妻町榛名山北東麓の吾妻川の右岸の河岸段丘上にある古墳で、墳丘は梢円形墳で、11×7mを有する。積石塚である。無袖横穴式石室で、全長5.9m、樋石により玄室と羨道を区分している。玄室長3.0m、奥壁幅1.0mである。前庭状の方形の施設が羨道前面に造作されている。古墳の構築面がHr-FAのすぐ上であり、降下後まもなく構造されたものと思われる。副葬品は豊富で、装身具は銅鉗2、銅環2、管玉(緑色凝灰岩製1、碧玉製4)5、水晶製切子玉1、棗玉(緑色凝灰岩製6、碧玉製2)8、琥珀製棗玉12、埋木製棗玉2、算盤玉(緑色凝灰岩製1、碧玉製1)2、緑色凝灰岩製平玉1、土玉2、ガラス玉153、武器は、素環頭大刀1、直刀1、短刀1、鐔2、刀子1、弓鉄金具4、長頭脚抉長三角形鐵16、長頭長三角形鐵8、馬具が、大型矩形立開環状鏡板付轡、四隅突出四橋状鉄地金鉄張辻金具3、

第3節 四戸の古墳群を中心とした副葬品からみた吾妻地域の古墳と集落の変遷について

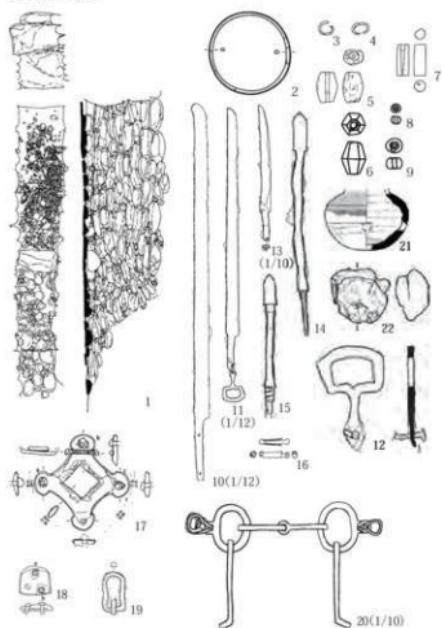
①石ノ塔古墳



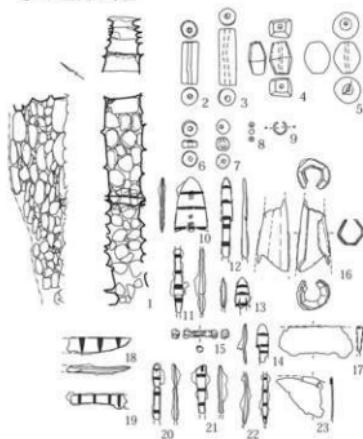
②机古墳



③下郷71号墳



④四戸群大IV号墳



- ①・② 石室 1/60
- ③・④ 石室 1/100
- 玉類 1/3 土器 1/6
- 鉄器 1/4 • 1/10 • 1/12

第184図 吾妻川中流域古墳の主体部・副葬品(1)

コハゼ形留金具1、貞金具多数、絞具3が出土した。注目すべきは、鉄製素環頭大刀(11・12)で、県内に5例あるうちの1例で、5世紀後半から6世紀前半にかけて出土するもので、半島との関係を示唆するものである。大型矩形立環状鏡板付櫛(20)は北部九州との関連性が考えられる資料である。また、四隅突出四橋状鉄地金鉢張辻金具(17)は、全国で2例目であり、もう1例は香川県さぬき市尾崎西遺跡古墳ST03に類似がある。また、多種多様の玉類が納められているのも特徴である。鉄鐵を見ると、長頸鐵でも頭部の長いものと短いものが共存している。これは5世紀から6世紀にかけての変化を示すもので、先ほどの玉類の多種多様化同様の5世紀から6世紀への変換期に特徴的なものである。Hr-FAが埴丘直下にあることも含めて、6世紀初頭という年代が比定できる。

群大IV号墳(第184図④)は、埴丘径8mの円墳で、葺石があり埴輪が葺石の根石付近から出土している。樋石により玄室と羨道を分けている。無袖横穴式石室で、石室長4.1m、玄室長1.99m、玄室幅0.71m、羨道長2.11m、羨道幅0.58mである。副葬品は、装身具が、銀製小環2、「葉ろう石」製管玉4、デイサイト質凝灰岩製管玉12、「葉ろう石」製三角柱玉1、「葉ろう石」製四角稜切子玉1、「葉ろう石」製環玉1、「葉ろう石」製大型白玉4、デイサイト質凝灰岩製丸玉2、ガラス玉1が出土している。武器は、直刀片多数、多角稜鉾柄片1、鐵が平根短茎鉢抉長三角形鐵1、有頸鉢抉長三角形鐵2、長頸片逆刺長三角形鐵3、長頸鉗抉長三角形鐵3、弓飾鉾1がある。馬具の可能性のある破片があり、群大調査時には鍛金された辻金具1個体分が出土したと報告されており、馬具があったことは確かである。工具は刀子片3、鑿片14、鉈、鍔状工具片3が出土している。以上の副葬品から分かるのは、装身具に多種多様の玉類があること。管玉はすべて両面穿孔であること。刀と鉢を所持していること。小型農工具の種類が多いことなどに特徴がある。これらは5世紀末から6世紀前半にかけての特徴的な要素である。また、鐵からすると、有頸鉢抉長三角形鐵(12)や長頸片逆刺長三角形鐵(14)が梁瀬二子塚古墳や前二子古墳の鐵の様相と近似している。年代が6世紀初頭から前半にかけてのものと比定できる。

群大I号墳(第185図①)は、埴丘径10m、樋石により

玄室と羨道を分けた無袖横穴式石室である。石室全長5.25m、玄室長2.20m、玄室幅1.20m、羨道長3.05m、羨道幅0.99mである。装身具は、碧玉製管玉8、デイサイト質凝灰岩製管玉4、同破片2、水晶製切子玉3、ガラス丸玉・青6、ガラス小玉15(赤1・黄1・緑5・青緑5・青3)、土製漆玉5・琥珀製小玉1がある。武器は直刀柄片1、平根無茎鉢抉長三角形鐵1、長頸長三角形鐵2、長頸鉢抉長三角形鐵1、工具として刀子片1、鉈片?2が出土している。以上の副葬品からすると、装身具は片面穿孔の管玉が多く、水晶製切子玉と赤・黄を含む多色のガラス玉など6世紀前半に比定される。さらに長頸長三角形鐵(10)が、恵下古墳例や久保遺跡例などに近く6世紀前半でも中頃に近いものと比定する。

参考に群大III号墳の図を入れた(第185図②)。埴丘径14m、樋石により玄室と羨道を分けた無袖横穴式石室で、石室全長6.9m、玄室長3.42m、玄室幅1.27m、羨道長3.42m、羨道幅0.97mである。出土遺物が刀片、土器、埴輪が出土したこと以外不明なので副葬品からは不明である。群大I号墳より、長文化した無袖横穴式石室であり、石室の構造で墓道状遺構に近似するものが羨道から延びているのが認められ、6世紀後半の事業団I号墳に繋がる系統と想定される。6世紀中頃に比定したい。

両袖横穴式石室(6世紀後半~7世紀)(第185-186図)

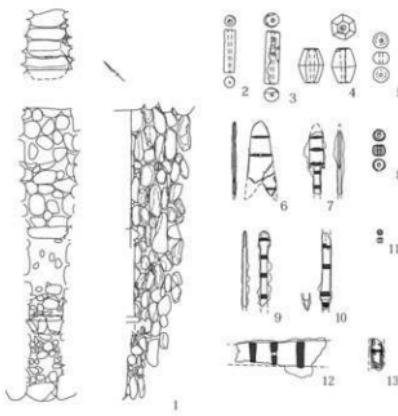
事業団I号墳(第185図③)は、埴丘径12.6mで、葺石、鞍・大刀・盾・鞆・家・人物埴輪を有する。石室全長5.4m、玄室長2.25m、玄室幅1.43m、羨道長3.03m、羨道幅1.10mの両袖横穴式石室である。副葬品は、ガラス玉4、土玉1、鉄耳環1、長頸鐵片、刀子片、針状工具片がある。円筒埴輪の底部調整などから6世紀後半とする。

四戸の古墳群の南に位置する生原古墳群の生原遺跡1号墳(第185図④)は、温川右岸の河岸段丘上に位置している。墳形は明瞭ではないが帆立貝形古墳の可能性がある。直径16mで葺石と埴輪を有する。主体部は、玄室の一部しか調査できなかった。埴輪は、円筒・朝顔形埴輪の他に、人物・馬・家・盾・鞍などが確認できている。副葬品は、勾玉1、ガラス小玉3、金環2、鐵36、釘1である。鐵を見ると長頸化した長頸長三角形鐵(13)と長頸片刃鐵(12)、長頸鉢抉片刃鐵があり、鍔状の間を持つ。鐵の様相から6世紀後半に比定される。

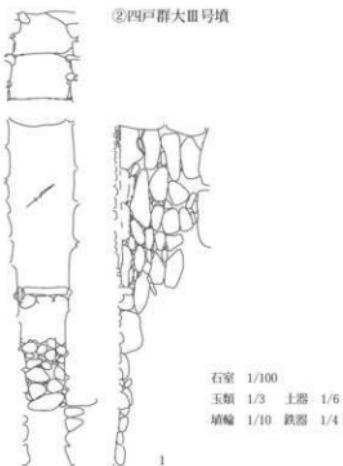
事業団II号墳(第186図①)は、埴丘径11.2mで埴輪は

第3節 四戸の古墳群を中心とした副葬品からみた吾妻地域の古墳と集落の変遷について

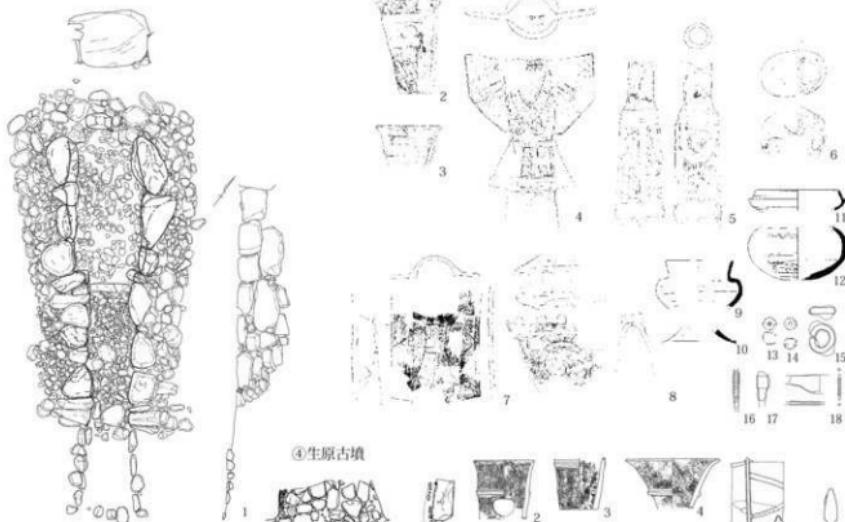
①四戸群大1号墳



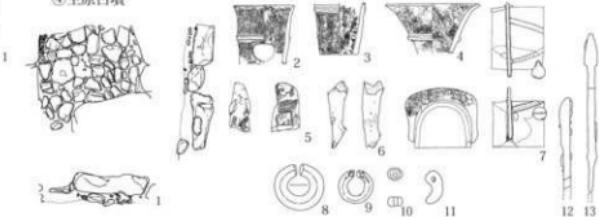
②四戸群大田号墳



③四戸事業団1号墳



④生原古墳



第185図 吾妻川中流域古墳の主体部・副葬品(2)

無い。石室長4.6m、玄室長2.25m、玄室幅1.10m、羨道長2.30m、羨道幅0.73mの両袖横穴式石室で、長頸片刃鐵片1、金具2、釘6以上である。埴輪の無いこと、釘の存在、横穴式石室の様相から7世紀前半に比定される。

事業団3号墳(第186図②)は、墳丘径8m、石室全長3.40+m、玄室長2.17m、玄室幅0.80m、羨道長1.55+m、羨道幅0.50mである。羨道は完存していないので短い。直刀1、吊手金具2、小刀1、平根脇抉長三角形鐵9、平根重抉五角形鐵1、長頸鑿箭鐵11が出土した。刀子片1、釘4も出土した。長頸鑿箭鐵の形態(4・5)や平根鐵(2・3)の種類から7世紀中頃と比定される。

小泉宮戸3号墳(第186図③)は、榛名山北麓、中之条盆地東端の吾妻川右岸の段丘上に位置している。Hr-FA上20cm程の黒色土上に構築されている。径11.1mを測り、多角形状の周縁を有する。葺石を有する。石室は、石室全長5.56m、玄室長2.62m、玄室幅1.55m、羨道長2.94m、羨道幅1.1mの両袖横穴式石室である。遺物は、羨道部を中心に、鐔1、^{はさみ}鐵1、貴金具1、鐵8、刀子1、釘3の鉄製品と、石室前面を中心に、土師器杯6点とこれ以外は須恵器で、杯2、^{はさみ}竈1、長頸壺2、横瓶1、平瓶1、甕2が出土している。鐵の形態を見ると長頸鑿箭鐵の刃が先端に集約した新しい形態(15)で7世紀後半に比定できる。ただし、鐵等の鉄製品の出土地点が羨道部閉塞部を中心としているので追跡の可能性も考える必要がある。土器を見ると土師器杯からは7世紀後半の様相を示しており、須恵器には8世紀に比定されるものもある。7世紀中頃から後半にかけて焼造されて8世紀まで利用されたものと想定される。

名久田村8号墳(第186図④)は、名久田川流域の上流域左岸に位置する径11mほどの円墳である。石室全長4.8m、玄室長2.5m、玄室幅1.78m、羨道長2.3m、羨道幅1.1mの自然石乱石積の両袖型横穴式石室である。副葬品は、白玉4、管玉1、切子玉2、ガラス製小玉33、金環4、巡方4、丸鞘1、鐔1、鞘金具3、鐵6、素環鏡板付轡1を出土している。玄室と羨道の長さがほぼ同じで、玄室の長さに対して幅が広い。副葬品からしても、巡方・丸鞘を出土するなど8世紀に入ても利用している7世紀後半の最終末の古墳として良いだろう。

以上、副葬品から見て、5世紀後半から7世紀後半ま

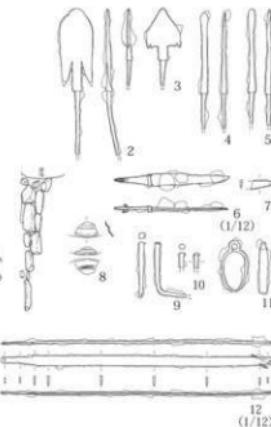
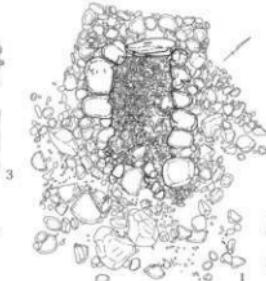
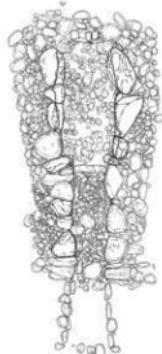
での古墳の編年を吾妻地域内で行うことができた。この編年をもとに、吾妻川中流域全体での古墳と集落の動向について記すことにする(第187図、第19・20表)。

古墳の動向(第187図①、第19表)

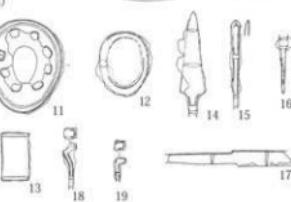
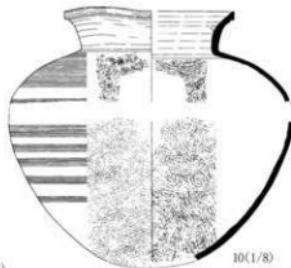
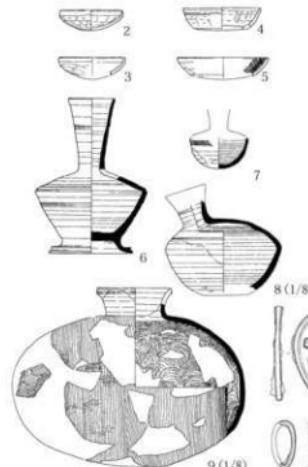
吾妻西部地域では、古墳として可能性が高いのは長野原町に2基(1・2)ある。それより以西・以北の嬬恋町や草津町の資料は古墳としては疑わしい(杉山2020)。長野原町に所在する古墳も明確な証拠があるわけではないが、特に長野原町1号墳(1)は、横穴式石室の側壁と想定される石列が地表にごく一部露出しており、可能性が高い。さらに旧信州街道沿いにあたる旧坂上村に散在する古墳(3~7・15・16)も可能性が高い。対して、吾妻川の川幅が狭まり交通の難所となる地域での古墳(8~10)については可能性が低いと考えている。現状での調査古墳での西端は、吾妻川左岸では、5世紀後半~末の堅穴系小石櫛の机古墳(17)、吾妻川右岸では、7世紀前半の両袖横穴式石室の唐堀遺跡1号墳(21)である。いずれも吾妻川中流域の中之条盆地に入る手前の吾妻川の両河岸段丘上にある。これより以東は、吾妻川右岸では、温川との合流域の四戸古墳群(26~29・42~61)、温川流域の生原古墳群(31~41)、吾妻川右岸域をさらに東に下り、川戸(62~89)・下郷(114~131)古墳群、金井古墳群(128~130)、岩井古墳群(141~144)、植栄古墳群(147~149)、小泉古墳群(152~154)と連絡つながり、旧東村に点的にある古墳(155~157、163~175)を過ぎると吾妻川下流の渋川地域の金井東裏遺跡1・2号墳(250・251)などに繋がる。吾妻川右岸では、特に四戸の古墳群から川戸・下郷古墳群は古墳数が多い。吾妻川左岸を見ると、矢倉古墳群(19・20・22~25)、埴輪から6世紀前半に比定される諏訪前遺跡1号墳(96)、下之町古墳群(97~113)、沢尻古墳(132)と続き、石ノ塔古墳(183)、市城古墳(230)に至り、旧小野上村の古墳(237~242)を過ぎ、吾妻川下流の旧子持村の中ノ峯古墳(354)などに続く。四万川流域には、山田古墳群(176~182)、笛吹塚古墳(178)などがある。四万川と吾妻川に挟まれた須郷沢川のある原町周辺にも数多くの古墳がある。寺久保古墳(95)、猿田古墳(91)、下須郷古墳(90)などである。名久田川流域には6世紀前半に比定される無袖横穴式石室の樅塚古墳(214)、胴張の横穴式石室が7世紀に比定される小塚古墳(210)、名久田8号墳(208)

第3節 四戸の古墳群を中心とした副葬品からみた吾妻地域の古墳と集落の変遷について

①四戸事業団2号墳



③小泉宮戸3号墳



④名久田8号墳



石室 1/100

土器 1/6 • 1/8

鉄器 1/4 • 1/12

第186図 吾妻川中流域古墳の主体部・副葬品(3)

などがある。なお、旧田村近郊の吾妻川右岸の特に榛名山北麓の標高の高い地点にある古墳(150・151・159～162・166・167・175)などは古墳の可能性は低い。石ノ塔古墳と机古墳を除いては、吾妻川中、上流域は6・7世紀の古墳が中心である。特に吾妻川右岸の四戸の古墳群・生原古墳群36基を有し、他の古墳を含めた総数51基を数える旧岩島村の地域と、吾妻川右岸の川戸・下郷古墳群41基と、吾妻川左岸の原町の36基、総計81基に達する旧原町の地域が2大中心地域で、吾妻川中流域の古墳築造の中心地である。反対に、吾妻川下流域に近い吾妻川左岸の旧小野上村や右岸の旧東村では、榛名の2回の爆発に伴う火山灰・軽石・火碎流による被災によりかなりの打撃を受け古墳・集落とともにあまり認められない。

集落の動向(第187図②、第20表)

集落の調査はあまり進んでいない。特に西吾妻には、嬬恋村に1例(1)あるが、長野原町に5棟の建物(2～4)があるのみで極めて少ない。建物の数が少ないと比例して古墳の数も長野原町に数基ある可能性があるのみである。吾妻川中流域左岸では前畠遺跡(7)付近から古墳時代の集落が出現する。特に四戸遺跡(B)の付近から、4世紀より古墳時代の集落が出現し、5世紀後半には急増することになる。6・7世紀から8世紀へと継続して集落が続くのは、吾妻川中流域以降では、四戸遺跡と中之条町川端・天神遺跡(25・26)の2ヶ所で、両方ともに信濃や越後との交通路の基点となるところである。川端・天神遺跡は中之条町の市街地に入り、あまり古墳の残りが良くない。対して四戸遺跡は、四戸の古墳群という25～27基に及ぶ古墳群を擁しており、ムラの上層階級の人々の墓として6世紀前半から7世紀まで古墳を築いたことが分かった。拠点集落のそばに墓域があった例である。また、古墳時代から古代への移行期の7世紀の後半には、掘立柱建物群を伴った遺跡が下郷古墳群(20)、小泉宮戸遺跡(32)、川端・天神遺跡(26・25)などにあり、吾妻郡・郷に関わる施設の可能性が高い。

吾妻川中流域の集落と古墳

上述したように、吾妻川上流は、散発的に建物や古墳があるので継続したムラや古墳は無い。中流域は、前期から始まり、特に5世紀後半に、内斜・内湾口縁杯の形態を持つ杯に代表される榛名山南東麓・渋川地域の土器群を伴って、集落が形成される。古墳も同じように5

世紀後半から竪穴系石槨が築造され、無袖から両袖の横穴式石室が継続して造られる。また埴輪も少なくとも6世紀後半の埴輪は、藤岡産埴輪が持ち込まれており、榛名山南西麓を通って四戸に至るルートがあったことを示す。そのルートが5世紀中頃の導入時にもあった可能性があり、吾妻川下流から中流に向けて榛名山北麓を通るルートと高崎・藤岡地区から榛名山南西麓を通るルートの両方があった可能性が高い。

集落を支える、農作物の生産については、弥生時代後期の段階から、圧痕同定分析によりイネの栽培が盛んであったことが分かっており、実際に厚田中村遺跡では、Hr-FA下の水田が調査され、イネ栽培が展開されたことが判明している。吾妻川中流域の山間部でもイネ栽培がおこなわれていたことを証明するものである。

吾妻川流域に無袖横穴式石室が、群大四戸I、IV号墳に代表されるように、早い時期に築造されている。また、無袖横穴式石室を持つ被葬者については、渡来系文化の要素を持っているとの指摘(大谷2010)がなされている。群大四戸IV号墳には、現在は確認できないが、鍍金されたた辻金具が1個体分出土したことが報告されており、同じ無袖横穴式石室である下郷71号墳からも、北部九州との関連が想定される大型矩形立闇環状鏡板付轡や、全国で2例目の出土である四隅突出四橋状鉄地金銅張辻金具など珍しい馬具を出土している。以上のことから馬に関わる副葬品が含まれた渡来系の要素が、吾妻川中流域の最初期の無袖横穴式石室の被葬者にはある。このことは、吾妻地域の当時の交通路の拠点に馬の飼育に関わるような人々が入ってきたことを示していると想定している。それが、後代の市城の牧につながるものと思われる。

7世紀になっても、吾妻川中流域では、継続して四戸遺跡と中之条川端・天神遺跡が拠点集落として在り続ける。四戸遺跡には墓域として四戸の古墳群が展開している。金井庵寺が7世紀後半に建造されたことや、吾妻郡・郷に關係する施設と想定される掘立柱建物群がいくつか発見されていることを見ても、この地が時代の変化に応じて、古墳の築造から寺の造営、初期官衙の造営と変化して引き続き律令制にも盛行していったことを示すものである。

吾妻川下流域の動向

吾妻川下流域には、渋川・旧子持村地区が入り、数多

多くの古墳と集落がある。前期から終末期まであるが、榛名山二ツ岳の二度の噴火による被災から特に榛名山北東麓は大打撃を受けるも、Hr-FP 軽石降下が 2m を超える地域以外は復興を遂げている。古墳も前期から終末期まで継続して築かれている。前期 4 世紀後半の行幸田山 A 区 1 号墳から、5 世紀後半～末の東町古墳、坂下古墳群、金井丸山古墳、金井東裏遺跡 1・2 号墳と積石塚と竪穴系小石槨を持つ一連の古墳がある。6 世紀に入ると無袖横穴式石室が伊熊古墳、有瀬 1 号墳などに導入され、さらに中ノ峯古墳のように 6 世紀中頃まで無袖横穴式石室が継続される。6 世紀には、榛名山二ツ岳の 2 度の爆発により榛名山東麓から北麓にかけて被災するも、一回目の Hr-FA 降下には被災後の復興を成し遂げ、2 度目の Hr-FP により 2m 以上の軽石が降下した地区は放棄されている。ただし、それ以外の地域は集落が営まれ、特に 7 世紀には多くの集落・古墳が造営されている。このように、吾妻川下流域は、榛名山南東麓の影響を受けて 5 世紀中頃から集落が急増し、古墳を造営するも、6 世紀の 2 回の榛名山二ツ岳爆発により被害を受けて、6 世紀末から 7 世紀にかけて復興するという状況である。

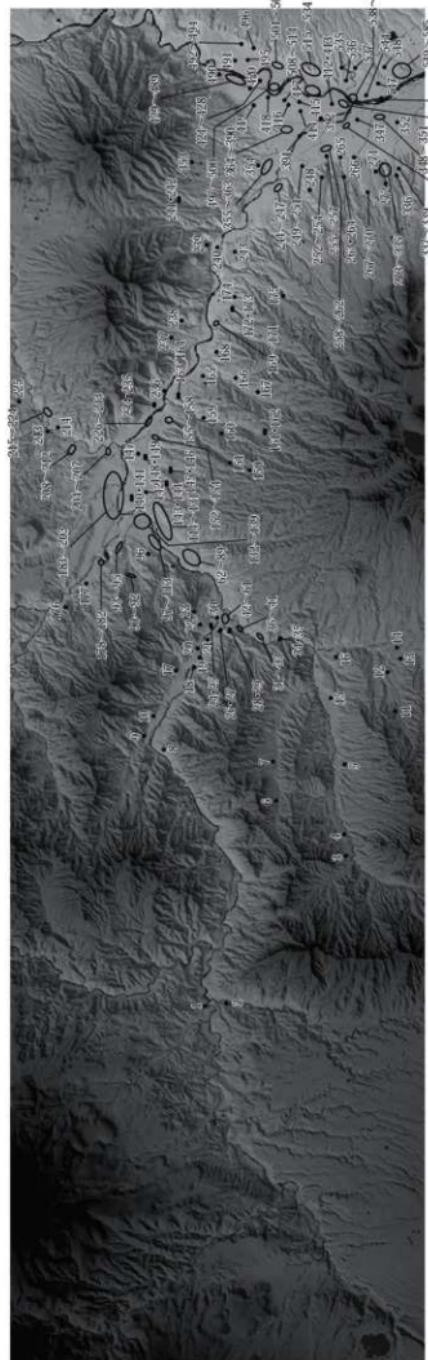
まとめ

吾妻地域においては、上流域では、古墳はごく少数で、建物も孤立的に 1、2 棟あるのみである。中流域では、発掘調査により明らかになった机古墳と唐堀遺跡 1 号墳を西端にして、古墳とともに集落も急激に増加する。特に四戸遺跡と中之条町川端・天神遺跡は拠点集落として重要である。いずれも交通路の基点であり、四戸遺跡には四戸の古墳群が墓域として集落と連動している。特に 6 世紀に入って造営された初期の無袖横穴式石室の被葬者が馬具を副葬品として伴っていることなどから、当時の陸上交通に变革をもたらした馬の飼育に関わる集団の長と想定される。また、7 世紀後半には、郡・郷と関係する施設が中之条盆地を中心に下郷古墳群、川端・天神遺跡、小泉宮戸遺跡などで造営され、金井廃寺の建立とともに古代律令制に向けて継続した繁栄を見せている。

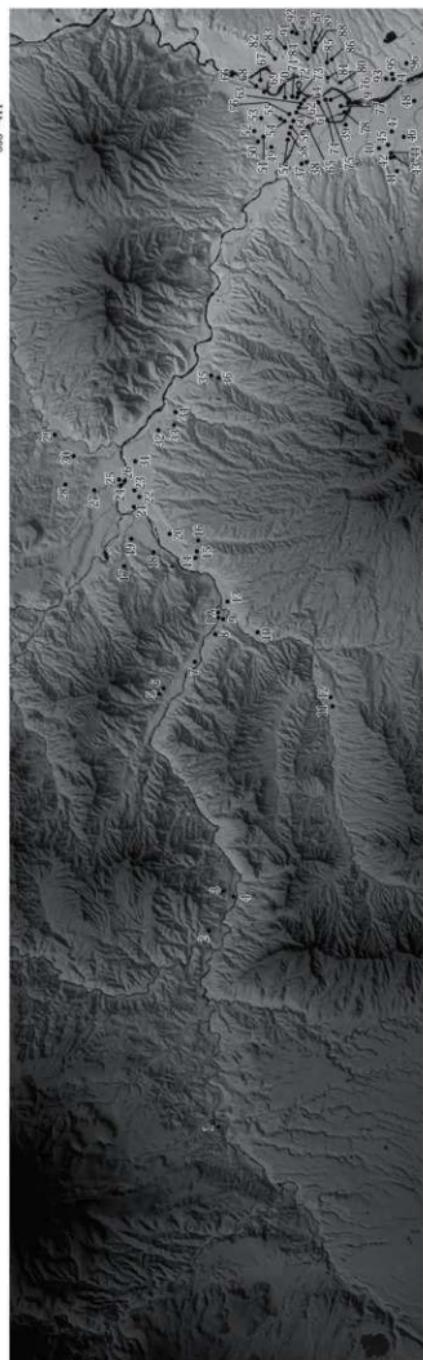
榛名山北麓の特に旧東村地区や旧小野上地区には、2 回の榛名山爆発の被災により、集落・古墳ともに少ない。

吾妻川下流になると、右岸では、金井東裏遺跡・金井下新田遺跡が Hr-FA 前の集落を代表し、左岸では中郷田尻遺跡や黒井峯遺跡が Hr-FP 降下前までの集落を代

表する。また古墳も、5 世紀の竪穴系石槨墳から 6 世紀の無袖横穴式石室、6 世紀後半～7 世紀の両袖横穴式石室へと続き、一部の軽石の大量降下地区を除き復興する。吾妻川下流域は、榛名山南東麓の勢力と緊密な関係を保ちながら発展した地域であり、榛名山の 2 回の爆発で被災し、復興した地域である。今後、中流域との交流の実態を明らかにする必要がある。



集落・散地



第187図 吾妻川流域の古墳と集落・散布地分布図

第3節 四戸の古墳群を中心とした副葬品からみた吾妻地域の古墳と集落の変遷について

第19表 吾妻川流域古墳一覧表

No.	名稱	所在地	墳形	規模(m)	埋葬物設	No.	名稱	所在地	墳形	規模(m)	埋葬物設
1	始築：長野町1号墳	長野原町大津	円	66.0	-	69	始築：原町34号墳	(吾妻郡原町川口)	円	9.0	-
2	初築：長野町2号墳	長野原町興高屋	円	15.3	-	70	始築：原町35号墳	(吾妻郡原町川口)	円	7.2	-
3	初築：坂上村9号墳	(吾妻郡坂上村須田町)	円	不詳	-	71	始築：原町36号墳	(吾妻郡原町川口)	円	12.0	-
4	初築：坂上村8号墳	(吾妻郡坂上村須田町)	円	17.1	-	72	始築：原町37号墳	(吾妻郡原町川口)	円	12.6	-
5	始築：坂上村1号墳	(吾妻郡坂上村本郷)	円	不詳	-	73	始築：原町38号墳	(吾妻郡原町川口)	不詳	(不詳)	-
6	初築：坂上村2号墳	(吾妻郡坂上村大和木)	円	4.8	-	74	始築：原町39号墳	(吾妻郡原町川口)	円	9.0	-
7	初築：坂上村10号墳	(吾妻郡坂上村大和木)	円	9.3	-	75	始築：原町40号墳	(吾妻郡原町川口)	円	16.2	-
8	古墳古墳	東吾妻町三島	不明	-	不明(未調査)	76	始築：原町41号墳	(吾妻郡原町川口)	不詳	(不詳)	-
9	古墳古墳	東吾妻町松谷	不明	-	不明(未調査)	77	始築：原町42号墳	(吾妻郡原町川口)	円	9.0	-
10	富士山古墳	東吾妻町松谷	不明	-	不明(未調査)	78	始築：原町43号墳	(吾妻郡原町川口)	円	14.7	-
11	初築：坂上村3号墳	(吾妻郡坂上村本郷)	円	9.0	-	79	始築：原町45号墳	(吾妻郡原町川口)	円	9.9	-
12	初築：坂上村4号墳	(吾妻郡坂上村本郷)	円	6.0	-	80	始築：原町47号墳	(吾妻郡原町川口)	円	(不詳)	-
13	初築：坂上村5号墳	(吾妻郡坂上村本郷)	円	10.8	-	81	始築：原町48号墳	(吾妻郡原町川口)	不詳	(4.5)	-
14	初築：坂上村6号墳	(吾妻郡坂上村本郷)	円	17.1	-	82	始築：原町49号墳	(吾妻郡原町川口)	不詳	(4.5)	-
15	初築：坂上村2号墳	(吾妻郡坂上村本郷)	円	不詳	9.0	83	始築：原町50号墳	(吾妻郡原町川口)	不詳	25.8	-
16	初築：坂上村7号墳	(吾妻郡坂上村人代)	円	23.1	-	84	始築：原町51号墳	(吾妻郡原町川口)	円	9.9	-
17	机古墳	東吾妻町岩下	不明	-	不明(未調査)	85	始築：原町52号墳	(吾妻郡原町川口)	円	(不詳)	-
18	御所山古墳	東吾妻町岩下	不明	-	不明(未調査)	86	始築：原町53号墳	(吾妻郡原町川口)	円	10.8	-
19	御所山古墳	東吾妻町久食	不明	-	横六系(石室)	87	始築：原町58号墳	(吾妻郡原町川口)	円	9.9	-
20	無名古墳	東吾妻町久食	不明	-	横六系(石室)	88	始築：原町59号墳	(吾妻郡原町川口)	円	(不詳)	-
21	店屋原跡1号墳	東吾妻町三島	円	-	不明(未調査)	89	始築：原町77号墳	(吾妻郡原町新井)	円	(不詳)	-
22	のじ塚古墳	東吾妻町久食	不明	-	不明(未調査)	90	下治古墳(原町55号墳)	(吾妻郡原町下治郷)	円	4.5	天井石
23	無名古墳	東吾妻町久食	不明	-	不明(未調査)	91	鶴田古墳(原町56号墳)	(吾妻郡原町鶴田)	円	14.4	天井石
24	円錐古墳	東吾妻町久食	不明	-	不明(未調査)	92	初築：原町57号墳	(吾妻郡原町上野)	円	24.0	-
25	ボタル古墳	東吾妻町久食	円	17.0	-	93	初築：原町24号墳	(吾妻郡原町八幡郷)	円	(不詳)	-
26	無名古墳	東吾妻町久食	不明	-	不明(未調査)	94	久保寺古墳(原町25号墳)	(吾妻郡原町久保寺)	円	10.8	横六系(石室)
27	無名古墳	東吾妻町三島	円	-	不明(未調査)	95	原町古墳	(吾妻郡原町鶴下)	円	(不詳)	-
28	無名古墳	東吾妻町三島	不明	-	横六系(石室)	96	講説古墳(原町1号墳)	(東吾妻町原町)	円	19.2	横六系(石室)
29	無名古墳	東吾妻町三島	不明	-	横六系(石室)	97	下之立古墳群(原町2号墳)	(東吾妻町金井)	不明	横六系(石室)	-
30	じゅうご古墳	東吾妻町三島	円	-	不明(未調査)	98	初築：原町1号墳	(吾妻郡原町上之町)	円	4.5	-
31	生垣跡1号墳	東吾妻町三島	長方	16.0	横六系(石室)	99	初築：原町3号墳	(吾妻郡原町下之町)	円	5.7	-
32	生垣跡2号墳	東吾妻町三島	円	-	不明(削除)	100	初築：原町4号墳	(吾妻郡原町下之町)	円	12.0	-
33	無名古墳	東吾妻町三島	不明	-	不明(未調査)	101	初築：原町5号墳	(吾妻郡原町下之町)	円	6.0	-
34	無名古墳	東吾妻町摩田	不明	-	横六系(石室)	102	初築：原町6号墳	(吾妻郡原町下之町)	円	6.9	-
35	無名古墳	東吾妻町摩田	不明	-	不明(未調査)	103	初築：原町7号墳	(吾妻郡原町下之町)	円	8.1	-
36	無名古墳	東吾妻町三島	不明	-	不明(未調査)	104	初築：原町8号墳	(吾妻郡原町下之町)	円	10.8	-
37	無名古墳	東吾妻町三島	不明	-	横六系(石室)	105	初築：原町9号墳	(吾妻郡原町下之町)	円	18.0	-
38	無名古墳	東吾妻町三島	円	-	不明(未調査)	106	初築：原町10号墳	(吾妻郡原町下之町)	円	10.8	-
39	無名古墳	東吾妻町三島	不明	-	不明(未調査)	107	初築：原町11号墳	(吾妻郡原町南町)	円	(不詳)	-
40	無名古墳	東吾妻町三島	不明	-	不明(未調査)	108	初築：原町12号墳	(吾妻郡原町下之町)	円	5.4	-
41	無名古墳	東吾妻町三島	不明	-	不明(未調査)	109	初築：原町13号墳	(吾妻郡原町下之町)	円	(不詳)	-
42	四(?)古墳	東吾妻町三島	不明	-	不明(未調査)	110	初築：原町14号墳	(吾妻郡原町下之町)	円	(不詳)	-
43	四(?)古墳	東吾妻町三島	不明	-	不明(未調査)	111	初築：原町15号墳	(吾妻郡原町南町)	円	(不詳)	-
44	四(?)古墳	東吾妻町三島	円	8.0	横六系(石室)	112	初築：原町16号墳	(吾妻郡原町南町)	不詳	(不詳)	-
45	四(?)古墳	東吾妻町三島	円	10.4	横六系(石室)	113	初築：原町19号墳	(吾妻郡原町下之町)	円	14.4	-
46	四(?)古墳	東吾妻町三島	円	10.6	横六系(石室)	114	下原古墳群(原町7号墳)	(東吾妻町川口)	横円	10.0×7.0	横六系(石室)
47	四(?)古墳	東吾妻町三島	円	15.0	横六系(石室)	115	金井古墳群(原町7号墳)	(東吾妻町金井)	不明	横六系(石室)	-
48	無名古墳	東吾妻町三島	不明	-	不明(未調査)	116	原町6号墳	(吾妻郡原町川口)	円	(不詳)	-
49	無名古墳	東吾妻町三島	不明	-	不明(未調査)	117	初築：原町1号墳	(吾妻郡原町川口)	円	(不詳)	-
50	無名古墳	東吾妻町三島	不明	-	不明(未調査)	118	初築：原町2号墳	(吾妻郡原町川口)	円	37.5	-
51	無名古墳	東吾妻町三島	不明	-	不明(未調査)	119	初築：原町3号墳	(吾妻郡原町川口)	円	14.7	-
52	無名古墳	東吾妻町三島	不明	-	不明(未調査)	120	初築：原町4号墳	(吾妻郡原町川口)	円	(不詳)	-
53	無名古墳	東吾妻町三島	不明	-	不明(未調査)	121	初築：原町65号墳	(吾妻郡原町川口)	円	(不詳)	-
54	無名古墳	東吾妻町三島	不明	-	不明(未調査)	122	初築：原町66号墳	(吾妻郡原町川口)	不詳	(不詳)	-
55	無名古墳	東吾妻町三島	不明	-	不明(未調査)	123	初築：原町67号墳	(吾妻郡原町川口)	不詳	(不詳)	-
56	無名古墳	東吾妻町三島	不明	-	不明(未調査)	124	初築：原町68号墳	(吾妻郡原町川口)	不詳	(不詳)	-
57	無名古墳	東吾妻町三島	不明	-	不明(未調査)	125	初築：原町69号墳	(吾妻郡原町川口)	不詳	(不詳)	-
58	無名古墳	東吾妻町三島	不明	-	不明(未調査)	126	初築：原町70号墳	(吾妻郡原町川口)	円	27.0	-
59	無名古墳	東吾妻町三島	不明	-	不明(未調査)	127	初築：原町72号墳	(吾妻郡原町川口)	円	15.0	-
60	無名古墳	東吾妻町三島	不明	-	不明(未調査)	128	初築：原町73号墳	(吾妻郡原町金井)	円	19.5	-
61	始築：岩鳥町18号墳	(吾妻郡岩鳥町三島)	円	15.3	-	129	初築：原町74号墳	(吾妻郡原町金井)	円	(不詳)	-
62	開拓古1号墳	東吾妻町川口	円	-	横六系(石室)	130	初築：原町75号墳	(吾妻郡原町川口)	不詳	(不詳)	-
63	開拓古2号墳	東吾妻町川口	円	-	横六系(石室)	131	初築：原町76号墳	(吾妻郡原町川口)	不詳	(不詳)	-
64	初築：原町29号墳	(吾妻郡原町川口)	円	18.0	-	132	初築：原町78号墳	(吾妻郡原町川口)	不詳	(不詳)	-
65	初築：原町30号墳	(吾妻郡原町川口)	円	11.1	-	133	初築：原町79号墳	(吾妻郡原町川口)	不詳	(不詳)	-
66	初築：原町31号墳	(吾妻郡原町川口)	円	18.0	-	134	初築：原町80号墳	(吾妻郡原町川口)	不詳	(不詳)	-
67	初築：原町32号墳	(吾妻郡原町川口)	円	14.4	-	135	初築：原町81号墳	(吾妻郡原町川口)	不詳	(不詳)	-
68	初築：原町33号墳	(吾妻郡原町川口)	円	18.0	-	136	初築：原町82号墳	(吾妻郡原町川口)	不詳	(不詳)	-

第7章 考察

名稱	所在地	地形	面積(m)	埋設施設
148 湿潤古崎	東吾妻町岩井	円	30.0	横六式石室
149 滅菌槽・清潔長屋古墳	東吾妻町植葉	(不明)	-	横六式石室
150 細窓・太田山23号墳	(吾妻郡太田村植葉)	円	3.3	-
151 細窓・太田山30号墳	(吾妻郡太田村植葉)	円	7.2	-
152 20号墳	東吾妻町小笠	円	16.0	横六式石室
153 細窓・太田山26号墳	(吾妻郡太田村小笠)	不詳	-	-
154 細窓・太田山34号墳	(吾妻郡太田村小笠)	円	5.4	-
155 線付の墳丘	東吾妻町新御舟付	(不明)	6.0	不明(未調査)
156 細窓・東村2号墳	(吾妻郡東村新御)	円	9.0	-
157 細窓・東村3号墳	(吾妻郡東村新御)	円	6.0	-
158 細窓・太田山27号墳	(吾妻郡太田村小笠)	円	10.8	-
159 細窓・太田山28号墳	(吾妻郡太田村小笠)	不詳	(不詳)	-
160 細窓・太田山29号墳	(吾妻郡太田村小笠)	円	3.6	-
161 細窓・太田山30号墳	(吾妻郡太田村小笠)	円	(不詳)	-
162 細窓・太田山29号墳	(吾妻郡太田村小笠)	円	4.8	-
163 細窓・東村1号墳	(吾妻郡東村新御)	円	3.0	-
164 細窓・東村3号墳	(吾妻郡東村新御)	円	5.1	-
165 塵の内塙古墳	北吾妻町奥田	円	6.0×7.0	不明(石路有り)
166 細窓・東村5号墳	(吾妻郡東村五町田)	不詳	(不詳)	-
167 細窓・東村6号墳	(吾妻郡東村五町田)	不詳	(不詳)	-
168 細窓・東村7号墳	(吾妻郡東村五町田)	不詳	(不詳)	-
169 細窓・東村10号墳	(吾妻郡東村五町田)	円	24.9	-
170 細窓・東村12号墳	(吾妻郡東村五町田)	円	5.1	-
171 細窓・東村25号墳	(吾妻郡東村植葉)	円	5.1	-
172 五輪古墳	東吾妻町船島	(不明)	-	横六式石室
173 滅菌槽古墳	東吾妻町船島	(不明)	-	横六式石室
174 細窓・東村55号墳	(吾妻郡東村植葉)	円	3.9	-
175 細窓・東村65号墳	(吾妻郡東村植葉)	円	9.9	-
176 細窓・渋川7号墳	(吾妻郡渋川160)	不詳	(不詳)	-
177 細窓・渋川6号墳	(吾妻郡渋川160)	不詳	(不詳)	-
178 雨垂古墳・鹽原村1号墳	(吾妻郡鹽原村160)	円	9.6	横六式石室
179 細窓・渋川2号墳	(吾妻郡鹽原村160)	円	12.0×15.0	-
180 細窓・渋川3号墳	(吾妻郡鹽原村160)	円	9.0	-
181 細窓・渋川4号墳	(吾妻郡鹽原村160)	円	7.5	-
182 細窓・渋川5号墳	(吾妻郡鹽原村160)	円	7.5×9.0	-
183 石ノ井古墳	中之条町中之条	円	18.0	磐穴式(石室)
184 細窓・中之条17号墳	(吾妻郡中之条町中之条)	円	(不詳)	-
185 細窓・中之条18号墳	(吾妻郡中之条町中之条)	円	(不詳)	-
186 細窓・中之条19号墳	(吾妻郡中之条町中之条)	円	9.6	-
187 細窓・中之条20号墳	(吾妻郡中之条町中之条)	円	6.0	-
188 細窓・中之条21号墳	(吾妻郡中之条町中之条)	円	3.9	-
189 細窓・中之条22号墳	(吾妻郡中之条町中之条)	円	4.2	-
190 細窓・中之条23号墳	(吾妻郡中之条町中之条)	円	6.9	-
191 細窓・中之条24号墳	(吾妻郡中之条町中之条)	円	9.0	-
192 細窓・中之条25号墳	(吾妻郡中之条町中之条)	円	(不詳)	-
193 細窓・中之条26号墳	(吾妻郡中之条町中之条)	円	(不詳)	-
194 細窓・中之条27号墳	(吾妻郡中之条町中之条)	円	(不詳)	-
195 細窓・中之条28号墳	(吾妻郡中之条町中之条)	円	(不詳)	-
196 細窓・中之条29号墳	(吾妻郡中之条町中之条)	円	(不詳)	-
197 細窓・中之条30号墳	(吾妻郡中之条町中之条)	円	(不詳)	-
198 細窓・中之条31号墳	(吾妻郡中之条町中之条)	円	7.5	横六式石室
199 細窓・中之条35号墳	(吾妻郡中之条町中之条)	円	19.5	-
200 細窓・中之条36号墳	(吾妻郡中之条町中之条)	円	5.4	-
201 細窓・中之条37号墳	(吾妻郡中之条町中之条)	円	6.3	-
202 細窓・中之条36号墳	(吾妻郡中之条町中之条)	円	(不詳)	-
203 細窓・中之条37号墳	(吾妻郡中之条町中之条)	円	(不詳)	-
204 細窓・中之条13号墳	(吾妻郡中之条町中之条)	円	4.8	-
205 細窓・中之条14号墳	(吾妻郡中之条町中之条)	円	8.1	-
206 細窓・中之条15号墳	(吾妻郡中之条町中之条)	円	(不詳)	-
207 細窓・中之条16号墳	(吾妻郡中之条町中之条)	円	9.0	-
208 久喜8号墳	中之条町平	円	-	横六式石室
209 細窓・久喜6号墳	(吾妻郡久喜町平)	円	9.0	-
210 小塙古墳(久喜16号墳)	(吾妻郡久喜町植葉)	円	11.7	横六式石室
211 細窓・久喜17号墳	(吾妻郡久喜町植葉)	円	9.0	-
212 細窓・久喜18号墳	(吾妻郡久喜町植葉)	円	9.0	-
213 細窓・久喜19号墳	(吾妻郡久喜町植葉)	円	9.9	-
214 植葉古墳	中之条町平	円	15.3	横六式石室
215 細窓・久喜20号墳	(吾妻郡久喜町平)	円	6.3	-
216 細窓・久喜23号墳	(吾妻郡久喜町平)	円	15.0	-
217 細窓・久喜24号墳	(吾妻郡久喜町平)	円	12.6	-
218 細窓・久喜25号墳	(吾妻郡久喜町平)	円	15.0	-
219 細窓・久喜26号墳	(吾妻郡久喜町平)	円	-	-
220 細窓・久喜27号墳	(吾妻郡久喜町平)	円	15.6	-
221 細窓・久喜28号墳	(吾妻郡久喜町平)	円	15.3	-
222 細窓・久喜29号墳	(吾妻郡久喜町平)	円	9.9	-
223 細窓・久喜30号墳	(吾妻郡久喜町平)	円	-	-
224 細窓・久喜31号墳	(吾妻郡久喜町平)	円	-	-
225 細窓・久喜32号墳	(吾妻郡久喜町平)	円	-	-
226 細窓・中之条4号墳	(吾妻郡中之条町城)	円	(不詳)	-
227 細窓・中之条5号墳	(吾妻郡中之条町城)	円	7.8	-
228 細窓・中之条6号墳	(吾妻郡中之条町城)	円	7.2	-
229 細窓・中之条7号墳	(吾妻郡中之条町城)	円	5.7	-
230 市城古墳(中之条8号墳)	(吾妻郡中之条町城)	円	4.5	横六式石室
231 細窓・中之条9号墳	(吾妻郡中之条町城)	円	6.9	-
232 細窓・中之条10号墳	(吾妻郡中之条町城)	円	3.3	-
233 細窓・中之条11号墳	(吾妻郡中之条町城)	円	(不詳)	-
234 細窓・中之条12号墳	(吾妻郡中之条町城)	円	(不詳)	-
235 細窓・中之条13号墳	(吾妻郡中之条町城)	円	(不詳)	-
236 細窓・中之条14号墳	(吾妻郡中之条町城)	円	7.2	-
237 小野1号墳	(吾妻郡小野町上)	円	9.0	-
238 小野2号墳	(吾妻郡小野町上)	円	2.7	-
239 小野3号墳	(吾妻郡小野町上)	円	9.9	-
240 小野4号墳	(吾妻郡小野町上)	円	21.6	-
241 小野5号墳	(吾妻郡小野町上)	円	24.0	-
242 小野6号墳	(吾妻郡小野町上)	円	18.0	-
243 灰磚古墳	(吾妻郡小野町上)	円	(不明)	-
244 細窓・金鳥1号墳	(吾妻郡金鳥村川原)	円	24.0×18.0	-
245 細窓・金鳥2号墳	(吾妻郡金鳥村川原)	円	2.1×4.8	-
246 細窓・金鳥3号墳	(吾妻郡金鳥村川原)	円	1.8×1.5	-
247 細窓・金鳥4号墳	(吾妻郡金鳥村川原)	円	2.7×2.4	-
248 金井1号墳	(西川金井)	円	-	横六式石室
249 金井2号墳	(西川金井)	円	(不明)	横六式石室
250 金井裏遺跡1号墳	(西川金井)	円	14.7	横六式石室
251 金井裏遺跡2号墳	(西川金井)	円	7.8	横六式石室
252 金井原1号墳	(西川金井)	円	(不詳)	-
253 金井原2号墳	(西川金井)	円	(不詳)	-
254 細窓・金鳥4号墳	(吾妻郡金鳥村金井)	円	(不詳)	-
255 金井原遺跡2号墳	(西川金井)	円	14.0	横六式石室
256 細窓・金鳥村8号墳	(吾妻郡金鳥村金井)	円	11.4×9.0	-
257 細窓・金鳥村9号墳	(吾妻郡金鳥村金井)	円	15.0	-
258 細窓・金鳥村10号墳	(吾妻郡金鳥村金井)	円	7.2×6.6	-
259 細窓・金鳥村11号墳	(吾妻郡金鳥村金井)	円	(不詳)	-
260 細窓・金鳥村12号墳	(吾妻郡金鳥村金井)	円	(不詳)	-
261 細窓・金鳥村13号墳	(吾妻郡金鳥村金井)	円	(不詳)	-
262 細窓・金鳥村14号墳	(吾妻郡金鳥村金井)	円	(不詳)	-
263 人民2号墳	(西川人民2号)	円	-	横六式石室
264 かね古墳	(西川人民2号)	円	(不明)	横六式石室
265 土室古墳古墳	(西川人民2号)	円	13.0	横六式石室
266 伏見古墳	(西川人民2号)	円	(不明)	(不明)(未調査)
267 山形古墳	(吾妻郡山形)	円	(不明)	(不明)(未調査)
268 山形古墳無名1号墳	(吾妻郡山形)	円	(不明)	(不明)(未調査)
269 山形古墳無名2号墳	(吾妻郡山形)	円	(不明)	(不明)(未調査)
270 山形古墳無名3号墳	(吾妻郡山形)	円	(不明)	(不明)(未調査)
271 山形古墳無名4号墳	(吾妻郡山形)	円	(不明)	(不明)(未調査)
272 細窓・費林5号墳	(吾妻郡費林村石原)	円	(不詳)	(不詳)
273 行李川原山遺跡古墳遺跡	(西川行李)	円	-	(不明)(未調査)
274 西原東古墳群2号墳	(西川市右原)	円	13.2	不明(石室)
275 西原東古墳群3号墳	(西川市右原)	円	(不明)	(不明)(未調査)
276 西原東古墳群A号墳	(西川市右原)	円	(不明)	(不明)(未調査)
277 西原石室	(西川市右原)	円	(不明)	(不明)(未調査)
278 西原石室1号墳	(西川市右原)	円	10.0	横六式石室
279 細窓・木V遺跡1号小石塚	(西川市右原)	円	無頃	-
280 曹秋2号墳	(西川市行幸田)	円	(不明)	(不明)(解剖)
281 空穴2号墳	(西川市行幸田)	円	16.65	(不明)(解剖)
282 空穴2号墳2号	(西川市行幸田)	円	-	(不明)(解剖)
283 空穴2号墳3号	(西川市行幸田)	円	15.8	(不明)(解剖)
284 空穴2号墳4号	(西川市行幸田)	円	18.0	(不明)(解剖)
285 空穴2号墳5号墳	(西川市行幸田)	円	5.96	横六式石室
286 空穴2号墳6号墳	(西川市行幸田)	円	(不明)	横六式石室
287 空穴2号墳7号墳	(西川市行幸田)	円	7.2	(不明)(解剖)
288 空穴2号墳8号墳	(西川市行幸田)	円	5.9	(不明)(未調査)
289 空穴2号墳9号墳	(西川市行幸田)	円	22.5	(不明)(解剖)
290 空穴2号墳10号墳	(西川市行幸田)	円	-	横六式石室
291 空穴2号墳11号墳	(西川市行幸田)	円	4.5	横六式石室
292 空穴2号墳12号墳	(西川市行幸田)	円	4.5	横六式石室
293 空穴2号墳13号墳	(西川市行幸田)	円	12.0	(不明)(解剖)
294 空穴2号墳14号墳	(西川市行幸田)	円	14.8	(不明)(解剖)
295 空穴2号墳15号墳	(西川市行幸田)	円	-	(不明)(未調査)
296 空穴2号墳16号墳	(西川市行幸田)	円	8.0	(不明)(解剖)
297 空穴2号墳17号墳	(西川市行幸田)	円	11.2	(不明)(解剖)
298 空穴2号墳18号墳	(西川市行幸田)	円	8.0	(不明)(解剖)
299 空穴2号墳19号墳	(西川市行幸田)	円	12.0	(不明)(未調査)
300 空穴2号墳20号墳	(西川市行幸田)	円	8.4	(不明)(解剖)
301 空穴2号墳21号墳	(西川市行幸田)	円	11.2	(不明)(解剖)
302 空穴2号墳22号墳	(西川市行幸田)	円	8.0	(不明)(解剖)
303 空穴2号墳23号墳	(西川市行幸田)	円	8.9×9.7	横六式石室
304 空穴2号墳24号墳	(西川市行幸田)	円	-	横六式石室
305 空穴2号墳25号墳	(西川市行幸田)	円	6.5	横六式石室
306 空穴2号墳26号墳	(西川市行幸田)	円	20.0	(不明)

第3節 四戸の古墳群を中心とした副葬品からみた吾妻地域の古墳と集落の変遷について

名稱	所在地	墳形	埋葬施設	名稱	所在地	墳形	埋葬施設
307 空沢遺跡21号墳	沢川市行幸田	円 16.0×18.0 不明		372 山川遺跡TH008	沢川市中郷	円 不明	
308 空沢遺跡26号墳	沢川市行幸田	円 - 不明(未調査)		373 山川遺跡TH1000	沢川市中郷	円 不明	
309 空沢遺跡29号墳	沢川市行幸田	円 3.5 不明(未調査)		374 山川遺跡TH1010	沢川市中郷	円 不明	
310 空沢遺跡30号墳	沢川市行幸田	円 - 不明(未調査)		375 山川遺跡TH1011	沢川市中郷	円 不明	
311 空沢遺跡31号墳	沢川市行幸田	円 4.3×2.8 不明(未調査)		376 山川遺跡TH1013	沢川市中郷	円 不明	
312 空沢遺跡41号墳	沢川市行幸田	円 16.2 不明(未調査)		377 山川遺跡TH1014	沢川市中郷	円 不明	
313 空沢遺跡33号墳	沢川市行幸田	無墳 - ソの他の土壙墓		378 山川遺跡1号墳(古墳) 墓(石床墓)	沢川市中郷	円 18.0 不明(未調査)	
314 空沢遺跡34号墳	沢川市行幸田	方 4.3×(3.5) 不明(未調査)		379 山川遺跡1号墳(古墳) 墓(石床墓)	沢川市中郷	円 21.0 不明(未調査)	
315 空沢遺跡35号墳	沢川市行幸田	円 11.9 不明(未調査)		380 山川遺跡1号墳(古墳) 墓(石床墓)	沢川市中郷	方 18.0×18.0 不明(未調査)	
316 空沢遺跡36号墳	沢川市行幸田	円 2.0×1.8 不明(未調査)		381 東川遺跡HT001	沢川市中郷	- 不明	
317 空沢遺跡37号墳	沢川市行幸田	円 8.2×5.6 不明(未調査)		382 東川遺跡HT002	沢川市中郷	- 不明	
318 空沢遺跡38号墳	沢川市行幸田	円 - 不明(未調査)		383 東川遺跡HT003	沢川市中郷	- 不明	
319 空沢遺跡39号墳	沢川市行幸田	無墳 - ソの他の土壙墓		384 東川遺跡HT004	沢川市中郷	- 不明	
320 空沢遺跡40号墳	沢川市行幸田	円 - 不明(未調査)		385 東川遺跡HT005	沢川市中郷	- 不明	
321 空沢遺跡41号墳	沢川市行幸田	円 5.8 不明(未調査)		386 古河遺跡1号墳	沢川市中郷	円 - 横穴式石室	
322 空沢遺跡42号墳	沢川市行幸田	方 2.5×1.35 不明(未調査)		387 古河遺跡2号墳	沢川市中郷	円 - 横穴式石室	
323 空沢遺跡43号墳	沢川市行幸田	円 6.0 不明(未調査)		388 韶殿:長尾村5号墳	(群馬県長尾村吹城) 前方後圓	円 11.1 地域	
324 空沢遺跡44号墳	沢川市行幸田	無墳 - ソの他の土壙墓		389 韶殿:長尾村5号墳	(群馬県長尾村吹城)	円 8.7 -	
325 空沢遺跡45号墳	沢川市行幸田	無墳 - ソの他の土壙墓		390 韶殿:長尾村9号墳	(群馬県長尾村吹城)	円 5.4 -	
326 空沢遺跡46号墳	沢川市行幸田	方 6.4×4.5 不明(未調査)		391 有名古墳	沢川市中郷	円 - 横穴式石室	
327 空沢遺跡47号墳	沢川市行幸田	無墳 - 製穴式石室		392 不動院古墳	沢川市白井	円 20.0 不明(未調査)	
328 空沢遺跡48号墳	沢川市行幸田	円 11.5 不明(未調査)		393 有名古墳	沢川市中郷	円 不明 不明(未調査)	
329 空沢遺跡49号墳	沢川市行幸田	無墳 - ソの他の土壙墓		394 佐尾村10号墳	(群馬県長尾村白井) 地域	円 5.7 -	
330 空沢遺跡50号墳	沢川市行幸田	無墳 - ソの他の土壙墓		395 佐尾村20号墳	(群馬県長尾村白井) 地域	円 8.4 -	
331 空沢遺跡51号墳	沢川市行幸田	円 7.5 横穴式石室		396 佐尾村21号墳	(群馬県長尾村白井) 地域	円 6.6 -	
332 空沢遺跡52号墳	沢川市行幸田	円 4.8 不明(未調査)		397 佐尾村22号墳	(群馬県長尾村白井) 地域	円 6.2 -	
333 空沢遺跡53号墳	沢川市行幸田	方 2.2×2.2 不明(未調査)		398 佐尾村:長尾村2号墳	(群馬県長尾村白井) 地域	不評(不評)	
334 空沢遺跡54号墳	沢川市行幸田	丘 不明(未調査)		399 佐尾村:長尾村4号墳	(群馬県長尾村白井) 地域	不評(不評)	
335 空沢遺跡55号墳	沢川市行幸田	円 - 不明(未調査)		400 佐尾村:長尾村5号墳	(群馬県長尾村白井) 地域	不評(不評)	
336 小堀山遺跡1号墳	沢川市行幸田	円 - 不明(未調査)		401 佐尾村:長尾村6号墳	(群馬県長尾村白井) 地域	不評(不評)	
337 中山遺跡1号墳	沢川市行幸田	方 3.0×1.7 不明(未調査)		402 佐尾村:長尾村7号墳	(群馬県長尾村白井) 地域	円 6.0 -	
338 中山遺跡2号墳	沢川市行幸田	円 18.0 不明(未調査)		403 佐尾村:長尾村8号墳	(群馬県長尾村白井) 地域	円 7.2 -	
339 中山遺跡3号墳	沢川市行幸田	円 20.0 不明(未調査)		404 佐尾村:長尾村9号墳	(群馬県長尾村白井) 地域	円 4.5 -	
340 収下ノイバツ古墳	沢川市行幸田(坂下) 1	不明 - 不明		405 佐尾村:長尾村10号墳	(群馬県長尾村白井) 地域	円 5.1 -	
341 収下ノイバツ古墳1号墳	沢川市行幸田(坂下) 1	方 2.61 不明(未調査)		406 佐尾村:長尾村11号墳	(群馬県長尾村白井) 地域	前方後円 12.6 後円	
342 収下ノイバツ古墳2号墳	沢川市行幸田(坂下) 1	方 3.26 不明(未調査)		407 佐尾村:長尾村12号墳	(群馬県長尾村白井) 地域	不評(不評)	
343 収下ノイバツ古墳3号墳	沢川市行幸田(坂下) 1	方 3.0 不明(未調査)		408 佐尾村:長尾村13号墳	(群馬県長尾村白井) 地域	不評(不評)	
344 収下ノイバツ古墳4号墳	沢川市行幸田(坂下) 1	方 3.0 不明(未調査)		409 佐尾村:長尾村14号墳	(群馬県長尾村白井) 地域	不評(不評)	
345 収下ノイバツ古墳5号墳	沢川市行幸田(坂下) 1	方 3.6 不明(未調査)		410 佐尾村:長尾村15号墳	(群馬県長尾村白井) 地域	円 6.0 -	
346 収下ノイバツ古墳6号墳	沢川市行幸田(坂下) 1	方 4.8 不明(未調査)		411 佐尾村:長尾村16号墳	(群馬県長尾村白井) 地域	不評(不評)	
347 大崎町	沢川市行幸田(東町)	円 5.8 不明(未調査)		412 佐尾村:長尾村17号墳	(群馬県長尾村白井) 地域	円 10.0 不明(未調査)	
348 大崎1号墳	沢川市西田(大崎)	不明 - 横穴式石室		413 佐尾村:長尾村18号墳	(群馬県長尾村白井) 地域	円 10.0 不明(未調査)	
349 大崎2号墳	沢川市西田(大崎)	丘 不明(未調査)		414 佐尾村:長尾村19号墳	(群馬県長尾村白井) 地域	円 12.5 -	
350 大崎古墳無名1号墳	沢川市西田(大崎)	不明 - 不明(未調査)		415 百合生:道重遺跡1号墳	(群馬県百合生) 地域	円 15.0以下 横穴式石室	
351 大崎古墳無名2号墳	沢川市西田(大崎)	不明 - 不明(未調査)		416 佐尾村:長尾村2号墳	(群馬県長尾村吹城) 地域	不評(不評)	
352 一山古墳	沢川市行幸田	円 15.0 横穴式石室		417 大門古墳	沢川市吹城	円 20.0 不明(未調査)	
353 朝里古墳	沢川市行幸田	不明 - 不明(未調査)		418 朝里:長尾村15号墳	(群馬県長尾村吹城) 地域	円 25. -	
354 中ノ山古墳	沢川市行幸田	円 12.0 横穴式石室		419 有名古墳	沢川市中郷	不明 不明(未調査)	
355 黑川豪源跡1号墳	沢川市北牧	方 10.0×10.0 (1)		420 佐尾村:白郷村7号墳	(群馬県白郷村上白井) 地域	不評(不評)	
356 黑川豪源跡2号墳	沢川市北牧	方 10.0×9.5 (2)		421 佐尾村:白郷村1号墳	(群馬県白郷村上白井) 地域	円 18.2 横穴式石室	
357 黑川豪源跡3号墳	沢川市北牧	方 15.0×15.0 (1)		422 佐尾村:白郷村2号墳	(群馬県白郷村上白井) 地域	円 19.2 横穴式石室	
358 黑川豪源跡4号墳	沢川市北牧	方 9.6×9.4 (2)		423 佐尾村:白郷村3号墳	(群馬県白郷村上白井) 地域	円 22.0 横穴式石室	
359 大門等古墳	沢川市北牧	不明 - 不明(未調査)		424 佐尾村:白郷村4号墳	(群馬県白郷村上白井) 地域	円 28.0 横穴式石室	
360 丸小山古墳	沢川市北牧	円 4.56 横穴式石室		425 佐尾村:白郷村5号墳	(群馬県白郷村上白井) 地域	円 15.0 横穴式石室	
361 丸小山遺跡1号墳(横溝)	沢川市北牧	方 8.0×8.0 (1)		426 佐尾村:白郷村6号墳	(群馬県白郷村上白井) 地域	円 16.4 横穴式石室	
362 朝里:長尾村1号墳	(群馬県長尾村北牧)	不評(不評)		427 佐尾村:白郷村7号墳	(群馬県白郷村上白井) 地域	- 不明	
363 朝里:長尾村2号墳	(群馬県長尾村北牧)	円 7.5 -		428 佐尾村:白郷村8号墳	(群馬県白郷村上白井) 地域	- 不明	
364 山川遺跡TH000	沢川市中郷	不明 -		429 宇津野:有瀬跡1号墳	(群馬県宇津野) 地域	円 2.2 横穴式石室	
365 山川遺跡TH008	沢川市中郷	不明 - 不明		430 宇津野:有瀬跡2号墳	(群馬県宇津野) 地域	円 2.0 横穴式石室	
366 山川遺跡TH002	沢川市中郷	不明 - 不明		431 宇津野:有瀬跡3号墳	(群馬県宇津野) 地域	円 2.0 不明(未調査)	
367 山川遺跡TH004	沢川市中郷	不明 - 不明		432 宇津野:有瀬跡4号墳	(群馬県宇津野) 地域	円 2.0 不明(未調査)	
368 山川遺跡TH006	沢川市中郷	不明 - 不明		433 宇津野:有瀬跡5号墳	(群馬県宇津野) 地域	円 2.2 不明(未調査)	
369 山川遺跡TH005	沢川市中郷	不明 - 不明		434 宇津野:有瀬跡6号墳	(群馬県宇津野) 地域	円 2.3 不明(未調査)	
370 山川遺跡TH007	沢川市中郷	不明 - 不明		435 宇津野:有瀬跡7号墳	(群馬県宇津野) 地域	円 2.0 不明(未調査)	
371 山川遺跡TH007	沢川市中郷	不明 - 不明		436 宇津野:有瀬跡8号墳	(群馬県宇津野) 地域	円 2.0 不明(未調査)	
				437 宇津野:有瀬跡9号墳	(群馬県宇津野) 地域	円 1.5 不明(未調査)	
				438 伊然古墳	沢川市白井	円 8.0 横穴式石室	
				439 宇津野:有瀬跡11号墳	沢川市白井	-	
				440 宇津野:有瀬跡12号墳	沢川市白井	- 不明(解平)	
				441 宇津野:有瀬跡13号墳	沢川市白井	-	
				442 宇津野:有瀬跡UA002	沢川市白井	- 不明	
				443 宇津野:有瀬跡UA003	沢川市白井	- 不明	
				444 宇津野:有瀬跡UA004	沢川市白井	- 不明	
				445 宇津野:有瀬跡UA005	沢川市白井	- 不明	
				446 宇津野:有瀬跡UA006	沢川市白井	- 不明	
				447 宇津野:有瀬跡UA007	沢川市白井	- 不明	
				448 宇津野:有瀬跡UA007	沢川市白井	- 不明	

第7章 考察

No.	名前	所在地	地形	標高(m)	埋蔵施設	No.	名前	所在地	地形	標高(m)	埋蔵施設
449	宇津野・有瀬道跡UM008	沢川市白井	-	-	不明	519	見立越II道跡8号 sond	沢川市赤城	方	5.77	磐六系(土坑)
450	宇津野・有瀬道跡UM009	沢川市白井	-	-	不明	520	見立越II道跡4号 sond	沢川市赤城	方	5.79×5.32	磐六系(土坑)
451	宇津野・有瀬道跡UM10	沢川市白井	-	-	不明	521	見立越II道跡5号 sond	沢川市赤城	方	1.0, 7.9×	磐六系(土坑)
452	宇津野・有瀬道跡UM11	沢川市白井	-	-	不明	522	見立越II道跡6号 sond	沢川市赤城	方	1.3, 6.3×	磐六系(土坑)
453	宇津野・有瀬道跡UM012	沢川市白井	-	-	不明	523	見立越II道跡7号 sond	沢川市赤城	方	13.61	-
454	宇津野・有瀬道跡UM013	沢川市白井	-	-	不明	524	見立越II道跡8号 sond	沢川市赤城	方	6.99	磐六系(土坑)
455	宇津野・有瀬道跡UM014	沢川市白井	-	-	不明	525	三原山1周防護土堤無名 sond	沢川市赤城	円	8.0	磐六系(石室)
456	宇津野・有瀬道跡UM015	沢川市白井	-	-	不明	526	瀧路西面跡湖西小塚古墳	沢川市赤城	円	10.8	不明(削平)
457	宇津野・有瀬道跡UM016	沢川市白井	-	-	不明	527	初観：横野村2号 sond	(勢多郡横野村見立)	円	3.3×2.4	-
458	宇津野・有瀬道跡UM017	沢川市白井	-	-	不明	528	初観：横野村3号 sond	(勢多郡横野村見立)	円	9.9	-
459	宇津野・有瀬道跡UM018	沢川市白井	-	-	不明	529	初観：横野村4号 sond	(勢多郡横野村見立)	円	1.8	-
460	宇津野・有瀬道跡UM019	沢川市白井	-	-	不明	530	初観：横野村5号 sond	(勢多郡横野村見立)	円	8.7	-
461	宇津野・有瀬道跡UM020	沢川市白井	-	-	不明	531	初観：横野村6号 sond	(勢多郡横野村見立)	円	9.0	-
462	宇津野・有瀬道跡UM021	沢川市白井	-	-	不明	532	初観：横野村7号 sond	(勢多郡横野村見立)	円	-	-
463	宇津野・有瀬道跡UM022	沢川市白井	-	-	不明	533	初観：横野村10号 sond	(勢多郡横野村見立)	円	3.6	-
464	宇津野・有瀬道跡UM023	沢川市白井	-	-	不明	534	初観：横野村11号 sond	(勢多郡横野村見立)	円	2.1×2.7	-
465	宇津野・有瀬道跡UM024	沢川市白井	-	-	不明	535	二原山1周防護土堤 sond	沢川市赤城	円	10.5×9.4	不明(削平)
466	宇津野・有瀬道跡UM025	沢川市白井	-	-	不明	536	五輪山古墳	沢川市赤城	円	-	磐六系(石室)
467	宇津野・有瀬道跡UM026	沢川市白井	-	-	不明	537	初観：北橘村1号 sond	(勢多郡北橘村)	円	4.5	-
468	宇津野・有瀬道跡UM027	沢川市白井	-	-	不明	538	初観：北橘村2号 sond	(勢多郡北橘村)	円	2.7×3.6	-
469	宇津野・有瀬道跡UM028	沢川市白井	-	-	不明	539	初観：北橘村3号 sond	(勢多郡北橘村)	円	-	不明(削平)
470	宇津野・有瀬道跡UM029	沢川市白井	-	-	不明	540	初観：北橘村4号 sond	(勢多郡北橘村)	円	3.0×3.3	-
471	宇津野・有瀬道跡UM030	沢川市白井	-	-	不明	541	初観：北橘村5号 sond	(勢多郡北橘村)	円	6.9×4.2	-
472	宇津野・有瀬道跡UM031	沢川市白井	-	-	不明	542	初観：北橘村6号 sond	(勢多郡北橘村)	円	4.2×3.9	-
473	宇津野・有瀬道跡UM032	沢川市白井	-	-	不明	543	初観：北橘村7号 sond	(勢多郡北橘村)	円	6.3×8.7	-
474	宇津野・有瀬道跡UM033	沢川市白井	-	-	不明	544	初観：北橘村1号 sond	(勢多郡北橘村)	円	3.3×3.0	-
475	宇津野・有瀬道跡UM034	沢川市白井	-	-	不明	545	初観：北橘村8号 sond	(勢多郡北橘村)	円	5.7×8.4	-
476	宇津野・有瀬道跡UM035	沢川市白井	-	-	不明	546	初観：北橘村9号 sond	(勢多郡北橘村)	円	5.4×6.3	-
477	宇津野・有瀬道跡UM036	沢川市白井	-	-	不明	547	初観：北橘村10号 sond	(勢多郡北橘村)	円	9.0	-
478	宇津野・有瀬道跡UM037	沢川市白井	-	-	不明	548	初観：北橘村11号 sond	(勢多郡北橘村)	円	7.5×5.7	-
479	宇津野・有瀬道跡UM038	沢川市白井	-	-	不明	549	山1周防護土堤方圓形圓錐	沢川市赤城	方	-	不明(未調査)
480	宇津野・有瀬道跡UM039	沢川市白井	-	-	不明	550	山1中1周防護土堤方圓形圓錐番号(334)	沢川市赤城	円	-	不明(未調査)
481	宇津野・有瀬道跡UM040	沢川市白井	-	-	不明	551	下中1周防護土堤番号(335)	沢川市赤城	円	-	不明(未調査)
482	宇津野・有瀬道跡UM041	沢川市白井	-	-	不明	552	下中1周防護土堤番号(336)	沢川市赤城	円	-	不明(未調査)
483	有瀬1号 sond	沢川市白井	円	7.4	横六式石室	553	下中1周防護土堤番号(337)	沢川市赤城	円	-	不明(未調査)
484	有瀬2号 sond	沢川市白井	円	14.0	横六式石室	554	上造古墳群1号 sond	沢川市北橘	円	-	不明(削平)
485	無名 sond	沢川市白井	不詳	-	横六式石室	555	上造古墳群2号 sond	沢川市北橘	円	-	不明(未調査)
486	初観：白堀2号 sond	(蕪原郡白堀村上白井)	不詳	(不詳)	-	556	上造古墳群3号 sond	沢川市北橘	円	-	不明(未調査)
487	初観：白堀3号 sond	(蕪原郡白堀村上白井)	不詳	2.4×0.8	-	557	上造古墳群4号 sond	沢川市北橘	円	-	不明(未調査)
488	初観：白堀4号 sond	(蕪原郡白堀村上白井)	不詳	4.3×0.9	-	558	上造古墳群5号 sond	沢川市北橘	円	-	横六式石室
489	初観：白堀5号 sond	(蕪原郡白堀村上白井)	不詳	4.2×3.6	-	559	初観：北橘村4号 sond	(勢多郡北橘村)	円	6.0×5.1	-
490	初観：白堀6号 sond	(蕪原郡白堀村上白井)	不詳	4.2×3.6	-	560	初観：北橘村5号 sond	(勢多郡北橘村)	円	9.0	-
491	初観：白堀7号 sond	(蕪原郡白堀村上白井)	不詳	(不詳)	-	561	初観：北橘村6号 sond	(勢多郡北橘村)	円	6.0	-
492	初観：北橘2号 sond	沢川市赤城	円	-	磐六系(石室)	562	初観：北橘村7号 sond	(勢多郡北橘村)	円	9.0	-
493	五箇山3号 sond	沢川市赤城	円	-	磐六系(石室)	563	初観：北橘村8号 sond	(勢多郡北橘村)	円	6.0×3.0	-
494	初観：戸倉1号 sond	(勢多郡戸倉村津久井)	前方	38.4	-	564	初観：北橘村9号 sond	(勢多郡北橘村)	円	4.8	-
495	南高木古墳	沢川市赤城	削平	-	不明(未調査)	565	初観：北橘村10号 sond	(勢多郡北橘村)	円	16.2×10.5	-
496	津久井1号 sond	沢川市赤城	円	12.5	横六式石室	566	初観：北橘村11号 sond	(勢多郡北橘村)	円	8.4×9.0	-
497	初観：横野1号 sond	(勢多郡横野村高宮)	円	(不詳)	-	567	初観：北橘村22号 sond	(勢多郡北橘村)	円	25.5	-
498	初観：横野2号 sond	(勢多郡横野村高宮)	円	7.2×6.6	-	568	初観：北橘村23号 sond	(勢多郡北橘村)	円	18.0	-
499	初観：横野3号 sond	(勢多郡横野村高宮)	円	6.3×7.5	-	569	初観：北橘村24号 sond	(勢多郡北橘村)	円	16.5	-
500	初観：横野22号 sond	(勢多郡横野村高宮)	円	12.0×9.9	-	570	初観：北橘村25号 sond	(勢多郡北橘村)	円	9.9×11.4	-
501	久保地古墳5号 sond	沢川市赤城	円	-	不明(未調査)	571	初観：北橘村27号 sond	(勢多郡北橘村)	円	4.8×6.9	-
502	久保地古墳7号 sond	沢川市赤城	円	-	不明(未調査)	572	初観：北橘村28号 sond	(勢多郡北橘村)	円	6.0×5.1	-
503	久保地古墳7号 sond	沢川市赤城	円	-	不明(未調査)	573	初観：北橘村29号 sond	(勢多郡北橘村)	円	3.6×5.4	-
504	初観：横野2号 sond	(勢多郡横野村高宮)	円	6.3	-	574	初観：北橘村30号 sond	(勢多郡北橘村)	円	6.0×7.2	-
505	初観：横野24号 sond	(勢多郡横野村高宮)	円	6.3×13.5	-	575	初観：北橘村31号 sond	(勢多郡北橘村)	円	3.6×5.4	-
506	初観：横野25号 sond	(勢多郡横野村高宮)	円	(不詳)	-	576	初観：北橘村32号 sond	(勢多郡北橘村)	円	-	不明(不詳)
507	初観：横野26号 sond	(勢多郡横野村高宮)	円	(不詳)	-	577	初観：北橘村33号 sond	(勢多郡北橘村)	円	5.4×13.8	-
508	横野木古墳3号 sond	沢川市赤城	削平	-	横六式石室	578	初観：北橘村34号 sond	(勢多郡北橘村)	円	(不詳)	-
509	初観：横野27号 sond	(勢多郡横野村)	円	7.2	-	579	初観：北橘村35号 sond	(勢多郡北橘村)	円	(不詳)	-
510	初観：横野28号 sond	(勢多郡横野村)	円	14.4	-	580	初観：北橘村36号 sond	(勢多郡北橘村)	円	(不詳)	-
511	初観：横野29号 sond	(勢多郡横野村)	円	21.6	-	581	初観：北橘村37号 sond	(勢多郡北橘村)	円	(不詳)	-
512	初観：横野30号 sond	(勢多郡横野村)	円	(不詳)	-	582	初観：北橘村38号 sond	(勢多郡北橘村)	円	(不詳)	-
513	初観：横野31号 sond	(勢多郡横野村)	円	10.8×14.4	-	583	初観：北橘村39号 sond	(勢多郡北橘村)	円	(不詳)	-
514	初観：横野32号 sond	(勢多郡横野村)	円	7.2	-	584	初観：北橘村40号 sond	(勢多郡北橘村)	円	(不詳)	-
515	見立越II道跡1号 sond	沢川市赤城	円	10.0	横六式石室	585	初観：北橘村41号 sond	(勢多郡北橘村)	円	6.0×7.2	-
516	見立越II道跡1号 sond	沢川市赤城	丘陵	-	磐六系(土坑)	586	初観：北橘村42号 sond	(勢多郡北橘村)	円	6.0×7.2	-
517	見立越II道跡1号 sond	沢川市赤城	方	11.1×2.9	磐六系(土坑)	587	初観：北橘村43号 sond	(勢多郡北橘村)	円	(不詳)	-
518	見立越II道跡2号 sond	沢川市赤城	方	10.62	磐六系(土坑)	588	初観：北橘村44号 sond	(勢多郡北橘村)	円	(不詳)	-
	見立越II道跡2号 sond	沢川市赤城	方	8.32×6.61	磐六系(石室)	589	初観：北橘村45号 sond	(勢多郡北橘村)	円	12.6×9.0	-

第3節 四戸の古墳群を中心とした副葬品からみた吾妻地域の古墳と集落の変遷について

第20表 吾妻川流域古墳時代遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	概要
A	四戸の古墳群	東吾妻町三島	豊建8・掘立3・古墳3
B	四戸遺跡	東吾妻町三島	豊建92・掘立1
1	今井東平道跡	越後村今井	前期出土
2	長野原一本松遺跡	長野原町長野原	土器片・少量
3	林宮原遺跡	長野原町林	豊建1
4	下原遺跡	長野原町林	豊建1・集石1
5	漆貝只遺跡	東吾妻町岩下	散布地
6	天神遺跡	東吾妻町岩下	散布地
7	前畠遺跡	東吾妻町岩下	豊建11他
8	万木沢遺跡	東吾妻町三島	散布地
9	峰遺跡	東吾妻町三島	散布地
10	平遺跡	東吾妻町大戸	散布地
11	船遺跡	東吾妻町本宿	豊建1
12	下前畠遺跡	東吾妻町本宿	散布地
13	新井遺跡	東吾妻町厚田	豊建1・方周4・古墳3
14	上ノ古道跡	東吾妻町川戸	散布地
15	深澤遺跡	東吾妻町川戸	集落
16	水上遺跡	東吾妻町川戸	集落
17	上須賀遺跡	東吾妻町原明	集落
18	諏訪前遺跡	東吾妻町原町	豊建2・古墳1
19	東ノ野遺跡	東吾妻町原町	散布地・集落
20	下郷古墳群	東吾妻町川戸	掘立柱建物群
21	岩井田中道跡	東吾妻町いわい	集落
22	せんねん寺遺跡	東吾妻町岩井	集落
23	白山神社遺跡	東吾妻町岩井	集落
24	長岡遺跡	中之条町中之条	豊建7・掘立7
25	伊勢町天神遺跡	中之条町伊勢町	集落
26	伊勢町川端遺跡	中之条町伊勢町	集落
27	法満寺土師道跡	中之条町中之条	散布地・集落
28	長久保遺跡	中之条町横尾	散布地
29	名久田中学校遺跡	中之条町平	集落
30	桃瀬遺跡	中之条町桃尾	集落
31	植生舞台遺跡	東吾妻町植栄	集落
32	小泉宮戸遺跡	東吾妻町小泉	豊建7・包含層
33	小泉中沢遺跡	東吾妻町小泉	散布地
34	小泉天神遺跡	東吾妻町小泉	豊建1
35	内出A遺跡	東吾妻町箱島	散布地
36	内出B遺跡	東吾妻町箱島	散布地
37	金井東裏遺跡	洪川市金井	豊建36・平地9・掘立1
38	金井下新田遺跡	洪川市金井	豊建・平地・掘立・圓状造構
39	坂之下遺跡	洪川市洪川	水田
40	高源池東1遺跡	洪川市石原	豊建9・掘立2・祭4他
41	行幸田城山遺跡	洪川市行幸田	豊建1・足跡・馬跡痕
42	行幸田西遺跡	洪川市行幸田	
43	中筋遺跡	洪川市行幸田	豊建4・平地3・古墳1他
44	穂屋遺跡	洪川市行幸田	
45	諏訪ノ木V遺跡	洪川市石原	小石櫛1・古墳1・水田
46	行幸田畠中遺跡	洪川市行幸田	
47	石原東遺跡	洪川市石原	水田
48	中村遺跡	洪川市中村	豊建3・古墳1・水田

No.	遺跡名	所在地	概要
49	北牧原ノ田遺跡	洪川市北牧	水田
50	押手遺跡	洪川市北牧	豊建2・平地3・他
51	黒牛峯遺跡	洪川市北牧・中郷	豊建5・平地3・高床7他
52	西祖山跡	洪川市中郷	道5
53	中祖遺跡	洪川市中郷	島・道
54	田代遺跡	洪川市中郷	方周・道
55	八幡神社遺跡	洪川市中郷	
56	吹屋忠久保遺跡	洪川市吹屋	豊建5・島・道
57	北牧中道遺跡	洪川市北牧	水田・包含層
58	吹屋穂屋遺跡	洪川市吹屋	豊建31・掘立2他
59	中郷田尻遺跡	洪川市中郷	豊建101・平地11・掘立28
60	吹屋二舟遺跡	洪川市吹屋	水田
61	中郷忠久保遺跡	洪川市中郷	豊建33・掘立4他
62	吹屋中原遺跡	洪川市吹屋	祭1
63	吹屋犬子塚遺跡	洪川市吹屋	水田・島・道他
64	白井北中道遺跡Ⅱ	洪川市白井	島・道・放牧地
65	鶴見原田遺跡	洪川市吹屋	水田
66	宇津野・有瀬遺跡	洪川市上白井	古墳・積石塚古墳・小積石塚13基
67	浅田遺跡	洪川市中郷	
68	中郷遺跡	洪川市中郷	島・放牧地
69	吹屋遺跡	洪川市吹屋	掘立3・道・放牧地
70	吹屋伊勢森遺跡	洪川市吹屋	島・放牧地
71	白井十二遺跡	洪川市白井	道・放牧地
72	白井佐又遺跡	洪川市白井	道・放牧地
73	白井北中道遺跡Ⅲ	洪川市白井	豊建4・古墳1
74	白井北中道遺跡	洪川市白井	島・放牧地
75	白井大宮遺跡	洪川市白井	島・道・放牧地
76	白井掛岩遺跡	洪川市白井	豊建22・古墳2
77	白井位屋遺跡	洪川市白井	
78	白井二位屋遺跡Ⅳ	洪川市白井	豊建4・放牧地
79	白井二位屋遺跡4	洪川市白井	豊建20
80	鶴見戸遺跡	洪川市赤城町鶴	
81	見立相好遺跡	洪川市赤城町見立	豊建3・掘立1
82	宮田諏訪原遺跡	洪川市赤城町宮田	祭5・道8・墓他
83	勝保沢中ノ山遺跡	洪川市赤城町勝保沢	豊建5
84	見立瀬井遺跡Ⅱ	洪川市赤城町見立	石標1・石標1・道2
85	三原田諏訪上遺跡	洪川市赤城町三原田	豊建7・古墳1・古墳1
86	三原田三反田遺跡	洪川市赤城町三原田	豊建6
87	見立清水遺跡	洪川市赤城町見立	豊建1
88	藏沢石器時代遺跡	洪川市赤城町藏沢	豊建3
89	藏沢貝丘塚遺跡	洪川市赤城町藏沢	豊建3
90	滝沢天神遺跡	洪川市赤城町滝沢	豊建17・土坑4
91	寺内(勝保沢)遺跡	洪川市赤城町勝保沢	豊建2
92	勝保沢刀削窯遺跡	洪川市赤城町勝保沢	豊建2・平地2他
93	北町遺跡	洪川市北橘町八崎	豊建40・土坑
94	田ノ保遺跡	洪川市北橘町分郷八崎	水田
95	分郷八崎遺跡	洪川市北橘町分郷八崎	豊建2
96	下遠原遺跡	洪川市北橘町真壁	豊建8

第4節 四戸の古墳群の成立背景

右島 和夫
(群馬県立歴史博物館特別館長)

1.はじめに

群馬県北西部の山間の地域を西から東へと流れ、渋川市付近で利根川へと合流する吾妻川の流域は、古墳分布上から見ると、前期から中期にかけては極めて古墳が希薄な地域であり、わずかに中之条町石ノ塔古墳(円墳、径約20m、竪穴式石槨)、東吾妻町机古墳(墳丘不明、竪穴式小石槨)等の5世紀後半のものが知られているに過ぎない。6世紀初頭になると、急激に古墳分布が確認できるようになる。同時に古墳の主体部形式として横穴式石室が新たに採用されている点が注目される。四戸の古墳群の形成の端緒をなしたと考えられる四戸1号墳(群馬大学調査、『上毛古墳綜覧』岩島村19号墳)、同IV号墳(群馬大学調査、『綜覧』漏れ古墳)も、6世紀初頭ないし前半に属する横穴式石室墳(これを「初期横穴式石室」と称することにする)である。

同様の古墳動向を利根川上流域に当たる旧子持村地域・旧赤城村地域(現渋川市)、さらに利根・沼田地域(取り分け旧子持・赤城村地域の北側に隣接する昭和村地域に顯著)でも確認できる。

上毛野地域(現在の群馬県地域に近い)における横穴式石室の登場は、5世紀末ないし6世紀初頭から前半の時期である(築瀬二子塚古墳は、これより若干遅る可能性がある)。その場合、当地域の西部から中部にかけての前方後円墳に採用される。具体的には、安中市築瀬二子塚古墳、高崎市八幡二子塚古墳(推定)、富岡市一之宮4号墳、前橋市王山古墳、同正円寺古墳、同前二子古墳等が代表的前方後円墳であり、当該地域の主要古墳のすべてに採用された可能性がある。また、これら前方後円墳の周辺地域では、相前後する時期に属する帆立貝式古墳や大・中型円墳にも横穴式石室が採用されている。上述した吾妻川流域、利根川上流域の6世紀初頭以降の動向は、前方後円墳は存在しないものの、上毛野地域中・西部における前方後円墳の次位以下の古墳における採用と軌を一にするものである。

ところで、上毛野地域では、横穴式石室の登場と相前後する時期に当たる5世紀末ないし6世紀初頭の時に

榛名山の大規模噴火(Hr-FAと略称)があった。一連の噴火活動では、現在視認できるだけでも15ユニットの火山噴出物堆積層が確認されており、山麓部を中心に多大な被害をもたらした。とりわけ甚大な被害を受けたのは、榛名山北東麓に当たる旧渋川市域である。最近調査された金井遺跡群(金井東裏・下新田遺跡)は、被害の様相を知ることができる代表的事例である。噴火直前まで、当地域は大規模な馬匹生産を中心に活発な地域展開がなされていただけに、その壊滅的被害が地域にもたらした影響は計り知れない。当地域の西側に隣接する吾妻川流域や北側に隣接する利根川上流域における噴火後の古墳動向は、この噴火との関係の中で見ていく必要がある。

2.上毛野地域における初期横穴式石室

当地域における横穴式石室の採用については、畿内地域における大王墓をはじめとする主要古墳への採用の流れに連動していた可能性が考えられる。東日本でこの時期に横穴式石室が広範に採用された地域としては、伊那谷南部(長野県飯田市周辺地域)と上毛野地域中・西部があげられる。両地域は、この時期にはすでに成立していた畿内と東国を結ぶ内陸交通路(古東山道ルートと呼称する。5世紀後半の成立が考えられる)上の拠点的地域の役割を果たしていた。両地域で先駆的に横穴式石室の採用されたことは、単に葬制の変化のみにとどまるものではなく、ヤマト王権との新たな関係性創出の中での成立が考えられるところである。

まず、上毛野地域の初期横穴式石室を概観してみよう。その特徴の第一は、分布が中・西部地域に限定されること、さらに当該地域のほとんど全ての主要前方後円墳に採用されている点である。ただし、Hr-FAの噴火を挟んで築造された保渡田薬師塚古墳だけは伝統的な舟形石棺である。保渡田古墳群の直接の支配領域が榛名山噴火被災地の真っ只中にあったことが関係していると推測される。

前方後円墳の横穴式石室 前方後円墳に採用された横穴式石室の特徴としては、すべて両袖式で、側壁は小振りの川原石あるいは山石による多石構成で、奥壁は側壁同様の多石構成か奥幅いっぱいの石材による3~4段積である。袖部の構造を見てみると、明瞭な屈曲をなすのは、壁面中途までで、上半部は羨道と玄室が連続する同一面

をなす。天井面は、狭道から玄室にかけて連続面となっており、段をなさない。架構できる天井石の限界から、石室幅を広く取らないやや狹長な平面形態である。ほぼ全ての石室が、壁面をベンガラ等により赤色塗装しているのも、横穴式石室では、この時期に限定された特徴である。なお、いずれも旧地表面を石室構築基盤としており、石室背後は裏込め・裏込め被覆・盛土の補強構造となっており、掘り方を持つものはない。石室内に必ず須恵器を伴っている。基本的に陶古窯跡群の須恵器編年のMT15の型式的特徴を有しているものであり、樂瀬二子塚古墳の場合は、TK47に遡る可能性を有している。

帆立貝式と大・中型円墳の横穴式石室 初期横穴式石室の前方後円墳が所在する周辺一帯には、並行する時期の帆立貝式古墳、大・中型円墳にも横穴式石室が採用される。これらは、それぞれの地域における群集墳形成の端緒をなすものが大半である。いずれも袖無式であるが、一部同一墳丘規模・形式でありますながらT字形・L字形石室が存在する。これは、上毛野地域の5世紀以来の埋葬形態が東頭位であるという伝統性・地域性が関係しており、石室入口(羨道部)を南開口とし、その奥に直交して横長の玄室を取り付けているためであり、袖無式の変形形態としての位置づけができる。当該期の袖無式石室に西開口の事例が非常に目立つのも同じ背景の中での解釈が可能である。

壁面は両袖式に準じて小振りの川原石(一部の地域は山石)による多石構成で、奥壁は奥幅いっぱいの石材による段積構成が主体である。前方後円墳の奥壁の場合も、樂瀬二子塚古墳が多石構成であるを除けば、他はいずれも奥幅いっぱいの石材による段積構成である。袖無式の場合も、この構成を踏襲していることになる。

羨道と玄室の区分は床面の樋石あるいは狭道から一段下りる樋石によってなされている(両袖式の場合も、この構造は存在している)。やはり、壁面に赤色顔料が認められるものが多い。

いずれにしても、上毛野地域の初期横穴式石室では、両袖式と袖無式で明確な階層差を表していたことがわかる。なお、片袖式は皆無である。

3. 吾妻川流域、利根川上流域の初期横穴式石室

利根川上流域 旧子持村地域では、その北部の利根川左

岸に宇津野・有瀬古墳群が所在している。5世紀後半に属する竪穴式円墳がごく少数存在するが、大半は6世紀前半の横穴式円墳である。古墳群は小型円墳26基と極小円墳(径1~2m、高さ1m前後。丁寧な葺石を有する。古墳の範囲に含めるのは問題)27基が確認されている。これらのうちの大半は、5世紀末~6世紀初頭噴火のHr-FAの上に造られ、6世紀第2四半期噴火のHr-FPの約2mの軽石層に直接覆われてるので、自ずから成立時期が限定されてくる。発掘調査されたのは、そのうちの一部であるが、均質の軽石層で覆われているため、地下レーダー探査により古墳群の全体把握につながっている。ここでは、有瀬1号・2号墳、伊熊古墳が早くに調査されている。いずれも径約10~15mの小型円墳で、有瀬1号・伊熊古墳には埴輪列が伴っている。すべて袖無式で、側壁多石構成、奥壁は奥幅いっぱいの石材による3段積みである。

本古墳群と利根川を挟んだ対岸には、同じ存在形態で旧赤城村(現渋川市)津久田甲子塚古墳(円墳、径12.5m)がある。袖無式で、安山岩塊石を使用した壁面は側壁が多石構成、奥壁が基底石を幅いっぱいとし、その上は2列4段積とし、赤色顔料で塗装されている。2段構造の墳頂部と基壇面に円筒列がめぐらし、馬形と鶴形各1の限定的な形象埴輪が伴っていた。

宇津野・有瀬古墳群、津久田甲子塚古墳の地点から、さらに上流に約7kmのぼった左岸に昭和村岩下清水古墳群がある。Hr-FPに直接埋没した状態で3基(1~3号墳)の古墳が調査された。うち2基は、東西4.14m、南北5.05mで、2段構成の整美な積石塚方墳で、すべて石で構成されている。主体部は小規模な変形横穴式石室である。2号墳の西側に隣接する3号墳は、通有の円墳(11.2m)で袖無式石室を有している。周辺一帯には、20基前後の古墳の存在が推測されている。多くは、調査された3基と同じ6世紀前半に属する横穴式石室墳と推定される。

利根川上流域では、岩下清水古墳群の地点の先でも利根川に沿って昭和村川額原古墳群においても同時期の可能性のある横穴式石室墳が指摘でき、さらにみなかみ町師の三峰神社裏跡M-1号墳(円墳、約10m)も6世紀前半の袖無式横穴式石室墳で川原石と安山岩塊石を使用している。埴輪を有しており、円筒列と墳頂部の家形1から構成される。

吾妻川流域の初期横穴式石室 四戸古墳群の形成の端緒となった四戸I号・IV号墳の調査は、横穴式石室を中心としたものであったため、古墳の全体像については不分明な部分が多い。明らかになっている部分でみると、円墳としては非常に豊かな内容であったことがわかる。両墳は東西に隣接し、袖無式石室は、構造的にも規模的にも共通点が多いことから、同じ工人の手になったものと思われる。副葬品の遺存状態が比較的よかつたIV号墳では、直刀・石突、刀子・鎧、鉄地金銅張込金具、各種玉類(碧玉管玉・切子玉・棗玉・白玉・丸玉、黄・緑・紺ガラス小玉)等があり、本来はさらに充実した内容を誇っていたことを十分類推させる。I号墳も同様である。古墳造営の伝統性のない当地域で、古墳群形成の契機となった両墳が、この時期の最先端を行く横穴式石室と充実した副葬品を供え、埴輪樹立がなされたことは、この地域における新たな地域展開が四戸古墳群の成立につながったことを想起させる。なお、IV号墳はS-53°-Wの開口方向を示しているが、西開口を意図し、東頭位に埋葬されたことを物語る。これを踏まえれば、I号墳の開口方向S-46°-Wにも同じ意図を読み取ることができる。

四戸古墳群の地点から吾妻川沿いに約5km下った右岸、東吾妻町川戸で最近下郷古墳群の中の71号墳が調査され、Hr-FA火山灰層の上に構築された袖無式石室を主体部とする円墳が明らかになった。具体的な墳形、規模については検討課題を残しているが、直径約11.6mの円墳が推測される。側壁は川原石の多石構成で、奥壁は奥幅いっぱいの石材を3段に積み上げている。本石室も西開口を意図していることがわかる。埴輪を伴い、形象埴輪に家、器財、人物、馬形があり、充実した内容である。副葬品も充実している。6世紀第2四半期を中心とした時期が考えられる。四戸I・IV号墳と同じような地域展開上の位置づけが可能である。

4. おわりに 一四戸古墳群の成立背景について一

5世紀末～6世紀初頭の榛名山噴火と榛名山北東麓 前述したように5世紀末～6世紀初頭の榛名山噴火(Hr-FA)が最も大きな被害を及ぼしたのは、利根川と吾妻川に挟まれた榛名山北東麓に当たる合併前の旧渡良瀬市域である。この地域における5世紀の古墳実態が、従来はあまり明確ではなかった。さらに研究上、Hr-FAの榛名山

噴火の存在が明らかになってきたのも昭和40年代後半以降、取り分け同50年代のことである。当該地域の5世紀の世界が、Hr-FAに伴う噴出物層、土石流等、さらには6世紀第2四半期のHr-FAの噴出軽石層で厚く覆われてしまっていたからである。昭和50年代以降、地域一帯の大規模開発が行われるようになると、徐々に当該地域の5世紀の様相が明らかになってきた。

明らかになってきた内容を見ると、この地域が取り分け5世紀後半を中心に極めて活発な地域展開が進行していたことである。その展開の中で中核的位置を占めていたと考えられるのが馬生産である。最近調査された金井遺跡群は、大規模な馬生産に関わる拠点的集落に遭遇したものと思われる。周辺に馬の放牧地や古墳群、さらには水田・畠跡が存在していることは間違いない。金井遺跡群の南方にある中筋遺跡は5世紀後半を中心とした大規模集落(発掘調査されたのはその一部)だが、これとセットの関係で近接地で空沢古墳群、行幸田城山遺跡(放牧地)が確認されている。このようなセット関係を有する複数の遺跡群の一端が、北東麓の各所で顕を出しているわけである。

榛名山北東麓におけるHr-FAによる被害の大きさは、噴火後の復興を大きく展開できなかつたことからわかる。それゆえ、6世紀第2四半期の第2の榛名山の大規模噴火が襲来するまでの間には、顯著な遺跡の存在は極めて希薄である。もちろん古墳についても同様である。**周辺地域における初期横穴式石室の登場と馬生産** 吾妻川を挟んだ対岸に位置する旧子持村の地域(主として子持山の南麓に大きく展開している)は、Hr-FAに伴う火山灰の降下はあったものの、火砕流が及んだのは一部であり、大被害を免れた。Hr-FA噴火後に当たる6世紀初頭ないし前半の時期に当地域は飛躍的な展開を遂げたと言える。もちろん、噴火以前の5世紀後半を中心とした時期の遺跡も確認できるが、噴火後の大展開は一目瞭然である。

榛名山北東麓で大規模展開していた馬生産の拠点が子持山南麓に移動したことが推定される。子持山南麓の6世紀前半の遺跡のあり方を見てみると、黒井峯遺跡とその周辺に集落域が集中しており、その南側の低地部分に水田域が展開し、西側の広大な丘陵や利根川の段丘面は放牧地となっている。そして、地域の北東隅部に初期横

穴式石室をはじめとして横穴式石室の群集墳が位置している。当地域で榛名山北東麓に替わって馬生産の中心地へと変化していったことがわかる。しかも、生産のあり方が極めて組織的な様相を示していることがわかる。

岩下清水古墳群の内容は、馬生産の背景を考えていく上で示唆的である。当古墳群は、積石塚方墳と通有の袖無式石室円墳から構成されていた。5世紀後半の榛名山北東麓では、初期群集墳の中に通有の竪穴式円墳とともに、積石塚方墳が確認されており、韓式系土器の存在ともあわせ、主として馬生産に関与していた渡来人の存在を想起させた。岩下清水1・2号墳は、その系譜に連なる人々の移動を物語っている可能性がある。

利根川上流域・吾妻川流域の初期横穴式石室の系譜 当地域で確認されている6世紀初頭～前半に属する横穴式石室は、上毛野地域中・西部の前方後円墳の下に編成されていた帆立貝式古墳、大・中型円墳に伴う袖無式石室と共に構造的特徴を有していることが確認できる。利根川上流域、吾妻川流域の初期横穴式石室が上毛野地域中・西部の強い影響下に成立したことを物語っている。また、当初の内容が類推できる副葬品が遺存していたものでは、非常に充実したものであることが注意される。多くの場合、埴輪を伴っていることとも併せ、中・西部地域との強いつながりの中で成立を考えていく必要があるだろう。

この地域での初期横穴式石室の登場についても、主として馬生産地の拡大が想起されるところである。今後は、同時期の集落跡実態や放牧適地についての検討が求められる。

上毛野地域における横穴式石室の登場 5世紀末ないし6世紀初頭の上毛野地域中・西部における横穴式石室の登場の動きは、ヤマト王権との関係性の中で考えしていく必要を前述した。そこには、一層緊密さを増していく思惑があったものと思われる。当地域における当該石室の嚆矢である安中市篠瀬二子塚古墳が、推定される古東山道ルートで碓冰坂を越えてすぐの地に突如として登場した背景には、そうした意図が強く表れている。当墳の横穴式石室の系譜的関係は、具体的には多くの課題を残しているが、副葬品の内容は、王権との密接な、新たな関係を想起させるものである。

その中には、馬の需要を中心的に担うことが益々期待

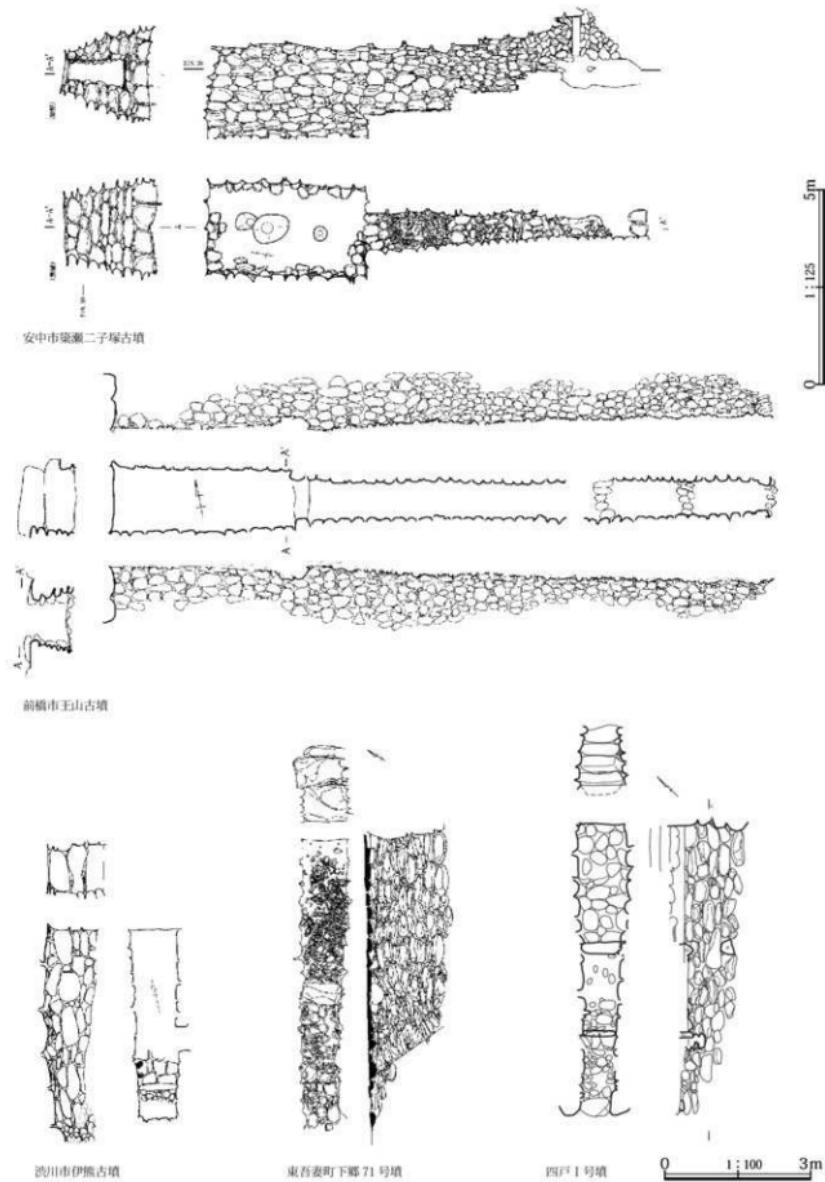
されたことがあった。Hr-FAの大規模噴火は、上毛野地域の馬生産にも大きな被害を与えたことは間違いない。ちょうど、その時期が、当地域の横穴式石室の導入期に当たっていた。利根川上流域、吾妻川流域における初期横穴式石室の急激な拡散の動きが馬生産の新たな動きと表裏一体の関係にあったことがわかる。

引用・参考文献

- 赤城村教育委員会 2005『津久田甲子塚古墳』
- 安中市教育委員会 2016『安中市指定史跡 篠瀬二子塚古墳整備事業報告書』
- 尾崎喜左雄 1971『四戸古墳群及び机古墳発掘調査報告』『岩村島誌』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2019『金井東裏遺跡』
- 群馬県立歴史博物館 2017『海を渡って来た馬文化』
- 子持村教育委員会 1990『黒井峠道路発掘調査報告書』
- 子持村教育委員会 2005『宇津野・有渓道路』
- 齋藤龍 2010『古墳時代後期における集落とその周辺の景観』『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』28
- 東吾妻町教育委員会 2016『下郷古墳群71号墳』
- 藤岡一雄 1981『四戸古墳群』『群馬県史』資料編3
- 右島和夫 1994『東国古墳時代の研究』学生社
- 右島和夫 2003『上野地域における方墳の系譜と馬』『古墳時代東国における渡来系文化的要素と展開』上生田純之編 専修大学文学部
- 右島和夫 2004『昭和村の古墳』『群馬歴史散歩』184
- 右島和夫 2010『黒井峠道路周辺の古墳』『渋川市歴史資料館紀要』1号 渋川市教育委員会
- 右島和夫 2019『群馬発「馬の考古学」』『馬の考古学』雄山閣
- 右島和夫 2019『古墳時代における古東山道の成立と馬』『馬の考古学』雄山閣

第21表 上毛野地域の初期主要標六式石斧

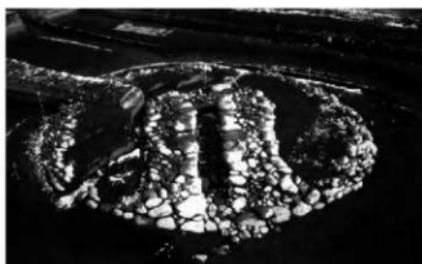
No	古墳名	所在地	形態長・幅・厚(m)	型	全長(玄長)・同幅	同高	使用石材	表面赤色 顔料	輪輪	参考
1	鬼塚二子塚	安中市原仲	前方後円[1.76]	両袖	1154	407	232	川原石	○	張り面頭刀・鍊、金銅三輪、鍛金馬頭具、鏡製 器頭付打刀、鏡頭ガラス、鍛金馬頭品、小刀甲、須惠 5 C. 4~6 C. 初
2	後圓3号	安中市後園	[P1.20]	T字形	540	100	250	川原石	○	胡鬧三輪、鏡頭、各種玉類、真製馬頭、石製馬頭 6 C. 初
3	下館田上山1号	安中市下館田上山1号	[P1.20]	T字形	540	105	170	川原石	○	胡鬧三輪、刀子、各種玉類、須惠器 6 C. 初
4	下馆田上山2号	安中市下馆田上山2号	[P1.19]	両袖	560	240	80	川原石	○	胡鬧三輪、刀子、各種玉類、須惠器 6 C. 初
5	一之宮4号	高岡市一之宮	[P1.16]	両袖	560	240	120	川原石	○	胡鬧三輪、刀子、土師器 6 C. 初
6	梅洞11号	高岡市高瀬	[P1.30]	両袖	610	320	110	霞灰岩	○	須惠2、繩財板頭留印鉄 6 C. 前
7	若田大塚	高崎市若田町	[P1.24]	両袖	425	122	71	川原石	○	須惠2、繩財板頭留印鉄 6 C. 前
8	少林山172号	高崎市少林山	[P1.6.34]	両袖	720	310	120	川原石・自然塊石併用	○	須惠3、金頭頭 6 C. 前
9	御郎人18号	高崎市御郎人町	[P1.6.34]	両立(34.5)	684	256	104	150 川原石	○	須惠3、刀子、金頭頭 6 C. 前
10	木幡福寺塚	高崎市木幡	[P1.6.34]	両袖	500	302	115	150 川原石	○	須惠3、刀子、各種玉類、須惠器 6 C. 前
11	玉山	高崎市社坂町	[P1.6.34]	両立(75)	1637	437	163	川原石	○	須惠3、金頭頭、刀子、須惠器 6 C. 初
12	寄院院裏	高崎市寄院町	[P1.25]	両袖	950	180	180	川原石	○	須惠3、刀子、須惠器 6 C. 初
13	日上塙村24号	高崎市日上町	[P1.20]	両袖	326	219	74	川原石	○	須惠3、刀子・弓金具、各種玉類、須惠器 6 C. 初
14	羽野2号	伊勢崎市羽野町	[P1.20]	両袖	970	390	180	172 川原石	○	須惠3、刀子・弓金具 6 C. 初
15	正元寺	前橋市市場之町	[P1.20]	前方後円[7.0]	970	390	180	172 川原石	○	須惠3、刀子・弓金具 6 C. 初
16	前二子	前橋市西大塚町	[P1.92]	両袖	1396	523	182	136 自然石塊石	○	須惠3、刀子・弓金具、刀子・刀子・刀子・鏡頭、須惠器 6 C. 初
17	宏祇245号	前橋市大字寺町	[P1.12]	両袖	530	240	120	120 自然石塊石	○	須惠3、刀子、玉類、刀子・鏡頭、須惠器 6 C. 初
18	篠山	伊勢崎市余塚町	[P1.12]	前方後円[22以上]	560	330	135	125 自然石塊石	○	須惠3、刀子、玉類、刀子・鏡頭、各種玉類 6 C. 初
19	袖山西北	伊勢崎市袖山西北	[P1.12]	両袖	425	230	90	90 自然石塊石	○	須惠3、刀子、玉類、刀子・鏡頭、須惠器 6 C. 初
20	梅原山2号	伊勢崎市梅原山	[P1.12]	一字形	1186	87	140	自然石塊石	○	須惠3、刀子・鏡頭、須惠器 6 C. 初
21	井久田甲子塚	河内市小坂町	[P1.12.5]	両袖	400	240	130	140 自然石塊石	○	須惠3、土師器 6 C. 初
22	伊坂	河内市子持町	[P1.83.1.1]	両袖	420	314	90	100 自然石塊石	○	須惠3、刀子・鏡頭、各種玉類、須惠器 6 C. 初
23	有塚1号	河内市子持町	[P1.7.14.14×5.05]	両袖	480	222	94	130 自然石塊石	○	須惠3、刀子・鏡頭、各種玉類 6 C. 初
24	岩下清水2号	原和村川嶋	[P1.11.2]	両袖	200	43	90	90 自然石塊石	○	須惠3、刀子・鏡頭、各種玉類 6 C. 初
25	岩下清水3号	原和村川嶋	[P1.12]	両袖	403	245	93	93 自然石塊石	○	須惠3、刀子・鏡頭、各種玉類 6 C. 初
26	四谷1号	東吾妻町三島	[P1.8]	両袖	514	235	120	158 川原石	○	須惠3、刀子・鏡頭、各種玉類 6 C. 初
27	四谷IV号	東吾妻町三島	[P1.11.6]	両袖	421	207	71	110 川原石	○	大刀2、小刀1、刀頭、馬頭駒(刀頭鏡板付物、其他金屬 6 C. 初
28	下郷1号	東吾妻町三島	[P1.6.3]	両袖	590	290	90	155 川原石	○	大刀2、小刀1、刀頭、馬頭駒(刀頭鏡板付物、其他金屬 6 C. 初



第188図 群馬県内初期横穴式石室図



前橋市王山古墳



安中市下増田上田中2号墳



渋川市伊熊古墳



昭和村岩下清水2号墳



四戸1号墳



渋川市坂下町古墳群6号墳(Hr-FAで埋没)

図版10 群馬県内初期横穴式石室写真

第5節 調査成果と課題

今回の報告で分かった調査成果や課題を四戸の古墳群・四戸遺跡も含めて列挙する。

調査成果

①四戸の古墳群・四戸遺跡は、信濃や越後との往来の道の拠点にある吾妻川と温川の合流地点脇にある遺跡として重要である。

②四戸の古墳群では、縄文時代から近世の遺物が出土した。

③遺構は、河岸段丘の高位面の5区（西部）が多く、竪穴建物、土坑、古墳、掘立柱建物などが検出され、やや下がる面の6区（東部）からは1棟の竪穴建物と古代の集石遺構、中世の畠が検出されたのみである。

④縄文時代は、遺構の検出は無く、前期～晚期までの土器が出土し、特に前期と晚期に大量の土器が出土した。後期はごく少数であった。

⑤弥生時代は、いずれも後期樽3期の13棟の竪穴建物が検出され、8基の土坑が調査された。17号竪穴建物からは、40点近い完形に近い土器が床面直上から出土しており、この時期の土器の組成を知るのに有効な資料である。

⑥イネを圧痕同定分析により多く確認した。吾妻川中流域という山間部でもイネの栽培がなされていたことが分かった。

⑦古墳時代は、4棟の竪穴建物、3棟の竪穴状遺構、3棟の掘立柱建物、3基の古墳、12基土坑が確認された。竪穴建物は5世紀後半が2棟、6世紀前半が2棟である。竪穴状遺構は5世紀後半が2棟である。

⑧古墳は3基あり、いずれも両袖の横穴式石室を持つ古墳である。1号墳が6世紀後半、2号墳が7世紀前半、3号墳が7世紀中頃である。

⑨1号墳は、墳径12.6mの円墳で、豊富な器財埴輪群を持つ石室全長5.4mの両袖横穴式石室墳である。鞍・大刀・盾・鞆・家と種類不明の人物埴輪を持ち、石室前面から基壇部を中心にしており、埴輪の配置もある程度復元できた。埴輪は肉眼観察や薄片胎土作製分析、蛍光X線分析などにより藤岡産埴輪であることが判明し、藤岡から榛名山西南麓を通るルートで四戸に運ばれてきたものと思われる。1号墳出土埴輪の顔料を分析す

ると、赤色顔料はパイプ状ベンガラで、藤岡産埴輪で使用される素材である。珍しい青色・白色顔料は粘土鉱物で色の違いを示す素材は特定できなかった。

⑩1号墳の石室前面に、ほぼ直線状の墓道状遺構が検出された。この墓道と近似する遺構が2号墳からも検出されている。いずれも1段の石列で直線状に近い形態を取るので墓道状遺構とした。そこに同時期の須恵器高环、須恵器短頸瓶などが置かれていて、墓前祭祀が行われていたことを示している。須恵器長頸瓶が東斜面から出土し、7世紀後半に下るもので、古墳への追善供養などがあったことが分かる。

⑪2号墳は墳径11.2mの円墳で、埴輪が無い石室全長4.6mの両袖横穴式石室である。墓道状遺構は1号墳同様に検出された。石室内から大小の釘が出土しており、木棺が置かれていたと思われる。出土位置は不明なので棺の配置は分からない。留金具も出土しており、馬具が納められていた可能性もある。

⑫3号墳は、墳丘は周堀と想定される施設から墳径8mの円墳と想定される。玄室を中心に遺存している横穴式石室である。副葬品が多く出土し、足金具付の直刀が1本、小刀が1本、大型平根鐵が10本、長頭鑿箭鐵が11本以上出土している。鐵の形態から見て7世紀中頃と推定する。釘が出土しているので木棺が置かれていたものと考える。

⑬1～3号墳は、南東部に下る河岸段丘面の縁に、石室開口部を設けて、より古墳・石室が大きく見えるような位置に石室を3基置いた。6世紀後半に1号墳が構築され、7世紀前半に1号墳のすぐ西側の場所に2号墳が、最後の3号墳は、1号墳と2号墳の間の狭小の空間に7世紀中頃に構築されている。

⑭西側に隣接する四戸遺跡の集落の動向と併せて群大調査の古墳も含めて四戸の古墳群を検討する。基本的に四戸の古墳群は、その位置や時期から西隣の四戸ムラの人々の上層部の人間の墓と想定される。古墳群は、6世紀前半に狭小型無袖石室の群大IV号墳が築造され、そのすぐ後にやや大型化した無袖横穴式石室の群大1号墳、6世紀中頃の古墳としては、さらに大型化した無袖横穴式石室の群大III号墳がある。6世紀後半になると両袖横穴式石室の事業団1号墳、7世紀前半に両袖横穴式石室の事業団2号墳、群大II号墳、7世紀中頃に横穴式

石室の事業団3号墳が構築されている。以上、6世紀前半～7世紀中頃にかけて構築されたのが四戸古墳群である。一方四戸遺跡は、4世紀には4棟の建物であったのが、5世紀に入り前半は1棟、中頃に5棟に増え、5世紀後半には13棟と竪穴建物が増加はじめる。5世紀末から6世紀初頭にかけて19棟となり増加し、6世紀前半(16棟)、中頃(16棟)、後半(17棟)と総数49棟と多く最多である。7世紀になると前半(9棟)、中頃(6棟)、後半(7棟)と総数22棟となり、7世紀には減少傾向がある。

四戸の古墳群の開始は6世紀前半で、丁度四戸集落でかなり建物が増加した時期で16棟の建物があり、これら四戸ムラの繁栄とともに四戸群大IV号・群大1号古墳が造営される。6世紀中頃には16棟、6世紀後半には17棟の計49棟と四戸ムラで最盛期を迎えるが、この時期に四戸に古墳が継続して多く造られた可能性が高い。例えば、6世紀中頃と想定されるのは、四戸群大III号墳であり、6世紀後半には、事業団1号墳が築造される。また、岩島村25号(十五塚)墳(第183図1)から埴輪とともに、馬具・刀・土器が出土している。さらに、岩島村34号墳(第183図24)からも埴輪とともに、刀・玉類が出土しており、6世紀中頃から後半の可能性が高い。この時期が四戸ムラと古墳の築造の最盛期となる。

7世紀になっても古墳の造営は続き、建物は7世紀代で22棟と6世紀から比べると減少傾向にあるが、事業団2・3号墳は7世紀代の古墳で、岩島村の26・29・31・32号墳(第183図18,19,23,26)などが埴輪の出土無くも玉類などの副葬品が出土しているものがあり、7世紀代の可能性がある。

以上見ると、四戸の古墳群の造営は、ムラの盛衰とかかわりがあり、特に古墳群造営の契機は、四戸ムラが最盛期となる6世紀前半であり、ムラは10世紀まで継続するが、最もムラで建物の棟数の多い6・7世紀に古墳が継続的に築造されることとは、ムラと古墳の築造が密接に関係していることが分かる。

⑩古代の集石遺構では、須恵器が付近から出土しているものが多く、また、人骨が一部出土しているので、墓の可能性が高い。8世紀に入り、古墳の築造が無くなつた後に、墓域である5区の東側にある、今までほとんど使用されなかつた東側の6区を墓域として使用したものと思われる。

⑪中世の昌は、歎さくの痕跡があるので、大治元年のAs-Kkが耕作度に混入しているものである。中世の土壙墓からは、北宋銭が冥錢として6枚ずつ副葬されており、1号土壙墓は成人の女性、2号土壙墓は壯・老年の男性と推定される。

課題

①越後・信濃との関係性を想定されている土器の内側を黒く処理すること、信濃の系統として想定されている外反した長い口辺部を持つ杯などが、四戸遺跡・四戸の古墳群のいくつかの建物の5世紀後半から6世紀後半まで出土している。今後の両地域との交流の検討をする資料である。

②半島系の要素として重要な提砥が四戸遺跡から6世紀中頃に2個出土している。古式須恵器の高杯(TK208)も出土している。多孔彫や牛角把手付彫は見当たらないが、提砥と古式須恵器の存在から見るとある程度半島系の文化要素が入っていた可能性がある。

③丁寧な作りの石組カマドが四戸遺跡では認められた。単に石を袖の一部などに使用したものではなく、入口から袖内部まで全体に石を組んで造作する石を主体としたカマドである。単に石を使用したというカマドであれば、四戸遺跡・四戸の古墳群の5世紀中頃から6世紀初頭まで12棟、6～7世紀には9棟あり、一定の数で石を利用したカマドは構築される。このような例は他の地域にもある。

石組カマドは先述したように石組を中心とした造りの独自のカマドである。四戸遺跡では、6世紀中頃に2例、6世紀後半の2例、7世紀中頃の1例まで続く。この類のカマドは、東吾妻町の姉山石組カマドに類似がある。これらのカマドの類似を群馬県内の山間部である吾妻・利根地域はもとより、越後、信濃まで検索を広めて、その起源と分布範囲を今後調べる必要があるだろう。

④古墳・集落の様々な要素で、信濃と越後との関係を検討できるような資料を抽出し、交流の有無、状況を明らかにする必要がある。また、県内の平野部から、四戸の古墳群・四戸遺跡に至るのに、吾妻川下流から上流に遡るルートと、榛名山西麓の烏川に沿って遡るルートがある。少なくとも埴輪については、榛名山西麓ルートを利用しているが、そのルートについても明らかにしていく必要があるだろう。

参考文献（発掘調査報告書は主要なものに限る）

- 相京亦次 1971「古墳文化の時代」『岩島村誌』岩島村誌編纂委員会P.P89～113
- 新井信示 1960「原始時代」『原町誌』原町編纂委員会P.P23～52
- 新井信助 1998「生原遺跡」吾妻町教育委員会
- 大木伸一郎 2019「群馬県立吾妻川流域の後期弥生遺跡について」『研究紀要37』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団P.P32～52
- 大木伸一郎 2020a「群馬県における弥生時代後期の土器について」『研究紀要38』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団P.P31～50
- 大木伸一郎 2020b「四戸古墳出土の赤土土器について」『四戸古跡』本文編2(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団P.P288～295
- 大谷弘治 2016「副葬品からみた無袖石室の位相」『東日本の無袖横穴式石室』雄山園P.P225～238
- 大坪昌彦・石井克己 2016「下郷古墳群71号古墳」東吾妻町教育委員会
- 尾崎喜佐雄 1971「岩島村の古墳—四戸古墳群及び古墳発掘調査報告書—」『岩島村誌』岩島村誌編纂委員会P.P153～159
- 加藤二生・長井欣也 2007「群馬県の器財埴輪I」群馬県古墳時代研究会
- 加藤二生・志村哲也 2008「群馬県の器財埴輪II」群馬県古墳時代研究会
- 群馬県 1938「上毛古墳紀要」『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告』5輯
- 群馬県教育委員会 1983「歴史の道調査報告書 吾妻の諸街道」
- 群馬県教育委員会 2017「群馬県古墳総覧」
- 杉並区立郷土博物館 1992「吾妻地区最古の古墳—石ノ塔古墳について—」『群馬地域文化』30号 群馬地域文化振興会P.P8～9
- 杉山秀宏 2017a「群馬県内古墳・祭祀跡出土上鉄製農工具について」『研究紀要』35(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団P.P61～80
- 杉山秀宏 2017b「副葬品からみた群馬の郡集墳」『小さな古墳の物語』高崎市民考古資料館P.P35～40
- 杉山秀宏 2020「四戸古墳群について」『研究紀要38』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団P.P67～86
- 高井田弘 2014「下郷古墳群」(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋政充・宇佐美義春・永井智教 2003「前内遺跡」小泉宮(「遺跡」)吾妻町教育委員会
- 谷保徳他「四戸古跡」2020(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 黒川秀夫他 2009「原古墳」(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 富田孝彦 2001「林宮原遺跡II」長野原町教育委員会
- 富田孝彦・高林真人 2015「林地区遺跡群」長野原町教育委員会
- 中里正彦「群馬県西部の円筒埴輪編年—2条3段円筒埴輪を中心にして—」『埴輪研究会誌』第6号 塩輪研究会P.P1～16
- 中之条町教育委員会 1983「中之条町名古田8号古墳発掘長のあらまし」『中之条町教育委員会』
- 中之条町誌編纂委員会 1976「古墳文化」「中之条町誌」中之条町誌編纂委員会P.P39～60
- 中之条町歴史民俗資料館 2009「吾妻の古墳の出土品」
- 中之条町歴史民俗資料館
- 深澤敦仁 2010「上野」「東日本における無袖横穴式石室」雄山園 P.P152～168
- 福島治哉 2010「吾妻川流域の古墳群」「群馬の古墳を歩く」みやま文庫 P.P144～162
- 藤岡一雄 1968「四戸古墳群」『昭和三九・四〇年度における発掘調査』群大教育・尾崎研究室調査報告第三輯 群馬大学尾崎研究室
- 藤岡一雄 1981「四戸古墳群」「群馬県史資料編3」群馬県史編さん委員会 P.P520～532
- 松本浩一 1981「石ノ塔古墳」「群馬県史資料編3」群馬県史編さん委員会 P.P515～519
- 右島和夫 1993「群馬県における初期横穴式石室の研究」「古文化論叢」12 九州古文化研究会
- 右島和夫 2018「四戸古墳群」①②「群馬の古墳物語」上毛新聞社 P.P218～221
- 森田惣一 1981「吾妻郡」「群馬県内の横穴式石室」「群馬県古墳時代研究会 P.P175～188

四三の占類群 孵生時代窓穴建物一覧

道標名	グリッド位置	座標(m)	高さ 幅 奥行き 値	平面形状		規模(m) (m)		長軸方位		短軸方位		重複測量		時間/備考
				東西	南北	東西	南北	東西	南北	東西	南北	東西	南北	
1号窓穴建物	2G・2H・28~30	X=61164~61169 Y=-93139~ -93145	方形+長方形	東西	3.70+ 深さ	0.16~0.38		—	—	長	幅			弥生時代
4号窓穴建物	2C・44・45	X=61140~61142 Y=-93219~ -93223	方形+長方形	東西	5.68 深さ	10.437~		—	—	長	幅			弥生時代
5号窓穴建物	2C~2E・42・43	X=61144~61150 Y=-93205~ -93211	隅丸長方形	東西	4.46 深さ	0.15~0.25		長	幅					弥生時代
7号窓穴建物	2B~21・38~40	X=61169~61178 Y=-93188~ -93196	長方形	東西	5.24 深さ	18.928	N 29° W	深さ	—	長	幅			弥生時代
10号窓穴建物	2E~2G・43~44	X=61154~61161 Y=-93211~ -93218	隅丸長方形	東西	4.64 深さ	0.30~0.70	N 44° E	深さ	0.1	長	幅			弥生時代
11号窓穴建物	2G~2I・41~43	X=61161~61167 Y=-93204~ -93212	隅丸長方形	東西	4.94 深さ	31.429+	N 35° W	長	幅	0.534	0.39	2~5・8号窓穴建物10.1坪		弥生時代
12号窓穴建物	2G・2H・40~41	X=61164~61169 Y=-93196~ -93200	長方形	東西	6.7 深さ	0.42~0.58	N 26° E	深さ	0.04	長	幅	0.46	0.4	弥生時代
13号窓穴建物	2F~2H・40~42	X=61158~61165 Y=-93199~ -93204	隅丸長方形	東西	9.64 深さ	53.28	N 26° E	深さ	0.04	長	幅	0.6	0.7	柱・柱脚
16号窓穴建物	2J・2K・40~41	X=61174~61182 Y=-93191~ -93202	隅丸長方形	東西	7.26 深さ	11.112	N 53° W	長	幅	0.108	0.15~0.19			弥生時代
17号窓穴建物	2D~2E・44~46	X=61147~61154 Y=-93218~ -93227	隅丸長方形	東西	5.23 深さ	0.15~0.26	N 28° E	深さ	0.11	長	幅	0.73	0.77	柱・柱脚
19号窓穴建物	2H・2I・43~44	X=61165~61170 Y=-93212~ -93217	隅丸長方形少	南北	4.82 深さ	22.056	N 0°	深さ	0.05	長	幅	0.11		柱・柱脚
20号窓穴建物	2J~40	X=61176~61180 Y=-93195~ -93197	不定形	南北	4.24 深さ	14.965+	N 0°	深さ	0.15	長	幅	0.15	15号窓穴建物	柱・柱脚
21号窓穴建物	2F~2G・39~40	X=61157~61164 Y=-93193~ -93200	隅丸長方形	東西	4.45 深さ	306+ 深さ	N 12° W	長	幅	1.104				弥生時代
道標名	グリッド位置	座標(m)	高さ 幅 奥行き 値	平面形状		規模(m) (m)		長軸方位		短軸方位		重複測量		時間/備考
2号窓	2番 1号窓穴建物へ変更													
3号窓穴建物	2C・2D~45~46	X=61140~61146 Y=-93221~ -93228	方形	東西	5.5 深さ	0.22~0.45	N 90° E	位置	N 54° E	幅	0.54	0.35	精査用	2~9・10号窓穴建物
6号窓穴建物	2E・2F~43~44	X=61152~61159 Y=-93210~ -93217	楕円方形	南北	5.56 深さ	23.136+	N 63° E	位置	N 55° E	幅	0.54	0.35	精査用	古墳時代
8号窓穴建物	2F~2H・43	X=61159~61167 Y=-93213~ -93220	隅丸長方形	東西	6.12 深さ	0.23~0.38	N 63° E	位置	N 62° E	幅	1.08	0.2	精査用	古墳時代
9号窓	久番 6号窓穴建物へ変更													
14号窓穴建物	2J・2K・39	X=61178~61182 Y=-93193~ -93200	楕円方形	東西	5.18 深さ	0.06~0.27	N 51° E	位置	N 51° E	幅	0.6	0.95~0.75	精査用	古墳時代
15号窓穴建物	~41													
18号窓	久番 3号窓穴建物へ変更													

四戸の古墳群 穴穴状造構一覧

遺構名	位置		平面形状	規模(m)				長軸方位	重複関係	時期/備考
	(グリッド)	座標値		長軸	短軸	深さ	面積			
1号穴状造構	2E・2 F-44・45	X=61152～61158 Y=93216～93222	圓丸方形	5.54	5.38	0.15～0.33	22.416	N-10°～E	10堅建10土坑	古墳時代
2号穴状造構	2E～2 G-40・41	X=61154～61160 Y=93195～93201	方形	4.36	4.22	0.03	17.05	N-61°～E		古墳時代
3号穴状造構	2G・2 H-44・45	X=61161～61167 Y=93219～93224	圓丸長方形	4.88	4.16	0.14～0.24	17.04+	N-40°～E	8堅建	古墳時代

四戸の古墳群 据立柱建物一覧

遺構名	位置		平面形状	規模(m)				柵行方向	重複関係	時期/備考
	グリッド	座標値		柵行	梁行	床面積	柱間距離			
1号据立柱建物	2C・2D-43 ～45	X=61140～61145 Y=93214～93220	長方形	2間	1間	10.508	柵行 2.55～2.78 梁行 1.96～2.10	N-55°～E		古墳時代
2号据立柱建物	2G・2 H-40・41	X=61162～61166 Y=93196～93202	長方形	3間	1間	13.052	柵行 2.14～2.38 梁行 1.80～2.00	N-67°～W	12・13堅建	古墳時代
3号据立柱建物	2H-43・44	X=61166～61169 Y=93213～93216	方形	1間	1間	3.485	柵行 1.80 梁行 1.90	N-48°～W	19堅建	古墳時代

四戸の古墳群 古墳一覧

遺構名	位置		平面形状	墳丘(m)				周囲(m)		
	グリッド	座標値		墳丘段	墳丘段	側面全長	側面墳丘径	周囲径	幅	深さ
1号古墳	2F～21-36～40	X=61155～61172 Y=93176～93196		19.28	12.32	16.72	13.40	外径19.40 内径12.08	2.54～4.00	0.50～1.34
	石室方位	右壁・奥	石室全長	玄室長	羨道長	玄室幅	羨道幅	玄室高	羨道高	羨道高
	N-34°～W	5.4	2.26	3.03	1.43	1.10	1.08+	1.28+	2.56	0.77
	左壁・前		2.32	3.00	1.28	0.83	0.96+	1.35+	2.50	0.60

遺構名	位置		平面形状	墳丘(m)				周囲(m)		
	グリッド	座標値		墳丘段	墳丘段	側面全長	側面墳丘径	周囲径	幅	深さ
2号古墳	2D～2F-40～42	X=6145～66-1157 Y=93197～93209		—	—	6.55	5.42	外径 2.30～2.70 内径 —	0.10～0.14	
	石室	石室方位	石室全長	玄室長	羨道長	玄室幅	羨道幅	玄室高	羨道高	羨道高
	N-35°～W	4.6	2.25	2.30	1.10	0.73	0.75+	0.50+	—	0.87
	右壁・奥	2.20	2.32	0.75	0.70	0.93+	0.73+	—		0.25
	左壁・前									

遺構名	位置		平面形状	墳丘(m)				周囲(m)		
	グリッド	座標値		墳丘段	墳丘段	側面全長	側面墳丘径	周囲径	幅	深さ
3号古墳	2D・2E-38・39	X=61145～61150 Y=93186～93191		—	—	—	—	外径 — 内径 —	—	—
	石室	石室方位	石室全長	玄室長	羨道長	玄室幅	羨道幅	玄室高	羨道高	前庭長
	N-48°～W	3.40	2.17	1.55	0.80	0.50	0.63	—	—	—
	右壁・奥	2.22	1.59	1.17	0.60	0.60	—	—	—	—
	左壁・前									

四戸の古墳群 欠番 ピット一覧 9～13・16号ピット

遺構名	位置		平面形状	規模(m)				時期/備考		
	グリッド	座標値		長軸	短軸	深さ				
1号ピット	2E-45	X=61153・61154 Y=93222	円形	0.35	0.30	0.18				古墳時代
2号ピット	2F-45	X=61154・61155 Y=93222	円形	0.46	0.44	0.41				古墳時代
3号ピット	2F-45	X=61156 Y=93223	円形	0.40	0.40	0.30				古墳時代
4号ピット	2F-45	X=61156・61157 Y=93223	円形	0.33	0.28	0.25				古墳時代
5号ピット	欠番	3号据立柱建物へ変更								
6号ピット	欠番	3号据立柱建物へ変更								
7号ピット	欠番	3号据立柱建物へ変更								
8号ピット	欠番	3号据立柱建物へ変更								
14号ピット	2I-40	X=61171 Y=93199	円形	0.55	0.47	0.63				古墳時代
15号ピット	2F-40	X=61172 Y=93196・93197	円形	0.50	0.43	0.43				古墳時代
17号ピット	2I-41	X=61170 Y=93204	円形	0.25	0.21	0.1				古墳時代
18号ピット	2I-42	X=61170・61171 Y=93204	円形	0.20	0.18	0.36				古墳時代

遺構一覧

遺構名	位置		平面形状	規模(m)			時期/備考
	グリッド	座標値		長軸	短軸	深さ	
19号ピット	21-41	X=61171・61172 Y=-93203・-93204	円形	0.30	0.26	0.33	古墳時代
20号ピット	21-41	X=61171・61172 Y=-93203・-93204	円形	0.59	0.56	0.36	古墳時代
21号ピット	21-42	X=61174 Y=-93205	円形	0.34	0.26	0.31	古墳時代
22号ピット	21-41	X=61175・61176 Y=-93204	円形	0.32	0.30	0.26	古墳時代

四戸の古墳群 土坑一覧

遺構名	位置		平面形状	規模(m)			長軸方位	重複関係	時期/備考
	グリッド	座標値		長軸	短軸	深さ			
1号土坑	2B・2C-22	X=61138～61140 Y=-93104～-93106	不整形	1.82	1.42	0.20	N-35°-E		近世
2号土坑	欠番	1号土坑墓へ変更							
3号土坑	欠番	2号土坑墓へ変更							
4号土坑	2C-31・32	X=61142・61143 Y=-93153～-93155	楕円形	1.72	1.34	0.18	N-50°-E		近世
5号土坑	2F-31	X=61155・61156 Y=-93154～-93155	円形	1.34	0.72	0.28	N-8°-W		古墳時代
6号土坑	2E・2F-30	X=61155・61156 Y=-93151～-93152	円形	0.84	0.80	0.30	N-47°-W		古墳時代
7号土坑	2E・2F-30	X=61154・66-1155 Y=-93147～-93148	円形	0.94	0.86	0.20	-		古墳時代
8号土坑	2E-29	X=61152・61153 Y=-93142・-93143	円形	0.92	0.92	0.24	-		古墳時代
9号土坑	2B・2C-31・32	X=61165～61168 Y=-93153～-93155	楕円形	3.04	1.73	0.82	N-18°-E		古墳時代
10号土坑	2E・2F-44	X=61154～61156 Y=-93216～-93217	不整形	1.68	1.38	0.48	N-36°-W	2・6・10堅建	古墳時代
11号土坑	2F-44	X=61154・61155 Y=-93216～-93218	楕円形	1.76	1.44	0.51	N-52°-W		弥生時代
12号土坑	2H-41	X=61187・61188 Y=-93202～-93203	円形	1.34	1.11	0.25	N-65°-W		古墳時代
13号土坑	2E-38・39	X=61151～61153 Y=-93189～-9190	不整形	1.40	1.36	0.50	N-65°-W		古墳時代
14号土坑	2D-39・40	X=61146・61147 Y=-93193～-93195	楕円形	1.76	1.71	0.36	N-59°-W		古墳時代
15号土坑	2H-40	X=61165・61166 Y=-93196～-93197	円形	1.25	1.06	0.88	N-59°-W	12堅建	古墳時代
16号土坑	2H-40	X=61167・61168 Y=-93197～-93199	円形	1.42	1.42	0.76	-	12堅建	古墳時代
17号土坑	2F・2G-43	X=61159・61160 Y=-93212～-93213	不明	1.00	0.30+	0.37+	-		弥生時代
18号土坑	2E-44	X=61150～61152 Y=-93216～-93218	楕円形	1.70	1.00	0.25	N-53°-E		弥生時代
19号土坑	2I-42	X=61171～61173 Y=-93206～-96208	不整形	2.21	1.74	0.25	N-47°-W-E		弥生時代
20号土坑	2I-40	X=61172・61173 Y=-9397～-93198	円形	1.42	1.32	0.33	-		弥生時代
21号土坑	2H-40	X=61167～61169 Y=-93195～-93196	円形	1.42	1.36	0.77	-		弥生時代
22号土坑	2H-40	X=61168・61169 Y=-93196～-93167	隅丸方形	1.14	1.01	0.14	N-90°		弥生時代
23号土坑	2I-41	X=61173・61174 Y=-93200～-93201	不整形	0.92	0.76	0.21	N-2°-E		弥生時代
24号土坑	2D-39・40	X=61145～61147	不整形	1.32	1.02+	0.29	N-12°-W	14土坑	古墳時代

四戸の古墳群 集石一覧

遺構名	位置		座標値	規模(m)			長軸	短軸	時期/備考
	グリッド	座標値		長軸	短軸				
1号集石	X-20・21	X=61116～61118 Y=-93099～-93100		1.00	0.98				古代
2号集石	2A-19・20	X=61130・61131 Y=-93094～-93095		0.63	0.54				古代
3号集石	2C・2D-22	X=61144・61145 Y=-93106～-93108		1.24	1.05				古代
4号集石	2B-27	X=61135～61137 Y=-93128～-93129		1.47	1.25				古代
5号集石	2A-19	X=61131 Y=-9094		0.62	0.50				古代
6号集石	2E-32	X=61150～61152 Y=-93157～-93159		1.16	0.98				古代
7号集石	2D・2E-32・33	X=61140～61146 Y=-93158～-93161		3.93	3.10				古代
8号集石	欠番	1号土器集中へ変更							
9号集石	2G-45	X=61160・61161 Y=-93222		0.75	0.70				古代

四戸の古墳群 土器集中一覧

遺構名	位置			規模(m)		時期/備考
	グリッド	座標値		長軸	短軸	
1号土器集中	2D-39	X=61145・61146 Y=-93191～-93193		1.50	0.80	古代

四戸の古墳群 土坑墓一覧

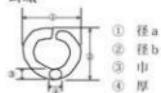
遺構名	位置		平面形状	規模(m)			長軸方位	重複関係	時期/備考
	グリッド	座標値		長軸	短軸	深さ			
1号土坑墓	2F-28	X=61156～61158 Y=-93136～-93137	橢円形	1.60	1.26	0.69	N-43°～E		近世
2号土坑墓	2F-27	X=61158～61160 Y=-93132～-93134	開丸長方形	1.52	1.08	0.59	N-62°～E		近世

四戸の古墳群 墓一覧

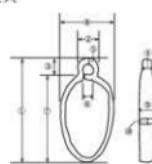
遺構名	位置		規模(m・n)			墓の状況					時期	
	グリッド	座標値	長軸	短軸	面積	歿方向	歿長(m)	歿幅(cm)	歿高(cm)	歿間(cm)	歿数	
1号墓	2A～2D-18 ～22	X=61132～61149 Y=-93085～-93106	22.5	6.6+	121.667+	N-43°～E	6.5+	60～130	1～21	20～45	19	近世
2号墓	Y～2B-21 ～24	X=61124～61137 Y=-93100～-93118	16.4	10.8	140.45	N-40°～E	1.08	50～215	1～9	30～55	12	近世
3号墓	2B～2F-27 ～31	X=61134～61155 Y=-93133～-93158	27.8+	18.3+	200.167+	N-52°～E	15.9+	10～90	3～12	20～100	31+	近世
4号墓	2G～2 1-431～33	X=61163～61173 Y=-96154～-93161	10.8+	4.5	34.35+	N-40°～E	10.5+	90～115	7～29	30～45	3	近世

鉄器部位の計測位置図

耳環

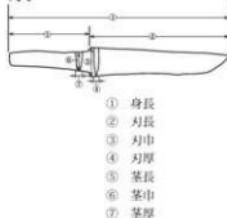


足金具



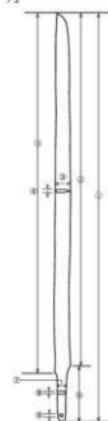
- ① 全長
- ② 輪幅長
- ③ 本体側長
- ④ 輪幅短
- ⑤ 本体側短
- ⑥ 輪幅厚
- ⑦ 本体側厚

刀子



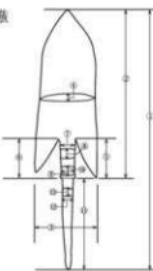
- ① 身長
- ② 刃長
- ③ 刃巾
- ④ 刃厚
- ⑤ 茎長
- ⑥ 茎巾
- ⑦ 茎厚

刀



- ① 全長
- ② 刃長
- ③ 刃巾
- ④ 刃厚
- ⑤ 背長
- ⑥ 茎長
- ⑦ 茎巾
- ⑧ 茎厚
- ⑨ 目釘孔径

平根鑓

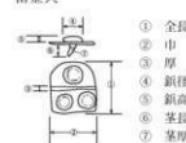


- ① 全長
- ② 刃長
- ③ 刃巾
- ④ 刃厚
- ⑤ 頭長
- ⑥ 頭巾
- ⑦ 頭厚
- ⑧ 頭幅
- ⑨ 頭幅巾
- ⑩ 頭幅厚
- ⑪ 茎長
- ⑫ 茎巾
- ⑬ 茎厚

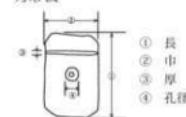
長頸鑓



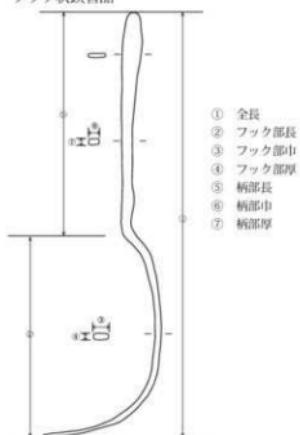
留金具



方形板



フック状鉄管品



- ① 全長
- ② フック部長
- ③ フック部巾
- ④ フック部厚
- ⑤ 柄部長
- ⑥ 柄部巾
- ⑦ 柄部厚

吊手状品



- ① 全長
- ② 身長
- ③ 身巾
- ④ 身厚
- ⑤ 柄長
- ⑥ 柄巾
- ⑦ 柄厚

刀子状品



- ① 全長
- ② 巾
- ③ 厚

円板状品



円弧段状品



縄文土器観察表

種 国 PL.No.	種 類 器 形	出土位置 残 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第2284 PL.86	1 縄文土器 深鉢	5区2F-44~45 1型状 口縁部～胴上部 破片		粗粒、白色粒、織 維/良好/にぶい赤 褐色	横位0段多条、0段多条LRによる羽状縄文構成。2~5と 同一個体。	花積下層
第2284 PL.86	2 縄文土器 深鉢	5区2F-45 1型 状 南西面上 口縁部破片		粗粒、白色粒、織 維/良好/にぶい赤 褐色	1と同一個体。	花積下層
第2284 PL.86	3 縄文土器 深鉢	5区2F-45 1型 状 口縁部破片		粗粒、白色粒、織 維/良好/にぶい赤 褐色	1と同一個体。	花積下層
第2284 PL.86	4 縄文土器 深鉢	5区 1 型状 口縁部破片		粗粒、白色粒、織 維/良好/にぶい赤 褐色	1と同一個体。	花積下層
第2284 PL.86	5 縄文土器 深鉢	5区 1 型状 口縁部破片		粗粒、白色粒、織 維/良好/にぶい赤 褐色	1と同一個体。	花積下層
第2284 PL.86	6 縄文土器 深鉢	5区2B-43 口縁部破片		粗粒、白色粒、織 維/良好/にぶい赤 褐色	厚手の内湾器形。	花積下層
第2284 PL.86	7 縄文土器 深鉢	5区21-43 胴部下半部破片		粗粒、織維、石英 /良好/にぶい赤 褐色	0段多条RLと0段多条LRによる羽状縄文構成。	花積下層
第2284 PL.86	8 縄文土器 深鉢	5区26-42 口縁部破片		粗粒、白色粒、織 維/良好/闊	口縫部に刺突文、横位虹を施す。補修孔を穿孔。	二ツ木
第2284 PL.86	9 縄文土器 深鉢	5区26-42 口縁部破片		粗粒、白色粒、織 維/良好/にぶい赤 褐色	口縫部に刺突文、結節虹を横位に施す。	二ツ木
第2284 PL.86	10 縄文土器 深鉢	5区2E-42 口縁部破片		粗粒、白色粒、織 維/良好/にぶい赤 褐色	結節RLを横位施す。	二ツ木
第2284 PL.86	11 縄文土器 深鉢	5区 1 型状 口縁部破片		粗粒、白色粒、織 維/良好/明赤褐色	RL、LRを横位施した羽状縄文。内面弱い研磨。	二ツ木
第2284 PL.86	12 縄文土器 深鉢	5区21-43 口縫～胴部破片		粗粒、織維、石英 /良好/にぶい赤 褐色	刺み隠れで口縫部両面、撫系系側面直角RLとLRによる縫手状 意匠、刺切文を施す。	二ツ木
第2284 PL.86	13 縄文土器 深鉢	5区19型 胴部破片		粗粒、白色粒、織 維/良好/にぶい赤 褐色	結節RLを横位施す。	二ツ木
第2284 PL.86	14 縄文土器 深鉢	5区2I-43 口縫部破片		粗粒、白色粒、石 英/普通/にぶい赤 褐色	短足ループLRを横位施す。	二ツ木
第2284 PL.86	15 縄文土器 深鉢	5区21-43 口縫部破片		細粒、織維/良好/ にぶい黄褐色	0段多条LRを横位施す。内面にスヌ付着物。	二ツ木
第2284 PL.86	16 縄文土器 深鉢	5区 3 面 口縫部破片		細粒、白色粒、織 維/良好/にぶい黄 褐色	口縫部外反。矢羽状の刺みを持つ横位縦線、0段多条横位 LRを施す。	二ツ木
第2284 PL.86	17 縄文土器 深鉢	5区2B-45 口縫部破片		細粒、織維/良好/ にぶい黄褐色	迷走爪形文を矢羽状に横位施す。	二ツ木
第2284 PL.86	18 縄文土器 深鉢	5区2B-45 口縫部破片		細粒、織維/普通/ にぶい赤褐色	短棘線を横位・斜位に施す。刺切文を施す。	二ツ木
第2284 PL.86	19 縄文土器 深鉢	5区11型 2 型 状 2F-42 口縫部破片		粗粒、白色粒、織 維/良好/粗	口縫部内削た、梯子状沈線を横位・斜位・弧状に施す。円 形貼付文を付す。2と同一個体。	閑山 I
第2284 PL.86	20 縄文土器 深鉢	5区12レ 口縫部破片		粗粒、白色粒、織 維/良好/明褐	口縫部・平坦、コンバツ文・連続刺突文・円形貼付文を施 す。横位0段多条RL、0段多条LRによる羽状縄文構成。	閑山 I
第2284 PL.86	21 縄文土器 深鉢	6区25-28 口縫部破片		粗粒、白色粒、織 維/良好/灰褐色	口縫部・内削た、横位・斜位沈線を施し、円形貼付文を付す。	閑山 I
第2284 PL.86	22 縄文土器 深鉢	6区 2 面 胴部破片		粗粒、白色粒、織 維/良好/灰褐色	外面1/2削落。斜位の平行沈線を施し円形貼付文を付す。	閑山 I
第2284 PL.86	23 縄文土器 深鉢	5区12トレ 口縫部破片		粗粒、白色粒、織 維/良好/にぶい赤 褐色	横位平行沈線を多段に施し、円形貼付文を付す。内面研磨。	閑山 I
第2284 PL.86	24 縄文土器 深鉢	5区2F-42 口縫部破片		粗粒、白色粒、織 維/良好/粗	19と同一個体。	閑山 I
第2284 PL.86	25 縄文土器 深鉢	5区2B-44 口縫部破片		粗粒、白色、織 維/良好/明褐色	横位沈線による区画、横位RLループ文を施す。沈線に刻み、 閑山 I	
第2284 PL.86	26 縄文土器 深鉢	5区2F-45 口縫部破片		粗粒、白色粒、織 維/良好/灰褐色	0段多条RLと0段多条LRの短足ループ文による横位羽状縄文 構成。	閑山 I
第2284 PL.86	27 縄文土器 深鉢	5区 1 型状 口縫部破片		粗粒、白色粒、織 維/普通/明赤褐色	平行沈線以下0段多条のRL、LRによる羽状縄文構成。	閑山 I
第2284 PL.86	28 縄文土器 深鉢	5区2F-45 口縫部破片		粗粒、白色粒、織 維/普通/灰褐色	短足ループのRL、LRを施した羽状構成。内面は丁寧な磨 き。	閑山 I
第2284 PL.86	29 縄文土器 深鉢	5区 1 型状 口縫部破片		粗粒、白色粒、織 維/普通/赤褐色	0段多条RL、RLを横位施した羽状縄文構成。	閑山 I
第2284 PL.86	30 縄文土器 深鉢	5区 1 型状 口縫部破片		粗粒、白色粒、織 維/良好/にぶい赤 褐色	横位RL、LRによる羽状縄文。	閑山 I
第2284 PL.86	31 縄文土器 深鉢	5区2B-45 口縫部破片		粗粒、白色粒、織 維/普通/粗	短足ループのRL、LRを横位施した羽状構成。	閑山 I
第2284 PL.86	32 縄文土器 深鉢	5区12トレ 口縫部破片		粗粒、白色粒、織 維/良好/粗	RL、LRを横位施した羽状、菱形構成。内面は丁寧なナデ。	閑山 I

遺物觀察表

種 因 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	崩 / 成 / 色調 石 材 / 素 材 等	成 形・整 形 の 特 徵	備 考
第2384 PL.86	33 瓜文土器 深鉢	5区21-43 胸部破片		粗粒、白色粒、礫 粗粒/良好/湖灰	RL、LRを横位施した羽状構成。内面ナデ。	関山 I
第2384 PL.86	34 瓜文土器 深鉢	5区28-44 胸部破片		粗粒、白色粒、礫 粗粒/良好/湖灰	RL、LRを横位施した羽状構成。内面丁寧なナデ。	関山 I
第2384 PL.86	35 瓜文土器 深鉢	5区29-42 胸部破片		粗粒、チャート、 礫粒/普通/橙 粗粒	0段多条RL、LRを横位施した羽状構成。	有尾
第2384 PL.86	36 瓜文土器 深鉢	5区28-43 胸部破片		粗粒、白色粒、礫 粗粒/普通/湖灰	0段多条RL、LRを横位施した羽状構成。	有尾
第2384 PL.86	37 瓜文土器 深鉢	6区2F-28 胸部破片		粗粒、チャート、 礫粒/良好/明赤褐色 粗粒	0段多条RL、LRを施文した菱形構成。内面は丁寧な磨きで、一部スス付着物。	有尾
第2384 PL.86	38 瓜文土器 深鉢	5区21-45 胸部破片		粗粒、礫粒/良好/ 湖灰	RL、LRCによる羽状構成。内面丁寧なナデ。	有尾
第2384 PL.86	39 瓜文土器 深鉢	5区16豊建 振 口縁部破片		粗粒、白色粒、礫 粗粒/良好/にぶい赤 粗粒	連續爪形文を横位・多段に施す。	有尾
第2384 PL.86	40 瓜文土器 深鉢	5区1豊状 胸部破片		粗粒、白色粒、礫 粗粒/良好/暗赤褐色	外反する器形。連續爪形文を多段に施す。下位にRLを施文。	有尾
第2384 PL.86	41 瓜文土器 深鉢	5区1豊状 胸部破片		粗粒、白色粒、礫 粗粒/良好/赤褐色	連續爪形文を菱形に施す。	有尾
第2384 PL.87	42 瓜文土器 深鉢	5区21-43 胸部破片		粗粒、白色粒/良 好/明赤褐色	連續爪形文を横位に施す。	黒浜
第2384 PL.87	43 瓜文土器 深鉢	5区2F-45 頭部破片		粗粒、褐色粒、礫 粗粒/良好/明赤褐色	頭部・外反。LRを施し横位連続突文。内面丁寧なナデ。	黒浜
第2384 PL.87	44 瓜文土器 深鉢	5区1豊状 胸部破片		粗粒、白色粒、礫 粗粒/普通/にぶい赤 粗粒	RL、LRを施文した菱形構成。	黒浜
第2384 PL.87	45 瓜文土器 深鉢	5区28-45 胸部破片		粗粒、白色粒、礫 粗粒/普通/にぶい赤 粗粒	横位RLを施文。内面横位ナデ。	黒浜
第2384 PL.87	46 瓜文土器 深鉢	5区21-42 胸部破片		粗粒、礫粒、石英 粗粒/普通/にぶい赤褐色	RL、LRを施文した菱形構成。	黒浜
第2384 PL.87	47 瓜文土器 深鉢	5区21-45 胸部破片		粗粒、白色粒、礫 粗粒/普通/明赤褐色	RL、LRを横位施した羽状構成。	黒浜
第2384 PL.87	48 瓜文土器 深鉢	6区2F-28 胸部破片		粗粒、白色粒、礫 粗粒/普通/にぶい赤褐色	横位突文を施し、LRを地文とする。内面は丁寧な磨き。	黒浜
第2384 PL.87	49 瓜文土器 深鉢	5区2F-45 胸部破片		粗粒、白色粒、礫 粗粒/普通/赤褐色	RL、LRを施文した菱形構成。内面ナデ。	黒浜
第2384 PL.87	50 瓜文土器 深鉢	5区28-43 胸部破片		粗粒、白色粒、礫 粗粒/普通/橙	RL、LRを横位施文。	黒浜
第2384 PL.87	51 瓜文土器 深鉢	5区21-43 頭部破片		粗粒、礫粒、チャ ート/普通/湖灰	RL、LRを施文。	黒浜
第2384 PL.87	52 瓜文土器 深鉢	5区2C-44 胸部破片		粗粒、白色粒、礫 粗粒/良好/にぶい赤 粗粒	RLを横位施文。内面弱い研磨。	黒浜
第2384 PL.87	53 瓜文土器 深鉢	5区2B-45 胸部破片		粗粒、礫粒、石英 粗粒/普通/橙	RL、LRを横位施文した羽状、菱形構成。器面に歪み。	黒浜
第2384 PL.87	54 瓜文土器 深鉢	5区21-43 胸部破片		粗粒、褐色粒、礫 粗粒/良好/にぶい赤褐色	結節RLを横位施文。	黒浜
第2384 PL.87	55 瓜文土器 深鉢	5区21-43 胸部破片		粗粒、褐色粒、礫 粗粒/普通/明赤褐色	結節RLを横位施文。	黒浜
第2384 PL.87	56 瓜文土器 深鉢	5区1豊建・No19 胸部破片		粗粒、白色粒、礫 粗粒/普通/赤褐色	横位RL、LRCによる羽状雑文構成。	黒浜
第2384 PL.87	57 瓜文土器 深鉢	5区2B-45 胸部破片		粗粒、チャート、 礫粒/普通/にぶい赤 粗粒	RLを横位施文。	黒浜
第2384 PL.87	58 瓜文土器 深鉢	5区2B-45 胸部破片		粗粒、白色粒、礫 粗粒/普通/赤褐色	無跡RLを横位施文。内面横位ナデ。59と同一個体。	黒浜
第2384 PL.87	59 瓜文土器 深鉢	5区2B-44 胸部破片		粗粒、白色粒、礫 粗粒/普通/赤褐色	58と同一個体。	黒浜
第2484 PL.87	60 瓜文土器 深鉢	6区An-kk下 胸部破片		粗粒、白色粒/良 好/にぶい赤褐色	RLを地文とし、横位平行沈線を多段に施す。	諸磯 a
第2484 PL.87	61 瓜文土器 深鉢	5区2D-44 口縁部破片		粗粒、白色粒、石 英/良好/にぶい赤 粗粒	RLを横位施文。内面に斜位に付し連續爪形文を施す。内面強部は研磨。	諸磯 b
第2484 PL.87	62 瓜文土器 深鉢	5区1墳 口縁-頭部破片		粗粒、白色粒/良 好/暗赤褐色	多くの字状に外反する器形。口縁部内折、RLを地文、横位に浮線を付し湖側に沈線を施す。外面、内面にスス付着物。	諸磯 b
第2484 PL.87	63 瓜文土器 深鉢	5区21-42 口縁-頭部破片		粗粒、白色粒/良 好/赤褐色	多くの字状に外反する器形。LRを地文とし横位・斷面状に浮線を付す。	諸磯 b
第2484 PL.87	64 瓜文土器 深鉢	5区21-44 表採 口縁部破片		粗粒、白色粒、砂 粒、片岩/普通/暗 赤褐色	地面上にRL、LRを施し、横位平行沈線と断面状沈線を施す。内面にスス付着物。	諸磯 b
第2484 PL.87	65 瓜文土器 深鉢	5区1面 12ト リ 口縁部破片		粗粒、白色粒/良 好/赤褐色	口縁部肥厚。RLを縱位施文し下位に横位平行沈線と断面状沈線を施す。	諸磯 b

種 図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	崩壊/成形/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第2485 PL.87	66	縄文土器 深鉢	5区21堅壁 口輪部破片		織粒、白色粒/良好/明赤褐色	口輪部外反。横位孔を施す。	諸磯 b
第2486 PL.87	67	縄文土器 深鉢	5区2C-41 口輪部破片		織粒、白色粒/良好/赤褐色	LRを横位施文。内面横位ナデ。	諸磯 b
第2487 PL.87	68	縄文土器 深鉢	5区4堅壁 口輪部破片		織粒、白色粒/良好/明赤褐色	LRを地文とし、横位浮継に連続刺突文。	諸磯 b
第2488 PL.87	69	縄文土器 深鉢	5区21-43 口輪部破片		織粒、白色粒/片岩/普通/赤褐色	LRを横位施文。内面にスヌ状付着物。	諸磯 b
第2489 PL.87	70	縄文土器 深鉢	6区2F-29 口輪部破片		織粒、白色粒/良好/にぶい赤褐色	穴状の大型波状口輪部痕跡。幅広の集合沈線を施す。空白部は稍円状。三角形状の凹削制。	前期末葉
第2490 PL.87	71	縄文土器 深鉢	5区2F-43 口輪部破片		織粒、白色粒/黑色粒/良好/明赤褐色	中野の波状口輪部痕跡。隙縫によるV字状貼付文。平行沈線で取りし斜位集合沈線を充填。中位に三角形状の透かし孔。下位に弧線文を施す。72と同一個体。	前期末葉
第2491 PL.87	72	縄文土器 深鉢	5区2E-43 口輪部破片		織粒、白色粒/黑色粒/良好/明赤褐色	71と同一個体。	前期末葉
第2492 PL.87	73	縄文土器 浅鉢	5区南西 口輪部破片		織粒、白色粒/良好/にぶい赤褐色	隙縫によるV字状貼付文。地文に横位孔を施す。	前期末葉
第2493 PL.87	74	縄文土器 深鉢	5区2F-45 口輪部破片		織粒、白色粒/片岩/良好/赤褐色	口輪部・横位平行沈線で区画。平行沈線を充填。下位に横位孔を施す。	前期末葉
第2494 PL.87	75	縄文土器 深鉢	5区2F-42-2F-45 口輪部破片		織粒、白色粒/片岩/良好/にぶい赤褐色	織粒・横位の集合沈線、斜位平行沈線による区画。区画内は横位孔を施す。	前期末葉
第2495 PL.87	76	縄文土器 深鉢	5区3堅壁 極方 口輪部破片		粗粒、石英、金雲母/普通/にぶい赤褐色	口輪部・横位降線と平行沈線による区画。斜位平行沈線と斜位孔を施す。	前期末葉
第2496 PL.87	77	縄文土器 深鉢	5区7堅壁 口輪部破片		織粒、白色粒/片岩/良好/にぶい赤褐色	横位平行沈線を施し、斜位平行沈線と斜格子文を施す。下位に平行沈線に画された三角隙閉文。	前期末葉
第2497 PL.87	78	縄文土器 深鉢	5区12トレス 口輪部破片		織粒、白色粒/片岩/良好/にぶい赤褐色	横位・逆V字状平行沈線を施す。地文は横位結節孔。	前期末葉
第2498 PL.88	79	縄文土器 深鉢	5区21-J-43-44 口輪部破片		織粒、白色粒/金雲母/普通/明赤褐色	横位沈線を多段に施し、間に網目状の短沈線を施す。口輪部には溝状の沈線。前面にスヌ状付着物。	五箇ヶ台2
第2499 PL.88	80	縄文土器 深鉢	5区29-44 口輪部破片		粗粒、石英、砂粒、雲母/良好/赤褐色	口輪部・内面降帶を付して内折。口輪部に溝状の沈線と刻みを施す。	五箇ヶ台2
第2500 PL.88	81	縄文土器 深鉢	5区2C-45 口輪部破片		粗粒、白色粒/普通/灰褐色	横位降帶を付して刻み孔を施す。下位横位沈線で区画し逆V字形孔を斜位に施す。	五箇ヶ台2
第2501 PL.88	82	縄文土器 深鉢	5区21-44 口輪部破片		粗粒、石英、雲母/普通/赤褐色	縫合に平行沈線を施し、三角隙閉文を平行して施す。	五箇ヶ台2
第2502 PL.88	83	縄文土器 深鉢	5区21-44 口輪部破片		織粒、白色粒/良好/里視	口輪部・降帶を付して壓摩。LRを羅位・斜位に施す。口輪部には溝状の沈線。内部は丁寧な磨き。	五箇ヶ台2
第2503 PL.88	84	縄文土器 深鉢	5区10堅壁 口輪部破片		粗粒、石英、雲母/普通/にぶい赤褐色	LRを羅位を横位施文して羽状構成。内面弱いナデ。	五箇ヶ台2
第2504 PL.88	85	縄文土器 深鉢	5区1 塗 口輪部破片	底径 80mm	粗粒、白色粒/片岩/普通/灰褐色	横位降線を付す。無節孔を横位に施す。	五箇ヶ台2
第2505 PL.88	86	縄文土器 深鉢	5区1 塗 口輪部破片	底径 80mm	粗粒、白色粒/普通/にぶい橙	LRを横位施文し、羅位に平行沈線を施す。	五箇ヶ台2
第2506 PL.88	87	縄文土器 深鉢	5区2 塗 2トレス 口輪部破片		織粒、白色粒/良好/明赤褐色	口輪部肥厚、口唇部研磨。LRを横位に施文。内面ナデ。	五箇ヶ台2
第2507 PL.88	88	縄文土器 深鉢	5区12トレス 口輪部破片		織粒、白色粒/石英/良好/赤褐色	横位沈線を施し、連続爪形文、三叉文、円形刺突文が施される。	勝坂 1
第2508 PL.88	89	縄文土器 深鉢	6区2面 口輪部破片		織粒、白色粒/良好/にぶい赤褐色	降帶を付し下位に横位・斜位の沈線を施す。上位は無文、降帶に刻みを施す。	勝坂 2
第2509 PL.88	90	縄文土器 深鉢	6区2面 口輪部破片		織粒、黑色粒/良好/にぶい赤褐色	横位の平行沈線を施し斜位の沈線を重ねる。	勝坂 2
第2510 PL.88	91	縄文土器 深鉢	6区2B-27 口輪部破片		粗粒、白色粒/良好/赤褐色	織粒の降帶を付しその両側に羅位の平行沈線を施す。	勝坂 2
第2511 PL.88	92	縄文土器 深鉢	6区2E-30 口輪部破片		粗粒、黑色粒/良好/にぶい赤褐色	横位の平行沈線で区画し、斜位の沈線を充填する。	勝坂 2
第2512 PL.88	93	縄文土器 深鉢	6区2面 口輪部破片		粗粒、黑色粒/良好/にぶい赤褐色	斜位の集合沈線を施す。	勝坂 2
第2513 PL.88	94	縄文土器 深鉢	6区2E-30 口輪～胸部破片		粗粒、白色粒/黑色粒/雲母/良好/にぶい橙	口輪部・降帶を付して区画し、波状沈線と横形沈線を施す。口輪部に刻み、胸部・波状沈線と羅位の短沈線を施す。	阿玉台 II
第2514 PL.88	95	縄文土器 深鉢	6区2E-30 口輪部破片		粗粒、白色粒/黑色粒/良好/にぶい橙	口輪部降帶を付して区画し、波状沈線と降帶に平行する沈線を施す。口輪部に刻みを施す。波状口縁。	阿玉台 II
第2515 PL.88	96	縄文土器 深鉢	6区2E-30-7トレス 口輪部破片		粗粒、白色粒/良好/橙	縫合の降帶を付して沈線を施す。波状沈線を横位に施す。	阿玉台 II
第2516 PL.88	97	縄文土器 深鉢	6区2E-30 口輪部破片	底径 100mm	織粒、白色粒/雲母/良好/赤褐色	脚部下位に羅位の短沈線を施す。底部に網代状の庄庭が一部残存。	阿玉台 II
第2517 PL.88	98	縄文土器 深鉢	6区2B-29 口輪部破片		粗粒、白色粒/普通/にぶい赤褐色	縫合の降帶を付し虹を施文。	加曾利 E 2

遺物觀察表

種 国 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 量	計測値	崩上) 備成・色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第2594 PL.88	99 瓦文土器 深鉢	6区2C-29 削部破片		粗粒、白色粒/普 通/にぶい/褐	縦帯に隣帶を付す。	加曾利 E 4
第2595 PL.88	100 瓦文土器 深鉢	6区2F-29 削部破片		粗粒、黒色粒、 チャート/良好/	横位隣帶を付し上位にやや斜位の沈線を平行して施す。下 位は無文。	中期後葉
第2596 PL.88	101 瓦文土器 深鉢	6区2C-31 口縁部破片		粗粒、黒色粒/普 通/にぶい/黄根	口縁部内折、口唇部に沈線。	輪之内1
第2597 PL.88	102 瓦文土器 深鉢	6区2F-30 削部破片		細粒、黒色粒/良 好/にぶい/黄根	隣帶貼付文を付し。棒状工具による円形の創突を施す。	輪之内1
第2598 PL.88	103 瓦文土器 深鉢	5区2I-43 口縁部破片		粗粒、白色粒/良 好/明赤褐色	口縁部内折、隣帶を有する字状貼付文、刻みを施す。下 位はLRを横位施し沈線で区画。	輪之内2
第2599 PL.88	104 瓦文土器 深鉢	5区8 建壁 削部破片		粗粒、白色粒 / 普通/にぶい/	沈線区画を施し瓦文を施文、磨滅著しく原体不明。	輪之内2
第2600 PL.88	105 瓦文土器 深鉢	6区1 集石 口縁部破片		粗粒、砂粒/普通 にぶい/	波状口縁、浮線文を多段に施す。口唇部に刺突。	晚期後半
第2601 PL.88	106 瓦文土器 深鉢	6区1 集石 口縁部破片		粗粒、白色粒/普 通/にぶい/黄根	口縁部起立に由る沈線、下位に横位幅広凹線を施す。	晚期後半
第2602 PL.88	107 瓦文土器 深鉢	5区X 建壁 口縁部破片		粗粒、黒色粒/普 通/灰黃褐色	口縁部・多段の輪積み痕に鋭利な工具による沈線を施す。	晚期後半
第2603 PL.88	108 瓦文土器 深鉢	6区1 集石 口縁部破片		粗粒、黒色粒/普 通/浅黃根	口縁部小突起、沈線文を多段に施す。磨滅著しい。	晚期後半
第2604 PL.88	109 瓦文土器 深鉢	6区1 集石 口縁部破片		粗粒、白色粒/普 通/にぶい/黄根	横位沈線文を施す。	晚期後半
第2605 PL.88	110 瓦文土器 深鉢	6区1 集石 口縁部破片		粗粒、白色粒/普 通/明赤褐色	横位沈線文を施す。111と同一個体。	晚期後半
第2606 PL.88	111 瓦文土器 深鉢	6区2 章 トレ 削部破片		粗粒、黒色粒/普 通/白	口縁部・横位沈線文を施す。内面ナデ。110と同一個体。	晚期後半
第2607 PL.88	112 瓦文土器 深鉢	6区1 集石 削部破片		粗粒、黑色粒/普 通/にぶい/黄根	口縁部の可能性有り、磨滅著しい。横位沈線文を施す。	晚期後半
第2608 PL.88	113 瓦文土器 深鉢	6区1 集石 削部破片		粗粒、黑色粒/普 通/白	縦やかに外反する器形。横位沈線文を施す。下位は無文。	晚期後半
第2609 PL.88	114 瓦文土器 深鉢	6区1 集石 削部破片		粗粒、黑色粒/普 通/にぶい/白	浮線文を多段に施す。	晚期後半
第2610 PL.88	115 瓦文土器 深鉢	6区1 集石 口縁部破片		粗粒、黑色粒/普 通/明赤褐色	横位沈線文を施す。	晚期後半
第2611 PL.88	116 瓦文土器 深鉢	5区1 墓東斜面 口縁部破片		細粒、黑色粒/良 好/褐	波状突起、角押柱状工具による沈線を多段に施す。	晚期後半
第2612 PL.88	117 瓦文土器 深鉢	5区1 墓 削部破片		細粒、黑色粒/良 好/にぶい/黄根	沈線による浮線網状文を施す。	晚期後半
第2613 PL.88	118 瓦文土器 深鉢	5区2F-42 削部破片		細粒、黑色粒/良 好/白	口縁部に角柱状工具による横位連続刺突文を多段に施す。 外面にスヌード付着。	晚期後半
第2614 PL.88	119 瓦文土器 深鉢	5区2E-42 削部破片		細粒、白色粒 / 普通/明褐	横位沈線文を多段に施し、間に角柱状工具による連続刺突文 を施す。	晚期後半
第2615 PL.88	120 瓦文土器 深鉢	5区5 建壁 削部破片		細粒、黑色粒/良 好/灰黃褐色	口縁部・多段の輪積み痕に鋭利な工具による波状文を施す。	晚期後半
第2616 PL.88	121 瓦文土器 深鉢	5区南西表土 口縁部破片		粗粒、白色粒 / 良好/白	口縁部外反、縦位条痕を施す。横位隣帶を付す。	晚期後半
第2617 PL.88	122 瓦文土器 深鉢	6区1 集石 口縁部破片		粗粒、黑色粒/普 通/にぶい/白	横位に幅広の凹線を施す。下位に斜位の条痕。磨滅著しい。	晚期後半
第2618 PL.88	123 瓦文土器 深鉢	6区1 集石 削部破片		粗粒、黑色粒/普 通/にぶい/白	124と同一個体。	晚期後半
第2619 PL.88	124 瓦文土器 深鉢	6区2 章 トレ 1集2面 削部破片		粗粒、黑色粒/普 通/にぶい/白	縦位・斜位の条痕を施す。123と同一個体。	晚期後半
第2620 PL.89	125 瓦文土器 深鉢	6区1 集石 削部破片		粗粒、黑色粒/普 通/にぶい/白	縦位の条痕を施す。	晚期後半
第2621 PL.89	126 瓦文土器 深鉢	6区1 集石 削部破片		粗粒、黑色粒/普 通/にぶい/黄根	横位の条痕を施す。	晚期後半
第2622 PL.89	127 瓦文土器 深鉢	6区1 集石 削部破片		粗粒、黑色粒/普 通/にぶい/黄根	斜位の条痕を施す。	晚期後半
第2623 PL.89	128 瓦文土器 深鉢	5区X 建壁 削部破片		粗粒、黑色粒/良 好/明赤褐色	縦Lを横位施文	晚期後半
第2624 PL.89	129 瓦文土器 深鉢	6区3 集石No4 口縁部破片		粗粒、黑色粒/普 通/にぶい/黄根	口縁部にLを横位施文、下位に横位沈線文を施す。130と同 一個体。	晚期後半
第2625 PL.89	130 瓦文土器 深鉢	6区3 集石No2 口縁部破片		粗粒、黑色粒/普 通/にぶい/黄根	Lを横位に施文。内面磨き。129と同一個体。	晚期後半
第2626 PL.89	131 瓦文土器 深鉢	5区2I-43 削部破片		細粒、黑色粒/良 好/褐	結節Lを横位施文。132と同一個体。	晚期後半
第2627 PL.89	132 瓦文土器 深鉢	5区2I-43 削部破片		細粒、黑色粒/良 好/褐	131と同一個体。	晚期後半
第2628 PL.89	133 瓦文土器 深鉢	6区2F-32 口縁部破片		粗粒、白色粒/普 通/にぶい/赤褐色	口縁部・外折。表面・無文、内面・横ナデ。	晚期後半
第2629 PL.89	134 瓦文土器 深鉢	6区1 集石 口縁部破片		粗粒、黑色粒/普 通/にぶい/黄根	口縁部・横位浮線文を施す。	晚期後半
第2630 PL.89	135 瓦文土器 深鉢	6区2 土基 口縁部破片		粗粒、黑色粒/普 通/白	口縁部・斜位Lを施す。内外面磨き。	晚期後半

種 国 PL.No.	種 類 器 種	出上位置 残 存 率	計測値			成形・整形の特徴	備 考
			幅	高	厚		
第2784 PL.89	136 龍文土器 深鉢	6区1集石 脚部破片				粗粒、砂粒/普通 に/ぶい/黄根	横幅の平行斜線を施す。下位は斜位の条痕。磨滅著しい。
第2785 PL.89	137 龍文土器 深鉢	6区1集石 底部破片				粗粒、黒色粒/普 通/に/ぶい/赤褐	細底横幅沈線文、下位に竪位条痕を施す。磨滅著しい。
第2786 PL.89	138 龍文土器 深鉢	5区3翌建 掘方	武 92mm			粗粒、砂粒/普通 に/明赤褐色	丸底の底部。
第2787 PL.89	139 龍文土器 深鉢	5区3翌建 掘方	武 88mm			粗粒、砂粒/普通 に/ぶい/赤褐	丸底の底部。内面底部にスス状付着物。
第2788 PL.89	140 龍文土器 深鉢	5区20-41 底部破片	武 86mm			粗粒、黒色粒/普 通/に/ぶい/赤褐	底部無文、底面剥落著しい。
第2789 PL.89	141 剥片石器 石礫	5区11翌建 2/3	長 2.0 幅 (1.3)	厚 0.3 重 0.3		黒曜石	表裏面の全体に面的な二次加工が認められる。
第2790 PL.89	142 剥片石器 石礫	5区19翌建 2/3	長 (1.9) 幅 (1.4)	厚 0.3 重 0.3		黒曜石	表裏面の全体に面的な二次加工が認められる。
第2791 PL.89	143 剥片石器 石礫	5区10翌建 2/3	長 (1.9) 幅 (1.4)	厚 0.4 重 0.5		赤碧玉	表裏面の全体に面的な二次加工が認められる。
第2792 PL.89	144 剥片石器 石礫	5区7翌建 ほぼ完形	長 (3.0) 幅 (1.7)	厚 0.3 重 1.3		黒曜石	表裏面の全体に面的な二次加工が認められる。
第2793 PL.89	145 剥片石器 石鉢	5区16翌建 ほぼ完形	長 (3.1) 幅 (4.8)	厚 0.8 重 9.0		チャート	左端部には両面加工によって尖塔部が作出されておりドリルの機能を合わせた複合工具の可能性がある。肩側部のほぼ全体に面画が認められる。表裏面の中央付近に素材の片断階の剥離跡を残す。
第2794 PL.89	146 剥片石器 石核	5区7翌建 完形	長 2.4 幅 2.8	厚 2.3 重 16.2		黒曜石	サイロ形状を呈する。打面を固定せず小形剥片を剥離する。
第2795 PL.89	147 石製品 石棒	5区11翌建 不明	長 (10.2) 幅 (3.7)	厚 (2.9) 重 174.2		褐色片岩	完全的に滑らかで丁寧に研磨整形成される。先端突起部では断面U字形の溝状痕跡が横方向に沿る。先端部には断面U字形の溝状痕跡が4枚放射状に認められる。

1号堅穴建物

第2984 PL.89	1 弁生土器 高杯	床直 口縁、脚部一部 欠	口 高 12.4 11.1	底 7.9	S/に/ぶい/黄根 10YR6/4' 脚内外 面が保ける。	なし。外面は縦、内面の上位は横、下位は斜位のミガキ。 脚内面は横ミガキ。	
----------------	--------------	--------------------	------------------------	----------	-------------------------------------	---	--

4号堅穴建物

第3004 PL.89	1 弁生土器 甕	覆土 頭一部欠	口 高 16.3 20.9	底 6.3	S/明赤褐色 5YR5/6' 口縁一部 脚部外面上にふきば れ痕、内面片面に コゲ痕。	折返し口縁。口縁一部に5部、肩に1部の柳彫波状文を めぐらす。頭部に3連止め痕状文(7箇/14mm、51~74mmス パン)、ハケメ整形の後、体部中位と内面全体に横、体部下 位は縦のミガキ。底面ミガキ。	
第3005 PL.89	2 弁生土器 甕	覆土 口縁1/2	口 17.8		S/浅黄根 10YR8/4'	口縁一部頭部に柳彫波状文(7箇/12mm)4帶をめぐらす。施 文は下から上、時計回り。外面は縦、内面は横のハケメ。 口縁端部は横ナデ、口縁内面はハケメ後横ミガキ。	
第3006 PL.89	3 弁生土器 甕	床直 底部		底 5.4	S/に/ぶい/黄根 10YR6/4' 外面片 側黒斑。	無文。外面に粘土組み上げ痕をわずかに残す。外面は縦 ミガキ、内面はナデ。	

5号堅穴建物

第3104 PL.89	1 弁生土器 甕	床直 口→頭部	口 18.4		S/赤粒含む/に/ぶ い/黄根 10YR7/4	頭部に2單位垂下のT字文。外面は縦、内面は横のミガキ。	
第3105 PL.89	2 弁生土器 甕	覆土 口縁片			S/横 5YR6/6/外面部黒斑。	断面済形の折返し口縁。無文。外面は横ハケメ、内面は 横ミガキ。	
第3106 PL.89	3 弁生土器 甕	覆土 口縁片			黒色氷物など白 氷物や岩片の粗 粒含む/に/ぶい/ 褐	断面済形の折返し口縁。口縁と頭部に柳彫波状文(7箇/9 mm)を乱縫にめぐらす。外面は横ナデ、内面は横ミガキ。	
第3107 PL.89	4 弁生土器 甕	覆土 口→肩1/2	口 (16.0)		白岩片の細縫が多 く/に/ぶい/黄根 10YR6/4'	頭部に3連止め痕状文(10箇/18mm、63~80mmスパン)、波 形の乱れた柳彫波状文を口縁に3帯、肩に2帯以上めぐらす。 口縁外側面ナデ、内面は横ミガキ。口縁の一部は施文後ナ デ。	
第3108 PL.89	5 弁生土器 甕	覆土 脚部片			S/横 5YR7/8	柳彫波状文(箇数不明)を重複施文し、下限に小口幅25mmは どのハケメ工具で押した楕円形貼付文。内面もハ ケメ。	
第3109 PL.89	6 弁生土器 甕	覆土 脚部片			S/に/ぶい/黄根 10YR6/4'	2条単位の沈縫を垂下したT字文B、下位に柳彫波状文1帯 (15箇/23mm)をめぐらす。外面無文部はミガキ、内面はナデ。	
第3110 PL.89	7 弁生土器 甕	床直 口、体部一部 高	口 13.6 15.0	底 5.1	S、赤粒多い/に/ぶ い/黄根10YR6/4'/ 体部外表面はぼけ、 被熱赤変。	頭部に5連止め痕状文(9箇/13mm、40~45mmスパン)、柳 彫波状文を口→頭部に3帯、体部上位に3帯を重複施文。体 部外表面に縦、内面は横→斜位のミガキ。底面は細かいハケ メ。	
第3111 PL.89	8 弁生土器 甕	覆土 口→肩片			S、白岩片砂多 い/に/ぶい/相 7.5YR 7/4	頭部に柳彫横線かスパンの長い箇状文(7箇/15mm)をめぐ らし、柳彫波状文を口縁と肩部に3帯ほど乱縫に重ねる。 外側施文部はハケメ、無文部は横ミガキ。内面は横ミガキ。	器壁が非常に 薄く、頭部で 2~3mm。
第3112 PL.89	9 弁生土器 甕	床直 口→頭部片			黒色氷物など白 氷物や岩片の粗 粒含む/に/ぶい/ 黄根10YR6/4'/ 外面部全体に保け。	頭部に柳彫横線かスパンの長い箇状文をめぐらし、口→頭 部には柳彫波状文(8箇/13mm)を7帯重複してめぐらす。施 文部は上から下。外面は縦、内面は横のハケメを施した後 横ミガキ。	

遺物觀察表

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	崩壊/成形/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第31回	10	弥生土器 高杯	覆土 脚部上半片		S/にぶい黄橙 10YR7/4	外面部赤彩。外面は赤彩後縦ミガキ、内面はヘラナデ。	
第31回	11	弥生土器 台付甕	覆土 脚部1/3	底 (9.0)	S/にぶい相 5YR5/4/被熱赤変。	無文。外面は縦ミガキ、内面はナデ。	
第31回	12	弥生土器 鉢	覆土 底部片	底 3.8	S/にぶい黄橙 10YR7/4	無文。外面縦ミガキ、内面はミガキと思われる。	

7号堅穴建物

第33回	1	弥生土器 壺	覆土 口縁片	口 (28.2)	長石、石英等の白 色粗砂が主で、黑色 鉱物はあまり見 ない/にぶい黄橙 10YR5/4	口唇部下に粘土紐を巻いて凸帯とし、口唇とともにヘラに よる縦削みを加える。外面は横ハケメ後縦ミガキ。内面は 横ミガキ。	中期後葉か後 期初期頭期の混 在品と考えら れる。
第33回	2	弥生土器 壺	覆土 口～頸部1/2	口 (14.0)	粗く、細縦と粗縦 上部/明闊 7.5YR5/6	無文。口唇部外側に面取り。外面は縦ハケメ後、口縁横 ミガキ、体部に縦ミガキ。口縫内面は横ミガキ、体部はナデ。	
第33回	3	弥生土器 小型頭頂壺	覆土 口縁片	口 (11.6)	長石、石英等の白 色粗砂、黒色鉱物 は少ない/にぶい 黄橙 10YR5/4	外面の頸部以下と口頸部内面に赤彩。外面は縦ハケメ、内 面は横ミガキ。	
第33回	4	弥生土器 壺	覆土 体部下半片		S/にぶい黄橙 10YR7/4	外面に赤彩。赤彩後ミガキ。内面は横ハケメとナデ。	
第33回 PL.89	5	弥生土器 甕	床直 ほぼ完形	口 高 18.2 底 30.0	S/浅黄橙 10YR8/3/ 底部附 近に灰付着、口縫 ～脚部外側に煤付 着。	口縫～頸部に柳描波状文(8箇/14mm)を8帶めぐらす。施 文はブロック手法、時計回り、概ね下から上の順。外面 は縦、内面は横のミガキ。体部外側は縦、内面全体に横の ミガキ。	
第33回 PL.89	6	弥生土器 甕	床直 口縁～体部2/3	口 (18.1)	S/にぶい相 7.5YR5/4/ 体部外 面に4ヶ所、頭部 ～体部内面に2 か所の種実尖錐 (No.36～41)	頭部に2連止め縫状文(9箇/17mm)、柳描波状文を口～頸 部に5帶、肩に1帶めぐらす。施文は下から上の順、一部 中段の波状文が最終施文。体部外側に縦、内面全体は横の ミガキ。	
第33回	7	弥生土器 甕	覆土 口縁～体部1/3	口 (16.0)	長石、石英等の白 色粗砂が主で、黑色 鉱物はあまり見 ない/にぶい黄橙 10YR6/3/ 口頸部 外面に煤付着。	口縫部に柳描波状文9帶を重ねる。施文はブロック手法、 時計回り、下から上の順。体部外側にケズリ、肩以上にハ ケメ。内面は全体に横ミガキ。	
第33回 PL.89	8	弥生土器 甕	床直 口縁～体部上半	口 19.3	S/褐 7.5YR4/3	口縫～頸部に柳描波状文(9箇/17mm)を5帶めぐらす。施文 はブロック手法、時計回り、概ね下から上の順。口唇部 外側にナデによる面取り。外面は縦、内面は横のハケメ。 体部外側は縦、内面全体に横のミガキ。	
第33回	9	弥生土器 (甕)	覆土 口縁片		白岩片等の細縦～ 粗砂が主/赤褐 5YR4/6	口縫上位に柳描波状文(7箇/13mm)3帯をめぐらす。時計 回り、下から上の順。口唇部外側に面取り。口頸部下半を 縦、内面全体に横のミガキ。	縦式には見ら れない文様構 成と器の薄 さ。
第33回	10	弥生土器 甕	床直 体部片		S/にぶい黄橙 10YR6/4/ 体部上 半外面に煤付着、 体部下半内面にコ ゲ	頭部に2連止め基を基とした縫状文(7箇/12mm)。肩部以 降の柳描波状文をめぐらす。縫状文止めの下位に十字刻み の円形貼付文を付す。体部外側は縦、内面は横のミガキ。	21号堅壁5と 同一の可能性 あり。
第33回	11	弥生土器 甕	覆土 体部片		長石、白岩片の細 角織多々/にぶい 黄 7.5YR5/4/ 退化形 内面にコゲ	頭部に2連止め縫状文(15箇/22mm)、体部に6帯以上の柳描 波状文を重ねる。外側の最大幅部は縦、体下半は縦のミガ キ。内面全体に横ミガキ。	
第33回	12	弥生土器 短頭甕	覆土 口頸部片	口 (16.6)	白岩片、長石、石 英等の粗砂・細縦 が主体/にぶい黄 褐 10YR5/3/ 内面は 削離	外面に赤彩。内面とも横ミガキ。	
第33回	13	弥生土器 高杯	覆土 杯部下半片		白岩片、長石、石 英等の粗砂・細縦 が主体/にぶい相 7.5YR6/4	外面に赤彩。外面は縦、内面は横のミガキ。	
第33回 PL.89	14	弥生土器 鉢	床直 口縫大部分欠く 高	(7.5) 底 3.4	S/明赤褐 5YR5/6/ 内面や少 しき裂	無文。縦ハケメ後。外面は斜位基調、内面は横にミガキ。 底面ナデ。	
第33回	15	弥生土器 甕	覆土 底部		S/粗砂主体/にぶ い相 7.5YR5/3/ 底面に 灰付着。	無文。外面は縦ミガキ、内面はハケメ、上位はミガキ。底 面は粗いミガキか。	

種 団 PL.No.	No.	種 類 器 種	出上位置 残 存 率	計測値	崩/成形/色調 石 材・材 料 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第33回 PL.89	16	弥生土器 甕	覆土 底部		底 7.0 白岩片細縫多い にぶい焼 7.5YR5/4 底面に 種実形の压痕1	無文。外面は縦ハラナデ、ミガキ。内面と底面は荒れて不明。	
第33回 PL.89	17	弥生土器 小型甕	覆土 底部		底 4.6 S/明赤褐色 5YR5/6	無文。外面は縦ハケメ後縦ミガキ。底内面はミガキ。	
第33回 PL.89	18	弥生土器 台付甕	覆土 脚部1/3		S/にぶい焼 7.5YR6/4 被熱赤 変。	無文。外面は縦ミガキ。内面はナデ。	
第33回 PL.89	19	石製品 勾玉	完形	長 幅 0.9 0.5 厚 重 0.3 0.3 ひすい		淡緑色。丁寧に研磨整形されており全体的にやや光沢がある。孔は裏面から表面に向かい狭くなっており片面穿孔と考えられる。	

10号堅穴建物

第36回 PL.90	1	弥生土器 甕	覆土 肩部片		S/にぶい黄橙 10YR7/4	櫛描(9.7mm)によるT字文(C)と下位に波状文1帯をめぐらす。T字文の横幅は3帯以上で上から下の順。施文部と内面全体に横ハケメ。体無文部はミガキ。	
第36回 PL.90	2	弥生土器 甕	床直 口縁～肩部片	口 (17.0)	S/にぶい黄橙 10YR7/4/ 外面肩 部に焼付着。	頭部に2連止め廉状文(9.7mm)。口頭部に4～5帯、肩部に4～5帯以上の櫛描波状文(6.9mm/12mm)を重ねる。廉状文が先。口頭部波状文は下から上、肩部波状文は上から下の順。内面全体に横ミガキ。	
第36回 PL.90	3	弥生土器 甕	床直 口縁、体の一部 欠	口 17.6 底 29.8	S/にぶい黄橙 10YR5/3 体部中 位～上位外縁に焼 付着が著しい。体 部下半は被熱赤 変。外面に8ヶ所 (No.28～35)内面 に2ヶ所(No.42・ 43)の種実压痕。	頭部に3連止め廉状文(10.9mm/15mm、100mm前後スパン、全 体4分画)。口縁～頭部に4帯、肩部に2～3帯の櫛描波状 文をめぐらす。施文はブロック手法で、時計回り、口～頭部は 下から上、肩は上から下の順で施文。体部外縁は縦ミガキ。 内面全体に横ミガキ。	
第36回 PL.90	4	弥生土器 甕	床直 口縁一部と体部 下半欠	口 18.2	S/にぶい黄橙 10YR6/4 外面の 口～体上半に焼付 着。内面と腰部 に14ヶ所の種 実压痕(No.14～25、 74～75)。	頭部に乱れた4連止め廉状文(7.9mm/14mm)。口縁～頭部に 4～5帯、肩部に2～3帯の櫛描波状文を重ねる。施文は ブロック手法で、口～頭部では下から上、肩部では上から 下の順だが、一部乱れる。体部外縁、内面全体に横ミガキ。	
第36回 PL.90	5	弥生土器 甕	覆土 ほぼ完形	口 高 14.6 底 16.1	S/にぶい黄橙 10YR6/3 口縁～ 体部上半外縁に焼 付着。体部下半は被 熱赤変。	頭部に2連止め廉状文(7.9mm/13mm、95mmスパンで全体4分 画)。口縁に3～4帯、肩に3帯の櫛描波状文を重ねる。 施文は時計回り、上から下の順。波状文の始終点がばらつき。 ブロック手法が不鮮明。体部下半に縦ハケメ後縦ミガ キ。内面は横ミガキ。底面ミガキ。	
第36回 PL.90	6	弥生土器 (台付甕)	床直 脚～体下半		S/にぶい黄橙 10YR5/3 内面外 縁に焼付ける。脚下端 欠損部が焼成、再 利用か転用だら う。	無文。外縁、内面は横のミガキ。脚内面はハケメ。	
第36回 PL.90	7	弥生土器 台付甕	覆土 結合部片		S/にぶい黄橙 10YR6/4 被熱赤 変。	無文。外縁は縦、内面は横のミガキ。脚内面はナデ。	
第36回 PL.90	8	弥生土器 有孔鉢	床直 口縁大部分欠	口 (15.0) 底 11.1 孔 1.8	S/にぶい黄橙 10YR7/4 内面の 口縁から底部内 面まで灰白色物質 が付着。	無文。外縁は縦、内面は横のミガキ。穿孔部と底面ミガキ。 灰白色物質について成分分析。	
第36回 PL.90	9	弥生土器 甕	覆土 体部下位～底		底 7.6 S/浅黄橙 10YR8/4 外面に 焼成、底面に灰 化皮膜。	無文。外縁は縦、内面は横の丁寧なミガキ。底面は上げ底 化皮膜でミガキ。	
第36回 PL.90	10	弥生土器 甕	床直 体部下位～底 1/2		底 (7.0) S/暗灰黄 2.5YR5/2 体部下 端外縁が保ける。	無文。外縁は縦、内面は横の丁寧なミガキ。底面はミガキ。	
第36回 PL.90	11	弥生土器 甕	床直 底部		底 8.4 白岩片、長石、石 英等の粗粒～細縫 が主体にぶい黄 橙10YR7/3/ 体部外 縁に焼付着。	無文。外縁は斜、内面は横のミガキ。底面は單一方向のミ ガキ。	
第36回 PL.90	12	弥生土器 甕	覆土 体部片		底 压痕No.81		
第36回 PL.90	13	削片石器 打製石斧	完形	長 幅 14.7 6.7 厚 重 3.1 356.5	ホルンフェルス	側面部は全体的に内面加工が認められる。左右側面のく びれ部にはつぶれ痕が集中する。表面には自然面が広く認められ円錐を利用する。	
第36回 PL.90	14	礫石器 磨石	完形	長 幅 6.3 5.0 厚 重 2.8 112.4	粗粒輝石安山岩	表面のほぼ全面と裏面の一部に磨面が認められる。	

遺物觀察表

11号竪穴建物

種類 PL.No.	種類 No.	出土位置 床直 口縁～体部上	出土位置 残存率 口 (28.2)	計測値	磨石/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第41回 PL.90	1	弥生土器 壺	床直 口縁～体部上	口 (28.2)	S./ 黄砂多い/ ぶい 黄10YR6/4/ 口縁内面は削れ。 脚の 1ヶ所が風 蝕。	断面薄鉢形の折返し口縁。颈部に彌描(8箇/15mm)による T字文(C)、下限は1帯の彌描波状文をめぐらす。横線は 3帯。6条の垂下線端に円形貼付文を付す。外面部体部 上には横、口部脚は縦のミガキ。内面は全体に横ハケメ。	
第41回 PL.90	2	弥生土器 壺	覆土 肩部片		S./ ぶい/ 橙 7.5YR6/4	彌描波状文(12箇/18mm)を垂下し、下端に刺突丸の円形 貼付文。外面部に横ミガキ。内面はナデと思われるが、 剥離で不鮮明。	
第41回 PL.90	3	弥生土器 壺	覆土 口縁片	口 (20.0)	S./ 白岩片の粗砂 目立つ/ ぶい/ 黄 7.5YR7/4	S./ ぶい/ 橙 7.5YR6/4	無文。外面部は縦、内面は横のミガキ。 箱清水式壺に 類似。
第41回 PL.90	4	弥生土器 壺	覆土 肩部片		長石、石英等の白 色粗砂が主で、黒 色遮蔽物はあまり見 ない/ ぶい/ 黄 2.5YR6/6	2条単位の彌状具で彌描を垂下したT字文(B)。体部には 赤彩。外面部ハケメ整形の後、外面部をナデして赤彩。赤彩後 ミガキ。	
第41回 PL.90	5	弥生土器 壺	床直 口縁～体部上半 2/3	口 20.4	S./ ぶい/ 黄 10YR7/4/ 外面部 体が保てる。	頭部に 2連止め廉状文(8箇/13mm, 110 ~ 120mmスパン)。 彌描波状文を口縁一部に6筋、肩部に1帯めぐらす。施文は はブロック手法。時計回り、下から上の順。外面部体部は縦 ミガキ。内面全体に横ミガキ。	
第41回 PL.90	6	弥生土器 壺	床直 口縁～体部上 1/2	口 (18.0)	S./ ぶい/ 黄 10YR5/3/ 外面部 体に煤着する。	T字文～頭部に彌描波状文(7箇/13mm)を重複して7帯めぐ らす。施文はブロック手法、時計回り、下から上方へ。外 面部体部と内面全体に横ミガキ。	
第41回 PL.90	7	弥生土器 壺	覆土 口縁～体部片	口 (22.0)	S./ ぶい/ 橙 7.5YR6/4/ 外面部 体が保てる。脚 痕が外面上に1、内 面上に2ヶ所。	彌描波状文7 ~ 8帯を口縁から頭部にかけて重複施文。施 文は7箇前後。施文順は上から下を基準。体部外面部は縦、 内面全体は横のミガキ。	
第41回 PL.90	8	弥生土器 壺	床直 口縁～体部上 2/3	口 15.6	S./ ぶい/ 赤 5YR5/4/ 外面部 剥離顯著。	口縁から肩部付近まで彌描波状文(5箇/12mm)を重ねる。 施文は時計回り、上から下の順。内面は丁寧な横ミガキ。	
第41回 PL.90	9	弥生土器 壺	覆土 口縁～体部上半		S./灰 7.5YR4/2/ 外面部 体が保てる。	頭部に 2連止め廉状文(6箇/13mm)。口部頭に5帶、肩に 3帶の彌描波状文を重ねる。施文は廉状文の後、波状文を上 から下の順。内面とも斜ハケメ後、体部にミガキ。内面全 体に横ミガキ。	
第41回 PL.90	10	弥生土器 壺	覆土 口縁1/4	口 (19.0)	S./ 白岩片の粗細 砂多い/ ぶい/ 黄 10YR7/4/ 外面部 体が保てる。	頭部に 3連止め廉状文(10箇/17mm, 70mm以上スパン)。口 縁は5帶、体部に1帶(以上)?の彌描波状文をめぐらす。 口～頭部の施文部に縦ハケメ。内面は横ミガキ。	
第41回 PL.90	11	弥生土器 壺	床直 口部片		S./ ぶい/ 黄 10YR5/3/ 外面部 体が保てる。	S./ ぶい/ 黄 10YR5/3/ 外面部 体が保てる。	S./ ぶい/ 黄 10YR5/3/ 外面部 体が保てる。
第41回 PL.90	12	弥生土器 壺	覆土 頭部片		S./ 灰 10YR5/2	頭部に廉状文か彌描横線文、口部頭に彌描波状文(6箇/10 mm)を4帯以上重ねる。施文は廉状文の後、波状文を上 から下の順。内面は横ハケメ。内面は横ハケメ後横ミガキ。	
第41回 PL.90	13	弥生土器 壺	床直 口部片		S./ 橙 5YR6/6/ 外面部 体が保てる。	6帯の粘土積上げ痕を残す。外面部に右上がりの指オサエ 痕。内面は丁寧な横ミガキ。	
第41回 PL.90	14	弥生土器 壺	覆土 口～体部上半	口 (17.0)	チャート、石英、 長石等の彌縫多 く/ ぶい/ 橙 7.5YR6/4/ 外面部 体が保てる。	頭部に 3 ~ 4 連止め廉状文(7箇/11mm, 60mm前後スパン)。 口縁～頭部に4帯、肩部に5(以上)帯の彌描波状文を重ね る。施文は時計回りで、上からと下からの施文順が混在。 施文部に縦～斜ハケメ。内面は全体に横ミガキ。	
第41回 PL.90	15	弥生土器 台付壺	覆土 口縁～体部上半	口 18.0	S./ ぶい/ 黄 10YR6/4/ 口縁～肩 部外面部が保てる。	頭部に 2連止め廉状文(6箇/12mm, 48 ~ 67mmスパン)。口 縁は3帯、体部に1帶の彌描波状文をめぐらす。体部外面部 は縦、内面全体に横のミガキ。	
第41回 PL.90	16	弥生土器 壺	覆土 口縁～肩片	口 (16.8)	S./ ぶい/ 橙 7.5YR5/4	頭部に 2連止め廉状文(10箇/19mm, 40 ~ 50mmスパン)。口 縁は2帯、肩に1帯の彌描波状文をめぐらす。内面に丁寧 な横ミガキ。	
第41回 PL.90	17	弥生土器 高杯	床直 杯部1/2弱	口 (20.7)	赤粒の彌縫多 く/ ぶい/ 黄 10YR7/3	無文。杯部内外面は横基調のミガキ。脚部外面は縦ミガキ。 脚部結合ははぞ充填手法。	箱清水式高杯 c. 箱清水2 式(青木1999) と対比。
第41回 PL.90	18	弥生土器 高杯	覆土 口縁～体部片	口 (24.0)	S./ 黄 2.5YR6/2	内面赤彩。内面とも赤彩後の横ミガキ。	
第41回 PL.90	19	弥生土器 高杯	床直 口縁～体部片	口 (24.0)	S./ ぶい/ 黄 10YR7/4	内面赤彩。外面部は斜面、内面は赤彩後の横ミガキ。	
第41回 PL.90	20	弥生土器 高杯	床直 脚1/3	底 (17.0)	S./ ぶい/ 黄 10YR7/4	外面部と透かし孔法面に赤彩。透かし孔は三角形か台形で 3ヶ所と思われる。外面部は縦ミガキ。内面はナデ。	
第41回 PL.90	21	弥生土器 高杯	覆土 結合部		長石、石英等の白 色粗砂が主で、黒 色遮蔽物はあまり見 ない/ ぶい/ 橙 7.5YR5/4	外面部赤彩。外面部赤彩後に縦ミガキ。脚内面はハケメ。杯と の結合部は椀形に剥離。	

種 国 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	崩/成形/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考	
第42回 PL.90	22	弥生土器 高杯	底直 結合部		S/にぶい黄橙 10YR7/4	外面赤彩。外面赤彩後に縦ミガキ。脚内面はハケメ。杯と の結合部は楕形に削離。		
第42回 PL.90	23	弥生土器 台付甕	覆土 口縁～体部4/5	口 14.0	S/にぶい黄橙 10YR7/3 外面は 全体に焼ける。	口縁～頭部に櫛描波状文(8箇/14mm)4帯をめぐらす。施 文は時計回り。下から上の順だが、一部口縁部施文が先行 する。外面の体部上位は横、下半は縦ミガキ。内面は全体 に横ミガキ。		
第42回	24	弥生土器 小型甕	覆土 口縁～体部上半		S/にぶい黄橙 10YR6/3/ 被熱痕 や焼付着は見られ ない。	口頭部に櫛描波状文(6箇/12mm)3帯を重ねる。上下2帯 の後に中央1帯の順。体部外表面と内面全体にナデ。		
第42回	25	弥生土器 小型甕	覆土 口縁～体部上半		S/灰黄褐 10YR5/2/ 焼付着 はない。	無文。外面はナデ、内面は粗い横ミガキ。		
第42回 PL.90	26	弥生土器 小型台付甕	覆土 口縁～体部上半		S/にぶい褐 7.5YR5/3 口頭部 外表面は焼け、体部 下位は被熱赤斑。	櫛描波状文(7箇/10mm)2帯をめぐらす。体部最大幅部に 側面充填の円形貼付文。体部外表面と内面に横ミガキ。		
第42回 PL.90	27	弥生土器 小型甕	覆土 口縁～体部上半		S/黒褐 10YR3/1	頭部に施文か櫛描横線文をめぐらし、口頭部に2部(以 上)、肩に1帯の櫛描波状文(5箇/10mm)をめぐらす。外面 体部は縦、内面全体に横のミガキ。		
第42回 PL.90	28	弥生土器 蓋	覆土 縫み～天井部2/3	孔 0.5	S/にぶい褐 7.5YR5/4	無文。内外面とも放射状ミガキ。縫み部中央に蒸気孔を燒 成前穿孔。		
第42回	29	弥生土器 小型甕	覆土 口頭部	口 10.8	S/にぶい黄橙 10YR6/4/ 横面剥離 著しく被熱赤斑。	無文。外面にケズリとナデか。外面に粗い縦ミガキ。内面 は横ミガキ。		
第42回	30	弥生土器 (小型壺)	覆土 口頭部片		S/にぶい黄褐 10YR5/3	無文。内面に粘土粗積上げ痕を残し、外表面とも縦ミガキ。		
第42回	31	弥生土器 小型台付甕	床直 口縁～体		S. 赤粒が多いに ぶい黄橙 10YR6/3 内面に 灰白色の付着物。	無文。外面は縦、内面は横のミガキ。脚内面はナデ。		
第42回	32	弥生土器 台付甕	覆土 脚部片		S/にぶい黄褐 10YR7/4/ 底内面に 灰白色の付着物。	無文。外面は縦ミガキ、内面はナデ。		
第42回 PL.90	33	弥生土器 鉢	覆土 口縁一部欠	口 高 15.0 6.4	底 5.2	S. 赤粒の粗砂～ 繩縫合む/ 柄 5YR6/6/ 底面の剥 離、底残。	外表面とも赤彩。口縁下外面に跨状に粘土帯を付加する。 外表面とも赤彩後の横ミガキ。	
第42回	34	弥生土器 片口鉢	覆土 口縁～体1/3	口 (16.0)	S/にぶい褐 7.5YR7/4/ 内外面 に薄く焼付着。	無文。外面は縦、内面は横のミガキ。		
第42回	35	弥生土器 甕	覆土 底部2/3		底 9.0	S/にぶい黄橙 10YR7/4/ 底面に 灰付着、および 横円形種変疣根 (No.116)	無文。外面は縦ミガキ。内面は横ミガキ。底内面はナデ、 底面はハケメとナデ。	
第42回	36	弥生土器 甕	覆土 底部片		底 6.6	S/にぶい黄褐 10YR5/3	無文。外面に縦ハケメ後縦ミガキ。内面は横ミガキ。底面 はケズリ。	
第42回	37	弥生土器 甕	覆土 底部片		底 7.0	黒色鉻物わずか、 長石や白岩片等の 粗砂多い。/にぶ い黄橙 10YR7/4/ 底面に 灰付着。	無文。外面に縦ハケメ後縦ミガキ。内面は横ミガキ。	
第42回	38	弥生土器 甕	覆土 底部下半～底		底 7.8	S/にぶい黄橙 10YR7/4/ 体外表面 中位に焼付着。底 部を除く内面全体 にコゲつき痕。底 面に灰付着。	無文。体外表面中位は横、下位は縦のミガキ。内面は全体に 横ミガキ。底面ミガキ。	
第42回 PL.90	39	弥生土器 甕	床直 体部下半～底		底 9.0	S. 白岩片繩縫合 む/にぶい黄橙 10YR7/4/ 底付近 を除く内面にコゲ つき痕。底面に灰 付着。	無文。外面は縦、内面は横のミガキ。底面ミガキ。	
第42回 PL.90	40	土製品 勾玉	覆土 完形	長 幅 3.0 1.75	厚 孔 1 0.4	火垂物無/良好/灰 黄	外面はナデ。	重量3.0g
第42回	41	弥生土器 甕	覆土 体部片			疣痕No.85		
第42回	42	弥生土器 (台付甕)	覆土 体部片			疣痕No.45		
第42回	43	弥生土器 甕	覆土 体部片			疣痕No.46		
第42回	44	弥生土器 (高杯か鉢)	覆土 体部片			疣痕No.86・87・ 88		

遺物觀察表

種 因 PL.No.	No.	種 類 種	出上位置 残 存 率	計測値			崩/横成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第42回 PL.90	45	剥片石器 磨製石斧	完形	長 幅	10.4 5.2	厚 重	3.4 273.6	変玄武岩	下部は全体的に滑らかであり丁寧に研磨整形される。上部には全体的に研磨痕が残存し研磨箇所がモザイク状に分布することから研磨整形前の敲打による整形面と考えられる。先端刃部付近にはつぶれ痕が認められ使用痕の可能性がある。
第42回 PL.90	46	砾石器 磨石	完形	長 幅	12.6 10.0	厚 重	7.6 149.1	粗粒輝石安山岩	表面面のほぼ全面に削面が認められる。上下端部に敲打痕がわざりに認められる。
第42回 PL.90	47	砾石器 石皿	不明	長 幅	(16.5) (10.1)	厚 重	(2.6) 551.4	粗粒輝石安山岩	表面は全体的に平滑で滑らかであり一部が特に滑らかである。裏面に滑かな部分と縱・斜め方向の擦痕が認められる。表面面と左側面は全体的に節理面(自然面)と判断され板状節理の露頭から石材を採取していると考えられる。

12号竪穴建物

第43回 PL.91	1	弥生土器 甕	床直 口縁~体1/3	口	(19.0)	S/にぶい黄橙 10YR7/3 外面に 保付着。	口頭部に櫛描波状文(8歯/13mm)を7帯重ねる。施文は時計回り、下から上の順。体部は縦、内面横ミガキ。				
第43回 PL.91	2	弥生土器 甕	覆上 口縁~体部1/2	口	(14.0)	S/にぶい闊 7.5YR5/4 外面は 焼け、被熱赤変。	頭部に2連止め廉状文、口頭部に5~6帯、肩部に1帯の櫛描波状文(8歯/12mm)を重ねる。施文は時計回り、下から上の順。体部外表面は縦、内面全体に横のミガキ。				
第43回 PL.91	3	弥生土器 小型甕	覆上 口縁~体部1/2	口	11.6	S/にぶい闊 7.5YR7/4 外面に 保付着。	頭部に多連止め廉状文をめぐらすが、ミガキで消している。外面部ミガキ、内面横ミガキ。				
第43回 PL.91	4	弥生土器 高杯	床直 脚部		底	17.2	白岩片、長石の白 ~無色粗砂がS/ にぶい黄 5YR6/4	外面部赤。外面赤彩後に縦ミガキ。内面は横ハケメ。			
種 因 PL.No.	No.	細別器種	出上位置				法量		観察内容		
第43回 PL.91	5	刀子片	建物中央床面 やや上	3.8+	2.3+	0.85	0.1	1.5	0.7	0.1	刀子刃の一部と茎が完全する。目釘孔未確認。茎長が短く、茎尻は直線状の一文字尻である。

13号竪穴建物

種 因 PL.No.	No.	種 類 種	出上位置 残 存 率	計測値			崩/横成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考	
第45回 PL.91	1	弥生土器 甕	覆上 口縁片				S/にぶい楓 7.5YR6/4	折返し口縁で、櫛描波状文(8歯/12mm以上)を1帯めぐらす。頭部外表面は縦ミガキ、内面は横ミガキ。		
第45回 PL.91	2	弥生土器 甕	床直 頭~肩部				S/にぶい闊 7.5YR5/4	頭部に2帯一组を垂下する櫛描T字文(I)を掛け、肩に櫛描波状文2帯をめぐらす。縦状貝は7歯/15mm。施文は上から下の順。外面部無文はミガキ、内面全体に横ミガキ。		
第45回 PL.91	3	弥生土器 甕	床直 口縁~体一部欠	口	15.4 22.8	底	6.8	S/にぶい黄橙 10YR7/4 体部下 半は被熱赤変。	頭部に2連止め廉状文(7歯/15mm, 70~93mmスパン)。口頭部に5~7帯、肩部は2~3帯の櫛描波状文を乱雑に重ねる。施文は時計回り、口頭部は下から上、肩部は上から下の順。施文部と内面にハケメ、体部中位と内面は横、体部下位は縦のミガキ。	
第45回 PL.91	4	弥生土器 甕	床直 口縁~体部	口	17.8		S/楓 7.5YR6/6 体部下 半は被熱赤変。口 縁~体上半は焼け る。	頭部に2連止め廉状文(7歯/15mm, 150mmスパン)。口頭部に6~7帯、肩部に2帯の櫛描波状文を乱雑に重ねる。施文は時計回り、口頭部が下から上、肩部が上から下の順。外面部に羽状のハケメ。内面は弱位ハケメ。内外面ともハケメ後の横ミガキ。		
第45回 PL.91	5	弥生土器 甕	床直 口縁~体部	口	16.6		S/にぶい黄橙 10YR6/4 体部下 半は被熱赤変。口 縁~体上半は焼け る。	頭部に2連止め廉状文(7歯/14mm, 42~58mmスパン)、口頭部に5帯、肩部に1帯の櫛描波状文をめぐらす。施文は時計回り、下から上の順。体部外表面は縦、内面は全体に横のミガキ。		
第45回 PL.91	6	弥生土器 甕	床直 口縁~体部一部欠	口	18.4		S/楓 5YR6/6 体部下半 は被熱赤変。口縁 ~体上半は焼け る。	口頭部に6帯の櫛描波状文(8歯/13mm)を重ねる。施文は下から上の順。体部外表面は縦、内面横のミガキ。		
第45回 PL.91	7	弥生土器 甕	覆上 口縁片				黒色鉱物わずか、 長石や石英等の細 縫~粗砂多い。/ 灰黃色 10YR4/2 外面保 ける。	強め内側する口縁で、口頭部外表面に3帯以上の櫛描波状文(10歯/18mm)を重ねる。内面は横ミガキ。		
第45回 PL.91	8	弥生土器 甕	覆上 口縁片				S/にぶい楓 7.5YR6/4	口頭部に横位の櫛描波状文(6歯/15mm)を充填し、櫛描直線文を1~2cm間隔で重ねる。内面は横ミガキ。	圓形・文様と も王者台式甕の模倣品と思 われる。	
第45回 PL.91	9	弥生土器 甕	覆上 体部片				S/にぶい黄楓 10YR6/3	櫛描波状文をめぐらす。外表面は縦、内面は横のミガキ。		
第45回 PL.91	10	弥生土器 有孔杯	床直 口縁1/2欠	口	18.0 13.8	底 孔 孔	6.0 13 11	S. 縮縫多い/にぶ い黄楓10YR6/4 底孔に灰白色付着 物。口縁外表面に粉 状痕1.	無文。外表面は縦、内面は横のミガキ。	

種 団 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	施工/成形/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第46回 PL.91	11	弥生土器 (壺)	覆上 部体片		庄庭No84		

16号竪穴建物

第47回 PL.91	1	弥生土器 壺	床直 口縁~頸部	口 17.9	S/にぶい黄柾 10YR7/3/ 口縁片 側とその対側頸部 に黒斑。	断面蒲鉾形の折返し口縁。頸部は櫛横線文(9歯/14mm) を背書き沈彫6条で切るT字文。頸部外側に幅広の板小口 による縦ナデの後縦ミガキ。内面横ミガキ。	
第47回 PL.91	2	弥生土器 壺	床直 部体片		S/明褐色 7.5YR5/6	無文。外側に縦ミガキ。内面は横ハケメ。	
第47回 PL.91	3	弥生土器 壺	覆上 部体片		S/柾 7.5YR6/6	無文。斜ハケメ、後に基底側のミガキ。内面は横ハケメ。	
第48回 PL.91	4	弥生土器 壺	覆上 口縁~体1/4	口 (20.2)	S/にぶい黄柾 7.5YR6/4/ 体部上 位の一部に焼付 着。	断面蒲鉾形の折返し口縁。頸部にスパンの広い2連止め廉 状文(8歯/14mm)。口縁から底まで4帯、肩部に1~2 帯の櫛横波状文、波状文の施文はブロック手法で時計回り、 下から上の順。外側底部は丁寧な縦ミガキ。内面は横ミガ キ。	
第48回 PL.91	5	弥生土器 台付壺	床直 口縁~体部	口 18.8	S. 粗砂多い/にぶ い黄柾 10YR6/3/ 口縁~ 体部上位の外側に 焼付着、体部下位 は被熱赤変。	口縁~頸部に3帯の櫛横波状文(6歯/13mm)。施文は上か ら下の順。外側底部も粗い横ハケメ。後にまばらな横 ミガキ。	
第48回 PL.91	6	弥生土器 壺	床直 底部片	底 7.7	S/明赤褐色 5YR5/6/ 外面に灰 付着。	無文。外側にハケメ後縦ミガキ。内面横ミガキ。	
第48回 PL.91	7	弥生土器 壺	床直 底部	底 8.1	S/にぶい黄柾 7.5YR6/4	無文。外側に縦ミガキ。内面は横ハケメ。	
第48回 PL.91	8	弥生土器 壺	覆上 底部1/2	底 11.4	S/にぶい黄柾 7.5YR5/6	無文。外側に縦ミガキ。内面は横ハケメ。底内面はナデ。	
第48回 PL.91	9	弥生土器 壺	覆上 底部1/3	底 (10.2)	S/にぶい赤褐色 5YR5/4/	無文。内面とも横ミガキ。底面ミガキ。	
第48回 PL.91	10	弥生土器 壺	床直 口縁~体1/3	口 (14.0)	黒色鉱物わずか、 長石や石英等の攝 礫~粗砂多い。/ 明赤褐色 5YR5/6	頭部に2連止め廉状文(7歯/13mm、60mmスパン)。口縁部 に4帯、肩に1~2帯の櫛横波状文をめぐらす。施文はブ ロック手法、時計回り、上から下の順。体部外側は縦、内 面は横のミガキ。	
第48回 PL.91	11	弥生土器 小型壺	覆上 口縁~部欠	口 高 12.2 14.3	S/にぶい赤褐色 5YR5/4/ 器面剥 離著しい。全体に 被熱赤変。	頭部に3連止め廉状文(8歯以上/22mm)。口縁~頸部に3 帯の櫛横波状文。施文はブロック手法、時計回り、下から 上位の順。ケズリ整形のち体部はミガキ。内面は横ミガキ。	
第48回 PL.91	12	弥生土器 壺	床直 頭部~体部上半 片		黒色鉱物わずか、 長石や石英等の攝 礫~粗砂多い。/ にぶい黄柾 10YR6/4	頭部に2連止め廉状文(9歯/17mm)。口頭部に帯以上、肩 に2帯の櫛横波状文。波状文施文は、口頭部で下から上、 肩で上から下の順。体部外側と内面横ミガキ。	
第48回 PL.91	13	弥生土器 高杯	覆上 口縁~脚1/2	口 (13.2)	S/にぶい黄柾 10YR7/4/ 内面の 剥離著しい。	内面赤彩。口縁横ナデ。外側はの体部上位は斜、体部中 ~下位は縦。脚部は壠のミガキ。内面は横土体のミガキ。 脚部内面はハケメとナデ。	
第48回 PL.91	14	弥生土器 台付壺	覆上 部体4/5	底 10.4	S. 粗砂多い/にぶ い黄柾 10YR6/4/ 内面に ベンガラ付着。液 状のベンガラの容 器として転用した か。	無文。外側は縦ミガキ。内面横ハケメ。	
第48回 PL.91	15	弥生土器 台付壺	覆上 脚部上半		S/にぶい黄柾 7.5YR5/4/ 被熱赤 変。	無文。外側は縦ミガキ。体部内面は横ミガキ。脚内面はナデ。	
第48回 PL.91	16	弥生土器 高杯	覆上 結合部		S/にぶい黄柾 7.5YR6/4/ 脚内面 に赤色顔料付着。	無文。外側は縦ミガキ。内面は横ミガキ。脚内面はハケメ を残す。	
第48回 PL.91	17	弥生土器 (壺)	床下 部体片		庄庭No.92		

17号竪穴建物

第52回 PL.92	1	弥生土器 壺	床直 ほぼ完形	口 高 26.4 46.0	底 12.3	S. 赤鉛筆含む にぶい黄柾 10YR7/4/ 体部中 位の内側に黒斑。	折返し口縁に櫛横波状文。頭部に3連止めの櫛横波状文(10 歯/17mm)をめぐらし、頭部上に1~2帯、肩部に3帯の櫛 横波状文を重ねる。施文具は同一だが、櫛横1条が一部め ぐらされる。施文は時計回り、上から下の順。口頭部外側 は縦、体部外側は上位が縦、下位が縦ミガキ。口縁内面は 横ミガキ。体部内面は横ハケメ後、1連ナデ。
第52回 PL.92	2	弥生土器 壺	床直 口縁~頸部片	口 27.0		S/にぶい黄柾 10YR6/4/ 口頭部 の内外面に柄を主 とする庄庭6ヶ所。	立ち上がり口縁の外側に櫛横波状文、肩~肩部に密な巻状 文で下限を画した櫛横T字文(11歯/16mm、3分画)。T字文 は3帯の櫛横横線文をベースとする。口頭部と体部に赤彩。 施文・赤彩後に口縁外側は縦、体部外側と口頭部内面に 横ミガキ。体部内面はナデ。

遺物觀察表

種 国 PL.No.	No.	種 類 器 種	出上位置 残 存 率	計測値		崩/成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考	
				底	底				
第52回 PL.92	3	弥生土器 壺	床直 口縁欠		13.8	S/にぶい黄 10YR7/4	頭部に3帯の櫛描波状文(5箇/11mm)を重ねる。施文は時計回り、上から下の順。外面は縦のミガキ。内面は剥離観者で成形不明。		
第52回 PL.92	4	弥生土器 壺	床直 体部上半一部～ 口縁欠		6.6	S/にぶい黄 10YR7/3 底面唇 輪が顕著。体部半外面上に種別施文 5ヶ所(No. 7-8・ 71～73)	頭部から肩に、描き繼続のある時計回りで、4帯(以上)の 輪が顕著。下位には5～10mmスパンの等間隔 止め縦状文(6箇/13mm)をめぐらす。外面はハイメ後不定 方向のミガキ。内面は全体に平滑な板状具小口によるナデ。	箱清水式壺C の模品だろ う。	
第53回 PL.92	5	弥生土器 壺	床直 体部一部欠	口 高 14.5	底 20.2	14.5	S/にぶい黄 10YR6/3	有段の2重口縁で、外面と口縁部内面に赤彩。赤彩部を丁 寧なミガキ。体部内面はナデ。底面ケズリ。	
第53回 PL.92	6	弥生土器 壺	覆上 体～底部		底 6.7	S. 赤い黄 2.5M6/3	頭部に多連止め縦状文(8箇/10mm)。肩部に3帯の櫛描波 状文を重ねる。施文は上から下の順。外側は丁寧なミガキ。 内面は横ハケメ。上位はナデ。底面ミガキ。	7直と断 厚。施文が 判別。	
第53回 PL.92	7	弥生土器 壺	床直 頭部～体部上半			S/にぶい黄 10YR7/4 体部片 側に黒斑。	頭部に多連止め縦状文(9箇/14mm)、4.5～6.5cmスパンの 不均等な4分画で、縦状文は1帯の櫛描波状文をめぐら し、7ヶ所に櫛描窪文。末端は剥離状境の円形貼付文を 付す。頭部外面は板、体部の内外全体にも横ミガキ。		
第53回 PL.93	8	弥生土器 壺	覆上 肩部以上を欠		底 17.2	S. 粗砂主体/淡黄 相 10YR8/3	無文。外面中位は横、下位は縦のミガキ。内面はナデと思 われるが、剥離者しい。		
第54回 PL.93	9	弥生土器 壺	覆上 口縁～体一部欠	口 高 (29.2)	底 43.1	9.4	S. 白岩片の櫛描 粗砂含む/にぶ い黄 10YR10/5/4	頭部から口縁に9帯の櫛描波状文を重ね。最後に頭部への 3連止め縦状文(7箇/14mm、8～9.5cmスパンの9分画)。 施文はブロック手法、時計回り。施文部に横ハケメ、内外 面に丁寧なミガキ。	
第54回 PL.93	10	弥生土器 壺	床直 完形	口 高 24.9	底 37.5	9.2	S/根 7.5YR6/6 外面の 体部上半に保有者。 内面下半の片側彫 りでコゲ痕。	U頭部に6帯を下から上、肩部に3帯を上から下に重ねる。 口縁部は工具をあてた面とのナデ。内面とも非常に丁 寧な横ミガキ。	器形は北信地 方の箱清水式 に近い。
第54回 PL.94	11	弥生土器 壺	床直 口縁～体一部欠	口 高 22.2	底 32.0	6.5	S/にぶい黄 10YR6/4 体部内 面下半にコゲ痕。	口縁は肥厚、面取りして櫛描波状文、口縁部に5帯の櫛 描波状文、最後に頭部に3連止め縦状文(8箇/15mm)をめぐ らす。外面施文部はハケメ。体部外面上位と内面全体に横 ミガキ。体部外面上位は横ミガキ。	
第54回 PL.94	12	弥生土器 壺	床直 完形	口 高 19.8	底 32.3	8.5	S/淡黄 10YR8/3 外面部 上半に保有者。	U頭部から腹部に櫛描波状文(7箇/12mm、9箇/16mm)を9～ 10mmスパンで重ねる。施文はブロック手法、時計回り、下から上の 順。体部外表面は中位で横、下位は縦のミガキ。内面は全体 に横ミガキ。	
第55回 PL.94	13	弥生土器 壺	床直 完形	口 高 24.5	底 33.9	7.8	S/にぶい黄 10YR7/3 底部付 近以外部全体が 保け、体部内面下 半にコゲ。	U頭部に櫛描波状文6帯を下から順。肩に1帯の波状文を めぐらし、最後に頭部への3連止め(1ヶ所)6連止め(8 箇/13mmスパン、6分画)をめぐらす。施文部はハケメ。 体部外表面は一部ハイメを残しながら斜一多てミガキ。内面 は下位が縦、上位が横のミガキ。	
第55回 PL.94	14	弥生土器 壺	床直 口縁～体部中位	口 21.0			S/にぶい黄 10YR5/3 外面全 体が保ける。	櫛描波状文7帯を口縁から肩部にかけて重畠施文。最後に 頭部への2連止め波状文をめぐらす。施文部は10mm・18mm。 施文はブロック手法、時計回り、上から下の順。体部外表面 に約ハケメ、後に斜1多てミガキ。内面は口縁～頭部が横、 体部が縦のミガキ。	器形は北信地 方の箱清水式 に近い。施文 手法が10と異 なる。
第55回 PL.94	15	弥生土器 壺	床直 完形	口 高 20.5	底 33.2	7.6	S. 白岩片目立/ にぶい黄 10YR6/3 外面の 体部上半が保け る。	沖・断面の折返し口縁。頭部に2連止め縦状文(9箇/14mm, 6.8～8.3cmスパンの9分画)。口縁部に6帯、肩部に3帯 の櫛描波状文をめぐらす。施文はブロック手法、時計回り、 上から下の順。内面は横のミガキ。	
第55回 PL.94	16	弥生土器 壺	床直 口縁～体一部欠	口 22.6			S/にぶい根 7.5YR6/4 体部外 面に各1の種 実? 頭部(No. 10).	頭部に2連止め縦状文(9箇/18mm, 110～130mmスパン)。 肩部に1帯波状文で下端に両側とし、口縁から下へ5帯波状 文をめぐらし、最後に頭部縦状文の頭で施文。施文部に縦 ハケメ。体部外表面は横、内面全体は横のミガキ。	
第55回 PL.94	17	弥生土器 壺	覆上 口縁～肩部片	口 24.0			S/にぶい黄 10YR6/4	頭部に2連止め縦状文(9箇/17mm, 15cmスパン、5分画) をめぐらす。口縁部に櫛描波状文を5帯以上に重ね、 肩部に2帯の櫛描波状文をめぐらす。施文は下から上の順 を基調とするが、後から描き重ねとみられる。内面は横 ミガキ。	
第55回 PL.94	18	弥生土器 壺	床直 口～体部上半 1/2	口 15.0			S/にぶい黄 10YR6/3	折返し口縁で、口縁～肩に10帯前後の櫛描波状文を瓦籠に 施す。施文はブロック手法、時計回り、上から下の順。 体部外表面と内面全体に横ミガキ。	
第55回 PL.94	19	弥生土器 壺	床直 口縁1/3	口 (25.0)			S/にぶい黄 10YR7/4	U頭から頭部に7帯(以上)の櫛描波状文を重ね、最後に頭 部に横状文が横縞文をめぐらす。施文部は6mm/11mm。施 文はブロック手法、時計回り、下から上の順。内面に横 ミガキ。	
第55回 PL.94	20	弥生土器 壺	床直 口縁～体部上半	口 15.5			S/にぶい黄 10YR7/4	U頭部に櫛描波状文(8箇/12mm)を6～7帯重ねる。施文 は時計回り。下から上の順。内面全体も横ミガキ。	
第55回 PL.94	21	弥生土器 壺	覆上 口縁～体部3/4	口 (19.2)			S/にぶい黄 10YR7/3	頭部に3連止め縦状文(6箇/10mm, 90～98mmスパン)。 口縁部に6帯、体部上半に5～6帯の櫛描波状文をめぐらす。 波状文間の隙を空け、時計回り施文。体部は縦、内面横 ミガキ。	

種 団 PL.No.	No.	種 類 器 種	出上位置 残 有 率	計測値	崩/成形/色調 石 材・素 材 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第55回 PL.95	22	弥生土器 甕	床直 口縁～体一部欠	口 (22.0)	S/にぶい黄楓 10YR7/3 / 前外面 に埋付着、内面下 位に薄くコケ痕。	口縁部に 8 帯の粘土被膜と上縁を装飾的に残し、口縁に 1 帯、肩部に 4 帯の櫛彫波状文をめぐらす。頭部には 3 ～ 4 止止め彫状文(8 柄/18mm, 5.5 ～ 11mm スパン、6 分画)。施文の後、波状文を上から下の順で施す。体部外面は縦、内面は上位が縦、下位が巻きのミガキ。	
第55回 PL.95	23	弥生土器 甕	覆土 口縁片	口 (18.0)	S/にぶい黄楓 10YR6/4	口縁から頭部に 5 帯の櫛彫波状文(5 柄/10mm)を重ね、頭部に 2 ～ 多連止め彫状文をめぐらす。外表面は巻きハケメ、内面は口縁が斜ハケメとミガキ、体部はケズリ後ミガキ。	
第55回 PL.95	24	弥生土器 甕	床直 口縁片	口 (18.0)	S/にぶい黄楓 10YR6/4	口縁から頭部に 5 帯の櫛彫波状文(5 柄/10mm)を重ね、頭部に 2 ～ 多連止め彫状文をめぐらす。外表面は巻きハケメ、内面は口縁が斜ハケメとミガキ、体部はケズリ後ミガキ。 23と同一個 体。	
第55回 PL.95	25	弥生土器 壺/か壺	覆土 口縁片		S/にぶい楓 7-5YR7/4	折返し口縁に間隔のある密な彫状文(連続押し引き文に近い)。内面に横ミガキ。	
第56回 PL.95	26	弥生土器 高杯	覆土 完形	口 15.0 底 10.0 高 12.9	S/にぶい黄楓 10YR7/3	内外面赤彩。内外面横ミガキ。脚内面はハケメとナデ。	
第56回 PL.95	27	弥生土器 高杯	床直 脚1/2欠	口 14.7	S. 磨円彫合む/に ぶい楓 7-SYR6/4 / 杯外部 1 個所に 黒墨。	脚内面をのぞき、外外面赤彩。杯部は外外面とも横ミガキ、脚外表面は巻ミガキ。脚内面はナデ。	
第56回 PL.95	28	弥生土器 高杯	覆土 脚部欠	口 16.8	S. 白岩片多い/に ぶい楓 7-5YR5/4 / 脚欠損 端が削減。	脚内面をのぞき、外外面赤彩。杯部は外外面とも横ミガキ、脚外表面は巻ミガキ。脚内面はナデ。	
第56回 PL.95	29	弥生土器 高杯	覆土 底杯～脚部欠	口 13.5	S. 磨合む/に ぶい黄楓 10YR7/4	外外面赤彩。外外面とも横ミガキ。	
第56回 PL.95	30	弥生土器 台付甕	床直 体部一部欠	口 15.2 底 10.0 高 22.5	S/にぶい楓 7-5YR6/4 / 脚部は 被熱赤変、口縁～ 体部外表面は保け る。	口縁部に 6 帯の櫛彫波状文を下から順、最後に頭部に 3 連止止め彫状文(10 柄/17mm, 90mm スパン 4 分画)をめぐらす。体部～脚部外表面は縦、内面は横のミガキ。脚内面は横ナデ。	
第56回 PL.95	31	弥生土器 台付甕	床直 口縁、体の一部 火	口 11.5 底 7.8 高 14.6	S/にぶい黄楓 10YR7/4 / 体部～ 脚部は被熱赤変、 内面コゲは見られ ない。	頭部に 2 ～ 4 止止め彫状文(7 柄/10mm)をめぐらす。口縁に 2 帯、肩部に 3 帯の櫛彫波状文を重ねる。施文は時計回り、口縁部は下から、肩部は上からの順。口から体部の外表面は横ミガキ。脚部の外表面は巻ミガキ。内面はハケメ。	
第56回 PL.95	32	弥生土器 台付甕	覆土 体部下半以下欠	口 18.8	S/にぶい黄楓 10YR6/3 / 体部外 面が被熱赤変。	口縁部に 3 帯の櫛彫波状文(8 柄/14mm)を重ねる。施文は時計回り、下から上の順。施文部にハケメ残し、体部外表面回り、内面全体に横ミガキ。	
第56回 PL.95	33	弥生土器 台付甕	覆土 脚部		S/にぶい黄楓 10YR6/3 / 外面の 一部が剥け、被熱赤 変。	無文。外表面は横ミガキ、内面はケズリとナデ。	
第56回 PL.95	34	弥生土器 鉢	床直 完形	口 15.2 底 5.8 高 6.0	S/にぶい黄楓 10YR7/3 / 外面の 同位置に吸収。	文様なし。外外面とも横ミガキ、底面はケズリ。	
第56回 PL.95	35	弥生土器 鉢	床直 完形	口 13.5 底 5.0 高 7.0	S/にぶい黄楓 10YR7/4 / 口縁内 外表面に吸収。内面 削離。	文様なし。整形は外外面とも斜位ハケメ。外面上位に斜～横ミガキ、下位に巻ミガキ。内面は横ミガキ。	
第56回 PL.95	36	弥生土器 有孔鉢	覆土 口縁～体1/4欠	口 21.7 底 5.7 高 13.0 孔 1.2	S/にぶい黄楓 10YR7/3 / 口縁付 内面に被熱赤変。	無文。外外面にハケメ残し、外外面とも横ミガキ。 近のみ被熱赤変。	施として使用 した可能性あり。
第56回 PL.95	37	弥生土器 片口鉢	床直 完形	口 13.5 底 7.6 高 11.5	S. 粗砂多い/に ぶい楓 7-5YR5/4 / 内面 位までと片口部内 面に白色物付着。 外表面の剥離跡。	文様なし。外外面とも上位は横ミガキ、下位は巻ミガキ。 底面ミガキ。	
第56回 PL.95	38	弥生土器 鉢	床直 口縁～体部1/5	口 (25.0)	S/にぶい楓 7-5YR7/3	無文。外外面ミガキ。	
第56回 PL.95	39	弥生土器 甕	覆土 体部下半～底		S/にぶい黄楓 10YR7/3 / 内面に 炭化物が薄く付 着。コゲかどうか 不明。	無文。外表面は縦、内面は横のミガキ。底面はケズリ後ミガキ。	
第56回 PL.95	40	弥生土器 甕	覆土 体部下半～底		S/にぶい黄楓 10YR7/4 / 底部付 近が被熱赤変、底 部内面にコゲ跡。	無文。外表面は縦、内面は横のミガキ。底面は丁寧なミガキ。	
第56回 PL.95	41	弥生土器 甕	床直 体部下半～底		S/にぶい黄楓 10YR6/3	無文。外表面は縦、内面は横のミガキ。底面はケズリ。	
第56回 PL.95	42	弥生土器 甕	覆土 体部下半～底		S/暗紅黃 2.5YR5/2 / 底面に 灰付着。	無文。外表面は縦、内面は横のミガキ。底面はケズリ。	

遺物觀察表

種 国 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	施工/成形/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第56回 PL.95	43	弥生土器 壺	覆上 体部下半～底		底 9.0 S/にぶい黄楓 10YR7/3	無文。外面に縦ミガキ、内面はナデ。	
第57回 PL.95	44	削片石器 打製石斧	完形	長 幅 12.1 厚 2.5 6.5 重 179.6	粗粒輝石安山岩	左右両側と先端刃部には両面加工が認められる。上辺の 第二次加工は散発的である。表裏面の先端刃部付近を中心 に摩滅痕が散在する。表裏面の中央附近には素材剥落段階 の摩擦面を広く残す。表面側に主要剝離部が位置する。	
第57回 PL.95	45	削片石器 磨製石斧	不明	長 幅 (18.4) (6.6) 厚 (3.3) 重 571.5	変玄武岩	全体的に滑らかになり丁寧に研磨整形される。表裏面の中 央附近に浅鉢状の凹みが認められ内面は確かに凸凹構成され る。左右両側面の上方には比較的幅の広い擦条痕が集められており敲打痕の可能性がある。上端 部にはつぶれ痕が集中し上方からの削離痕が認められ敲打 により生じたと考えられる。磨製石斧から敲打具へと器種 変化したものと考えられる。	
第57回 PL.95	46	磨石器 石皿	完形	長 幅 26.8 厚 4.8 25.5 重 524.5	粗粒輝石安山岩	表面のほぼ全面に滑らかな部分が認められ中央は特に滑らか である。表面には表裏的な擦条痕が散在しており敲打を受 けたことにより生じたと考えられる。表裏面は節理面(自 然面)と判別され板状節理の露頭から石材を採取している と考えられる。施文は全般的に打削面で構成されるが表面 の中央に特に滑かな部分が位置していることから器種とし て元形と考えられる。	

19号堅穴六建物

第58回	1	弥生土器 壺	覆上 頸部片		S/にぶい黄楓 10YR5/7 外面の 上位に褐斑有。	頸部に2連止め縫状文(8街/14mm, 34～36mmスパン)、口 ～頸部と側部に櫛描波状文。内面に横ミガキ。	
------	---	-----------	-----------	--	-----------------------------------	--	--

21号堅穴六建物

第61回	1	弥生土器 壺	床直 脚部片		S/にぶい黄楓 10YR7/4	脚部に2連止め縫状文(7街/11mm, 85mmスパン)、その上 下に各1帯の櫛描波状文をめぐらす。外はハケメ、口縁 内面は横ミガキ、肩部内面はナデ。	
第61回	2	弥生土器 壺	床直 口縁～体部片	口 (17.2)	S/にぶい黄楓 10YR7/4 頭～脚 部に褐斑有。	口頂部に櫛描波状文(9街/16mm)を6帯重ねる。施文はブ ロッカ手法、時計回り、下から上の順。内外面に横ミガキ。	
第61回	3	弥生土器 壺	床直 口縁～体部上		S/にぶい黄楓 10YR5/4 外面の 頭～脚部に褐斑 有。	口頂部に櫛描波状文(8街/12mm)を6帯重ねる。施文はブ ロッカ手法、時計回り、下から上の順。施文部にハケメ。 体部上面は縦、内面は横のミガキ。	
第61回	4	弥生土器 小型甕	床直 口縁～体部一部 欠	口 高 14.6 底 14.5	S/にぶい黄楓 10YR7/4 底面磨 減。被熱赤変。	口頂部に6～8帯、肩部に2～3帯の櫛描波状文。頭部に 櫛描横縫文(5街/8mm)をめぐらす。口頭部施文～頭部横 縫文～脚部施文の順。波状文は上から下を基調とするが乱 れる。外表面に横ミガキ。肩部下端はミガキ消失される。	
第61回	5	弥生土器 壺	覆上 口縁片		S/にぶい黄楓 10YR5/4 口縁外 面に圧痕有。外面 が剥ける。	口頂部に櫛描波状文(6街/12mm)を7帯重ねる。施文は下 から上の順。口縁端部に十字刻みの円形貼付文を付す。内 面に横ミガキ。	7号堅壁10と 同一。
第61回	6	弥生土器 壺	覆上 脚部片		S/にぶい焼 7.5YR7/4	脚部に2連止め縫状文(15街/21mm)。口縁側と脚部に櫛描 波状文をめぐらす。施文～波状文の順。内面に横ミガキ。	
第61回	7	弥生土器 壺	床直 体部下位～底 1/3		底 (9.0) S/にぶい燒 7.5YR6/4	無文。外表面は縦、内面は横ミガキ。底面ミガキ。	
第61回	8	弥生土器 壺	覆上 底片		底 (8.0) 白岩片の粗砂多い /にぶい焼 7.5YR6/4	無文。外表面はケズリ後ミガキ。内面は丁寧なミガキ。	
第61回 PL.96	9	弥生土器 鉢	床直 口縁～体一部欠	口 高 13.7 底 6.0	S/にぶい焼 7.5YR7/4 底面と 口縁の一部に黒 斑。	無文。外表面は縦、内面は横のミガキ。	
第61回 PL.96	10	弥生土器 鉢	床直 口縁～底片	口 高 (10.8) 底 6.0	S/にぶい黄楓 10YR6/3 片面全 体に黒斑。	外表面に赤彩。外表面は縦、内面は横のミガキ。	
第61回 PL.96	11	弥生土器 高杯	覆上 脚部片		底 8.3 S/にぶい赤 2.5YR4/4 底部内 面が黒変。	外表面に赤彩。脚内面への塗彩は稀少例。外表面は縦、内面 は横のミガキ。	
第61回 PL.96	12	弥生土器 台付甕	覆上 脚部片		赤粒、白岩片の粗 砂、細縫にぶい 赤楓5YR5/4/被 熱赤変。	無文。外表面は縦ミガキ。内面は上位指ナデ、下半はハラナデ。	
第61回	13	弥生土器 台付甕	覆上 脚部片		S/粗砂多いにぶ い焼7.5YR6/4/ 被熱赤変。	無文。外表面は縦ミガキ。内面は上位指ナデ、下半はハケメ。	
第61回	14	弥生土器 壺	覆上 体部片		底压No.97		

11号土坑

第62回	1	弥生土器 壺	底部		底 7.0 長石や石英等の粗 砂～粗砂多い。 / にぶい黄楓 10YR6/4	無文。外表面は縦ミガキ。内面はハケメ後横ミガキ。底面ミ ガキ。	
------	---	-----------	----	--	--	------------------------------------	--

22号土坑

種類 PL.No.	器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
			長 幅	厚 重			
第63回	1 繩石器 磨石	完形	11.8 9.3	4.5 734.4		表裏面のほぼ全面に磨面が認められ表面の一部は特に滑らかである。表面の中央付近と右側面には敲打痕が集中する。	
弥生土器 遺構外							
第65回	1 弥生土器 壺	5区6型建 底部		底	15.0	S/相7.5VR7/6/ 底縁の磨滅は使用痕だろう。	無文。内外面とも削離と磨滅著しい。外面に初期整形時の 縦ハケメ痕を残す。
第65回	2 弥生土器 壺	5区6型建 脚部下部片				S、白岩片 むにぶい粒 7.5VR8/4	外面に赤彩。内面の下位に擬織文(原体不明)。内面に横ハ ケメ。
第65回	3 弥生土器 (鉢)	5区6型建 口縁1/4	口 (21.0)			白～無色の粗細砂 目立つ/灰黄褐 10VR6/2	無文。内外面とも丁寧な横ミガキ。
第65回	4 弥生土器 (甕)	1 壇 底部片		底 (9.4)		S/にぶい粒 7.5VR8/4/ 底面 に粗粒痕(No.54)	無文。内外面、底面ともミガキ。
第65回	5 弥生土器 (甕)	1 壇 底部片		底 6.0		S/にぶい黄粒 10VR6/4/ 底内面 に粗粒痕(No.57)	無文。内外面ミガキ。底面ケズリ。
第65回	6 弥生土器 甕	1 壇 口縁片				粗角縦と粗粒含む Lにぶい黄粒 10VR6/4	口縁上面に棒状具で押圧。外面に縦ハケメナデ後横ナデ。 内面はケズリ、ナデ。
第65回	7 弥生土器 台付甕	1 壇 脚部片		底 8.2		S/相 7.5VR6/6/ 被熱赤変	無文。外面縦ミガキ、内面はハケメ。結合部はほど充填に よる。
第65回	8 弥生土器 鉢	1 壇 底部片		底 7.4		S/にぶい粒 7.5VR6/4	外面赤彩。外面は縦ミガキ。底面ケズリ。
第65回	9 弥生土器 鉢	1 壇 底部片		底 3.5		S/にぶい黄粒 10VR6/4	無文。外面は縦、内面は横のミガキ。
第65回	10 弥生土器 甕	1 壇 体部片				庄痕No.99	
第65回	11 弥生土器 甕	1 壇 体部片				庄痕No.102	
第65回 PL.96	12 弥生土器 高杯	1 壇 脚部片		底 12.7		S、白岩片 粗粒多 Vにぶい黄粒 10VR6/4	外面に赤彩。横断面が正方形で、四方に縦稜を作り出す。 外面は縦ミガキ、内面は横ケズリ。
第65回	13 弥生土器 高杯	1 壇 体部片				S/にぶい黄粒 10VR6/4	外面赤彩。外面は縦、内面は横のミガキ。
第65回	14 弥生土器 高杯	1 壇 体部片				S/にぶい黄粒 10VR6/3	外面赤彩。外面上位は横で下位は縦、内面は横のミガキ。
第65回	15 弥生土器 高杯	1 壇 結合部片				S/にぶい黄粒 10VR7/4	外面と杯部内面に赤彩。脚部に三角透かし。外面は縦ミガ キ。
第65回	16 弥生土器 甕	2 壇 口縁片				S/にぶい黄粒 10VR6/3	折返し口縁に、櫛描波状文(5歯/10mm)を重ねる。内面横 ミガキ。
第65回	17 弥生土器 壺	2 壇 口縁片				S/浅黄褐 7.5VR8/4	やや幅広で薄い折返し口縁に櫛描波状文(6歯/10mm)をめ ぐらす。頸部外面に横ミガキ、内面は焼れ。
第65回	18 弥生土器 台付甕	2 壇 体部片				S/にぶい赤褐 3VR5/4/ 下位は被 熱赤変	頭部に廉状文か櫛描波状文、肩に1帯の櫛描波状文(5歯 /9mm)をめぐらす。体部外面は横ハケメ、内面ともに横 ミガキ。
第65回	19 弥生土器 甕	2 壇 口縁部片				S/にぶい黄粒 10VR7/4	頭部に廉状文、口部全体に3帯(以上)の櫛描波状文(8 mm/13mm)を下から順に重ねる。内面横ミガキ。
第65回	20 弥生土器 台付甕	2 壇 結合部				S/にぶい黄粒 10VR7/4/ 外面は 被熱赤変	無文。外面は縦、内面は横のミガキ。
第65回	21 弥生土器 異形土器	2 壇 部分片				粗砂・黑褐 2.5VR3/1	無文。筋跡形の成形と思われる。内外面は長軸方向にミガ キ。鳥形か舟形ではいか?
第65回	22 弥生土器 台付甕	2 壇 口縁片				庄痕No.51・52・ 53	
第66回	23 弥生土器 壺	5区2F-43 脚部片				S/にぶい黄粒 10VR6/4	2止め廉状文(7歯/16mm)を上下2帶で互い違いにめぐ らし、下位に櫛描波状文。これら櫛描文の上に、2条一组 の次線をT字文に垂下する。この施具は沈綫間の盛り 上がりが見られないで、半蔵竹管とは考えにくい。内面 に横ハケメを施す。
第66回	24 弥生土器 壺	5区21-45 体部片				S、赤粒目立つ/に ぶい黄粒 10VR6/3	2条沈綫(棒状具)×2条一组のT字文。無文部に赤彩。 外面上はミガキ。内面は横ハケメ。
第66回	25 弥生土器 壺	5区2C-40 脚部片				白～無色の粗細砂 目立つ/にぶい黄 7.5VR5/4	縞文(L)を地文とし、やや太めの沈綫で横線と斜綫構成の 単位文を描く。内面ナデか。
第66回	26 弥生土器 甕	5区2F-43 口縁・体部上半 片	口 (22.0)			S/にぶい黄粒 10VR6/4/ 外面保 ける。	薄い折返し口縁。頸部に4止め廉状文(6歯/13mm)。口 部に6帯、肩部に3帯の櫛描波状文を重ねる。体部外面 に縦ミガキ、内面全体に丁寧な横ミガキ。

遺物觀察表

種 団 PL.No.	No.	種 類 器	出上位置 残 存 率	計測値	崩/成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第664回	27	弥生土器 甕	5区21-45 口頭部片	口 (15.5)	S. 白岩片 多いに ない黄褐 10YR6/4 外面に 煤付着。	口縁部に5~6帯の櫛描波状文(6箇/12mm)を乱雑に重ねる。内面に横ミガキ。		
第664回	28	弥生土器 甕	5区26-40 口頭部片		S.にぶい黄褐 10YR7/4 口縁外 面(No.110)、底盤 (No.109)の庄痕 2ヶ所。	折返し口縁。口縁~頭部に櫛描波状文(7箇/12mm)を重ねる。内面横ミガキ。		
第664回	29	弥生土器 甕	5区26-45 口頭部片		S.にぶい黄褐 10YR7/3	櫛描波状文を重ねる。内面ナデ。		
第664回	30	弥生土器 壺か甕	5区2F-43 底部片	底 (8.0)	黒色鉱物わずか、 長石や石英等の礫 多く含む。 / S.にぶい黄褐 10YR7/4 底面磨 減が顕著。	体部に付加条縄文(2種、RL+R)。底面荒れて整形不明。	十王台式の可 能性あり。	
第664回	31	弥生土器 甕	5区21-43 底部	底 8.3	白岩片の細縫~粗 砂多いにぶい黄 褐10YR5/4/ 底面に種実?庄痕 (No.61・62・63)	無文。 内外面ミガキ。		
第664回	32	弥生土器 (台付甕)	5区26-42 脚部片		白~無色の粗面砂 目立つ/にぶい黄 褐 10YR6/3	頭部に2以上止めと思われる廉状文、上下に櫛描波状文 (5箇/9mm)をめぐらす。波状文の下限部に十文字刻みの 円形貼付文を付す。外表面は横ハケメ、内面はミガキ。		
第664回	33	弥生土器 (甕)	5区21-43 体部片		白岩片の細縫~粗 砂多い灰黄褐 10YR6/2	縫文(LR)。上位屈曲部に浅い波状沈線がみられるが不鮮明。 内外面ケズリ。	中期中葉以 前。	
第664回	34	弥生土器 (甕)	遺構外 体部片		白岩片の細縫~粗 砂多い灰黄褐 10YR6/2	縫文(LR)。上位屈曲部に浅い波状沈線がみられるが不鮮明。 内外面ケズリ。	33と同一個体 だろう。 中期 中葉以前。	
第664回	35	弥生土器 台付甕	5区26-42 脚部片		S.にぶい粗 7.5YR6/4/ 外面は 被熱赤変。	無文。 外面と底内面にミガキ。 底内面はナデ。		
第664回	36	弥生土器 鉢	5区21-44 口~底1/3	口 高 5.0	底 4.2	S.にぶい粗 7.5YR6/4/ 底外面 一部に黒斑。	無文。 外面は縦ハケメ後ナデ。 内面は横ミガキ。	
第664回	37	弥生土器 ミニチュア 高杯	5区2J-41 脚部		底 4.4	S. 粗砂主体/にぶ い黄褐 10YR6/3	脚部内面に赤彩。 外面縦ハケメ後粗い縦ミガキ。 内面ナデ。	
第664回	38	弥生土器 甕	5区2F-42 体部片			庄痕No.58		
第664回	39	弥生土器 甕	5区2F-42 底部片			庄痕No.59・60		
第664回	40	弥生土器 甕	5区2F-42 体部片			庄痕No.108		
第664回	41	弥生土器 台付甕	6区26-30 脚部2/3	底 7.9	S.にぶい黄褐 10YR6/3 全体が 被熱赤変。	文様なし。 外面は縦、内面の上位は指ナデ。 下位は斜位の グサリ。 底内面はナデ。		
第664回	42	弥生土器 鉢	之墳 口頭部此片	口 (14.0) 底 高 5.0	S.にぶい黄褐 10YR7/4	底面を除いて内外面赤彩。 外面は縦、内面は横のミガキ。		
第664回	43	弥生土器 壺	一括 口頭部片	口 (20.0)	S.浅黄 2.5YR7/3	口縁に2条の凸帶で装飾。 頭部外面は縦ハケメ。 口縁は横 ミガキ。 内面は横ミガキ。		
第664回	44	弥生土器 壺	12トレ 脚部片		S.にぶい黄褐 10YR7/4	T字文。 櫛描横線(6箇/16mm)を2帯以上重ね。 2本単位の 櫛状具を2条一组みで凹窓を空けて意下。 外面縦ミガキ。 内面は荒れ。		
第664回	45	弥生土器 壺	12トレ 体部片			庄痕No.105		
第664回	46	弥生土器 甕	12トレ 体部片			庄痕No.104		
第664回	47	弥生土器 甕	5区 脚部片			庄痕No.112		
第664回	48	弥生土器 甕	6区 体部片		S. チャート・白 岩片の細縫含む。 /にぶい黄褐 10YR6/3	縫文(L)を地文に、2条平行の沈線(半截竹管か)で横線と 弧状文様を描く。 内面ミガキ。	中期中葉。	
第664回	49	(弥生土器) (甕)	6区表上 体部片		S. 長石、石英、白岩 片の細縫~粗砂多 い灰黄褐 10YR6/6 表面に 横円形種庄痕 (2×1mm)	縫の細密条痕(8条/10mm)を施す。 内面に擦痕あるナデ。	縫文幾形(水 式)の可能性。	

種 国 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石 材 / 材 素 等	成 形・整 形 の 特 徴			備 考
第66回 PL.96	50	(弥生土器 (甕))	6区上面 体部片		長石、石英、白岩 片の亜角細粒・粗 砂多いにぶい黄 橙10YR7/4	口縁部の瘤状条痕(8~9条/10mm)を施す。器面荒れ、内面整 形不明。			縄文晩期(水 式)の可能性。

3号竪穴建物

第71回 PL.96	1	土師器 碗(内湾口 縁)	覆上 1/3	口 最 11.6 深 12.0	5.3	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部から底部はヘラ削り後横方向のヘラ ミガキ。底部は器面摩滅のため単位不明。内面は体部から 口縁部に横方向のヘラミガキ。											
第71回 PL.96	2	土師器 杯(須恵器 杯蓋模倣)	床直 1/3	口 縫 12.7 深 12.0		細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、継下から底部は手持ちヘラ削り。口唇端 部は平咀面をつくり、2条のごく細い凹難が巡る。											
第71回 PL.96	3	土師器 杯	覆上 3/4	口 縫 12.1 深 10.8	5.4	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部から底部にかけて横方向のヘラミガキ。内面は底部 から体部下半が斜放射状のヘラミガキ、上半から口縁部は 横方向のヘラミガキ。											
第71回 PL.96	4	土師器 杯(須恵器 杯蓋模倣)	覆上 1/2	口 縫 12.8 深 12.6	4.8	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部は横ナデ、継下から底部は手持ちヘラ削り。口唇端 部は内側に傾き、凹みをもつ面をつくる。											
第71回 PL.96	5	土師器 杯	床直 1/4	口 縫 11.7 深 4.3		細砂粒/良好/赤褐	口縁部から体部上半は横ナデ、下半から底部は手持ちヘラ 削り、内面は体部上半から口縁部に斜放射状のヘラミガキ。											
第71回 PL.96	6	土師器 杯(須恵器 杯蓋模倣)	床直 口縁部一部欠 け	口 縫 12.8 深 12.3	4.8	細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、継下から底部は手持ちヘラ削り。											
第71回 PL.96	7	土師器 杯(須恵器 杯蓋模倣)	床直 1/3	口 縫 13.6 深 12.0	5.7	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部は横ナデ、継下から底部は手持ちヘラ削り。内面口 縁部に斜放射状のヘラミガキ。											
第71回 PL.96	8	土師器 甕	床直 口縁部~胴部中 位	口 縫 16.8 深 18.4		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頭部は横ナデ、胴 部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。											
第71回 PL.96	9	土師器 甕	床直 口縁部	口 縫 35.4		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄褐	内面胴部に輪積み痕が残る。胴部は外側がヘラ削り。内面 はヘラナデか、器面摩滅のため単位不明。											
第71回 PL.97	10	礫石器 磨石	完形	長 幅 11.7 厚 10.7 重 128.3	8.5		表面のほぼ全面に磨面が認められる。表面には砥打痕 が散在する。											
種 国 PL.No.	No.	細別器種	出土位置	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	法量	観察内容
第71回 PL.97	11	織機具	覆上中	3.0	1.3	0.1	0.2											織機具。小型である。孔は 片方のみ確認。本質が上部 に横方向に一部遺存。

6号竪穴建物

種 国 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石 材 / 材 素 等	成 形・整 形 の 特 徴			備 考	
第73回 PL.97	1	土師器 杯(内斜口 縁)	床直 3/4	口 高 12.5 6.2		細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内面は 体部から口縁部に斜放射状のヘラミガキ。			
第73回 PL.97	2	土師器 杯(内斜口 縁)	床直 3/4	口 高 14 6.4		細砂粒/良好/赤褐	口縁部は横ナデ後斜放射状のヘラミガキ。体部から底部は 手持ちヘラ削り。内面は体部から口縁部に斜放射状のヘラ ミガキ。			
第73回 PL.97	3	土師器 杯(内斜口 縁)	覆上 2/3	口 高 13.8 5.7		細砂粒・粗砂粒/ 良好/赤褐	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半から底部は手持 ちヘラ削り。内面は体部に斜放射状のヘラミガキ。			
第73回 PL.97	4	土師器 杯(内斜口 縁)	覆上 口縁部~体部片	口 13.9		細砂粒・粗砂粒/ 良好/赤褐	口縁部は横ナデ、体部は手持ちヘラ削り。内面は体部に斜 放射状のヘラミガキ。			
第73回 PL.97	5	土師器 杯(内斜口 縁)	覆上 2/3	口 高 14.3 6.0		細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、体部は上位と中位がナデ、下位は手持 ちヘラ削り。内面は底部から体部に放射状のヘラミガキ。			
第73回 PL.97	6	土師器 杯(内湾口 縁)	覆上 2/3	口 高 14.2 5.0		細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内面は 体部から口縁部に斜放射状のヘラミガキ。			
第73回 PL.97	7	土師器 杯(内湾口 縁)	覆上 口縁部~体部片	口 13.1		細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部は横ナデ、体部は手持ちヘラ削り。内面は体部に斜 放射状のヘラミガキ。			
第73回 PL.97	8	土師器 杯(内湾口 縁)	覆上 口縁部	口 13.8		細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部は難なヘラミガキ。内面は体部から 口縁部に斜放射状のヘラミガキ。			
第73回 PL.97	9	土師器 碗	覆上 口縁部~体部片	口 14.7		細砂粒/良好/赤褐	口縁部は横ナデ、体部は上位と中位がナデ、下位は手持 ちヘラ削り。			内面に付着物 がみられる。
第74回 PL.97	10	土師器 碗(内湾口 縁)	覆上 口縁部~体部片	口 15.2		細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部は上位と中位がナデ、下位はヘラ削 り。			
第74回 PL.97	11	土師器 碗	覆上 口縁部~体部片	口 12.7 14		細砂粒/良好/赤褐	口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り、体部上位に斜放射状の ヘラミガキ。内面は体部にヘラナデ。			
第74回 PL.97	12	土師器 高杯	覆上 杯身部片	口 15.8 5.2		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	杯身部と脚部は接合か。杯部口縁部は横ナデ、体部は上位 と中位がナデ。下位はヘラ削り。			

遺物觀察表

種 国 PL.No.	種 類 種	出上位置 残 存 率	計測値	崩上)成形・調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第7484 13	土師器 高杯	覆上 脚部片	脚 8.4	粗砂粒・粗砂粒/ 良好/赤褐色	脚部は外面に放射状ヘラミガキ、内面は下半が横ナデ。上 半はヘラナデ。	
第7485 14	土師器 高杯	覆上 脚部片	脚 8.6	粗砂粒・粗砂粒/ 良好/赤褐色	脚部は外面に放射状ヘラミガキ、内面は横ナデ。	
第7486 15	土師器 高杯	覆上 脚部片		粗砂粒/良好/明赤 褐色	脚部は縦方向へラミガキ。内面はヘラナデ。	
第7487 16	土師器 鉢	覆上 口縁部~体部片	口 16.5	粗砂粒・粗砂粒/ 良好/白褐色	口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面は体部がヘラナデ。	
第7488 17	土師器 鉢	覆上 口縁部~体部片	口 14.5	粗砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐色	口縁部は横ナデ、体部はナデ。内面は体部に放射状ヘラミ ガキ。	
第7489 PL.97	土師器 壺	床直 2/4	口 16.4 底 4.2 脚 24.2 高 25.3	粗砂粒/良好/明赤 褐色	口縁部は横ナデ、脚部は上半がナデで整形痕を消している。 下半から底部はヘラ削り。内面は底部から脚部にかけてヘ ラナデ。	
第7490 PL.97	土師器 壺	覆上 口縁部~頸部	口 17.0	粗砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄褐色	口縁部は横ナデ、脚部は器面摩滅のため整形不明。内面脚 部はヘラナデ。	
第7491 PL.97	土師器 壺	覆上 口縁部~脚部片 位片	口 10.6	粗砂粒/良好/にぶ い褐色	内面脚部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、脚部はヘラ ナデ。内面脚部はヘラナデ。	
第7492 21	土師器 壺	覆上 底部~脚部下位 片	底 8.8	粗砂粒・粗砂粒/ 良好/暗赤褐色	底部と脚部はヘラ削り。器面摩滅のため単位不明。内面は 器面剥離のため不明。	
第7493 22	土師器 壺	覆上 底部~脚部下位 片	底 8.0	粗砂粒/良好/にぶ い黄褐色	底部はヘラ削り、脚部はヘラミガキ。内面は底部から脚部 にかけてヘラミガキ。	
第7494 23	土師器 壺	覆上 底部片	底 8.0	粗砂粒/良好/褐	底部はヘラ削りか、表面摩滅のため単位不明。内面は底部 がヘラナデ、脚部は横方向のヘラミガキ。	
第7495 PL.97	土師器 杯	覆上 底部片		粗砂粒・粗砂粒/ 良好/褐	底部は外面がヘラ削り。内面はヘラナデ。	内面に線刻 か?
第7496 25	土師器 壺	覆上 口縁部片		粗砂粒/良好/褐	口縁部は内外面とも横ナデ。	
第7497 26	土師器 壺	覆上 口縁部片		粗砂粒/良好/明赤 褐色	口縁部は内外面とも横ナデ。	内面に稍痕あ り。
第7498 PL.97	礫右器 磨石	完形	長幅 16.5 厚 4.9 8.2 重 972.0	粗粒輝石安山岩	右側面を削くほぼ全周に磨面が認められる。表面の中央や や上方と上端部に斜削痕が認められる。	
第7499 PL.97	石製品 鋸輪	1/2	長 幅 (2.8) (4.8) 厚 1.1 16.8	蛇紋岩	表面最もよく研磨され平滑面が形成される。表面裏面には 多方向の線条痕が多數認められる。表面の端部から体部側 面にかけては非常に滑らかで光沢がある。体部側面には は縦横方向の線条痕が多數認められる。体部側面の下端には は曲取り加工が認められ内部に細かい線条痕がある。孔径 約8 mm。	

8号堅穴建物

第7804 1	土師器 杯	覆上 口縁部~体部片	口 底 接 9.0	粗砂粒/良好/明赤 褐色	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、接下は手持ちヘラ削り。 内面は口縁部に斜削状のヘラミガキ。	
第7804 2	土師器 杯(須恵器 杯蓋模様)	床直 1/3	口 底 接 11.5	粗砂粒・粗砂粒/ 良好/褐	口縁部は横ナデ。接下から底部は手持ちヘラ削り。	
第7804 3	土師器 杯	覆上 口縁部~底部片	口 底 接 10.5	粗砂粒/良好/明赤 褐色	口縁部は横ナデ、接下から底部は斜削状ヘラミガキ。	
第7804 4	土師器 杯	覆上 2/3	口 底 接 12.2	粗砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐色	口縁部は横ナデ。接下から底部は手持ちヘラ削り。内面は 口縁部に斜放射状のヘラミガキ。	
第7804 5	土師器 杯	覆上 口縁部~底部片		粗砂粒/良好/明赤 褐色	口縁部は横ナデ、底部は器面摩滅のため整形不明。	
第7804 6	須恵器 盤	床直 底部片		粗砂粒・還元塩/黃 灰	ロクロ整形。回転は回り。底部は手持ちヘラ削り。内面 は研磨されている。	外面部に線 刻。
第7804 7	土師器 壺	床直 1/2	口 底 接 19.6 8.6 21.7	粗砂粒・粗砂粒/ 良好/明褐色	口縁部は横ナデ。脚部から底部はヘラ削り。内面は底部か ら脚部がヘラナデ。	
第7804 8	土師器 壺	床直 口縁部~脚部	口 底 接 17.2	粗砂粒・粗砂粒/ 良好/明褐色	口縁部は横ナデ。脚部はヘラ削り。内面脚部はヘラナデ。 器面剥離のため単位不明。	
第7804 9	土師器 壺	覆上 底部~脚部下位 片	底 7.5	粗砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄褐色	底部と脚部はヘラ削りか。器面摩滅のため単位不明。内面 は底部と脚部にヘラナデ。	
第7804 10	土師器 壺	床直 底部片	底 4.6	粗砂粒・粗砂粒/ 良好/オーリーブ黑	底部には木薙痕が残る。脚部はヘラ削り。内面は底部か ら脚部にかけてヘラナデ。	
第7804 11	土師器 壺	覆上 底部~脚部下位 片	底 7.0	粗砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐色	底部には横ナデ。脚部から底部はヘラ削り。内面は底部か ら脚部がヘラナデ。	
第7804 12	土師器 壺	覆上 底部~脚部下位 片	底 8.5	粗砂粒・粗砂粒/ 良好/明褐色	内面脚部に輪積み痕が残る。底部と脚部はヘラ削り。内面 は底部から脚部にかけてヘラナデ。	
第7804 13	土師器 壺	覆上 脚部~脚部下位 片	底 10.0	粗砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐色	口縁部は横ナデ。脚部から底部はヘラ削り。内面は底部か ら脚部がヘラナデ。	脚部の一部に 貼付着。
第7804 14	土師器 壺	覆上 底部	底 7.0	粗砂粒/良好/明赤 褐色	底部と脚部はヘラ削り。内面は底部から脚部にかけてヘラ ナデ。	

種 因 PL.No.	No.	種 類 器 形	出上位置 残 有 率	計測値	胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第78回 PL.98	15	土師器 甕	覆上 底部～胴部下位 片		細砂粒・粗砂粒/ 良好に/赤褐色	内面は黒色処理か。外面胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第78回 PL.98	16	土製品 瓦玉	床下 完形	長: 2.75 幅: 1.5 孔: 0.2	厚: 1.9 重: 8.3	夾雑物無/良好/灰 黄	外面はナデ。
第78回 PL.98	17	石製品 石製模造品 (刷形)	床下 完形	長: 5.5 幅: 2.3	厚: 0.5 重: 8.3	滑石	灰色。表面には竜の表現があり斜め方向の擦痕が数多く認められる。裏面は2つの面で構成され竜方向の擦痕が主体的である。孔径約1mm。

15号堅穴建物

第80回 PL.98	1	土師器 杯(内斜口 縁)	床直 口縁部一部欠 高	口: 13.7 高: 5.7	細砂粒/良好/明赤 褐色	口縁部は上半が横ナデ、下半はナデ。体部から底部は手持ちヘラ削り。内面は体部に斜放射状のヘラミガキ。		
第80回 PL.98	2	土師器 杯(内斜口 縁)	覆上 3/4	口: 13.7 高: 6.3	細砂粒・粗砂粒/ 良好に/赤褐色	口縁部は横ナデ。体部はナデ。底部は手持ちヘラ削り。内面は体部に斜放射状のヘラミガキ。		
第80回 PL.98	3	土師器 杯(内斜口 縁)	床直 1/3	口: 12.0 高: 5.7	細砂粒・粗砂粒/ 良好に/赤褐色	口縁部は横ナデ。体部はナデ。底部は手持ちヘラ削り。内面は体部に斜放射状のヘラミガキ。		
第80回 PL.98	4	土師器 杯(内湾口 縁)	床直 口縁部一部欠 高	口: 13.5 高: 14.0	細砂粒/良好/明赤 褐色	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ちヘラ削り。内面は内面底部に煤が付着。		
第80回 PL.98	5	土師器 杯(内湾口 縁)	床直 口縁部～体部片 高	口: 13.0 最: 13.6	細砂粒/良好/褐	口縁部は横ナデ。体部は手持ちヘラ削り。内面は体部に斜放射状のヘラミガキ。		
第80回 PL.98	6	土師器 杯	床直 口縁部片		細砂粒/良好/明赤 褐色	口縁部は横ナデ。体部は横方向のヘラミガキ。内面にも斜放射状のヘラミガキ。単位不鮮明。		
第80回 PL.98	7	土師器 鉢	床直 完形	口: 12.4 高: 6.8	細砂粒/良好/赤褐色	口縁部上半は横ナデ。下半はナデ。体部から底部は手持ちヘラ削り。内面は底部から体部に放射状のヘラミガキ。		
第80回 PL.98	8	土師器 鉢	床直 完形	口: 13.0 最: 12.3	細砂粒/良好に/赤 褐色	口縁部から頭部は横ナデ。体部上位は緩方向のヘラミガキ。内面も斜放射状のヘラミガキ。単位不鮮明。体部中位から底部はヘラ削り。内面は底部から体部にヘラナデ。		
第80回 PL.98	9	土師器 小型甕	覆上 口縁部一部欠 軸	口: 7.0 軸: 9.4	細砂粒・粗砂粒/ 良好に/明赤褐色	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ。胴部上半はナデ後斜放射状ヘラミガキ。胴部下半から底部はヘラ削り。内面は口縁部がヘラミガキ。底部から胴部はヘラナデ。		
第80回 PL.99	10	土師器 甕	床直 胴部一部欠 軸	口: 12.7 最: 13.0	細砂粒・粗砂粒/ 良好・好/赤褐色 赤	口縁部は横ナデ。胴部は器面摩滅のため整形不明。底部はヘラ削りか。内面は底部から胴部にヘラナデ。		
第81回 PL.99	11	土師器 小型甕	床直 口縁部1/2欠 軸	口: 10.8 高: 11.9	細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐色	口縁部は横ナデ。胴部は器面摩滅のため整形不明。底部はヘラ削りか。内面は底部から胴部にヘラナデ。		
第81回 PL.99	12	土師器 小型甕	床直 2/3	口: 14.2 底: 5.4	細砂粒・粗砂粒/ 良好/赤褐色	口縁部から頭部は横ナデ。胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。器面摩滅のため単位不明。		
第81回 PL.99	13	土師器 小型甕	床直 1/3	口: 15.0 底: 5.3	細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐色	口縁部は横ナデ。胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。		
第81回 PL.99	14	土師器 小型甕	床直 ほぼ完形	口: 16.0 高: 17.2	細砂粒・粗砂粒/ 良好/赤褐色	口縁部は横ナデ。胴部は器面摩滅のため整形不鮮明であるが、頭部にヘラミガキ。中位にヘラナデが残る。底部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。底部から胴部下位は器面摩滅のため単位不明。		
第81回 PL.99	15	土師器 甕	床直 口縁部～胴部 1/3	口: 17.6 軸: 22.6	細砂粒・粗砂粒/ 良好に/赤褐色	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ。胴部上半は輪積み痕をナデ消している。下半上部はヘラナデ。下半下部はヘラ削り。内面はヘラナデ。下半は器面摩滅のため単位不明。		
第81回 PL.99	16	土師器 甕	覆上 底部～胴部下 底	底: 5.5	細砂粒・粗砂粒/ 良好に/赤褐色	底面と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部がヘラナデ。器面摩滅のため単位不明。外面部上半と内面部底部から胴部下位に保たれてる。		
第81回 PL.100	17	土師器 甕	床直 底部欠損	口: 11.8	細砂粒・粗砂粒/ 良好/赤褐色	口縁部から胴部上半はハケメか。下半は器面摩滅のため整形不明。内面はヘラナデ。一部に木口の木目が残る。底部に10×8mmほどの小孔が4孔確認。		
第81回 PL.100	18	土師器 甕	床直 口縁部1/2欠損	口: 17.4 底: 7.5	孔: 5.8 高: 15.7	細砂粒・粗砂粒/ 良好に/赤褐色	口縁部は横ナデ。胴部は上半が木口の残るヘラナデ。下半はナデ。内面は胴部にヘラナデ。	
種 因 PL.No.	No.	種 類 器 形	出上位置	計測値	胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第00008 PL.99	19	謙・刀子・ 素材?	貯藏穴南床面	4.5 4.5 1.2 0.2			刀子・謙に形態上近いが、明瞭な刃が認められない。素材の可能性がある。	

1号堅穴状構造

種 因 PL.No.	No.	種 類 器 形	出上位置 残 有 率	計測値	胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第83回 PL.98	1	土師器 杯(内斜口 縁)	覆上 口縁部～体部片	口: 16.9	細砂粒/良好/明赤 褐色	口縁部は横ナデ。体部はナデ。内面は体部に放射状ヘラミガキ。	
第83回 PL.98	2	須恵器 杯	口縁部片		細砂粒/粗砂粒/ 良好に/赤褐色	ロクロ整形。回転方向不明。	8世紀後半～9世紀前半
第83回 PL.98	3	土師器 高杯	覆上 脚部上半片		細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐色	残存部上端は杯部との接合面、上端部付近はナデ。その下位は緩方向ヘラミガキ。内面はヘラナデ。	

遺物觀察表

種 団 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎工成形/色調 石 材 / 紙 纹 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第8384 PL.100	4	土師器 鉢	覆上 口縁部1/2	口 9.2	細砂粒/良好/赤褐色	口縁部は内外面とも斜放射状へラミガキ。	
第8385 PL.100	5	須恵器 鉢	口縁部片	口 8.8	細砂粒/選元燒/黒褐色	クロロ整形、回転は右回りか。内面に厚く岡灰が付着。口縁部は外側に削ぎ、凹みをもつ面をぐる。	
第8386 PL.100	6	土師器 甕	覆上 口縁部片	口 17.5	細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐色	内面頭部に輪積み筋が残る。口縁部から強部は横ナデ。内面は頭部がヘラナデ。	
第8387 PL.100	7	土師器 甕	覆上 底部~胴部下位 片	底 6.9	細砂粒・粗砂粒/ 良好/赤褐色	底部はヘラ削り、胴部はナデ。内面は底部から胴部にかけ てヘラナデ。	

2号竪穴状遺構

第8488 PL.100	1	土師器 杯(内斜口 縁)	覆上 3/4	口 13.5 高 5.6	細砂粒/良好/赤褐色	体部上半から口縁部は斜放射状のヘラミガキ、体部下半か ら底部は手持ちヘラ削り。内面は底部から内斜口縁部手前 まで斜放射状のヘラミガキ。	
第8489 PL.100	2	土師器 鉢	覆上 口縁部一部欠	口 13.4 底 5.7	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい赤褐色	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半はヘラナデ、底 部は器面摩滅のため不明。内面は底部から口縁部にヘラ ナデ。	
第8490 PL.101	3	土師器 壺	床直 1/2	口 13.5 底 11.0	粗砂粒・粗砂粒/ 輝/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部は上半がナデ、下半から胴部にかけて ヘラ削り。内面は底部から胴部にかけてヘラナデ、底部から胴 部下半は器面摩滅のため単位不明。	
第8491 PL.101	4	土師器 甕	床直 底部~胴部下位	底 7.0	細砂粒・粗砂粒/ 良好/黒褐色	底部はヘラ削り、胴部は器面摩滅のため整形不鮮明である が、一部にハケメが残る。内面は底部から胴部にヘラナデ、 器面摩滅のため単位不明。	
第8492 PL.101	5	土師器 甕	床直 底部~胴部下位	底 8.6	細砂粒・粗砂粒/ 良好/赤褐色	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にかけてヘラ ナデ。	
第8493 PL.101	6	土師器 甕	床直 底部~胴部下位	底 7.6	細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐色	胴部は縱方向へのヘラ削り。内面は底部付近が横方向のヘラ 削り。胴部はヘラナデ。	

1号墳

第102回 PL.101	1	ガラス ガラス玉	完形	長 幅 0.8 0.8	厚 重 0.7 0.7	引き伸ばし法で植物灰タイプのソーダガラスと想定。	孔径0.2
第102回 PL.101	2	ガラス ガラス玉	完形	長 幅 0.8 0.7	厚 重 0.5 0.3	引き伸ばし法で植物灰タイプのソーダガラスと想定。	孔径0.2
第102回 PL.101	3	ガラス ガラス玉	完形	長 幅 0.6 0.5	厚 重 0.6 0.2	引き伸ばし法でプロトン主体タイプのソーダガラスと想 定。	孔径0.2
第102回 PL.101	4	ガラス ガラス玉	完形	長 幅 0.4 0.4	厚 重 0.4 0.1	説明法でソーダガラスとカリガラスが混和された材質であ る。	孔径0.1
第102回 PL.101	5	土製品 小玉	完形	様 0.75 高 0.68	孔 重 0.2 0.4	外面はナデ、漆塗り一部使用時の剥落が見られる。	

種 団 PL.No.	細別器種	出土位置	法量										観察内容					
			①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪					
第102回 PL.101	6	鍛打環	石室内一括	2.65	2.35	0.5	0.5							鍛打目環。				
第102回 PL.101	7	纏茎(木質・ 樹皮付着)	石室内一括	3.4+										纏茎に籠竹の木質が被せられ、その上から樹皮巻が良 く残る。				
第102回 PL.101	8	纏・工具頭・ 茎片	石室内一括	2.2+					1.15+	1.0	0.5	1.0	0.5	1.05+	0.7	0.4		
第102回 PL.101	9	纏頭片	石室内一括	2.1+					2.0+	0.6	0.3	0.7	0.3	0.1+	0.5	(0.2)		
第102回 PL.101	10	纏頭片	石室内一括	2.1+					2.1+	0.7	0.4	0.75	0.4			長頭纏頭部。		
第102回 PL.101	11	纏頭片	石室内一括	2.6+					2.6+	0.5	0.4					纏頭片。		
第102回 PL.101	12	纏茎片	石室内一括	2.2+											2.2+	0.5	0.3+	纏茎片。
第102回 PL.101	13	纏茎片	石室内一括	1.4+											1.4+	0.3	0.2	纏茎片。
第102回 PL.101	14	刀子・素材 片?	石室内一括	2.9+	1.3+	1.6+	0.2	1.6+	1.2	0.2								刀子か?あるいは素材鉄板か? か?。上は直線状、下は間状になっている。上部はや や尖っている。
第102回 PL.101	15	刀子葉片	石室内一括	2.9+					2.9+	1.3	0.25							刀子か刀の葉片。目釘孔 0.4cm。
第102回 PL.101	16	刀子・葉片	石室内一括	1.6+						1.6+	1.4+	0.2+						おそらく刀の葉片と推定。目 釘孔の痕跡あり。径0.4cm。
第102回 PL.101	17	直刀刃部 片?	石室内一括	2.4+	2.4+	2.0+	0.3+											直刀刃部か?
第102回 PL.101	18	纏茎片	石室内一括	3.4+														纏茎片。
第102回 PL.101	19	纏・茎片 片?	石室内一括	1.6+	0.15	0.1												斜状工具片と推定。

種 因 PL. No.	No.	細別器種	出土位置	法量										観察内容		
				①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩			
第1028 PL. 101	20	縫・針筆 片?	石室内一括	2.1+	0.2	0.2									針状工具片と推定。	
第1028 PL. 101	21	鐵片	石室内一括	1.9+	0.3+	0.2									不明鉄片。	
第1028 PL. 101	22	屈曲鉄錠棒 品	石室内一括	3.3+	0.3	0.2									先端が屈曲してフック状に なっている屈棒状品。	
第1028 PL. 101	23	釘茎片	石室内一括	3.4+									1.8+	0.4	0.2	釘茎片。
第1028 PL. 101	24	フック状金 具	石室内一括	19.4+	9.6	0.7	0.3	9.5+	0.8	0.4						フック状鉄製品。先端部は 1mmと薄く、だんだんと厚 くなり、柄部付近は4mmと 厚くなる。フック部は2mm と厚みがある。柄部の幅広 部分に対して、フック部の 幅広部分は、90°回転する。 ものを引っ掛けるのに都合 が良いような形を取ったの であろう。
種 因 PL. No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎上/焼成/色調 石材・素材等			成 形・整 形 の 特 徴					備 考	
第1038 PL. 102	25	須恵器 杯身	口縁部～体部小 片	口 縁	13.4		細砂粒・還元焰/暗 黄灰			ロクロ整形。体部下半は回転ヘラ削り。口縁部は内縮する。						
第1038 PL. 102	26	須恵器 壺	口縁部～脚部片	口 縁	10.8		細砂粒・還元焰/黄 灰			ロクロ整形。回転は右回り。脚部下半は回転ヘラ削り。						
第1038 PL. 102	27	須恵器 短颈壺	底部～脚部片	脚 部	16.3		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰			ロクロ整形。回転右回り。底部から脚部下半はカキメ、 脚部上位に波状文が巡る。颈部に1条の円窓が巡る。						
第1038 PL. 102	28	須恵器 高杯	脚部片	脚 部	11.9		細砂粒・還元焰/灰 黄			ロクロ整形。回転右回りか。脚部上半に四角形の透孔。3 力所か。内部まで還元していない。						
第1038 PL. 102	29	須恵器 高杯	脚部片				細砂粒・鉱化培 み/黄灰			ロクロ整形か。上端部に杯身部との接合面がみられる。残 存部内側は透孔の端部。						
第1038 PL. 102	30	須恵器 長頸瓶	底部～脚部片	底 台	11.3	胸	18.4	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/暗灰黄		ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転ヘラ削り、脚部は円錐によって区画した内部を制 限文が巡る。高台は附着。						
第1038 PL. 102	31	須恵器 長頸瓶	底部片	底 台	8.4		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰			ロクロ整形。回転は右回りか。底部はヘラナデ、高台は貼 付。脚部を打ち欠き使用のための調整を行っている。						
第1038 PL. 102	32	須恵器 壺	底部～頭部	頭 部	9.8		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰黄			底面から脚部下半は叩き締めて成形、外面に平行叩き、 内部にはテヌイ痕が残る。脚部上半はロクロ整形。頭部は回 転ヘラ削り。						
第1038 PL. 102	33	土師器 鉢	底部片				細砂粒・粗砂粒/ 良好/明褐色			外面は手持ちヘラ削り、内面はヘラナデ。内面に煤が付着。						
第1038 PL. 102	34	須恵器 瓶	脚部片				細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/黑			ロクロ整形。回転右回りか。脚部外側はカキメ。					横瓶または提 瓶。	
第1038 PL. 102	35	須恵器 壺	頭部片				細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/黄灰			ロクロ整形。頭部外面に波状文が2段施されている。						
第1038 PL. 102	36	須恵器 壺	脚部上位片				細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰			ロクロ整形、回転方向不明。脚部上位に2条の凹線が巡る。						
第1038 PL. 102	37	須恵器 壺	口縁部下半小片				細砂粒・還元焰/褐 灰			ロクロ整形。外面に2条の凹線、その上位に波状文が巡る。 内面には陥れ痕が付着。						
第1038 PL. 102	38	須恵器 壺	口縁部下半～脚 部上位片				細砂粒・還元焰/黄 灰			脚部は平行叩き痕が残る。口縁部は2～3条の凹線、その 上位に波状文が巡る。						
第1038 PL. 102	39	須恵器 壺	脚部上位片				細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/黑			ロクロ整形。回転方向不明。脚部内面に輪積み痕が残る。					提瓶か。	
第1048 PL. 40	40	須恵器 壺	脚部片				細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰			脚部は外側に平行叩き痕、内面に同心円状アテ貝痕が残る。						
第1048 PL. 41	41	須恵器 壺	脚部片				細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰			脚部は外側に平行叩き痕、内面に同心円状アテ貝痕が残る。						
第1048 PL. 42	42	須恵器 壺	脚部片				細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰			脚部は外側に平行叩き痕、内面に同心円状アテ貝痕が残る。						
第1058 PL. 43	43	須恵器 壺	脚部上位～底部 脚部片				細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰			脚部と脚部の接合状態は不明。頭部はヘラナデ。脚部は外 側に平行叩き痕、内面に同心円状アテ貝痕が残る。						
第1058 PL. 44	44	須恵器 壺	脚部片				細砂粒・還元焰/黄 灰			脚部は外側に平行叩き痕、内面に同心円状アテ貝痕が残る。						
第1058 PL. 45	45	須恵器 壺	脚部片				細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/暗灰			脚部は外側に平行叩き痕、内面に同心円状アテ貝痕が残る。						

遺物觀察表

種 国 PL.No.	器 種	出上位置 残 存 率	計測値			突 带 間 長	断面形	透孔形状 縦×横	ハケメ	胎上／焼成 色調	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
			口 底	高	幅							
第106回 PL.103	46 円筒埴輪 円筒形	2/3	19.2 11.8	高 33.8	① 14.0 ② 9.8 ③ 8.0	① M 1 ② M 1	円 円	4.6 4.8	外 内	18 A類	胎帶は貼付、突帶とその上下はナデ。外面は縱方向ハケメ、内部は縱方向ハケメ後段以下に縱方向ナデ。口縁部は内外とも横ナデ。	内部第3段に「」の線刻。
第106回 PL.103	47 円筒埴輪 円筒形	1/2	21.4 6.2	高 35.0	① 14.0 ② 12.0 ③ 9.0	① M 3 ② M 2	円 円		外 B類	12	胎帶は貼付、突帶とその上下はナデ。外面は縱方向ハケメ、内部は斜め方向ハケメ、第2段から第1段上半が縱方向ナデ、下半が横方向ナデ。口縁部は内外とも横ナデ。	
第106回 PL.103	48 円筒埴輪 円筒形	2/3	12.3 9.6	高 34.2	① 18.3 ② 8.6 ③ 18.3	① M 1 ② M 1	円 円	4.7 4.1	外 内	6 C類	胎帶は貼付、胎帶とその上下はナデ。外面は縱方向ハケメ、内部は斜め方向ハケメ、横方向ナデ。口縁部は横ナデ。	
第106回 PL.103	49 円筒埴輪 円筒形	ほぼ完形	17.3 12.1	高 35.3	① 16.2 ② 10.7 ③ 8.6	① 台 1 ② M 1	円 円	5.2 4.7	外 内	7 C類	胎帶は貼付、胎帶とその上下はナデ。外面は縱方向ハケメ、内部は斜め方向ナデ。口縁部は横ナデ。	
第106回 PL.103	50 円筒埴輪 円筒形	4/5	22.3 12.1	高 34.6	① 17.2 ② 9.8 ③ 7.6	① 三角 ② 三角	槽 円	5.4 4.5	外 内	6 C類	胎帶は貼付、胎帶とその上下はナデ。外面は縱方向ハケメ、内部は縱方向ハケメ後端ナデ。口縁部は横ナデ。	
第106回 PL.103	51 円筒埴輪 円筒形	ほぼ完形	20.5 11.0	高 30.6	① 16.6 ② 8.2 ③ 4.3	① 台 1 ② M 1	円 円	4.6 5.1	外 内	5 C類	胎帶は貼付、胎帶とその上下はナデ。外面は縱方向ハケメ、第1段下半は縱方向ナデ。内部は第3段上半が斜め方向ナデ、下半が横方向ナデ。口縁部は横ナデ。	
第107回 PL.103	52 円筒埴輪 円筒形	第1段～ 第3段片	口 底	高	① 8.8 ② 8.8 ③ 4.3	① M 1 ② M 3	円 円	5.8 5.3	外 A類	15	胎帶は貼付、胎帶とその上下はナデ。外面は縱方向ハケメ、内部はナデ。	
第107回 PL.103	53 円筒埴輪 円筒形	第1段片	口 底	高	① 8.8 ② 8.8 ③ 4.3	① M 1 ② M 3	円 円	5.8 5.3	外 A類	17	胎帶は貼付、胎帶とその上下はナデ。外面は縱方向ハケメ、内部はナデ。	
第107回 PL.103	54 円筒埴輪 円筒形	第2段～ 第3段片	第2 突 帶 存 底	20.8	高	① 20.8 ② 8.8 ③ 6.0	① M 3		外 A類	16	胎帶は貼付、胎帶とその上下はナデ。外面は縱方向ハケメ、内部はナデ。	
第107回 PL.104	55 円筒埴輪 円筒形	第2段	口 底	10.5	高	① 8.8 ② 8.8 ③ 4.3	① M 3		外 A類	16	胎帶は貼付、胎帶とその上下はナデ。外面は縱方向ハケメ、内部はナデ。	器壁の厚さが一定ではない。
第107回 PL.104	56 円筒埴輪 円筒形	第1段片	口 底	10.0	高	① 8.8 ② 8.8 ③ 4.3	① M 3		外 A類	15	胎帶は貼付、胎帶とその上下はナデ。外面は縱方向ハケメ、内部はナデ。	
第107回 PL.104	57 円筒埴輪 円筒形		口 底	高	① 8.8 ② 8.8 ③ 4.3	① M 3		上 下 A類	18	胎帶は貼付、胎帶とその上下はナデ。外面は縱方向ハケメ、内部はナデ。		
第107回 PL.104	58 円筒埴輪 円筒形	第3段片	口 底	20.0	高	① 8.8 ② 8.8 ③ 4.3	① M 3		内 A類	14	胎帶は貼付、胎帶とその上下はナデ。外面は縱方向ハケメ、内部はナデ。	外面口縁部に「」の線刻。
第107回 PL.104	59 円筒埴輪 円筒形	第2段～ 第3段片	口 底	18.2	高	① 8.8 ② 8.8 ③ 6.0	① M 2 ② M 2	円 円	外 B類	12	胎帶は貼付、胎帶とその上下はナデ。外面は縱方向ハケメ、内部は縱方向ナデ。口縁部は内外とも横ナデ。	
第108回 PL.104	60 円筒埴輪 円筒形	第3段片	口 底	18.2	高	① 8.8 ② 8.8 ③ 6.0	① M 2 ② M 2	円 円	外 B類	12	胎帶は貼付、胎帶とその上下はナデ。外面は縱方向ハケメ、内部は縱方向ナデ。口縁部は内外とも横ナデ。	
第108回 PL.104	61 円筒埴輪 円筒形	第3段～ 第2段片	口 底	23.8	高	① 8.8 ② 8.8 ③ 6.5	① 三角 ② 三角		外 B類	12 8	胎帶は貼付、胎帶とその上下はナデ。外面は縱方向ハケメ、内部は縱方向ナデ。	突帶が下の種がほどんど形作られていないが、下面に雍み有り。
第108回 PL.104	62 円筒埴輪 円筒形	第1突 帶 付近片	第1 怪 底	15.8	高	① 8.8 ② 8.8 ③ 7.7	① M 2 ② M 2		外 B類	12	胎帶は貼付、胎帶とその上下はナデ。外面は縱方向ハケメ、内部は纵方向ナデ。	
第108回 PL.104	63 円筒埴輪 円筒形	第1段～ 口縁部片	口 底	20.0	高	① 8.8 ② 8.8 ③ 7.7	① M 2 ② M 2	円 円	外 B類	11	胎帶は貼付、胎帶とその上下はナデ。外面は縱方向ハケメ、内部は纵方向ナデ。	
第108回 PL.104	64 円筒埴輪 円筒形	第2段～ 第3段	口 底	19.3	高	① 8.8 ② 8.8 ③ 7.2	① M 1 ② M 1		外 B類	11	胎帶は貼付、胎帶とその上下はナデ。外面は縱方向ハケメ、内部は纵方向ナデ。	

補 図 PL.No.	種 類 器 類	出上位置 残 存 率	計測値			突部 寸 間 長	断面形 状	透孔形状 縦×横	ハケメ	胎上/焼成/ 色調	成 形・整 形 の 特 徴	備 考		
			口	底	高									
第108回 PL.104	65 圓筒埴輪 円筒形	第1段下 半欠	12.0	高	① ② ③	① ② ③	外 内	II B類	織砂粒・粗砂 粒/良好/相	外面は縱方向ハケメ、内部は底部周 囲が横方向へ削り、その上位は縱 方向ナ。				
第108回 PL.104	66 圓筒埴輪 円筒形	第2段~ 第3段片	口	底	高	① ② ③	① ② ③	M 2 円	梢 4.0 3.5	外 内	II B類	突帶は貼付、突帶とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ、内部は縱方向 ナ。		
第108回 PL.104	67 圓筒埴輪 円筒形	第1段~ 2段片	口	底	20.0	高	① ② ③	① ② ③	M 2 梢 円	外 内	10 B類	突帶は貼付、突帶とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ、内部は斜め方 向ハケメ。外面口部から内部口縁 部は横ナ。		
第108回 PL.104	68 圓筒埴輪 円筒形	口縁部	口	底	19.1	高	① ② ③	① ② ③	M 1 円	内	10 B類	突帶は貼付、突帶とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ、内部は横方向 から斜め方向ハケメ。口縁部は内外 とも横ナ。	第3段に 線刻。	
第108回 PL.104	69 圓筒埴輪 円筒形	第3段片	口	底	18.2	高	① ② ③	① ② ③	外	9 B類	織砂粒・粗砂 粒/良好/明赤 褐	外面は縱方向ハケメ、内部は横方向 ハケメ。口縁部は内外とも横ナ。		
第108回 PL.105	70 圓筒埴輪 円筒形	破片	口	底	高	① ② ③	① ② ③	外	9 B類	織砂粒・粗砂 粒・躍/良好/ 明赤褐	外面は縱方向ハケメ、内部はナデ。	外面に線 刻。		
第108回 PL.105	71 圓筒埴輪 円筒形	第3段片	口	底	高	① ② ③	① ②	外	8 B類	織砂粒・粗砂 粒/良好/明赤 褐	外面は縱方向ハケメ、底部付近は縱 方向ナ。内部は縱方向ナ。			
第108回 PL.105	72 圓筒埴輪 円筒形	破片	口	底	高	① ② ③	① ②	表	9 B類	詳細不明。表面は残存部の上2/3まで が縱方向ハケメ、その下位は状況に 残している。ハケメ部分はX字形に 円錐を線刻。内部は斜め方向ハケメ。				
第108回 PL.105	73 圓筒埴輪 円筒形	第3段片	口	底	20.2	高	① ② ③	① ②	M 1	外	9 B類	突帶は貼付、突帶とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ、内部は斜め方 向と縱方向ハケメ。口縁部は内外面 とも横ナ。		
第108回 PL.105	74 圓筒埴輪 円筒形	第3段~ 第2段下 位	口	底	10.5	高	① ② ③	13.5 ① ② ③	M 2 円	外	9 B類	突帶は貼付、突帶とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ、第3段下半は 縱方向ナ。内部は横方向ナ。一部に 横方向ハケメが残る。		
第108回 PL.105	75 圓筒埴輪 円筒形	第2段片	口	底	高	① ② ③	① ② ③	M 1	円	外	9 B類	突帶は貼付、突帶とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ。内部はハケメ が微かに残るが、大部分は縱方向ナ。		
第108回 PL.105	76 圓筒埴輪 円筒形	第1段片	口	底	13.6	高	① ② ③	① ② ③	M 1	外	9 B類	外面は縱方向ハケメ、内部は縱方向 ナデ。底部付近は横方向ナ。		
第108回 PL.105	77 圓筒埴輪 円筒形	第1段~ 2段片	口	底	12.2	高	① ② ③	15.5 ① ② ③	台3 円	5.0	外	9 B類	突帶は貼付、突帶とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ、内部は縱方向 ナケメ後大部分がナデ消され一部が 残る。	
第110回 PL.105	78 圓筒埴輪 円筒形	第1段下 半欠	口	底	20.4	高	① ② ③	9.2 6.6	M 1 M 1	5.2 5.0	外	7 C類	突帶は貼付、突帶とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ、内部は横方向 から上位は斜め方向ハケメ。第2段 下位は横・斜め方向ナ。	
第110回 PL.105	79 圓筒埴輪 円筒形	第3段片	口	底	22.6	高	① ② ③	6.0	① ② ③	三角	外 内	7 C類	突帶は貼付、突帶とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ、内部は斜め方 向ハケメ。口縁部は内外とも横ナ。	
第110回 PL.105	80 圓筒埴輪 円筒形	第3段片	口	底	20.6	高	① ② ③	8.8	① ② ③	台3	内	7 C類	突帶は貼付、突帶とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ、内部は斜め方 向ハケメ。口縁部は内外とも横ナ。	89・95は 同一か。
第110回 PL.105	81 圓筒埴輪 円筒形	口縁部	口	底	22.6	高	① ② ③	7.0	M		外	7 C類	口縁と突帶の間隔が4.0cmと狭いこと から朝彌形の可能性有。突帶は貼付、 突帶とその上下はナデ。外面は縱方 向ハケメ、内部は斜め方向ハケメ、その 下位は斜め方向ナ。	
第110回 PL.105	82 圓筒埴輪 円筒形	第3段~ 第2段上 半	口	底	19.6	高	① ② ③	7.4	① ② ③	三角	外 内	7 C類	突帶は貼付、突帶とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ。内部は斜め方 向ナ。内部は斜め方向ナ。	第3段に 「×」の線 刻。
第110回 PL.106	83 圓筒埴輪 円筒形	第3段~ 第2段突 片	口	底	21.4	高	① ② ③	9.7	① ② ③	三角	外 内	7 C類	突帶は貼付、突帶とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ。内部は斜め方 向から横方向ハケメ且後一部分が消 されている。	
第110回 PL.106	84 圓筒埴輪 円筒形	突 底 底	突 底 底	底	17.8	高	① ② ③	台1	円		外	7 C類	突帶は貼付、突帶とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ、内部は縱方向 ナ。	

遺物觀察表

種 国 PL.No.	器 類 種	出上位置 残 量	計測値			突部 寸間長	断面形	透孔形状 縦×横	ハケメ	脂上/焼成/ 色調	成形・整形の特徴	備 考	
			口 底	高	(1) (2) (3)								
第1108 PL.106	85 円筒埴輪 円筒形	第3段片	口 底	10.0	高	(1) (2) (3)	(1) (2) (3)		外 C類 いぬ いぬ	磁砂粒・粗砂 粒/良好/にぶ いぬ	外面は縱方向ハケメ、内面は縱方向 ナデ。		
第1108 PL.106	86 円筒埴輪 円筒形	第1段～ 第2段片	口 底	21.7	高	(1) (2) (3)	8.6	(1) (2) (3)	内 C類 いぬ いぬ	4.6 4.4	外 C類 いぬ いぬ	外面は粘付、突帶とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ、口縁部は横ナ デ。内面は縱方向ハケメ後に縱方向 ナデ。	外面第3 段に「×」 の線刻。
第1108 PL.106	87 円筒埴輪 円筒形	第3段片～ 第1段上半	口 底	21.5	高	(1) (2) (3)	8.8 5.9	(1) (2) (3)	M1 台	5.0 4.3	外 C類 いぬ いぬ	突帶は粘付、突帶とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ、口縁部は横ナ デ。内面は第2段より上位が斜めか ら縱方向ハケメ、下位は縱方向ナデ、 口縁部は横ナデ。	内面第3 段に「×」 の線刻。
第1108 PL.106	88 円筒埴輪 円筒形	第1段大 半矢	口 底	18.7	高	(1) (2) (3)	9.5 8.2	(1) (2) (3)	台2 M1 口	4.4 4.3	外 C類 いぬ いぬ	突帶は粘付、突帶とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ、内面は縱方向 ナデ。口縁部は内外とも横ナデ。	外面第2 段の透孔 左に線刻。
第1108 PL.106	89 円筒埴輪 円筒形	第2段中 位～口縁 部片	口 底	21.0	高	(1) (2) (3)	8.2	(1) (2) (3)	三角		外 C類 いぬ いぬ	突帶は粘付、突帶とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ、内面は第1段 位から縱方向ハケメ。下位は縱方向 ナデ。	80・95は 同一か。
第1108 PL.106	90 円筒埴輪 円筒形	第2段中 位～口縁 部片	口 底	20.0	高	(1) (2) (3)	8.6	(1) (2) (3)	M1 ~三 角		外 C類 いぬ いぬ	突帶は粘付、突帶とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ。内面は第3段 が斜め方向、第2段が縱方向ハ ケメ。口縁部は内外とも横ナデ。	
第1108 PL.106	91 円筒埴輪 円筒形	口縁部片	口 底	22.0	高	(1) (2) (3)		(1) (2) (3)			外 C類 いぬ いぬ	突帶は粘付、突帶とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ、内面は明赤 方向ハケメ。	
第1108 PL.106	92 円筒埴輪 円筒形	第1段～ 第2段片	口 底	20.3	高	(1) (2) (3)	4.6	(1) (2) (3)	M1 口		外 C類 いぬ いぬ	突帶は粘付、突帶とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ、内面は斜め方 向、その下位は横ナデ。口縁部は横ナ デ。	
第1108 PL.106	93 円筒埴輪 円筒形	第1段～ 第2段	口 底	10.5	高	(1) (2) (3)	15.3	(1) (2) (3)	三角	5.6	外 C類 いぬ いぬ	突帶は粘付、突帶とその上下はナデ。 底部付近は粘土が剥離されてい る。外は縱方向ハケメ後第1段下 半はナデ。内面は縱方向ハケメ。	
第1108 PL.106	94 円筒埴輪 円筒形	第1段～ 第3段	口 底	10.5	高	(1) (2) (3)	18.9	(1) (2) (3)	M1 台1 口		外 C類 いぬ いぬ	突帶は粘付、突帶とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ、内面は縱方向 と斜め方向ハケメ後ナデ。透孔の周 りにハゲが残る。	
第1111 PL.107	95 円筒埴輪 円筒形	第1段～ 第1突帶 片	口 底	11.6	高	(1) (2) (3)	17.4	(1) (2) (3)	台2		外 C類 いぬ いぬ	突帶は粘付、突帶とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ、内面は縱方向 ハケメ後ハケメが残る程度のナデ。	80・89は 同一か。
第1111 PL.107	96 円筒埴輪 円筒形	第1段片	口 底	11.4	高	(1) (2) (3)		(1) (2) (3)			外 C類 いぬ いぬ	突帶は粘付、粘付とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ、内面は縱方向 ナデ。底部分は横方向ナデ。器面 摩損のため単位不鮮明。	
第1111 PL.107	97 円筒埴輪 円筒形	第1突帶 ～第2段 径底	第1 突帶 ～第2段 径底	16.5	高	(1) (2) (3)		(1) (2) (3)		4.6 5.1	外 C類 いぬ いぬ	突帶は粘付、突帶とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ、内面は縱方向 ナデ。上半が斜め方向ハケメ、その下位は 縱方向ハケメ後に縱方向ナデ。	98と同一 か。
第1111 PL.107	98 円筒埴輪 円筒形	第1突帶 ～第2突 帶	第2 突帶 ～第2突 帶	19.2	高	(1) (2) (3)	9.2	(1) (2) (3)	歪 んだ 円	4.7 4.6	外 C類 いぬ いぬ	突帶は粘付、突帶とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ、内面は縱方向 ハケメ後一部に縱方向ナデ。	97と同一 か。
第1111 PL.107	99 円筒埴輪 円筒形	第2段～ 第3段片	第2 突帶 ～第3段 底	18.0	高	(1) (2) (3)		(1) (2) (3)	M2 口	5.2	外 C類 いぬ いぬ	突帶は粘付、粘付とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ、内面は縱方向 ハケメ後ナデ。	
第1111 PL.107	100 円筒埴輪 円筒形	第1突帶 ～第2段 下位片	第2 突帶 ～第3段 底	17.4	高	(1) (2) (3)		(1) (2) (3)	M1 口		外 C類 いぬ いぬ	突帶は粘付、突帶とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ、内面は縱方向 ハケメ。	
第1111 PL.107	101 円筒埴輪 円筒形	第2段上 位～第3段 下位片	第3 突帶 ～第3段 底	26.2	高	(1) (2) (3)		(1) (2) (3)	M1 口		外 C類 いぬ いぬ	突帶は粘付、突帶とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ、内面は縱方向 ハケメ。	
第1111 PL.107	102 円筒埴輪 円筒形	第1段～ 第1突帶 片	口 底		高	(1) (2) (3)		(1) (2) (3)	台2		外 C類 いぬ いぬ	突帶は粘付、突帶とその上下はナデ。 外面は縱方向ハケメ、第1段下半は 縱方向ナデ。内面は縱方向ナデ。	

捕 図 PL.No.	種 類 器 種	出上位置 残 存 率	計測値			突 带 段 間 長	突 带 断面形	透孔形状 縦×横	ハケメ	胎土／焼成 色調	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
			口 底	高	(1) (2) (3)							
第112図 PL.107	103 円筒埴輪 円筒形 第1段片	口底	高	(1) (2) (3)	(1) (2) (3)	外 6 C類	細砂粒・粗砂 粒/良好/明赤 褐	外面は縱方向ハケメ、内面は縱方向ナデ。底部附近は横方向ナデ。				
第112図 PL.107	104 円筒埴輪 円筒形 第1段下 半片	口底 9.8	高	(1) (2) (3)	(1) (2) (3)	外 6 C類	細砂粒・粗砂 粒/良好/明赤 褐	外面は縱方向ハケメをほどんどナデ消している。内面は縱方向ハケメ後ナデ。				
第112図 PL.107	105 円筒埴輪 朝顔形 口縁部片	口底 21.0	高	(1) (2) (3)	口 M 2	外 12 B類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 明褐	口縁部は幅広く横ナデ。外面は縱方向ハケメ、内面は残存部上半が横方 向ハケメ。下半はナデ。				外面口縁 部に「J」の線刻。
第112図 PL.107	106 円筒埴輪 朝顔形 口縁部片	口底 22.5	高	(1) (2) (3)	(1) (2) (3) M 1	内 9 C類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 橙	口縁部から突帶まで5.3cmと長いこと から朝顔形。突帶は貼付、突帶とその上 はナデ。外面は口縁部が横ナデ、内面 は口縁部が横方向ハケメ、その下位は斜 め方向ハケメ。				
第112図 PL.107	107 円筒埴輪 朝顔形 第3段 (口縁部 下片)	口底	高	(1) (2) (3)	(1) (2) M 1	外 9 C類	細砂粒・粗砂 粒/良好/明赤 褐	突帶は貼付、突帶とその上はナデ。 外面は縱方向ハケメ、内面は斜め方 向ナデ。				
第112図 PL.107	108 円筒埴輪 朝顔形 第2段上 半～第3 段下半片	口底	高	(1) (2) (3)	(1) (2) M 3 円	外 8 C類	細砂粒・粗砂 粒/良好/橙	突帶は貼付、突帶とその上はナデ。 外面は縱方向ハケメ、内面は縱方向ナ デ、一部に指痕痕が残る。				
第112図 PL.107	109 円筒埴輪 朝顔形 第2段～ 第3段片	口底	高	(1) (2) (3)	(1) (2)	外 内 16 A類	細砂粒・粗砂 粒/良好/明赤 褐	第2突帶下部は18.8cm。突帶は貼付、 突帶とその上はナデ。外側は縱方 向ハケメ、内面は斜め方向ハケメが 一部残る所は縱方向ナデ。				
第112図 PL.107	110 円筒埴輪 朝顔形 第2段～ 第3段片	口底	高	(1) (2) (3)	8.7 (1) (2) M 3 M 3 円	外 内 11 B類	細砂粒・粗砂 粒/良好/明赤 褐	突帶は貼付、突帶とその上はナデ。 外面は縱方向ハケメ、内面は斜め方 向ハケメとナデ。				
第112図 PL.107	111 円筒埴輪 朝顔形 第1段～ 第2突帶 片	1 突 2 突 18.2 13.3	高	(1) (2) (3)	10.3 (1) (2) (3) 台 1 M 1 極 円 4.0 3.7	外 9 B類	細砂粒・粗砂 粒/良好/明赤 褐	第1突帶から上位は円錐状で残存部 が大きくなへ傾き形態を呈す。突帶 は貼付、突帶とその上はナデ。外 面は縱方向ハケメ、内面は縱方向ナ デ。				
第173図 7 埋輪 円筒	小片	口底	高	(1) (2) (3)	(1) (2)	外 13 B類	細砂粒・粗砂 粒/良好/橙	外面は縱方向ハケメ、内面はヘラナ デ。	胎土分析 第179図10			
第173図 8 埋輪 円筒	小片	口底	高	(1) (2) (3)	(1) (2)	外 9 C類	細砂粒・粗砂 粒/良好/橙	外面は縱方向ハケメ、内面はヘラナ デ。	胎土分析 第179図11			
第173図 9 埋輪 円筒	口縁部小 片	口底	高	(1) (2) (3)	(1) (2)	内 11 B類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 橙	外面は口縁部上半が横ナデ、下半 が縱方向と斜め方向ハケメ。内面は横 方向ハケメ。	胎土分析 第179図12			
第173図 10 埋輪 円筒	小片	口底	高	(1) (2) (3)	(1) (2)	外 6 C類	細砂粒・粗砂 粒/良好/橙	円形透孔。突帶は崩れたM字状、突 帶とその下は横ナデ。脚部は縱方 向ハケメ、内面は縱方向ハケメとヘ ラナデ。	胎土分析 第179図13			
第173図 11 埋輪 円筒	小片	突 2 段 底	20.4	高	(1) (2) (3)	円 7.0 7.0 外 12 B類	細砂粒・粗砂 粒/良好/橙	円形透孔。突帶は崩れたM字状、突 帶とその下は横ナデ。脚部は縱方 向ハケメ、内面は縱方向ハケメとヘ ラナデ。	胎土分析 第179図14			
第173図 12 埋輪 円筒	口縁部小 片	口底	高	(1) (2) (3)	(1) (2)	外 20 A類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 明	外面は縱方向ハケメ、内面は横方 向ハケメ。	胎土分析 第179図15			
捕 図 PL.No.	種 類 器 種	出上位置 残 存 率	計測値			透孔 形 状	ハケメ	胎土／焼成 色調	成 形・整 形 の 特 徴			備 考
第113・ 114図 PL.108・ 109	112 形象埴輪 觀形	基部～矢 箇部、矢 頭表現す る粘土板 は矢	(54.8)	厚 42.4	1.6 円 4.6 5.6	表 裏 B類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 明	基部は円筒状に作られ、形象部は圓錐から上位に矢 頭を表す板を貼付するため楕円形形状に移行する。基部 上位側面に透孔、透孔の1.3cm上に突帶を貼付。形象 部下位。突帶に接して三角形の粘土板による下位翼部 を貼付し、その面を縱方向に凹部を施す。形象部上半 には台形形状の翼部が貼付されている。この翼部には上部には から下斜めに2条の凹部が施す。そして上半には背負 い紐を表現した粘土紐が貼付されているが、剥落して いる。凹部側面には左から右への蝶形状の線刻が 施されている。なお、下半の一部に青色が残るが、 彩色状態は不明である。裏面には線刻などの施文は施 されていないが、翼部の付け根には横方向ハケメがみ られる。内面は縱方向または斜め方向のナデ。				

遺物觀察表

捕 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 有 率	計測値		透孔 形狀	ハケメ	胎土／焼成 色調	成形・整形 の 特徴		備 考
				高 幅	(37.7) (19.7)	1.2			胎部は円筒状に作られ、形像部は横円形状に上位に移行する。基部に左側面に透孔、通孔の91.5mm上に断面M字状突帯を貼付。形状部下位、突帯に接して三角形の粘土板による翼部を貼付し、下部に粘土板を帯状に貼付。中位に基縫を表現する帶状突帯が貼付、ほぼ等間隔に円形のボタン状を貼付。上半には背負い紐を表現した粘土紐が貼付されているが、結び目の左側は不明。なお、革輪を表現した突帯と左側面には大型の翼部が貼付されていたとみられる。		
第115図 PL.110	113	形象埴輪 鞍形	基部上位 ～矢筒部	高 幅	(31.8) (33.2)	厚	1.6	外 B類	細砂粒／良好/ 明赤褐	矢筒部分を円筒に作成し、上下の部を貼付。下位の翼部上端と下部に粘土板を貼付し、筋を表現した円形の粘土板が貼りされ、円筒部の各格子の線が擦文されている。上半には背負い紐を表現した粘土紐が貼付されていたと推測している。表面は青彩された部分があるが、彩色部位は不明である。裏面は残存部が僅かため不明である。内面は擬方方向ナデ。	
第116図 PL.110	114	形象埴輪 鞍形	形象矢筒 部下半片	高 幅	(16.9) (15.4)	厚	1.5	表 裏 B類	細砂粒・粗砂 粒／良好/明赤 褐	矢筒部分を円筒に作成し、上下の部を貼付。下位の翼部上端と下部に粘土板を貼付し、筋を表現した円形の粘土板が貼りされ、円筒部の各格子の線が擦文されている。上半には背負い紐を表現した粘土紐が貼付されていたと推測している。表面は青彩された部分があるが、彩色部位は不明である。裏面は残存部が僅かため不明である。内面は擬方方向ナデ。	
第116図 PL.110	115	形象埴輪 鞍形	左上位翼 部片	縱 橫	(24.6) (16.9)	厚	1.2	表 裏 B類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 明赤褐	矢筒円筒部分と翼部は貼付。貼付は円筒部分を半円状に整形して接着したものとみられる。表面は斜め方向ハケメと円筒部よりは横方向ハケメ。翼部上半に左斜め下に向けた2条の糸縫が刻印されている。裏面は翼部が斜め方向ハケメ、円筒部よりは横方向ハケメ。	
第116図 PL.110	116	形象埴輪 鞍形	形象部凹 窓部分中 位片	縱 橫	(18.8) (17.0)	厚	1.5	表 裏 B類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 明赤褐	鞍形埴輪矢筒凹窓部分中位の背負い紐を表現した部分、左側部の上位翼部結合痕がみられる。円筒部は半円形に裏表を作成し、翼部を挟み込むように貼付か。円筒部と翼部の結合には補強用粘土棒を貼り付けたと推測される。円筒部はハケメ後背負い紐を表表現する粘土棒を貼付し、周回はナデ。内面は擬方方向ナデ。	
第116図 PL.110	117	形象埴輪 鞍形	左上位翼 部片	縱 橫	(17.8) (14.9)	厚	1.3	表 裏 B類	細砂粒・粗砂 粒/良好/明赤 褐	表面は横方向ハケメ後右上から斜めに2条の糸縫を観察、門限内に赤彩、器面の剥離が進むが一部に青彩があり、端部はナデ。裏面も横方向ハケメ、端部はナデ。	
第117図 PL.110	118	形象埴輪 鞍形	左下部片	縱 橫	(22.1) (12.0)	厚	1.5	表 裏 B類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/粗 粒	矢筒凹窓部分と翼部は貼付。円筒部分は縦方向ハケメで整形。基部と形象部の境には断面四角形の突起突縫が貼付。翼部貼付後円筒部と一緒に横方向ハケメで整形され、貼付箇所はナデ。翼部下端には円筒部、右翼部まで幅5.0cmほどの深い突縫を貼付し、この突縫は表面側に2~3cm程引込んでいる。そして表面側には網を表すとみられるボタン状の粘土棒が貼付されている。幅広の突縫上部には格子状に門限が被剥離され、青彩、赤彩が施されている。裏面は翼部に横方向ハケメ、端部は横ナデ。内面は縦方向ナデ。	138と同一 か。
第117図 PL.111	119	形象埴輪 鞍形	右上位翼 部片	縱 橫	(20.2) (9.1)	厚	1.2	表 裏 C類	細砂粒・粗砂 粒/良好/粗 粒	表面は縦方向ハケメ。内面はナデ。	
第117図 PL.111	120	形象埴輪 鞍形	翼部端部 片	縱 橫	(7.8) (6.9)	厚	1.3	外 A類	細砂粒・粗砂 粒/良好/粗 粒	形象埴輪左翼部端部片。内外面とも縦方向・斜め方向ハケメ、裏面はナデ。	
第117図 PL.111	121	形象埴輪 鞍形	上位左翼 部片	縱 橫	(8.8) (5.0)	厚	1.6	表 裏 B類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 明赤褐	表面は斜めのハケメ後右上から左下へ向けて2条の糸縫を観察、裏面は横方向ハケメ。	
第117図 PL.111	122	形象埴輪 鞍形	上位翼部 片	縱 橫	(4.0) (7.4)	厚	1.2	外 B類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 粗粒	形象矢筒右翼の翼部片。表面は斜め方向ハケメ、端部はナデ。内面は縦方向ハケメ。	
第117図 PL.111	123	形象埴輪 鞍形	形象部左 下位下半 片	縱 橫	(3.7) (3.0)	厚	1.0	表 裏 B類	細砂粒・粗砂 粒/良好/に くい紅	形象埴輪左下位翼部。翼部は円筒部分に貼付。表面は横方向ハケメ下端に幅4.5cmと幅広の突縫を貼付した痕跡が残る。この突縫は網目と裏面の一部まで残る。裏面はややかな整形、横方向ハケメ。	
第117図 PL.111	124	形象埴輪 鞍形	翼部小片	縱 橫	(7.7) (4.6)	厚	1.4	外 B類	細砂粒/良好/ 明赤褐	形象埴輪左側上部翼部小片。表面は横方向ハケメ後左斜め方向への網目が施され、裏面は斜めのハケメ。	
第117図 PL.111	125	形象埴輪 鞍形	矢を表現 する粘土 板の上端 片	縱 橫	(7.7) (12.2)	厚	2.7	表 裏 A類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 粗粒	矢筒上部に貼付された矢を表現する粘土板、表面は縦方向ハケメ後矢をかたどった粘土棒を貼付。左端の網の凹縫による網目が施されている。表面は粘土棒が傾かないように断面三角形の粘土棒を貼付、裏面もナデ、単位不明。	
第117図 PL.111	126	形象埴輪 鞍形	矢を表現 する粘土 板右上端 小片	縱 橫	(8.6) (8.5)	厚	3.9		細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 明赤褐	矢筒上部に貼付された矢を表現する粘土板、下端は矢筒との結合面か、粘土板は厚さ1.8cmほどであるが、0.8~1.0cmの粘土板を2枚重ね合わせている。その上に青彩が残る。裏面には粘土棒が傾かないように断面三角形の粘土棒で補強。この粘土棒の周囲はナデ。	
第117図 PL.111	127	形象埴輪 鞍形	矢を表現 する粘土 板の下端 片	縱 橫							

種 団 PL.No.	No.	種 類 種	出上位置 残 余 量	計測値		透孔 形狀	ハケメ	胎上／焼成 色調	成形・整形の特徴	備 考
				縦	横					
第117図 PL.111	128	形象埴輪 鞍形	矢を表現 した部分	(4.5) (10.4)	厚	1.1		細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 橙	矢・礫は粘土紐を貼付して、礫部分を線刻で表現。板部 分は縦方向ハケメ。	
第117図 PL.111	129	形象埴輪 鞍形	矢を表現 する粘土 板片	縦 横 (5.1) (4.7)	厚	0.9		細砂粒/良好/ 明赤褐	矢・礫は粘土紐を貼付し、礫部分を線刻で表現。板部 分は縦方向ハケメ。	
第117図 PL.111	130	形象埴輪 鞍形	矢を表現 する粘土 板右端小 片	縦 横 (6.1) (5.8)	厚	3.0	表 裏 不規 則 B類	細砂粒/良好/ 明赤褐	矢箇上部に貼付された矢を表現する粘土板。表面は縦 方向ハケメ矢を表現する粘土紐を貼付が剥落。裏面 は縦方向ハケメ後粘土板が頗るかのように断面三角形の 棒状粘土紐を貼付。側面はナデ。	
第117図 PL.111	131	形象埴輪 鞍形	矢・礫部 板の裏面 補強片	縦 横 (8.9) (3.4)	厚	1.6		細砂粒/良好/ 橙	鞍形埴輪矢・礫を表現した板状の裏面に貼付された棒 状の下部破片。表面はナデ。	
第117図 PL.111	132	形象埴輪 鞍形	矢・鉢部 板の裏面 補強片	縦 横 (6.3) (3.0)	厚	(1.4)		細砂粒/良好/ 橙	鞍形埴輪矢・礫を表現した板状の裏面に貼付された棒 状の下部破片。表面はナデ。	
第117図 PL.111	133	形象埴輪 鞍形	矢・鉢部 板の裏面 補強片	縦 横 (5.6) (3.7)	厚	1.8		細砂粒/良好/ 橙	鞍形埴輪矢・鉢を表現した板状の裏面に貼付された棒 状の下部破片。表面はナデ。	
第117図 PL.111	134	形象埴輪 鞍形	矢・鉢部 板の裏面 補強片	縦 横 (5.2) (2.6)	厚	(1.8)		細砂粒/良好/ 明赤褐	鞍形埴輪矢・鉢を表現した板状の裏面に貼付された棒 状の下部破片。表面はナデ。	
第117図 PL.111	135	形象埴輪 鞍形	矢・鉢部 板の裏面 補強片	縦 横 (3.5) (3.5)	厚	(2.1)		細砂粒/良好/ 橙	鞍形埴輪矢・鉢を表現した板状の裏面に貼付された棒 状の破片。表面はナデ。	
第118図 PL.111	136	形象埴輪 鞍形	矢箇部分 最上位片	縦 横 (7.9) (14.1)	厚	1.5	接 合 面 A類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 橙	鞍形埴輪形象部矢箇部分の表面最上位片。この部分は 下位の円筒部分が扁平になり空いている間隔が狭くな り、挟み込むように矢・鉢を表現した粘土紐が貼付さ れる。残存部下半には微かに縦方向ハケメが残る。残 存部上半には横方向に綾状紋・円筒が縦刻されてい る。内側面には翼部が貼付された痕跡が残る。内面は 残存部上位に横方向ナデ。その部位は縦方向ナデ。	
第118図 PL.111	137	形象埴輪 鞍形	破片	縦 横 (8.7) (13.1)	厚	1.3	外 12 B類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 橙	矢箇円筒部分と翼部の接合部。円筒部分は半円形に 輪積みか、翼部との接合部は断面三角形の粘土紐を貼 付し複数。裏面円筒部は縦方向ハケメ、接合部は横 方向ハケメ。内面は縦方向ナデ。	
第118図 PL.111	138	形象埴輪 鞍形	円筒右側 ～下位翼 部上部片	縦 横 (10.3) (5.6)	厚	1.1	表 裏 B類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 明赤褐	矢箇円筒部分と翼部を貼付。表面矢箇部分は縦方向ハ ケメ後格子目状に円筒を縦刻。青彩と赤彩を施す。翼 部はナデ。翼部は翼部から円筒部分にかけて横方向ハ ケメ。内筒部分は縦方向ハケメ。内面はナデ。單位不 明。	118と同一 か。
第118図 PL.111	139	形象埴輪 鞍形	基部片	縦 横 (23.7) (8.5)	厚	1.5	表 12 B類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 明褐	鞍形埴輪翼部接合部が見られる。矢箇円筒部分は半円 形に粘土紐を形成し、表裏を併せて成形し、縦方向ハ ケメでの整形。その後翼部を接合か。内面は縦方向ナデ。	112と同一 か。
第118図 PL.111	140	形象埴輪 鞍形	形象内筒 部片	縦 横 (19.7) (7.1)	厚	1.3	表 12 B類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 橙	鞍形埴輪矢箇部破片。	
第118図 PL.111	141	形象埴輪 鞍形	円筒部形 象・背負 い紐表現 付近片	縦 横 (11.7) (8.5)	厚	(2.2)	表 8 B類	細砂粒・粗砂 粒・良好/明褐	鞍形埴輪矢箇円筒部分形象・背負い紐とその周囲片。 内面に輪積みが残る。表面は背負ハケメ後。背 負い紐部分を円筒で縦刻し、その内部に粘土紐を貼付し て表現しているが、貼付された粘土紐は摩滅のため一部 が残るだけである。内面は斜めナデ。	
第118図 PL.111	142	形象埴輪 鞍形	翼部接合 部分小片	縦 横 (4.2) (7.8)	厚	0.8	表 10 ～ 16 A類	細砂粒/良好/ 明赤褐	翼部と矢箇円筒部分の接続部分の補強に張り着けられ た粘土紐片。外側は縦方向と横方向ハケメ。	
第118図 PL.111	143	形象埴輪 鞍形	形象部矢 箇円筒部 分	縦 横 (5.7) (6.7)	厚	1.5	表 14 ～ 15 A類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 橙	矢箇円筒部分と翼部の接合部付近。表面は縦方向ハ ケメ、器面摩滅のため単位不明。内面は縦方向ナデ。	
第118図 PL.111	144	形象埴輪 鞍形	中位片	縦 横 (15.4) (10.9)	厚	1.4	表 10 B類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 橙	矢箇円筒部分から右上位翼部下部にかけての破片。円 筒部分は半円状を作り、翼部を挟み込むように接合か。 円筒部は縦方向ハケメ後背負い紐の粘土紐を貼付。翼 部は横方向ハケメ。背負い紐の突起部から翼部にかけ て青彩が施されている。内面は縦方向ナデ。	
第118図 PL.111	145	形象埴輪 鞍形	形象部内 筒～翼部 基部片	縦 横 (7.0) (10.7)	厚	1.5	表 14 A類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 明赤褐	円筒部は半円状に作成し、翼部に接合か。翼部との接 合部には粘土紐をナデするように貼付。表面はハケ メ後円筒による縦刻を施す。内面は縦方向と斜め方向 ナデ。	

遺物觀察表

補 図 PL.No.	No.	種 類	出上位置 残 余 量	計測値		透孔 形狀	ハケメ	胎上・焼成 色調	成形・整形 の特徴	備 考
				縦 横	(5.9) (4.2)	厚	1.2			
第118図 PL.146	146	形象埴輪 鞍形	形象部矢 筒円筒部分	縱 横	(10.7) (3.9)	厚	1.1	外 B類	細砂粒・粗砂 粒・良好/橙 明褐	矢筒円筒部分と翼部の接合部付近。残存部が表裏どちらかは判別しない。外面は横方向ハケメ、器面摩滅のため単位不鮮明。内面はナデ。
第118図 PL.147	147	形象埴輪 鞍形	矢筒部裏 面小片	縱 横	(6.6) (6.8)	厚	1.3	外 B類	細砂粒・粗砂 粒・良好/に赤 い赤褐	矢筒円筒部分と翼部の接合部。円筒部分は半円状に輪積みか。翼部との接合部は断面三角形状の粘土紐を貼付し補強。裏面円筒部は縱方向ハケメ。接合部は横方向ハケメ。内面は縱方向ナデ。
第118図 PL.148	148	形象埴輪 鞍形・太刀 形?	形象部円 筒部分片	縱 横	(4.7) (5.5)	厚	1.9	表 A類	細砂粒・粗砂 粒・良好/好 き	表面は縱方向ハケメ後縫状の表皮を表す粘土紐を貼付。細部部分には赤様がみられる。内面はナデ。
第118図 PL.150	150	形象埴輪 鞍形	縦・その 周間小片	縱 横	(4.4) (5.3)	厚	1.8	表 C類	細砂粒・粗砂 粒・良好/明 褐	表面は縱方向ハケメ後背負い紐を表現する突帯を貼付。残存部に位には円筒部を水平に造らす突帯が貼付されていたが削落。この突帯下は横方向ハケメ。内面はナデ。貼付位置は頂部から翼部の間か。突帯は幅2.5mm、厚さ0.7mm、鎖を表現した様1.5mmのボタン状粘土が貼付されている。
第118図 PL.151	151	形象埴輪 鞍形	突帯小片	縱 横	(3.0) (3.7)	厚	1.2		細砂粒/良好 明褐	表面は縦方向ハケメ後背負い紐を表現する突帯を貼付。残存部に位には円筒部を水平に造らす突帯が貼付されていたが削落。この突帯下は横方向ハケメ。内面はナデ。貼付位置は頂部から翼部の間か。突帯は幅2.5mm、厚さ0.7mm、鎖を表現した様1.5mmのボタン状粘土が貼付されている。
第118図 PL.152	152	形象埴輪 鞍形	矢筒の横 帶片	縱 横	(2.6) (3.3)	厚	0.9		細砂粒/良好 に赤い褐	鞍形埴輪矢筒部の横帶を表現した粘土紐。鎖を表現した様1.3mmの円盤状の粘土板が貼付されている。
第119図 PL.153	153	形象埴輪 盾形	下位翼部 下端の突 帶片	縱 横	(3.3) (3.1)	厚	0.9		細砂粒/良好 明褐	形象埴輪下位翼部下端に貼付されている突帯とボタン状の装飾物。表面はナデ。ボタン状粘土は貼付。
第120図 PL.154	154	形象埴輪 盾形	形象部片	高 幅 (36.9) (29.5)	厚	1.5	外 A類	8 ~ 17	細砂粒・粗砂 粒・良好/橙	両側面のヒレ状部は中央の円筒部が表裏とも半円状に挟み込むようにして接合。接合部には補強で粘土板を貼付している。表面は円筒状部には縱方向ハケメで整形し、凹線を鋭敏で文様を施し、両側面のヒレ状部は横方向ハケメ、端部はナデ消し。ナデ消した部分とハケメの頭には四角を縫刻し、ハケメ部分に鋼鋸文を研削している。表面には赤色と青色が施されているが、剥落し部分的に残る程度である。裏面の両側面ヒレ状部分は横方向ハケメ、端部はナデ消している。円筒部分の頭は縦方向ナデ。
第120図 PL.155	155	形象埴輪 盾形	形象部小 片	縱 横	(6.3) (7.0)	厚	1.3		細砂粒/良好 橙	盾形埴輪像下端片。端部は僅かに弧状を呈す。表面は端部を横方向。その上位は縱方向ハケメ後縫状文を縫刻で施す。内面は残存部下端が横方向ハケメ、上半は縦方向ナデ。
第120図 PL.156	156	形象埴輪 盾形	腹部小片	縱 横	(8.4) (7.2)	厚	1.3		細砂粒/良好 橙	盾形埴輪上部腹部片。表面は横方向ハケメ後端部から1cmほど内側に縫刻を施し、その外側はナデ、縫刻の内側は青色が施す。裏面は横方向ハケメ、端部は表面は横方向ナデ。
第120図 PL.157	157	形象埴輪 盾形	上端部小 片	縱 横	(11.3) (5.6)	厚	1.3	表 裏 B類	細砂粒・粗砂 粒・良好/に赤 い赤褐	盾形埴輪ヒレ状部上端片、表面は斜め方向ハケメ、欠損部端にナデ。裏面は両方向の斜めハケメ、端部は表面は横方向ナデ。
第120図 PL.158	158	形象埴輪 盾形	小片	縱 横	(6.0) (6.2)	厚	1.4	外 A類	細砂粒・粗砂 粒・良好/に赤 い赤褐	盾形埴輪ヒレ部と之の接合部分。円筒部分は半円状に作成したものを接合。表面は斜めのハケメ後縫状文を作成したものを接合。内面は横・横のハケメ、接合部は強いナデ。
第120図 PL.159	159	形象埴輪 盾形	端部片	縱 横	(5.6) (8.3)	厚	1.5	外 C類	細砂粒/良好 橙	盾形埴輪上部の破片。内外面には横方向ハケメ、端部はナデ。外側ハケメ部分には青色が施されている。
第120図 PL.160	160	形象埴輪 盾形	形象部小 片	縱 横	(5.4) (5.1)	厚	0.9		細砂粒/良好 橙	盾形埴輪ヒレの小片。表面はハケメが強力に残る。斜め方向縫刻が施す。内面はナデ。
第120図 PL.161	161	形象埴輪 盾形	形象部小 片	縱 横	(5.0) (5.7)	厚	1.2	外 B類	細砂粒・粗砂 粒・橙/良好/明 褐	盾形埴輪の形象部下部小片。表面は縦方向ハケメ。残存部下半に横方向の粘土板を貼付。上部に斜め方向縫刻が施す。内面はナデ。
第120図 PL.162	162	形象埴輪 盾形	ヒレ部小 片	縱 横	(11.2) (8.2)	厚	1.8	裏 A類	細砂粒・粗砂 粒・良好/に赤 い赤褐	盾形埴輪ヒレ部小片、表面は斜めハケメ、器面摩滅のため単位不明。裏面は円筒部分との接合部は横方向ハケメ。端部は表裏面横ナデ。
第120図 PL.163	163	形象埴輪 盾・鞍形 片	ヒレ部小 片	縱 横	(8.5) (6.5)	厚	1.4	摩 滑	細砂粒・粗砂 粒/良好/明褐	形象埴輪部小片、外面に鋼鋸文が施す。外外面ともハケメは器面摩滅のため単位不明。端部は内外面とも横ナデ。
第120図 PL.164	164	形象埴輪 盾・鞍形 片	形象部小 片	縱 横	(10.5) (3.5)	厚	1.0	表 A類	細砂粒・粗砂 粒・良好/橙	形象埴輪円筒部分と翼部を接合する補強部分の破片か。外側は縦方向ハケメ後縫状文を縫刻、一部に赤色がみられる。内面はナデ。
第120図 PL.165	165	形象埴輪 盾・鞍形 片	円筒部	縱 横	(10.9) (3.2)	厚	1.0	表 B類	細砂粒・粗砂 粒・良好/橙	表面は円筒部が縦方向ハケメ、翼部との接合部付近は横方向ハケメ。内面は縦方向と一部斜め方向ナデ。
第120図 PL.166	166	形象埴輪 盾・鞍形 片	形象部矢 筒円筒部分	縱 横	(5.7) (4.0)	厚	1.4	不鮮 明	細砂粒・粗砂 粒・良好/橙	矢筒円筒部分は輪積み痕が残る。表面の残存する部分は縦方向ハケメ後、凹線が縫刻、赤色を施している。内面は縦方向ナデ。

遺物觀察表

種 国 PL.No.	No.	種 類 器 類	出上位置 残 し 事	計測値		透孔 形狀	ハケメ	胎上／焼成 色調	成形・整形の特徴	備 考
				縦	横					
第1208回 PL.167	167	形象埴輪 轆・轂形?	形象部小片	(4.8) (3.1)	厚	1.0	表 10 ～ 12 B類	細砂粒・粗砂 粒/良好/橙	輪形埴輪翼部破片か。外面は縱方向ハケメ後凹線を線 刻、一部に赤彩がみられる。内面はナデ。	
第1208回 PL.168	168	形象埴輪 轆・轂形?	形象部小片	(4.7) (5.0)	厚	1.1	表 10 ～ 12 B類	細砂粒・粗砂 粒/良好/橙	輪形埴輪翼部破片か。外面は縱方向ハケメ後凹線を線 刻、一部に赤彩がみられる。内面は斜め方向ハケメ。	
第1208回 PL.169	169	形象埴輪 轆・轂形?	形象部円 筒部分～ 翼部小片	(7.1) (5.1)	厚	1.1	表 15 後 A類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 橙	部位詳細不明。矢筒円筒部分は半円状に成形か、翼部 の残存部は円筒状と翼部の接合を補強する粘土紐を貼付 したもの。表面は円筒部分が横方向ハケメ、翼部は 横方向ハケメ。内面はナデ。	
第1208回 PL.170	170	形象埴輪 轆・轂形?	翼部小片	(4.5) (5.0)	厚	1.1	裏 6 C類	細砂粒・粗砂 粒/良好/明褐	表面は斜めのハケメ、端部は横ナデ、綴剣による施文 を施す。内面は表面と逆方向の斜めのハケメ。	
第1208回 PL.171	171	形象埴輪 轆・轂形?	形象部円 筒部分	(7.6) (7.1)	厚	1.4	表 15 A類	細砂粒・粗砂 粒/良好/明褐	表面は縱方向ハケメ後凹線を線刻。内面は斜め方向ナ デ。	
第1208回 PL.172	172	形象埴輪 轆・轂形?	円筒部と 翼部ヒ レ状部接 合部乍	(7.6) (2.3)	厚	4.1	表 16 A類	細砂粒・粗砂 粒/良好/橙	輪形埴輪または盾形埴輪の円筒部分と翼部またはヒレ 状部接合部乍。表面は斜めのハケメ、この部分は赤彩 及び青彩されている。	
第1208回 PL.173	173	形象埴輪 轆・轂形?	翼部小片	(4.4) (5.2)	厚	1.5	表 10 B類 に赤	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 橙	裏面は横方向ハケメ、側面はナデ。	
第1218回 PL.174	174	形象埴輪 轆・轂形	形象部微 細部	(1.7) (2.5)	厚	1.2		細砂粒/良好/ に赤	部位不明。凹線が綴剣。凹線部分は赤彩がみられる。	
第121回 PL.112	175	形象埴輪 太刀形	把～基部 上位	(55.2) 14.8	厚	1.5	円 3.2 3.2	外 6 C類 明褐	基部透孔部分径15.8cm、把上部径8.5cm、基部から廟 口にはかけて徐々に径が細くなる。廟口上位で12.0cmか ら9.0cmへ急激に細くなる。把上部には把手取付痕、 廟口には勾金取付痕がみられる。基部、鶴、把手とも縱 方向ハケメであるが、把手部分は細かいハケメである。 左側面には横面に付けられた組合具を表したとみられ る粘土紐が貼付されている。鶴は断面台形の突帶 が2条貼付され、下位の突帶の勾金直下にはU字状に 粘土紐が貼付され、その下位には紐が結ばれた形状の 粘土紐が貼付されていたが、剥落している。鶴と基部 の境にはM字状の突帶が2条貼付されている。その突 帶下の側面には円形の透孔が設けられている。 内面は縱方向ナデ。	
第121回 PL.112	176	形象埴輪 太刀形	廟口付近 片	(8.2) <20.7>	厚	1.3	外 内 16 A類 明褐	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 明褐	残存部分の鶴部径20.8cm、把部径15.4cm。外面は縱方 向ハケメ後突帶を貼付。内面は斜め方向ハケメ。	
第121回 PL.112	177	形象埴輪 太刀形	廟口付近 片	(6.0) <15.0>	厚	1.1	外 12 B類 に赤	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 橙	把部分は縱方向ハケメ、廟口には突帶が貼付。突帶 の上はナデ、鶴は縱方向ハケメ、突帶から廟に紐状 の装身具が貼付されていた痕跡がみられる。内面は突 帶より上位は縱方向ハケメ、下位はナデ。	
第121回 PL.112	178	形象埴輪	形象部把 部分小片	(3.2) (4.5)	厚	1.1	外 13 A類	細砂粒・粗砂 粒/良好/橙	残存部横断面の径が8cm前後であることから判断 した。外は縱方向ハケメ。内面はナデ。	
第121回 PL.112	179	形象埴輪 太刀形	小片	(3.6) (3.8)	厚	0.8	外 不 A類 明	細砂粒・粗砂 粒/良好/に赤 い橙	部位不明。外面は縱方向ハケメが残るが、大部分はナ デ消されている。内面はナデ。	
第122回 PL.112	180	形象埴輪 太刀形	形象部下 位片	(25.5) <17.1>	厚	1.5	表 15 A類	細砂粒・粗砂 粒/良好/橙	表面は縱ハケ、残存部上位に紐が表現されたとみられ る粘土紐が貼付されている。内面は縱方向ナデ。	
第122回 PL.112	181	形象埴輪 太刀形	廟口付近 片	(12.4) <13.3>	厚	1.5	外 20 A類 に赤	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 橙	廟口から廟にかけての破片。廟口突帶下径13.3cm、外 面は縱方向ハケメ後2条の突帶と装飾の粘土紐を貼 付。内面は輪滑み痕が残る、整体は縱方向ナデ。	180と同一 か。
第122回 PL.112	182	形象埴輪 太刀形	把部分片	(7.1) (7.9)	厚	1.4	外 16 A類 明赤	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 橙	太刀形埴輪。径から把部分とみられる。外面は縱方 向ハケメ、内面はナデ、単位不明。	180と同一 か。
第122回 PL.112	183	形象埴輪 太刀形	基部～廟 部分片か	(20.0) <13.6>	厚	1.5	縦 長 3.2	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 橙	残存部分最大径14.0cm。外面縱方向ハケメ後透孔、突 帶と装飾を施した粘土紐を貼付。内面は縱方向ナデ。	
第122回 PL.112	184	形象埴輪 太刀形	基部部～ 形象部下 位片	(16.0) <15.5>	厚	1.5	外 12 B類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 橙	器種不明。外面は縱方向ハケメ後2条の突帶を貼付。 突帶はナデ。内面は縱方向ナデ。	突部断面 下：台形 上：台形
第122回 PL.112	185	形象埴輪 太刀形	廟口付近 小片	(5.3) (6.3)	厚	1.9	外 12 B類	細砂粒・粗砂 粒/良好/橙	太刀形埴輪廟口、勾金の貼付した痕跡がみられる。外 面は縱方向ハケメ後勾金周囲はナデ。内面はナデ。	180と同一 か。

遺物觀察表

種 団 PL.No.	器 種	出上位数 残 余 量	計測値		透孔 形狀	ハケメ	胎土・焼成 色調	成形・整形の特徴		備 考
			高 径	(33.0) <12.8>				外 6 C類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ にぶい粒	
第123回 PL.113	186 形象埴輪 太刀形	把下平～ 頭上半	(16.1) <14.4>	厚 径	1.3	内 3.8 3.8	外 7 C類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/相 似	玉縞太刀形、把・勾金は右側に残り立んでいる。勾金は 縛に取り付ける部分の上部のみ残り、三輪玉は中程を盛 り上げた部分のものを貼付、穿孔は勾金を貫通してし ない。頭部から把に向けて斜めに傾くように成形し、 縛方向ハケメを施した後、頭口には断面台形の突部が 2条造らされ、頭の勾金直下に装飾とみられる表現をU 字と円形に施し種類が貼付されている。内面はナデ。	238と同一 か。
第123回 PL.113	187 形象埴輪 太刀形	基台部破 片	基台部突 帶～頭部 下位片	高 径 (7.3) <13.5>	厚 径	1.0	外 6 C類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/相 似	残存部下位より上位に向けて僅かに傾かが彎まる。外面 は縛方向ハケメ、突部は貼付。内面はナデ、器面摩滅 のため位付不明。	186と238 と同一か。
第123回 PL.113	188 形象埴輪 太刀形	基台部破 片	高 径 (8.9) <14.2>	厚 径	1.1	外 6 C類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/にぶ い粒	残存部下位より上位に向けて僅かに傾かが彎まる。外面 は縛方向ハケメ、突部は貼付。内面はナデ、器面摩滅 のため位付不明。	186・189・ 238と同一 か。	
第124回 PL.113	190 形象埴輪 太刀形	把上部～ 把頭片	縦 横 (7.2) <7.5>	厚 径	(8.9)	把 8 B類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/相 似	玉縞太刀形。把頭と把は把頭に長さ7.5cmほどの棒状 の粘土を手揉みに貼付し差し込んでようじに接合。把 頭上面、下面と側面はナデ、側面に玉縞との接合痕、 上面に勾金補粘土貼付痕が残る。把面は縛方向ハケメ。	186・188・ 238と同一 か。	
第124回 PL.113	191 形象埴輪 太刀形	把頭	縦 横 8.3 16.9	厚 径	1.1	表 裏 14 A類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/相 似	表裏ともハケメ、側面に勾金貼付痕、上面に勾金の補 粘土貼付痕。下面に把にあたる円筒部の接合痕が残 る。	186	
第124回 PL.113	192 形象埴輪 太刀形	勾金片	長 幅 (5.8) 5.4	厚 径	1.4		細砂粒/良好 相	全体的に摩滅。三輪玉の平面形状は円形より稍円形に近い。三輪 玉から勾金を貫通する穿孔有り。	189	
第124回 PL.113	193 形象埴輪 太刀形	三輪玉	縦 横 (4.9) 4.0	厚 径	2.9		細砂粒/良好/ 明闇	玉縞太刀形。勾金に貼付された三輪玉の一つ。三輪玉 は頭部から勾金まで貫通する穿孔有り。表面はナデ。	238	
第124回 PL.113	194 形象埴輪 太刀形	勾金上部 片	高 幅 13.0 5.3	厚 径	5.5	裏 16 A類	細砂粒/良好/ 明闇	玉縞太刀形。勾金の把頭上面、先端を欠く。勾金部分 は厚さ1.0cm、径3.3cmの三輪玉と2個貼付、三輪玉中 央には勾金を貫通する穿孔有り接合部との接合部には幅 1.0cm、厚さ0.8cmの粘土柱が巻かれている。裏面は把 頭との接合部に断面三角形状の粘土板を貼付。勾金表面 はハケメをナデ消している。裏面と三角形の粘土板には ハケメが残る。	190	
第124回 PL.113	195 形象埴輪 太刀形	勾金上半 片	長 幅 (16.2) 5.7	厚 径	1.3		細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 相	玉縞太刀形。把頭部分で勾金の上部と下部を接合、裏 面に把頭との接合時の補強粘土と痕跡が残る。三輪玉は 剥落。三輪玉の中央には勾金まで貫通する穿孔有り。 表面は縛方向ハケメ。	191	
第125回 PL.114	196 形象埴輪 胴形	一部欠損	高 幅 (16.0) 21.2	厚 径	1.5	外 10 B類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 相	形象部残存幅21.2cm、奥行き15.2cm、高さ15.0cm。形 象部は幅広の粘土板を棊で貼付。棊は幅広の粘土板を 裏面に貼付して形成。棊上部は堅木を貼付。破風は 端部を折り曲げているが、その通りはや雰囲である。 流れは横方向ハケメ前面に留め文され、海老反文状に立ち上がる右側 には綱刺で幅2.5cmの吹き抜きが行われ、その間に徑5mmの 刺突が盛る。うに施されている。一部に青彩があるが、 彩色状態は不鮮明である。裏面にあたる部はハケメによ る整形だけである。なお、裏面は摩滅が激しい。内面 は丁寧なナデが施されている。	192	
第126回 PL.114	197 形象埴輪 家形	屋根上半 片	高 幅 (24.5) 31.2	厚 径	1.7	外 14 A類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ にぶい赤褐	屋根は2枚の粘土板を棊で貼付。棊は幅広の粘土板を 外側に貼付して形成。棊上部は堅木を貼付。破風は 端部を折り曲げているが、その通りはや雰囲である。 流れは横方向ハケメ前面に留め文され、海老反文状に立ち上がる右側 には綱刺で幅2.5cmの吹き抜きが行われ、その間に徑5mmの 刺突が盛る。うに施されている。一部に青彩があるが、 彩色状態は不鮮明である。裏面にあたる部はハケメによ る整形だけである。なお、裏面は摩滅が激しい。内面 は丁寧なナデが施されている。	193	
第126回 PL.114	198 形象埴輪 家形	堅魚木	長 幅 (3.3) 3.3	厚 径	2.8		細砂粒/良好/ 明闇	家形埴輪の堅魚木の一部。下面の約2ほどを欠く。 ほぼ中央に貫通する穿孔有り。上下、側面ともナデ。	194	
第126回 PL.114	199 形象埴輪 家形	堅魚木	長 幅 6.6 3.3	厚 径	2.7		細砂粒/良好/ 相	家形埴輪の堅魚木の一部。下面に棊との接合部が残 る。ほぼ中央に貫通する穿孔有り。上下、側面ともナデ。	195	
第126回 PL.114	200 形象埴輪 家形	堅魚木	長 幅 (4.0) 3.2	厚 径	3.2		細砂粒/良好/ 明闇	家形埴輪の堅魚木の一部。下面の約2ほどを欠く。 ほぼ中央に貫通する穿孔有り。上下、側面ともナデ。	196	
第127回 PL.115	201 形象埴輪 家形	屋根(切 妻)の上 端部片	縦 横 (15.8) (17.3)	厚 径	1.4	表 内 16 A類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 相	家形埴輪屋根の切妻に近くの破風から流れにかけての破 片。内面に粘土板を積み上げて形成した痕跡が残る。 破風は端部を幅3cmほど折り曲げて表現している。流れ は横方向ハケメ後破風側3~5cmほどナデ後凹縫を 巻き起状に廻りし内部を赤彩している。内面は横方向 ハケメ後複数ナデを施している。	197	
第127回 PL.115	202 形象埴輪 家形	壁一部片	縦 横 (15.8) (14.0)	厚 径	1.4	表 内 8 15 内 8 A類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ 明闇	家形埴輪壁の切妻に近くの破風から流れにかけての破 片。内面に粘土板を積み上げて形成した痕跡が残る。 破風は端部を幅3cmほど折り曲げて表現している。流れ は横方向ハケメ後破風側3~5cmほどナデ後凹縫を 巻き起状に廻りし内部を赤彩している。内面は横方向 ハケメ後複数ナデを施している。	198	

補 図 PL.No.	種 類 器 類	出上位置 残 余 量	計測値			透孔 形狀	ハケメ	胎上 ^ノ 焼成 色調	成形・整形の特徴	備 考
			縦	横	厚					
第127回 PL.115	203 形象埴輪 家形	延軸軒 端部片	縦 (12.9) (7.3)	横 厚	1.4			細砂粒・粗砂 粒/良好/橙	外表面はナデ。端部はほぼ直角に折り曲げ軒を作る。 表面は墨線を鉛筆で刷っている。	
第127回 PL.115	204 形象埴輪 家形	壁小片	縦 (6.0) (5.4)	横 厚	1.6			細砂粒/良好/ 明赤	壁の一部。表面・側面ともナデ。	
第127回 PL.115	205 形象埴輪 家形	屋根端部 小片	縦 (7.3) (5.5)	横 厚	1.2			細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ にぶい/褐	屋根端部片。端部は鈍角に曲がる。外表面は微妙にハケ メが残るが、不鮮明。内面はナデ。	
第127回 PL.115	206 形象埴輪 家形	屋根端部 小片	縦 (8.3) (5.6)	横 厚	1.1			細砂粒・粗砂 粒・礫/良好/ にぶい/褐	屋根端部片。端部は弧状に曲がる。外表面の整形不明。 内面はナデ。	
第127回 PL.115	207 形象埴輪 家形	屋根端部? ?	縦 (5.0) (2.1)	横 厚	2.6	接 合面	10 B類	細砂粒・粗砂 粒/良好/橙	詳細不明。断面四角形に整形され、貼付されていたも のが剥離、破損。貼付面にハケメが残る。	
第127回 PL.115	208 形象埴輪 家形	屋根表面 破片	縦 (10.2) (7.2)	横 厚	1.1	表	16 A類	細砂粒・粗砂 粒/良好/にぶい/ 白	家形埴輪屋根片、破片裏面に輪積み痕が残る。表面は 縱方向ハケメ後凹線を確認。凹線内は赤色。	
第127回 PL.115	209 形象埴輪 家形	壁片か	縦 (14.1) (14.3)	横 厚	1.4	表	8 A類	細砂粒・粗砂 粒/良好/橙	横断面は大きな張を描く、家形以外の可能もあり。 外表面は縱方向ハケメ、内面は縱方向ナデ。	
第127回 PL.115	210 形象埴輪 健部分片	縦 (8.7) (16.1)	横 厚	1.3	外 B類	細砂粒・粗砂 粒・礫(古赤) 粒/良好/橙	壁は僅かに気泡を呈す。外表面は縱方向ハケメ、内面は 縱方向ナデ。			
第127回 PL.115	211 形象埴輪 家形	堅魚木	長 幅 6.6 3	厚	2.3			細砂粒/良好/ 明赤	家形埴輪棟の堅魚木の一部。下面に棟との接合痕が残 る。ほぼ中央に貫通する穿孔有り。上下、側面ともナデ。	
第127回 PL.115	212 形象埴輪 家形	堅魚木	長 幅 7.0 2.8	厚	2.3			細砂粒/良好/ 明赤	家形埴輪棟の堅魚木の一部。下面の左3ほどを欠く。 ほぼ中央に貫通する穿孔有り。上下、側面ともナデ。	
第128回 PL.115	213 形象埴輪 人物埴輪	面部鼻部 分片	縦 (3.4) (2.3)	横 厚	1.6			細砂粒/良好/ 橙	鼻は顔面に貼付。鼻孔を線刻で表現している。	
第128回 PL.115	214 形象埴輪 人物埴輪	指か						細砂粒/良好/ 橙	詳細不明。表面はナデ。接合面が残る。残存長3.8cm、 径1.2×1.0cm。	
第128回 PL.115	215 形象埴輪 人物埴輪	首飾りの 一部か						細砂粒/良好/ 橙	人物埴輪首飾りの一部か。内外面ともナデ。貼付痕が 残る。縦2.3cm、幅0.6cm、厚0.4cm。断面は楕円形。	
第128回 PL.115	216 形象埴輪 人物埴輪	指か						細砂粒/良好/ 橙	詳細不明。表面はナデ。残存長2.3cm、径0.8cm。	
第128回 PL.115	217 形象埴輪 不明	手?・ 足?	縦 (6.7) 4.0	横 厚	(2.6)	外 7~ 8 B類	細砂粒/良好/ 橙	ホゾ状の差込で本体と接合。表面はハケメ。		
第128回 PL.115	218 形象埴輪 不明		縦 (5.6) (5.2)	横 厚	1.4	9 7 C類	細砂粒・粗砂 粒/良好/白	詳細不明。上下面是接合箇所か、外表面は縱方向ハケメ、 内面は縱方向ナデ。残存部右下に径0.5cmの穿孔あり。		
第128回 PL.115	219 形象埴輪 不明	破片	縦 (8.8) (6.2)	横 厚	1.3	表 16 A類	細砂粒・粗砂 粒/良好/橙	詳細不明。馬形か。残存部最上位に円形の透孔。内面 には輪積み痕が残る。表面は縦方向と斜めのハケメ、 内面はナデ。		
第128回 PL.115	220 形象埴輪 不明		縦 (4.5) (1.8)	横 厚	1.3			細砂粒/良好/ にぶい/白	器種、部位不明。裏面に貼付痕が残る。表面はナデ。	
第128回 PL.115	221 形象埴輪 不明							細砂粒/良好/ にぶい/白	詳細不明。整形は手づくね的。残存長4.9cm、幅1.6cm、 厚2.0cm。	
第128回 PL.115	222 形象埴輪 不明		縦 (4.6) (3.1)	横 厚	1.1			細砂粒・粗砂 粒/良好/明赤	詳細不明。表面と裏面の大部分が剥離。側面はナデ、 貼付面にハケメが残る。	
第129回 PL.115	223 形象埴輪 不明	ツバ端部 片	縦 (5.2) (4.7)	横 厚	1.4			細砂粒/良好/ 明赤	表面・側面とも横ナデ。	
第129回 PL.115	224 形象埴輪 不明	破片	縦 (2.6) (5.2)	横 厚	0.9	表 不 明 A類	細砂粒/良好/ 橙	詳細不明。外表面は横いハケメが不規則に施されている。		
第129回 PL.115	225 形象埴輪 不明		縦 (3.3) (5.8)	横 厚	1.4	外 15 A類	細砂粒・粗砂 粒/良好/橙	詳細不明。外表面は縦方向ハケメ、内面はナデ。		
第129回 PL.115	226 形象埴輪 不明	小片	縦 (2.9) (6.1)	横 厚	1.0			細砂粒・粗砂 粒/良好/橙	詳細不明。残存状態に輪積みがみられる。外表面はハケ メ、内面はナデ。	
第129回 PL.115	227 形象埴輪 不明	形象部小 片か	縦 (5.7) (4.4)	横 厚	1.6	表 12 14 A類	細砂粒・粗砂 粒/良好/橙	詳細不明。外表面は上部左に円形で径2.8の透孔。その 下に突部が貼付されていたが剥落。整形は斜め方向ハ ケメと突部上縦方向ハケメ。内面はナデ。		
第129回 PL.115	228 形象埴輪 不明	装飾品の 一部分						細砂粒/良好/ 明赤	平面は円形。断面は楕円形に近い。表面はナデ。径2.5 cm、厚1.4cm。	
第129回 PL.115	229 形象埴輪 不明							細砂粒/良好/ 橙	詳細不明。上部は球状、断面は楕円形。残存高2.3cm、 径1.7×1.3cm。	
第129回 PL.115	230 形象埴輪 不明							細砂粒/良好/ 橙	大刀形埴輪把柄の上に装着されている装飾品か、両側 は欠損部、上面からみると弧状を呈す。残存長3.3cm、 幅1.7cm、厚1.0cm。	

遺物觀察表

種 国 PL.No.	No.	種類 種	出土位置 残存率	計測値			透孔 形状	ハケメ	胎上・焼成 色調	成形・整形の特徴			備考	
				縦	横	(18.1) (12.0)	厚	1.5	円	—	基台部 形象部 形象部 A類	15 細砂粒・粗砂 粒・礫/良好 橙	較形埴輪基部上位から形象部の内圓左部分から左下位 基部は細かい縱方向ハケメで後間に突帶を貼付。残存部左端に翼 部接合痕が残る。形象部内圓部分にはV字形に凹線を 刻む。左上隅に青彩がみられる。内面は斜め方向ナデ。	
第12984 PL.115	231	形象埴輪 複数?	基部上位 ～形象部 下位片	高 径	(24.3) (16.0)	厚	1.6	円	—	(4.0)	外 9 13 ～ 16 A類	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好 橙	下部より上部にかけて径がややほそくなる(下16.0、 上13.5cm)。外面は縱方向ハケメ、内面は丁寧なナデ、 方向は縱方向か。	
第12985 PL.115	232	形象埴輪 不明	基部片	高 径	(22.5) <16.7	厚	1.5	円	—	外 7 C類 明暗	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好 粒・礫/良好 橙	外面は縱方向ハケメ、内面は丁寧なナデ、方向は縱方 向か。盾形埴輪(154)の基部の可能性あり。		
第12986 PL.115	233	形象埴輪 不明	基部片	高 径	(22.0) <15.4	厚	1.5	円	—	外 16 A類 /良好/明赤褐色	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好 粒・礫/良好 橙	外面は縱方向ハケメ、内面は丁寧なナデ、方向は縱方 向か。馬型埴輪(196)の基部の可能性あり。		
第12987 PL.115	234	形象埴輪 不明	基部片	高 径	(18.5) <16.0	厚	1.5	円	—	外 8 B類 明暗	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好 粒・礫/良好 橙	外面は縱方向ハケメ、内面は丁寧なナデ、一部器面摩 滅のため単位不明。		
第12988 PL.116	235	形象埴輪 不明	基部片	高 径	(16.3) <18.0	厚	1.5	円	—	外 9 B類 /良好/ぶ い赤褐色	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好 粒・礫/良好 橙	径18.0cm。外面は縱方向ハケメ、内面は縱方向ナデ。		
第12989 PL.116	236	形象埴輪 不明	基部片	高 径	(14.6) 15.5	厚	2.2	円	—	外 10 B類 小袖	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好 粒・礫/良好 橙	外面は縱方向ハケメ、内面は縱方向ナデ。		
第12990 PL.116	238	形象埴輪 不明	基部片	高 径	(21.9) 15.0	厚	1.5	円	—	外 8 B類 /良好/相	細砂粒・粗砂 粒・礫/良好 粒・礫/良好 橙	外面は縱方向ハケメ。内面は縱方向ナデ、器面摩滅の ため単位不明。	186と同一 か。	

2号墳

種 国 PL.No.	No.	縦別器種	出土位置	法量										観察内容	
				(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	
第13684 PL.116	1	長頸片刃鐵 刃部片?	夷道部土壤洗 浄	1.0+	1.0+	0.5	0.2								長頸片刃鐵片。
第13685 PL.116	2	革帯金具(3 筋)	夷道部土壤洗 浄	2.3	2.1	0.15	0.9	0.3	0.8	0.2					コハゼ形の鉄板に3つの筋 を打ちこんでいる革留金具。 本体、頭面部に金属の 痕跡無し。
第13686 PL.116	3	革帯金具(3 筋)	夷道部土壤洗 浄	2.6	2.1	0.15	0.8	0.4	0.5+	0.2					コハゼ形の鉄板に3つの筋 を打ちこんでいる革留金具。 本体、頭面部に金属の 痕跡無し。
第13688 PL.116	4	釘(大型)	夷道部土壤洗 浄	6.1	0.5	0.5	0.4	5.7	0.5	0.5					釘。
第13689 PL.116	5	釘(小型)	夷道部土壤洗 浄	4.1	0.65	0.45	0.3	3.8	0.3	0.3					釘。
第13690 PL.116	6	釘(小型)片	夷道部土壤洗 浄	2.4+	0.75	0.7	0.3	2.1+	0.4	0.4					釘。
第13691 PL.116	7	釘(小型)片	夷道部土壤洗 浄	1.9+	0.8	0.7	0.1	1.8+	0.5	0.5					釘。
第13692 PL.116	8	釘(小型)片	夷道部土壤洗 浄	1.6+	1.1	0.6	0.2	1.4+	0.4	0.4					釘。
第13693 PL.116	9	釘頭・茎片	夷道部土壤洗 浄	0.9+	0.5	0.3	0.2	0.7+	0.4	0.3					釘頭・茎。
第13694 PL.116	10	釘茎片	夷道部土壤洗 浄	3.8+				3.8+	0.4	0.4					釘茎。
第13695 PL.116	11	釘茎片	夷道部土壤洗 浄	3.9+				3.9+	0.35	0.3					釘茎。
第13696 PL.116	12	釘茎片	夷道部土壤洗 浄	2.9+				2.9+	0.3	0.3					釘茎。
第13697 PL.116	13	釘茎片	夷道部土壤洗 浄	2.9+				2.9+	0.3	0.3					釘茎。
第13698 PL.116	14	釘茎片	夷道部土壤洗 浄	2.7+				2.7+	0.5	0.4					釘茎。
第13699 PL.116	15	釘茎片	夷道部土壤洗 浄	2.8+				2.8+	0.3	0.3					釘茎。
第13700 PL.116	16	釘茎片	夷道部土壤洗 浄	2.2+				2.2+	0.2	0.2					釘茎。
第13701 PL.116	17	釘茎片	夷道部土壤洗 浄	2.3+				2.3+	0.2	0.2					釘茎。
第13702 PL.116	18	釘茎片	夷道部土壤洗 浄	2.1+				2.1+	0.3	0.3					釘茎片。
第13703 PL.116	19	釘茎片	夷道部土壤洗 浄	1.7+				1.7+	0.3	0.3					釘茎片。
第13704 PL.116	20	釘茎片	夷道部土壤洗 浄	1.9+				1.9+	0.4	0.3					釘茎。

遺物観察表

種 因 PL. No.	No.	細別器種	出土位置	法量												観察内容	
				①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫		
第1368 PL. 116	21	釘墓片	夷道部土壤洗 浄	1.9+				1.9+	0.3	0.3							釘墓。
第1368 PL. 116	22	釘墓片	夷道部土壤洗 浄	1.9+				1.9+	0.5	0.3							釘墓。
第1368 PL. 116	23	釘墓片	夷道部土壤洗 浄	1.9+				1.9+	0.2	0.2							釘墓。
第1368 PL. 116	24	釘墓片	夷道部土壤洗 浄	1.8+				1.8+	0.3	0.3							釘墓。
第1368 PL. 116	25	釘墓片	夷道部土壤洗 浄	1.6+				1.6+	0.3	0.3							釘墓。
第1368 PL. 116	26	釘墓片	夷道部土壤洗 浄	1.5+				1.5+	0.3	0.3							釘墓。
第1368 PL. 116	27	釘墓片	夷道部土壤洗 浄	1.2+				1.2+	0.4	0.35							釘墓。
第1368 PL. 116	28	釘墓片	夷道部土壤洗 浄	1.1+				1.1+	0.3	0.3							釘墓。
第1368 PL. 116	29	釘墓片	夷道部土壤洗 浄	0.7+				0.7+	0.2	0.2							釘墓。
種 因 PL. No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土・燒成・色調 石材・素材等	成形・整形の特徴										備考	
第1368 PL. 116	30	須恵器 碗	底部～体部下位 片	底	8.0	細砂粒・酸化塩・淡 黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切りか、高台は 凹付。										
第1368 PL. 116	31	土師器 鉢	口縁部～体部片	口 最	12.0 15.4	細砂粒・粗砂粒・ 良好/明黄褐	口縁部は横ナデ、体部は斜放射状のヘラミガキ。										

3号墳

種 因 PL. No.	No.	細別器種	出土位置	法量												観察内容	
				①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫		
第1418 PL. 116	1	直刀	1	67.0	58.0	2.5	0.5	59.0	9.0	1.8	0.3	0.4					直刀の長さは67cmで、60cm以上ということで、大刀の部類に入る。刃幅は2.5cmとやや細目である。切先はややふくらを持つもので、刃辺は、背と刃の分離がある箇所が複数ある。茎は、尻に向かうやや細くなる中細形で、目釘孔は1ヶ所茎尻近くに穿かれている。茎尻は茎端が曲線をなす栗尻である。
第1418 PL. 116	2	小刀	2	28.3+	19.0+	2.8	0.4	19.1+	9.2	2.3	0.4	0.4					長さは28.3cmと30cm以下で、刀の分類では、刀子の部類に入るが、工具としての刀子と考えるのは、大きさがほぼ30cmというところから困難と考え、小刀として刀に含めた。均等両側で、茎は先端に行くにつれ細くなる細形で、直線状で端が切断される一字刃である。幅(幅8cm、厚0.1cm)が間に遺存している。
第1418 PL. 116	3	足金具	1付着	4.7	0.8	0.9	0.6	0.2	0.5	4.0	2.4	0.9	0.2				足金具の完品。直刃に銅鏡していた。刀を銅鏡する装飾の一つ。もう1箇所上部のみ出土しており、合計2箇出している。
第1418 PL. 116	4	足金具下部 片	4	3.0+						3.0+	2.5	0.65	0.15				足金具の下部片。上部の吊環がある箇所は破損して無い。
第1418 PL. 117	5	大型平根脛 抉長三角形 鐵	5	13.6+	6.8+	3.1	0.4	1.9+	2.8	0.8	0.5	0.8	0.5	5.9+	0.5	0.4	大型の逆刺を持つ長三角形鐵であるが、鍔角を持ちた角形に近い形状を呈するものである。五角形鐵が出現するとともに、三角形と五角形を兼ね合わせた様な形態の鐵が出現する。片丸造である。
第1418 PL. 117	6	平根脛抉長 三角形刃部 鐵	6	9.9+	6.1	2.9	0.4	1.7	3.3	0.8	0.6	0.8	0.6	2.2+	0.6	0.4	大型の逆刺を持つ三角形鐵であるが、鍔角を持ちた角形に近い形状を呈するものである。五角形鐵が出現するとともに、三角形と五角形を兼ね合わせた様な形態の鐵が出現する。片丸造である。
第1418 PL. 117	7	大型平根脛 抉長三角形 鐵	1付着	5.0+	5.0	2.7+	0.2	1.5	1.1+	0.9	0.2						月見の逆刺が深いが、刃部全長の長さは短い。片丸造である。

遺物観察表

種 国 PL.No.	No.	細別器種	出土位置	法量												観察内容		
				①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫			
第141図 PL.117	8	大型平根脛 抉長三角形 鏡	8	11.4+	7.5	2.9	0.3	1.9	1.9	0.7	0.4	0.7	0.5	3.7+	0.5	0.4	大型の逆側を持つ長三角形鏡である。両丸造である。7世紀に出土する大型鏡の代表例である。	
第142図 PL.117	9	大型平根脛 抉長三角形 鏡	1付着	11.8+	10.3	2.9+	0.4	2.4	2.6	1.0	0.6	1.0	0.7	0.9+	0.7	0.4	大型の逆側を持つ長三角形鏡である。両丸造である。	
第142図 PL.117	10	平根重抉五 角形鏡	1付着	7.1+	3.6	2.95	0.2	0.4	1.3	0.8	0.3	0.8	0.4	2.3+	0.5	0.2	特徴的な重抉五角形鏡である。ほぼ完存。刃は平造。	
第142図 PL.117	11	平根(脛抉 長三角形)	石室内一括	3.1+	3.1+	2.7+	0.2										平根(脛抉)長三角形鏡の刃片。	
第142図 PL.118	12	平根(脛抉 長三角形)	1付着	3.2+	3.2+	1.2+	0.3										平根(脛抉)長三角形鏡の刃片。	
第142図 PL.117	13	平根脛抉長 三角形鏡	1付着	4.6+	3.6+	2.3	0.2	1.5	2.6	0.6	0.3	0.75	0.3	0.1+	0.5	0.2	刃部切先が欠失。逆側は深い。	
第142図 PL.117	14	平根脛抉長 三角形鏡	14	4.9+	1.3+	1.9+	0.3	0.9+	2.1	0.9	0.5	0.9	0.5	2.4+	0.6	0.5	逆側を持つ長三角形鏡である。片丸造である。7世紀に出土する大型鏡の代表例である。	
第142図 PL.117	15	長頭鑿前鏡	15	10.8+	0.5	0.7	0.15			6.9	0.6	0.3	0.6	0.5	2.2+	0.6	0.4	長頭鏡で先端のみ刃部を有するいわゆる鑿前鏡である。刃部に至る刃開口はなだらかな斜め闊で、闊がやや明瞭である。刃は片丸造である。闊部は、断面方形状で、四周に段差がある新しいものがある。7世紀中頃に比定される。
第142図 PL.117	16	長頭鑿前鏡	1付着	10.6+	0.5	0.6	0.2			7.2	0.5	0.3	0.5	0.5	2.9+	0.4	0.3	長頭鑿前鏡。片丸造。刃部は先端部ちかくのみにある。
第142図 PL.117	17	長頭鑿前鏡	1付着	10.6+	0.3	0.6	0.15			7.3	0.5	0.2	0.5	0.5	2.9+	0.35	0.3	長頭鑿前鏡。片丸造。刃部は先端部ちかくのみにある。
第142図 PL.118	18	長頭鑿前鏡	1付着	10.0+	0.3+	0.6	0.1			7.4	0.6	0.5	0.65	0.45	2.4+	0.4	0.3	長頭鑿前鏡。片丸造。刃部は先端部ちかくのみにある。
第142図 PL.117	19	長頭鑿前鏡	19	8.6+	0.3	0.7	0.1			7.7	0.6	0.3	0.6	0.3	0.5+	0.4	0.3	長頭鑿前鏡である。刃開部は頭部から緩やかに至る闊で、闊としては不明瞭である。刃は片丸造である。闊部は、断面方形状で、四周に段差がある新しいものがある。7世紀中頃に比定される。
第142図 PL.118	20	長頭鑿前鏡	1付着	7.9+	(0.4)	(0.5)	(0.1)			(6.8)	0.4	0.15	0.6	0.4	0.6+	0.3	0.2	長頭鑿前鏡。片丸造。刃部は先端部ちかくのみにある。
第142図 PL.118	21	長頭鑿前鏡	1付着	7.6+	(0.4)	(0.5)	(0.2)			7.2	0.3	0.2	0.5	0.3	0.3+	0.3	0.2	長頭鑿前鏡。片丸造。刃部は先端部ちかくのみにある。
第142図 PL.117	22	長頭鑿前鏡 刃・頭	22	4.9+	0.7	0.85	0.1			4.2+	0.8	0.3						長頭鑿前鏡の刃・頭部。刃開が明瞭な斜め闊である。
第142図 PL.117	23	長頭鑿前鏡	23	3.7+	0.3+	0.5	0.2			3.4+	0.5	0.2						長頭鑿前鏡の刃・頭部。刃開がなだらかで明瞭でない。
第142図 PL.117	24	長頭鑿前鏡 刃部	石室内一括	1.6+	0.4	0.95	0.15			1.2+	0.9	0.2						長頭鑿前鏡の刃・頭部。
第142図 PL.117	25	長頭鑿前鏡 刃・頭部	石室内一括	2.3+	0.6	0.8	0.2			1.7+	0.75	0.2						長頭鑿前鏡の刃・頭部。

種 国 PL. No.	No.	細別器種	出土位置	法量												観察内容
				①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	
第1438 PL.117	26	長頸縫頭・ 茎	1付着	7.7+				6.6+	0.4	0.3	0.6	0.3	1.1+	0.4	0.2	長頸縫頭と推定。刃部は欠損。
第1438 PL.117	27	長頸縫頭	1付着	3.0+									3.0+	0.4	0.3	縫茎。
第1438 PL.117	28	長頸縫頭・ 茎	1付着	8.1+				5.9+	0.4	0.3	0.6	0.5	2.2+	0.4	0.3	長頸縫頭と推定。刃部は欠損。
第1438 PL.117	29	長頸縫頭・ 茎	1付着	8.5+				5.7+	0.4	0.3	0.7	0.5	2.8+	0.3	0.2	長頸縫頭と推定。刃部は欠損。
第1438 PL.117	30	長頸縫頭・ 茎片	30	7.1+				5.5+	0.4	0.3	0.6	0.5				長頸縫の頭部・茎部である。断面正方形の四辺に茎との間に段差を有する形である。
第1438 PL.117	31	長頸縫頭片	31	5.6+				5.6+	0.4	0.3						長頸縫の頭部と推定する。
第1438 PL.117	32	長頸縫頭	1付着	5.3+				5.3+	0.3	0.25	0.4	0.3				長頸縫頭と推定。刃部は欠損。頭部のみ。
第1438 PL.117	33	長頸縫頭	1付着	3.5+				3.5+	0.3	0.2	0.3	0.2				長頸縫頭と推定。刃部は欠損。頭部のみ。
第1438 PL.117	34	長頸縫頭片	34	4.8+				4.8+	0.3	0.3	0.6	0.6				長頸縫の頭部と推定する。
第1438 PL.117	35	長頸縫頭・ 茎片	石室内一括	5.5+				4.2+	0.45	0.45	0.6	0.6	1.3+	0.4	0.3	長頸縫頭と推定。刃部は欠損。
第1438 PL.117	36	長頸縫頭・ 茎片	石室内土壤洗浄	4.6+				4.0+	0.45	0.4	0.6	0.5	0.6+	0.3	0.2	長頸縫頭と推定。刃部は欠損。
第1438 PL.118	37	長頸縫頭・ 茎片	37	4.6+				4.1+	0.4	0.3	0.8	0.6	0.5+	0.5	0.4	長頸縫の頭・茎部と推定する。
第1438 PL.118	38	長頸縫・ 茎片	1付着	4.4+				3.5+	0.4	0.2	0.5	0.4	0.8+	0.3	0.2	長頸縫頭と推定。刃部は欠損。
第1438 PL.117	39	長頸縫頭	39	3.4+				3.4+	0.5	0.3						長頸縫の頭部と推定する。
第1438 PL.118	40	長頸縫頭・ 茎片	石室内一括	4.1+				2.9+	0.4	0.4	0.6	0.6	1.2+	0.4	0.35	長頸縫頭と推定。刃部は欠損。
第1438 PL.118	41	長頸縫頭・ 茎	1付着	6.9+				2.7+	0.5	0.3	0.6	0.5	4.2	0.4	0.35	長頸縫頭と推定。刃部は欠損。
第1438 PL.116	42	長頸縫頭・ 茎片	1付着	5.6+				2.6+	0.5	0.3	0.6	0.5	4.2	0.4	0.35	長頸縫頭と推定。刃部は欠損。
第1438 PL.118	43	長頸縫頭片	43	3.0+				3.0+	0.5	0.4						長頸縫の頭部と推定する。
第1438 PL.118	44	長頸縫頭	1付着	2.8+				2.8+	0.4	0.3	0.5	0.4				長頸縫頭と推定。刃部は欠損。頭部のみ。
第1438 PL.118	45	長頸縫頭片	45	2.2+				2.2+	0.6	0.5						長頸縫の頭部である。
第1438 PL.118	46	長頸縫頭・ 茎片	46	3.4+				3.2+	0.5	0.5			1.2+	0.35	0.3	長頸縫の頭部と茎部と推定する。
第1438 PL.118	47	長頸縫頭・ 茎片	石室内土壤洗浄	2.2+				1.7+	0.7	0.3	0.6	0.4	0.6+	0.4	0.2	長頸縫頭と推定。刃部は欠損。
第1438 PL.118	48	縫頭片	石室内土壤洗浄	1.5+				1.5+	0.7	0.4						縫頭片。
第1438 PL.118	49	縫頭・茎片	石室内一括	0.9+				0.55+	0.5	0.5	0.55	0.55	0.4+	0.3	0.3	頭部・茎部片。
第1438 PL.118	50	縫茎片	50	5.1+									5.1+	0.4	0.3	長頸縫の茎と推定する。
第1438 PL.118	51	縫茎片	1付着	3.7+									3.7+	0.3	0.2	縫茎。
第1438 PL.118	52	縫茎片	石室内土壤洗浄	3.2+									3.2+	0.35	0.3	縫茎片。
第1438 PL.118	53	縫茎片	1付着	3.1+									3.1+	0.3	0.2	縫茎。
第1438 PL.118	54	縫茎片	1付着	3.2+									3.2+	0.4	0.3	縫茎。
第1438 PL.118	55	縫茎片	石室内一括	2.6+									2.6+	0.4	0.2	縫茎。
第1438 PL.118	56	縫茎片	石室内土壤洗浄	3.1+									3.1+	0.3	0.2	縫茎片。
第1438 PL.118	57	縫茎片	石室内一括	2.9+									2.9+	0.35	0.3	縫茎。

遺物観察表

種 国 PL.No.	No.	細別器種	出土位置	法量										観察内容	
				①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩		
第14386 PL.118	58	纏茎片	58	4.5+				4.5+	0.4	0.3					長頭茎の茎と推定する。
第14386 PL.118	59	纏茎片	石室土壤洗浄	2.3+								2.3+	0.25	0.2	纏茎片。
第14386 PL.117	60	纏茎片	石室内一括	2.4+								2.4+	0.35	0.2	纏茎。
第14386 PL.118	61	纏茎片	石室内土壤洗浄	2.0+								2.0+	0.35	0.3	纏茎片。
第14386 PL.118	62	纏茎片	石室土壤洗浄	1.9+								1.9+	0.4	0.3	纏茎片。
第14386 PL.118	63	纏茎片	石室一括	1.7+								1.7+	0.2	0.2	纏茎。
第14386 PL.118	64	纏茎片	石室内一括	2.4+								2.1+	0.2	0.2	纏茎。
第14386 PL.118	65	纏茎片	石室土壤洗浄	1.9+								2.6+	0.4	0.3	纏茎片。
第14386 PL.118	66	纏茎片	石室土壤洗浄	1.8+								1.8+	0.3	0.25	纏茎片。
第14386 PL.118	67	纏茎片	石室内一括	2.4+								1.6+	0.2	0.2	纏茎。
第14386 PL.118	68	纏茎片	石室土壤洗浄	1.5+								1.5+	0.3	0.2	纏茎片。
第14386 PL.116	69	纏茎片	1付着	1.2+								1.2+	0.2	0.2	纏茎。
第14386 PL.118	70	纏茎片	1付着	1.6+								1.6+	0.4	0.3	纏茎。
第14386 PL.118	71	纏茎片	石室土壤洗浄	1.4+								1.4+	0.4	0.3	纏茎片。
第14386 PL.118	72	纏茎片	石室土壤洗浄	1.3+								1.3+	0.3	0.2	纏茎片。
第14386 PL.118	73	纏茎片	石室土壤洗浄	1.0+								1.0+	0.3	0.3	纏茎片。
第14386 PL.118	74	纏茎片	石室内一括	1.0+								1.0+	0.1	0.1	纏茎。
第14386 PL.118	75	纏茎片	石室土壤洗浄	1.1+								1.1+	0.4	0.2	纏茎片。
第14406 PL.118	76	月子刈片	石室土壤洗浄	1.8+	1.8+										月子刈片。
第14406 PL.118	77	雲珠?頭部 片	石室土壤洗浄	1.3+	1.8+	0.05									円弧状を呈し、段を持つ。
第14406 PL.118	78	半円状薄板 品	石室内一括	2.5+	1.3	0.8	0.1								円形鉄製品片。
第14406 PL.118	79	釘(L字形)	石室内一括	6.4+	0.5	0.4	0.1	6.3+	0.4	0.4					釘、下半部はL字形に屈曲 している。本質の残存は無 い。
第14406 PL.118	80	釘頭片	石室内一括	2.8+	0.4	0.6	0.1	2.7+	0.35	0.3					釘破片。
第14406 PL.118	81	釘頭部片	石室土壤洗浄	1.6+	0.4	0.3	0.1	1.5							釘頭片?
第14406 PL.118	82	釘頭片	石室内一括	1.2+	0.5	0.4	0.2	1.0+	0.3	0.2					釘破片。
第14406 PL.118	83	不明	石室内一括	1.4+	0.7+	0.3+									不明品。

古墳時代 遺構外

種 国 PL.No.	種 類 器 種	出土位置	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴					備 考
			口	底		脚	脚	脚	脚	脚	
第14806 PL.118	1	須恵器 縫	5号竪穴建物 口縫部片	8.4		細砂粒/還元焰/黒 褐色	クロコ整形、回転は右回りか。口脣端部は外側に傾き、凹 みをもつ面をつくる。				
第14806 PL.118	2	上師器 杯	29-29 口縫部~体部小 片	10.8		細砂粒/良好/明赤 褐色	口縫部は横ナデ、稜下は手持ちヘラ削り。				
第14806 PL.118	3	上師器 台付甕	11号竪穴建物 上 脚部	12.8		細砂粒/良好/橙 褐色	脚部と胴部は接合か。脚部は端部が横ナデ、脚部はナデ。				
第14806 PL.118	4	上師器 高杯	2F-43 杯部底部			細砂粒/粗砂粒/ 良好/赤褐色	底部は外面がナデ、内面は放射状のヘラミガキ。				
第14806 PL.118	5	上師器 高杯	2E-44 杯9号部口縫部片	17.0		細砂粒/良好/赤褐色	口縫部は内外面とも斜放射状のヘラミガキ。				
第14806 PL.118	6	上師器 瓶	2E-45 底部~胴部下位	7.2		細砂粒/良好/にふ い赤褐色	胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデ。				
第14806 PL.118	7	須恵器 横瓶	5区 胴部片			細砂粒/粗砂粒/ 還元焰/灰	胴部は平行叩き痕が残るが、端部はカキメに部分的にナデ。 内面は同心円状アーチ痕が残る。				

種 因 PL.No.	No.	種 類 器 種	出上位置 残 有 事	計測値	胎土/焼成/色調 石 材・素 材 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第14884	8	須恵器 鏡	2区-41 胴部片		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰白	輪郭は外側の叩き痕をナデ消されているが、内面の同心円 アーチテ具痕は残る。外側に陥れ付着。	
第14884	9	須恵器 鏡	5区 胴部片		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/黄灰	輪郭は外側に同心円状アーチテ具痕が残る。	
第14884	10	須恵器 鏡	5区 胴部片		細砂粒・粗砂粒・ 礫/還元焰/黄灰	輪郭は外側に平行叩き痕、内面に同心円状アーチテ具痕が残る。	
第14884	11	土師器 鏡	5区 胴部小片		細砂粒/良好/明赤 褐	外側に轟の圧痕。	

1号集石

第15084	1	土師器 杯	1号集石 口縁部~体部片	口 底 6.8	12.0 高 4.7	細砂粒/良好/にぶ い赤	口縁部は横ナデ、体部はヘラナデ。内面は口唇部が横ナデ、 胴部から体部はヘラナデ。
第15084	2	須恵器 杯蓋	1号集石 1/6	口 底 4.8	21.2 高 4.7	細砂粒・粗砂粒/ 酸化焰/浅黄褐	クロロ整形、回転は右回り。撻は円盤状の粘土板を貼付し、 周囲を立ち上げて環状擴としている。天井部は中程まで回 転ヘラ削り。
第15084	3	須恵器 蓋	1号集石 口縁部一部欠 損	口 底 4.0	15.8 高 5.0	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/褐色	クロロ整形、回転は右回り。撻は貼付。天井部は中程まで回 転ヘラ削り。内面に重ね焼き痕がみられる。
第15084	4	須恵器 杯	1号集石 口縁部~体部片 底	口 底 8.0	13.2 高 5.0	細砂粒/酸化焰/浅 黄褐	クロロ整形、回転は右回りか。
第15084	5	須恵器 鏡	1号集石 1/2	口 底 9.2	17.0 高 8.0	細砂粒・粗砂粒/ 酸化焰/にぶい黄 褐	クロロ整形、回転は右回り。底部と体部下位は回転ヘラ削 り、高台は貼付。
第15084	6	須恵器 鏡	1号集石 口縁部・高台部 一部欠	口 底 9.7	15.1 台 10.0	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	クロロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼 付。燒成時の歪み有り。

2号集石

第15084	7	須恵器 杯	2号集石 口縁部片	口 底	12.8	細砂粒/還元焰/灰	クロロ整形、回転右回りか。
--------	---	----------	--------------	--------	------	-----------	---------------

4号集石

第15114	1	須恵器 杯	4号集石 1/3	口 底 7.8	12.4 高 3.1	細砂粒/還元焰/灰	クロロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラ起こし。
第15114	2	須恵器 鏡	4号集石 口縁部~体部片	口 底	11.9	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	クロロ整形、回転は右回りか。
第15114	3	土師器 鏡	4号集石 2/3	口 底 4.4	20.0 高 26.1	細砂粒/良好/明赤 褐	内面胴部中程に接合痕が現る。口縁部から脛部は横ナデ、 胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にかけてヘラ ナデ。
第15114	4	土師器 鏡	4号集石 口縁部~胴部上 位片	口 底	18.9	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部から脣部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。
第15114	5	土師器 鏡	4号集石 口縁部~胴部上 位片	口 底	19.8	細砂粒/良好/褐	口縁部から脣部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。
第15114	6	土師器 鏡	4号集石 底部	底	5.0	細砂粒/良好/赤褐	底部と胴部下位はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナ デ。底部に焼成後の穿孔あり。

種 因 PL.No.	No.	種別器種	出上位置	法量										観察内容	
				①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩		
第15114	7	刀子状鉄 器?片	4号集石 一括	5.2*	1.1*	0.8	0.2	4.1*	0.7	0.3					刀子状鉄片、片側面に刃ら しき形狀が認められたので 刀子状鉄器として。刃闊は 斜闊状である。

6・7号集石

種 因 PL.No.	No.	種 類 器 種	出上位置 残 有 事	計測値	胎土/焼成/色調 石 材・素 材 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考	
第15284	1	須恵器 鏡	6号集石 口縁部~体部下 位片	口 底	14.6	細砂粒/還元焰/灰 白	クロロ整形、回転は右回り。	
第15284	2	土師器 鏡	7号集石 底部~胴部下位 片	底	4.3	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にかけてヘラ ナデ。	
第15284	3	土師器 鏡	7号集石 胴部片			細砂粒/良好/赤褐	胴部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は横ナデ。	

1号土器集中

第15384	1	須恵器 杯蓋	1号土器集中 口縁部・天井部 一部欠	口 底 4.9	18.2 高 4.7	細砂粒・粗砂粒・ 礫/還元焰/灰/赤 オフ	クロロ整形、回転は右回り。撻は円盤状の粘土板を貼付し、 周囲を立ち上げて環状擴としている。天井部は中程まで回 転ヘラ削り。
第15384	2	須恵器 杯蓋	1号土器集中 口縁部片	口 底	11.8	細砂粒/還元焰/褐 灰	クロロ整形、回転は右回り。天井部は中程まで回転ヘラ削 り。
第15384	3	須恵器 杯	1号土器集中 底部片	底	10.4	細砂粒/還元焰/黄 灰	クロロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラ削り。高台は 削り出し。
第15384	4	須恵器 杯	1号土器集中 口縁部片			細砂粒/還元焰/灰 黄	クロロ整形、回転方向不明。
第15384	5	須恵器 鏡	1号土器集中 口縁部~体部片	口 底	18.0	細砂粒/還元焰/灰	クロロ整形、回転は右回り。

遺物觀察表

種 因 PL.No.	No.	種 類 器	出上位置 現 存 率	計測値		施工/成形/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第15384 PL.119	6	須恵器 甕	1号土器集中 口縁部～胴部 2/3	口 24.7	胴 38.0	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰黄	口縁部はロクロ整形、颈部にて胴部と接合。胴部は外面の 叩き痕がカキメで消されている、内面は同心円状アーチ具組 が残るが一部ナデ消されている。	
第15384 PL.119	7	須恵器 甕	1号土器集中 胴部片			細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	内面胴部に輪積み痕が残る。外面は叩き痕をナデ消してい る。内面は同心円状アーチ具組が微かに残るが、大部分はナ デ消され、破片下位は頭者なヘラナデ。	

古代面 遺構外

第15584 PL.120	1	土師器 杯	2E-30 口縁部片			細砂粒/還元焰/黃 灰	ロクロ整形。回転は右回り。	
第15584 PL.120	2	土師器 甕	2B-29 口縁部片			細砂粒/良好/橙	口縁部は内外面とも横ナデ。	
第15584 PL.120	3	土師器 甕	2C-31 底部片	底 9.0		細砂粒・粗砂粒/ 良好好/赤褐色	底部と胴部はヘラ削り。胴部は表面摩滅のため単位不明。 内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第15584 PL.120	4	須恵器 杯	6区 口縁部片			細砂粒/還元焰/ 燒/灰	ロクロ整形。回転は右回り。	
第15584 PL.120	5	須恵器 杯蓋	5区 1/3	口 15.0		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/黃灰	ロクロ整形。回転は右回り。天井部は中程まで回転ヘラ削 り。内面に重ね焼き痕が残る。	
第15584 PL.120	6	須恵器 杯	6区 1/3	口 12.0	高 3.5	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第15584 PL.120	7	須恵器 甕	2F-44 1/4	口 15.2	高 4.3	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。	
第15584 PL.120	8	須恵器 杯	6区 口縁部片			細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形。回転は右回り。	
第15584 PL.120	9	須恵器 甕	2C-41 底部一休部片	底 7.0		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/黃灰	ロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。	
第15584 PL.120	10	須恵器 甕	2C-41 底部	底 7.8		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/黃灰	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。	
第15584 PL.120	11	須恵器 甕	2E-30 底部片	底 7.8		細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第15584 PL.120	12	須恵器 甕	2E-30 底部片	底 8.0	台 8.2	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。	
第15584 PL.120	13	須恵器 甕	6区 口縁部～胴部上位 片	頭 5.8		細砂粒・黒灰/還 元焰/黃灰	ロクロ整形。回転は右回り。胴部は風船作り後口縁部を別 に作成し接合。外面部と内面口縁部の一部に陰灰が付着。	
第15584 PL.120	14	須恵器 甕	6区 胴部上半片	胴 22.2		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形。回転は右回りか。胴部下半は回転ヘラ削り。	
第15584 PL.120	15	須恵器 甕	6区 胴部下位片			細砂粒・粗砂粒/ 礫/還元焰/黃灰	ロクロ整形。回転は右回り。胴部下位は回転糸切り。外面 に薄灰付着。	

1号土坑墓

第15748 PL.120	1	古鉄 皇宋通寶	完形	外 径 内 径 2.5 2.0	孔 径 重 0.63 2.34	銅	皇宋通寶。北宋銭。	
第15748 PL.120	2	古鉄 皇宋通寶	完形	外 径 内 径 2.55 2.05	孔 径 重 0.68 2.46	銅	皇宋通寶。北宋銭。	
第15748 PL.120	3	古鉄 文様不明	完形	外 径 内 径 2.3 1.9	孔 径 重 0.6 2.76	銅	銘名不明。文字読解できず。	
第15748 PL.120	4	古鉄 洪武通寶	完形	外 径 内 径 2.45 1.98	孔 径 重 0.55 2.87	銅	洪武通寶。	
第15748 PL.120	5	古鉄 文様不明	完形	外 径 内 径 2.5 -	孔 径 重 0.55 3.03	銅	銘名不明。文字読解できず。	
第15748 PL.120	6	古鉄 元符通寶?	完形	外 径 内 径 2.55 2.00	孔 径 重 0.60 2.66	銅	元符通寶か?	

2号土坑墓

第15748 PL.120	1	古鉄 開元通寶?	完形	外 径 内 径 2.35 2.00	孔 径 重 0.65 -	銅	開元通寶か? 三枚融着 8.93g	
第15748 PL.120	2	古鉄 銘名不明	完形	外 径 内 径 2.4 -	孔 径 重 -	銅	融着のため、文字確認できず。	
第15748 PL.120	3	古鉄 銘名不明	完形	外 径 内 径 2.45 -	孔 径 重 -	銅	文様不明。	

拂 団 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴					備考
				外径 内径	孔 径重	0.60 -	鉄						
第157回 PL.120	4	古錢 天祐通寶?	完形	2.38 1.98	-	0.60 -	鉄	天祐通寶か? 三枚融着 8.07g					
第157回 PL.120	5	古錢 錢名不明	完形	2.35 -	孔 径重	-	鉄	融着のため、文字確認できず。					
第157回 PL.120	6	古錢 錢名不明	完形	2.40 -	孔 径重	0.73 -	鉄	融着のため、文字確認できず。					

3号窟

拂 団 PL.No.	No.	種別器種	出土位置	計測値										観察内容	
				①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩		
第161回 PL.120	4	織茅片	一括	1.24									1.2+	0.25	0.2 織茅片。

中世以降 道構外

拂 団 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴					備考		
				外 径 内 径	孔 径重	0.60 -	鉄								
第162回 PL.120	1	軟質陶器 刷毛	6号竪穴建物箇上 口縁部片				細砂粒/良好/黒泥	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。							
第162回 PL.120	2	土師器 口縁部～胴部上 片	28-29 口縁部	口	14.3		細砂粒/良好/にぶい泥	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。							
第161回 PL.120	3	須恵器 甕	29-28 胴部小片				細砂粒/還元焰/灰	胴部は外面に平行引き痕、内面に同心円状アーチ具筋が現る。							
拂 団 PL.No.	No.	種別器種	出土位置	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	観察内容	
第161回 PL.120	4	織茅片	一括	1.24									1.2+	0.25	0.2 織茅片。
第162回 PL.120	1	須恵器 白磁小瓶	2C-29 底部片	口 径 底 径	3.4	器 高	夾雜物なし/白	内外面に透明釉。腰部外面に縦がある。					19世紀か		
第162回 PL.120	3	瀬戸・美濃 色絵小杯	2J-44 1/2	口 径 底 径	(7.5) (3.0)	器 高	3.3	夾雜物なし/灰白	口縁端部は外側に端する。内外面に透明釉。体部外面に赤の色絵具で菊花文と唐草を描く。					19世紀後半	
第162回 PL.120	4	瀬戸・美濃 色絵小杯	1 増 2/5	口 径 底 径		器 高		夾雜物なし/白	口縁端部はゆるく外に反る。体部外面に赤の色絵具で菊花と唐草を描く。内面は無文。					19世紀後半	
第162回 PL.120	5	肥前磁 染付碗	2E-45 1/8	口 径 底 径	(10.2) (3.4)	器 高	4.9	夾雜物微量/灰白	体部外面に雪輪梅樹文か。体部下位に團線、高台に二重團線。内面は無文。					19世紀前半	
第162回 PL.120	6	肥前磁 陶肋染付碗	2D-41 体部下位～高台 部	口 径 底 径	(4.0)	器 高		夾雜物微量/暗灰	体部外面に不明文。体部下位と高台に團線。高台端部は鉄脚。高台脇と高台の一部を荒く打ち欠いて円盤状に加工か。					江戸時代 第二次加工品か	
第162回 PL.120	7	瀬戸・美濃 磁器 染付碗	1 増 1/2	口 径 底 径	(11.0) (4.0)	器 高	5.3	夾雜物なし/白	口縁端部は外側に端する。口縁端部直下と体部外面下位を團線で。さらに縦線で区画し、草花文。高台脇と高台に團線。口縁端部直下内面に二重團線。見込みに團線。底部中央に崩し跡有。					19世紀末から 20世紀初頭	
第162回 PL.120	8	瀬戸・美濃 磁器 染付碗	1 増 1/2	口 径 底 径	(11.0) 3.4	器 高	5.2	夾雜物なし/白	口縁端部は外側に端する。口縁端部直下と体部外面下位を縦線で。さらに縦線で区画し、半菊や草文を描く。高台脇と高台に團線。口縁部下面内面に横線文。見込みに團線。底部中央に鳥のような不軌文。					19世紀末から 20世紀初頭	
第162回 PL.120	9	瀬戸・美濃 陶器 碗	1 増 体部～高台部	口 径 底 径	(5.5)	器 高		夾雜物少量/灰白	内面と体部外面に褐色の鉄釉。体部外面下位から高台は無釉。高台に墨書きか。					江戸時代	
第162回 PL.120	10	肥前磁 染付皿	2F-44 1/8	口 径 底 径	(13.9) (9.2)	器 高	3.9	夾雜物なし/灰白	体部外面に不明文。体部下位と高台脇に團線。蛇の目凹形高台。体部内面は口縁端部下に團線。丸い窓給内に植物か、亀甲文を描く。見込みに二重團線。底部中央に不明文。					18世紀後半か ら19世紀前半	
第162回 PL.120	11	肥前磁器 染付段重	5 区 体部破片	口 径 底 径		器 高		夾雜物なし/白	体部外面は線描きで植物などを描く。口縁端部と底部縁は無釉。					19世紀前半	
第162回 PL.120	12	瀬戸・美濃 陶器 片口	5 区 口縁部～体部	口 径 底 径	15.8	器 高		夾雜物微量/灰白	口縁端部は内側に折線状に肥厚する。内面から体部外面下位まで灰釉。体部外面下位は無釉。					江戸時代	

遺物觀察表

拂 図 PL.No.	No.	種 類	出上位置 残 存 率	計測値			施工/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
				口 径 底 径	器 高	1.4				
第16284 PL.120	13	瀬戸・美濃 陶器 灯明皿	2埴 4/5	6.8 3.2	器 高	1.4	夾雜物微量/褐灰	体部外面以下は回転ヘラケズリ。内面から底部外際まで 銷輪。体部外面から底部は銷輪を拭う。底部内面に輪状の 重ね焼き痕。	19世紀	
第16285 PL.120	14	瀬戸・美濃 陶器 灯明皿	3埴 1/3	6.4 2.7	器 高	1.75	夾雜物微量/灰白	体部外面以下は回転ヘラケズリ。内面から口縁部外面に筋 輪。底部外面は無輪。	19世紀	
第16286 PL.120	15	生産地不詳 陶器 灯明皿	3埴 完形	7.8 3.6	器 高	1.5	夾雜物微量/褐灰	体部外面以下はナデ。内面から口縁部外面に灰輪。体部外 面から底部は薄く銷輪を施す。口縁部外面に煤が付着。	19世紀	
第16287 PL.120	16	生産地不詳 陶器 灯明皿	3埴 2/3	8.0 3.0	器 高	1.65	夾雜物微量/黄灰	体部外面以下はナデ。内面から口縁部外面に灰輪。体部外 面から底部は無輪。体部外面下位に輪状の重ね焼き痕。	19世紀	
第16288 PL.120	17	生産地不詳 陶器 灯明皿	3埴 破片	8.4 (3.0)	器 高	1.8	夾雜物微量/淡黄	体部外面以下は回転ヘラケズリ。内面に灰輪、細かな買入 がある。外面は無輪で底部はゆるく凹む。口縁部外面に煤 が付着。	19世紀	
第16289 PL.120	18	瀬戸・美濃 陶器 灯明皿	5区 1/4	10.0 4.0	器 高	1.9	夾雜物微量/灰黄	体部外面以下は回転ヘラケズリ。内面から口縁部外面に銷 輪。底部外面は銷輪を拭う。底部内面に輪状の重ね焼き痕。	19世紀	
第16290 PL.120	19	生産地不詳 陶器 灯明皿	2埴 1/3	11.0 (4.0)	器 高	1.8	夾雜物微量/灰白	内面は灰輪。外面は回転ヘラケズリで薄く銷輪を施す。内 面底部分に力方が重ね焼き痕。	19世紀	
第16291 PL.120	20	產地不詳開 器 灯明受皿	1埴 1/3	10.2 (4.0)	器 高		夾雜物微量/灰白	受け端部は口縁部より背が低い。体部以下外面は回転ヘ ラケズリで、薄く銷輪を施す。底は緩やかに中央に窪む。 内面に灰輪を施し買入が入る。	19世紀	
第16304 PL.120	21	產地不詳開 器 蒸籠網	1埴 底部分	器 高	10.5		夾雜物少量/にぶ い褐	断面にはぶい褐色。外面表面は赤褐色。底部片。底部と体 部端部内面に湯穴を設け、内側に小孔を2列に開ける。外面 には蒸氣管が上下に通る。内面と蒸氣管の口縁部は白色 釉で、内面の小孔部分と体部外面と底部は無釉。	近現代	
第16308 PL.120	22	土製品 玩具	1埴 完形	幅 縦 横	1.65 2.1	厚	0.8	夾雜物微量/相 型に上を押して成形。童子の泥面子。顔面に左右に分けた 髪形で口元には歯がちかられる。	江戸時代か	
第16308 PL.120	23	土製品 玩具	5区 完形	器 高	1.15		2.25	夾雜物微量/相 型に上を押して成形。七福神の寿老人の泥面子か。右手に 朝帽、左手に宝珠を持ち頭巾をかぶる。	江戸時代か	
第16309 PL.120	24	土製品 玩具	1埴 1/2	幅 縦 横	1.8+ 1.8	厚	0.65	夾雜物微量/相 型に上を押して成形。昆虫の蝶形の泥面子か。	江戸時代か	
第16309 PL.121	25	土製品 土人形	2埴 完形	口 径 底 径	2.0	器 高	4.8	夾雜物微量/相 前後の型を合わせて成形。接合部はナデ。内部は空洞で底 部は開口する。正座した福荷像で頭部の顔面が欠損。台座 正面に窓船状の複線模様。	年代不詳	
第16309 PL.121	26	土製品 土人形	1型状 ほぼ完形	口 径 底 径	1.4+	器 高	4.3	夾雜物微量/にぶ い相	前の型を合わせて成形。内部は空洞で底部は開口し、背 面が欠損。正座した福荷像で頭部の左耳が欠損。台座正面 に窓の突帯が並ぶ。	年代不詳
第16309 PL.121	27	土製品 土人形	1型状 1/4	口 径 底 径	1.4+	器 高	3.2+	夾雜物微量/にぶ い相	前の型を合わせて成形。内部は空洞で頭部と体部背面が 欠損。正座した福荷像で台座正面に窓の突帯が並ぶ。	年代不詳
第16309 PL.121	28	土製品 土人形	1型状 1/3	口 径 底 径		器 高	3.7+	夾雜物微量/相	前の型を合わせて成形。内部は空洞で頭部下の表面が欠 損。正座した福荷像。	年代不詳
第16309 PL.121	29	土製品 土人形	2F-44 1/2	口 径 底 径		器 高	3.2+	夾雜物微量/相	前の型を合わせて成形。接合部はナデ。内部は空洞で体 部下位と台座が欠損。正座した福荷像で顔の口部分が欠 損。	年代不詳
第16309 PL.121	30	土製品 土人形	2F-44 1/3	口 径 底 径		器 高	3.5+	夾雜物微量/にぶ い相	前の型を合わせて成形。内部は空洞で背面と台座が欠損。 正座した福荷像。	年代不詳
第16309 PL.121	31	古銭 寛永通寶	5区 1/3	外 径 (2.5) (2.15)	孔 径 重	-	1.14	嗣	寛永通寶の破片。新寛永と想定。寛文8(1697)年～鑄造。	
第16309 PL.121	32	古銭 寛永通寶	1埴 完形	外 径 (2.4) (1.9)	孔 径 重	0.6 2.59		嗣	寛永通寶。背文無し。新寛永で寛文8(1697)年～鑄造。	

拂 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出上位数 残 有 率	計測値			施工/積成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴				備 考
				外 径 内 径	2.4 2.05	孔 径 重		0.6 2.35	銅			
第1638号 PL.121	33	古錢 寛永通寶	ZD-42 完形	外 径 内 径	2.2 1.65	孔 径 重	0.55 1.69	銅				寛永通寶。新寛永。寛文8(1697)年～鋳造。
第1638号 PL.121	34	古錢 寛永通寶	ZE-42 完形	外 径 内 径	2.2 1.65	孔 径 重	0.55 1.69	銅				寛永通寶。大阪高津鋳造。寛保元(1740)年～鋳造。
第1638号 PL.121	35	古錢 寛永通寶	I 填 完形	外 径 内 径	2.3 -	孔 径 重	0.63 -	銅				寛永通寶、鉄一文銭は元文4(1738)年～。銅四文銭は、万延元(1861)年から鋳造された。三枚融着 9.09g
第1638号 PL.121	36	古錢 寛永通寶	I 填 完形	外 径 内 径	2.4 -	孔 径 重	- -	銅				寛永通寶、鉄一文銭は元文4(1738)年～。銅四文銭は、万延元(1861)年から鋳造された。
第1638号 PL.121	37	古錢 寛永通寶	I 填 完形	外 径 内 径	2.3 -	孔 径 重	0.53 -	銅				寛永通寶、鉄一文銭は元文4(1738)年～。銅四文銭は、万延元(1861)年から鋳造された。
第1638号 PL.121	38	古錢 文久永寶	I 壓狀 完形	外 径 内 径	2.7 2.13	孔 径 重	0.73 3.65	銅				文久永寶。草文。

時代不明

第1640号 PL.121	1	土製品 勾玉	表採 完形	長 幅	5.0 2.8	厚 孔	1.8 0.3	夾雜物無/良好/灰 黄	外面はナデ。			重量2.7g				
第1640号 PL.121	2	石製品 硯石	ZE-45 2/3	長 幅	(5.5) 2.8	厚 重	1.2 34.4	粗粒輝石安山岩	表面裏面は全体的に滑らかであり紙面と判断される。左右両側面と下部小口面も比較的滑らかであり紙面として機能した可能性がある。							
拂 図 PL.No.	No.	彌別器種	出上位置	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	観察内容
第1640号 PL.121	3	月子	5区 表上	2.6+	0.8+	0.95	0.2	1.8	0.65	0.2						刀子の刃の一部と茎が生存する。刃闊は肉闊で角闊である。茎尻は直線状の一文字尻である。
第1640号 PL.121	4	月子片	6区 一括	7.9+	4.2+	1.2	0.3	3.7	1.0	0.25						刀子の刃の一部と茎遺存。肉闊で、角闊である。茎尻は直線状の一文字尻である。
第1640号 PL.121	5	釘?	5区 表上	4.1+	1.5+	0.8	0.7	3.4+	0.7	0.7						やや大型の釘。
第1640号 PL.121	6	方形鉄薄板 品	5区 表上	3.7	2.5	0.15	0.2									中央に穿孔のある方形鉄板である。時期的に新しいものの可能性もある。
第1640号 PL.121	7	沿手状鉄製 品	6区 一括	4.5+	1.9+	2.4+	0.3	2.7	1.4	0.2						沿手状柄がついた鉄器。側部がやや屈曲する。

写 真 図 版



5区遺構調査状況 東より



5区調査状況 空撮(手前南)



6区調査状況 西上方より



6区調査状況 空撮(手前南)



5区旧石器2D-44Gr.全景 西より



5区旧石器2D-44Gr.東壁 西より



5区旧石器2I-41Gr.全景 西より



5区旧石器2I-41Gr.東壁 西より



6区旧石器2E-31Gr.全景 南東より



6区旧石器2E-31Gr.東壁 東より



6区旧石器2E-32Gr.全景 南東より



6区旧石器2E-32Gr.東壁 東より



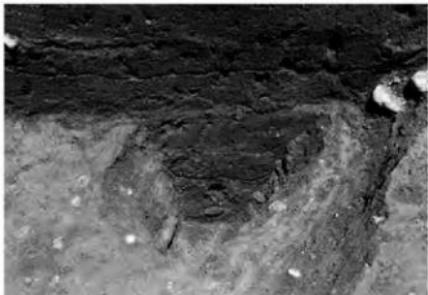
1号竪穴建物全景 東より



1号竪穴建物Aセクション 東より



1号竪穴建物Bセクション 南より



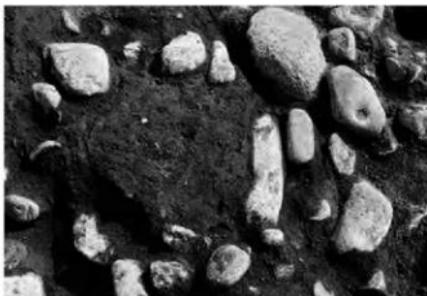
1号竪穴建物ピット1セクション 南より



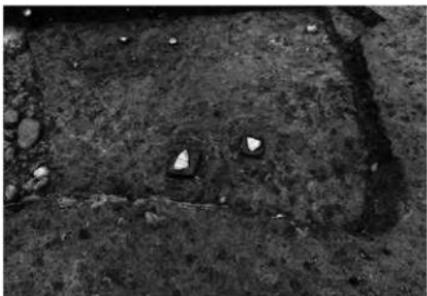
1号竪穴建物ピット3セクション 東より



1号竖穴建物遺物出土状況 東より



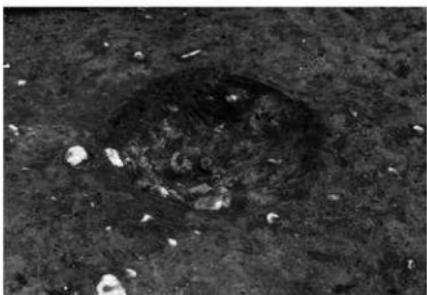
1号竖穴建物焼土出土状況 西より



1号竖穴建物遺物出土状況 南より



1号竖穴建物床下全景 東より



1号竖穴建物床下土坑Ⅰ全景 南より



4号竪穴建物全景 北より



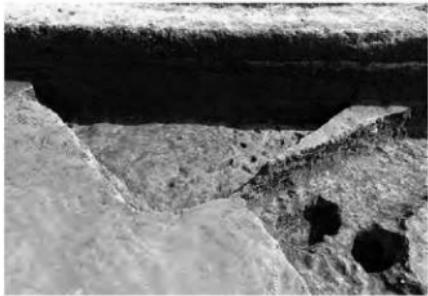
4号竪穴建物Aセクション 北より



4号竪穴建物遺物出土状況 北より



4号竪穴建物遺物出土状況 西より



4号竪穴建物床下全景 北より



5号竖穴建物全景 西より



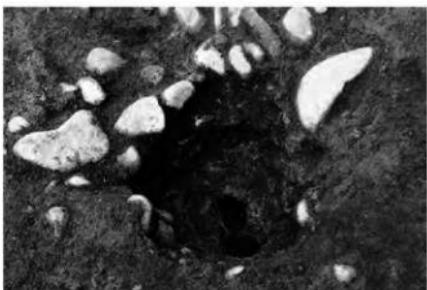
5号竖穴建物Aセクション 西より



5号竖穴建物Bセクション 南より



5号竖穴建物ピット1 全景 西より



5号竖穴建物ピット2 全景 西より



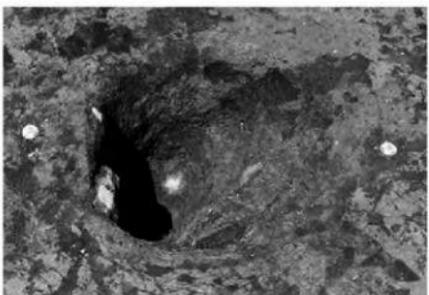
7号竖穴建物全景 東より



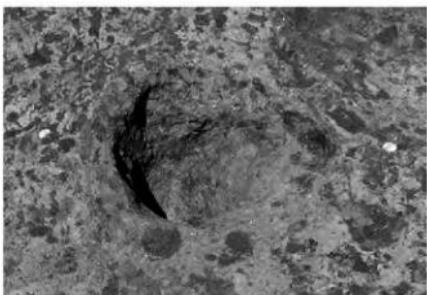
7号竖穴建物とビット 南より



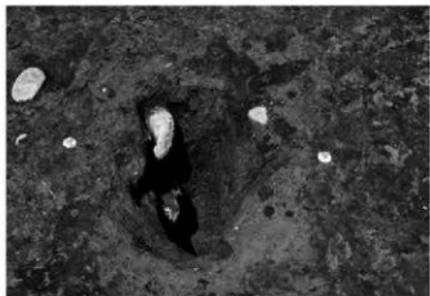
7号竖穴建物 Aセクション 東より



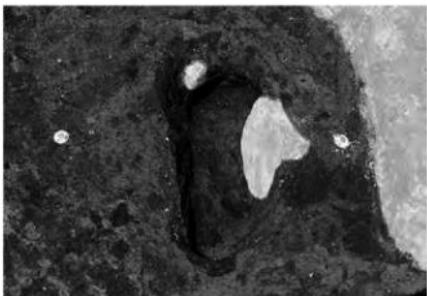
7号竖穴建物ビット 1 全景 東より



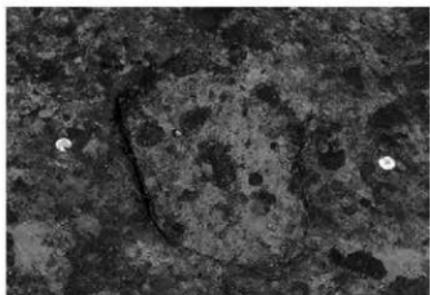
7号竖穴建物ビット 2 全景 東より



7号竪穴建物ピット3全景 東より



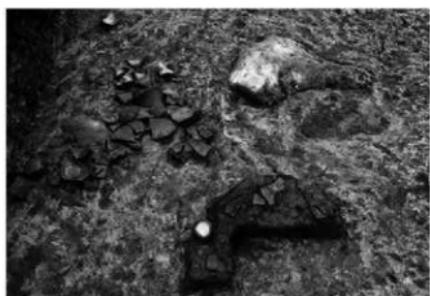
7号竪穴建物ピット4全景 東より



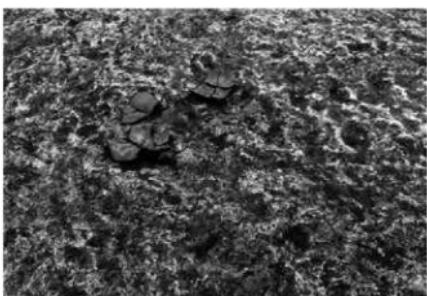
7号竪穴建物ピット5全景 東より



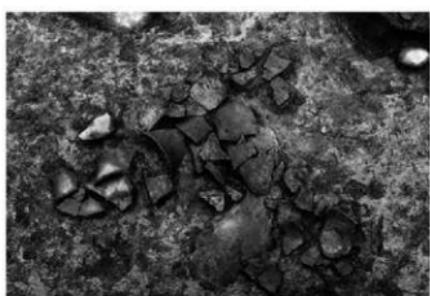
7号竪穴建物ピット6全景 東より



7号竪穴建物遺物出土状況 南より



7号竪穴建物遺物出土状況 南より



7号竪穴建物遺物出土状況 南より



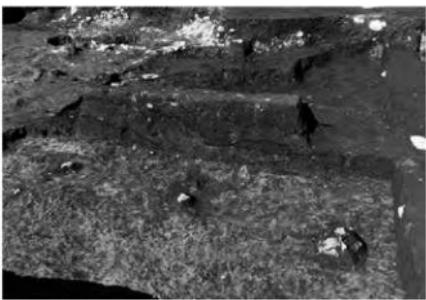
7号竪穴建物(19)出土状況 南より



10号竖穴建物全景 西より



10号竖穴建物 Aセクション北側 西より



10号竖穴建物 Aセクション南側 西より



10号竖穴建物炉セクション 西より



10号竖穴建物炉全景 西より



10号竪穴建物床下全景 西より



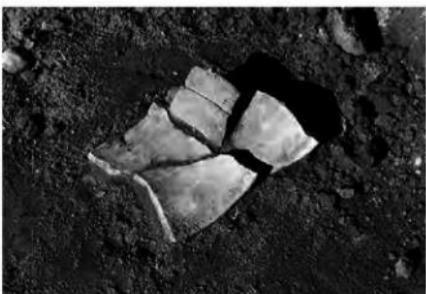
10号竪穴建物遺物出土状況 南より



10号竪穴建物遺物出土状況 西より



10号竪穴建物遺物出土状況 東より



10号竪穴建物遺物出土状況



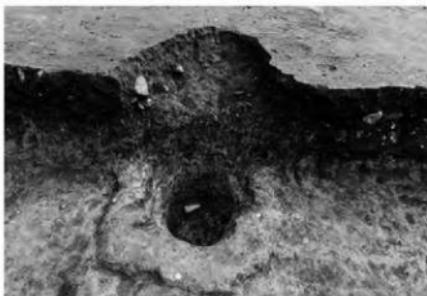
11号竪穴建物全景 西より



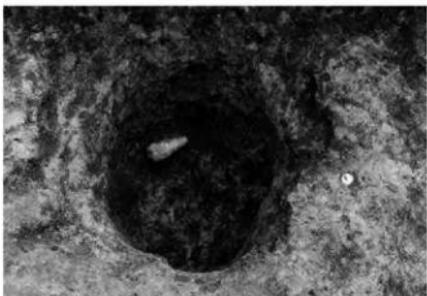
11号竪穴建物Bセクション 南より



11号竪穴建物ピット4セクション 西より



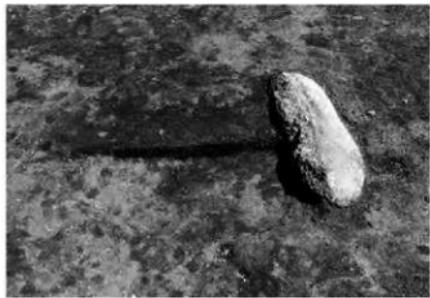
11号竪穴建物ピット8全景 北より



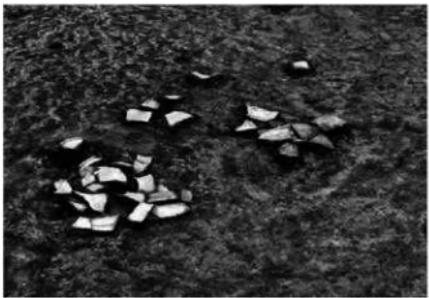
11号竪穴建物ピット8全景 北より



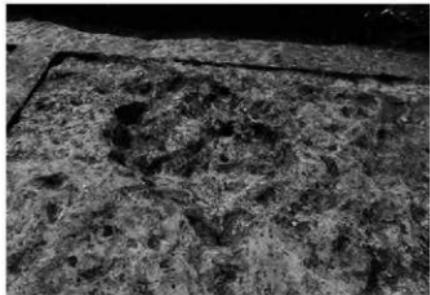
11号竪穴建物遺物出土状況 西より



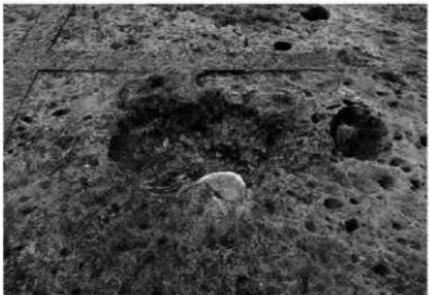
11号竪穴建物炉セクション 西より



11号竪穴建物遺物出土状況 西より



11号竪穴建物床下土坑1 全景 東より



11号竪穴建物床下土坑2 全景 東より



12号竪穴建物全景 北より



12号竪穴建物炉全景 北より



12号竪穴建物遺物(1)出土状況 南より



12号竪穴建物遺物(4)出土状況 南より



12号竪穴建物床下全景 西より



13号竪穴建物全景 東より



13号竪穴建物Aセクション北側 西より



13号竪穴建物Aセクション南側 西より



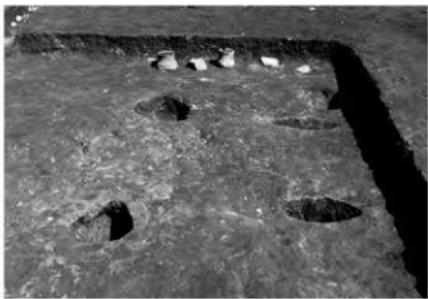
13号竪穴建物炉セクション 東より



13号竪穴建物(10)出土状況 西より



13号竪穴建物遺物(3～5)出土状況 西より



13号竪穴建物遺物出土状況 西より



13号竪穴建物左から4・5・3出土状況 西より



13号竪穴建物遺物出土状況 南より



13号竪穴建物床下全景 東より



16号竪穴建物全景 南より



16号竪穴建物セクション 南西より



16号竪穴建物ピット 6・7 全景 南より



16号竪穴建物ピット 8 全景 南より



16号竪穴建物遺物出土状況 東より



16号竪穴建物床下全景 東より



16号竪穴建物遺物出土状況 北より



16号竪穴建物遺物(1)出土状況 南より



16号竪穴建物遺物出土状況 南より



16号竪穴建物床下



17号竪穴建物全景 北より



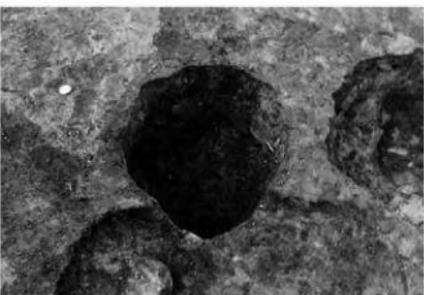
17号竪穴建物セクション 西より



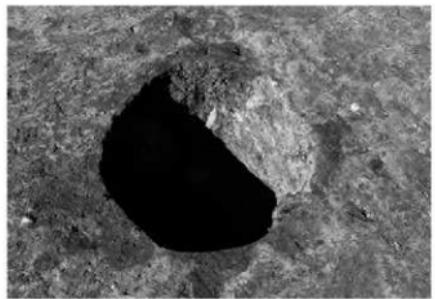
17号竪穴建物 Aセクション 南より



17号竪穴建物 Bセクション 西より



17号竪穴建物 ピット 2 全景 南より



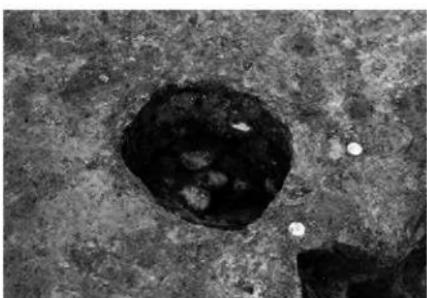
17号竪穴建物ピット3全景 南より



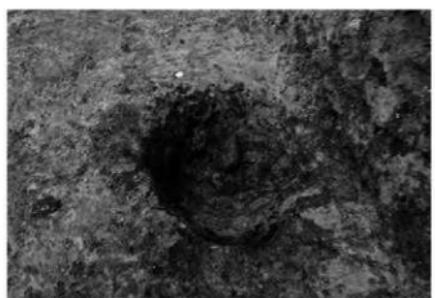
17号竪穴建物ピット4全景 南より



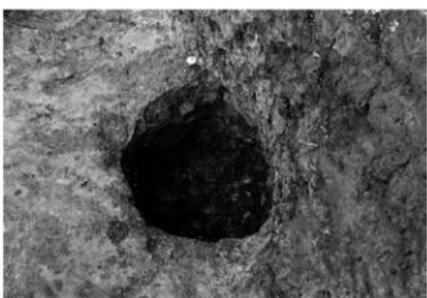
17号竪穴建物ピット18全景 北より



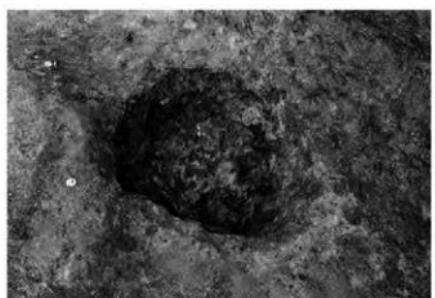
17号竪穴建物ピット8全景 南より



17号竪穴建物ピット13全景 南より



17号竪穴建物ピット14全景 南より



17号竪穴建物ピット16全景 南より



17号竪穴建物炉セクション 南より



17号竪穴建物遺物出土状況 北より



17号竪穴建物炉全景 西より



17号竪穴建物遺物出土状況 南より



17号竪穴建物遺物出土状況 南より



17号竪穴建物遺物出土状況 南西より



17号竪穴建物遺物出土状況



17号竪穴建物遺物(10)出土状況 南より



17号竪穴建物遺物出土状況 南より



17号竪穴建物遺物出土状況 北より



17号竪穴建物炭化物出土状況



17号竪穴建物床下全景 北より



17号竪穴建物調査風景 西より



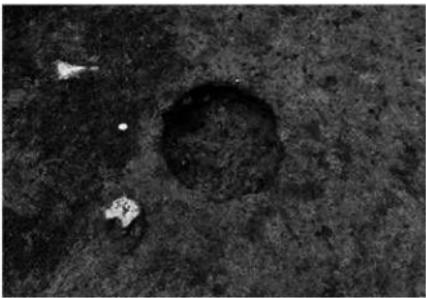
17号竪穴建物調査風景



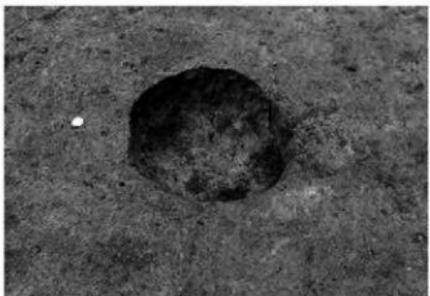
19号竪穴建物全景 南より



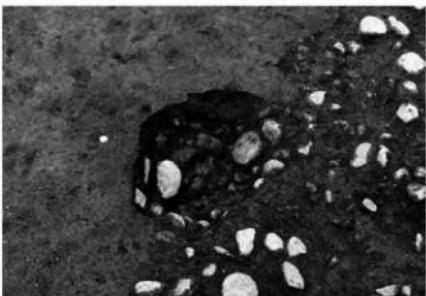
19号竪穴建物セクション 南より



19号竪穴建物ピット 1 全景 南より



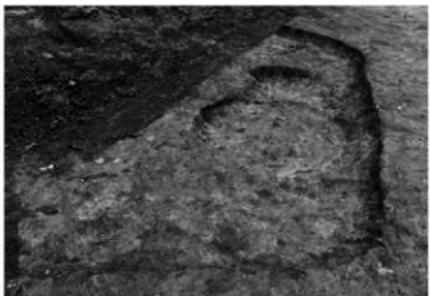
19号竪穴建物ピット 2 全景 南より



19号竪穴建物ピット 3 全景 南より



20号竪穴建物全景 南より



20号竪穴建物全景 西より



20号竪穴建物 A セクション 南より



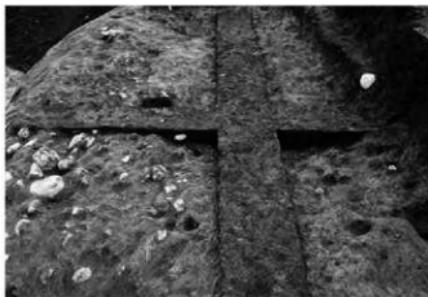
20号竪穴建物全景 北より



20号竪穴建物 ピット 1 全景 南より



21号竖穴建物全景 西より



21号竖穴建物全景 南より



21号竖穴建物 Bセクション 南西より



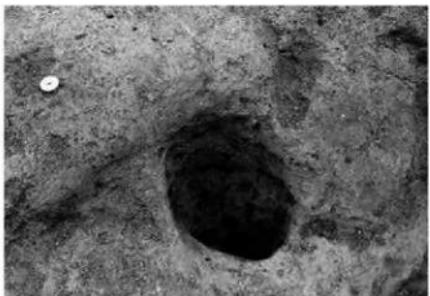
21号竖穴建物ピット1セクション 南より



21号竖穴建物ピット2セクション 南より



21号竪穴建物遺物出土状況 西より



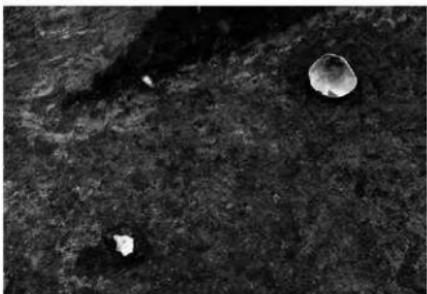
21号竪穴建物ピット 4 全景 北より



21号竪穴建物遺物出土状況 南より



21号竪穴建物遺物出土状況 北より



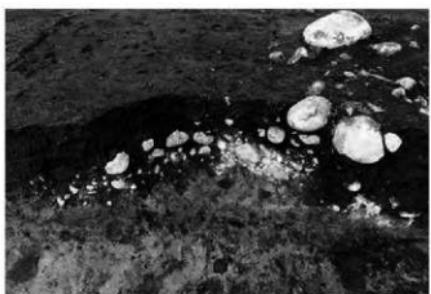
21号竪穴建物遺物出土状況 南より



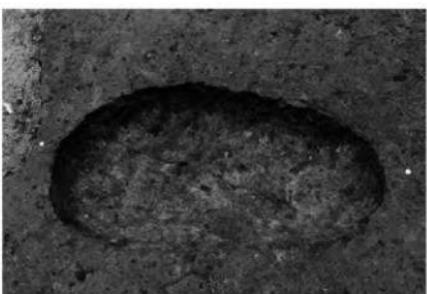
5区11号土坑全景 南より



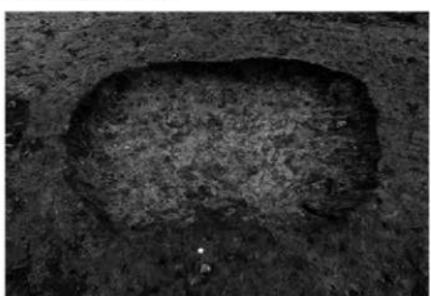
5区11号土坑セクション 東より



5区17号土坑全景 西より



5区18号土坑全景 南東より



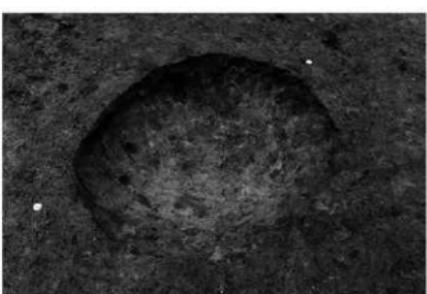
5区19号土坑全景 南より



5区20号土坑セクション 南より



5区22号土坑全景 南より



5区23号土坑全景 南より



3号竖穴建物全景 西より



3号竖穴建物Bセクション 南より



3号竖穴建物遺物出土状況 南西より



3号竖穴建物カマドセクション 南より



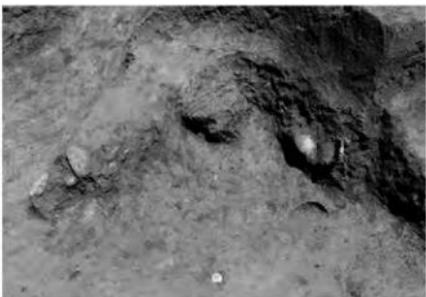
3号竖穴建物貯穴全景 西より



3号竪穴建物床下全景 北より



3号竪穴建物ピット3全景 西より



3号竪穴建物遺物出土状況 南より



3号竪穴建物遺物出土状況 南より



3号竪穴建物床下全景 北より



6号竪穴建物全景 西より



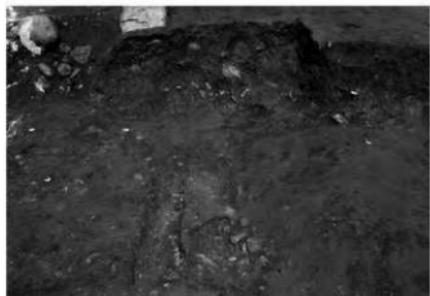
6号竪穴建物セクション 西より



6号竪穴建物カマドセクション 南より



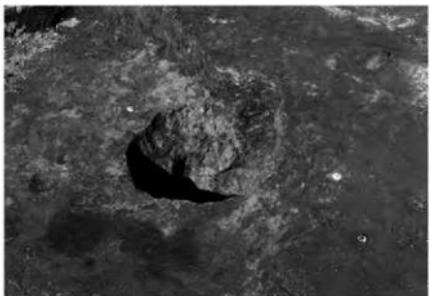
6号竪穴建物カマド全景 西より



6号竪穴建物カマド掘方全景 西より



6号竪穴建物遺物出土状況 西より



6号竪穴建物ビット1 全景 西より



6号竪穴建物ビット2 全景 西より



6号竪穴建物遺物出土状況 南より



6号竪穴建物遺物出土状況 南東より



8号竪穴建物床下全景 西より



8号竪穴建物Aセクション 南より



8号竪穴建物Bセクション 西より



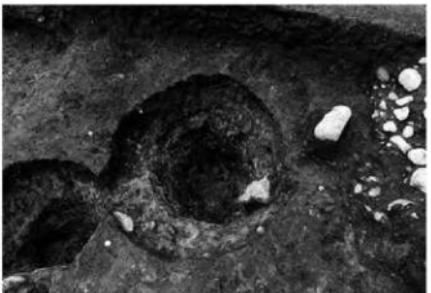
8号竪穴建物カマド全景 西より



8号竪穴建物カマド1セクション 南より



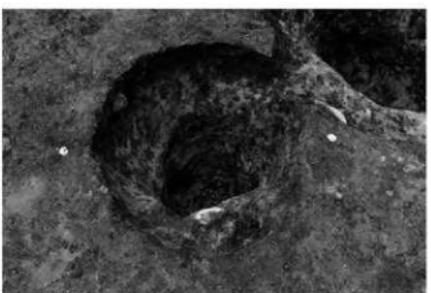
8号竪穴建物貯蔵穴セクション 西より



8号竪穴建物貯蔵穴全景 西より



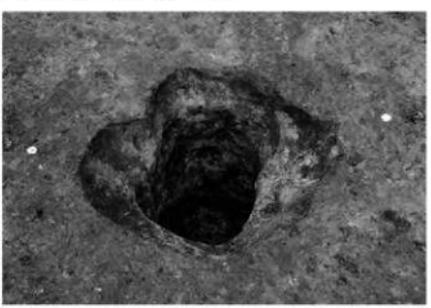
8号竪穴建物ピット1全景 西より



8号竪穴建物ピット2全景 西より



8号竪穴建物ピット3全景 西より



8号竪穴建物ピット4全景 西より



8号竪穴建物カマド付近遺物出土状況 西より



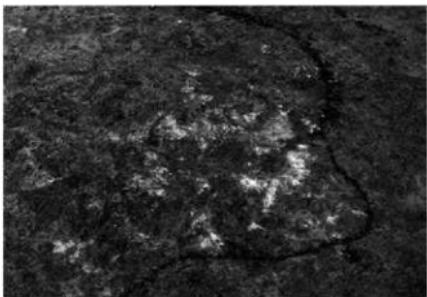
8号竪穴建物土製勾玉(16)出土状況 西より



15号竪穴建物全景 南東より



15号竪穴建物Aセクション 南東より



15号竪穴建物床面粘土出土状況 南より



15号竪穴建物遺物出土状況 南東より



15号竪穴建物遺物出土状況 南より



15号竪穴建物遺物出土状況 東より



15号竪穴建物遺物出土状況 北東より



15号竪穴建物遺物出土状況 南より



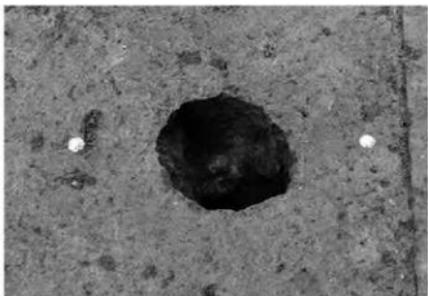
15号竪穴建物床下全景 南東より



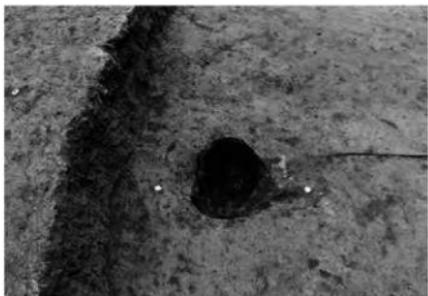
15号竪穴建物床下全景 北東より



1号竖穴状遺構全景 北西より



1号竖穴状遺構ピット 1 全景 南より



1号竖穴状遺構ピット 2 全景 南より



1号竖穴状遺構Aセクション 南西より



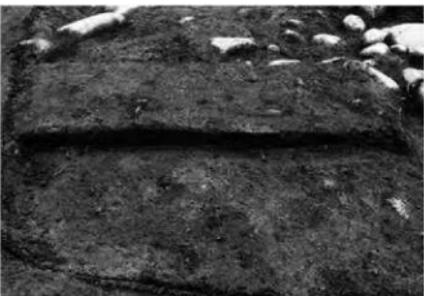
1号竖穴状遺構床下全景 西より



2号竖穴状遺構全景 南東より



2号竖穴状遺構 Aセクション 東より



2号竖穴状遺構 Aセクション 東より



2号竖穴状遺構遺物出土状況 東より



2号竖穴状遺構遺物出土状況 東より



3号竪穴状遺構全景 西より



3号竪穴状遺構セクション 南より



3号竪穴状遺構Bセクション 南西より



3号竪穴状遺構セクション



3号掘立柱建物全景 南西より



1号掘立柱建物全景 北より



2号掘立柱建物全景 南より



古墳群調査状況 東より



古墳群調査状況 空撮



1号填完掘状況 空撮



1号填調査前風景 東より



1号填調査風景 東より



1号填調査前現状 南より



1号填調査風景 北より



1号墳調査風景 西より



1号墳Bトレンチ掘削状況 南東より



1号墳Cトレンチ掘削状況 南より



1号墳Bトレンチ裏込めセクション 西より



1号墳埴丘西側状況 北西より



1号墳石室西側状況 南西より



1号墳裏込めCセクション 西より



1号墳Cセクション(埴丘列石部) 西より



1号墳羨道閉塞、墓道完掘 南東より



1号墳羨道閉塞、墓道完掘 南東より



1号墳羨道閉塞状況、墓道 南西より



1号墳墓道Eセクション 南より



1号墳周堀 北西より



1号墳Eトレンチセクション 南より



1号墳周堀Fセクション 南西より



1号墳北側周堀 北より



1号墳周堀西側完掘 南西より



1号墳石室羨門前天井石崩落状況 南東より



1号墳羨門部調査状況 南より



1号墳羨門東埴輪出土状況 南より



1号墳石室天井石崩落状況 南東より



1号墳羨門前遺物出土状況 南より



1号墳石室羨門付近遺物出土状況 南より



1号墳石室羨門付近遺物出土状況 東より



1号墳羨門西側186・238・93・87出土状況 東より



1号墳羨道閉塞状況、墓道遺物出土状況 南東より



1号墳墓道遺物出土状況 南より



1号墳羨門西側埴輪出土状況 東より



1号墳墓道遺物出土状況 南より



1号墳羨門西側円筒埴輪(48)出土状況 東より



1号墳周門西側遺物(190・186)出土状況 南より



1号墳周門東円筒埴輪(47)出土状況 南より



1号墳周門東側埴輪(51・107)出土状況 東より



1号墳周門東側朝顔形埴輪(107)出土状況 北より



1号墳周堀南西部上層埴輪出土状況 南より



1号墳南西側遺物出土状況 南より



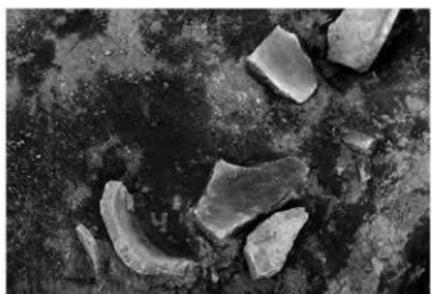
1号墳西側遺物出土状況 南東より



1号墳円筒埴輪(55)出土状況 東より



1号墳円筒埴輪(50)出土状況 東より



1号墳埴輪(233)出土状況 東より



1号墳周堀上層埴輪出土状況 南西より



1号墳周堀南西部上層西側出土状況 西より



1号墳南西部埴輪出土状況 南より



1号墳周堀西側上層遺物出土状況 北より



1号墳周堀北側上層埴輪(175・154・224)出土状況 北より



1号墳周堀北東側周堀上層埴輪出土状況 北東より



1号墳周堀北側上層埴輪(46・65・154・113)出土状況 北より



1号墳周堀北東側上層埴輪(111・191・180)出土状況 北より



1号墳周堀北側上層埴輪(46・65・154・113)出土状況 西より



1号墳周堀北東側上層埴輪(111・191・180)出土状況 西より



1号墳周堀西側埴輪出土状況 北西より



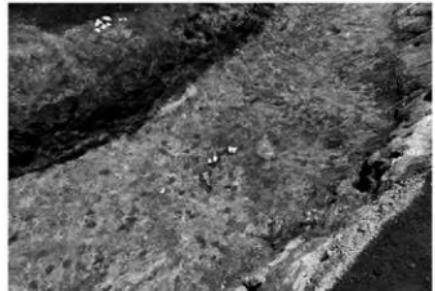
1号墳埴輪(110・62・176・160)出土状況 北西より



1号墳内筒埴輪(50)出土状況 西より



1号墳北西部埴輪出土状況 西より



1号墳形象埴輪(114)出土状況 北より



1号墳形象埴輪(114)出土状況 北より



1号墳掘方完掘状況 南より



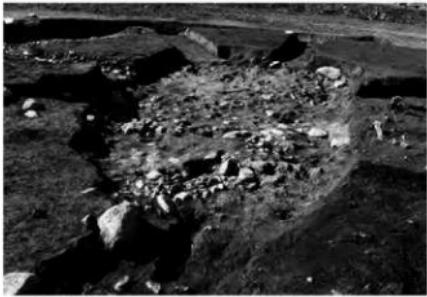
1号墳掘方と背景の岩櫃山 西より



1号墳石室掘方全景 南より



1号墳石室掘方全景 東より



1号墳石室掘方全景 南西より



1号墳石室掘方調査状況 東より



1号墳掘方調査状況 北東より



1号墳石室掘方調査状況 北より



1号墳石室掘方全景 西より



1号墳調査風景



1号墳調査風景



1号墳壁石外し作業風景 西より



1号墳調査風景



1号填玄室床面下部調査状況 北より



1号填玄室床面下部調査状況 南東より



1号填狭門床面下状況 南東より



1号填狭道床下敷石面(鋪石) 南東より



1号填溝道床面下状況 北西より



1号填溝道床面状況 南東より



1号填溝道床面下層 南西より



1号填溝道床面下 北西より



1号填溝道敷石面 南西より



1号墳玄室床面 北西より



1号墳玄室床面状況 北西より



1号墳羨道閉塞、玄室床面検出状況 南東より



1号墳トレンチ完掘状況 南西より



1号墳石室全景 北西より



1号墳玄室床面、義道閉塞状況 北西より



1号墳石室全景 南より



1号墳全景 北より



1号墳全景 南東より



1号墳全景 北より



1号墳トレンチ完掘状況南西より



1号墳完掘状況 北東より



1号墳西壁裏込め状況 西より



1号墳奥壁周辺裏込め状況 北西より



1号墳奥壁裏込め状況 北西より



1号墳裏込め下段 北より



1号墳トレンチ完掘状況 北より



1号墳裏込め 西より



1号墳奥壁裏込め 西より



1号墳石室完掘状況状況 南東より



1号墳裏込め西側 西より



1号填裏込め下段 北より



1号填裏込め下段 北より



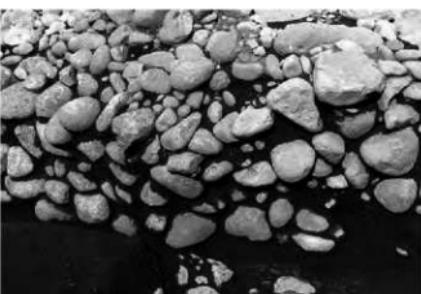
1号填裏込め石下段 東より



1号填裏込め石 南より



1号填裏込め 西より



1号填裏込め 西より



1号填裏込め 西より



1号填トレンチ完掘状況 北より



1号墳渓道閉塞完振状況 南東より



1号墳渓道閉塞状況 南より



1号墳渓道閉塞下面 西より



1号墳墓道、渓門(閉塞)検出状況 南東より



1号填石室内調査開始状態 北西より



1号填玄室内埋土土層断面写真 南西より



1号填石室、羨道閉塞、玄室床面 南東より



1号填石室羨道閉塞、玄室床面状況 南東より



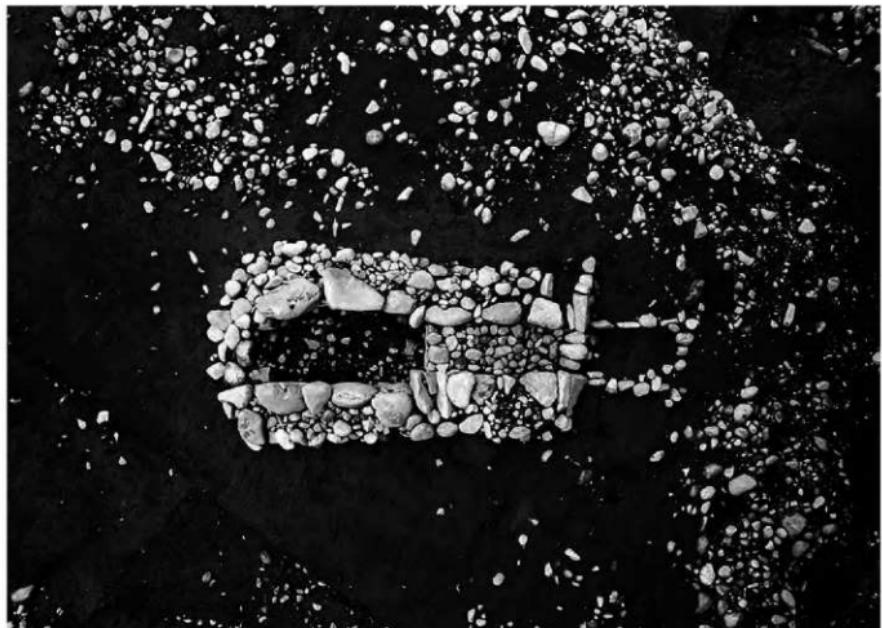
1号填羨道部、閉塞状況断面 南西より



1号填石室羨道閉塞、玄室床面 南東より



1号填玄室内埋土状況写真 南西より



2号填完掘状況 空撮



2号填調査前状況 北より



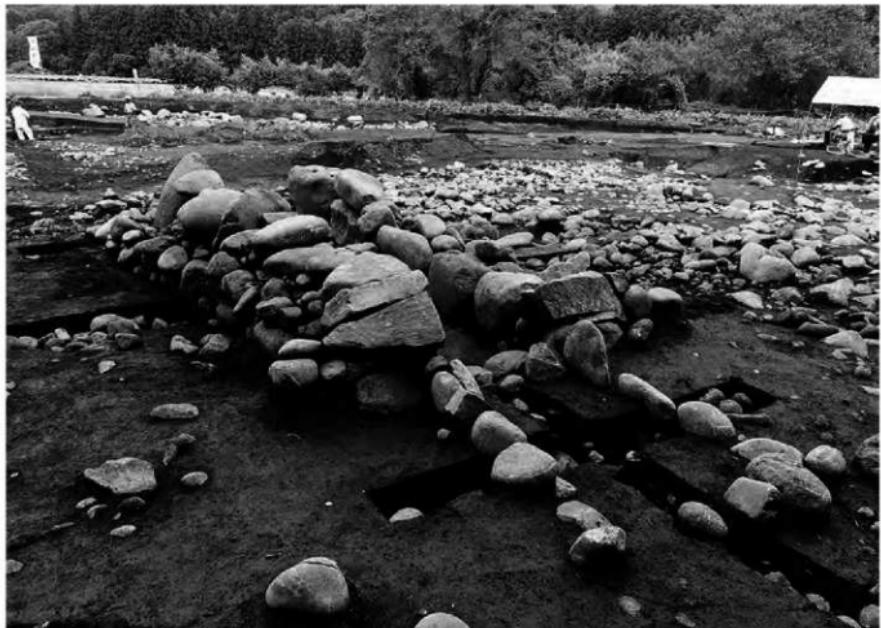
2号填調査前状況 西より



2号填壁石取り外し状況 西より



2号填断ち割りEセクション 南西より



2号墳石室断ち割り状況 南より



2号墳墓道断ち割り 南東より



2号墳墓道断ち割り Eセクション 南東より



2号墳墓道断ち割り A・Eセクション 南西より



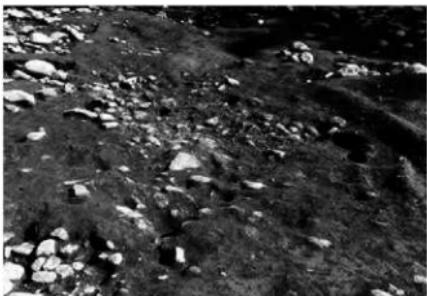
2号墳墓道断ち割り 南東より



2号埴敷石除去後掘方状況 南東より



2号埴敷石除去後掘方状況 南東より



2号埴掘方全景 北西より



2号埴敷石除去後掘方状況 南東より



2号填壁石除去後敷石敷設状況 南東より



2号填壁石除去後敷石敷設状況 南東より



2号填壁石除去後敷石敷設状況 南西より



2号填玄室敷石敷設状況 北西より



2号墳渓道床石外し、玄室床面状況 南東より



2号墳石室全景(墳丘周りの石露出) 北より



2号墳全景 北西より



2号墳石室全景(墳丘周り石露出)北西より



2号墳玄室床面、羨道石外し 北西より



2号墳埴道床石外し、玄室石下面 南東より



2号墳完掘状況 南東より



2号墳埴道床面状況 北西より



2号墳全景 南西より



2号墳全景 北東より



2号墳道床面状況 北西より



2号墳石室完掘状況 南西より



2号墳石室完掘状況 北東より



2号墳玄室、墓道床面状況 南東より



2号填羨道床面状況 南東より



2号填羨道床面状況 南東より



2号填奥壁裏Aトレンチ掘削状況 北西より



2号填玄室、羨道床面状況 南東より



2号填玄室床面、羨道閉塞状況 北西より



2号填玄室床面、羨道閉塞状況 南東より



2号填羨道閉塞状況 東より



2号填羨道閉塞状況 南東より



2号填玄室床面状況 北西より



2号填玄室床面状況 南東より



2号墳石室完掘 北西より



2号墳漢道玄室内崩落土石堆積状況 南東より



2号墳漢道玄室内崩落土石堆積状況 南東より



2号墳玄室崩落石堆積状況 南東より



2号墳玄室崩落石堆積状況 北東より



3号墳完掘全景 空撮



3号墳掘方完掘 南東より



3号填掘方完掘 北東より



3号填奥壁裏側Dセクション 西より



3号填掘方調査状況 南より



3号填掘方調査状況 北東より



3号填掘方調査状況 南東より



3号填掘方調査状況 北東より



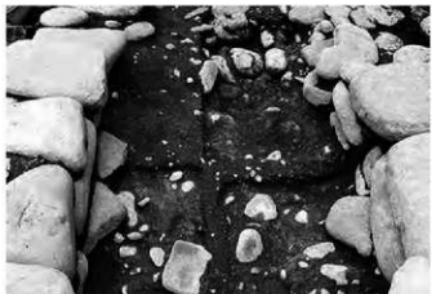
3号填掘方調査状況 南東より



3号填掘方調査状況 北西より



3号填掘方調査状況 北西より



3号填玄室敷石下調査状況 北西より



3号填玄室敷石除去状況 南西より



3号填敷石除去後 南東より



3号填敷石(鋪石)面状況 北より



3号填玄室敷石(鋪石)面状況 北西より



3号填玄室床面状況 北西より



3号墳玄室内直刀・鐵他出土状況 東より



3号墳玄室床面状況 北東より



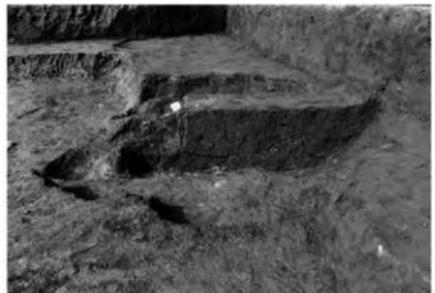
3号墳調査風景 東より



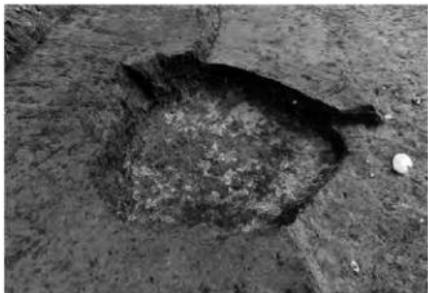
3号墳玄室内Dセクション 南東より



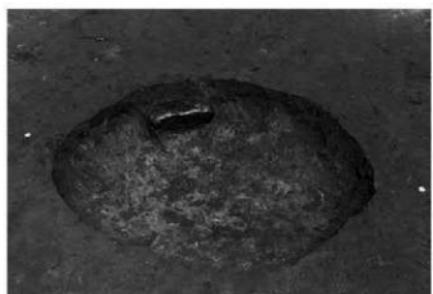
3号墳調査風景 南より



5区10号土坑セクション 南西より



5区10号土坑全景 北より



5区12号土坑全景 南より



5区13号土坑全景 南より



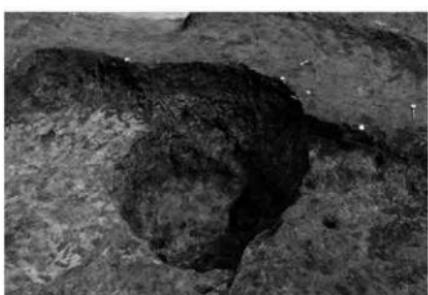
5区14・24号土坑全景 東より



5区14号土坑全景 西より



5区15号土坑セクション 南西より



5区15号土坑全景 南より



6区1号集石全景 西より



6区1号集石遺物出土状況 西より



6区2号集石全景 南東より



6区2・5号集石全景 南より



6区3号集石全景 東より



6区3号集石遺物出土状況 南東より



6区4号集石全景 北より



6区4号集石全景 西より



6区5号集石全景 東より



6区2・5号集石全景 東より



6区6号集石全景 東より



6区6号集石全景 南より



6区7号集石遺物出土状況 東より



6区7号集石Bセクション 東より



6区7号集石掘り込み 東より



6区7号集石全景 南より



6区7号集石掘り込み全景 西より



5区9号集石確認状況 南より



5区9号集石全景 南より



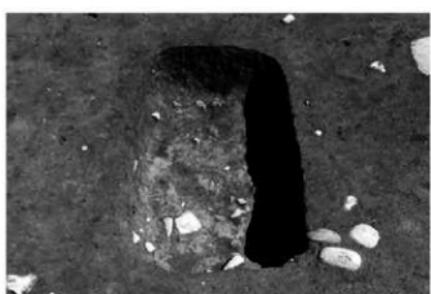
5区1号土器集中全景 北より



5区1号土器集中遺物出土状況 南より



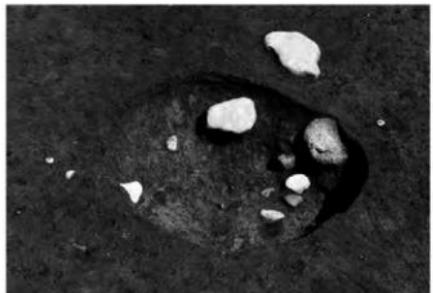
6区5号土坑セクション 南より



6区5号土坑全景 南より



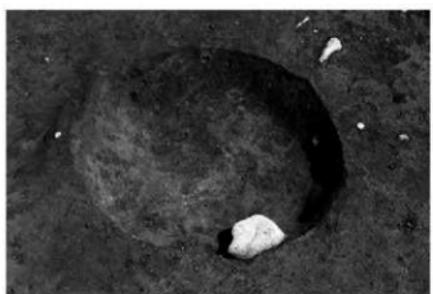
6区6号土坑セクション 南より



6区6号土坑全景 南より



6区7号土坑セクション 南より



6区7号土坑全景 南より



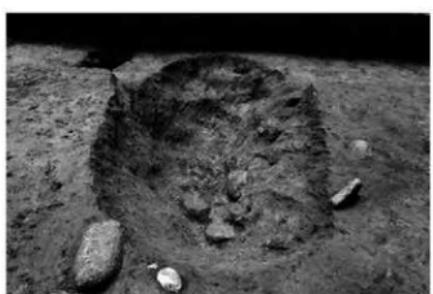
6区8号土坑セクション 西より



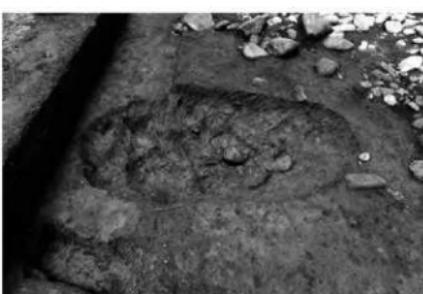
6区8号土坑全景 西より



6区9号土坑セクション 南より



6区9号土坑全景 北より



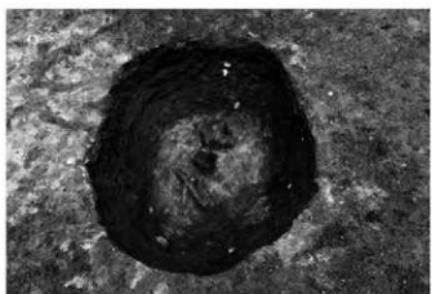
6区9号土坑全景 東より



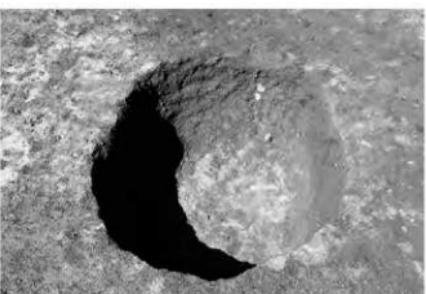
6区1号土坑墓全景 東より



6区1号土坑墓人骨出土状況 南西より



6区1号土坑墓人骨出土状況 南より



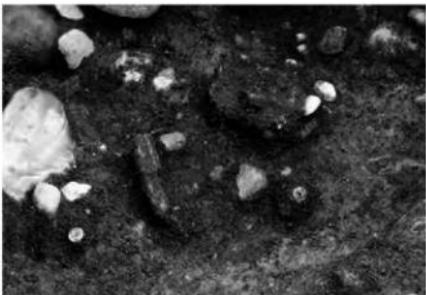
6区1号土坑墓完成状況 南より



6区2号土坑墓人骨出土状況 北東より



6区2号土坑墓人骨出土状況 南西より



6区2号土坑墓人骨出土状況 南西より



6区1号土坑全景 東より



6区4号土坑全景 南西より



6区1号烟全景 南東より



6区1号烟Aセクション 南より



6区1号烟全景 南より



6区1号烟全景 南東より



6区2号烟遠景 北より



6区2号烟全景 北より



6区3号烟遠景 南東より



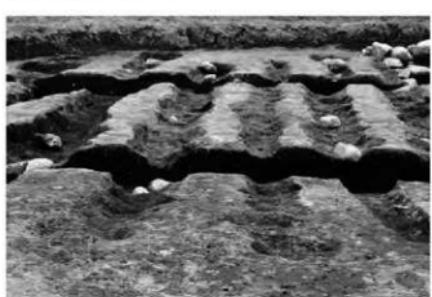
6区3号烟中景 南東より



6区3号烟近景 南東より



6区3号烟Aセクション 南西より



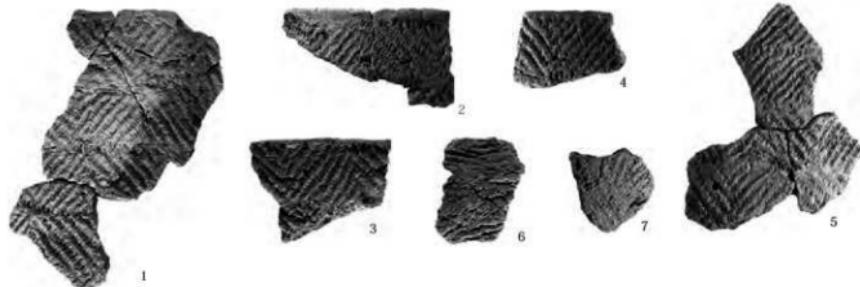
6区3号烟Bセクション 北東より



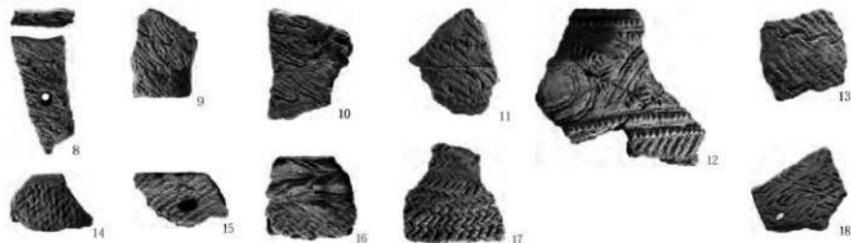
6区3号烟Cセクション 南西より

PL.86

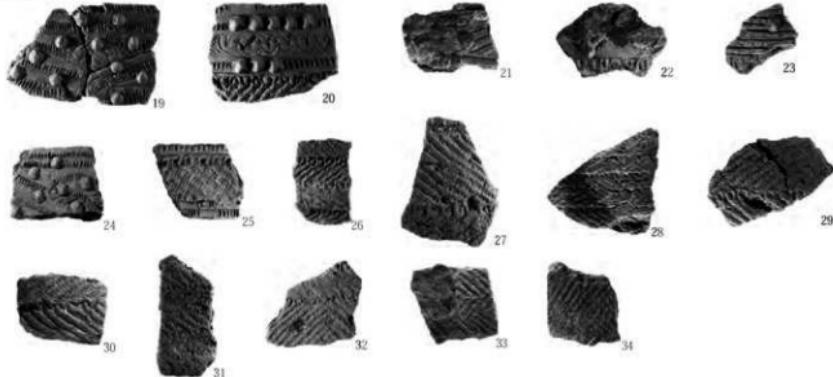
花植下層式



二ツ木式



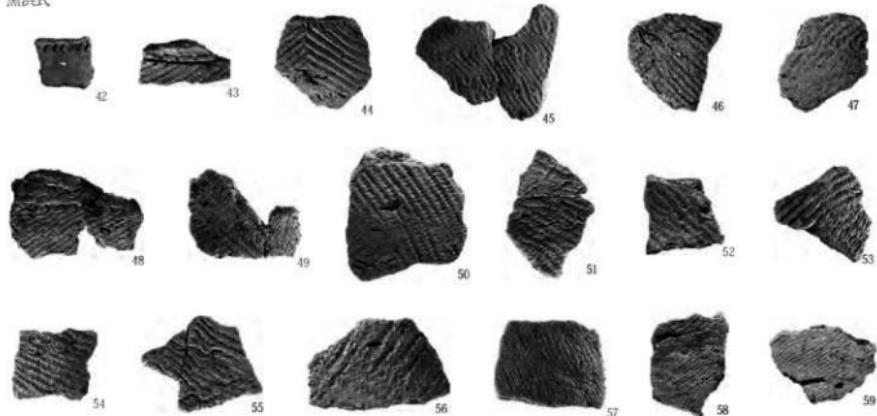
関山 I 式



有尾式

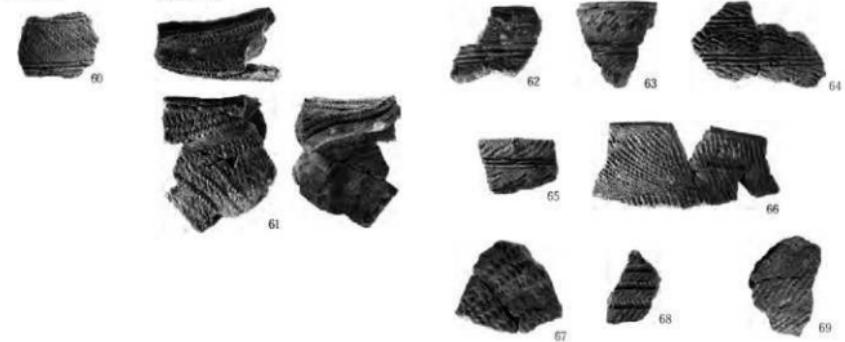


黑浜式

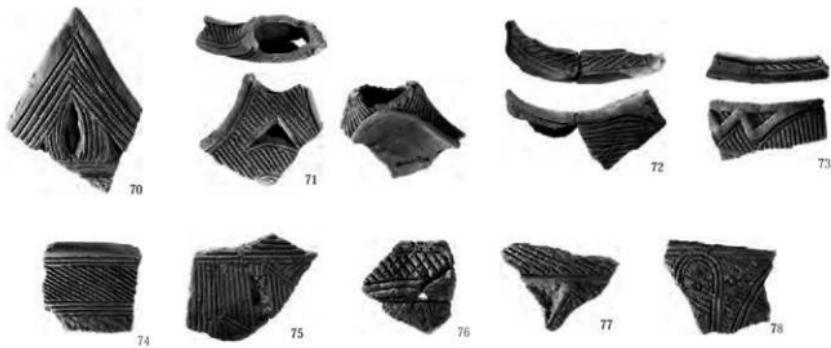


諸磯a式

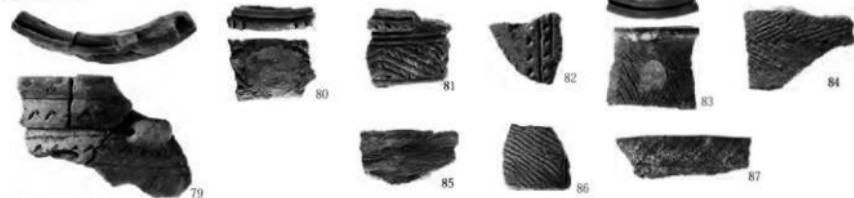
諸磯b式



前期末葉



五領ヶ台2式



勝坂1式



勝坂2式



阿玉台II式



加曾利E 2式



加曾利E 4式



中期中葉



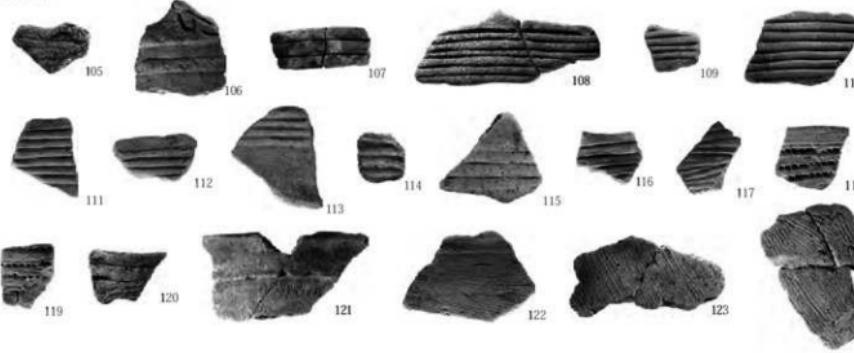
堀之内1式

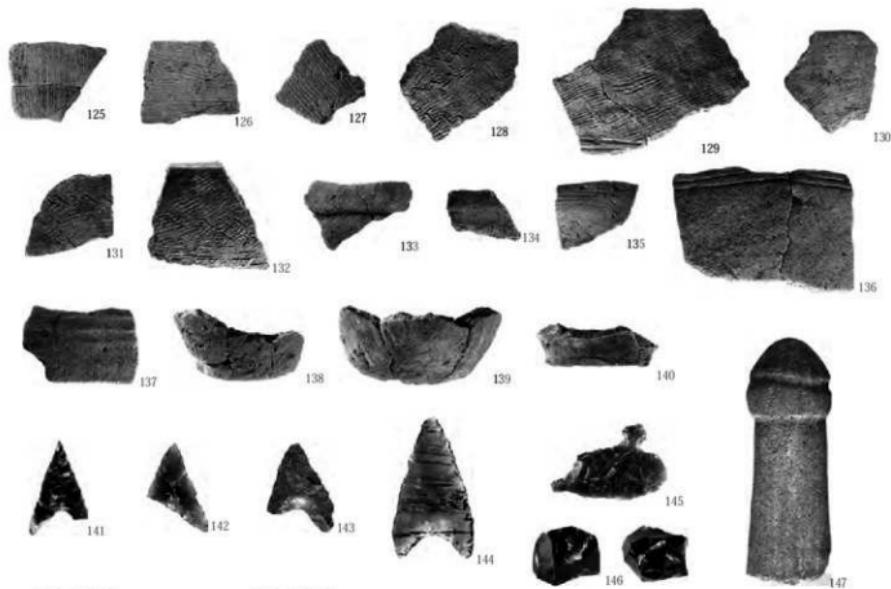


堀之内2式



晚期後半





1号竖穴建物

4号竖穴建物

5号竖穴建物



7号竖穴建物

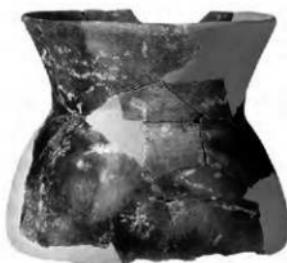


PL.90

10号竖穴建物



11号竖穴建物



12号竖穴建物



2



4



5

13号竖穴建物



2



4



5



3



6



10

16号竖穴建物



1



5



11



13



14

17号竖穴建物





8



9

10



11



12



13



14



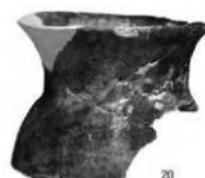
15



16



17



20



21



21号竪穴建物



22号土坑



遺構外(弥生時代)

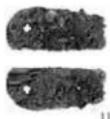


3号竪穴建物





10

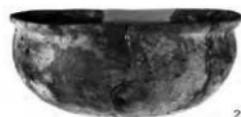


11

6号壁穴建物



1



2



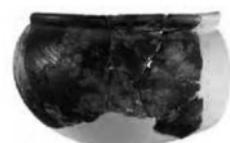
3



6



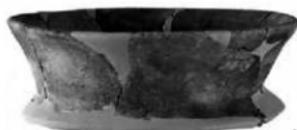
9



11



18



19



20



24



27



28

PL.98

8号竖穴建物



15号竖穴建物





10



11



12



13



14



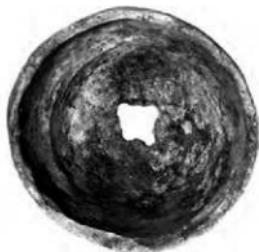
15



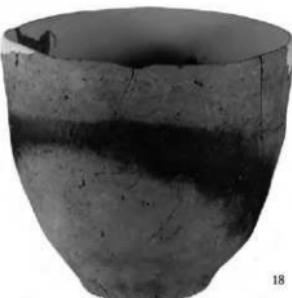
16



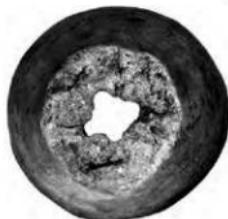
19



17



18



1号竖穴状遗構



4



5



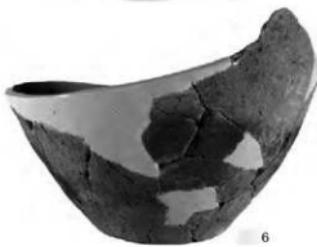
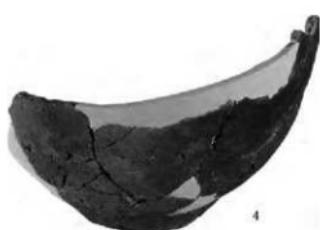
2号竖穴状遗構



1

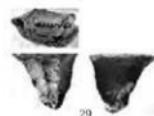
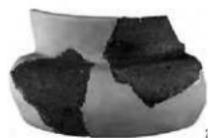


2



1号填





31



35



37



46



47



48



49



50



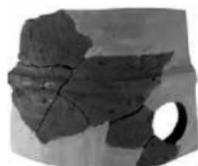
51



52



53



54



55



56



57



58



59



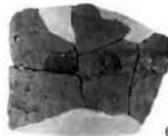
61



63



60



62



64



65



66



67



68



69



70



71



73



74



75



76



77



78



79



80



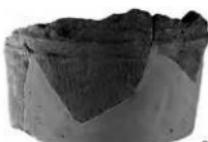
81



82



83



84



85



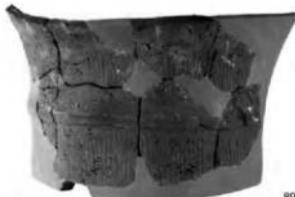
86



87



88



89



90



91



92



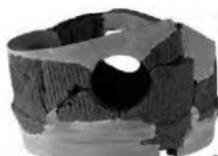
93



94



96



97



98



99



100



101



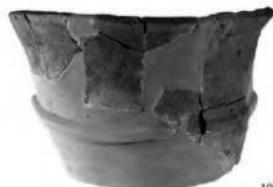
102



103



104



105



106



107



108



109



110



111



112-1



112-2



113



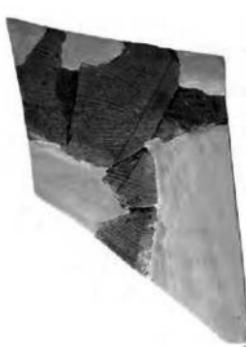
114



115



116



117



118



125



126



127



128



129



130



136



144



145



148

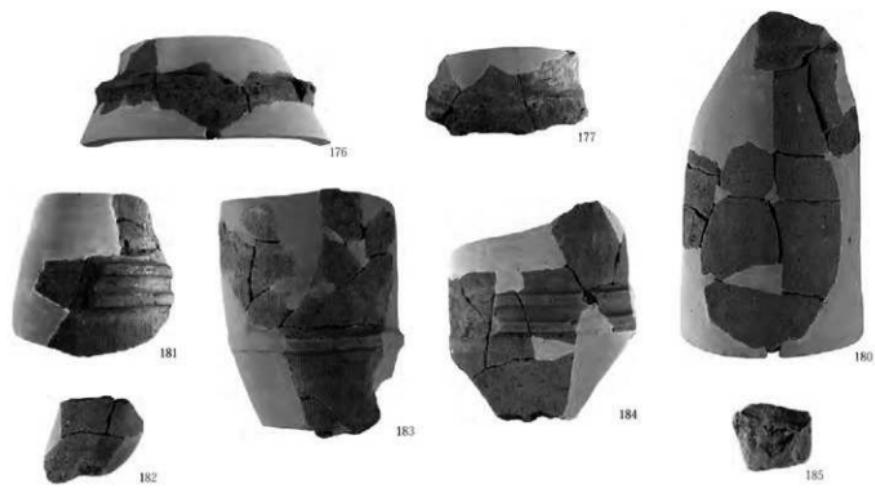
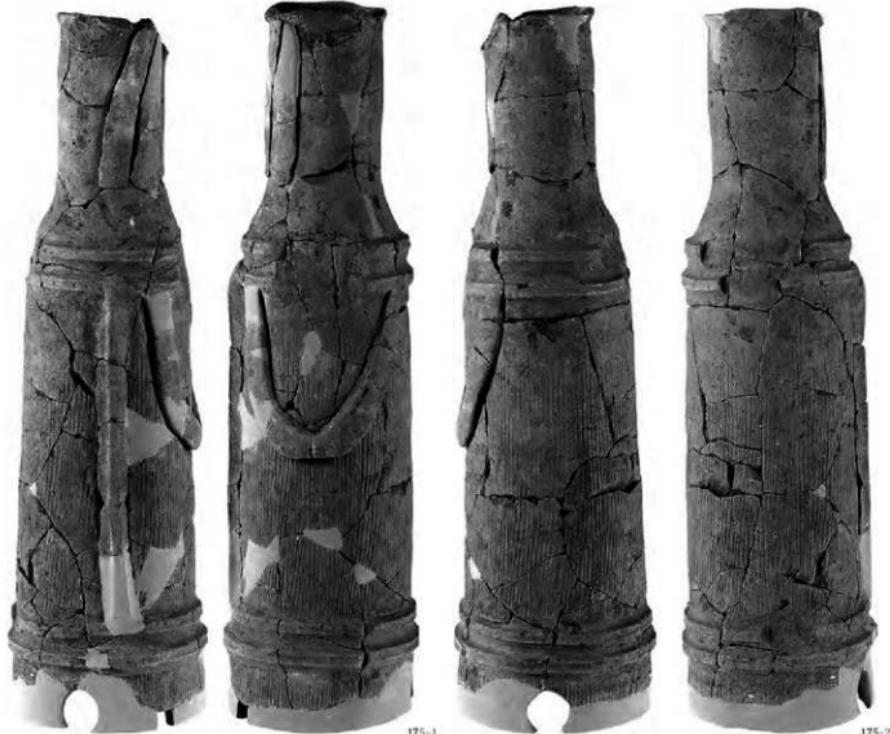


153



154







187



188



191



189



192



190



193



194

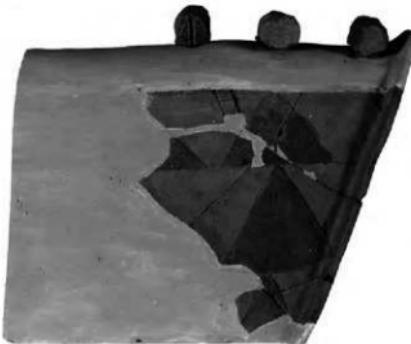
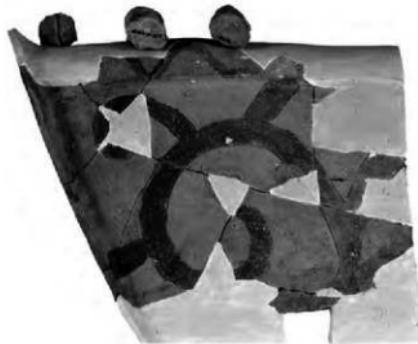


195

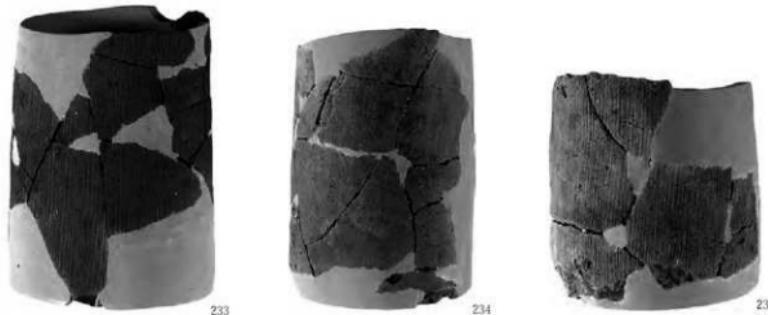
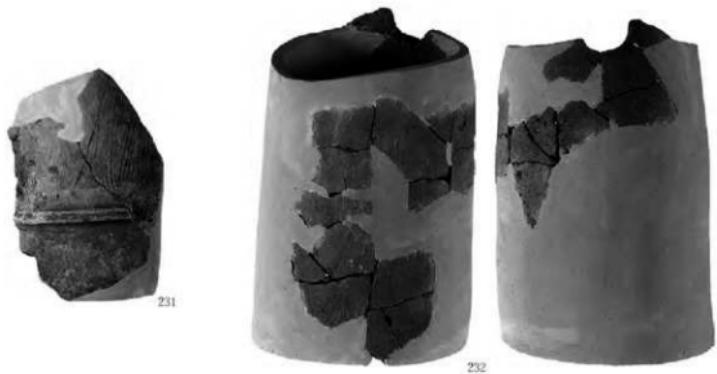
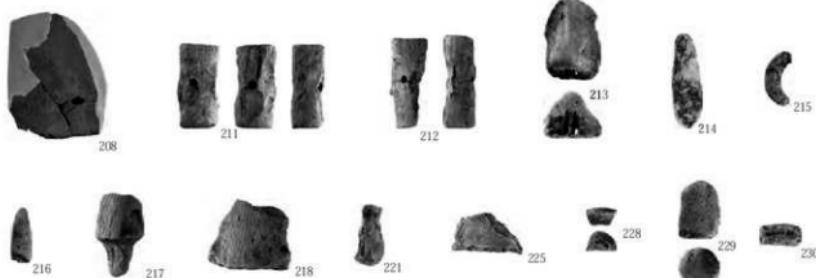
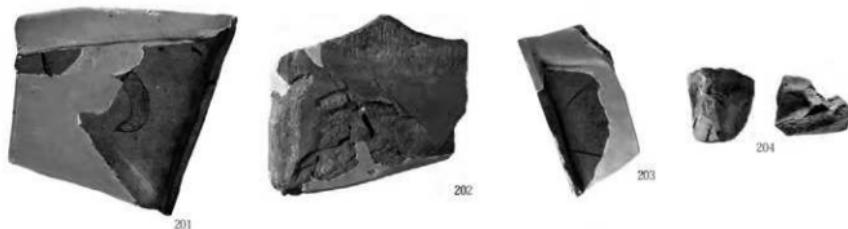




196



197-200





236



237



238

2号填



1



2



3



4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29

3号填



1 • 42 • 69



2



3



4



5

6 • 39

7

8



9



13

10



14

11



15



16



17



18



19



20



21

25 • 60



26 • 27



28



29



30



31



32 • 33



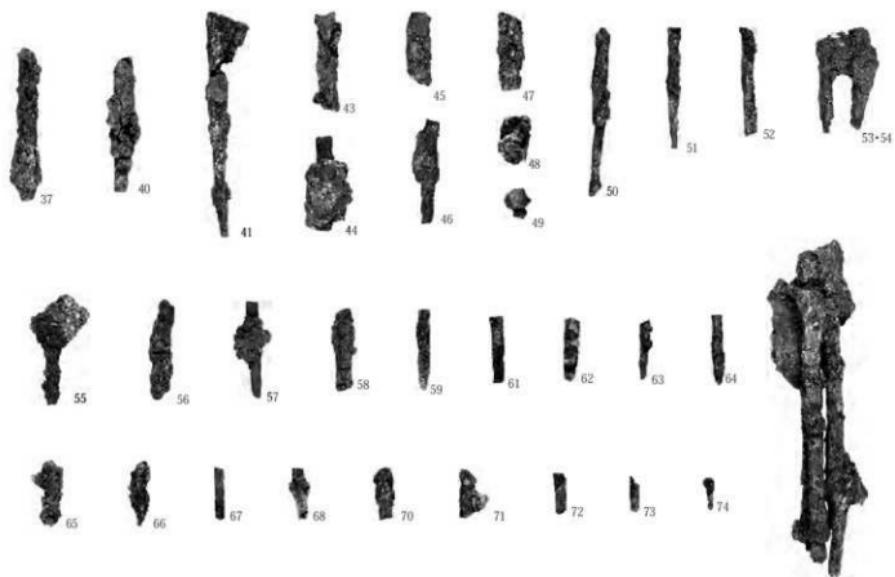
34



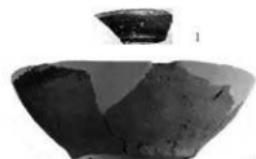
35



36



道構外 (古墳時代)



1号集石



4号集石



1



7



3



6



1号土器集中



1



6

1号土坑墓

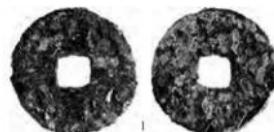
遺構外(古代)



11



13



1



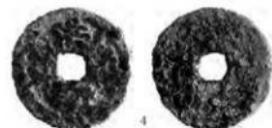
2



3



4



5



6



4~6

2号土坑墓



6



1~3



4~6

3号函



4



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



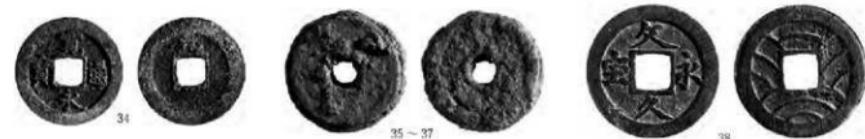
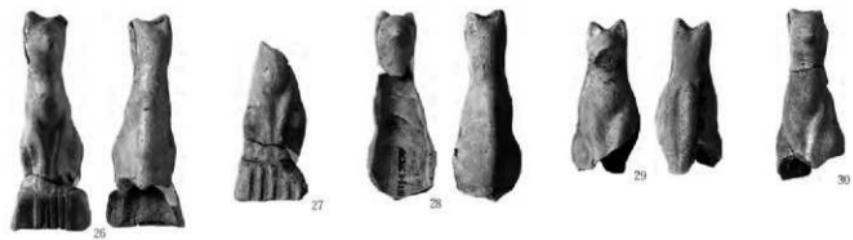
18



19



20



遺構外(時代不明)



報 告 書 抄 錄

書名ふりがな	しじのこふんぐん
書名	四戸の古墳群
副書名	上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	669集
編著者名	杉山秀宏/大木紳一郎/志賀智史/三辻利一/犬木努/奈良貴史/右鳥和夫
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20201016
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	しじのこふんぐん
遺跡名	四戸の古墳群
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんひがしあがつままちみしま
遺跡所在地	群馬県吾妻郡東吾妻町三島
市町村コード	10429
遺跡番号	20
北緯(世界測地系)	36°32'47.98"
東経(世界測地系)	138°47'31.82"
調査期間	20180401-20180930
調査面積	5,731m ²
調査原因	道路建設工事
種別	集落跡・古墳
主な時代	弥生/古墳/古代/中世
遺跡概要	弥生-竪穴建物13+土坑8/古墳-竪穴建物3+竪穴状遺構3+掘立柱建物3+古墳3+ピット12+土坑7/古代-集石遺構8+土器集中1+土坑5/中世-土坑墓2+土坑2+窓4
特記事項	吾妻川中流域の拠点集落である四戸遺跡の墓域の四戸の古墳群3基を調査。
要約	四戸の古墳群の立地は、吾妻川と温川の合流地で、信濃や越後に向かう通り道となる地点である。拠点集落の四戸遺跡がすぐ西に位置している。縄文時代は遺構は発見されなかつたが、前期・晚期の土器が多数出土した。弥生時代後期の竪穴建物が13棟発見され、特に17号竪穴建物からは多種多様な土器群が出土し、当時使用した土器の組成を知る上で重要である。四戸の古墳群は、四戸遺跡の集落の墓域と考えられ、今回は6世紀後半から7世紀中頃の3基の横穴式石室が調査された。特に1号墳から出土した多数の器財埴輪を含む埴輪群は、分析により藤岡産の埴輪であることが分かった。過去の群馬大学による四戸の古墳群や、当事業団が調査した四戸遺跡の調査成果と考え合わせると、ムラの動向と四戸の古墳群の動向は密接に関連していることが分かった貴重な例である。古代になると東の6区で、墓として集石遺構が築かれた可能性があり、古墳時代より継続して墓域として利用されていたと想定している。

公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第669集

四戸の古墳群

上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和2(2020)年9月30日 発行
令和2(2020)年10月16日 発行

編集・発行／公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
電話(0279)52-2511(代表)
ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>
印刷／上海印刷工業株式会社

